

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第102集

西野々遺跡Ⅰ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ

(東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ)



2008.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

西野々遺跡Ⅰ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ
(東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ)

2008.3

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、高知県教育委員会が平成16年度から国土交通省四国整備局の業務委託を受けた一般国道55号線自動車専用道路（東部自動車道）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。この事業には高知南国道路と南国安芸道路の二つの自動車専用道路が含まれ、今回報告した西野々遺跡は南国市大埴乙字西野々・竹中に所在し高知南国道路に属します。

この高知南国道路は高知平野を横断する計画となっており、高知平野の遺跡の生い立ちを解明する嘗てない機会でもあります。また、事業規模が大きく、埋蔵文化財センターにとっては大きなウエイトを占めており、今後の埋蔵文化財センターの一翼を担っていると言っても過言ではありません。

西野々遺跡は弥生時代から近世に至る複合遺跡であります。中でも弥生時代中期末から後期前半の集落跡、奈良時代後半から平安時代初めにかけての官衙関連遺跡そして中世の屋敷跡に代表されます。今回報告した調査区は平成16年度に調査したⅠ区とⅡ区で、西野々遺跡の序章とも言い得るものです。

この報告書を皮切りに今後関連報告書の刊行が予定されており、高知県の歴史叙述に新たなページを加えるものと期待しております。本書が地域の歴史解明や考古学研究の資料、さらには埋蔵文化財の保護に繋がれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国整備局土佐国道事務所及び高知監督官事務所、南国市そして地元の関係者の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表すると共に、調査、報告書作成では関係各位に多大な御指導並びに御教示頂いたことに心より厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 汲田 幸一

例 言

1. 本書は、(財)高知県文化財団が高知県教育委員会の委託を受けて平成16年度に実施した西野々遺跡(『西野々遺跡Ⅰ』)の発掘調査報告書である。また、(財)高知県文化財団が国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所の委託を受けて平成15年度に実施した西野々地区と衣笠地区の試掘調査結果についても掲載している。
2. 発掘調査は高知東部自動車道高知南国道路建設に伴うもので、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
3. 西野々遺跡は高知県南国市大楠字西野々・竹中に所在する弥生時代と中世にかけての集落遺跡、古代の官衙関連遺跡で、今回報告する第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区の発掘調査延べ面積は13,896㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成15年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 島内 靖

総 務：同次長兼総務課長 久川清利，同主任 池野かおり，同主幹 金子晃子

調 査 総 括：同調査課長 横山耿一

調 査 担 当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 中山真司，同調査員 下村裕

平成16年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総 務：同次長兼総務課長 久川清利，同主任 池野かおり，同主幹 長谷川明生

調 査 総 括：同調査課長 横山耿一

調 査 担 当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 田淵瑞世・堅田 至，同主任調査員 曾我貴行，同調査員 小野由香・筒井三菜・下村裕・徳平涼子，技術補助員 坂本憲彦・大原直美，測量補助員 西村讓二・大賀幸子・宮澤 学・和田エリ

事務補助員：渡辺暁子・奥宮千恵子

平成17年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総 務：同次長兼総務課長 湯浅文彦，同主任 池野かおり，同主幹 長谷川明生

調 査 総 括：同調査課長 森田尚宏

調 査 担 当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 田淵瑞世・井上昌紀・曾我貴行，同主任調査員 小野由香，同調査員 下村裕・徳平涼子，技術補助員 坂本憲彦・大原直美・大賀幸子・大野大，測量補助員 西村讓二・宮澤 学

事務補助員：奥宮千恵子

平成18年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川島博海

総 務：同次長 森田尚宏，同総務課長 戸梶友昭，同主任 池野かおり

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査第四班長 藤方正治, 同専門調査員 鍵山真一・井上昌紀・矢田幸嗣, 同主任調査員 小野由香・前田憲志・下村裕, 技術補助員 坂本憲彦・大原直美・大賀幸子・大野 大, 測量補助員 西村讓二・宮澤 学・松尾直哉

事務補助員：奥宮千恵子

平成19年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 汲田幸一

総 務：同次長 森田尚宏, 同総務課長 戸梶友昭, 同主任 谷真理子

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査第四班長 藤方正治, 同専門調査員 安岡 猛・井上昌紀・武森清幸・小川博敏, 同主任調査員 小野由香, 技術補助員 坂本憲彦・大原直美・大賀幸子, 測量補助員 西村讓二

事務補助員：奥宮千恵子

5. 本書の執筆、遺物撮影は廣田と小野がそれぞれ行い、第Ⅰ調査区の調査日誌抄については曾我と大原が記載したものを使用し、現場写真は、第Ⅰ調査区を担当した曾我、第Ⅱ調査区を担当した小野がそれぞれ撮影した。編集は第三章を小野、それ以外と最終調整を廣田が担当した。なお、遺物観察表については整理作業員の方などに指示した設定で変換作成して頂いた。

6. 遺構については、ST(竪穴住居跡)、SB(掘立柱建物跡)、SA(塀・柵列跡)、SK(土坑)、SD(溝跡)、P(ピット)、SX(性格不明遺構)、SP(水溜り状遺構)とし、遺構番号については調査区、遺構ごとに通し番号とした。建物跡と塀・柵列跡については模式図(S=1/200)を掲載している。また、掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記載してあり、方位(N)は世界標準座標方眼北である。

7. 遺物については、原則として弥生土器をS=1/4、それ以外をS=1/3で掲載し、各挿図にはスケールを掲載している。遺物番号は調査区ごとに通し番号とし、挿図と図版の番号は一致している。

8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたっては、下記の方々のご指導並びに貴重なご教示、ご助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。

故那須孝悌氏(元大阪市立自然史博物館館長)、趙哲濟氏(大阪市文化財協会)

9. 調査にあたっては、国土交通省土佐国道事務所、南国監督官詰所、南国市、社団法人高知県建設技術公社のご協力を頂いた。また、地元住民の方々には遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。

10. 整理作業(洗浄からデジタルトレース等)は下記の方々に行って頂いた。また、同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

中西純子、内村富紀、元木恵利子、小林貴美、松田美香、田島 歩、岡宗真紀、川添明美、山形和江、中山とも子、村永理恵、西内広美、岩貞泰代、横山めぐみ、黒岩佳子、小松経子、山本裕美子、高橋由香、福原僚子、宮島美幸

11. 出土遺物は「04-2NN」と註記し、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

第I章 序章

1. はじめに(廣田)	1
2. 調査の契機と経過(廣田)	1
(1) 契機と経過	1
(2) 確認調査	3
(3) 調査の方法	6
3. 遺跡の地理的・歴史的環境(小野)	8
(1) 地理的環境	8
(2) 歴史的環境	8

第II章 調査の概要

1. 調査の経過	13
(1) 調査の経過(廣田)	13
(2) 調査日誌抄(曾我・小野・大原)	13
2. 調査の概要	21
(1) I区(廣田)	21
(2) II区(小野)	33
3. 遺構と遺物	49
(1) I区(廣田)	49
(2) II区(小野)	117

第III章 自然科学分析(パリノ・サーヴェイ)

1. はじめに	185
2. 試料	185
3. 分析方法	185
4. 結果	188
5. 考察	198

第IV章 考 察

1. はじめに(廣田)	207
2. 弥生時代(廣田)	207
3. 古墳時代(小野)	208
4. 古代(廣田)	208
5. 中世(小野)	210
6. 近世～近代(小野)	210
7. 流路状窪地について(小野)	211

8. おわりに(廣田)211

挿図目次

図1-1	西野々遺跡位置図.....	1
図1-2	西野々遺跡ホノギ図(S=1/5,000).....	2
図1-3	平成15年度高知南国道路試掘調査対象範囲(S=1/25,000).....	3
図1-4	衣笠地区試掘トレンチ位置図(S=1/5,000).....	4
図1-5	西野々地区試掘トレンチ位置図(S=1/5,000).....	5
図1-6	高知南国道路(伊達野・西野々・関地区)グリッド設定図(S=1/25,000).....	6
図1-7	西野々遺跡グリッド設定図(S=1/5,000).....	7
図1-8	西野々遺跡周辺の主な遺跡(S=1/50,000).....	9
図2-1	作業風景1.....	14
図2-2	現地説明会.....	16
図2-3	故那須孝悌氏による現場指導.....	17
図2-4	作業風景2.....	18
図2-5	作業風景3.....	19
図2-6	作業風景4.....	20
図2-7	I区東部東壁セクション図.....	22
図2-8	I区中央部東壁セクション図.....	23
図2-9	I区西部西壁セクション図.....	24
図2-10	I区第I層出土遺物実測図1.....	24
図2-11	I区第I層出土遺物実測図2.....	27
図2-12	I区第I層出土遺物実測図3.....	29
図2-13	I区第I層出土遺物実測図4.....	30
図2-14	I区第III層出土遺物実測図.....	32
図2-15	II区東中央部セクション図.....	34
図2-16	II区西中央部セクション図.....	36
図2-17	II区第II層出土遺物実測図.....	37
図2-18	II区第III層出土遺物実測図.....	39
図2-19	II区第III~IV層出土遺物実測図.....	41
図2-20	II区第IV層出土遺物実測図1.....	42
図2-21	II区第IV層出土遺物実測図2.....	43
図2-22	II区第V・VI層出土遺物実測図.....	45
図2-23	II区第X層出土遺物実測図.....	46

図2-24	Ⅱ区その他の包含層出土遺物実測図	47
図2-25	ST-101	50
図2-26	ST-101 出土遺物実測図	51
図2-27	ST-102	52
図2-28	ST-102 出土遺物実測図	53
図2-29	ST-103	53
図2-30	SB-101	54
図2-31	SB-101 出土遺物実測図	55
図2-32	SB-102	55
図2-33	SA-101	55
図2-34	SA-102	55
図2-35	SA-103	56
図2-36	SK-101	56
図2-37	SK-101 出土遺物実測図	56
図2-38	SK-102	57
図2-39	SK-102 出土遺物実測図	57
図2-40	SK-104	58
図2-41	SK-103・104 出土遺物実測図	58
図2-42	SK-110	59
図2-43	SD-101	60
図2-44	SD-102	61
図2-45	SD-103	61
図2-46	SD-104	61
図2-47	P-101・102・104・105 出土遺物実測図	62
図2-48	SP-101	63
図2-49	SP-101 出土遺物実測図	64
図2-50	SB-103	65
図2-51	SB-103 出土遺物実測図	66
図2-52	SB-104	66
図2-53	SB-104 出土遺物実測図	67
図2-54	SB-105	67
図2-55	SB-105 出土遺物実測図	68
図2-56	SB-106	68
図2-57	SB-106 出土遺物実測図	69
図2-58	SB-107	69
図2-59	SB-107 出土遺物実測図	70

插图目次

图2-60	SB-108	70
图2-61	SB-108出土遺物実測図	71
图2-62	SB-109	71
图2-63	SB-109出土遺物実測図	72
图2-64	SB-110	72
图2-65	SB-111	73
图2-66	SB-111出土遺物実測図	74
图2-67	SB-112	75
图2-68	SB-113	75
图2-69	SB-114	75
图2-70	SB-114出土遺物実測図	75
图2-71	SB-115	76
图2-72	SA-104	77
图2-73	SA-104出土遺物実測図	77
图2-74	SK-116	77
图2-75	SK-120	78
图2-76	SK-115・123出土遺物実測図	78
图2-77	SD-106	79
图2-78	SD-107	79
图2-79	SD-108	80
图2-80	SD-109	80
图2-81	SD-111	80
图2-82	SD-112	80
图2-83	SD-113~115	81
图2-84	SD-116	81
图2-85	SD-117	82
图2-86	SD-123	83
图2-87	SD-112・113・119・120・123出土遺物実測図	83
图2-88	P-106~111出土遺物実測図	85
图2-89	P-112~129出土遺物実測図	90
图2-90	SB-116	91
图2-91	SB-117	92
图2-92	SB-118	92
图2-93	SB-119	92
图2-94	SB-120	93
图2-95	SB-118~120出土遺物実測図	93

図2 - 96	SB - 121	94
図2 - 97	SB - 122	94
図2 - 98	SB - 123	94
図2 - 99	SB - 124	95
図2 - 100	SB - 121・124出土遺物実測図	95
図2 - 101	SB - 125	95
図2 - 102	SA - 105	96
図2 - 103	SA - 106	96
図2 - 104	SA - 107	96
図2 - 105	SA - 108	96
図2 - 106	SA - 109	96
図2 - 107	SA - 110	97
図2 - 108	SA - 111	97
図2 - 109	SA - 112	97
図2 - 110	SA - 106・109・112出土遺物実測図	97
図2 - 111	SK - 125	98
図2 - 112	SK - 126	98
図2 - 113	SK - 127	99
図2 - 114	SK - 130	99
図2 - 115	SK - 131	99
図2 - 116	SK - 132	99
図2 - 117	SK - 133	100
図2 - 118	SK - 132・133出土遺物実測図	100
図2 - 119	SK - 136	100
図2 - 120	SK - 137	100
図2 - 121	SK - 138	101
図2 - 122	SD - 126	102
図2 - 123	SD - 127	102
図2 - 124	SD - 128	103
図2 - 125	SD - 126・127・129出土遺物実測図	103
図2 - 126	SD - 131	104
図2 - 127	SD - 132	104
図2 - 128	SD - 133	104
図2 - 129	SD - 134	105
図2 - 130	SD - 135	105
図2 - 131	SD - 133～135出土遺物実測図	105

插图目次

图2-132	SD-136	106
图2-133	SD-137	106
图2-134	SD-140·143	107
图2-135	SD-141·143	108
图2-136	SD-137·140·141·143出土遺物実測図	108
图2-137	SD-145·146	109
图2-138	SD-148	110
图2-139	SD-149	110
图2-140	SD-150	110
图2-141	SD-152	110
图2-142	SD-153	111
图2-143	SD-149·152·153出土遺物実測図	111
图2-144	P-131~147出土遺物実測図	115
图2-145	SK-145出土遺物実測図	116
图2-146	SK-205	118
图2-147	SK-205出土遺物実測図	118
图2-148	SK-208	119
图2-149	SK-216	120
图2-150	SD-201	123
图2-151	SD-202	123
图2-152	SD-203	124
图2-153	SD-201~203, P-201出土遺物実測図	124
图2-154	SK-229	125
图2-155	SD-204	125
图2-156	SD-207	126
图2-157	SK-229, SD-204~207出土遺物実測図	127
图2-158	SB-201	127
图2-159	SB-202	128
图2-160	SB-203	128
图2-161	SB-204	128
图2-162	SB-205	129
图2-163	SB-206	129
图2-164	SB-207	129
图2-165	SB-208	130
图2-166	SB-209	130
图2-167	SB-210	130

図2-168	SB-211	130
図2-169	SB-202・204・207・211出土遺物実測図	131
図2-170	SK-239	134
図2-171	SK-244	135
図2-172	SK-236・244出土遺物実測図	135
図2-173	SD-208	137
図2-174	SD-209	137
図2-175	SD-210	137
図2-176	SD-211	138
図2-177	SD-212	139
図2-178	SD-214	139
図2-179	SD-215	140
図2-180	SD-210～212・215出土遺物実測図	140
図2-181	SD-216・218・224	141
図2-182	SD-216出土遺物実測図	142
図2-183	SD-218・219出土遺物実測図	144
図2-184	SD-220	145
図2-185	SD-222	145
図2-186	SD-223	146
図2-187	SD-225	147
図2-188	SD-220・222～224出土遺物実測図	147
図2-189	ピット出土遺物実測図(土師器)	147
図2-190	ピット出土遺物実測図(須恵器)	148
図2-191	ピット出土遺物実測図(製塩土器, 黒色土器, 瓦, 鉄製品)	148
図2-192	ピット出土遺物実測図(石製品)	149
図2-193	SB-212	149
図2-194	SB-213	150
図2-195	SB-214	150
図2-196	SB-215	150
図2-197	SB-216	151
図2-198	SB-217	151
図2-199	SB-218	151
図2-200	SB-219	151
図2-201	SB-220	152
図2-202	SB-221	152
図2-203	SB-222	152

挿図目次

図2 - 204	SB - 223	152
図2 - 205	SB - 224	153
図2 - 206	SB - 225	153
図2 - 207	SB - 226	153
図2 - 208	SB - 227	154
図2 - 209	SB - 228	154
図2 - 210	SB - 229	154
図2 - 211	SB - 230	154
図2 - 212	SB - 231	155
図2 - 213	SB - 232	155
図2 - 214	SB - 212・213・216・221・225 出土遺物実測図	155
図2 - 215	SA - 209・218 出土遺物実測図	158
図2 - 216	SK - 252	160
図2 - 217	SK - 253	160
図2 - 218	SK - 262	162
図2 - 219	SK - 263	163
図2 - 220	SK - 264	163
図2 - 221	SK - 266	164
図2 - 222	SK - 269	164
図2 - 223	SK - 270	165
図2 - 224	SK - 271	165
図2 - 225	SK - 272	165
図2 - 226	SK - 252・253・257・262～264・268・270・271 出土遺物実測図	166
図2 - 227	SK - 279	167
図2 - 228	SK - 279 出土遺物実測図	168
図2 - 229	SD - 226	170
図2 - 230	SD - 227	170
図2 - 231	SD - 229	171
図2 - 232	SD - 231	172
図2 - 233	SD - 232	172
図2 - 234	SD - 233	172
図2 - 235	SD - 234・235	173
図2 - 236	SD - 236	173
図2 - 237	SD - 237	173
図2 - 238	SD - 240	174
図2 - 239	SD - 241	174

図2-240	SD-242	174
図2-241	SD-244	175
図2-242	SD-226・227・229・232・234・237・244 出土遺物実測図	175
図2-243	SD-247	177
図2-244	SD-248	177
図2-245	SD-249	177
図2-246	SD-250	177
図2-247	SD-251	178
図2-248	SD-252	178
図2-249	SD-253	178
図2-250	SD-254	178
図2-251	ピット出土遺物実測図(土師器, 須恵器, 土師質土器)	179
図2-252	ピット出土遺物実測図(瓦器, 東播系須恵器)	179
図2-253	ピット出土遺物実測図(土師質土器1)	180
図2-254	ピット出土遺物実測図(土師質土器2)	181
図2-255	ピット出土遺物実測図(土師質土器3)	182
図2-256	ピット出土遺物実測図(土師質土器4)	182
図2-257	ピット出土遺物実測図(瓦質土器, 青磁, 石製品, 鉄製品)	183
図3-1	I・II区堆積物累重状況の柱状模式断面図と分析試料採取地点	186
図3-2	II区4地点微化石分析結果	192
図3-3	遺構の花粉化石群集の層位分布	194
図3-4	溝埋土の植物珪酸体含量	195
図3-5	粒度分析結果三角ダイアグラム	197
図3-6	粒度分析結果	197
図3-7	I・II区間深掘トレンチの堆積物累重状況の柱状模式断面図	200
図3-8	調査地点位置図	202
図3-9	西野々遺跡周辺の地形分類図	203
図3-10	軟X線写真とそのトレース図	204
図4-1	西野々遺跡調査区全体図(S=1/10,000)	207

表目次

表1-1	西野々遺跡周辺の主な遺跡	9
表2-1	弥生時代竪穴住居跡計測表	54
表2-2	弥生時代掘立柱建物跡計測表	55

遺物観察表目次

表2-3 弥生時代堀・柵列跡計測表	56
表2-4 弥生時代土坑計測表	60
表2-5 古代掘立柱建物跡計測表	76
表2-6 古代土坑計測表	79
表2-7 中世掘立柱建物跡計測表	95
表2-8 古代・中世堀・柵列跡計測表	98
表2-9 中世・近世土坑計測表	101
表2-10 弥生時代土坑計測表	122
表2-11 古代掘立柱建物跡計測表	131
表2-12 古墳・古代土坑計測表	136
表2-13 中世掘立柱建物跡計測表	156
表2-14 古代・中世堀・柵列跡計測表	159
表2-15 中世土坑計測表	169
表2-16 近代土坑計測表	184
表3-1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果	188
表3-2 暦年較正結果	189
表3-3 珪藻分析結果(1)	189
表3-4 珪藻分析結果(2)	190
表3-5 花粉分析結果(1)	191
表3-6 花粉分析結果(2)	193
表3-7 花粉分析結果(3)	194
表3-8 植物珪酸体含量	195
表3-9 樹種同定結果	196
表3-10 粒度分析結果	196
表3-11 粒度組成解析結果	198

遺物観察表目次

第I調査区 遺物観察表1	215
第I調査区 遺物観察表2	216
第I調査区 遺物観察表3	217
第I調査区 遺物観察表4	218
第I調査区 遺物観察表5	219
第I調査区 遺物観察表6	220
第I調査区 遺物観察表7	221

第Ⅰ調査区 遺物観察表 8.....	222
第Ⅰ調査区 遺物観察表 9.....	223
第Ⅰ調査区 遺物観察表10.....	224
第Ⅰ調査区 遺物観察表11.....	225
第Ⅰ調査区 遺物観察表12.....	226
第Ⅰ調査区 遺物観察表13.....	227
第Ⅰ調査区 遺物観察表14.....	228
第Ⅰ調査区 遺物観察表15.....	229
第Ⅰ調査区 遺物観察表16.....	230
第Ⅰ調査区 遺物観察表17.....	231
第Ⅱ調査区 遺物観察表 1.....	232
第Ⅱ調査区 遺物観察表 2.....	233
第Ⅱ調査区 遺物観察表 3.....	234
第Ⅱ調査区 遺物観察表 4.....	235
第Ⅱ調査区 遺物観察表 5.....	236
第Ⅱ調査区 遺物観察表 6.....	237
第Ⅱ調査区 遺物観察表 7.....	238
第Ⅱ調査区 遺物観察表 8.....	239
第Ⅱ調査区 遺物観察表 9.....	240
第Ⅱ調査区 遺物観察表10.....	241
第Ⅱ調査区 遺物観察表11.....	242
第Ⅱ調査区 遺物観察表12.....	243
第Ⅱ調査区 遺物観察表13.....	244
第Ⅱ調査区 遺物観察表14.....	245
第Ⅱ調査区 遺物観察表15.....	246
第Ⅱ調査区 遺物観察表16.....	247
第Ⅱ調査区 遺物観察表17.....	248

図版目次

図版 1 西野々遺跡周辺航空写真(「国土画像情報(カラー空中写真)国土交通省」)	図版 4 調査前全景(南上空より) 調査前全景(北上空より)
図版 2 西野々遺跡周辺航空写真(米軍撮影写真)	図版 5 I区-E遺構検出状態(西より) I区-W遺構検出状態(東より)
図版 3 調査前全景(東上空より) 調査前全景(西上空より)	図版 6 I区-E遺構完掘状態(西より)

- I 区 - W 遺構完掘状態 (東より)
 図版 7 I 区 - E 遺構完掘状態 (西上空より)
 I 区 - E 遺構完掘状態 (北上空より)
 図版 8 I 区 - W 遺構完掘状態 (東上空より)
 I 区 - W 遺構完掘状態 (北上空より)
 図版 9 I 区東部東壁セクション (西より)
 I 区西部西壁セクション (東より)
 図版 10 ST - 101 (東より)
 ST - 101 (南より)
 図版 11 ST - 102 (南東より)
 ST - 103 (東より)
 図版 12 SB - 101 (北より)
 SB - 102 (北より)
 図版 13 SK - 102 (南より)
 SK - 104 (東より)
 図版 14 SB - 103 (北西より)
 SB - 104 (北西より)
 図版 15 SB - 107, SD - 116 (西より)
 SB - 107 (西より)
 図版 16 SB - 108 (北より)
 SB - 111 (北より)
 図版 17 SB - 115 (北より)
 SD - 106 (南より)
 図版 18 SD - 112 (南西より)
 SK - 119 (南より)
 図版 19 SB - 119 (北より)
 SB - 121 (北東より)
 図版 20 SD - 134・135 (北より)
 SD - 140 (北より)
 図版 21 第Ⅲ層 須恵器杯蓋 (1107) 出土状態,
 ST - 102 石製品砥石 (1176) 出土状態,
 P - 105 弥生土器甕 (1205) 出土状態, P
 - 105 弥生土器 (1206~1208) 出土状態,
 SP - 101 弥生土器甕 (1217) 出土状態,
 SB - 104 須恵器杯蓋 (1240) 出土状態,
 SB - 107 土師器 (1254), 須恵器 (1259)
 出土状態, SB - 107 須恵器高杯 (1263)
 出土状態
 図版 22 SB - 109 土師器杯蓋 (1269) 出土状態,
 SB - 111 須恵器皿 (1293) 出土状態,
 SB - 114 石製品砥石 (1300) 出土状態,
 P - 111 須恵器杯蓋 (1319) 出土状態,
 SB - 121 青磁碗 (1360) 出土状態, SB
 - 121 石製品浮子 (1361) 出土状態, P
 - 132 土師質土器杯 (1408) 出土状態,
 P - 146 瓦質土器羽釜 (1424) 出土状態
 図版 23 弥生土器 (甕)
 土師器 (甕)
 図版 24 須恵器 (杯蓋)
 須恵器 (杯身)
 図版 25 須恵器 (杯身・杯・高杯)
 須恵器 (壺蓋・壺)
 図版 26 須恵器 (甕)
 土師質土器 (杯)
 図版 27 土師質土器 (杯・碗)
 東播系須恵器 (片口鉢), 瓦質土器 (鍋・
 羽釜)
 図版 28 備前焼 (甕・播鉢)
 唐津焼 (蓋・碗), 肥前系磁器 (紅皿・碗),
 瀬戸・美濃系 (碗), 京焼系陶器 (碗)
 図版 29 近世陶器 (皿・碗), 近世以降磁器 (菊花
 皿・碗)
 須恵器 (杯蓋・杯身)
 図版 30 須恵器 (甕・鉢・器台)
 土師質土器 (杯・小皿・羽釜)
 図版 31 弥生土器 (壺・甕)
 弥生土器 (甕)
 図版 32 石製品 (投弾)
 弥生土器 (壺・甕)
 図版 33 弥生土器 (壺・甕・高杯)
 須恵器 (杯身), 土師質土器 (杯・小皿),
 瓦質土器 (羽釜)

- 図版 34 須恵器(杯蓋・壺蓋), 土師質土器(杯)
弥生土器(甕), 土師器(杯身), 須恵器(杯蓋・杯身), 土師質土器(杯)
- 図版 35 須恵器(杯蓋・椀・甕), 瓦質土器(鍋・羽釜), 青磁(碗)
須恵器(杯蓋), 土師質土器(杯・小皿)
- 図版 36 須恵器(杯蓋), 石製品(扁平片刃石斧・台石・砥石・浮子)
- 図版 37 土師器(杯蓋・皿), 須恵器(杯蓋・鉢・器台), 肥前系磁器(碗), 近世磁器(碗), 土製品(土錘), 石製品(叩石・砥石)
- 図版 38 弥生土器(壺・甕), 東播系須恵器(片口鉢), 瓦質土器(羽釜), 石製品(叩石・磨石・剝片)
- 図版 39 弥生土器(甕・ミニチュア土器)
- 図版 40 土師器(杯蓋・皿・杯), 須恵器(杯蓋・杯身・高杯・甕), 土師質土器(高杯), 石製品(磨石)
- 図版 41 弥生土器(壺), 須恵器(甕), 二彩陶器(壺), 土師質土器(杯), 瓦質土器(羽釜), 土製品(土錘), 石製品(砥石)
- 図版 42 土師器(杯), 須恵器(杯身), 土師質土器(杯・小皿・椀), 白磁(碗), 青磁(香炉), 唐津焼(碗), 肥前系磁器(碗)
- 図版 43 弥生土器(壺・鉢・ミニチュア土器), 須恵器(杯蓋), 備前焼(播鉢), 瀬戸・美濃系(碗), 近世陶器(皿), 近世磁器(碗), 近世以降磁器(菊花皿・碗), 石製品(石鍋)
- 図版 44 弥生土器(壺・甕・鉢・高杯・ミニチュア土器), 土師器(杯蓋), 須恵器(杯蓋)
- 図版 45 土師器(杯蓋・杯身・皿・盤), 須恵器(杯蓋・杯身・皿・高杯・壺)
- 図版 46 須恵器(杯蓋・杯身), 土師質土器(杯・小皿・椀), 白磁(皿), 青磁(碗), 肥前系磁器(紅皿), 石製品(環状石斧)
- 図版 47 II区-E遺構検出状態(西より)
II区-E遺構完掘状態(西より)
- 図版 48 II区-W遺構検出状態(東より)
II区-W遺構完掘状態(東より)
- 図版 49 II区-E遺構完掘状態(北上空より)
II区-W遺構完掘状態(真上より)
- 図版 50 II区-E中央バンク西壁セクション(西より)
II区-W中央バンク東壁セクション(東より)
- 図版 51 SB-201(東より)
SK-271(東より)
- 図版 52 SK-279(西より)
SD-203(北より)
- 図版 53 SD-204(北東より)
SD-215(南東より)
- 図版 54 SD-223(東より)
SD-226(南より)
- 図版 55 SB-213(東より), SB-225(東より), SB-225(西より), SK-205(東より), SK-262(北より), SK-271(西より), SD-216(北より), SD-232(東より)
- 図版 56 P-227(北より), P-245(東より), P-257(東より), P-266(西より), P-270(北より), P-282(東より), P-292(西より), P-295(東より)
- 図版 57 緑釉陶器(椀)
緑釉陶器(椀)
- 図版 58 須恵器(甕)
弥生土器(高杯)
- 図版 59 須恵器(杯蓋)
石製品(石鍋)
- 図版 60 瓦質土器(足釜)
鉄製品(刀子)
- 図版 61 須恵器(壺), 製塩土器, 瓦(平瓦), 石製品(柱状片刃石斧・砥石)

付図目次

- 図版 62 土師質土器(小杯), 石製品(石鏃・砥石・叩石)
- 図版 63 須恵器(高杯・甕), 瓦(平瓦), 石製品(砥石)
- 図版 64 須恵器(壺), 瓦(平瓦), 石製品(砥石)
- 図版 65 須恵器(平瓶), 緑釉陶器(椀), 製塩土器, 白磁(碗), 青磁(碗・皿)
- 図版 66 灰釉陶器(皿), 土師質土器(杯・小皿・椀), 白磁(碗・皿), 青磁(碗), 瓦(平瓦)
- 図版 67 弥生土器(ミニチュア土器), 須恵器(杯身), 土師質土器(椀), 白磁(碗・皿), 瓦(平瓦), 土製品(管状土錘)
- 図版 68 土師器(杯・皿), 須恵器(高杯・壺・甕), 黒色土器(椀), 瓦(平瓦)
- 図版 69 土師器(小皿), 緑釉陶器(椀), 土師質土器(杯・小皿), 青磁(碗), 瓦(平瓦), 鉄製品
- 図版 70 土師質土器(杯・小皿・椀), 瓦質土器(鍋・釜), 瓦(平瓦)
- 図版 71 瓦器(椀), 土師質土器(杯・小杯・小皿), 青磁(皿)
- 図版 72 土師質土器(小皿・椀), 白磁(碗), 青磁(碗)
- 図版 73 珪藻化石
- 図版 74 花粉化石1
- 図版 75 花粉化石2, 植物珪酸体
- 図版 76 炭化材

付図目次

- 付図1 西野々遺跡第Ⅰ調査区(Ⅰ区)弥生遺構平面図(S=1/200)
- 付図2 西野々遺跡第Ⅰ調査区(Ⅰ区)古代遺構平面図(S=1/200)
- 付図3 西野々遺跡第Ⅰ調査区(Ⅰ区)中近世遺構平面図(S=1/200)
- 付図4 西野々遺跡第Ⅰ調査区(Ⅰ区)遺構平面図(S=1/200)
- 付図5 西野々遺跡第Ⅱ調査区(Ⅱ区)弥生遺構平面図(S=1/200)
- 付図6 西野々遺跡第Ⅱ調査区(Ⅱ区)古墳古代遺構平面図(S=1/200)
- 付図7 西野々遺跡第Ⅱ調査区(Ⅱ区)中近世遺構平面図(S=1/200)
- 付図8 西野々遺跡第Ⅱ調査区(Ⅱ区)遺構平面図(S=1/200)

第 I 章 序 章

1. はじめに

本書は、財団法人文化財団埋蔵文化財センターが平成15年度に国土交通省四国整備局土佐国道事務所から業務委託を受け実施した高知東部自動車道埋蔵文化財試掘調査及びその結果を受けて平成16年度に高知県教育委員会が国土交通省四国整備局から業務委託を受けた高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した西野々遺跡（Ⅰ・Ⅱ区）の発掘調査の成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省（四国整備局土佐国道事務所）が計画し、実施している一般国道55号南国安芸道路建設工事に伴う工事によって影響を受ける遺跡（埋蔵文化財）について事前の発掘調査を行ったうえで出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

西野々遺跡は平成15年度に実施した事前の試掘調査によって新たに確認された遺跡で、本書で報告するのは平成16年度に行った西野々遺跡（Ⅰ・Ⅱ区）の発掘調査の報告である。

西野々遺跡は物部川及びその支流によって形成された扇状地末端部に立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、中でも弥生時代中期末から後期前半の集落、奈良時代末から平安時代前期にかけての官衙関連遺構、室町時代前半の集落に特徴付けられる。

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

高知南国道路は、高知市～安芸市間36kmを結ぶ一般国道55号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として高知中央生活圏の連携強化を図るほか、四国横断自動車道、南国安芸道路と接続し広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和62年、国の高規格幹線道路網計画に

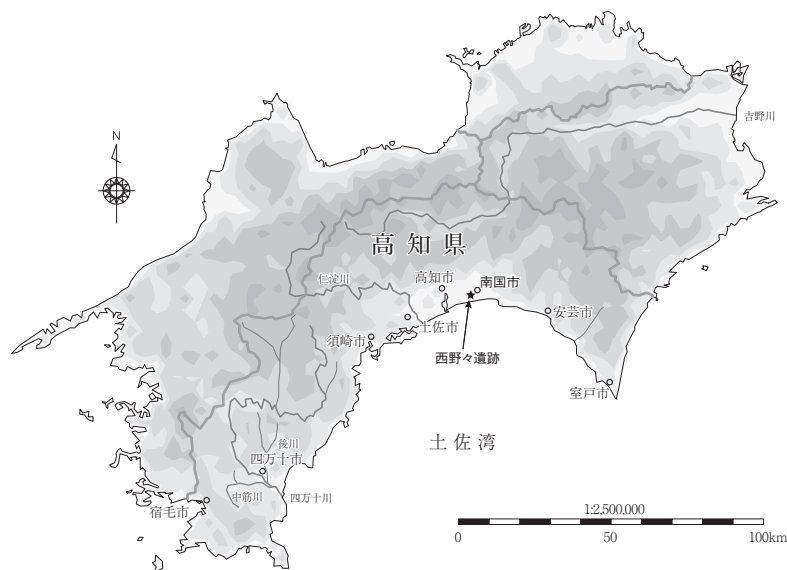


図1-1 西野々遺跡位置図

となり、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが国土交通省四国整備局と業務委託を締結した高知県教育委員会からの委託を受け発掘調査を実施した。平成16年度と平成17年度に発掘調査を実施し、平成18年度に報告書を刊行する予定であったが、平成17年度に行った竹中地区の試掘調査の結果、遺跡はさらに東に広がっていることが判明し、県道仁井田竹中線から県道南国インター線を挟んで下田川までの範囲約13,000㎡を平成18年度と平成19年度に引き続き発掘調査を行い、報告書の刊行は平成16年度分(Ⅰ・Ⅱ区)を平成19年度、平成16年度分(Ⅲ区-E)と平成17年度分(Ⅲ区-W,Ⅳ・Ⅴ区)を平成20年度、そして平成18年度と平成19年度分を平成21年度に行う方向で整理作業を実施している。

平成19年度には関地区の試掘調査を行い古代の遺構が検出され、前述の関町田遺跡との繋がりも考慮されることから遺構の分布は東西約350mにも及ぶことも考えられ、今後も引き続き少なからず発掘調査が実施されるものと思われる。

(2) 確認調査

土地の買収が完了している衣笠地区と西野々地区について試掘調査を実施した。衣笠地区は鉢伏山(標高212.9m)から東に延びる尾根の南中腹から山麓部にかけての部分で、この東に延びる尾根の南斜面、特に丸山・井川地区には坂ノ松古墳を始めとした後期古墳が点在する。また、北斜面を中心に旧日本軍の通信壕を始めとした掩体などが多数残存している。西野々地区は、先の鉢伏山から東

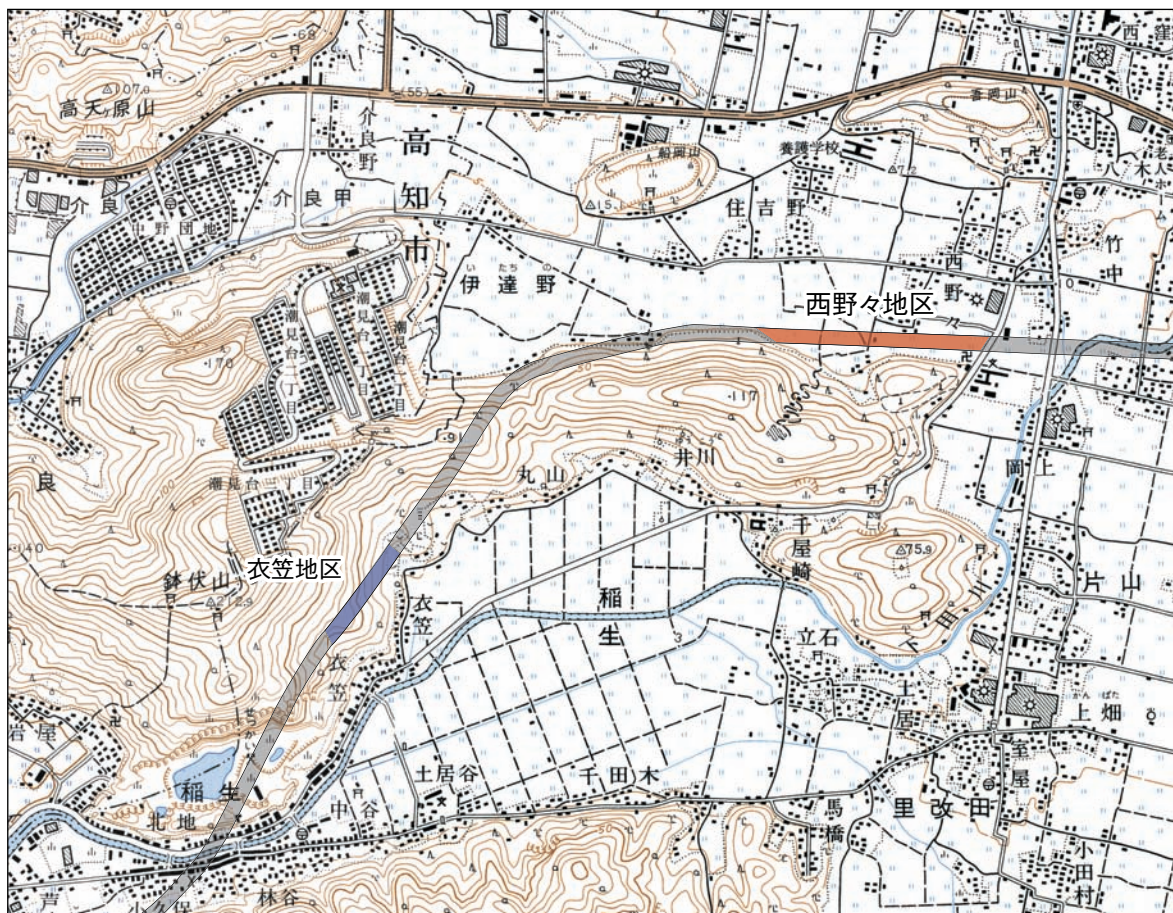


図1-3 平成15年度高知南国道路試掘調査対象範囲(S=1/25,000)

2. 調査の契機と経過 (2) 確認調査

に延びる尾根の東端、北山麓部に当たる。

① 調査区の概要

衣笠地区 (図1-4)

平成15年7月22日から8月6日にかけて、2×2mのトレンチを19ヵ所設定して調査を実施した。調査地区は近世以降に造られたとみられる段畑となりがち、山道しかなく、重機の搬入が困難であったためすべて人力で調査を行った。

調査の結果、K1～12では表土層直下に客土の堆積、その下層は岩盤の地山層となり、K13～19では表土層直下から岩盤(西側では石灰岩層となる。)の地山層となっており、遺物包含層や遺構は確認されず、かつ、遺物は、耕作土である表土層から近世の磁器や近現代の陶磁器類が出土したのみで、本調査の必要はないものと判断された。

西野々地区 (図1-5)

平成15年8月19日から9月29日にかけて、県道仁井田・竹中線から西へ幅約55m、延長約750m

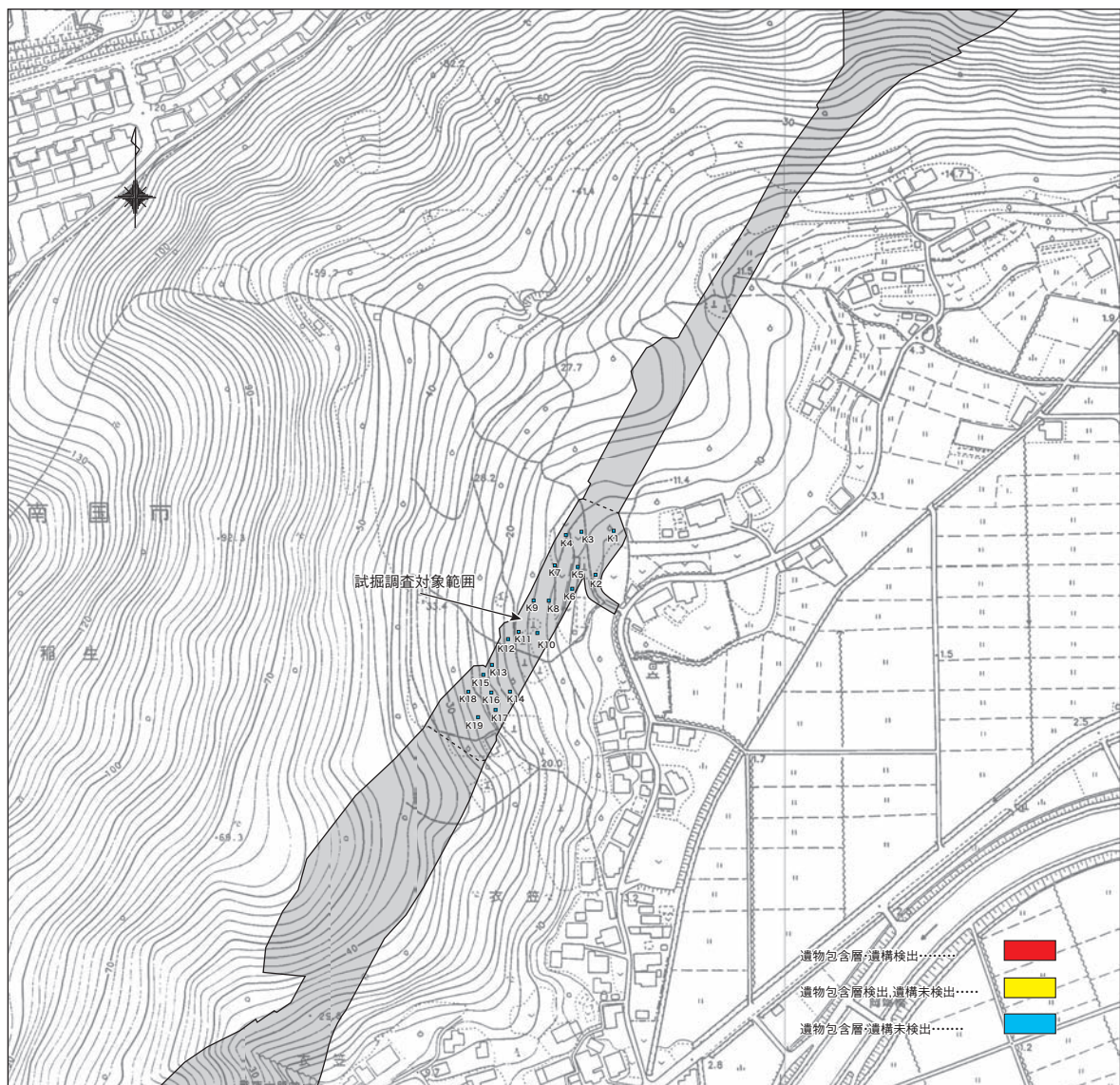


図1-4 衣笠地区試掘トレンチ位置図 (S=1/5,000)

範囲に5×5mのトレンチを50ヵ所設定して調査を実施した。調査対象地の西には茶田遺跡が周知の遺跡として存在していたもののその内容については推測の域を出なかった。

調査の結果、東端部で弥生時代の遺構を確認し、ほぼ全域で奈良時代から鎌倉時代の遺構が確認された。具体的には、N1で弥生時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡が検出され、周囲のトレンチの状況から遺構は東側に展開するものと推測された。実際、平成18年度の調査では多数の竪穴住居跡が確認された。N5・7・8とN13～28を中心に古代から中世にかけての遺構がまとまって検出され、方形の掘り方を有する古代の建物跡や企画性のある中世の溝跡もみられ、古代の官衙関連遺構と中世の屋敷跡が遺存していることが推測された。また、これらのトレンチでは遺構検出面が比較的浅く、表土層直下で遺構が確認されたトレンチもみられた。この中で、N9～12とN21・22では地形の落ち込みが認められ、旧河道の存在も考慮された。

N28以西では遺構検出面が西に向かって徐々に傾斜し、遺構と遺物が希薄となり、西端部に設定したトレンチN49・N50では遺物包含層ならびに遺構は全く検出されなくなり、地形が落ち込んでいることが判明した。

以上のような試掘調査結果から遺物包含層と遺構が検出されなかったN49・N50を除く、ほぼ全域約34,500㎡が本調査の対象となるものと判断された。

② 遺跡の概要

平成15年度に実施した試掘調査の結果、高知南国道路関係では南国市大浦字西野々（西野々地区）で試掘調査を実施した50ヵ所のトレンチの内38ヵ所から遺物包含層と遺構、7ヵ所から遺物包含層が確認され、その範囲が試掘調査対象範囲の約88%に及ぶことが判明した。

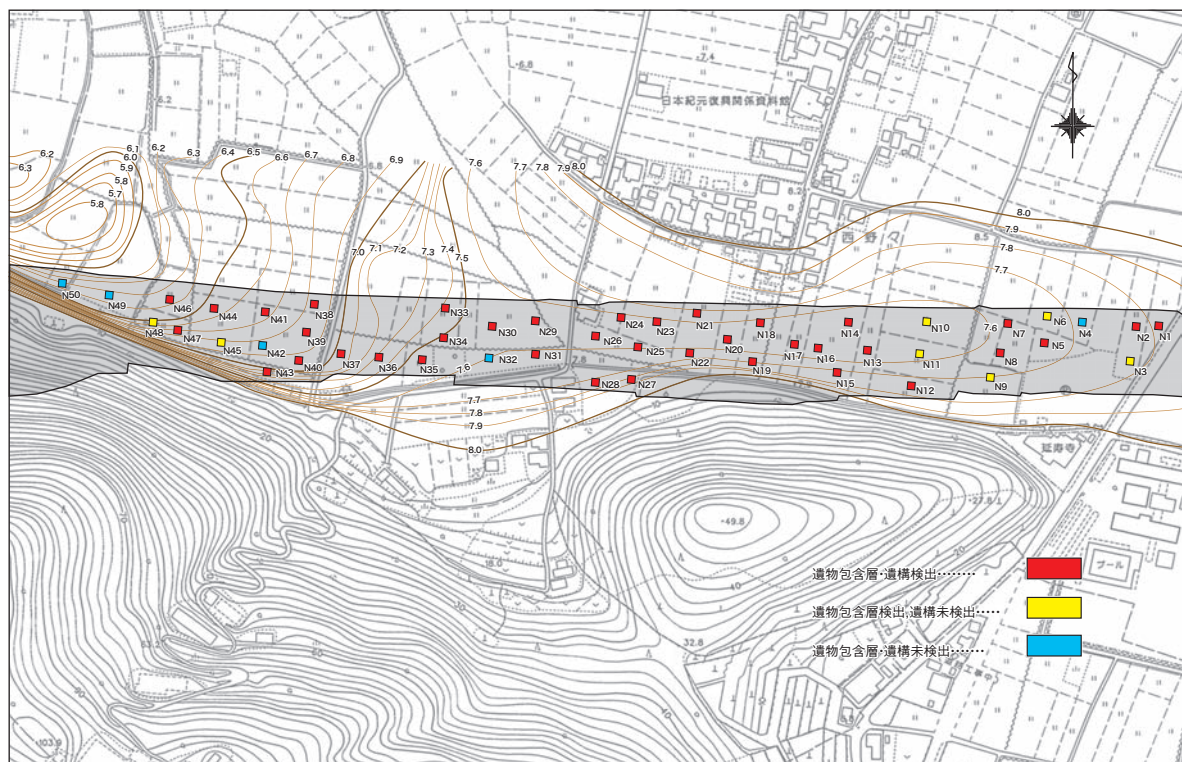


図1-5 西野々地区試掘トレンチ位置図 (S=1/5,000)

2. 調査の契機と経過 (3) 調査の方法

今回試掘調査を行った範囲には、古墳時代の散布地である茶田遺跡が周知の遺跡として知られており、その範囲が大きく拡大すると共にさらに東に広がることも想定され、前述のとおり「西野々遺跡」と名称の変更を行った。

試掘調査では、遺構が確認された場合は検出までに止め、本発掘調査を考慮し遺構の掘削を極力抑えたこともあり、明確な時期を押える資料は限られたが遺物包含層出土遺物などから弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。具体的には弥生時代中期末から後期初めの集落跡、奈良時代後半から平安時代前半にかけての官衙関連施設、室町時代前半を中心とした屋敷跡の存在が想定された。また、周辺の郷ノ前遺跡も茶田遺跡同様古墳時代の遺物散布地となっており、試掘調査では古墳時代と明確に判断される遺物の出土はなかったもののその存在も考慮された。

これら遺構の立地については、調査当時の地形が県道仁井田竹中線から西に向かって傾斜(図1-5)しているものの、遺構検出面に差異がみられ、かつ航空写真(図版1・2)から旧河道の存在が判読されることから起伏に富んだ地形であることが予測された。

(3) 調査の方法

試掘調査の結果、西野々地区では約88%から遺構が検出され、当面の調査対象地が東西約700m、南北約55mとなったことを受け、まず世界測地系の基準点を設置したうえで航空写真測量を行い1,000分の1の地形図を作成することから開始した。なお、各調査区に設置した先の基準点(4級)には4等水準点も併設すると共に各基準点からの方位標も設定し発掘調査に備えた。

測量は世界測地系第4座標系(IV系)の基準点を使用し、西の伊達野地区の調査⁽²⁾に備え、X = 62,500m, Y = 11,000m(北緯33°33'49", 東経133°37'07", 真北方向角-0°03'56")を原点とし、A0(100m

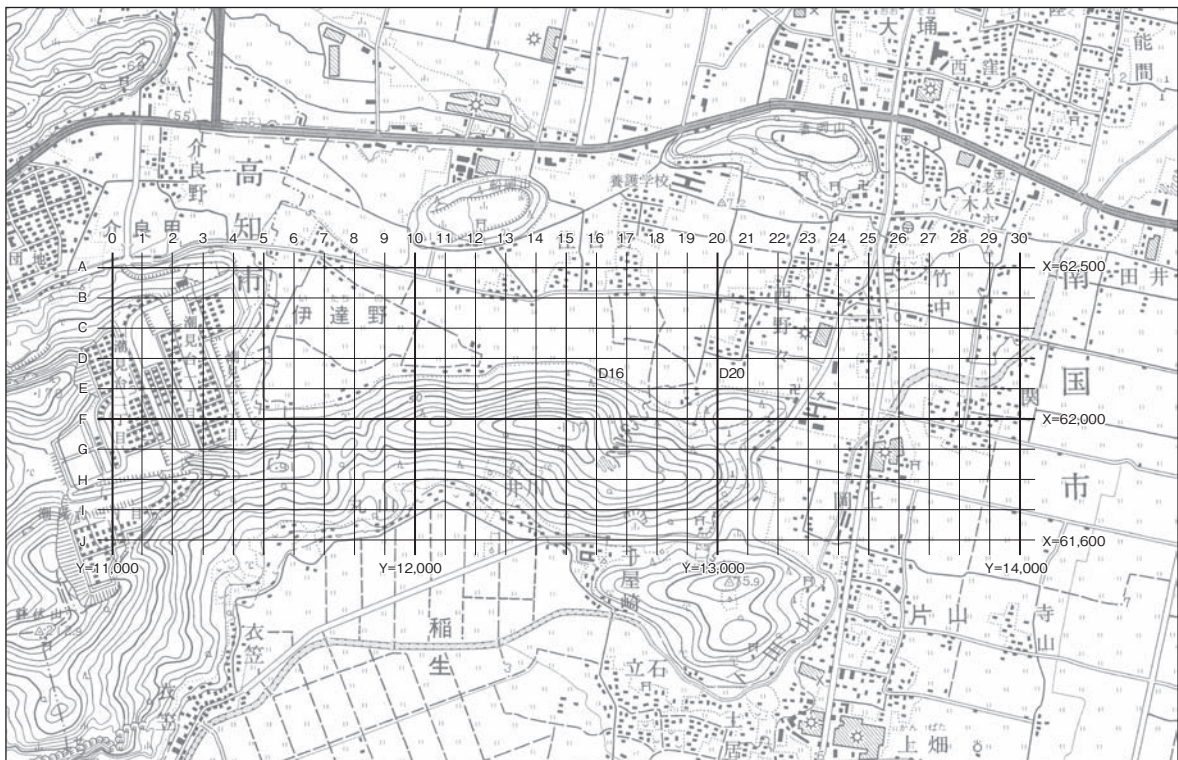


図1-6 高知南国道路(伊達野・西野々・関地区)グリッド設定図(S=1/25,000)

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

南国市は、高知県中央部に位置する。東を香美市・香南市、西を高知市、北を土佐町・本山町と接し、南は海に開ける。東西6～8km、南北約20kmの南北に長い地形で、面積は125.35km²、人口50,471人(平成19年9月30日現在)を有する。

地帯構造的に、高知県は中央構造線の西南日本外帯に属している。西南日本外帯は北から三波川帯、秩父累帯、四万十帯に分けられ、これらは東西方向に帯状配列を成している。南国市はそのうちの、秩父累帯(白木谷層群)から四万十帯(葉山層)の分布域に位置している。秩父累帯は徳島県小松市・阿南市周辺－高知市周辺－愛媛県西宇和郡三瓶町・明浜町を結ぶラインを南限とし、東西に帯状に分布する。南北幅は9～24kmほどである。秩父累帯の南には、仏像構造線を境界として四万十帯が分布する。高知県の約6割が四万十帯の分布域に属する。こういった地質構造の違いは、各地域で産出する岩石の違いにも表れる。秩父累帯では粘板岩、砂岩を主体とし、チャート、石灰岩、輝緑凝灰岩などが分布するのに対し、四万十帯では頁岩や砂岩などが分布の主体となる。

西野々遺跡周辺は、秩父累帯南帯の虚空蔵山層群の分布域に所在している。虚空蔵山層群のほぼ南限にあたり、本遺跡から約1.2km南に位置する里改田遺跡周辺で、仏像構造線が東西に横断すると考えられる。

地形的には、高知県の北は四国の脊梁をなす四国山地が横たわり、南は太平洋に面して扇状に張り出す地形を成している。太平洋を臨む海岸線は長く弓なりで、地形的に南の土佐湾に向かって開口していることもあり海国の印象が強いが、県面積の約85%を山林が占める山国でもある。南国市域の北境界線付近では標高約800mの山地がみられ、北から南に向かって徐々に山地は標高を下げ、150m前後の丘陵から最後は平野へと没する。高知平野³⁾は、山がちの高知県にあって最も広大な平野であり、その東部の南国市周辺は香長平野と称される。香長平野を有する南国市では農業が基幹産業であり、かつては米の二期作地帯として知られた。現在でも市域の平野部には水田の広がる風景が見られる。また海岸部の砂丘上では、ハウス園芸が盛んである。

西野々遺跡は香長平野の南部、物部川の河川堆積によって形成された扇状地末端部に所在する。遺跡の南縁には標高120mの前後の丘陵が横たわり、東縁に下田川が流れる。周辺の旧地形は自然科学分析の成果から、網状流路の河川堆積システムによって形成された可能性が高い。ただしこれらの河川堆積物が形成された年代を示す試料は確認されていない。そのため遺構の基盤層上面の、腐植土層の放射性炭素年代測定の結果から推測するよりほかない。測定は調査Ⅱ区で検出した、流路状の窪地最下層に堆積した腐食質シルト質粘土を試料としたもので、2790 ± 40yrsBPの値が出ている。このことから遅くともそれ以前の縄文時代晩期までに、西野々遺跡周辺の旧地形は形成されたものと推定される。

(2) 歴史的環境

南国市内ではこれまでに、旧石器時代から近世に至る約400遺跡が確認されている。特に香長平野に遺跡が集中しており、西野々遺跡もそのなかの一つである。

南国市の歴史は、はるか旧石器時代に遡る。その黎明となるのが南国市岡豊町に所在する奥谷南



図1-8 西野々遺跡周辺の主な遺跡 (S=1/50,000)

表1-1 西野々遺跡周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	西野々遺跡	弥生～近世	11	丸山古墳	古墳	21	介良野遺跡	弥生・古墳
2	関町田遺跡	弥生	12	坂ノ松古墳	古墳	22	狸岩1～3号墳	古墳
3	田村遺跡群	縄文～近世	13	丸山五輪塔	中世	23	明見山1～3号墳	古墳
4	里改田遺跡	弥生～中世	14	住吉山1号墳	古墳	24	竹ノ後遺跡	弥生・古墳
5	中組遺跡	弥生～中世	15	住吉山2号墳	古墳	25	小籠遺跡	弥生～近世
6	秋葉山南平古墳	古墳	16	住吉山3・4号墳	古墳	26	越戸1・2号墳	古墳
7	井川1・2号墳	古墳	17	吾岡山古墳	古墳	27	野中廃寺跡	平安
8	馬背古墳	古墳	18	吾岡山南遺跡	古墳～平安	28	士島田遺跡	弥生～近世
9	馬背東1・2号墳	古墳	19	カントラリ遺跡	縄文～平安	29	年越山1～3号墳	古墳
10	馬背西古墳	古墳	20	大篠遺跡	弥生	30	東崎遺跡	弥生～中世

遺跡で、後期旧石器時代のナイフ形石器文化期から細石刃文化期にかけて営まれた岩陰遺跡である。1996年の発掘調査以降、その出土資料の多さから中四国でも有数の旧石器遺跡として周知されている。また奥谷南遺跡は、縄文草創期～中期に互る各期の資料も出土している。奥谷南遺跡から尾根を隔てた約300m南西には、栄エ田遺跡が所在する。栄エ田遺跡は縄文時代前期から後期まで続く遺跡である。奥谷南遺跡・栄エ田遺跡が丘陵際に立地するのに対し、海に近い平野に立地する縄文遺跡もある。田村遺跡群は南国市田村の高知龍馬空港周辺に広がる遺跡で、海岸線から約1.5km北に所在する。弥生時代には遺跡の南に潟湖が広がっており、海は現在よりも内陸まで入り込んでいたと考えられる。田村遺跡群からは前期～中期の遺物も出土しているが量的に少なく、田村遺跡群周辺が安定した生活域となるのは縄文後期以降とみられる。彦崎K I式、鐘崎式土器が出土し、九州との関係を示す遺物として注目された。

弥生時代は香長平野を中心に、遺跡が拡大していく時期である。西野々遺跡から約1.5km東に位置する田村遺跡群では、前期の早い段階から集落を形成し、水田経営が成されていた。二度に互る大規模調査によって、前期から後期後半まで続く集落の様相が明らかとなってきた。特に中期後半から後期前半は、田村遺跡群が最も拡大する時期である。こうした田村遺跡群の状況は、周辺遺跡の情勢とも連動したものであったと考えられ、当該期には拠点集落である田村遺跡群の周辺部に多くの集落遺跡が出現する。西野々遺跡も田村遺跡群の拡大期に出現する遺跡であり、田村遺跡群との交流が窺えるような遺構・遺物が確認されている。また、西野々遺跡の約1.3km南には集落遺跡である里改田遺跡の他、銅鐸出土地の関町田遺跡、銅鉾出土地の遅倉遺跡などが所在する。また、広く香長平野に目を転じると、弥生時代の遺跡として高知市介良遺跡、南国市大篠小学校校庭遺跡、三島遺跡、金地遺跡、栄エ田遺跡、小籠遺跡、東崎遺跡、岩村遺跡群、香南市深淵遺跡、下ノ坪遺跡などがあげられる。後期後半になると、田村遺跡群をはじめとする周辺部の集落遺跡は消滅し、変わって台地や河岸段丘上に集落が営まれるようになる。西野々遺跡の集落もこうした流れと呼応するかのようになり、当該期に消滅すると考えられる。

弥生時代終末、古墳時代前夜の他地域では、墳丘墓など新たな墓制が展開する。この時期の発掘調査資料は乏しく、南国市五軒屋敷遺跡や東崎遺跡の壺棺墓などに墓制の一端が窺えるのみである。

古墳時代には平野部に集落遺跡が、丘陵部には多くの後期古墳の集中がみられる。西野々遺跡周辺にも古墳が所在し、南の丘陵には井川山1・2号墳、馬背古墳、馬背東1・2号墳、馬背西1号墳、丸山古墳、坂ノ松古墳が、北には吾岡山古墳、住吉山1～4号墳が認められる。西野々遺跡でも古墳時代の遺構・遺物を検出しており、周辺部に古墳時代の集落があった可能性が高い。集落遺跡として土佐国衙跡、小籠遺跡、下ノ坪遺跡、深淵遺跡などがあげられる。

古代における香長平野は、土佐国の中心地域であった。東から安芸、香美、長岡、土佐、吾川、高岡、幡多の七郡に編成され、政の中心となる国府は長岡郡(南国市比江)に置かれた。国衙跡の北東には比江廃寺跡が、西には土佐国分寺が所在する。土佐国衙跡はこれまでに行われた11次に互る調査により、遺跡の様相は明らかになりつつあるが、現段階で政庁域の確認には至っていない。国衙跡から約5km南に位置する西野々遺跡周辺は、古代には長岡郡の大埞郷にあたと考えられる。平成19年までの調査で、遺跡の東部を中心に古代の官衙関連とみられる建物群の広がりを確認した。周辺の田

村遺跡群では、8世紀中頃から11世紀にかけて掘立柱建物跡75棟の他、土坑、溝跡を、里改田遺跡では古代の掘立柱建物跡1棟を検出している。また物部川の左岸には下ノ坪遺跡、深淵遺跡、深淵北遺跡、右岸には岩村遺跡群が所在しており、下ノ坪遺跡、深淵遺跡、対岸の岩村遺跡群は、津の可能性が想定されている。古代における西野々遺跡の性格の位置付けには、これら近辺の遺跡や土佐国府との関係を含めて考えていかなければならないだろう。

中世になると、田村遺跡群に東接して田村城館跡が所在する。田村城館は土佐国守護代、細川氏の居館である。田村遺跡群の発掘調査によって、田村城館跡の南には堀に囲まれた屋敷跡33ヵ所が広がるのを確認している。これらの屋敷跡は、出土遺物から14～16世紀に機能していたと考えられる。また調査は行われていないが、西野々遺跡周辺には八木土居遺跡、西ノ芝遺跡などの中世の遺跡が所在している。16世紀には香長平野の北の丘陵部に、長宗我部氏の築城した岡豊城をはじめとする城跡が点在する。岡豊城は、長宗我部元親が居城を大高坂城跡（高知城）に移すまで使用された。長宗我部氏衰亡後に入国した山内一豊は、居城を浦戸城から高知城へ移し、藩政の中心も香長平野から高知市の城下町へと移ることとなる。これにより、香長平野は政治の中心から離れ、近世農村へと姿を変えていくのである。

註

- (1) 古墳時代から奈良・平安時代の遺物散布地として周知されていた。
- (2) 平成18・19年度に実施した試掘調査では遺物包含層や遺構は確認できず、結果的には本発掘調査を実施することにはならなかった。
- (3) 高知平野は南国市付近に広がる香長平野と、高知市付近の土佐平野の総称である。

参考文献

- 秋澤繁・荻慎一郎編 2006『土佐と南海道』吉川弘文館
- 岡本健児 1968『高知県史 考古編』高知県
- 岡本健児・廣田典夫・西和彦 1970『高知県比江廃寺塔跡』高知県文化財調査報告書第16集 高知県教育委員会
- 小松大洋 1998『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会
- 坂本憲昭・田坂京子 1997『介良遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 佐竹寛・吉成承三 1996『深淵北遺跡』高知県香美郡野市町教育委員会
- 下村公彦・角谷和男 1984『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会
- 高橋啓明・出原恵三・吉原達生 1989『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会
- 武吉眞裕・江戸秀輝 2000『里改田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 南国市史編纂委員会 1979『南国市史 上巻』南国市
- 日本の地質『四国地方』編集委員会編(須鎗和己・岩崎正夫・鈴木堯士) 1999『日本の地質8 四国地方』共立出版株式会社
- 廣田佳久 1990『土佐国衙跡発掘調査報告書第10集－金屋・神ノ木戸地区の調査』高知県教育委員会
- 廣田佳久 1991『土佐国衙跡発掘調査報告書第11集－金屋地区の調査』高知県教育委員会
- 廣田佳久 2007『比江廃寺跡Ⅲ平成6・7年度の確認調査報告書』高知県教育委員会, (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松村信博・山本純代 1999『奥谷南遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松村信博・山本純代 2001『奥谷南遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

3. 遺跡の地理的・歴史的環境 (2) 歴史的環境

- 森田尚宏・前田光雄 2004『田村遺跡群Ⅱ 第一分冊』高知県教育委員会, (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
山本大編 1983『高知の研究1 地質・考古篇』清文堂
山本哲也 1991『東崎遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

西野々遺跡は、平成15年度に行った高知東部自動車道高知南国道路に伴う事前の試掘調査によって遺跡の範囲が大幅に拡大した茶田遺跡について、字の「西野々」を取って名称変更した遺跡である。平成15年度の試掘調査結果を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所との間で本発掘調査についての協議を重ね、当面の工事予定区域である西は明見と西野々地区の境から東の県道仁井田竹中線までの間について、2ヵ年で本発掘調査を実施することとなった。調査は、国土交通省四国地方整備局と高知県教育委員会との業務委託を受け、平成16年4月1日付けで高知県教育委員会と(財)高知県文化財団との間で業務委託契約を締結した上で、準備に入り、5月の連休明けから開始した。埋め戻しが完了したのはⅠ区が平成17年2月21日、Ⅱ区が2月28日、Ⅲ区が3月5日であった。

本調査は、調査区が東西に長いことから第Ⅰ調査区(Ⅰ区)から第Ⅴ調査区(Ⅴ区)に分け、それぞれ排土置き場の関係上東半(E)と西半(W)に細分し、平成16年度に第Ⅰ調査区(Ⅰ区)、第Ⅱ調査区(Ⅱ区)、第Ⅲ調査区(Ⅲ区)の東半(Ⅲ区-E)、平成17年度に第Ⅲ調査区(Ⅲ区)の西半(Ⅲ区-W)、第Ⅳ調査区(Ⅳ区)、第Ⅴ調査区(Ⅴ区)の調査を実施した。報告書の刊行については、前述のとおり平成18年度も引き続き西野々遺跡東半の本発掘調査を実施したことから第Ⅰ調査区(Ⅰ区)と第Ⅱ調査区(Ⅱ区)が平成19年度、第Ⅲ～Ⅴ調査区(Ⅲ～Ⅴ区)が平成20年度とした。

(2) 調査日誌抄

第Ⅰ調査区(以下「Ⅰ区」という。)

2004(平成16)年5月17日～2005(平成17)年2月21日

Ⅰ区-W(調査区西半)(実働82日)・・・・・・・・

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 5.17 調査区周囲に安全柵の設置を開始する。 | 6.3 南西部の機械掘削及び西壁セクション図を作成する。 |
| 5.18 引き続き安全柵の設置を行い、全調査区の設置を終了する。 | 6.4 引き続き南西部の機械掘削を行う。 |
| 5.19 調査区内のコンクリート壁の撤去を行う。 | 6.7 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.20 雨天のため現場作業を中止する。 | 6.8 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.21 コンクリート壁の撤去を行う。 | 6.9 北西部の遺構検出作業並びに南部の機械掘削を行う。 |
| 5.24 調査区中央にバンクの設定を行う。 | 6.10 北西部の遺構配置図と北壁セクション図を作成する。 |
| 5.25 調査区周辺の草刈りを行う。 | 6.11 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.26 調査区の周囲に排水用の溝を設置する。 | 6.14 南西部の遺構検出作業と並行して北東部の機械掘削を行う。 |
| 5.27 コンクリート壁の撤去を終了する。 | 6.15 引き続き北東部の機械掘削を行う。 |
| 5.28 発掘区の設定を行う。 | 6.16 北東部の遺構検出作業を行う。 |
| 5.31 引き続き発掘区の設定を行う。 | |
| 6.1 調査区北西部より機械掘削を開始する。 | |
| 6.2 機械掘削に併行して遺構検出作業を行う。 | |

1. 調査の経過 (2) 調査日誌抄

- 6.17 南西部と北東部の遺構検出を行う。
- 6.18 南西部の遺構配置図及び北壁セクション図を作成する。
- 6.21 台風のため作業を中止する。
- 6.22 西壁セクションの写真撮影及び図面作成を行う。
- 6.23 雨天のため作業を中止する。
- 6.24 南東部の機械掘削及び南壁セクション図の作成を行う。
- 6.25 雨天のため作業を中止する。
- 6.28 排水作業を行う。
- 6.29 南東部の機械掘削を行う。
- 6.30 雨天のため作業を中止する。
- 7.1 北東部の遺構配置図を作成する。
- 7.2 南東部の機械掘削を行う。
- 7.5 雨天のため作業を中止する。
- 7.6 南東部の機械掘削および北東部の遺構配置図の作成を行う。
- 7.7 雨天のため作業を中止する。
- 7.8 南東部の機械掘削をほぼ終了し、遺構検出作業を開始する。
- 7.9 機械掘削を全て終了する。
- 7.12 南東部の遺構配置図を作成する。
- 7.13 遺構検出の写真撮影に備えて西部より清掃を開始する。
- 7.14 引き続き西部の清掃を行う。
- 7.15 東部の清掃を行う。
- 7.16 南東部の清掃及び平板測量を行う。
- 7.17 遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 7.20 北西部より遺構の調査を開始する。
- 7.21 引き続き遺構の調査を行う。
- 7.22 引き続き遺構の調査を行う。
- 7.23 職員研修のため現場作業は中止する。
- 7.26 引き続き北西部の遺構の調査を行う。
- 7.27 北西部の遺構の調査をほぼ終了する。
- 7.28 南西部の遺構の調査に移る。
- 7.29 引き続き遺構の調査を行うと共に北西部の平面実測を行う。
- 7.30 引き続き遺構の調査を行うと共に台風対策を行う。
- 8.2 雨天のため作業を中止する。
- 8.3 東壁セクションの写真撮影及び実測を行う。
- 8.4 雨天のため作業を中止する。
- 8.5 南西部の遺構の調査を再開する。
- 8.6 雨天のため作業を中止する。
- 8.9 現場作業を休止する。
- 8.10 現場作業を休止する。
- 8.11 現場作業を休止する。
- 8.12 現場作業を休止する。
- 8.13 現場作業を休止する。
- 8.16 南西部の遺構の調査を再開する。
- 8.17 雨天のため作業を中止する。
- 8.18 雨天のため作業を中止する。
- 8.19 雨天のため作業を中止する。
- 8.20 南西部の遺構の調査とSP-101の人力掘削を行う。
- 8.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 8.24 調査区周辺の草刈りを行う。
- 8.25 引き続き草刈りと南西部の遺構の調査を行う。
- 8.26 南西部の遺構の調査とSP-101の人力掘削を行う。
- 8.27 SP-101の人力掘削と台風対策を行う。
- 8.30 台風のため現場作業を中止する。
- 8.31 調査区中央に設置したバンクの除去作業を行う。
- 9.1 引き続き中央バンクの除去作業とSP-101の人力掘削を行う。
- 9.2 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.3 SP-101の人力掘削を行う。
- 9.6 引き続きSP-101の人力掘削及び台風対策を行う。
- 9.7 台風のため現場作業を中止する。



図2-1 作業風景1

- 9.8 南西部の遺構の調査をほぼ終了し、北東部の調査に入る。
- 9.9 南西部の残りの遺構の調査と東部北の遺構の調査を行う。
- 9.10 北東部の遺構の調査とSP-101の人力掘削を行う。
- 9.13 引き続き北東部の調査とSP-101の人力掘削を行う。
- 9.14 北東部の遺構の調査と並行して南部の遺構の調査に入る。
- 9.15 東部の遺構の調査及びSP-101の人力掘削を行う。
- 9.16 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.17 引き続き東部の遺構の調査を行う。
- 9.21 引き続き東部の遺構の調査とSP-101の人力掘削を行う。
- 9.22 引き続き東部の遺構の調査及びSP-101の人力掘削を行う。
- 9.24 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.25 引き続き東部の遺構の調査を行う。
- 9.27 引き続き東部の遺構の調査とSP-101の人力掘削を行う。
- 9.28 SP-101の人力掘削及び台風対策を行う。
- 9.29 台風のため現場作業を中止する。
- 9.30 東部の調査をほぼ終了する。
- 10.1 SP-101の人力掘削を再開する。
- I区-E(調査区東半)(実働48日)・・・・・・・・
- 10.27 調査区中央にバンクを設置し、北西部より機械掘削を開始する。
- 10.28 北東部の機械掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 10.29 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.1 引き続き北東部の機械掘削と遺構検出作業を行う。
- 11.2 北東部の機械掘削をほぼ終了する。
- 11.4 南東部の機械掘削を行い、北東部の遺構配置図の作成を行う。
- 11.5 引き続き南東部の機械掘削と遺構検出作業を行う。
- 11.8 北西部の機械掘削を終了する。
- 11.9 南西部の機械掘削に移ると共に北西部の遺構配置図の作成を行う。
- 10.4 引き続きSP-101の人力掘削を行う。
- 10.5 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.6 南東部のSP-101の下層確認を行う。
- 10.7 SP-101出土の集石の写真撮影を行う。
- 10.8 台風のため現場作業を中止する。
- 10.11 南壁セクションの写真撮影及び実測を行う。
- 10.12 SP-101の掘削を終了する。
- 10.13 SP-101の下層の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 10.14 SP-101の下層の調査及び写真撮影に備えて清掃を開始する。
- 10.15 引き続き清掃を行う。
- 10.16 遺構完掘状態の写真撮影及び空中写真撮影測量を行う。
- 10.18 西壁の下層確認を行った後機材の片付けを行う。
- 10.19 台風のため現場作業を休止する。
- 10.20 台風のため現場作業を休止する。
- 10.21 西部から埋め戻し作業を開始する。
- 10.22 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 10.23 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 10.25 西部の下層確認調査に並行して埋め戻し作業を行う。
- 10.26 西部の下層確認調査を終了すると共に埋め戻し作業も完了する。
- 11.10 南西部の機械掘削をほぼ終了する。
- 11.11 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.12 昨日の降雨のため現場作業を中止する。
- 11.13 南東部の機械掘削と遺構配置図の作成を行う。
- 11.15 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.16 南西部の機械掘削をほぼ終了する。
- 11.17 機械掘削を全て終了する。
- 11.18 写真撮影に備えて清掃を開始する。
- 11.19 職員研修のため現場作業を休止する。
- 11.22 南西部の清掃を行う。
- 11.23 東部の清掃を行う。
- 11.24 遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 11.25 調査区中央に設置したバンク東半の除去作業を行う。
- 11.26 南東部より遺構の調査を開始する。

1. 調査の経過 (2) 調査日誌抄

- 11.29 南東部をほぼ終了し、北東部の遺構の調査に移る。
- 11.30 引き続き北東部の遺構の調査を行う。
- 12.1 北東部の遺構の調査と南東部の測量を行う。
- 12.2 北東部の調査をほぼ終了する。
- 12.3 南西部の調査に移る。
- 12.6 北壁セクションの写真撮影及び実測を行う。
- 12.7 東壁セクションの写真撮影及び実測を行う。
- 12.8 調査区中央に設置したバンク西半の除去作業を行う。
- 12.9 南西部の遺構の調査を行う。
- 12.10 南壁セクションの写真撮影及び実測を行う。
- 12.13 引き続き南西部の遺構の調査を行う。
- 12.14 引き続き南西部の遺構の調査を行う。
- 12.15 南西部と北部の遺構の調査を行う。
- 12.16 引き続き南西部と北部の遺構の調査を行う。
- 12.17 南西部の遺構の調査をほぼ終了する。
- 12.20 北西部の遺構の調査に移る。
- 12.21 引き続き北西部の遺構の調査を行う。
- 12.22 北東部の遺構の調査に移る。
- 12.24 引き続き北東部の調査を行う。
- 12.27 北東部の遺構の調査と並行して遺構実測を行う。
- 1.4 調査区の排水作業を行う。
- 1.5 北西部で検出した古代の建物跡を中心に遺構の調査を行う。
- 1.6 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.7 北西部の調査をほぼ終了する。
- 1.11 残りの遺構の調査と並行して写真撮影のために東側より清掃作業を開始する。

- 1.12 引き続き清掃作業を行う。
- 1.13 遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 1.14 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 1.17 調査区の実測を終了する。
- 1.18 機材の片付けを行う。
- 1.19 引き続き機材の片付けを行う。
- 1.20 記者発表を行う。
- 1.22 現地説明会を開催する。
- 2.9 調査区内3ヵ所で下層確認調査を行い、I区の調査をすべて完了する。
- 2.10 埋め戻し作業を開始する。
- 2.11 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 2.14 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 2.15 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 2.17 引き続き埋め戻し作業を行うと共に整地作業を行う。
- 2.21 残りの埋め戻し作業を行うと共に整地作業を行い、I区の埋め戻し作業を終了する。



図2-2 現地説明会

第Ⅱ調査区(以下「Ⅱ区」という)

2004(平成16)年5月17日～2005(平成17)年2月28日

Ⅱ区-E(調査区東半)(実働96日)・・・・・・・・

- 5.17 調査区の境杭の設置を重機で行う。
- 5.18 引き続き調査区境杭の設置を行う。
- 5.19 降雨のため機械掘削作業は行わず、調査区内に残るコンクリート壁の撤去を重機で行う。
- 5.20 降雨のため現場作業を中止する。
- 5.21 調査区内を部分的に機械で掘削し、那須先生から土層についてのレクチャーを受ける。
- 5.24 重機による調査区内のコンクリート壁の撤

- 去を行う。
- 5.25 土置き場の関係で調査区を東西に分けて調査を行うため、Ⅱ区東半から調査を行うことにする。Ⅱ区-Eを北から南に向かって機械掘削を開始する。
- 5.26 引き続き北部の機械掘削を行う。
- 5.27 引き続き北部の機械掘削を行う。
- 5.28 引き続き北部の機械掘削を行う。

- 5.31 引き続き北部の機械掘削を行う。
- 6.1 引き続き北部の機械掘削を行う。
- 6.2 引き続き北部の機械掘削を行う。
- 6.3 引き続き北部の機械掘削を行う。
- 6.4 引き続き北部の機械掘削を行う。
- 6.7 降雨のため現場作業を中止する。
- 6.8 降雨のため現場作業を中止する。
- 6.9 調査区内の排水作業と、北部の機械掘削を行う。
- 6.10 引き続き北部の機械掘削を行う。
- 6.11 降雨のため現場作業を中止する。
- 6.14 調査区内の排水作業と、引き続き北部の機械掘削を行う。
- 6.15 引き続き北部の機械掘削と包含層の人力掘削を行う。
- 6.16 引き続き北部の機械掘削と包含層の人力掘削を行う。
- 6.17 引き続き北部の機械掘削と包含層の人力掘削を行う。
- 6.18 北部から南部に移り、機械掘削を行う。
- 6.21 台風のため現場作業を中止する。午後から調査区内の排水作業を行う。
- 6.22 調査区内の排水作業と、南部の機械掘削を行う。
- 6.23 降雨のため現場作業を中止する。
- 6.24 南部の機械掘削を行う。
- 6.25 降雨のため現場作業を中止する。
- 6.28 降雨のため現場作業を中止する。
- 6.29 調査区内の排水作業と、崩落しかけた調査区壁の補修を行う。南部の機械掘削と包含層の人力掘削を行う。
- 6.30 降雨のため現場作業を中止する。
- 7.1 調査区南壁の補修と、南部の機械掘削を行う。
- 7.2 北東部の黒色土層堆積部分について、機械掘削を行う。
- 7.5 雨天のため現場作業は中止。
- 7.6 北東部の黒色土層堆積部分の機械掘削及び人力掘削を行う。
- 7.7 降雨のため現場作業を中止する。
- 7.8 北東部の黒色土層堆積部分の機械掘削及び人力掘削を行う。
- 7.9 南部の機械掘削と、包含層の人力掘削を行う。
- 7.12 引き続き南部の機械掘削と、包含層の人力掘削、北部の遺構検出を行う。
- 7.13 引き続き南部の機械掘削と、包含層の人力掘削を行う。
- 7.14 引き続き南部の機械掘削と、包含層の人力掘削を行う。
- 7.15 引き続き南部の機械掘削と、包含層の人力掘削を行う。
- 7.16 引き続き南部の機械掘削と、包含層の人力掘削を行う。
- 7.20 II区東半の機械掘削を終了する。並行して遺構検出を行う。
- 7.21 南部の遺構検出を行う。
- 7.22 引き続き南部の遺構検出を行う。
- 7.23 職員研修のため現場作業は中止。
- 7.26 遺構検出写真撮影に備え、調査区の清掃を行う。
- 7.27 引き続き調査区内の清掃を行う。
- 7.28 引き続き調査区内の清掃を行う。
- 7.29 調査区内の清掃後、遺構検出写真の撮影を行う。
- 7.30 遺構検出写真撮影後、東半部北西から遺構調査を開始する。
- 8.2 降雨のため現場作業を中止。調査区内の排水作業を行う。
- 8.3 引き続き調査区内の排水作業を行う。
- 8.4 降雨のため現場作業を中止する。
- 8.5 排水作業後、遺構調査を行う。
- 8.6 午前中は降雨のため現場作業を中止。午後から排水作業や道具等の撤収を行う。



図2-3 故那須孝悌氏による現場指導

1. 調査の経過 (2) 調査日誌抄

- 8.9 現場作業を休止する。
- 8.10 現場作業を休止する。
- 8.11 現場作業を休止する。
- 8.12 現場作業を休止する。
- 8.13 現場作業を休止する。
- 8.16 II区-Eの北西部の遺構調査を行う。
- 8.17 降雨のため現場作業を中止する。
- 8.18 北西部で古代～中世の遺構調査を行う。
- 8.19 引き続き北西部の古代～中世の遺構の調査を行う。
- 8.23 降雨のため現場作業を中止する。
- 8.24 調査区内の排水作業と、草刈りを行う。
- 8.25 引き続き草刈りと、調査区セクションの写真撮影を行う。
- 8.26 調査区セクションの写真撮影と測量、東半部北西の遺構調査を行う。
- 8.27 II区-E西部の遺構調査を行う。
- 8.30 台風のため現場作業を中止する。
- 8.31 調査区の排水作業後、西半部の遺構調査を行う。
- 9.1 引き続き西部の遺構の調査を行う。
- 9.2 降雨のため現場作業を中止する。
- 9.3 調査区内の排水作業後、東半西部の遺構調査と遺構調査を行う。
- 9.6 引き続き西部の遺構調査を行う。
- 9.7 台風のため現場作業を中止する。
- 9.8 調査区内の排水作業と、西部の遺構調査を行う。
- 9.9 引き続き遺構調査と、窪地部分に土層確認のためのトレンチを設定し、人力掘削を行う。
- 9.10 引き続きII区-E西部の遺構調査と、トレン



図2-4 作業風景2

- チの人力掘削を行う。
- 9.13 引き続き西部の遺構調査と、トレンチの人力掘削を行う。
- 9.14 調査区内の排水作業の後、遺構調査とトレンチの人力掘削を行う。
- 9.15 引き続き遺構調査と、重機による黒色土の掘削を行う。
- 9.16 降雨のため現場作業を中止する。午後から測量を行う。
- 9.17 西半部の遺構調査と、窪地部分の機械掘削を行う。
- 9.18 降雨のためII区の調査は行わず、III区の調査前準備を行う。
- 9.21 西部の遺構調査と、窪地部分の機械掘削を行う。窪地への落ち込みの肩部では、ピット、土坑、溝跡を検出した。
- 9.22 引き続き西部の遺構調査と、重機による窪地部分の掘削を行う。
- 9.24 降雨のため現場作業を中止する。
- 9.27 窪地部分の機械掘削と人力掘削を行う。
- 9.28 引き続き遺構調査と、重機による窪地部分の掘削を行う。
- 9.29 台風のため現場作業を中止する。
- 9.30 調査区内の排水作業後、南東部の遺構調査と窪地部分の機械掘削を行う。
- 10.1 II区-E南半部の遺構調査と、窪地部分の機械掘削を行う。
- 10.4 引き続き南半部の遺構調査と、窪地部分の機械掘削を行う。
- 10.5 降雨のため現場作業を中止する。
- 10.6 南部の遺構調査と、窪地部分の機械掘削を行う。
- 10.7 引き続き南部の遺構調査と、窪地部分の機械および人力での掘削を行う。
- 10.8 台風のため現場作業を中止する。
- 10.11 II区-E南東部の遺構調査と、窪地部分の機械および人力での掘削を行う。
- 10.12 引き続き南東部の遺構調査と、窪地部分の機械および人力掘削を行う。窪地への落ち込みの肩部で、弥生時代の遺構を検出した。
- 10.13 東部の遺構調査と、窪地部分の機械および人力掘削を行う。

- 10.14 引き続き東部の遺構調査と、窪地部分の機械および人力掘削を行う。
 - 10.15 Ⅱ区-E北半部の遺構調査と、窪地部分の機械掘削、遺構検出を行う。
 - 10.18 引き続き北半部の遺構調査と、窪地部分の機械および人力掘削を行う。
 - 10.19 台風のため現場作業を中止する。
 - 10.20 台風のため現場作業を中止する。
 - 10.21 調査区内の排水作業を行う。
 - 10.22 引き続き調査区内の排水作業を行う。
 - 10.23 調査区中央に設置したバンクの掘削を行う。
 - 10.25 窪地部分の機械および人力掘削を行う。
 - 10.26 降雨のため現場作業を中止する。
 - 10.27 窪地部分の機械および人力掘削を行う。
 - 10.28 引き続き窪地部分の機械および人力掘削を行う。
 - 10.29 降雨のため現場作業を中止する。
 - 11.1 調査区内の排水作業後、北部の遺構調査を行う。窪地部分の機械掘削は、遺構が確認できる部分までの掘削を終了した。
 - 11.2 航空写真測量に向けての清掃を行う。
 - 11.3 引き続き航空写真測量に向けての清掃を行う。
- Ⅱ区-W(調査区西半)(実働58日)・・・・・・・・・・
- 11.4 引き続き航空写真測量に向けての清掃を行う。
 - 11.5 Ⅱ区-Eの遺構完掘写真撮影と、航空写真測量を行う。
 - 11.8 重機による調査区の埋め戻し作業を行う。また、残っていた遺構平面図のレベル測量、セクション図の測量を行った。
 - 11.9 引き続き重機による埋め戻し作業を行う。
 - 11.10 引き続き重機による埋め戻し作業を行う。
 - 11.11 降雨のため現場作業を中止する。午後から調査区内の排水作業を行う。
 - 11.12 調査区内の排水作業後、重機による下層確認調査を行った。
 - 11.13 重機による埋め戻し作業を行う。
 - 11.15 降雨のため現場作業を中止する。午後から調査区内の排水作業を行う。
 - 11.16 重機による調査区の埋め戻しと、水路の補修を行う。
 - 11.17 引き続き重機による埋め戻し作業を行う。
 - 11.18 Ⅱ区-Eの重機による埋め戻し作業は終了。
 - 11.19 職員専門研修のため現場作業は中止する。
- 11.22 Ⅱ区-Wの機械掘削を北西から開始する。
 - 11.23 引き続き北西部の機械掘削と遺構検出作業、セクション図・遺構配置図等の測量を行う。
 - 11.24 重機は北西部の機械掘削が終了し、南西部に移る。並行して遺構検出作業を行う。
 - 11.25 西南部の機械掘削と、遺構検出作業、測量を行う。
 - 11.26 引き続き西南部の機械掘削と、遺構検出作業、測量を行う。
 - 11.29 北東部の機械掘削と、遺構検出作業、測量を行う。
 - 11.30 引き続き北東部の機械掘削と、遺構検出作業、測量を行う。
 - 12.1 重機は北東部の機械掘削が終了し、南東部に移る。並行して遺構検出作業と測量を行う。
 - 12.2 南東部の機械掘削と、遺構検出作業、測量を行う。
 - 12.3 Ⅱ区-Wの機械掘削が終了。東部の遺構検出作業と測量を行う。
 - 12.6 調査区内の排水作業後、北東部の遺構精査と測量を行う。
 - 12.7 遺構検出写真撮影に備え、調査区内の清掃を行う。
 - 12.8 引き続き調査区内の清掃を行う。午後から遺構検出写真撮影を行う。
 - 12.9 遺構検出写真撮影後、調査区北西部から遺構調査を開始する。



図2-5 作業風景3

1. 調査の経過 (2) 調査日誌抄

- 12.10 引き続き北西部の遺構調査を行う。
- 12.13 引き続き北西部の遺構調査を行う。
- 12.14 引き続き北西部の遺構調査を行う。
- 12.15 引き続き北西部の遺構調査を行う。
- 12.16 北西部から南西部に移り、遺構調査を行う。
- 12.17 調査区西部の遺構調査を行う。
- 12.20 引き続き調査区西部の遺構調査を行う。
- 12.21 引き続き調査区西部の遺構調査を行う。
- 12.22 引き続き調査区西部の遺構調査を行う。
- 12.24 引き続き調査区西部の遺構調査を行う。
- 1.5 引き続きⅡ区-W西部の遺構調査を行う。
- 1.6 調査開始直後からの降雨のため、午前中で作業を中止する。
- 1.7 西半部の遺構調査がほぼ終了し、北東部の遺構調査を行う。セクション図および出土状態図の実測等を行う。
- 1.11 北東部の遺構調査を行う。
- 1.12 引き続き北東部の遺構調査を行う。
- 1.13 引き続き北東部の遺構調査を行う。
- 1.14 引き続き北東部の遺構調査を行う。
- 1.17 引き続き北東部の遺構調査を行う。
- 1.18 北東部の遺構調査と、記者発表・現地説明会に備えて清掃を行う。
- 1.19 引き続き清掃を行う。
- 1.20 記者発表を行う。
- 1.21 引き続き清掃作業と、北東部の遺構調査を行う。
- 1.22 現地説明会を開催する。
- 1.24 調査区北半部の遺構の再精査を行う。
- 1.25 遺構調査を行う。
- 1.26 引き続き遺構調査を行う。
- 1.27 北東部・南西部の遺構の再精査と、遺構調査を行う。
- 1.28 引き続き遺構調査を行う。
- 1.31 引き続き遺構調査と、セクション図および遺構完掘平面図の実測を行う。
- 2.1 降雪のため現場作業を中止する。
- 2.2 降雪のため現場作業を中止する。
- 2.3 調査区内の除雪作業と、中央バンクの人力掘削、遺構調査を行う。
- 2.4 引き続き中央バンクの人力掘削と、遺構調査を行う。
- 2.7 引き続き遺構調査を行う。午後から降雨のため現場作業を中止する。
- 2.8 降雨のため現場作業を中止する。午後から遺構完掘平面図の実測を行う。
- 2.9 遺構調査と、航空写真測量に備えて西から清掃を行う。
- 2.10 引き続き清掃を行う。一部遺構調査を行う。
- 2.13 航空写真測量に備えて、引き続き清掃を行う。
- 2.14 Ⅱ区-Wの遺構完掘写真と航空写真測量を行う。撮影後に発掘道具の後片付け、リース機材の返却を行う。遺構完掘平面図のレベル測量を行う。
- 2.15 遺構完掘平面図の実測と、レベル測量を行う。
- 2.16 引き続き遺構完掘平面図の実測と、レベル測量を行う。
- 2.17 Ⅱ区-Wの下層確認調査を行う。
- 2.21 調査区内の排水作業後、西から重機による埋め戻し作業を行う。
- 2.22 引き続き重機による埋め戻し作業を行う。
- 2.23 引き続き重機による埋め戻し作業を行う。
- 2.24 引き続き重機による埋め戻し作業を行う。
- 2.25 調査区内の排水作業を行う。
- 2.26 重機による埋め戻し作業を行う。
- 2.28 Ⅱ区-Wの重機による埋め戻し作業が終了する。



図2-6 作業風景4

2. 調査の概要

(1) I区

平成16年度調査対象地の東端部の東西約140m、南北約58mの調査区である。調査区が東西に長いことから、東半(I区-E)と西半(I区-W)に分け、重機の進入路の関係で最初にI区-Wから調査を開始した。最終的な調査総面積は下層確認調査も含め約6,048㎡であった。なお、本書では特に断りのない限り、東半と西半との区別は行わずまとめて報告している。

確認された遺構は弥生時代中期末から後期初め、奈良時代後半から平安時代前半、室町時代前半をそれぞれ中心としており、その分布が遺跡の成り立ちにより分れていた。

すなわちI区では、遺跡立地の成り立ちの様相が異なり、検出された遺構もそれに照応するかの如く、時代が分れた。具体的には調査区中央部では細礫から大礫の堆積が顕著な帯状の高まり、凸地⁽¹⁾に古代の遺構、高まりが下降し、その最上層に粘土質シルトないしシルトが堆積した東部では弥生時代の遺構、同じく高まりが下降し、その最上層にシルト質砂ないし細粒砂の堆積した西部では中世の遺構となっていた。その成り立ちについては第三章自然科学分析で詳述しているように、遺構検出面以下は扇状地末端部でよくみられる網状流路の河道堆積物で構成される。調査区中央部の凸地は掃流による一方向流により形成され、調査区西部の凹地⁽²⁾は洪水流による砂の充填により形成され、調査区東部の凹地はさらに洪水が溢れ水溜まり状を呈した環境、帯水域で泥が堆積して形成されたものと判断される。このように遺跡の立地の成り立ちは大きく三つに分かれ、よって層序についても東部、中央部、西部に分けて記している。

これら堆積層から出土した遺物も大きく三つの時代に分れるものの、遺構が確認されていない7世紀代の遺物も僅かではあるが出土する。西野々遺跡では、6世紀末から7世紀にかけての遺構がⅢ区を中心にいくつか確認されており、本地区での出土はそれに起因するものであろう。

遺物包含層とみられる古土壌は東部の第Ⅲ層(古代から中世)と第Ⅳ層(弥生時代)、西部の第Ⅲ層(古代から中世)であり、東部の第Ⅲ層と西部の第Ⅲ層の起因は同じものと考えられる。なお、東部で確認した第Ⅳ層からは復元図示できる遺物がみられなかったのは、後世の削平の影響と遺構密度の低さによるものであろう。一方、表土層(第Ⅰ層)からは各時代の遺物が比較的多く出土していた。これは前述のとおり中世以降の耕作地の形成およびその維持・管理を主とする人為的活動により形成されたことによるものと考えられる。特に、中央部では一部床土は認められるものの基本的に表土層直下から遺構が検出され、遺構の埋土となる古土壌が削平されていることから土地の整地等が行われたことが窺える。なお、遺構からの出土を含めた出土遺物の総点数は約6,650点を数える。

① 層序

前述のとおり、東部、中央部、西部では遺構検出面の堆積状態が異なっており、それぞれに分けて記している。これは堆積時期が異なっていることによるもので、遺構検出面以下の堆積は網状流路の河道堆積物で構成されていることには違いがない。

i 東部(図2-7)

東部で認められた基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層 砂混じり黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層

2. 調査の概要 (1) I区

第Ⅱ層 砂混じり灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト層

第Ⅲ層 砂混じりオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層(古代から中世の遺物包含層)

第Ⅳ層 黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土層(弥生時代の遺物包含層)

第Ⅴ層 明黄褐色(2.5Y7/6)シルト質粘土層

層位中、遺物包含層となる古土壌は第Ⅲ層(古代から中世)と第Ⅳ層(弥生時代)であり、古代から中世の遺構の検出面は第Ⅳ層上面となるが、図2-7のとおり第Ⅳ層が削平され第Ⅴ層上面が検出面となる箇所もあり、かつ第Ⅳ層の遺存状態が悪かったため調査では第Ⅴ層上面で遺構検出を行っている。また、弥生時代の遺構の検出面は第Ⅴ層上面であった。

第Ⅰ層は現代の耕作土層で、厚さ20~25cmを測る。調査前までは水田であった。

第Ⅱ層は旧耕作土層で、厚さ15~18cmを測る。近世以降の水田ではないかとみられる。

第Ⅲ層は古代から中世の所産とみられる遺物包含層で、厚さ15~20cmを測る。

第Ⅳ層は弥生時代の遺物包含層であるが、削平の影響が顕著で遺存状態の良い部分で厚さ15cm残存するものの全く残存していない部分もあった。平均的には厚さ5cm程度の遺存状態であった。

第Ⅴ層は自然堆積層で、厚さ15cm以上を測る。形成過程については前述のとおりである。

下層については、下層確認調査で水平葉理をなす中粒砂から極粗粒砂で構成された砂、葉理をなす細粒中礫混じりの極粗粒砂から細礫で構成された砂礫の堆積が認められた。

また、第Ⅳ層中を中心に生物擾乱の痕跡が散見された。

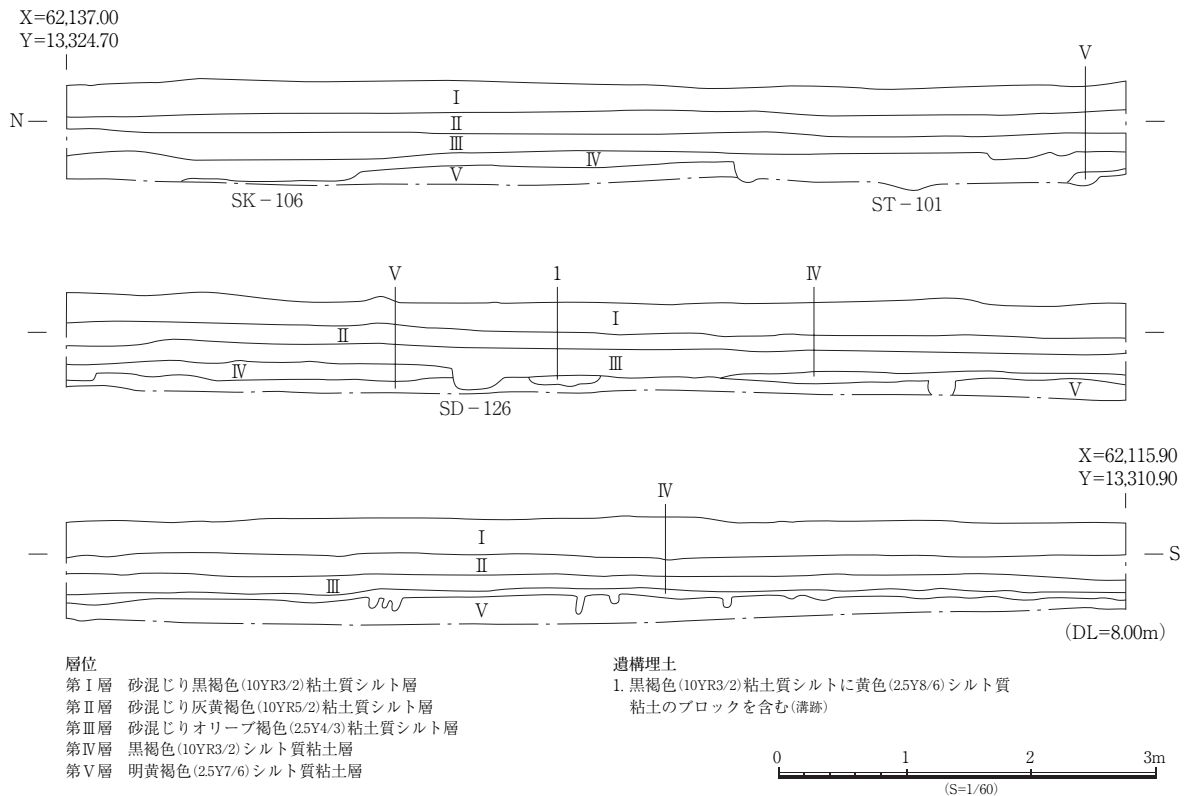


図2-7 I区東部東壁セクション図

ii 中央部 (図2-8)

中央部で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第I層 粗粒中礫をわずかに含む砂混じり灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト層
- 第II層 極粗粒砂・中礫をわずかに含む褐色 (10YR4/6) 砂質シルト層
- 第III層 灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂層
- 第IV層 灰黄褐色 (10YR4/2) 礫層
- 第V層 中粒砂混じり灰黄褐色 (10YR4/2) 礫層
- 第VI層 礫混じり暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗粒砂層

層位中、遺物包含層は前述のとおり削平され確認することはできず、遺構が検出されたのは表土層直下、第III層上面であった。

第I層は現代の耕作土層で、厚さ15～28cmを測る。調査前までは水田であり、下層に砂礫層が堆積することからそれらが混じり込んでいる。

第II層は第I層に伴う床土層で、厚さ2～4cmを測り、形成されていない部分もみられた。第I層同様下層の砂礫層が混じり込んでいた。

第III層以下は自然堆積層で、前述のとおり掃流による一方向流により形成され葉理をなす砂礫層であり、粒径の異なる砂礫層が累重する。丁度、この部分が帯状をなす砂礫層の高まりを構成する堆積相をなす部分である。

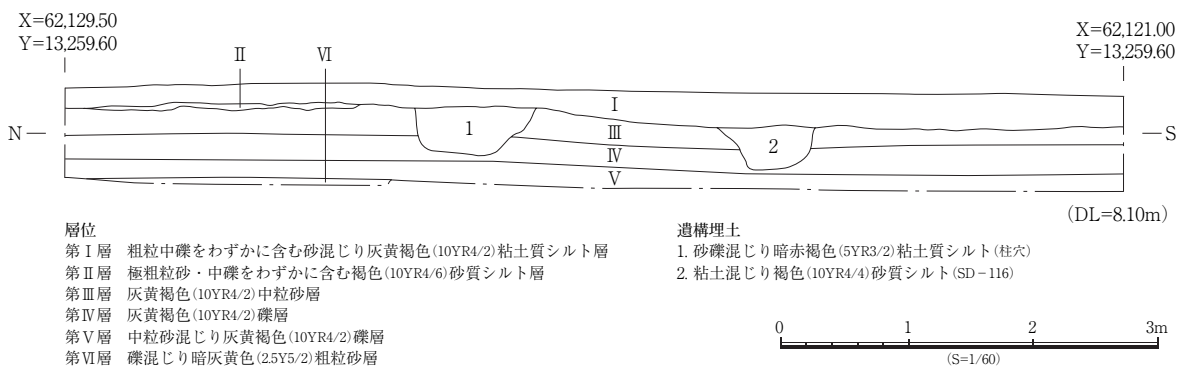


図2-8 I区中央部東壁セクション図

iii 西部 (図2-9)

西部で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第I層 極粗粒中礫を含む灰色 (5Y6/1) 砂質シルト層
- 第II層 極粗粒中礫を含むオリーブ黄色 (5Y6/3) 砂質シルト層
- 第III層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質砂層 (中世の遺物包含層)
- 第IV層 灰白色 (7.5Y7/2) 細粒砂層
- 第V層 暗赤褐色 (5YR5/6) ～暗オリーブ灰色 (5GY7/1) 極細粒～細粒砂層
- 第VI層 粘土混じり灰白色 (10YR7/1) 細粒砂層
- 第VII層 赤褐色 (2.5YR4/6) 粗粒砂層
- 第VIII層 暗赤褐色 (5YR3/2) 中粒～粗粒砂層

2. 調査の概要 (1) I区

第IX層 暗赤褐色(2.5YR3/2)～灰白色(7.5Y7/1)細粒～中粒砂層

第X層 暗赤褐色(10YR3/2)砂礫層

層位中, 遺物包含層は第III層であり, 遺構検出面は第IV層上面である。

第I層は現代の耕作土層で, 厚さ15～22cmを測る。調査前までは水田であり, 下部に鉄分の沈殿がみられる。

第II層は旧耕作土層で, 厚さ16～22cmを測る。近世以降の水田ではないかとみられる。

第III層は中世の所産と考えられる遺物包含層で古土壌となっている。東部の第III層に対応する。

第IV層は自然堆積層で, 中世の遺構検出面となっている。また, 本層以下の堆積相については前述したとおりで, 水平葉理をなす中粒砂から極粗粒砂で構成された砂, 葉理をなす細粒中礫混じりの極粗粒砂から細礫で構成された砂礫の堆積と累重する。

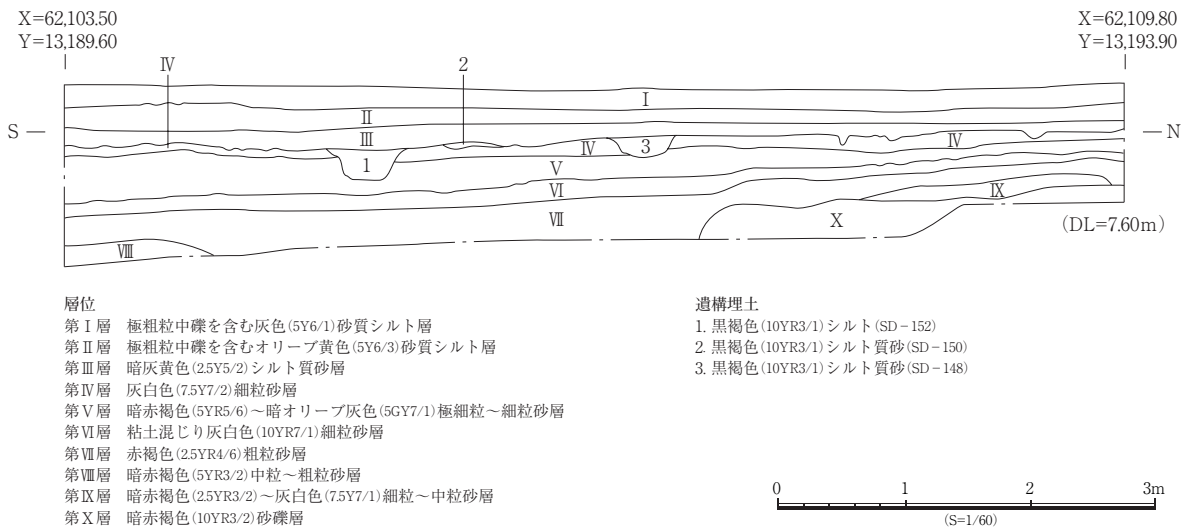


図2-9 I区西部西壁セクション図

② 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

弥生土器(図2-10 1001～1004)

いずれも甕で, 1001～1003が口縁部, 1004が肩部の一部が残存し, 胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

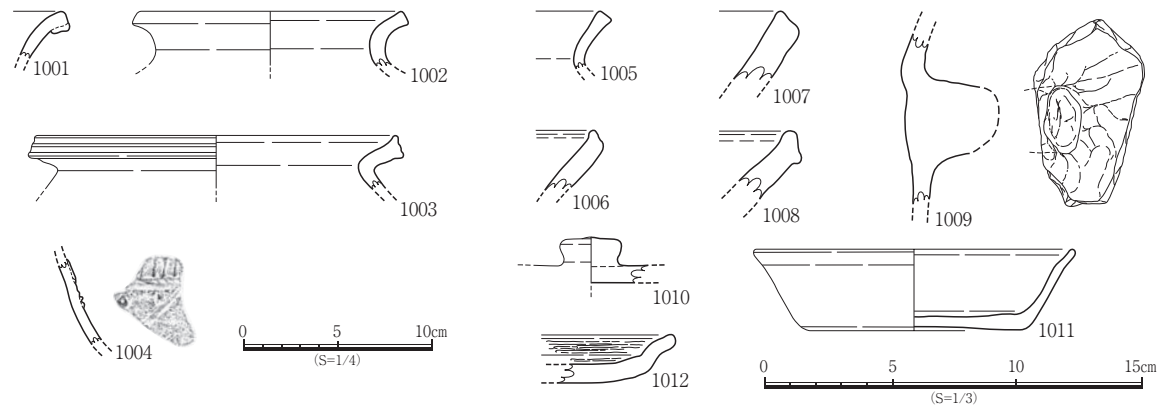


図2-10 I区第I層出土遺物実測図1

土師器(図2-10 1005~1012)

いずれも古代の土師器で、杯蓋・杯身についてはヘラ磨きを図示しなければ、須恵器と識別し難いものである。1005~1008は甕の口縁部の破片で、器壁の厚さや口唇部の形態は異なるものの胎土には極細粒砂から中粒砂を多く含む。1009は把手の一部が残存するもので、甌の可能性もある。把手の断面は楕円形をなし、ヨコ方向に付くものとみられる。胎土には粗粒砂を中心に極細粒砂から中粒砂を多く含む。

1010は扁平な擬宝珠形様のつまみが付く杯蓋で天井部のごく一部が残存する。胎土には粗粒砂をわずかに含む。1011は杯で、口縁部をわずかに内側に折り曲げる。器面はヨコナデ調整とみられる。成形は粘土紐巻き上げで、底部の切り離しもヘラ切りとなっている。ロクロは使用していないものの形態的にみて土師質土器への移行期のものと考えられる。胎土は精良で、中粒砂をわずかに含む。1012は皿で、ほぼ全面にヨコ方向の丁寧なヘラ磨きが施される。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図2-11 1013~1051)

1013~1023は杯蓋で、1013~1016にはつまみが残る。1013と1014のつまみは扁平な擬宝珠形様、1015と1016は扁平で頂部が平らとなる。つまみの大きさは、1013が径1.8cm、高さ0.7cm、1014が径2.3cm、高さ1.0cm、1015が径2.2cm、高さ0.9cm、1016が径2.7cm、高さ0.6cmをそれぞれ測る。胎土には、1013・1015・1016が白色細粒砂から中粒砂をわずかに含み、1014が白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。また、1014の天井部内面にはヘラ記号ではないかとみられるヘラ痕跡が残る。1017~1023は口縁部の破片で、一部天井部が残るものもみられる。形態的には口縁部が平らな天井部から下外方に屈曲するものと天井部から緩やかにカーブするものがみられる。1018と1023が胎土に白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む以外は精良で白色細粒砂をわずかに含んでいる。1018の天井部内面には「キ」状のヘラ記号が残る。

1024~1031は杯身で、外底面には高台が付く。1024~1030は、回転ナデ調整で器面を調整した上で、内底面にナデ調整を加え、底部の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ナデ調整で整え、最後に底部外面端部に高さ0.5cm前後の小さな高台を付け、周囲をヨコナデ調整している。胎土には、1027が白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む以外いずれも白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。1031は大型で、底部外端部には回転ヘラ削りの痕跡が残る。高台は高さ0.8cmと比較的高く、ハの字状に開く。調整は他と同じで、胎土には白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1032は高台の付かない杯で、体部の立ち上がりが緩やかで、蓋は伴わない。底部の切り離しは回転ヘラ切りであるが未調整である。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

1033は高杯の脚台部である。胎土には白色細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1034は壺の蓋とみられる破片で、口縁部は平らな天井部から大きく屈曲する。胎土には白色中粒砂をわずかに含む。

1035~1038は壺の口縁部である。胎土には、1035が白色中粒砂から粗粒砂を多く含む以外精良で白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。1039・1040は長頸壺の頸部の破片で、胎土には、1039が白色中粒砂を中心に白色細粒砂から粗粒砂をわずかに含み、1040が白色細粒砂から極

2. 調査の概要 (1) I 区

粗粒砂を比較的多く含む。1041・1042は台付壺で、ハの字状に開く脚台部が残存する。その高さは、1041が1.7cm、1042が1.5cmを測り、端部は外傾する凹面をなす。胎土はいずれも精良で、白色中粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。1043は壺の底部とみられるもので、内面には自然釉がかかり、ハダ荒れがみられる。胎土は精良で、白色中粒砂を中心に白色細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1044～1046は甕の口縁部で、調整はいずれも回転ナデ調整である。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を多く含む。1047・1048は甕の頸部から肩部にかけての破片で、外面には平行のタタキ目、内面には同心円文のタタキ目が残る。いずれも胎土は比較的精良で、白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。1049は甕の胴部の破片で、外面には布目状のタタキ目、内面には同心円文のタタキ目が残る。胎土には白色中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1050は鉢の底部の破片で、内面には回転カキ目調整が施される。胎土には白色粗粒砂をわずかに含む。

1051は器台の口縁部とみられるもので、内湾することから器台としたが甕の可能性もある。外面には小さな凸帯とその下に単位3本以上の櫛描波状文が残る。胎土は比較的精良で、中粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-12 1052～1070)

1052～1063は杯で、口縁部を欠く1052～1059では、摩耗するものもみられるが、いずれも回転ナデ調整で器面を調整した上で、内底面にナデ調整を加え、底部を回転糸切りで切り離している。形態的には体部が上外方に上がるもの(1052・1053)と斜め上外方に上がるもの(1054～1059)がみられる。前者の成形は粘土紐巻き上げロクロ成形(A技法)、後者にはA技法とB技法(水挽成形)がみられる。1057と1059の内面には水挽の際のロクロ目が明瞭に残る。胎土はいずれも精良で、極細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1060と1061は口縁部が残るもので、成形はいずれもA技法で、胎土は精良で細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。1062と1063は高高台となるもので、前者は底部に体部を接合して(C技法)成形する。同じ成形技法で成形した小皿が西野々遺跡のⅢ区⁽³⁾から出土している。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。後者はA技法で成形されたものとみられ、底部の切り離しは回転糸切りによる。

1064～1067は椀で、丸味のある底部から体部が内湾気味に立ち上がる。1064と1065には断面逆三角形の小さな高台が付く。1064は胎土に中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、1065の胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1066は前二者より一回り大きく、体部外面下端に回転ヘラ削り調整を施した上で、外底面に断面逆台形の高さ0.8cmの高台を付ける。内面は回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。1067はさらに大型の椀で、幅約1.5cm、高さ約0.8cmの高台が付いていたものとみられる。胎土は精良で、細粒砂を比較的多く含む。

1068～1070は小皿で、1070は器高2.0cmと大きい。成形は、1068と1069がB技法、1070がA技法である。胎土はいずれも精良で細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

東播系須恵器(図2-12 1071)

片口鉢で、上下に肥厚した口縁部の一部が残る、器面には重ね焼の痕跡がみられる。胎土には細粒砂から中粒砂を多く含む。

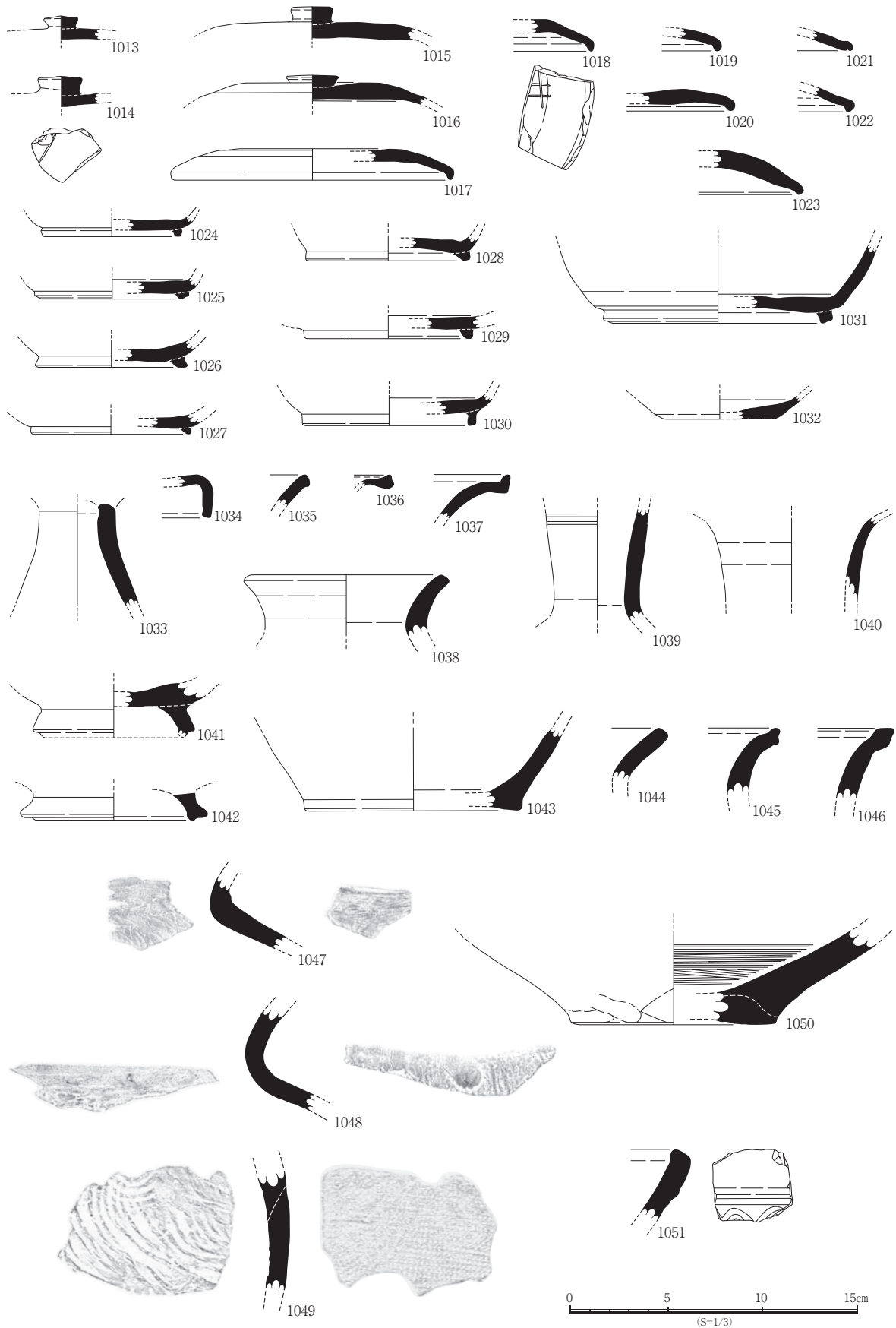


図2-11 I区第I層出土遺物実測図2

2. 調査の概要 (1) I 区

瓦質土器(図2-12 1072~1077)

1072は鍋で、胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。

1073~1077は羽釜である。1073~1076は口縁部と鏝の細片で、1075の胎土が精良である以外、いずれも細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。1077は唯一上半が復元できた個体で、内傾する口縁部外面には断面台形の鏝が付く。器面は摩耗するが、鏝下端には指押えの痕が残る。胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。

備前焼(図2-12 1078~1082)

1078は甕の底部とみられるもので、底部外面には回転ヘラ削り調整を施す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

1079~1082は播鉢である。1079は口縁内面上端に条線(スリメ)端が残り、口縁部内面から外面に施釉する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1080は口縁内面上端の条線(スリメ)端をナデ消しており、関西系の可能性も考えられる。胎土には中粒砂をわずかに含む。1081・1082は底部の破片である。胎土はいずれも精良で、1081は極粗粒砂をわずかに含み、1082は細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

白磁(図2-12 1083~1085)

いずれも碗で、1083と1084は玉縁口縁の破片である。胎土はいずれも精良で、黒色粒を比較的多く含む。1085は削り出し高台の底部約1/2が残存する。胎土は精良で、黒色粒をわずかに含む。

青磁(図2-12 1086)

香炉の口縁部ではないかとみられるもので、口縁部がヨコ方向に肥厚され、体部は内湾気味に下降するとみられる。胎土には黒色粒を多く含む。

唐津焼(図2-13 1087・1088)

1087はかえりのある蓋で、天井部に刷毛目を施す。胎土は精良である。1088は碗で、見込には胎土目痕が2ヵ所に残る。底部は削り出し高台で、体部外面下半に回転ヘラ削り調整を施す。口縁部から見込には施釉され、全面に貫入が入る。胎土には粗粒砂をわずかに含む。

肥前系磁器(図2-13 1089~1091)

1089は紅皿で、胎土には黒色粒をわずかに含む。1090・1091は碗で、1090の外面には3条の界線、1091の口縁部外面には笹葉文が施される。胎土はいずれも精良である。

瀬戸・美濃系(図2-13 1092)

碗で、底部は削り出し高台で、見込に五弁花のコンニャク判がみられる。胎土は精良である。

京焼系陶器(図2-13 1093)

碗で、底部は削り出し高台となる。胎土は精良である。

近世陶器(図2-13 1094~1096)

1094は皿で、口縁部と体部の間には接合痕がみられる。胎土は精良で、中粒砂をわずかに含む。1095は碗で、体部下端から見込に黄色釉を施釉し、見込は蛇の目状の釉ハギを行う。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂をわずかに含む。1096も碗とみられる個体で、全面に灰釉を施釉する。胎土は精良で、黒色粒をわずかに含む。

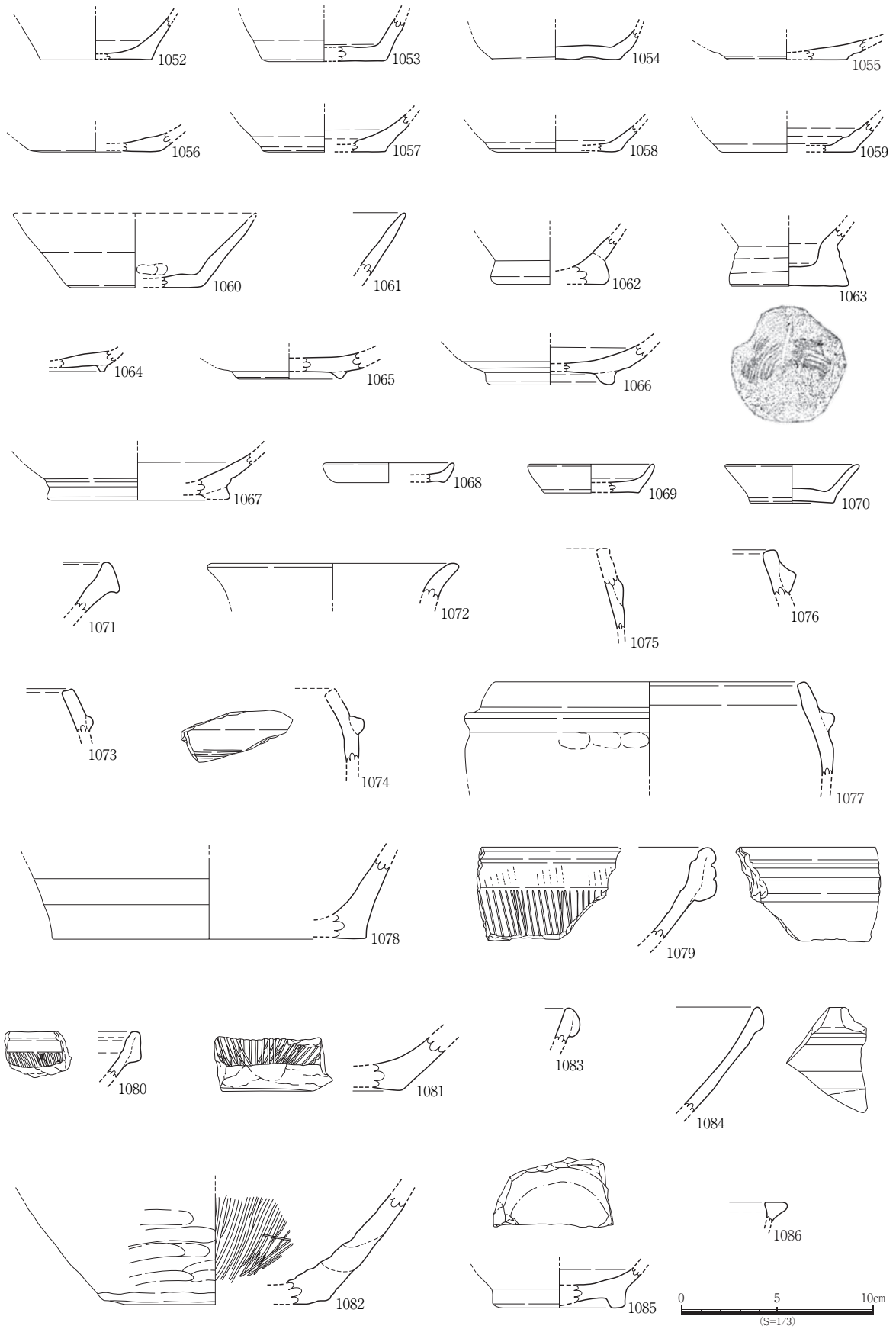


図2-12 I区第I層出土遺物実測図3

近世以降磁器(図2-13 1097~1102)

1097・1098は型作りの菊花皿で、全面に透明釉を施釉し、畳付を釉ハギする。胎土は精良である。1098は平面形が菱形を呈し、見込に草花文が施される。瀬戸・美濃系の打型皿の可能性も考えられる。1099は端反り碗で、全面に透明釉を施釉する。胎土は精良で、黒色粒をわずかに含む。1100は底部と体部の一部が残存する碗で、体部外面には回転ヘラ削り調整の後に体部外面から見込にかけて灰釉を施釉する。胎土は精良である。1101は丸碗で、全面に青磁釉を施釉し、畳付を釉ハギする。胎土は精良で、黒色粒を比較的多く含む。1102は碗で、口縁部外面から内面にかけて青白磁釉を施釉し、見込は蛇の目状に釉ハギを行う。胎土は精良で、黒色粒を比較的多く含む。

土製品(図2-13 1103)

円筒形の土錘で、表面にハケ状の圧痕が残る。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

石製品(図2-13 1104・1105)

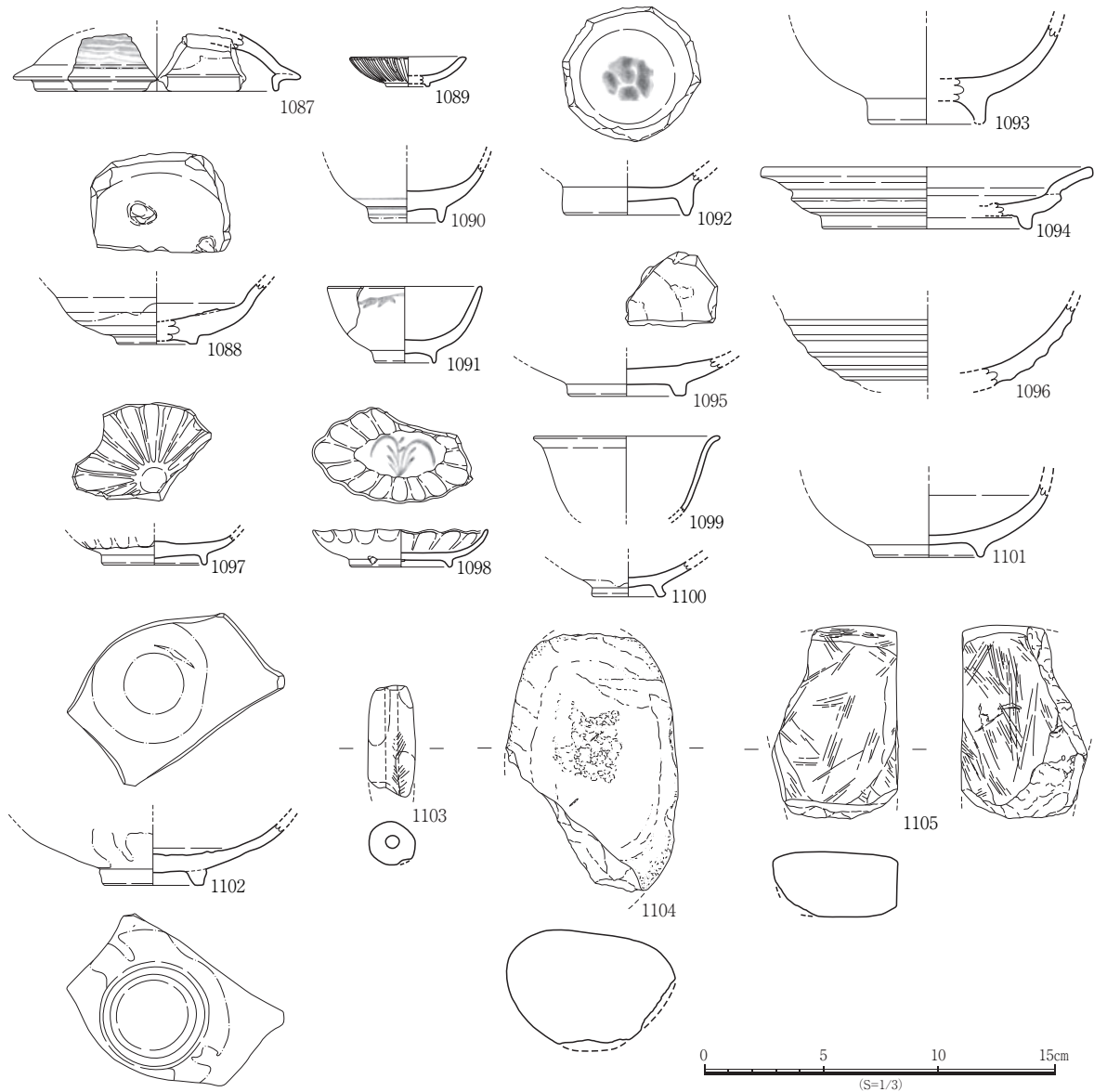


図2-13 I区第I層出土遺物実測図4

1104は叩石で、片面にわずかに敲打痕が残る。1105は砥石で、3面に使用痕が残る。

第III層出土遺物

弥生土器(図2-14 1106)

壺の底部とみられるもので、外底面にはハケ状の圧痕、底部外面にはタタキの後にハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図2-14 1107~1124)

1107・1108はかえりのある杯蓋である。前者には径1.7cm、高さ1.2cmの宝珠形のつまみが付き、天井部外面にヘラ記号が残る。かえりは貼り付けによる。胎土は精良で、白色中粒砂をわずかに含む。後者は口縁部の一部が残存するもので、天井部外面には回転ヘラ削り調整を施す。胎土は精良で、白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1109は口縁部のごく一部が残存する扁平な杯蓋である。胎土は精良で、白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1110~1113は杯身である。1110は口縁部の破片で、内面にハケ調整の痕跡がみられる。胎土は精良で、白色中粒砂をわずかに含む。1111~1113は底部の破片である。いずれも底部外端部に高さ約0.5cmの小さな高台が付く。胎土はいずれも精良で、白色細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1114は椀の底部とみられるもので、外面は回転ヘラ削り調整の後にナデ調整を加える。胎土は精良で、白色中粒砂をわずかに含む。

1115と1116は高杯で、前者は杯部と脚部の接合部が残存する。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。後者は脚柱部の破片である。胎土は精良で、白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1117は長頸壺の口縁部とみられる破片で、端部は内傾する凹面をなす。胎土は精良で、白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1118~1121は甕である。1118は頸部から肩部の破片で、肩部外面には回転カキ目調整の痕跡が残る。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を多く含む。1119~1121は口縁部が残存するもので、1119の口縁部は外反し、端部は外傾する凹面をなす。1120・1121の口縁部は外傾し、端部は、前者が外傾する平面、後者が内傾する平面となる。胎土は、1119が精良で粗粒砂をわずかに含み、1120・1121が中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1122は体部の細片で、鉢の一部ではないかとみられるが判然としない。外面には段状をなす断面三角形の凸帯が付く。胎土は精良で、粗粒砂をわずかに含む。1123は鉢の口縁部ではないかとみられるもので、肥厚した口縁外端に2条の凹線が巡る。胎土は精良で、中粒砂をわずかに含む。

1124は器台ではないかとみられるもので、内湾することから器台としたが甕の口縁部の可能性もある。外面には2条の凹線が施される。胎土には中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-14 1125~1129)

1125~1127は杯で、胎土はいずれも精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1125の内面には水挽成形時のロクロ目が明瞭に残る。

1128は比較的深い小皿で、調整も比較的丁寧である。胎土は精良で、細粒砂をわずかに含む。

1129は羽釜で、口縁部下端には断面三角形の鐔が付き、鐔頂部以下に煤が付着する。胎土には細粒

2. 調査の概要 (1) I 区

砂から粗粒砂を多量に含む。

東播系須恵器(図2-14 1130・1131)

いずれも片口鉢で、1130は口縁部の破片で、胎土には中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。1131は底部から体部の破片で、外底面に平行線状の圧痕がみられる。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

瓦質土器(図2-14 1132~1136)

いずれも羽釜で、口縁部と鏝が残存する。1136の鏝が口縁部と同時に作り出す以外すべて断面三角形ないし台形状の粘土紐を貼り付け、鏝とする。胎土にはいずれも細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

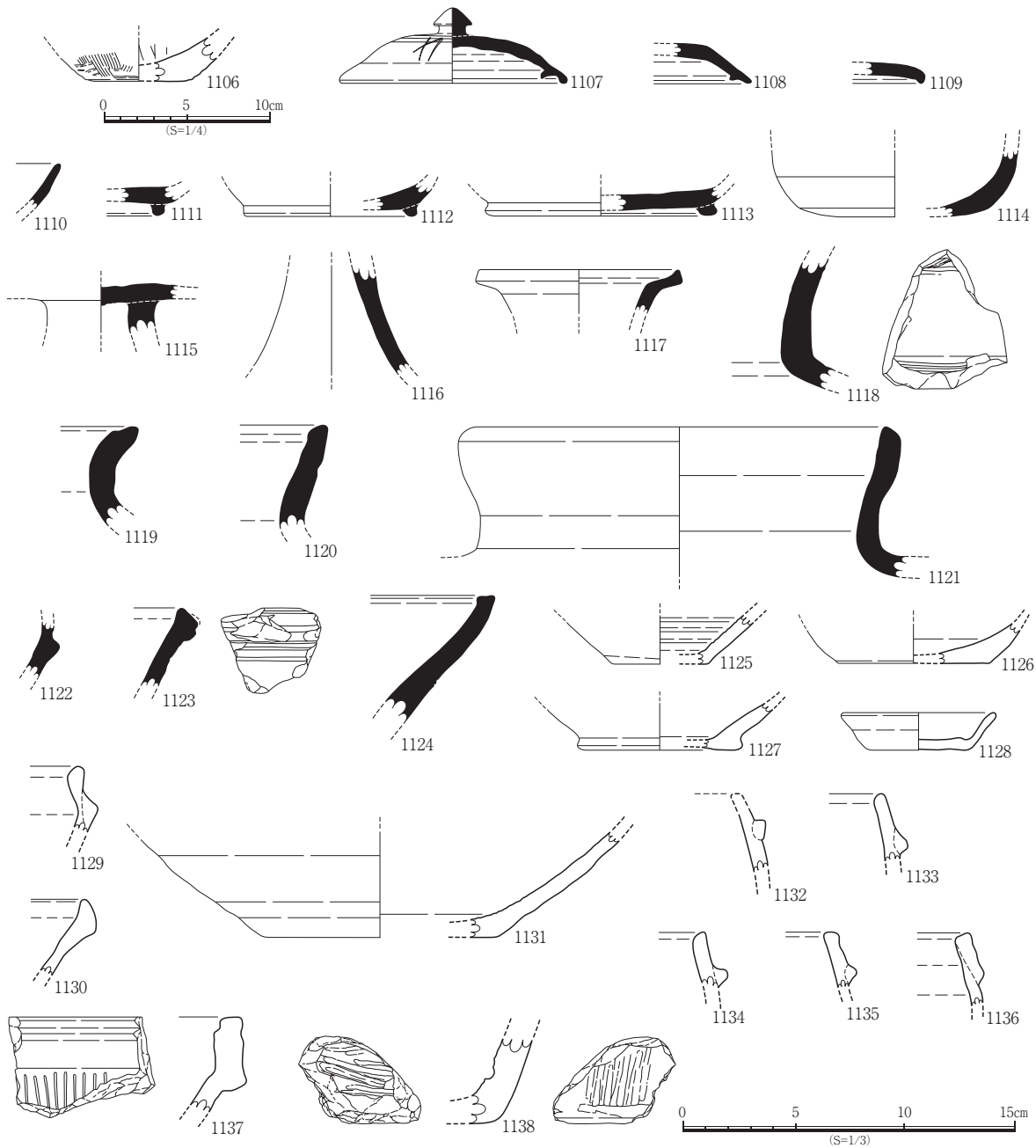


図2-14 I区第Ⅲ層出土遺物実測図

備前焼(図2-14 1137)

播鉢で、内面には6本単位の条線が全面に施されていたものとみられる。口縁内面上端には条線(スリメ)端はみられない。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図2-14 1138)

石鍋で、底部の一部が残存する。外底面以外に鑿痕跡が明瞭に残る。石材は滑石である。

(2) II区

本調査区は西野々遺跡の中央部にあたり、I区の西隣に位置する。土置き場の関係で、調査区を東西に分けて調査を行った。調査前は水田として利用されていたため、一見して平坦な地形を呈しているが、調査の結果、旧地形は現在よりも起伏が激しく、調査区の東西では地形の様相が全く異なることが明らかとなった。II区東半の中央には、調査区を南北に縦断する流路状の窪地を確認した。この流路状の堆積は幅約30m、深さは約0.9mを測り、U字状に落ち込むと考えられる。窪地部分には黒～黒褐色のシルト質粘土が堆積しており、水流があったことを示すような砂層の堆積はみられない。窪地への落ち込み部分では、弥生時代の遺構・遺物が、上層では古代の遺物が認められる。また放射性炭素年代測定では、窪地の基底面の層で 2790 ± 40 yrsBPの値が出ており、縄文時代晩期から古代にかけて静穏な状態で堆積したものとみられる。流路状の窪地の上面には古代の遺構がみられることから、比較的安定するのは古代になってからであろう。また古代から現代に至る間も、東半は居住域として適さなかったようで、検出遺構は溝跡が主体であった。東部では、弥生時代、古代から中世にかけての包含層を確認した。

II区西半では様相が一変し、地形は南端部に向かって若干落ち込むものの、調査区の標高は概ね7.6～7.8mと平坦である。遺構も古代から中世の建物跡や柵列、土坑、溝跡などを検出しており、古代から中世にかけては居住域として利用されていたと考えられ、当該期の包含層を確認した。

調査は平成16年5月17日～平成17年2月28日まで行われ、実働154日、調査面積は6,396㎡(延べ面積7,848㎡)であった。

① 層序

前述したとおり、II区は西部が比較的フラットなのに対し、東部は流路状の窪地が調査区東半の中央部を縦断する地形である。そのため堆積の状況も東西で異なり、基本層序が一致しない部分がある。第I～IV層までは、土色を若干変えながらも調査区の東西で共通してみられる層序である。第V層以下の堆積は東西で異なる。またII区東部においても、流路状の窪地以外については西部の基本層序とほぼ同じである。全体的に第I～IV層までの比較的浅い層では、生物擾乱の痕跡が認められた。

以下、II区東部と西部で、基本層序を分けて述べていく。

i 東部

II区東部で認められた基本層序は以下のとおりである。

第I層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト層

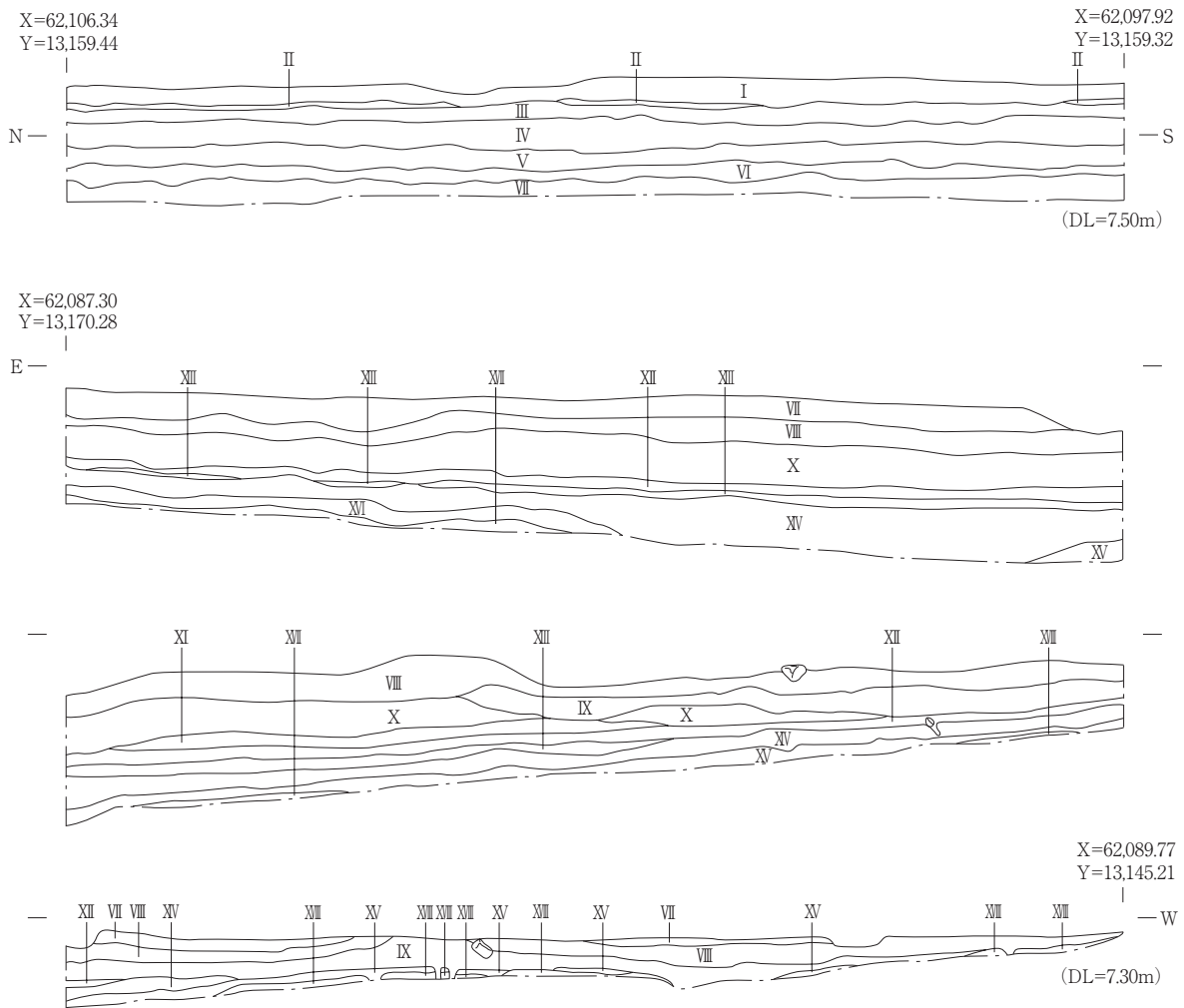
第II層 極細粒砂、マンガンを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト層

第III層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/1～3/2)粘土質シルト層(中世の包含層)

第IV層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2～3/2)粘土質シルト層(古代から中世の包含層)

2. 調査の概要 (2) II区

- 第V層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト層(古代の包含層)
- 第VI層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト層(古代の包含層)
- 第VII層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土層
- 第VIII層 黒色(10YR1.7/1~2/1)シルト質粘土層
- 第IX層 黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土層(弥生時代の包含層)
- 第X層 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土層
- 第XI層 黒色(10YR2/1)シルト質粘土層
- 第XII層 極細粒砂混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土層



層位

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 第I層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト層 | 第X層 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土層 |
| 第II層 極細粒砂,マンガン粒を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト層 | 第XI層 黒色(10YR2/1)シルト質粘土層 |
| 第III層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/1~3/2)粘土質シルト層 | 第XII層 極細粒砂混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土層 |
| 第IV層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2~3/2)粘土質シルト層 | 第XIII層 黒色(10YR2/1)シルト質粘土層 |
| 第V層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト層 | 第XIV層 細粒~中粒砂混じりの黒色(10YR1.7/1)シルト質粘土層 |
| 第VI層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト層 | 第XV層 細粒~中粒砂混じりの黒色(10YR2/1)シルト質粘土層 |
| 第VII層 極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土層 | 第XVI層 黒色(10YR2/1)シルト質粘土層 |
| 第VIII層 黒色(10YR1.7/1~2/1)シルト質粘土層 | 第XVII層 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層 |
| 第IX層 黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土層 | 第XVIII層 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト層 |

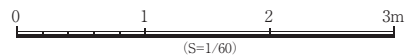


図2-15 II区東中央部セクション図

- 第XIII層 黒色 (10YR2/1)シルト質粘土層
- 第XIV層 細粒～中粒砂混じりの黒色 (10YR1.7/1)シルト質粘土層
- 第XV層 細粒～中粒砂混じりの黒色 (10YR2/1)シルト質粘土層
- 第XVI層 黒色 (10YR2/1)シルト質粘土層
- 第XVII層 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト層
- 第XVIII層 暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト層

層位中、遺物包含層となるのは第III層(中世)、第IV層(古代から中世)、第V・VI層(古代)、第IX層(弥生時代)である。本来ならば第III層の遺構検出面が第IV層となるが、III層とIV層との土色・土質の差異がほとんどなく平面での分層が困難のため、第V層上面で遺構検出を行った。また、前述したように、流路状の窪地部分以外の堆積は西部と同様であり、にぶい黄褐色シルト層(西部第V層)が遺構検出面となる。また流路状の窪地部分については、第V・VI層が古代、第IX層が弥生時代の遺物包含層とみられる。調査は東西の肩部から機械及び人力で掘削を進め、遺構検出を行った。その結果肩部から窪地へ下がっていくに従い、検出遺構の時期は古代から古墳、弥生時代と遡ることが明らかとなった。東部中央付近で弥生時代の遺構を検出したが、それより深い窪地部分では遺構は認められなかった。そのためこれ以下の高さでは遺構はないと判断し、第XVIII層以下については調査を行っていない。

第I層は現代の耕作土層で、調査前は水田であった。厚さ10～20cmを測る。

第II層は旧耕作土層とみられ、マンガング粒を多く含む。厚さ3～5cmと非常に薄い。

第III層は中世の包含層である。厚さ8～17cmを測る。

第IV層は古代から中世にかけての遺物包含層とみられる。厚さ12～25cmを測る。

第V層は古代の遺物包含層である。流路状の窪地部分にのみ堆積する層で、厚さ8～15cmを測る。

第VI層は古代の遺物包含層である。第V層との差異は若干土色が異なる点のみであり、同一層の可能性が高い。厚さ6～15cmを測る。

第VII・VIII層は自然堆積層とみられる。第VII層は厚さ約20cm、第VIII層は10～20cmを測る。

第IX層は弥生時代の遺物包含層とみられる。ただし遺物は、窪地への落ち込み部分からの出土がほとんどであり、古土壌化はしていない。厚さ6～20cmを測る。

第X～XVI層は弥生時代中期以前の自然堆積層とみられる。厚さは第X層が10～30cm、第XIV層が10～40cmを測る以外は、概ね10cm前後である。

また、下層確認調査の結果、II区西部の南では粘土～シルト質粘土と砂層が、互層に堆積しているのを確認した。最終的には標高約5.8mで礫層に到達する。

ii 西部

西部で認められた基本層序は、以下のとおりである。

- 第I層 灰黄褐色 (10YR4/2)シルト層
- 第II層 鉄分の沈着がみられる灰黄褐色 (10YR4/2)～にぶい黄褐色 (10YR4/3)シルト層
- 第III層 鉄分の沈着がみられる黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト層(中世の包含層)
- 第IV層 マングング粒を含む黒褐色 (10YR2/2～3/2) 粘土質シルト層(古代から中世の包含層)
- 第V層 にぶい黄褐色 (10YR4/3)シルト層

2. 調査の概要 (2) II区

第Ⅵ層 暗褐色(10YR3/3)シルト層

第Ⅶ層 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト層

層位中、遺物包含層となるのは第Ⅲ層(中世)、第Ⅳ層(古代から中世)である。第Ⅲ層と第Ⅳ層は、非常に近似した土色・土質で平面での分層が難しいため、第Ⅴ層または第Ⅵ層を遺構検出面とした。

第Ⅰ層は現代の耕作土で、調査前は水田であった。厚さは西端部で40cmを測る他は、概ね10～20cmである。

第Ⅱ層は旧耕作土で、鉄分の沈着がみられる。厚さは5cm以下と非常に薄く、地点によっては確認できない。

第Ⅲ層は中世の包含層である。厚さ5～15cmと比較的薄く、地点によっては堆積がみられない。

第Ⅳ層は古代から中世の包含層であり、約15～30cmを測る。

第Ⅴ層または第Ⅵ層が遺構検出面である。

下層確認調査では、遺構検出面のシルト層以下では、粒径の異なる砂層または礫層が堆積しているのを確認した。また、標高約6.0～6.7mで礫層を確認した。

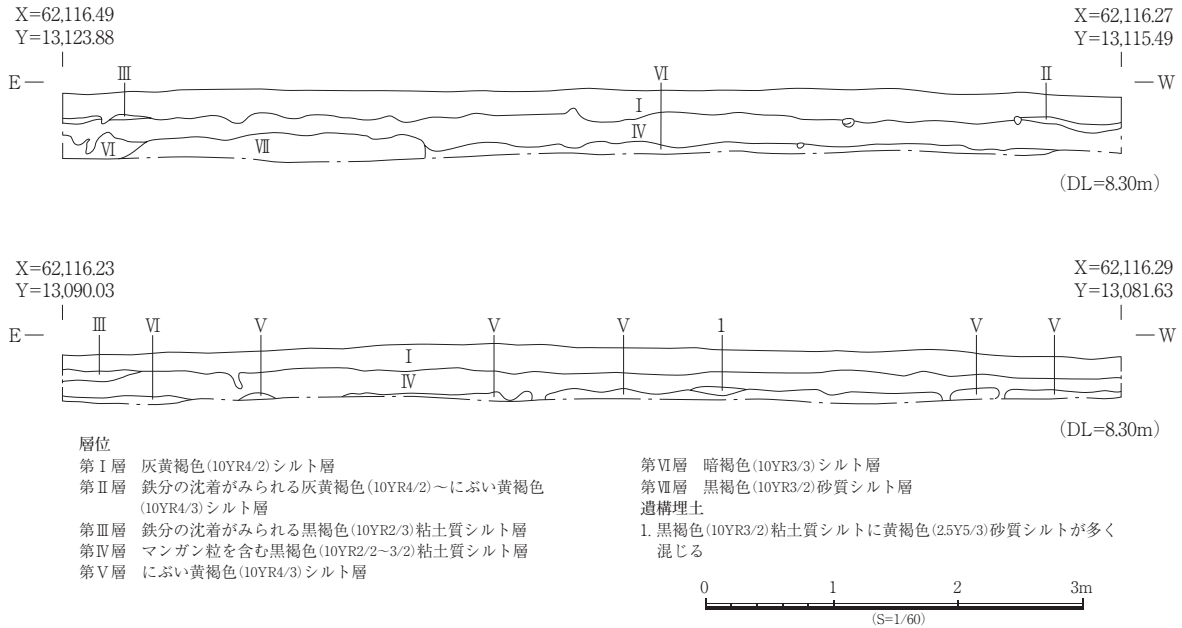


図2-16 II区西中央部セクション図

② 堆積層出土遺物

第Ⅱ層出土遺物

製塩土器(図2-17 2001)

2001は、口縁部から体部までの一部が残存する。火熱の影響を受けたとみられ、外面は剥落しており調整は不明である。口縁部内面はナゲ調整を行うが、指頭圧痕が残る。体部には布目圧痕が残る。胎土には極細粒砂から細粒中礫を多く含む。

土師質土器(図2-17 2002・2003)

2002・2003は杯で、いずれも底部の破片である。2002はロクロ水挽き成形、2003は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。底部の切り離しはいずれも回転糸切りによる。胎土は精良で、2002は極細粒

砂から細粒砂, 2003は極細粒砂から中粒砂を含む。いずれも器壁は摩耗が著しい。

瓦質土器(図2-17 2004・2005)

2004は鍋で, 内外面とも器壁の剥落が著しい。外面には指頭圧痕が多く残る。また, 外面口縁部から下胴部にかけてオコゲが付着している。胎土には極細粒砂から極細粒中礫を含む。

2005は釜で, 内外面とも器面の剥落が著しい。外面は鏝から胴部にかけて指頭圧痕が残る。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

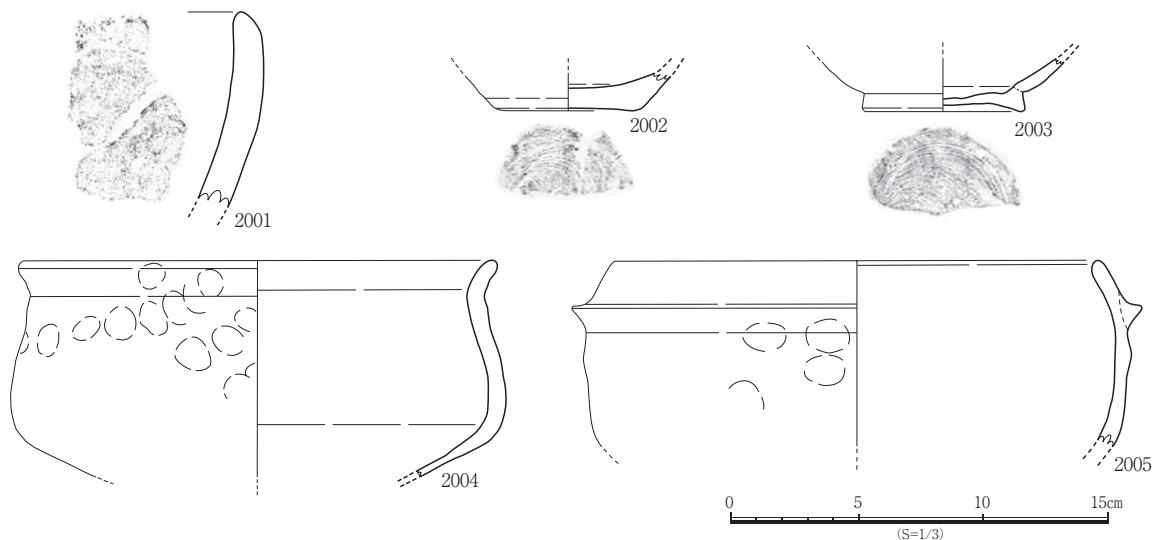


図2-17 II区第II層出土遺物実測図

第III層出土遺物

土師器(図2-18 2006~2008)

2006は杯で, 底部の破片である。器壁の摩耗が著しい。胎土は精良で, 極細粒砂から中粒砂を含む。

2007は甕で, 口縁部の破片である。胎土には極細粒砂から中粒砂を含む。

2008は羽釜で, 口縁部の破片である。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を含む。

須恵器(図2-18 2009~2017)

2009は杯蓋で, 本来はつまみがあったとみられる。端部には弱いかえりが付く。胎土には白色および黒色の極細粒砂から極粗粒砂を含む。焼き歪みがみられる。

2010~2012は杯で, 2012には高台が付く。2010は内外面に回転ナデ調整がみられるが, 2011・2012は器壁の摩耗が著しく調整は不明である。胎土は, 2010・2011は極細粒砂から極粗粒砂, 2012は極細粒から粗粒の白色・黒色砂を含む。

2013は椀で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は極細粒から粗粒の黒色砂を含む。

2014・2016は壺である。2014は底部の破片で, 高台が付く。2016は胴部から底部まで残存する。底部外面には焼成時に溶着したとみられる須恵器片が付着している。いずれも胎土には, 極細粒砂から粗粒砂を含み, 2014は白色・黒色砂, 2016は粗粒黒色砂がみられる。

2015は甕で, 胴部の破片である。胎土は極細粒から粗粒の白色・黒色砂を含む。

2017は鉢とみられる器形で, 外面には沈線とハケ原体による文様帯を配している。胎土は白色極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2. 調査の概要 (2) II区

緑釉陶器 (図2-18 2018~2020)

2018・2019は椀または皿の細片, 2020は椀の底部である。2018・2019は回転ナデ調整とみられる。2020は円盤状高台で, 高台の切り離しは回転糸切りである。底部内面にはミガキ調整を施す。素地は2018は須恵質, 2019・2020は軟陶である。いずれも胎土は精良で, 釉薬の塗りは薄い。釉調は2018が若草色, 2019・2020は淡緑色を呈する。

灰釉陶器 (図2-18 2021)

2021は皿で, 底部内面に陰刻がみられる。釉は内面に施し, 一部はガラス状に固結している。

製塩土器 (図2-18 2022~2024)

いずれも製塩土器の細片で, 2022は口縁部, 2023・2024は体部とみられる。いずれも外面はナデ調整とみられるが, 2024は摩耗のため調整が不明である。内面には布目圧痕が残る。器厚はいずれも1.3cm程度を測る。

土師質土器 (図2-18 2025~2028)

いずれも杯である。2025は高台が付く。2026~2028はロクロ水挽き成形で, いずれも底部の切り離しは回転糸切りによる。調整は回転ナデ調整であったとみられるが, 器壁の摩耗により不明のものもある。

青磁 (図2-18 2029・2030)

2029は碗で, 削り出し高台の底部約1/4が残存する。施釉は内面のみで, 貫入がみられる。

2030は皿で, 内面には櫛描文およびヘラによる片彫りを施す。釉は貫入がみられる。いずれも胎土は精良である。

瓦 (図2-18 2031・2032)

いずれも平瓦の破片で, 焼成不良である。2031は凹面に布目痕, 凸面に格子状の圧痕が残る。2032は凸面に縄目が残る。

石製品 (図2-18 2033・2034)

2033は砥石で, 砂岩を割り取って手持ち用にしたものである。一面のみ擦痕が残る。側面には割り取り後の成形時のものとみられる敲打痕が残る。全体的に火熱を受けたように赤色化している。

2034は片岩製の柱状片刃石斧である。基部および刃部の約1/2を折損している。側面は粗い研磨, 前後主面は比較的丁寧な研磨を施す。刃縁は丸味を持ち, 一部潰れている。

第Ⅲ~Ⅳ層出土遺物

土師器 (図2-19 2035・2044)

2035は皿とみられる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を含む。

2044は羽釜で, 口縁部の破片である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

須恵器 (図2-19 2036~2043)

2036は円盤状高台の椀で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を含む。焼成不良で, 生焼けである。

2037は高杯で, 杯底部から脚部の破片である。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を含み, 白色粒もみられる。

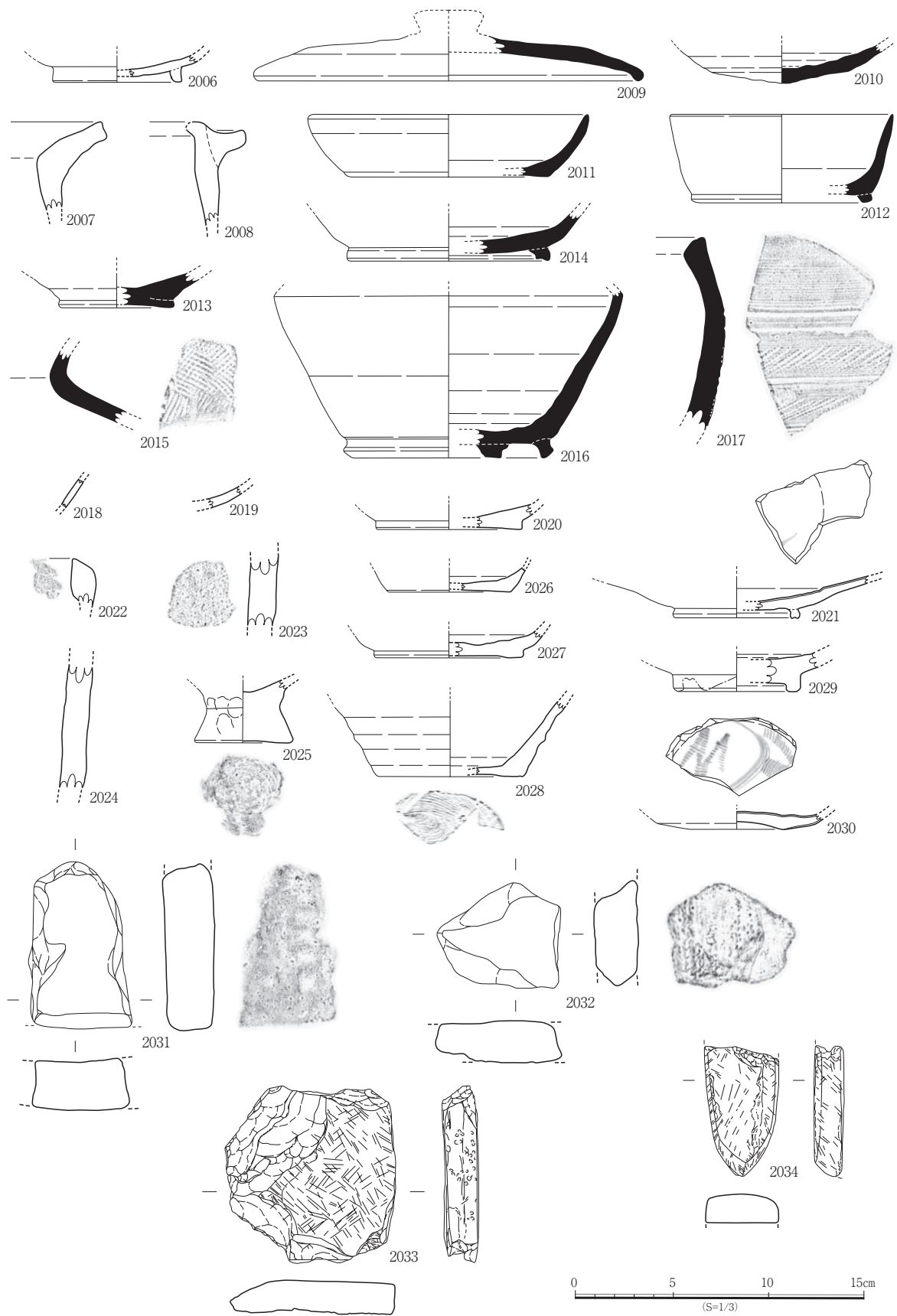


図2-18 II区第三層出土遺物実測図

2. 調査の概要 (2) II区

2038～2041は壺である。2038は長頸壺の頸部で、頸部には成形時にねじった痕が残る。また外面には二条の沈線をめぐらせる。胎土には白色・黒色極細粒砂から粗粒砂を含む。2039～2041は広口の壺で、大きさは異なるものの同じ形態になるとみられる。2039は口縁部の破片、2040は胴部から底部の破片、2041は約1/3残存する。胎土は、2039・2040は白色・黒色極細粒砂から粗粒砂、2041は白色極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2042・2043は甕で、いずれも口縁部の破片である。2043は生焼けで、口縁端部には煤がリング状に付着している。胎土は2042は極細粒砂から極粗粒砂で白色粒を含む。2043は極細粒砂から極細粒礫を含む。

緑釉陶器(図2-19 2045・2046)

2045は口縁部、2046は体部の細片で、椀または皿の一部とみられる。いずれも素地は須恵質で、器厚は2～3mmと薄めである。釉薬は非常に薄く、釉調は濃緑色を呈する。

土師質土器(図2-19 2047・2048)

2047は杯で、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。内外面回転ナデ調整である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2048は椀で、ロク口水挽き成形とみられる。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、中粒砂を比較的多く含む。

瓦質土器(図2-19 2049)

羽釜の口縁部の破片である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

常滑焼(図2-19 2050)

甕の口縁部の破片である。口縁縁帯部は2.6cmを測る。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

白磁(図2-19 2051)

碗で、削り出し高台の一部が残存する。釉薬は内面に0.2mm程度の厚さに施釉する。胎土には黒色粒を含む。

青磁(図2-19 2052)

碗の口縁部の一部が残存する。釉薬は内外面とも0.2mm程度の厚さに施釉する。全面に貫入あり。胎土には黒色粒を多く含む。

瓦(図2-19 2053)

平瓦の破片で、やや焼成不良である。凹面に布目痕が残る。

第IV層出土遺物

土師器(図2-20・21 2054・2055・2077・2078)

2054は椀で、底部の一部が残存する。胎土は精良で、極細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

2055は皿で、底部の一部が残存する。胎土は精良で、極細粒砂から粗粒砂を含む。

2077・2078は鍋である。2077は胎土に極細粒砂から極粗粒砂、雲母の砂粒を含む。2078は胎土に極細粒砂から極粗粒砂、チャートの砂粒を含む。

須恵器(図2-20 2056～2059)

2056は、杯蓋のつまみ部分である。つまみ径は2.7cmを測り、扁平な擬宝珠形を呈する。胎土は極

細粒砂から粗粒砂を含む。

2057は杯身で、底部の一部が残存する。胎土には極細粒砂から粗粒砂を含む。

2058・2059は壺である。2058は直口壺で、口縁部から胴部までの破片である。胎土は白色極細粒砂から極粗粒砂を含む。2059は肩部の破片で、外面には豆粒状の粘土塊を指でつまんで貼付したものをめぐらせる。その下には沈線一条を配する。外面にはわずかに自然釉が付着する。胎土は白色中粒砂から粗粒砂、わずかにチャートの極粗粒砂を含む。

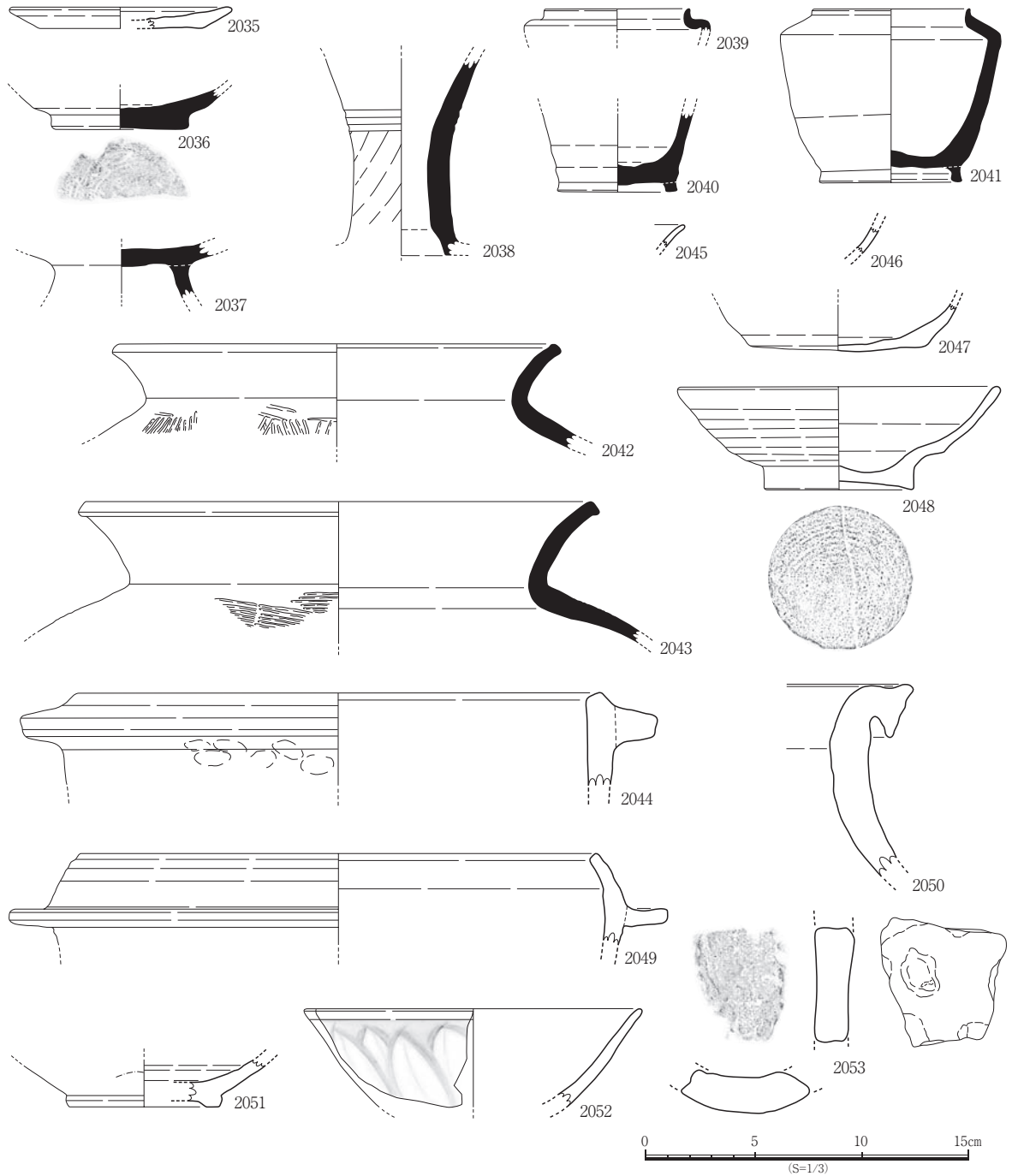


図2-19 II区第三～IV層出土遺物実測図

2. 調査の概要 (2) II区

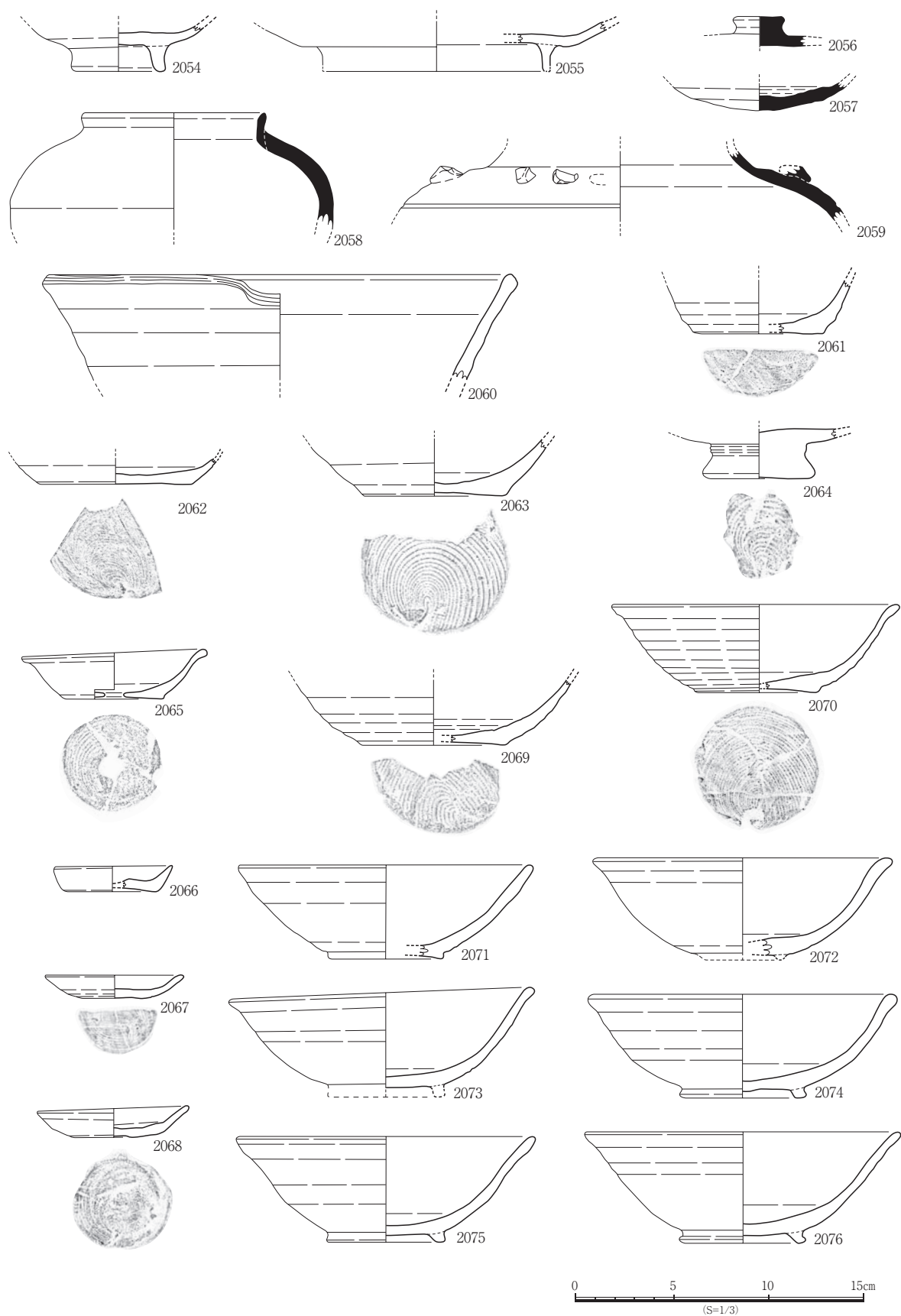


図2-20 II区第IV層出土遺物実測図1

東播系須恵器(図2-20 2060)

片口鉢の注口付近の破片である。胎土は白色中粒砂から粗粒砂を多く含む。

土師質土器(図2-20 2061~2076)

2061~2064は杯である。2061は底部の破片である。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。2062も底部の破片である。胎土は精良で、極細粒砂から中粒砂を含む。2063は底部約1/3が残存する。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。いずれもロクロ水挽き成形とみられ、底部の切り離しは回転糸切りによる。2064は柱状高台で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精緻で、極細粒砂から中粒砂を少量含む。

2065は小杯で、約2/3が残存する。底部の切り離しは回転糸切りによる。底部の中央には、径約1.0cmの意図的に穿ったとみられる孔がある。また、外面には全体的に煤が付着している。胎土は非常に精良で、極細粒砂を含む。

2066~2068は小皿である。2066は口縁部から底部の約1/2が残存する。胎土は精良で、極細粒砂から粗粒砂を含む。2067は口縁部から底部の、約1/4が残存する。胎土は精良で、極細粒砂から中粒砂を含む。2068は口縁部から底部の、約2/3が残存する。胎土には極細粒砂から粗粒砂を含む。いずれ

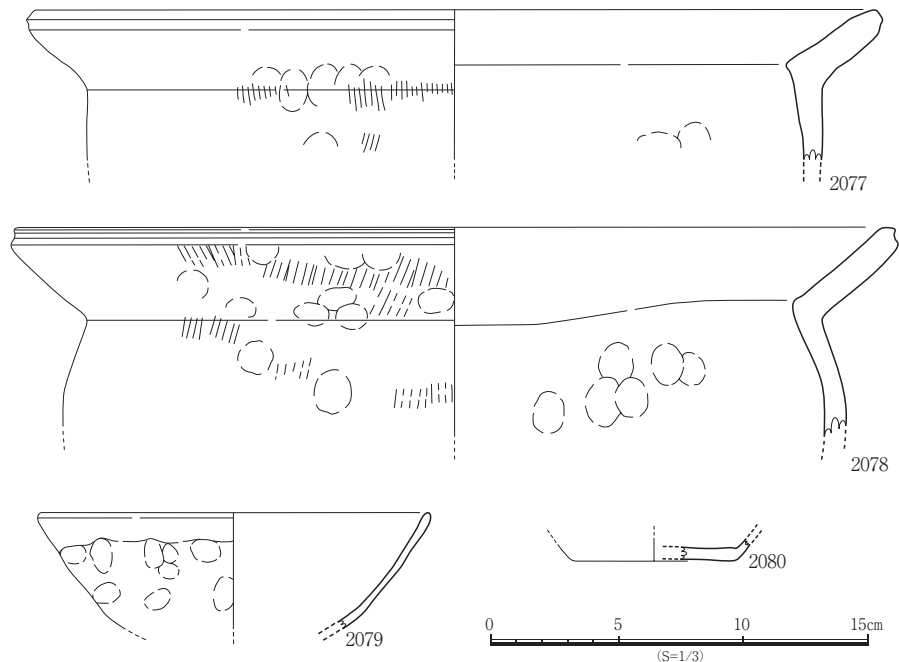


図2-21 II区第IV層出土遺物実測図2

も底部の切り離しは、回転糸切りによる。

2069~2076は椀である。2069は口縁部が残存しておらず不明瞭だが、法量的に椀とみられる。ロクロ水挽き成形で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を含む。2070は約1/3が残存する。ロクロ水挽き成形で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、極細粒砂から粗粒砂を含む。2071は約1/2が残存する。ロクロ水挽き成形とみられる。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、極細粒砂から極粗粒砂を含む。2072~2076は高台の付くものである。いずれも胎土は精良で、2072・2073は極細粒砂から細粒砂、2074~2076は極細粒砂から中粒砂を含む。

瓦器(図2-21 2079)

2079は椀で、口縁部から胴部の破片である。胎土は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

白磁(図2-21 2080)

2080は皿で、底部の破片である。釉薬は0.2~0.8mmの厚さで全面に施釉する。底部外面には目跡が残る。

第V・VI層出土遺物

弥生土器(図2-22 2081・2082)

2081は壺で、口縁部の破片である。器厚は厚めで、口縁部外面はタテ方向、内面はヨコ方向のハケ調整後、口縁端部をヨコナデ調整する。

2082は甕である。いずれも胎土はチャートなどの極細粒砂から極細粒中礫を含む。

土師器(図2-22 2083)

高杯の杯部から脚部で、弥生土器の可能性もある。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

須恵器(図2-22 2084～2100)

2084～2086は杯蓋である。2084はつまみのみ残存しており、つまみ径は3.5cmを測る。扁平な擬宝珠形を呈する。胎土は極細粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。2085は口縁部の破片である。胎土は白色極細粒砂から極細粒中礫を含む。2086は口縁部から天井部の破片である。胎土白色極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2087～2089は杯である。2087はほぼ完形で、底部はヘラ起こしである。胎土は白色中粒砂を比較的多く含む。2088は底部の破片で、外面にはヘラ記号とみられる刻印がある。胎土は極細粒砂から細粒砂を含む。2089は高台を持ち、壺の可能性もある。胎土は黒色・白色極細粒砂から極細粒中礫を含む。

2090は皿で、口縁部から底部の破片である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2091・2092は高杯である。いずれも杯底部から脚部が残存する。2092は杯部内面と脚部外面に自然釉が付着する。いずれも胎土には、極細粒砂から粗粒砂を含む。

2093は平瓶である。口縁部外面に3条、胴部に2条の浅い沈線をめぐらせる。胴部外面には自然釉が付着する。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

2094・2095は壺である。2094は底部の破片で、底部外面には製作時のものとみられる粘土が付着している。胎土は白色・黒色極細粒砂から極粗粒砂を含む。2095は口縁部の破片で、胎土には極細粒砂から極細粒中礫を含む。

2096は甕である。破片のため孔は残存していなかった。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2097～2100は甕である。2097～2099は口縁部の破片で、2098は外面にカキ目調整を施す。いずれも胎土に白色極細粒砂から粗粒砂を含む。2100は約1/2残存する。口縁端部は玉縁状を成し、口縁部は回転ナデ調整を行う。内外面とも胴部にはタタキ目が残り、内面上胴部はその後ナデ調整を行う。胎土は白色・黒色極細粒砂から極粗粒砂を含む。

緑釉陶器(図2-22 2101)

椀の底部である。素地は軟陶で、高台底まで施釉を行っている。釉調は濃緑色を呈する。

白磁(図2-22 2102・2103)

いずれも碗で、玉縁口縁の破片である。胎土はいずれも精良で、黒色粒を含む。白磁2点は、IV層からの混入の可能性が高い。

石製品(図2-22 2104)

砥石である。砂岩を利用したもので、長方形に割り取り成形したとみられる。一主面と両側面に擦痕と成形時の敲打痕が残る。全体的に火熱を受けたように赤色および黒色に変色している。

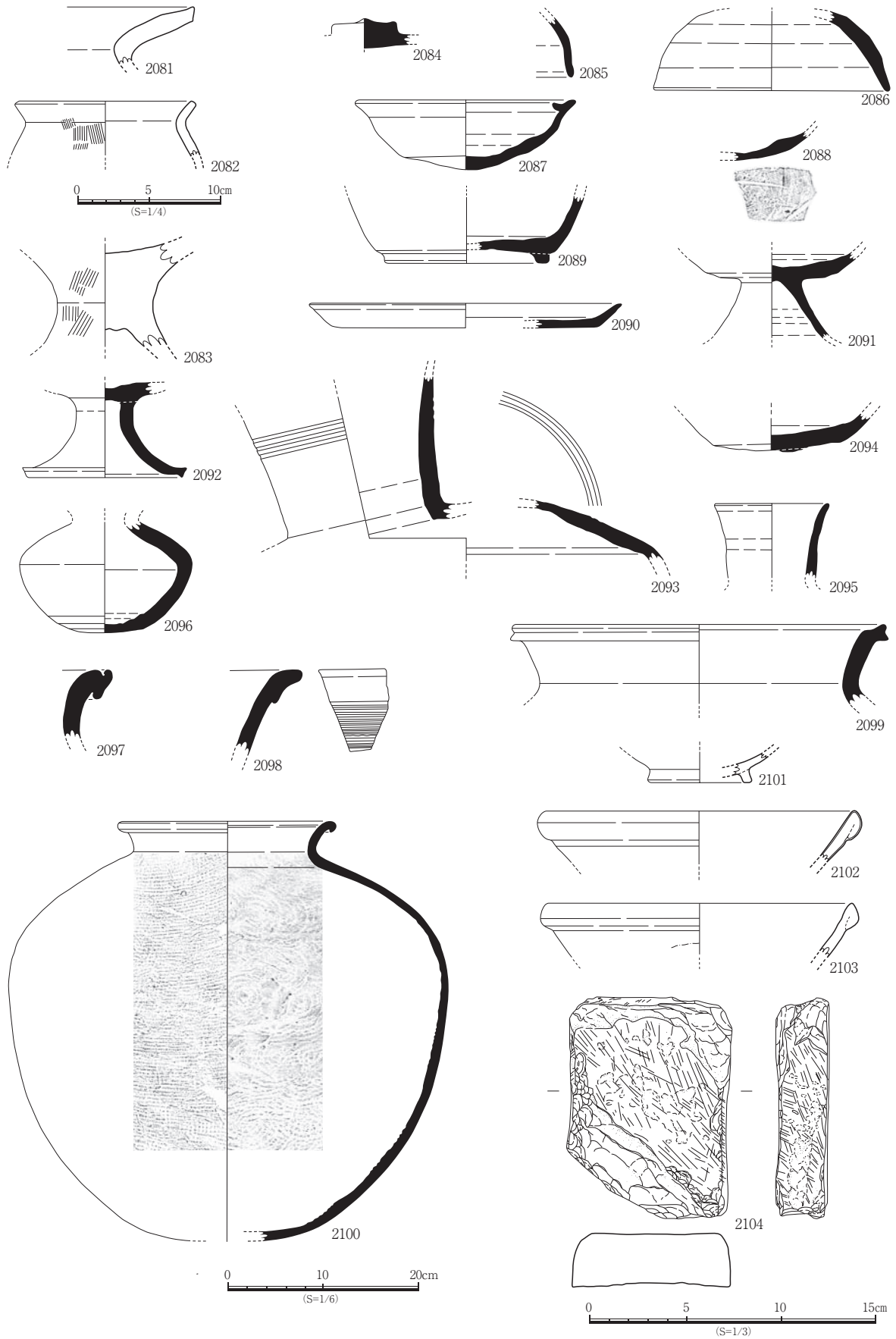


図2-22 II区第V・VI層出土遺物実測図

第X層出土遺物

弥生土器(図2-23 2105~2116)

2105~2109は壺である。2105は口縁部の破片で、端部にヘラ状工具で文様を施す。胎土にはチャートを含む極細粒砂から粗粒砂が混じる。2106は壺の頸部の破片である。外面の頸胴部の境から上胴部に、沈線1条と斜方向の短沈線をめぐらせる。胎土にはチャートを含む極細粒砂から極粗粒中礫が混じる。2107~2109は底部の破片である。2107・2109は、胎土にチャートを含む極細粒砂から細粒中礫、2108は極細粒砂から極細粒中礫が混じる。

2110~2113は甕である。2110は、外面に雑なハケ調整を行う。内面はケズリを施し、上から下へのケズリが支配的である。胎土にはチャートを含む極細粒砂から細粒中礫が混じる。2112は凹線文甕の口縁部の破片である。口縁端部には2条の凹線文をめぐらせる。2111・2112とも、胎土にはチャートを含む極細粒砂から極細粒中礫が混じる。2113は甕の口縁部とみられる。胎土にはチャートを含む極細粒砂から極粗粒砂が混じる。

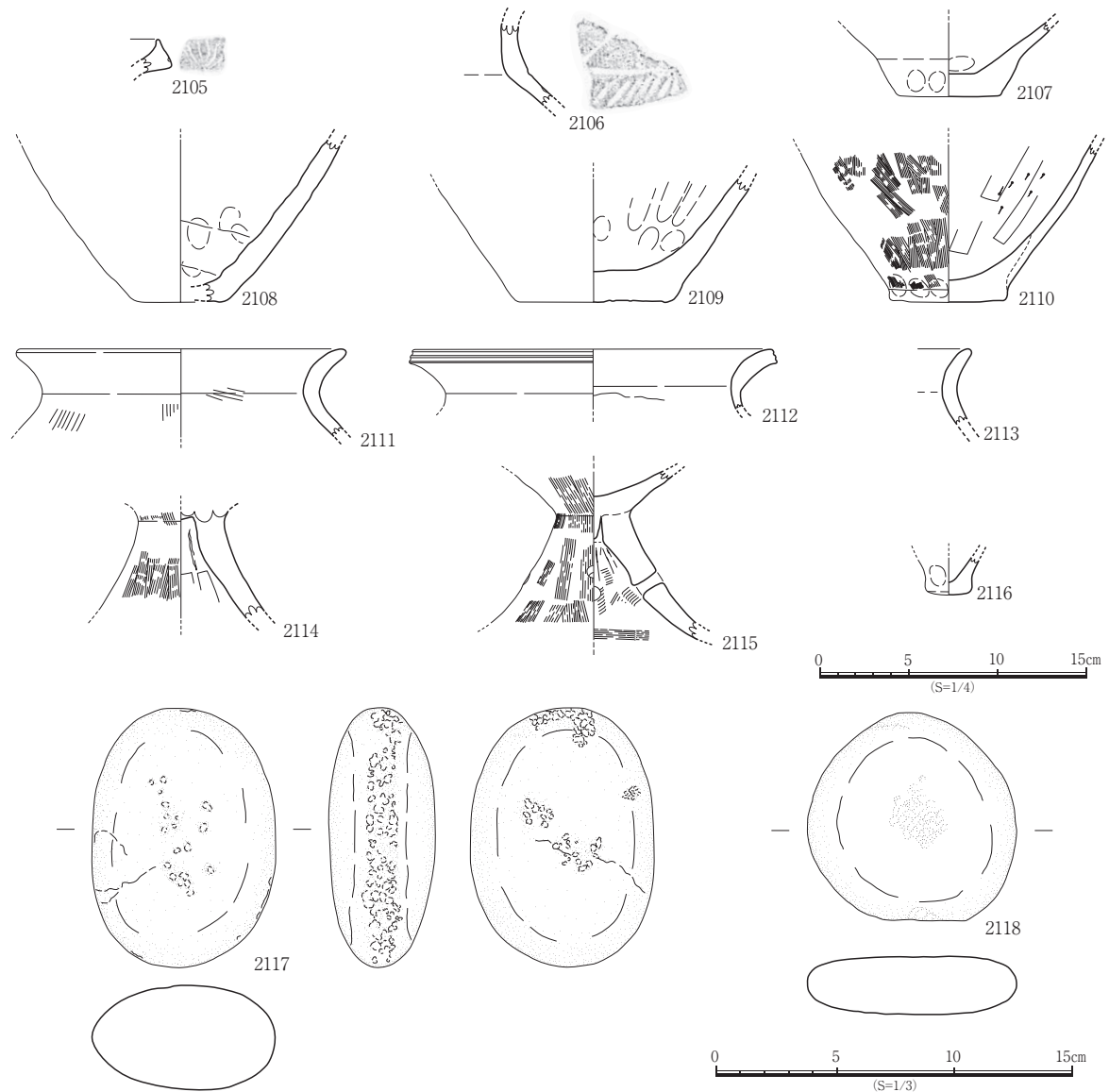


図2-23 II区第X層出土遺物実測図

2114・2115は高杯である。2114は脚部の破片で、脚柱部内面にはしぼり痕がみられる。胎土にはチャートを含む極細粒砂から極細粒中礫が混じる。2115は杯底部から脚部までの破片である。脚柱部内面にはしぼり痕が残る。円形の透かしが2孔残存しており、4カ所に穿たれていたとみられる。胎土は中粒砂を多く含む。

2116はミニチュア土器である。底部のみ残存する。胎土は極細粒砂から細粒砂が主体で、わずかに極粗粒砂を含む。

石製品(図2-23 2117・2118)

いずれも砂岩円礫を利用した叩石である。2117は両主面と側縁に敲打痕が残る。2118は一主面のみ使用しており、中央部に敲打痕が集中する。

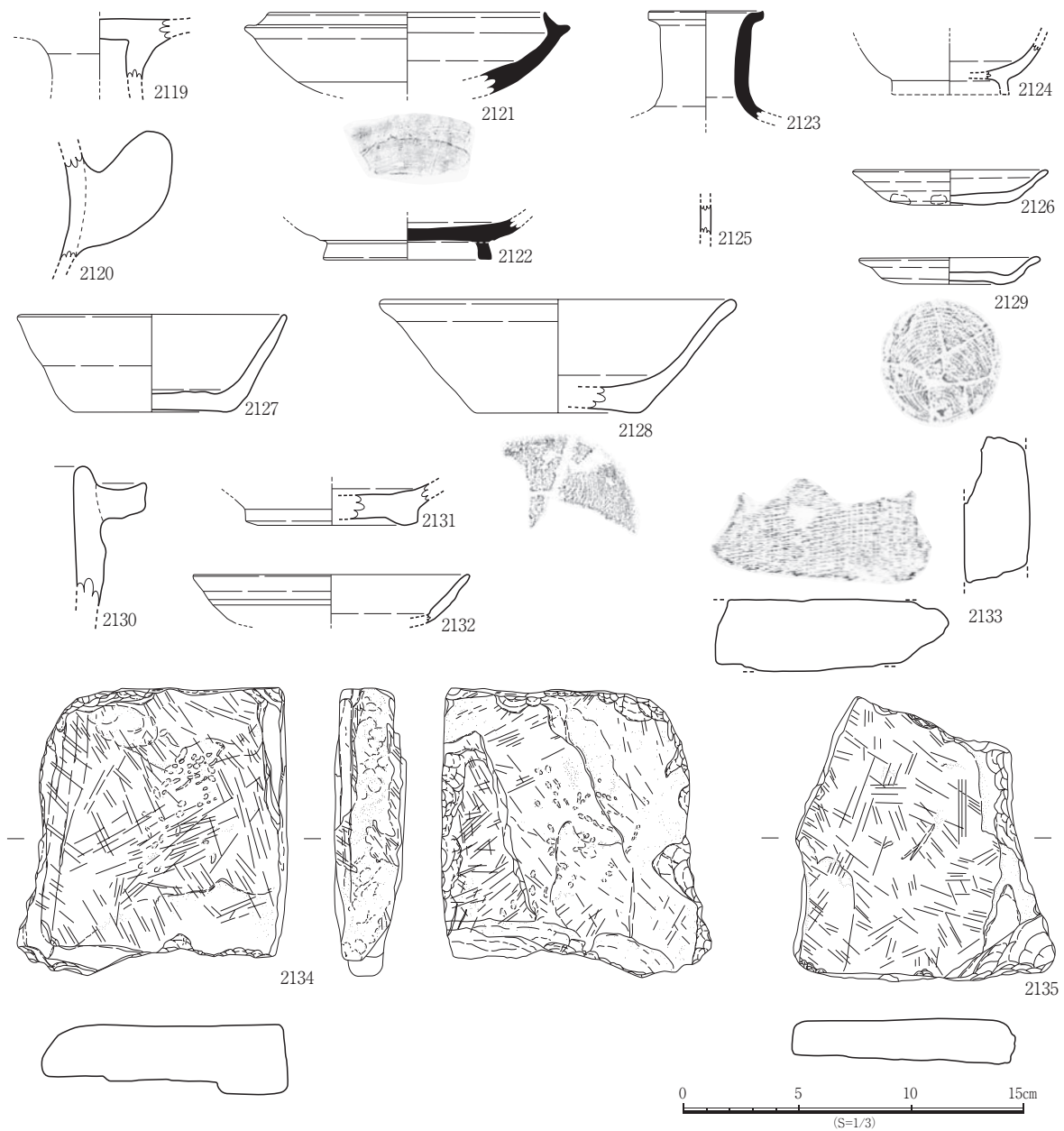


図2-24 II区その他の包含層出土遺物実測図

その他の包含層出土遺物

ここでは機械掘削などによって、本来の出土層位が不明になった遺物を取り上げる。

土師器(図2-24 2119・2120・2130)

2119は高杯で、杯底部から脚部の破片である。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

2120は甌で、把手部分のみ残存する。胎土は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

2130は羽釜で、口縁部から胴部の破片である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

須恵器(図2-24 2121～2123)

2121・2122は杯身である。2121は立ち上がりが高く、内傾する。胎土は白色極細粒砂から粗粒砂を含む。2122は高台が付く。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

2123は壺で、口縁部の破片である。胎土は極細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

緑釉陶器(図2-24 2124・2125)

2124は椀または蓋、2125は椀の細片とみられる。2124は、素地は須恵質で、胎土は非常に精良である。釉薬は非常に薄く全面に施釉する。釉調は濃緑色を呈する。2125は軟陶の素地で、釉薬が膜状に残る。釉調は濃緑色を呈する。

瓦器(図2-24 2126)

小皿で、約1/2残存する。胎土は精良で、中粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-23 2127～2129)

2127・2128は杯である。2127は胎土は中粒砂から細粒中礫、2128は極細粒砂から中粒砂を含む。

2129は小皿である。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

白磁(図2-24 2131・2132)

2131は碗で、削り出し高台の破片である。内面に約0.2mmの厚みで施釉する。胎土は黒色粒を含む。

2132は皿で、底部を欠損する。釉の厚さは約0.2mm以下と非常に薄い。胎土は精良で、わずかに黒色粒を含む。

瓦(図2-24 2133)

平瓦の破片とみられる。非常に焼成が悪く、摩耗が著しい。胎土は精良である。

石製品(図2-24 2134・2135)

いずれも砂岩を用いた砥石である。2134は両主面と二側面に擦痕が残る。また両主面には比較的鋭利な敲打痕が残る。全体的に火熱を受けたためか赤色に変色している。2135は一主面のみ擦痕が残る。また側面には、割り取り後の成形時のものとみられる敲打痕が残る。

註

- (1) 古環境分析では網状流路にみられる流路内の砂州を形成していたものと判断される。
- (2) このように西野々遺跡では各調査区旧地形は起伏に富んでいたが、調査前の現地表の標高は概して西に向かって緩やかな傾斜を示していた。これは、河川堆積が終了する古代以降、中でも中世以降形成されたものと考えられる。
- (3) 方形区画墓の主体部から出土した土師質土器の皿の中に同じ成形技法で作られたものがある。詳細は平成20年度に刊行の『西野々遺跡II』で報告予定である。

3. 遺構と遺物

(1) I 区

本調査区で確認された遺構は大きく弥生時代中期末から後期初め、奈良時代後半から平安時代前半、鎌倉時代末から室町時代前半の3時期に大別される。前述したとおり、それぞれの立地の成り立ちが異なり、弥生時代の遺構は東半、古代の遺構は中央部、中世の遺構は西半にそれぞれ中心があり、遺跡全体の様相についても概ね先の3時期を中心としている。

すでに、工事範囲にかかる西野々遺跡全区域の調査は完了しており、その分布が概ね把握されている。まず、弥生時代の集落の中心は今回の調査区から東に展開し、その中心は県道仁井田竹中線の東部（竹中地区の西半）にある。ただし、遺構の分布は西野々遺跡全域に及ぶ。古代の遺構は各調査区から単位規模は異なるが、それぞれまとまりを持って検出されている。その中で、大きな単位が県道仁井田竹中線と県道南国インター線との間の竹中地区東部にある。一辺が1.0m以上の柱穴で構成された掘立柱建物跡の存在が大きい。本調査区でも方形の柱穴で構成された11棟以上の掘立柱建物跡で構成されており、一つの単位として捉えることができよう。中世の遺構は屋敷単位で西野々遺跡ほぼ全域に分布する。

① 弥生時代

竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、塀・柵列跡3列、土坑14基、溝跡5条などを検出した。

i 竪穴住居跡

完掘できたものはないが、小規模な円形の住居跡2軒と方形の住居跡1軒を確認した。住居形状から前者が先行したものと考えられる。

ST-101 (図2-25)

調査区北東端部で検出した竪穴住居跡¹⁾で、南東部は調査区外に延びるもののほぼ全体を知ることができ、径約4.0mの円形の竪穴住居跡であったものとみられる。調査の段階ではベット状遺構を有するものとして調査しているが、ベットの深さが0.61～0.90mと深く、南にやや偏っており、セクション図に床面の延長線上で炭化物の集中箇所が記載され、かつ東側の調査で同様な竪穴住居跡が見られず、壁高の遺存高も本遺構とほぼ同じ15～20cmであることなどからして中央部で検出している不整楕円形の遺構は別の遺構の可能性が考慮され、以下検討してみたい。

さて、本遺構の平面形は前述のとおりほぼ円形で、径4.00mを測り、遺存する壁高は5～15cmと浅く、床面の標高は7.460～7.535mで南にやや傾斜している。埋土は砂混じり黒褐色粘土質シルトで、中央部に炭化物の集中がみられた。床面では壁溝と18個のピット及びベット状遺構とみられる不整楕円形の土坑を検出した。まず、主柱穴の可能性が考えられるのは位置関係から第一にP-1～3である。南西の柱穴はSK-1と重なっており、検出されていない。柱間寸法は1.35mと1.70mで東西がやや長くなる。第二に考えられるのは壁に近いP-4～6で、東の柱穴は調査区外になる。柱間寸法は2.25mと2.45mで東西がやや長くなる。後者は、壁に近すぎ構造上無理がありそうで、前者はP-2が径13cm、深さ8cmと小さい点が気になるものの可能性が強そうである。いずれにしても4本柱で棟を支えていたものと考えられる。壁溝は部分的に欠く箇所もあるがほぼ壁下に配される。問題のSK-1は、平面形が西側の拡がる不整楕円形で、長径2.55m、短径1.92mを測り、床面からの深さは0.61

3. 遺構と遺物 (1) I区

～0.90mで、主軸方向はN-88°-Eを示す。底面には数珠繋ぎになったピット列を検出しているが、柱穴と判断される明確なピットはみられない。埋土は地山のブロック等を含んでおり、人為的に埋められたものとみられる。以上のことから考慮するとSK-1を埋めた上で、住居を構えたものと考えた方が良さそうである。また、復元図示できた遺物は、SK-1からも一定出土しているが、時期差は看取されない。なお、出土遺物の総点数は632点で、SK-1からは130点が出土し、復元できた37点の遺物のうち1147, 1150, 1152, 1154, 1163, 1166以外はSK-1から出土したものである。

出土遺物

弥生土器(図2-26 1139～1161)

1139・1140は壺の肩部で、外面に櫛描直線文や浮文、小さな突帯などの文様がみられる。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1141～1154は甕で、口縁部が残る。1141は粘土紐を口縁部に貼付する。1142から1150は、口縁部がほぼ直立する頸部から大きく外反するもので、1142から1146の口縁外面には粘土紐を貼付し、1144から1146には刻目が施される。1147の口縁外面には断面三角形の突帯が2段に付き、上の突帯には刻目が施される。1148は口縁部外面に粘土紐を貼付した上で、棒状工具による刻目が施される。

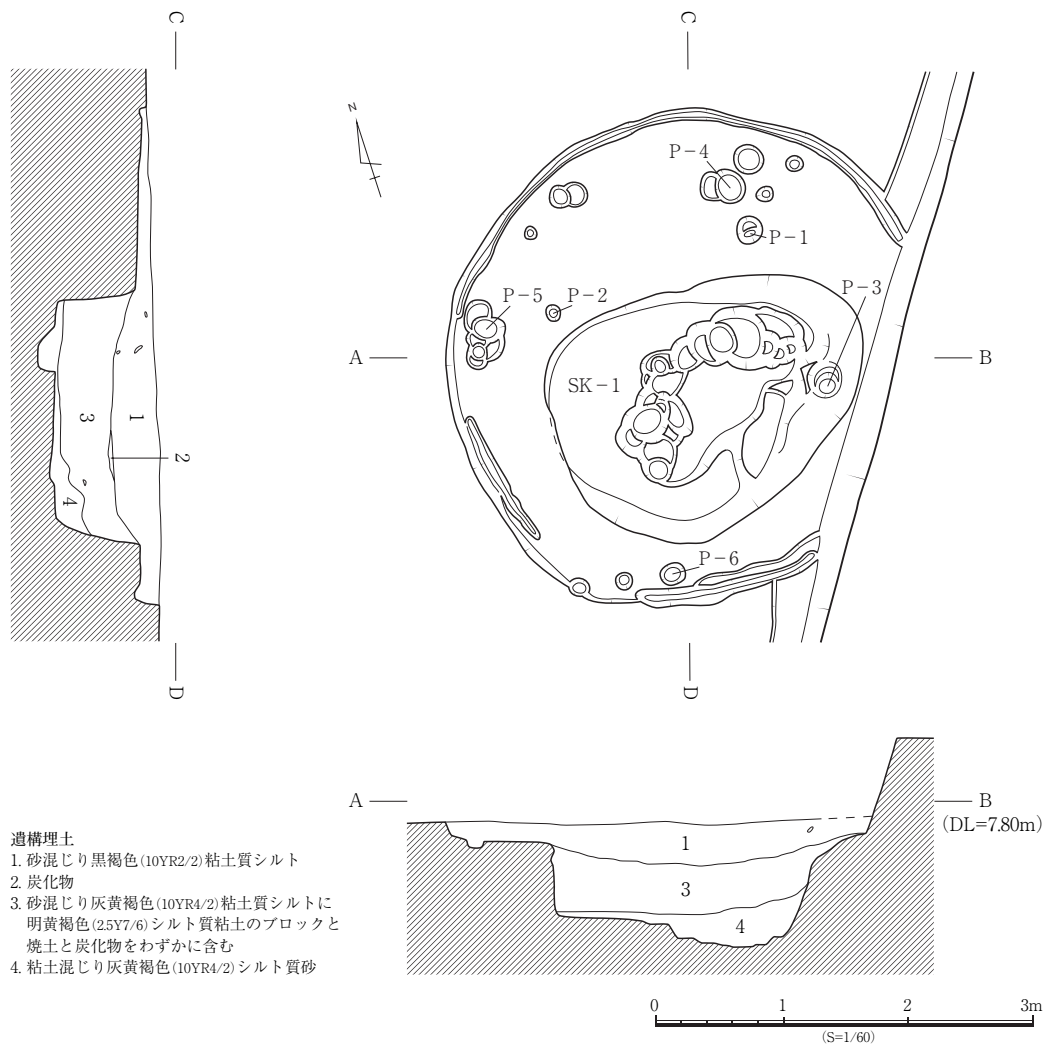


図2-25 ST-101

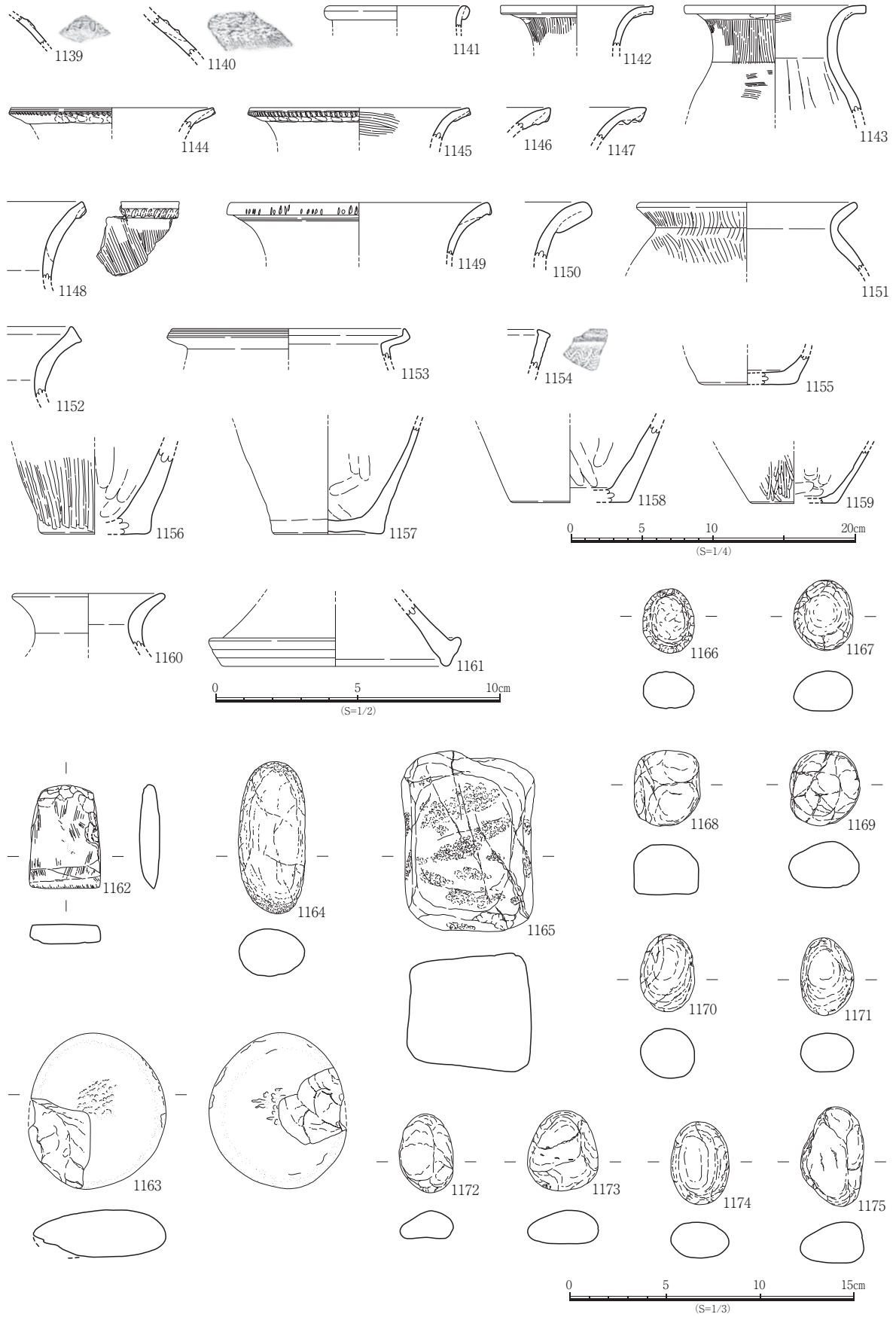


図2-26 ST-101出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) I区

1149には粘土紐の貼付はみられず、端部に不均等な刻目と口縁下に小さな突帯を巡らす。1150は他とは異なり、粘土紐を折り返して貼付口縁とする。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1151は口縁部がくの字状をなすもので、端部は内傾する平面となる。胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1152は口縁部が外傾するもので、端部は内傾する浅い凹面をなす。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。1153は口縁部が屈曲するもので、端部を肥厚した上で2条の擬凹線文を施す。残部が少なく胴部のヘラ削りは確認できない。胎土には中粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1154は外傾する口縁部の細片で、外面に4本単位の櫛描波状文がみられる。胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。1155～1158は甕で、底部が残存する。1155は内外面ともナデ調整、1156は外面にヘラナデ調整、1157・1158は外面にナデ調整をそれぞれ施す。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

1159は鉢で、外面にはタテ方向のヘラ磨きが施される。胎土は比較的精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1160・1161はミニチュア土器(小型精製土器)とみられるもので、1160は壺、1161は高杯である。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を含む。

石製品(図2-26 1162～1175)

1162は扁平片刃石斧で、部分的に欠損するがほぼ完存する。刃部には複数の研磨痕がみられる。

1163・1164は叩石で、1163には両面に弱い敲打痕、1164には両端に敲打痕がみられる。

1165は台石で、ほぼ立方体をなし6面のうち5面に弱い敲打痕と磨滅痕が残る。

1166～1175は投弾とみられる河原石である。重量は最も軽いもので21.4g、最も重いもので51.5gを量り、平均は約38.3gであった。

ST-102(図2-27)

調査区北東端部、ST-101の北隣で検出した竪穴住居跡である。住居跡の北半分は調査区外に延びるが、径約3.0mの円形の竪穴住居跡であったものとみられる。現況では径2.96mを測る。残存する壁高は約5cm、床面の標高は7.640m前後である。付属遺構として中央ピットと壁溝および5個のピットを検出した。この内、これまでの調査例²⁾からP-1とP-2が支柱穴とみられ、2本で棟を支えていたと考えられる。P-3も径18～20cmを測り、支柱穴の可能性も考慮されるが、深さが5cmと浅く支柱穴の可能性は低い。P-1は径20cmの円形で、深さ16cm、P-2は径17～20cmの不整円形で、深さ22cmである。柱間寸法は0.75mと短い。この2個の柱穴に挟

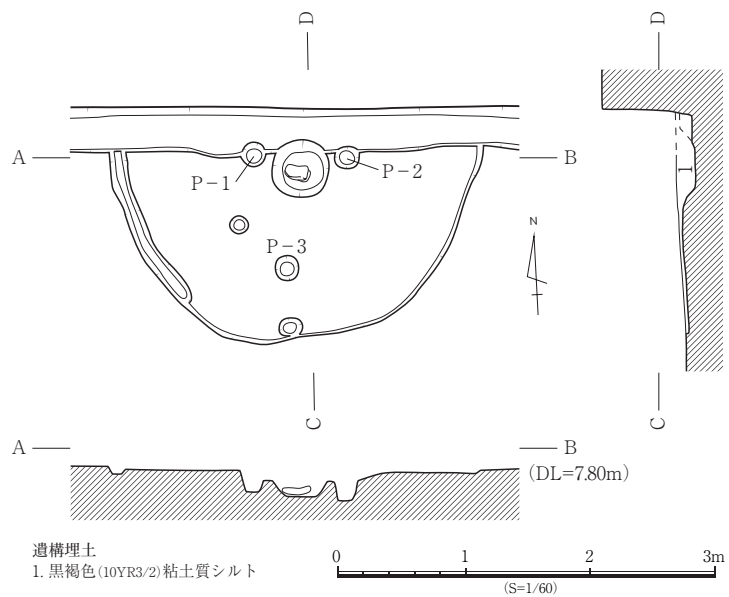


図2-27 ST-102

まれて平面形が不整円形で径45～46cm、深さ18cmを測る中央ピットがある。底面から1176の砥石が出土しており、作業ピットとして使用されていたものとみられる。壁溝は西壁沿いで幅約15cm、深さ3～4cm、1.50mを検出した。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物は2点あり、先の砥石1点(1176)が図示できた。

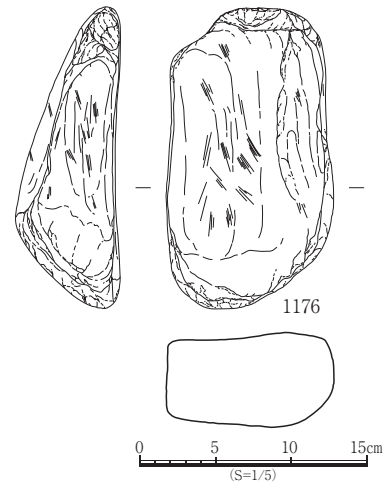


図2-28 ST-102出土遺物実測図

出土遺物

石製品(図2-28 1176)

完存する砥石で、3面に使用痕が残る。この内、最もよく使用されている面は長辺の断面が三角形をなし、高い方を手前にして、前方に向かって研いでいたと考えられる。

ST-103(図2-29)

調査区北東部で検出した竪穴住居跡である。北半分は調査区外に延びるが、一辺約5.6mの方形であったものとみられる。現況では、東西5.60m、南北3.25m以上を測り、長軸方向はN-88°-Wを示す。残存する壁高は25～30cmで、床面の標高は7.450m前後である。付属遺構として中央ピット(P-1)と10個のピットを検出した。この内、支柱穴とみられるピットは位置関係からP-2とP-3とみられる。P-4には柱痕が検出されており、何らかの柱穴として機能したものと考えられるが、対応する柱穴が見当たらない。よって、未調査部分にもP-2とP-3に対応する柱穴が存在すると

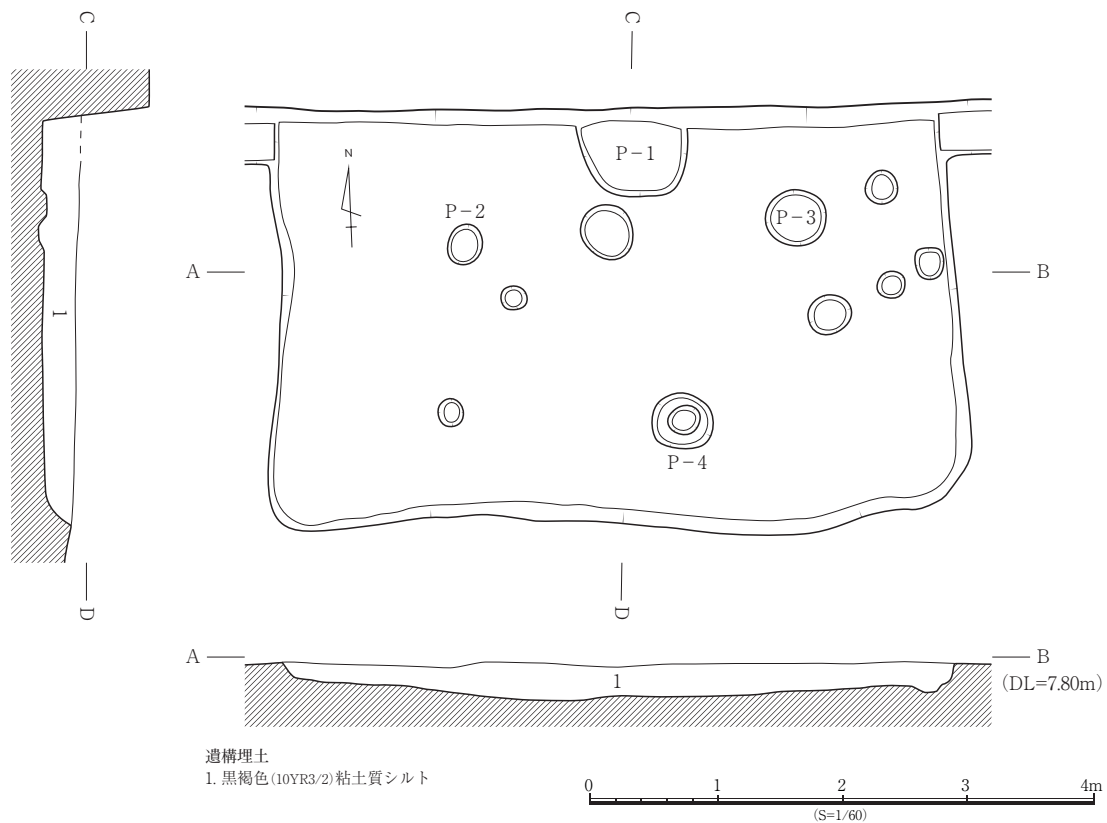


図2-29 ST-103

3. 遺構と遺物 (1) I区

考え、4本柱で棟を支えていたものと判断されるが、いずれも深さは浅い。柱間寸法は2.65mである。規模は、P-2が不整円形で径27～32cm、深さ4cm、P-3が円形で径45～47cm、深さ5cm、P-4が不整円形で径45～48cm、深さ8cmである。中央ピットは不整方形ないし不整楕円形を呈するとみられ、検出長は東西0.86m、南北0.58m以上で、深さは4cmと浅い。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物は12点あったが、図示できる遺物はなかった。

表2-1 弥生時代竪穴住居跡計測表

遺構番号	平面形態	長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	床面標高	長軸方向(NはGN)	備考
ST-101	円形	4.00	-	7.460～7.535m	-	
ST-102	円形	(3.00)	-	約7.640m	-	
ST-103	方形	5.60	(3.25)	約7.450m	N-88°-W	

ii 掘立柱建物跡

2棟を復元した。SB-101は完掘しており、全体が判明している。一方、SB-102は西半分の調査に止まっており、全体像は推測の域を出ない。

SB-101(図2-30)

調査区東端部で検出した桁行4間(5.30m)、梁行2間(3.00m)の東西棟建物跡である。約1.0m離れた西隣には棟に沿う形でSK-101があり、建物に伴っていた可能性が考えられる。棟方向はN-55°-Eを示す。柱穴の深さには大きな違いがみられないものの、各隅と側柱中央の柱穴以外が径22～33cm、深さ6～48cmを測るのに対し、各隅と側柱中央の柱穴は径32～60cm、深さ9～45cmと一回り大きくなっており、構造上の示唆を与える。

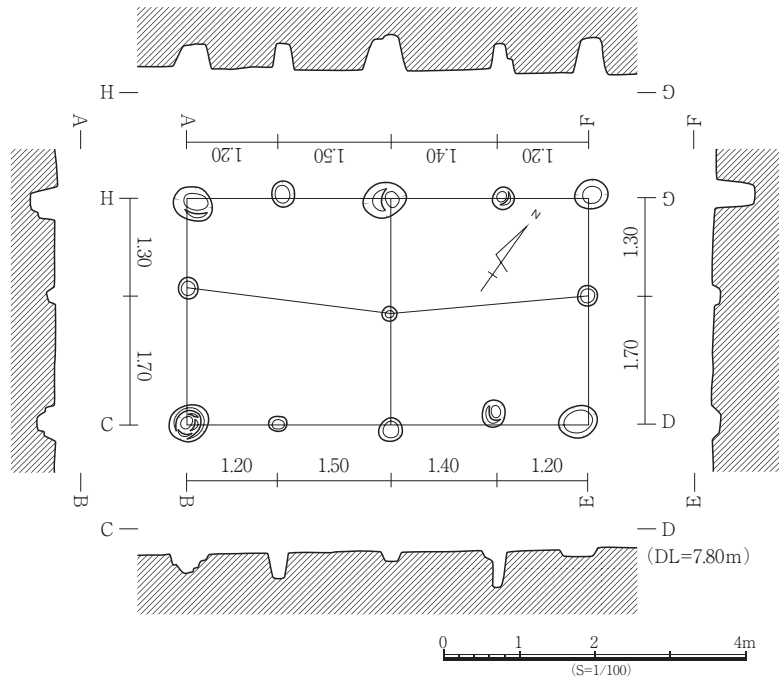


図2-30 SB-101

さらに、平側の側柱中央の柱通

りに小規模な柱穴(径20cm、深さ7cm)がみられるものの妻柱を結ぶ柱筋上にはのらない。この柱穴を東柱とするか間仕切柱とみるか難しいが、先の柱穴配置を考え合すと間仕切柱ではなく東柱と考えられ、この建物跡は高床住居とみることができるとはなからうか。柱間寸法は、桁行(東西)が北から1.20m、1.40m、1.50m、1.20m、梁行(南北)が1.30mと1.70mである。柱穴は径20～60cmの円形で、柱径は15～20cmとみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトないしにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルトで地山のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器4点がみられたが、図示で

きたのは北西隅の柱穴から出土した1点(1177)のみである。

出土遺物

弥生土器(図2-31 1177)

壺の口縁部の破片である。口縁部は大きく外反し、端部はほぼ直立する凹面をなす。内外面にはハケ調整が施される。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

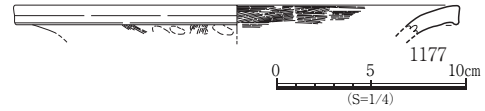


図2-31 SB-101出土遺物実測図

SB-102(図2-32)

調査区東端部で検出した、桁行2間(2.60m)以上、梁行1間(2.50m)の東西棟建物跡で、東側半分以上が調査区外に延びるものの3間×1間程度の建物ではなかったかと推測される。棟方向はN-51°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.20m~1.40m、梁行(南北)が2.50mである。柱径は22~28cmのほぼ円形で、柱径は15cm前後ではなかったかとみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できなかった。

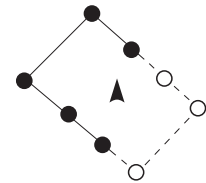


図2-32 SB-102

表2-2 弥生時代掘立柱建物跡計測表

遺構番号	桁行×梁行	規模 桁行(m)×梁行(m)	柱間寸法		面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
			桁(m)	梁(m)			
SB-101	4×2	5.30×3.00	1.20~1.50	1.30・1.70	15.90	N-55°-E	
SB-102	2以上×1	2.60×2.50	1.20~1.40	2.50	6.50	N-51°-W	

iii 堀・柵列跡

3列を復元したが、他の遺構との関連については判然としない。位置関係からST-101との関連も考慮される。

SA-101(図2-33)

調査区北東端部、SA-102の南に隣接した形で検出した東西堀跡(N-88°-E)である。3間分(4.80m)を検出し、柱間寸法は1.40~1.80mと区々である。柱穴は径27~58cmの円形ないし楕円形で、柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで地山のブロックを含むものもみられた。出土遺物には弥生土器が2点みられたが、復元図示できるものはなかった。

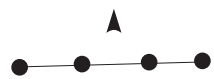


図2-33 SA-101

SA-102(図2-34)

調査区北東端部、SA-101の北に隣接した形で検出した東西堀跡(N-87°-E)である。4間分(5.95m)を検出し、柱間寸法は1.10~1.75mと区々である。柱穴は径25~45cmのほぼ円形で、柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで地山のブロックを含むものもみられた。出土遺物には弥生土器が2点みられたが、復元図示できるものはなかった。

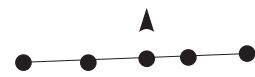


図2-34 SA-102

SA-103(図2-35)

調査区北東端部、ST-101の南隣で検出した東西堀跡(N-88°-E)である。3間分(3.10m)を検出し、

3. 遺構と遺物 (1) I区

柱間寸法は0.95mと1.20mである。柱穴は径19～27cmのほぼ円形で、柱径は12cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器が5点みられたが、復元図示できるものはなかった。

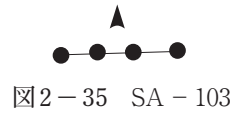


表2-3 弥生時代堀・柵列跡計測表

遺構番号	柱穴数(個)	規模		方向 (NはGN)	備考
		全長(m)	柱間寸法(m)		
SA-101	4	4.80	1.40～1.80	N-88°-E	
SA-102	5	5.95	1.10～1.75	N-87°-E	
SA-103	4	3.10	0.95・1.20	N-88°-E	

iv 土坑

14基を土坑として報告しているが、残存する深さが10cmに満たず、掘削面下部しか遺存していないものが半数もあり、全般に遺存状況は良くない。その中で、舟形を呈するSK-101～103は出土遺物も一定あり、かつ、建物跡に隣接し、この時期の建物と土坑の関係を考察する上で注目される。

SK-101 (図2-36)

調査区東端部、SB-101の西側柱から約1.0m離れた西隣で検出した舟形の土坑で、SB-101に沿った形にある。長辺7.12m、短辺0.50m、深さ15cmを測り、長軸方向はSB-101の棟方向と同じN-55°-Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器28点がみられ、5点(1178～1182)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図2-37 1178～1182)

1178～1180は壺である。1178は口縁部外面に粘土紐の貼付がみられ、内外面にハケ調整を施す。1179は肩部の細片で、外面には突帯を挟んで上に櫛描波状文、下に楕円形浮文を施す。いずれも胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。1180は底部で、下端が肥厚され安定感がある。器面はナデ調整で、胎土には中粒砂を中心に中粒砂から細粒中礫を比較的多く含む。

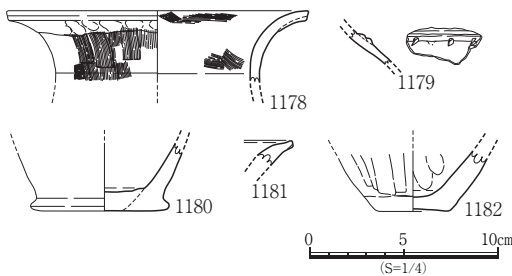


図2-37 SK-101出土遺物実測図

1181と1182は甕である。1181は口縁部の細片で、口縁部は外反し、端部には刻目が施される。1182は底部で、わずかではあるが上げ底風となる。外面にはタテ方向の

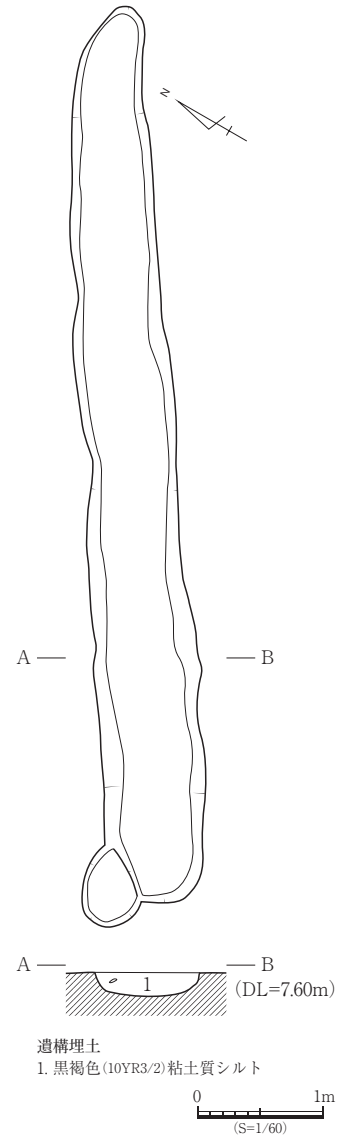


図2-36 SK-101

ヘラナデ調整が施される。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

SK-102 (図2-38)

調査区東部, SB-101とSB-102の間で検出した舟形の土坑である。長辺4.49m, 短辺0.82m, 深さ9cmを測り, 長軸方向はSB-101の棟方向に近いN-65°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器106点と石製品1点がみられ, 弥生土器8点(1183~1190)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図2-39 1183~1190)

1183~1186は壺とみられるもので, 1183は口縁部が大きく外反し, 端部を上下に拡張して5条の凹線文を施す。内面にはヘラ描きの斜格子目文を施す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1184は口縁部外面に粘土紐を貼付するもので, 端部にヘラ状工具による刻目, 内面にヨコ方向のハケ調整を施す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。1185も口縁部の破片で, 端部にはヘラ状工具による刻目, 内面にはヨコ方向のハケ調整がみられる。1186は底部で, 外面にはタテ方向の細かなヘラ磨き, 内面にはヘラ削りがみられる。胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1187~1189は甕である。1187は口縁部から肩部の破片で, 口縁部は外傾し, 端部を肥厚して擬凹線文を施す。1188は口縁部の破片で, 口縁部は肩部から大きく屈曲し, 端部を上方に肥厚する。1189も口縁部の破片で, 口縁部は外傾し, 端部は内傾する平面をなす。いずれも胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1190は高杯で, 基部が残存する。杯底部には粘土盤を充填した痕跡, 脚柱部内面にはしぼり目が残る。胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

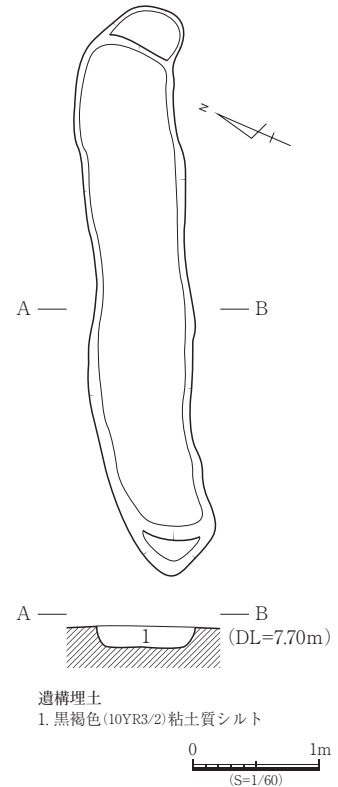


図2-38 SK-102

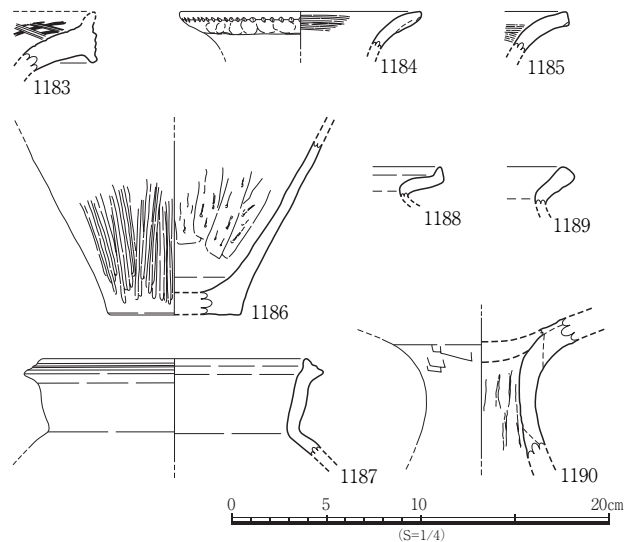


図2-39 SK-102出土遺物実測図

SK-103

調査区東端部, SB-101の東側で検出した舟形の土坑である。約半分は調査区外に延びているものと思われる。長辺3.87m以上, 短辺0.68m, 深さ19cmを測り, 長軸方向はN-19°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器92点と石製品2点がみられ, 弥生土器7点(1191~1197)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (図2-41 1191~1197)

1191~1195は壺である。1191は口縁部の破片である。口縁部は大きく外反し、端部にはヘラ状工具による刻目が不均等に施され、その下には小さな突帯が巡る。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1192は頸部の破片で、外面下端にはヘラ状工具による刺突文が施される。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。1193と1194は上胴部の破片である。1193の外面には楕円形浮文、1194の外面には小さな突帯の間に櫛描波状文が残る。いずれも胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1195は底部で、外面にはタテ方向のヘラナデ調整が施される。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1196と1197は甕である。1196は口縁部の破片で、外面には粘土紐を貼付し、わずかに煤の付着がみられる。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。1197は底部で、外底面にはハケ目が一部に残る。胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

SK-104 (図2-40)

調査区東端部、SB-101の東側柱を切った形で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.13m、短辺1.65m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-43°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器4点と石製品1点がみられ、弥生土器1点(1198)が図示できた。

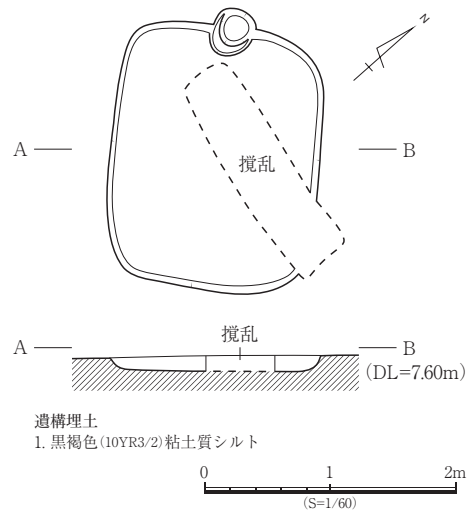


図2-40 SK-104

出土遺物

弥生土器 (図2-41 1198)

甕の口縁部の細片である。口縁部は外傾し、端部は内傾する平面をなす。外面には煤が付着する。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-105

調査区北東端部、ST-101に切られた形で検出した舟形状の土坑である。長辺1.11m以上、短辺

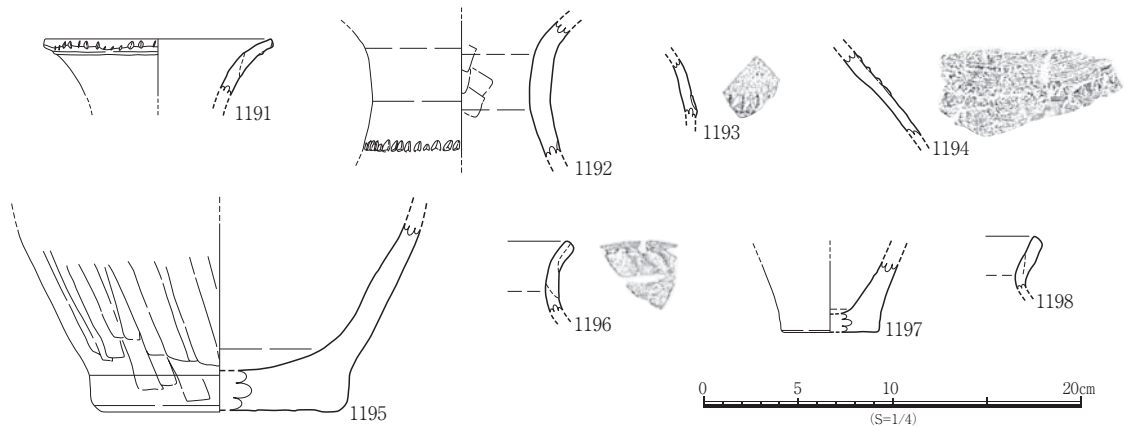


図2-41 SK-103・104出土遺物実測図

0.49m, 深さ9cmを測り, 長軸方向はN-43°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルト単一で, 出土遺物は皆無であった。

SK-106

調査区北東端部で検出した不整楕円形を呈するのではないかとみられる土坑で, 大半が調査区外にある。長径1.57m以上, 短径0.84m以上, 深さ5cmを測り, 長軸方向はN-2°-Eを示す。断面形は逆台形を呈するとみられる。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルト単一で, 出土遺物は皆無であった。

SK-107

調査区北東端部, ST-102に切られた形で検出した不整楕円形状の土坑である。長径2.43m以上, 短径1.20m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-25°-Wを示す。底面でピット1個を検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルト単一で, 出土遺物は皆無であった。

SK-108

調査区北東端部で検出した不整隅丸方形とみられる土坑で, 約北側半分が調査区外にある。長辺1.84m以上, 短辺1.94m, 深さ7cmを測り, 長軸方向はN-2°-Eを示す。底面でピット1個を検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルト単一で, 出土遺物は皆無であった。

SK-109

調査区北東端部, SK-110に切られた形で検出した不整楕円形状の土坑である。長径1.85m以上, 短径1.00m以上, 深さ7cmを測り, 長軸方向はN-14°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルト単一で, 出土遺物は皆無であった。

SK-110 (図2-42)

調査区北東端部, SK-109を切った形で検出した不整方形とみられる土坑で, 約北側半分が調査区外にある。長辺1.62m以上, 短辺2.11m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-15°-Wを示す。底面でピット1個を検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルト単一で, 出土遺物は皆無であった。

SK-111

調査区東部で, ST-103の南約8.0mで検出した不整楕円形の土坑である。長径1.99m, 短径1.65m, 深さ9cmを測り, 長軸方向はN-8°-Wを示す。底面でピット1個を検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルト単一で, 出土遺物は皆無であった。

SK-112

調査区北東部, ST-103の西約6.0mで検出した不整方形とみられる土坑で, 約北側半分が調査区外にあるとみられる。長辺2.84m以上, 短辺1.42m以上, 深さ9cmを測り, 長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は

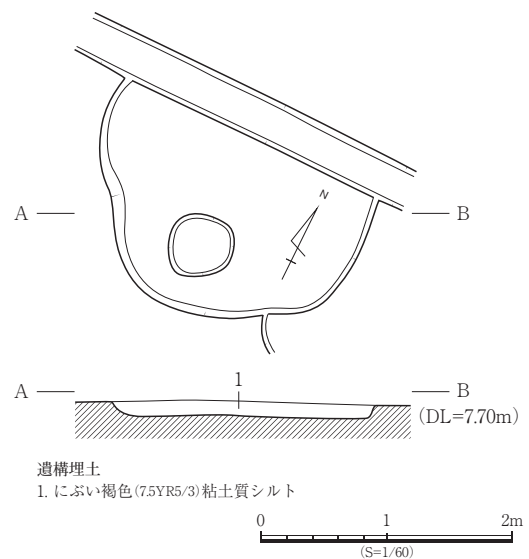


図2-42 SK-110

3. 遺構と遺物 (1) I 区

逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘土質シルト単一で、出土遺物は皆無であった。

SK-113

調査区南部、東より検出した舟形の土坑で、西側に一段深い掘り込みがある。長辺 3.15m、短辺 0.60m、深さ 20 cm を測り、長軸方向は N-62°-W を示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒色 (5YR2/1) 粘土で、出土遺物は皆無であった。

SK-114

調査区ほぼ中央部で検出した舟形の土坑である。長辺 1.74m、短辺 0.65m、深さ 17 cm を測り、長軸方向は N-10°-W を示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒色 (7.5YR2/1) シルト質粘土で、出土遺物は弥生土器 1 点がみられたが、復元図示できなかった。

表 2-4 弥生時代土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径 (m)	短辺・短径 (m)	深さ (cm)		
SK-101	舟形	7.12	0.50	15	N-55°-E	
SK-102	〃	4.49	0.82	9	N-65°-E	
SK-103	〃	(3.87)	0.68	19	N-19°-E	
SK-104	隅丸方形	2.13	1.65	11	N-43°-W	
SK-105	舟形	(1.11)	0.49	9	N-43°-W	
SK-106	不整楕円形	(1.57)	(0.84)	5	N-2°-E	
SK-107	〃	(2.43)	1.20	14	N-25°-W	
SK-108	不整隅丸方形	(1.84)	1.94	7	N-2°-E	
SK-109	不整楕円形	(1.85)	(1.00)	7	N-14°-W	
SK-110	不整方形	(1.62)	2.11	10	N-15°-W	
SK-111	不整楕円形	1.99	1.65	9	N-8°-W	
SK-112	不整方形	(2.84)	(1.42)	9	N-86°-E	
SK-113	舟形	3.15	0.60	20	N-62°-W	
SK-114	〃	1.74	0.65	17	N-10°-W	

v 溝跡

5 条を溝跡として報告しているが、SK-101 や SK-102 のような舟形の土坑がみられることから土坑として捉えた方が適切なものもある。ここでは概して細長いものを溝跡としているが、用排水などに使用されたものは確認されていない。

SD-101 (図 2-43)

調査区東端で検出した細長い東西溝で、東側は調査区外に延びる。検出幅 25 cm、深さ 2~12 cm で、基底面は東 (7.474m) から西 (7.469m) に向かってやや傾斜し、主軸方向は N-88°-E を示し、2.00m を検出した。断面形は逆台形ないし舟底状を呈する。埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

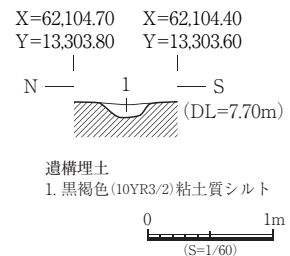


図 2-43 SD-101

SD-102 (図2-44)

調査区北東端、ST-101に切られた形で検出した細長い東西溝である。検出幅37~45cm、深さ7~18cmで、基底面は、東側が一段掘り込まれており、西(7.583m)から東(7.486m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-84°-Eを示し、3.91mを検出した。断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

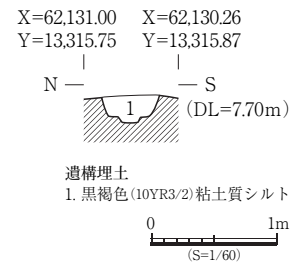


図2-44 SD-102

SD-103 (図2-45)

調査区中央部東よりで検出した細長い南北溝である。検出幅30~80cm、深さ8~17cmで、基底面は北(7.938m)から南(7.768m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-13°-Wを示し、10.60mを検出した。断面形はU字形を呈する。埋土は粘土混じりの褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

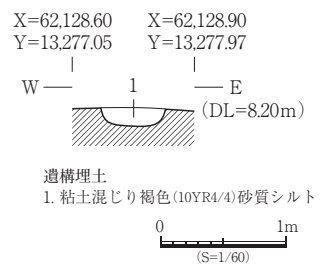


図2-45 SD-103

SD-104 (図2-46)

調査区ほぼ中央部で検出した細長い南北溝である。検出幅32~45cm、深さ6~13cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.953~7.967mを測り、主軸方向はN-9°-Eを示し、3.91mを検出した。断面形はU字形を呈する。埋土は粘土混じりの褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、復元図示できなかった。

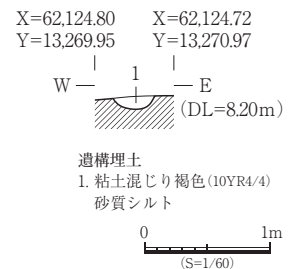


図2-46 SD-104

SD-105

調査区南西端部、SP-101の基底面で検出した東西溝で、西端部が南に短く屈曲、東に向かって幅が減少する。検出幅30~90cm、深さ5~17cmで、基底面は西(6.773m)から東(7.693m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-72°-Eを示し、10.32mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5YR3/1)シルト質粘土単一であった。出土遺物は皆無であった。

viピット

検出したピット総数は408個で、建物跡等には復元できなかったが、柱穴と判断されるピットも少なからずみられる。また、SB-101の西側を中心に平面形が不整形円形や不整形楕円形などを呈する径1.0m前後で深さ5cm前後のピットを約30個検出しているが、遺存状態が良くない上に出土遺物も希薄でその性格等については言及することはできない。ここでは復元図示できた遺物が出土しているピット5個を報告する。P-103からは豚の骨が出土しており、注目される。

P-101

調査区東端部、SB-101の身舎内で検出した円形のピットである。径18cmで、深さ4cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には図示した磨石1点(1199)がみられた。

出土遺物

石製品(図2-47 1199)

3. 遺構と遺物 (1) I区

磨石で、扁平な河原石を使用しており、二つに割れていた。両面にわずかではあるが敲打痕が残る。

P-102

調査区東端部, SB-101の南妻柱の南隣で検出した柱穴とみられるピットである。径29~31cmのほぼ円形で、深さ29cmを測り、柱径は15cm前後ではないかとみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに地山のブロックを含んでいた。出土遺物には図示した剥片1点(1200)のみがみられた。

出土遺物

石製品(図2-47 1200)

サヌカイトの剥片で、2カ所に自然面が残る。

P-103

調査区南東端部で検出した円形のピットである。径23cmで、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに地山のブロックを含んでいた。出土遺物には骨片1点があり、分析の結果、豚の骨であることが判明した。

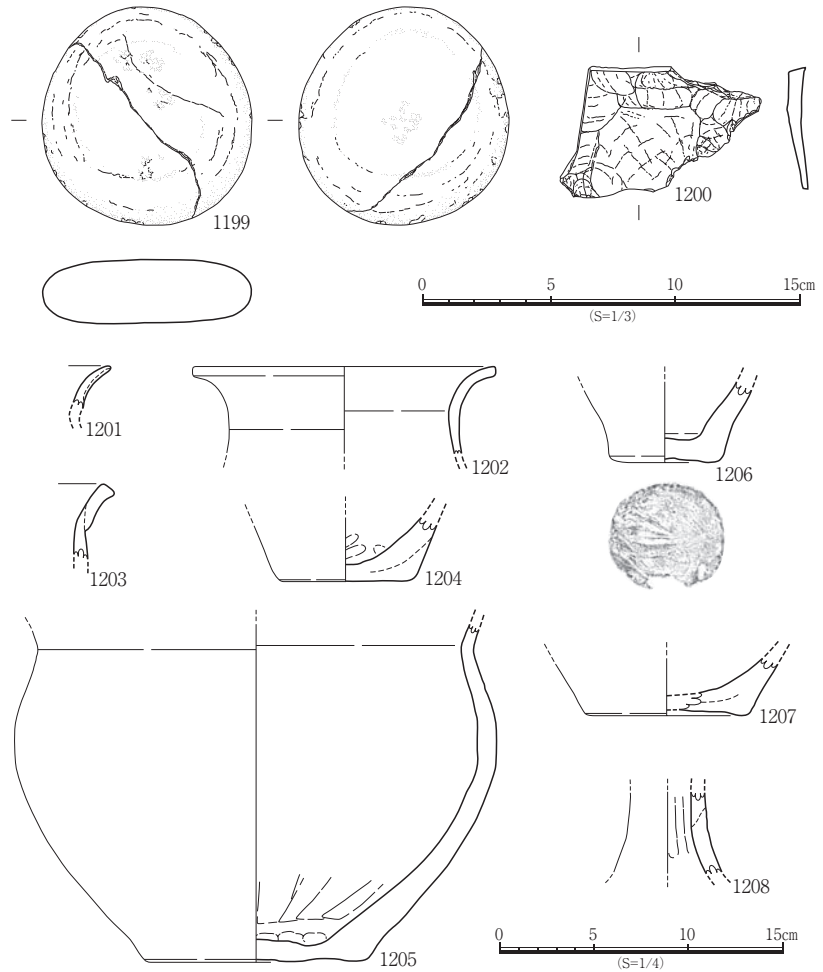
P-104

調査区南東部, SK-113の北側で検出した円形のピットである。径28cmで、深さ12cmを測る。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/4)シルト質粘土であった。出土遺物には図示した弥生土器1点(1201)がみられた。

出土遺物

弥生土器(図2-47 1201)

甕の口縁部の細片である。外反する口縁部外面には粘土紐を貼付する。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。



P-105

調査区中央部, SK-114の西側で検出した楕円形のピットである。径43~50cmで、深さ28cmを測る。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/4)砂質シルトであった。遺物は規模の割に多く、弥生土器99点が出土した。この内復元図示できたのは7点(1202~1208)であった。

出土遺物

弥生土器(図2-47 1202

図2-47 P-101・102・104・105出土遺物実測図

～1208)

1202は壺で、口縁部はやや内傾して立ち上る頸部から外反し、端部は直立する平面をなす。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1203～1207は甕である。1203は口縁部で、端部は内傾する平面をなす。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1204～1207は底部を中心に残存するもので、1204は外面にナデ調整、内面に指ナデ調整を施す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。1205は底部から頸部にかけて残存しており、口縁部は丸味のある胴部から屈曲し外傾するものとみられる。胴部最大径は上胴部にあり、内外面に煤が付着する。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。1206と1207は上げ底風となる。1206の外底面にはヘラ削りの後にナデ調整が施される。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。1207は内面にナデ調整を施す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1208は高杯で、脚柱部が残存する。外面にはナデ調整、内面には指ナデ調整を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

vii水溜まり状遺構

自然地形を利用したと思われる低湿地部分を水溜まり状遺構として報告する。

SP－101 (図2－48)

調査区南部で検出した水溜まり状の遺構で、南に広がる。掘り方と判断される傾斜がみられたことから人為的なものとして捉えたが、基本的には地形の落ち込みにできた低湿地部分に手を加え利用したものと判断される。この続きはII区にも広がる。東西の検出長約64.0m、南北の検出長約14.0m、深さ70cmを測る。北側斜面部は南に向かって緩やかに傾斜し、断面形は概ね逆台形を呈する。堆積土は大きく3層に分層され、いずれの層にも鉄分の沈殿がみられ、下層ほど粘質度が高くなる。上層から細粒砂混じりの黒色(5YR2/1)粘土質シルト、褐灰色(5YR4/1)シルト質粘土(少量の有機物を含む)、シルト混じり褐灰色(5YR5/1)粘土となっており、2層と3層には少量の有機物が含まれていた。遺物の大半は1層から出土し、弥生土器881点と石製品1点がみられ、弥生土器20点(1209～1228)と石製品(1229)が図示できた。

出土遺物

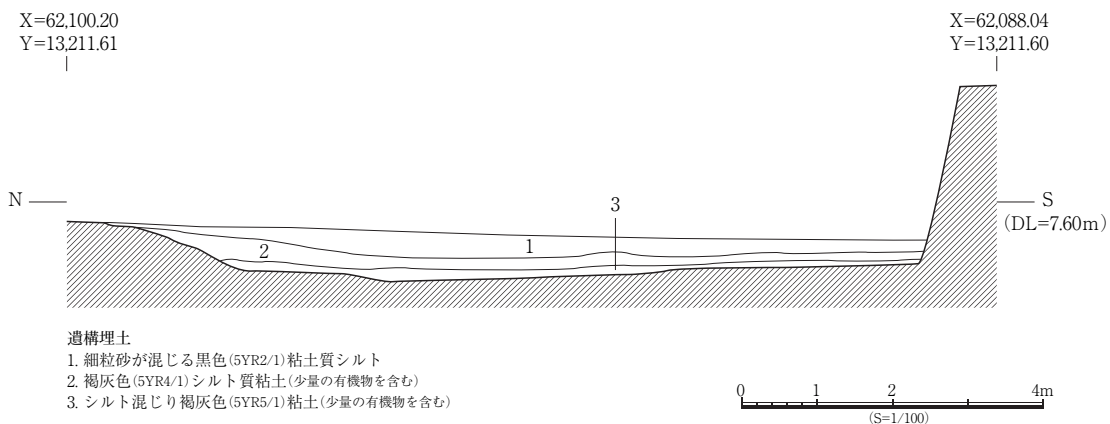


図2－48 SP－101

3. 遺構と遺物 (1) I区

弥生土器(図2-49 1209~1228)

1209と1210は壺である。1209は口縁部の破片で、端部を拡張し棒状工具による刺突文を施す。1210は卵倒状の胴部から頸部はやや内傾気味に直立し、口縁部は外傾する。口頸部外面にはハケ調整、胴部外面にはタタキを施した後に頸部から上胴部にかけてタテ方向のヘラ磨きを施す。口頸部内面にはハケ調整、胴部内面にはナデ調整を施す。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1211から1223は甕で、1211から1218は口縁部が残存するものである。いずれも口縁部は短く、胴

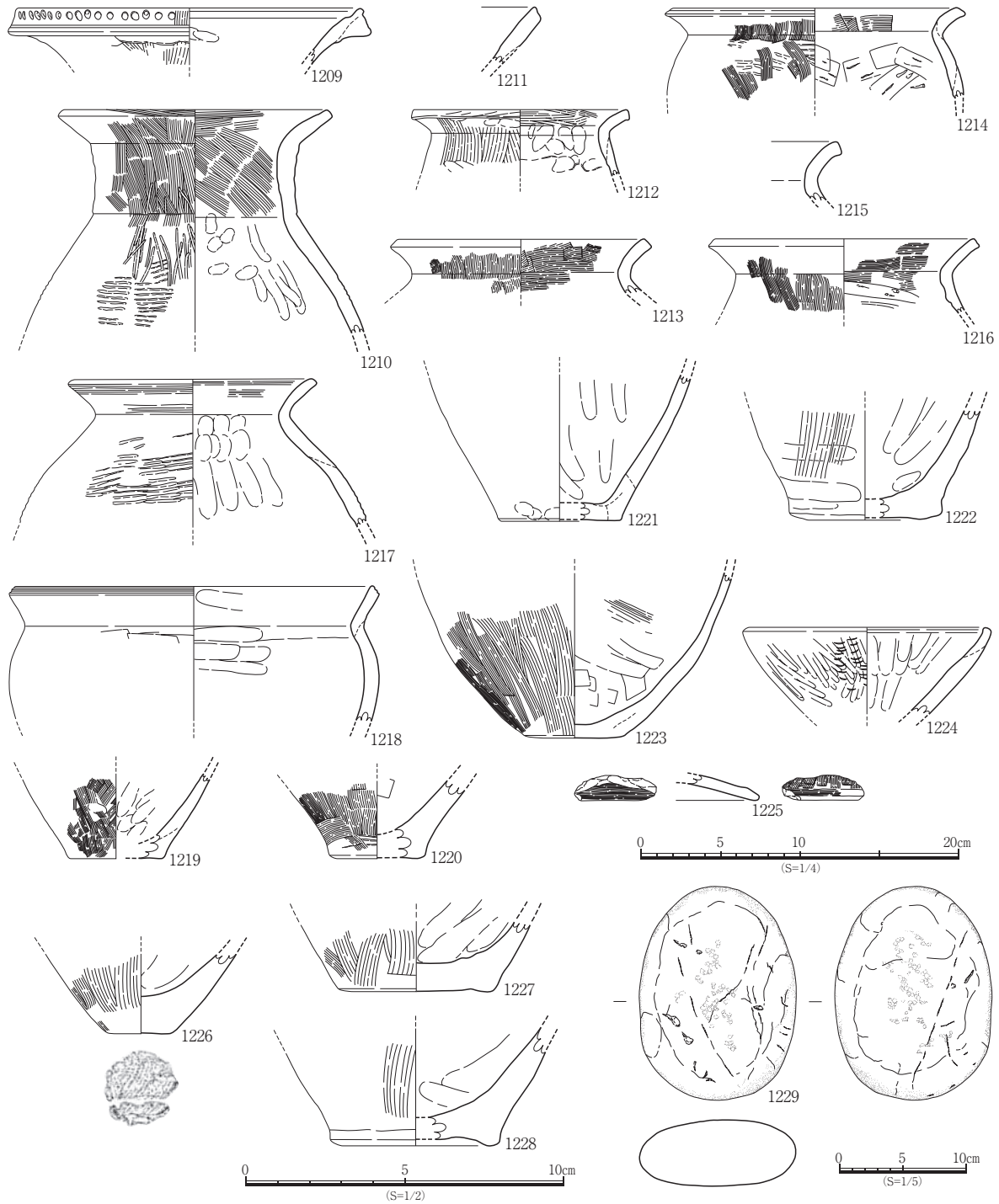


図2-49 SP-101出土遺物実測図

部からくの字状をなす。1211は口縁部が外傾し、1212から1217の口縁部は外反する。1211以外の器面にはハケ調整が施され、1213の外面には煤が付着し、1214と1216の胴部内面にはヘラ削り、1214と1217の外面にはタタキが施される。1218は丸い胴部とみられるもので、口縁端部には擬凹線文が施される。これらはいずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。1219から1223は底部が残存するものである。1221が内外面ともナデ調整である以外いずれも外面にはハケ調整、内面には指ナデ調整ないしヘラナデ調整を施す。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

1224は鉢で、外面にはタテ方向のヘラ磨き、内面には指ナデ調整を施す。また、外面にはタテ方向に2列のツメ痕が残る。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

1225は高杯の裾部とみられる破片で、器面には細かなハケ調整を施した上に端部にヨコナデ調整を加える。胎土には中粒砂から極粗粒砂を主に極細粒中礫もわずかに含む。

1226から1228はミニチュア(小型精製土器)とみられるものである。いずれも甕で、底部が残存し、外面にはハケ調整、内面には指ナデ調整を中心としたナデ調整を施す。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。

石製品(図2-49 1229)

磨石で、扁平な河原石を使用している。わずかではあるが両面に弱い敲打痕が残る。

② 古代

方形の柱穴で構成された建物跡を中心に掘立柱建物跡12棟、塀・柵列跡1列、土坑9基、溝跡20条などを検出した。

i 掘立柱建物跡

全般に小規模であるが方形の柱穴で構成された建物跡10棟と布掘り柱掘り方の建物1棟、円形の柱穴で構成された建物跡1棟を復元できた。前二者は官衙関連遺構と捉えることができ、一つの単位(ユニット)とみられる。重複するものや近接するものなどがみられ、かつ、棟方向に違いがあり、数時期の変遷が考えられる。また、北側にも一定の拡がりが見られる。

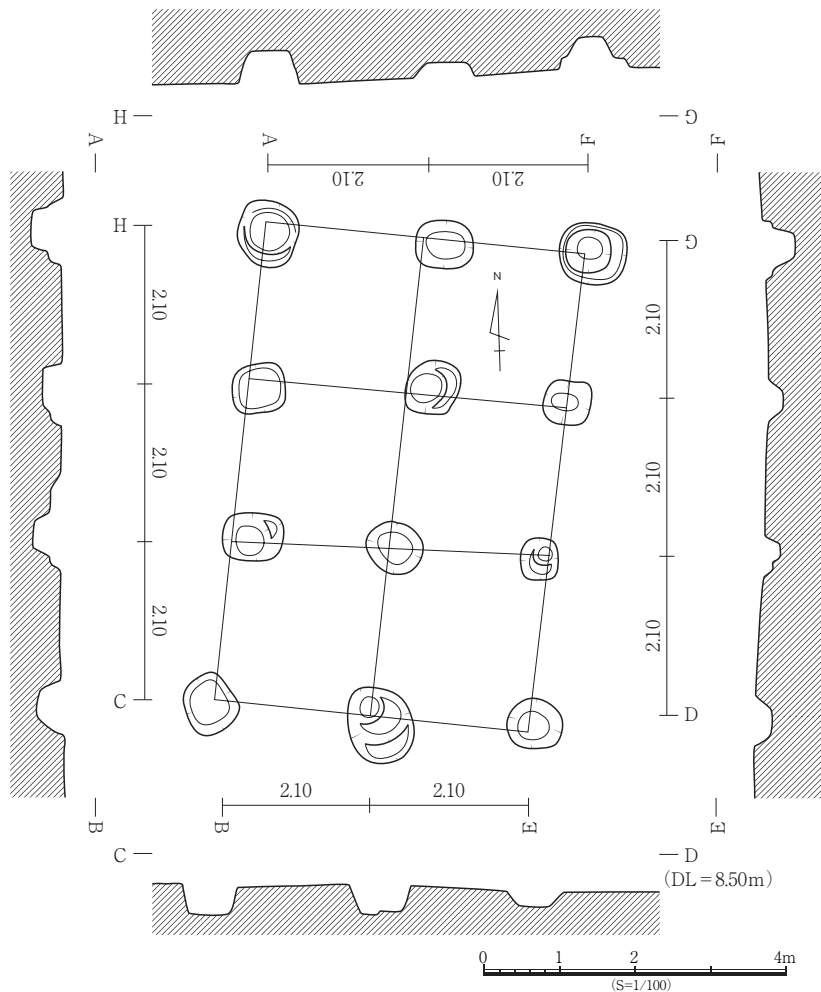


図2-50 SB-103

SB-103 (図2-50)

調査区北部東よりで検出した桁行3間(6.30m)、梁行2間(4.20m)の南北棟総柱建物跡で、棟方向はN-8°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が2.10m(7.0尺)等間隔、梁行(東西)が2.10m(7.0尺)等間隔である。柱穴の平面形は楕円形や隅丸方形がみられるものの、方形を指向しており、一辺47~111cmを測り、その平均は70cm前後である。柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は地山の粗粒中礫を中心とした礫をわずかに含む粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルトないし砂混じり灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器22点、土師器14点、須恵器7点がみられ、北西隅の柱穴から出土した弥生土器1点(1230)、南西隅の柱穴から出土した須恵器1点(1231)、西側柱北から1間目の柱穴から出土した須恵器3点(1232~1234)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図2-51 1230)

甕で、口縁部は肩部からくの字状をなし、端部を下方にわずかに拡張する。口縁部内面と肩部外面にハケ目が残る。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

須恵器(図2-51 1231~1234)

1231~1233は杯蓋で、いずれも口縁部の破片で、天井部から斜め下方に屈曲し、端部は丸く仕上げる。いずれも胎土には白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

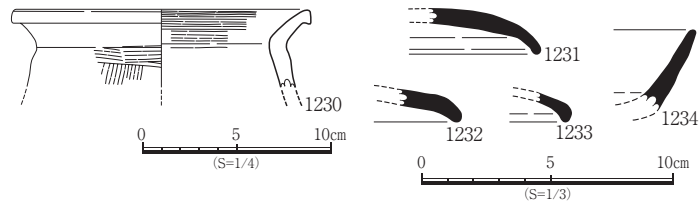


図2-51 SB-103出土遺物実測図

1234は杯身で、体部から口縁部は斜め外方に立ち上る。胎土には白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

SB-104 (図2-52)

調査区北部で検出した桁行3間(4.50~4.65m)、梁行2間(3.45~3.60m)と歪みのある東西棟建物跡で、棟方向はN-80°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.20m(4.0尺)~1.95m(6.5尺)、梁行(南北)が1.65m(5.5尺)~1.95m(6.5尺)とそれぞれ区々である。柱穴の平面形は不整形や隅丸方形がみられるものの、方形を指向しており、一辺42~112cmを測り、各隅柱を大きくしている傾向がある。柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は地山の粗粒中礫を中心とした礫をわずかに含む暗赤褐色(5YR3/2)砂質シルトないし砂混じり灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、土師器55点、須恵器12点、土師質土器1点、石製品1点がみられ、南東隅の柱穴から出土した土師器1点(1235)、北東隅の柱穴から出土した土師器1点(1236)、東妻柱中央の柱穴から出土した土師器1点(1237)と須恵器1点(1239)、北側柱東から1間目の柱穴から出土した須恵器1点(1238)、南西隅の柱穴から出土した須恵器2点(1240・1241)と土師質土器(1243)、北西隅の柱穴から出土した須恵器1点(1242)が図示できた。

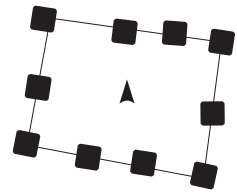


図2-52 SB-104

出土遺物

土師器(図2-53 1235~1237)

1235は皿で、内外面には丁寧なヨコ方向のヘラ磨きが施される。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1236は高杯で、杯部の一部が残存し、内外面にヨコ方向のヘラ磨きが施されていたとみられるものの外面は摩耗しており不明瞭である。胎土には中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1237は杯蓋で、宝珠形つまみが残る。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から中粒砂をわずかに含む。
須恵器(図2-53 1238~1242)

1238~1240は杯蓋である。1238は口縁部の細片で、端部を下方に曲げる。1239は大型の杯蓋で内面に研磨痕と墨痕がみられ硯に転用されたものと考えられる。天井部から口縁部は丸味があり、端部を下方に曲げる。いずれも胎土には白色中粒砂をわずかに含む。1240は平らな天井部から口縁部を斜め下方に曲げる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

1241は長頸壺で、口縁部はほぼ直立し、端部を細く仕上げる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

1242は甕の胴部破片である。外面には平行のタタキの後に回転カキ目調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図2-53 1243)

杯で、口縁部はやや内湾気味に上がる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

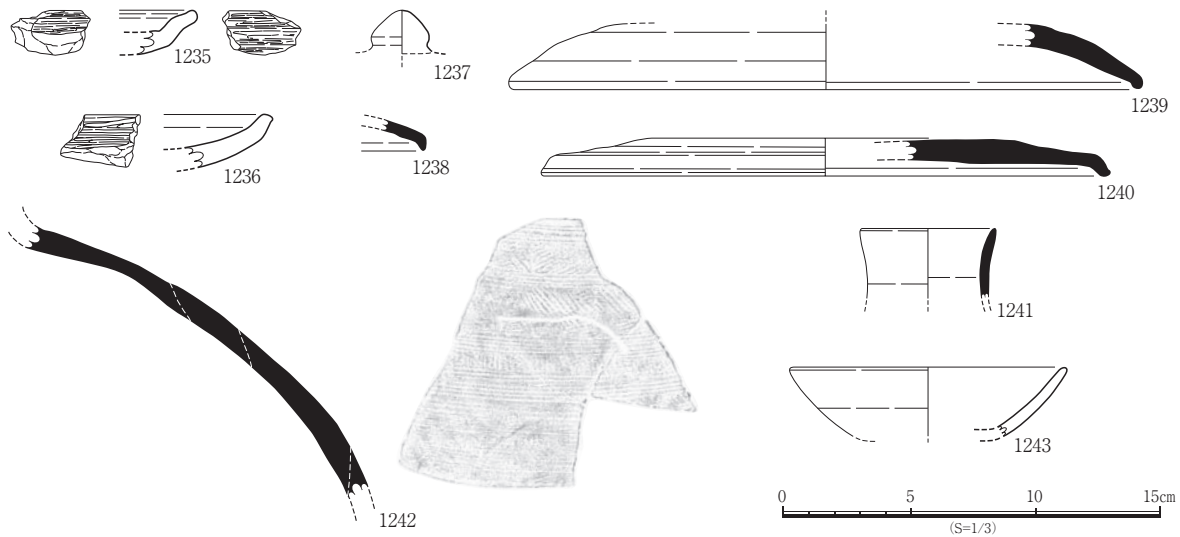


図2-53 SB-104出土遺物実測図

SB-105(図2-54)

用水路があったため側柱2間分は未検出であるが、桁行3間(4.95m)、梁行2間(3.30m)の東西棟建物跡とみられるもので、調査区北部に位置し、棟方向はN-76°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.65m(5.5尺)等間隔ではないかとみられ、梁行(南北)が1.65m(5.5尺)等間隔である。柱穴の平面形は不整楕円形や隅丸方形がみられるものの、方形を指向しており、一辺38~74cmを

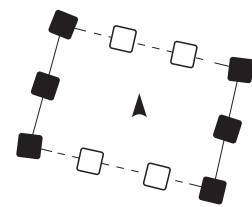


図2-54 SB-105

測る。柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトないし地山の粗粒中礫を中心とした礫をわずかに含む暗赤褐色(5YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生

3. 遺構と遺物 (1) I区

土器4点, 土師器7点, 須恵器13点, 土師質土器1点がみられ, 北西隅の柱穴から出土した土師器1点(1244), 須恵器2点(1245・1246), 土師質土器(1247)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-55 1244)

杯蓋で, 口縁端部を下方に屈曲さす。胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

須恵器(図2-55 1245・1246)

いずれも甕の胴部破片で, 1245の外面にはタタキの後に回転カキ目調整, 内面には同心円文のタタキ, 1246の外面には平行のタタキの後にナデ調整, 内面には同心円文のタタキの後にナデ調整をそれぞれ施す。いずれも胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-55 1247)

皿で, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面には回転ナデ調整の痕跡が残る。口縁部は内側に折り曲げる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

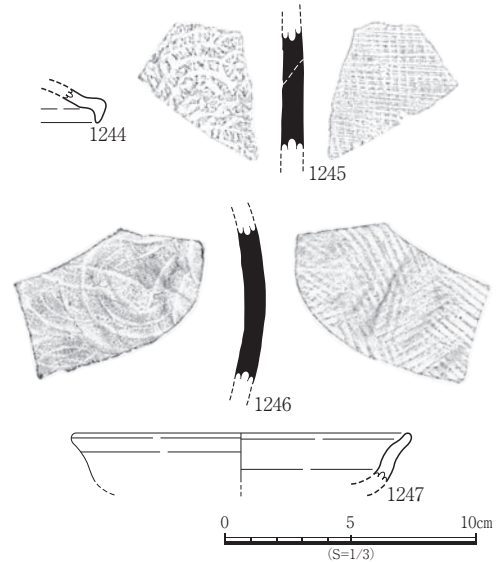


図2-55 SB-105出土遺物実測図

SB-106(図2-56)

用水路があったため西側の柱穴は未検出であるが, 西側の調査区では関連する柱穴が確認できないことから桁行3間(5.40m), 梁行2間(3.00m)程度の東西棟建物跡とみられるもので, 調査区北部に位置し, 棟方向はN-74°-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50m(5.0尺)~1.80m(6.0尺)程度とみられ, 梁行(南北)が1.50m(5.0尺)等間隔である。柱穴の平面形は不整形

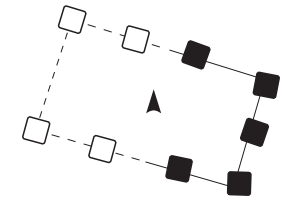


図2-56 SB-106

ないし隅丸方形を呈し, 一辺50~80cmを測る。柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は地山の粗粒中礫を中心とした礫が混じる暗赤褐色(5YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点, 土師器19点, 須恵器3点, 土師質土器1点, 瓦1点がみられ, 南東隅の柱穴から出土した土師器1点(1248), 南側柱東から1間目の柱穴から出土した土師器3点(1249・1251・1252), 東妻柱真中の柱穴から出土した土師器1点(1250), 北側柱東から1間目の柱穴から出土した須恵器1点(1253)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-57 1248~1252)

1248と1249は杯蓋である。1248は口縁部細片であり, 明確ではないが口縁部とみられ, 端部をわずかに曲げる。1249は丸味のある天井部から口縁端部を下方に屈曲さす。いずれも胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1250は皿で, 口縁部内面には斜め方向, 外面にはヨコ方向の丁寧なヘラ磨きが施される。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1251は杯で, 口縁部を内側に折り曲げ, ほぼ全面にヨコ方向のヘラ磨きを施す。そのため成形技法は判然としないが, 断面から粘土紐巻き上げロクロ成形の可能性も考えられる。

1252は甕で、口縁部が胴部からくの字状をなす。内外面にはハケ調整が施される。胎土は比較的精良で、粗粒砂をわずかに含む程度であった。

須恵器(図2-57 1253)

杯蓋で、口縁部は天井部から緩やかに下り、端部を斜め下外方にわずかに曲げる。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

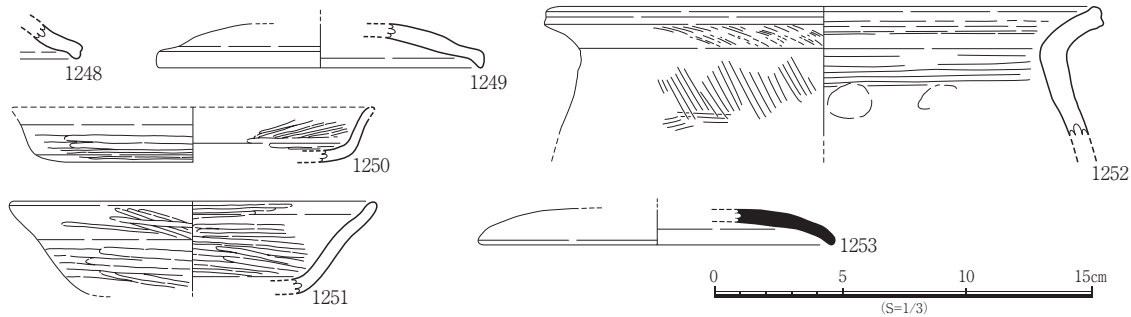


図2-57 SB-106出土遺物実測図

SB-107(図2-58)

調査区中央部で検出した桁行2間(4.65m)、梁行2間(3.45m)とみられる南北棟建物跡で、棟方向はN-13°-Eを示す。南妻柱中央の柱穴と西側柱中央の柱穴が未検出である。柱間寸法は、桁行(東西)が2.25m(7.5尺)と2.40m(8.0尺)、梁行(南北)が1.65m(5.5尺)と1.80m(6.0尺)と区々である。また、柱穴の平面形は、東側柱の柱穴が一辺68~91cmの方形であるのに対し、他の柱穴は径37~70cmの円形ないし不整楕円形を呈している。柱径はいずれも20cm前後ではなかろうか。柱穴の埋土は地山の粗粒中礫を中心とした礫が混じる暗赤褐色(5YR3/2)砂質シルトないし粘土混じりの褐色(10YR4/4)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器40点、土師器74点、須恵器19点、土師質土器1点、鉄滓2点がみられ、北東隅の柱穴から出土した土師器3点(1254~1256)と須恵器7点(1257・1259~1264)および土師質土器(1265)、南東隅の柱穴から出土した須恵器1点(1258)が図示できた。

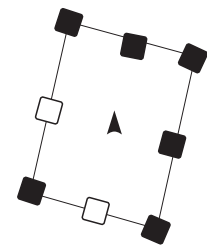


図2-58 SB-107

出土遺物

土師器(図2-59 1254~1256)

1254は杯蓋で、扁平な擬宝珠形つまみが残る。器面は摩耗するが、ヘラ磨きを施した可能性がある。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1255は皿とみられる底部の細片で、杯の可能性もある。器面は内外面ともヨコ方向のヘラ磨きが施される。胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1256は杯で口縁部が残存し、内外面ヨコ方向のヘラ磨きが施される。胎土には中粒砂をわずかに含む。

須恵器(図2-59 1257~1264)

1257・1258は杯蓋で、口縁端部を下方に曲げる。1258の天井部は丸味を有し、外面には回転ヘラ削り調整を施す。いずれも胎土には白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1259・1260は杯身で、1260の底部は深い。成形はいずれも粘土紐巻き上げロクロ成形で、回転ナデ

調整の後に、内底面にはナデ調整を加え、底部を回転ヘラ切りで切り離し、高台を付ける。1260の外底面にはツメ痕が残る。いずれも胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1261～1264は高杯である。1261と1262は杯部が残存し、前者は底部が丸く、外面には回転ヘラ削り調整が施され、胎土には白色細粒砂から細粒中礫を比較的多く含む。後者は底部が平らで、口縁部が斜め外上方に開き端部を上方に短く屈曲さす。胎土には細粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。1263・1264は脚台部が残存し、いずれも裾部が開く。胎土には、1263が中粒砂を中心に白色細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含み、1264が白色中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-59 1265)

高杯で、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形となり、裾部は大きく開き、端部を下方に屈曲さす。製作技法は須恵器と全く同じである。器面は回転ナデ調整で、胎土には中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

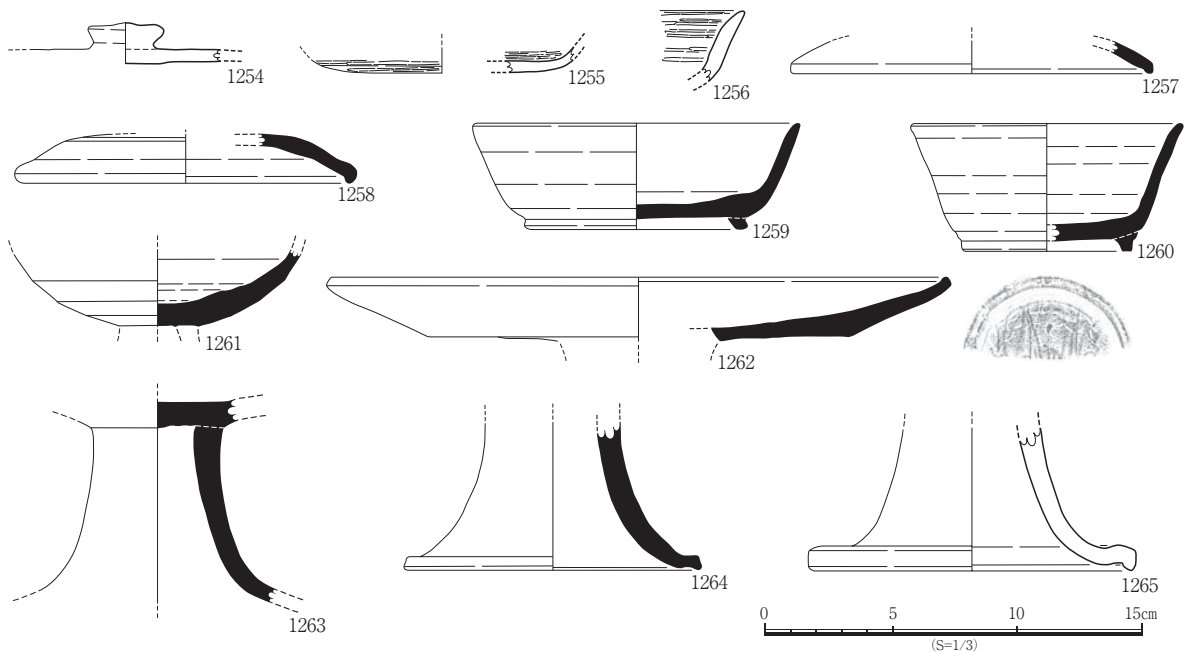


図2-59 SB-107出土遺物実測図

SB-108(図2-60)

調査区中央部で検出した桁行3間(4.65m)、梁行2間(3.30m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-12°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5.0尺)・1.65m(5.5尺)、梁行(東西)が1.35m(4.5尺)～1.95m(6.5尺)と区々である。柱穴の平面形は方形や隅丸方形が中心であるが、北妻柱の柱穴には円形のものもみられ、方形のもので一辺60～85cm、円形のもので径35～50cmを測る。柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトないし地山の粗粒中礫を中心とした礫混じりの暗赤褐色(5YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器8点、土師器2点、須恵器1点がみられ、東側柱南から1間目の柱穴から出土した土師器1点(1266)と北西隅の柱穴から出土した須恵器(1267)が図示できた。

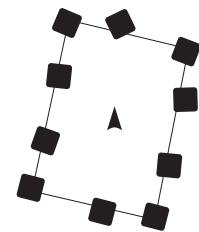


図2-60 SB-108

出土遺物

土師器(図2-61 1266)

盤で、高さ3.0cmの脚台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図2-61 1267)

壺で、肩の張る胴部が残存する。外面は自然釉がかりハダ荒れがみられる。胎土には白色中粒砂をわずかに含む。

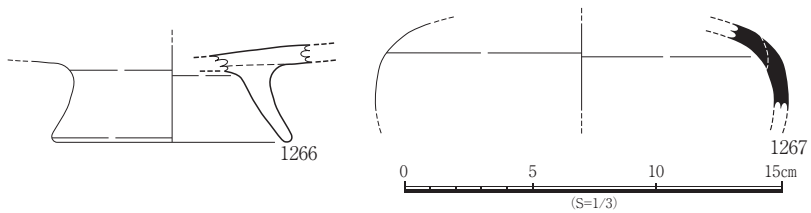


図2-61 SB-108出土遺物実測図

SB-109(図2-62)

調査区中央部南よりで検出した桁行3間(4.65m)、梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で、各妻柱真中の柱穴は未検出である。棟方向はN-9°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.35m(4.5尺)~1.80m(6.0尺)と区々で、梁行(東西)が1.80m(6.0尺)等間隔ではないかとみられる。柱穴の平面形は方形や隅丸方形が中心であるが、南東隅の柱穴には不整円形のものもみられ、方形のもので一辺40~120cm、不整円形のもので径40~45cmを測る。柱径は20cm前後とみられる。

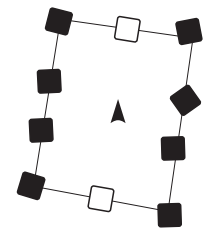


図2-62 SB-109

柱穴の埋土は黄色シルト質粘土のブロックと地山の粗粒中礫を中心とした礫をわずかに含む黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土ないし黒褐色(5YR3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器6点、土師器71点、須恵器4点、土師質土器3点がみられ、北東隅の柱穴から出土した土師器4点(1268・1273・1275・1279)・土師質土器1点(1284)、東側柱北から1間目の柱穴から出土した土師器8点(1269・1270・1272・1274・1276~1278・1280)・須恵器1点(1281)・土師質土器1点(1283)、西側柱北から1間目の柱穴から出土した土師器1点(1271)および北西隅の柱穴から出土した土師質土器1点(1282)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-63 1268~1280)

1268・1269は杯蓋である。1268は器面全面にヘラ磨きが施され、胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1269は扁平な天井部に中央部がやや盛り上がる擬宝珠形つまみが付き、口縁端部を下方に短く屈曲さす。器面は摩耗が著しいが、ヘラ磨きが一部に残る。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から中粒砂を多く含む。

1270~1275は杯身である。1270は口縁部の破片で、口縁部を内側にわずかに折り込む。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。1271~1274はいずれも口縁部の破片で、端部を丸く仕上げ、内外面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。形態的にも類似しており、1272~1274は、ヘラ磨きの単位などからみて同一個体の可能性がある。いずれも胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1275は口縁部を欠く。形態・調整技法からして1272~1274の底部になるもので、底部外端部に高さ0.4cmの高台が付く。底部の切り離しはヘラ切りによる。

1276~1280は皿で、大きさによって2種類に分れ、1280は摩耗が著しく調整は不明ではあるが成形技法と調整などはほぼ同じで、口縁部は内側に折り返し、器面全面にヨコ方向のヘラ磨きを施す。

3. 遺構と遺物 (1) I区

胎土は、1276 が細粒砂をわずかに含み、1277・1279 が中粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂をわずかに含み、1278・1280が中粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図2-63 1281)

杯蓋で、口縁部は天井部から真直ぐ下り、端部を下方に屈曲さす。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-63 1282~1284)

1282と1283は杯、1284は椀である。1282は口縁部の破片で、内側に折り返す。1283は底部の破片で、外底面には回転ヘラ切りの後にヘラ磨きを施す。1284には幅1.2cm、高さ0.4cmの高台が付く。いずれも胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

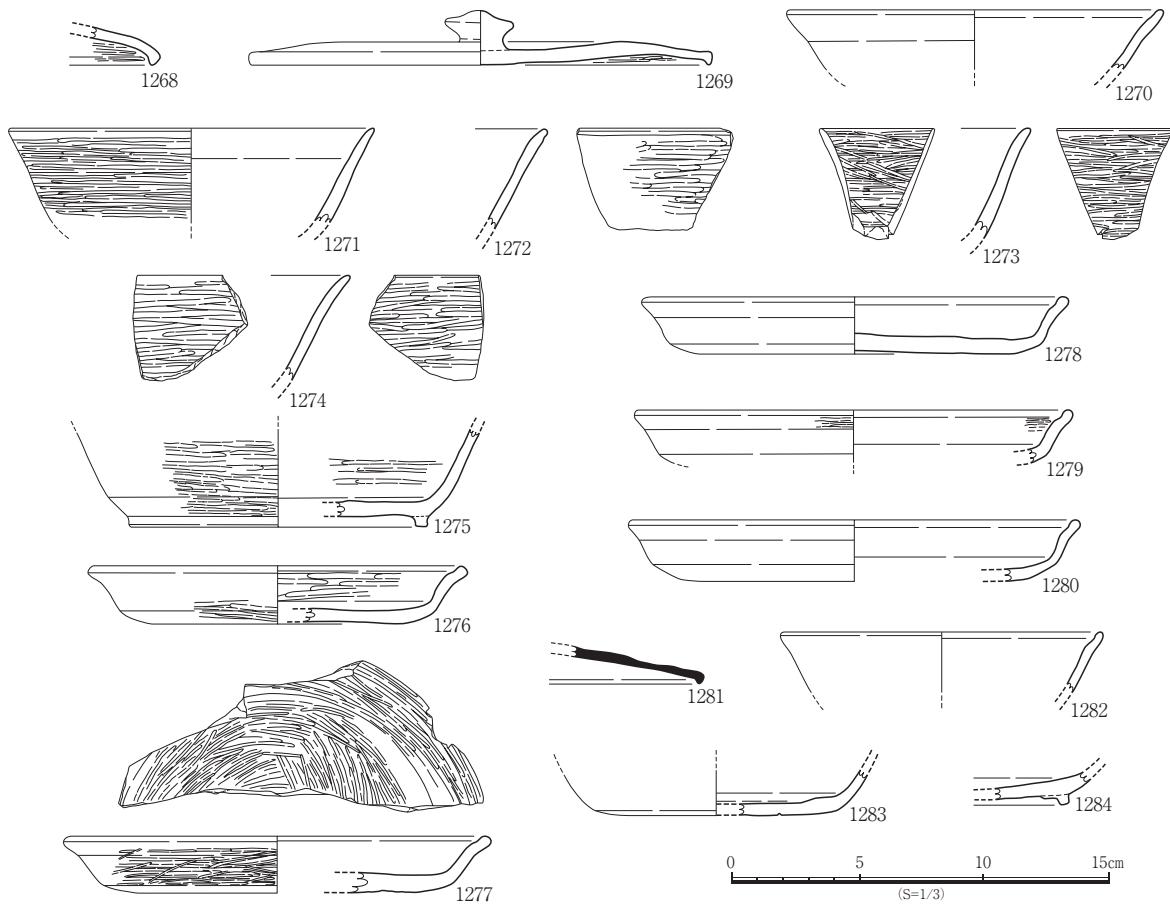


図2-63 SB-109出土遺物実測図

SB-110(図2-64)

調査区中央部で検出した桁行3間(5.70m)、梁行2間(4.35m)とやや歪みのある東西棟建物跡で、棟方向はN-78°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.65m(5.5尺)~2.10m(7.0尺)と区々で、梁行(南北)が2.10m(7.0尺)と2.25m(7.5尺)である。柱穴の平面形は方形や隅丸方形が中心であるが、各妻柱真中の柱穴は円形で、方形のもので一辺40~90cm、円形のもので径30~40cmを測る。柱径は15~20cmとみられる。柱穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトないし黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土であった。出土遺物は皆無であった。

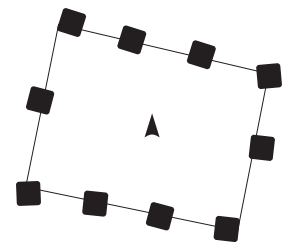


図2-64 SB-110

SB-111 (図2-65)

調査区中央部やや西よりで検出した桁行3間(4.50m)、梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-8°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5.0尺)等間隔、梁行(東西)が南妻柱で1.80m(6.0尺)等間隔、北妻柱で1.65m(5.5尺)と1.95m(6.5尺)である。柱穴の平面形は、北妻柱真中の柱穴が不整円形(径42~53cm)である以外、方形や隅丸方形で一辺58~110cmを測る。柱径は15~20cmとみられる。柱穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器70点、土師器43点、須恵器16点、土師質土器1点がみられ、東側柱南から1間目の柱穴から出土した土

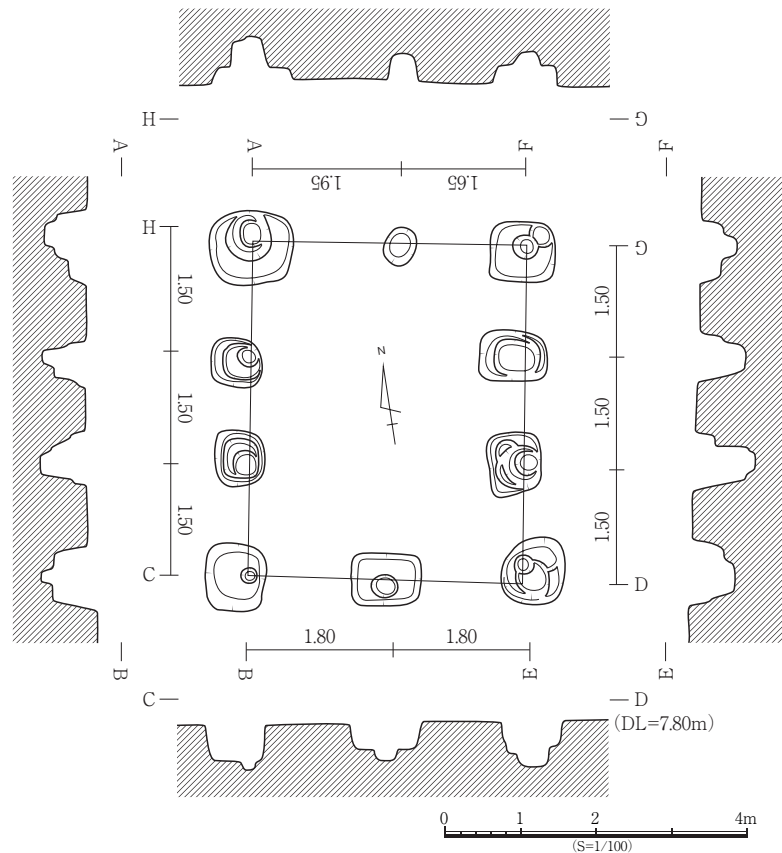


図2-65 SB-111

師器1点(1285)・土師質土器(1299)、南東隅の柱穴から出土した土師器2点(1286・1287)・須恵器4点(1289・1293・1297・1298)、西側柱南から1間目の柱穴から出土した須恵器1点(1288)、南妻柱真中の柱穴から出土した須恵器2点(1290・1291)、西側柱北から1間目の柱穴から出土した須恵器1点(1292)、北西隅の柱穴から出土した須恵器2点(1294・1295)および北東隅の柱穴から出土した須恵器1点(1296)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-66 1285~1287)

1285は杯蓋で、口縁端部を下方に折り曲げる。1286・1287は杯で、口縁部を内側に折り曲げ、器面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。いずれも胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

須恵器(図2-66 1288~1298)

1288~1291は杯蓋で、いずれも同形態で、平らな天井部から口縁部が斜め外下方に下り、端部を下方に曲げる。天井部には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、天井部内面にはナデ調整を加える。いずれも胎土には白色細粒砂から極細粒砂をわずかに含む。

1292は大型の杯身で、器面は摩耗が著しく調整は不明である。胎土には白色中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

1293は皿で、口縁部は内側に折り返し、内外面には火礫がみられる。胎土には白色中粒砂を比較的

3. 遺構と遺物 (1) I区

多く含む。

1294～1298は甕で、1294は口縁部の破片で、口縁部は外反し、端部を肥厚する。1295～1298は胴部の破片で、外面には平行ないし格子目状のタタキ、内面には同心円文のタタキを施す。1296の内面のみタタキ目はみられず、ナデ調整のみを施す。いずれも胎土には白色細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図2-66 1299)

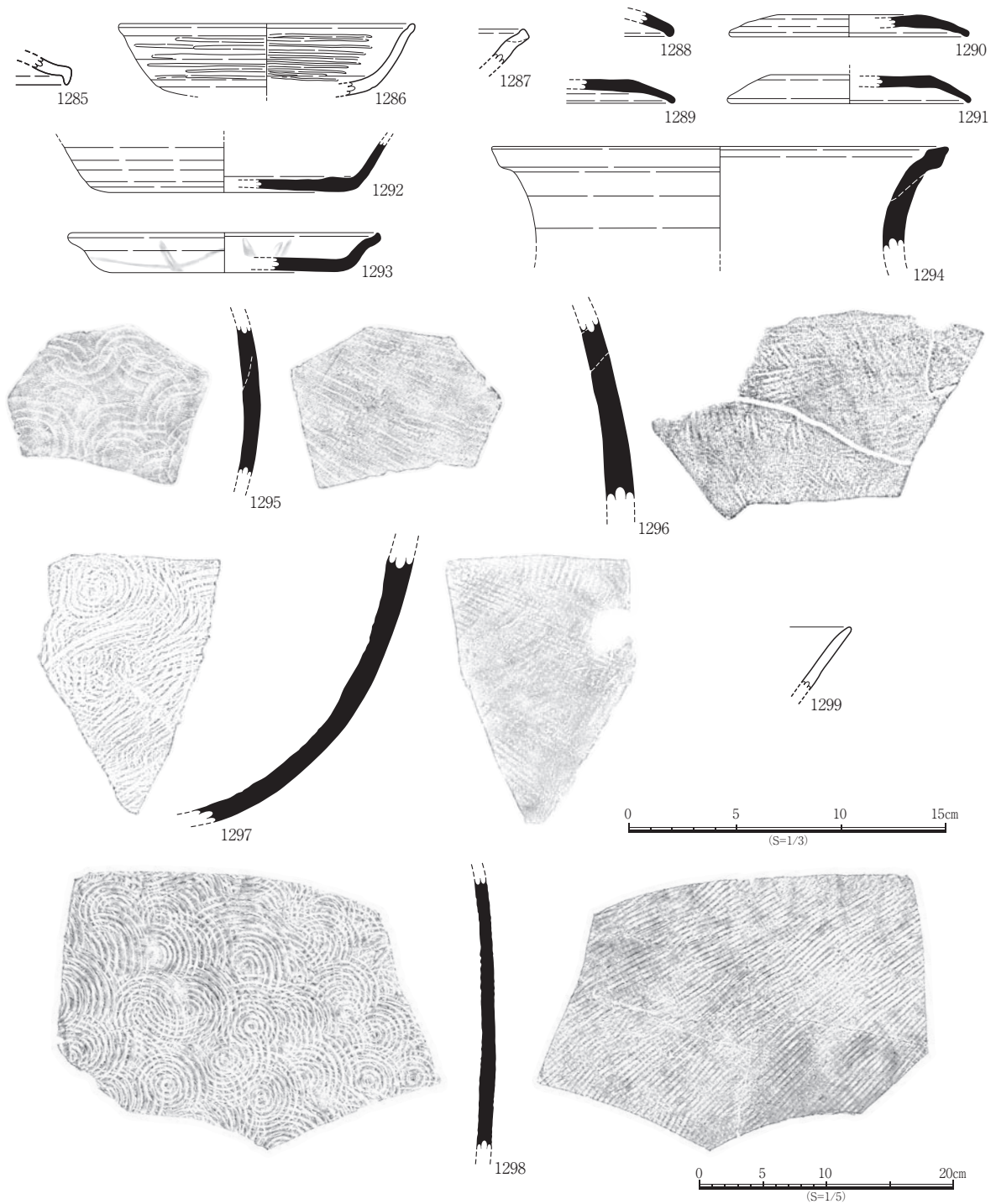


図2-66 SB-111出土遺物実測図

杯口縁部の破片で、遺存状態が悪く、成形がA技法でない可能性もある。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SB-112 (図2-67)

調査区中央部やや西よりで検出した布掘りの建物跡で、桁行3間(4.80m)、梁行2間(3.75m)の南北棟建物跡と考えられ、SB-113、さらにSB-111に掘り込まれる。棟方向はN-10°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5.0尺)と1.80m(6.0尺)ではないかとみられ、梁行(東西)が1.80m(6.0尺)と1.95m(6.5尺)で、柱穴は北妻柱でSB-113のそれと重複している可能性も考えられる。また、東

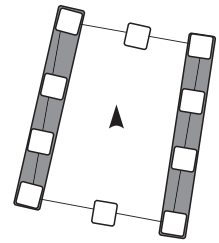


図2-67 SB-112

布掘り北端、北西隅の柱穴(一辺50cm)のみ、本建物に関連する柱穴ではないかとみられる。布掘りの規模は、東側が全長5.23m、幅45~55cm、深さ10~15cm、西側が全長5.48m、幅57cm、深さ14~23cmである。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SB-113 (図2-68)

調査区中央部やや西よりで検出した桁行3間(4.50m)、梁行2間(3.30m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-8°-Eを示す。建物はSB-112を掘り込み、SB-114に切られる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5.0尺)等間隔、梁行(東西)が1.65m(5.5尺)等間隔である。柱穴の平面形は、北妻柱真中の柱穴が方形である以外は円形や隅丸方形で一辺42~79cmを測る。柱径は15~20cmとみられる。柱穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトないし黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土であった。出土遺物は皆無であった。

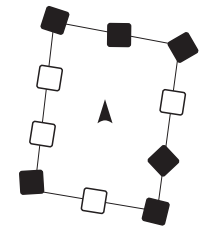


図2-68 SB-113

SB-114 (図2-69)

調査区中央部南よりで検出した桁行3間(4.80m)、梁行2間(3.75m)の南北棟建物跡で、棟方向は方眼北を示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.35m(4.5尺)~1.95m(6.5尺)と区々で、梁行(東西)が1.80m(6.0尺)と1.95m(6.5尺)である。柱穴の平面形は隅柱が方形(一辺68~104cm)である以外は、円形ないし不整円形で径33~79cmを測る。柱径は15~20cm

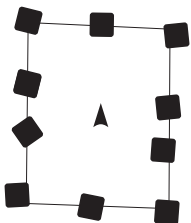


図2-69 SB-114

とみられる。柱穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトないし黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器7点、土師器8点、石製品1点、鉄滓1点がみられ、南妻柱真中の柱穴から出土した石製品(1300)が図示できた。

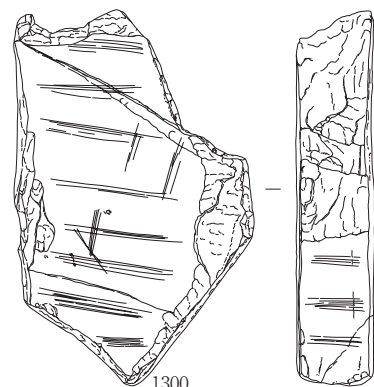
出土遺物

石製品(図2-70 1300)

扁平な砥石で、側面を含め2面を使用し、裏面には敲打痕が残る。

SB-115 (図2-71)

調査区北部で検出した桁行2間(3.45m)、梁行2間(3.00m)



0 5 10 15cm (S=1/5)

図2-70 SB-114出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) I区

の総柱南北棟建物跡で、棟方向はN-2°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5.0尺)~1.95m(6.5尺)と区々で、梁行(東西)が1.50m(5.0尺)等間隔である。柱穴の平面形はほぼ円形で径34~60cmを測る。柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は地山の粗粒中礫を中心とした砂礫をわずかに含む灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルトないし粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルトであった。出土遺物には土師器1点がみられたが、復元図示できなかった。

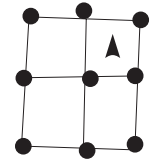


図2-71 SB-115

表2-5 古代掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模					棟方向 (NはGN)	備考
	桁行×梁行	桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	柱間寸法(m)		面積 (㎡)		
			桁(尺)	梁(尺)			
SB-103	3×2	6.30×4.20 (21.0)×(14.0)	2.10 (7.0)	2.10 (7.0)	26.46	N-8°-E	総柱
SB-104	3×2	4.50~4.65×3.45~3.60 (15.0)~(15.5)×(11.5)~(12.0)	1.20~1.95 (4.0)~(6.5)	1.65~1.95 (5.5)~(6.5)	16.13	N-80°-W	
SB-105	3×2	4.95×3.30 (16.5)×(11.0)	1.65 (5.5)	1.65 (5.5)	16.34	N-76°-W	
SB-106	3以上×2	5.40×3.00 (18.0)×(10.0)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	1.50 (5.0)	16.20	N-74°-W	
SB-107	2×2	4.65×3.45 (15.5)×(11.5)	2.25・2.40 (7.5)・(8.0)	1.65・1.80 (5.5)・(6.0)	16.04	N-13°-E	
SB-108	3×2	4.65×3.30 (15.5)×(11.0)	1.50・1.65 (5.0)・(5.5)	1.35~1.95 (4.5)~(6.5)	15.35	N-12°-E	
SB-109	3×2	4.65×3.60 (15.5)×(12.0)	1.35~1.80 (4.5)~(6.0)	1.80 (6.0)	16.74	N-9°-E	
SB-110	3×2	5.70×4.35 (19.0)×(14.5)	1.65~2.10 (5.5)~(7.0)	2.10・2.25 (7.0)・(7.5)	24.80	N-78°-W	
SB-111	3×2	4.50×3.60 (15.0)×(12.0)	1.50 (5.0)	1.65~1.95 (5.5)~(6.5)	16.20	N-8°-E	
SB-112	3×2	4.80×3.75 (16.0)×(12.5)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	1.80・1.95 (6.0)・(6.5)	18.00	N-10°-E	
SB-113	3×2	4.50×3.30 (15.0)×(11.0)	1.50 (5.0)	1.65 (5.5)	14.85	N-8°-E	
SB-114	3×2	4.80×3.75 (16.0)×(12.5)	1.35~1.95 (4.5)~(6.5)	1.80・1.95 (6.0)・(6.5)	18.00	N-0°-E	
SB-115	2×2	3.45×3.00 (11.5)×(10.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.50 (5.0)	10.35	N-2°-E	総柱

ii 塀・柵列跡

SB-103との関連が考慮される塀跡1列を復元した。なお、建物跡を取り巻く形で小ピット群を確認しており、塀跡や柵列跡としては復元できなかったが、何らかの区画をなしていた可能性も考慮される。

SA-104(図2-72)

調査区北部、SB-103の西隣で検出した南北塀跡(N-7°-E)である。2間分(3.60m)を検出し、柱

間寸法は1.80m(6尺)等間隔である。柱穴は一辺65～85cmの方形ないし隅丸方形で、柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は地山の粗粒中礫を中心とした砂礫をわずかに含む灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルトないし粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルトであった。出土遺物には土師器9点、須恵器1点、土師質土器1点がみられ、北端の柱穴から出土した土師質土器(1301)が図示できた。



出土遺物

土師質土器(図2-73 1301)

杯の底部破片で、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土は精良で、細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

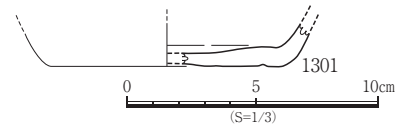


図2-73 SA-104出土遺物実測図

iii 土坑

9基の土坑を検出したが、検出位置並びにその状況から建物との関連性が窺えるものはなく、かつ出土遺物は少なくその性格についても言及できるものはみられなかった。

SK-115

調査区北部、SB-103を掘り込んだ形で検出した方形に近い楕円形の土坑である。SB-103の西側柱南から1間目の柱穴を切っていた。長径1.76m、短径1.28m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-74°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は砂混じり褐色(10YR4/4)砂質シルトに小礫をわずかに含むものであった。出土遺物には弥生土器1点、土師器10点、須恵器1点と瓦1点がみられ、須恵器(1302)と瓦(1303)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-76 1302)

杯蓋で、平らな天井部には径2.0cm、高さ0.7cmの扁平な擬宝珠形つまみが付く。口縁部は斜め外下方に下り、端部を下方に曲げる。胎土には白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

瓦(図2-76 1303)

平瓦の細片で、凹面には布目が残る。胎土には粗粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。

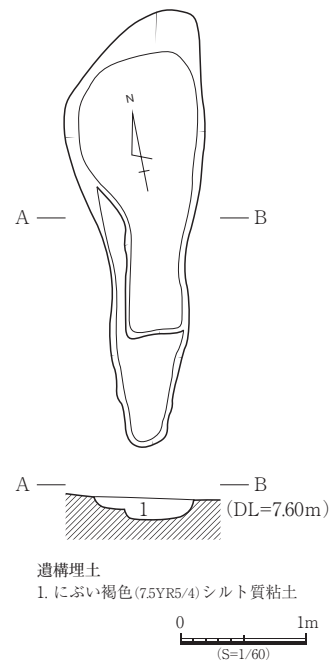


図2-74 SK-116

SK-116(図2-74)

調査区東部で検出した舟形状の不整形の土坑で、北側が一段深くなる。長辺3.45m、短辺0.37m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-14°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/4)シルト質粘土単一であった。出土遺物には土師器2点、須恵器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-117

調査区東部南よりで検出した舟形の土坑である。長辺1.64m、短辺0.44m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-6°-Wを示す。断面形は舟底

3. 遺構と遺物 (1) I区

状を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-118

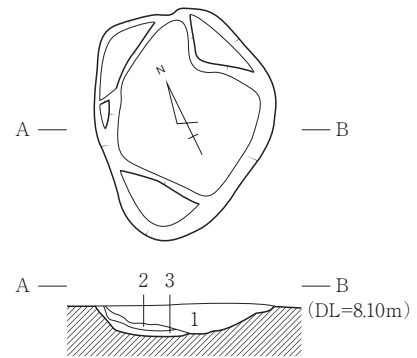
調査区南東部で検出した方形の土坑である。長辺0.88m, 短辺0.70m, 深さ34cmを測り, 長軸方向はN-1°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒色(10YR2/1)シルト質粘土単一であった。出土遺物には須恵器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-119

調査区南東部で検出した円形の土坑である。長径1.16m, 短径1.10m, 深さ40cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む褐色(10YR4/4)シルト質粘土単一であった。出土遺物には土師器2点, 須恵器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-120(図2-75)

調査区中央部で検出した不整形の土坑で, 三方向に平場を有する。長辺1.83m, 短辺1.44m, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-40°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土を中心に3層に分層される。出土遺物には弥生土器6点, 土師器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土
 2. 浅黄色(2.5Y7/3)粘土質シルト
 3. 黒色(5Y2/1)シルト質粘土に浅黄色(2.5Y7/3)粘土質シルトのブロックを含む

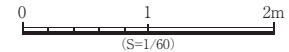


図2-75 SK-120

SK-121

調査区北部, SB-104と重複して検出した不整形の土坑である。長辺1.18m, 短辺1.10m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN-79°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-122

調査区中央部西よりで検出した方形の土坑で, SB-113の西側柱南から1間目の柱穴に掘り込まれていた。長辺1.36m, 短辺1.22m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-42°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器5点, 土師器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-123

調査区西部で検出した不整形の土坑で, 形状がSK-116に似る。北壁沿いに楕円形の一段低い掘り込みが認められた。長辺2.38m, 短辺0.95m, 深さ6cmを測り, 長軸方向はN-74°-Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト単

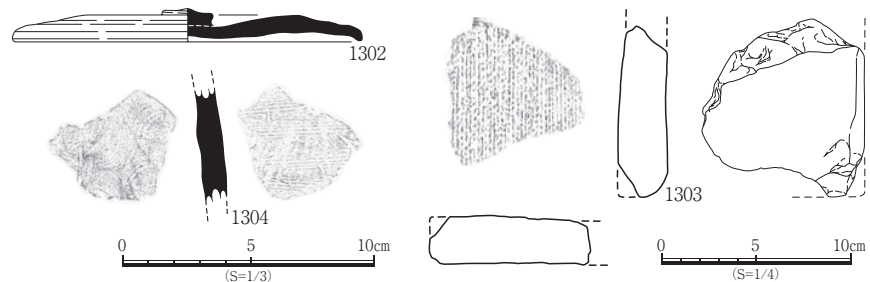


図2-76 SK-115・123出土遺物実測図

一であった。出土遺物には図示した須恵器1点(1304)がみられた。

出土遺物

須恵器(図2-76 1304)

甕の胴部破片で、外面には回転カキ目調整、内面には同心円文のタタキが施される。胎土には細粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。

表2-6 古代土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-115	楕円形	1.76	1.28	15	N-74°-E	
SK-116	不整形	3.45	0.37	25	N-14°-E	
SK-117	舟形	1.64	0.44	14	N-6°-W	
SK-118	方形	0.88	0.70	34	N-1°-E	
SK-119	円形	1.16	1.10	40	-	
SK-120	不整形	1.83	1.44	21	N-40°-E	
SK-121	不整形	1.18	1.10	12	N-79°-W	
SK-122	方形	1.36	1.22	14	N-42°-W	
SK-123	不整形	2.38	0.95	6	N-74°-W	

iv 溝跡

報告した20条の溝のうち、建物跡と方向が同じことから関連が考えられる溝跡もみられる一方、方向を異にし、直接建物跡との関連を言及しがたい溝跡も少なからずみられる。

SD-106(図2-77)

調査区東部で検出した東西溝で、さらに調査区外に延び、延長線上にあるSD-112とは同一時期のもの可能性が考えられる。検出幅0.60~1.59m、深さ2~21cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.525~7.554mを測り、主軸方向はN-61°-Eを示し、17.07mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には石製品1点がみられたが、復元図示できなかった。

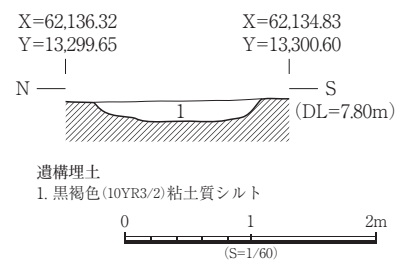


図2-77 SD-106

SD-107(図2-78)

調査区北東部で検出した南北溝で、調査区外に延びる。検出幅1.07m、深さ3~28cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.529~7.543mを測り、主軸方向はN-4°-Eを示し、2.74mを検出した。断面形はU字形を呈する。埋土は粗粒中礫を含むにぶい黄色(2.5Y6/3)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

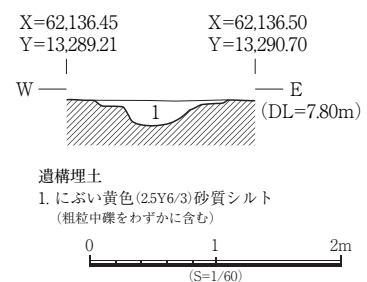


図2-78 SD-107

SD-108(図2-79)

調査区北東部で検出した南北溝で、SD-109を掘り込み、調査区

3. 遺構と遺物 (1) I区

外に延びる。検出幅65cm, 深さ6~13cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.672~7.700mを測り, 主軸方向はN-3°-Eを示し, 3.16mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の砂礫(極粗粒中礫)をわずかに含む砂混じりにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点, 土師器11点, 須恵器3点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD-109 (図2-80)

調査区北東部, SD-108に切られた状態で検出した短い南北溝で, 舟形土坑とも言い得るものである。全長2.51m, 幅66~73cm, 深さ12~16cmで, 基底面は北(7.672m)から南(7.604m)に向かってやや傾斜し, 主軸方向はN-4°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄色(25Y6/3)シルト質粘土のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には須恵器1点がみられたが, 復元図示できなかった。

SD-110

調査区北東部, SB-103の北東隅の柱穴に掘り込まれた状態で検出した細い南北溝で, 調査区外に延びる。検出幅28~43cm, 深さ5~13cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.847~7.877mを測り, 主軸方向はN-23°-Wを示し, 2.25mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の砂礫を含む砂混じり灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SD-111 (図2-81)

調査区北東部南よりで検出した短い南北溝で, 舟形土坑とも言い得るものである。検出幅31~51cm, 深さ10~12cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.618~7.626mを測り, 主軸方向はN-12°-Eを示し, 3.21mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物には須恵器1点がみられたが, 復元図示できなかった。

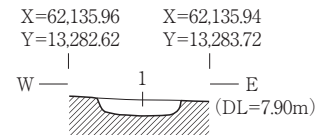
SD-112 (図2-82)

調査区中央部東よりで検出した南北溝で, SD-117を切り, SD-113・116に掘り込まれていた。北壁に沿って一段高い平場を有する。全長29.94m, 検出幅0.11~1.58m, 深さ13~53cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.501~7.548mを測り, 主軸方向はN-59°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器2点, 土師器5点, 須恵器6点, 土師質土器2点, 石製品1点, 鉄製品1点がみられ, 須恵器1点(1305)が図示できた。

出土遺物

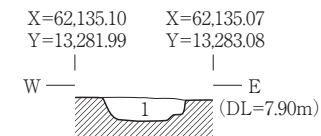
須恵器(図2-87 1305)

杯の口縁部とみられる細片である。胎土には白色中粒砂から粗粒



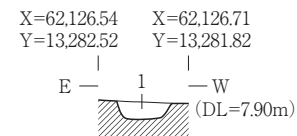
遺構埋土
1. 砂混じりにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト(極粗粒中礫をわずかに含む)
0 1m
(S=1/60)

図2-79 SD-108



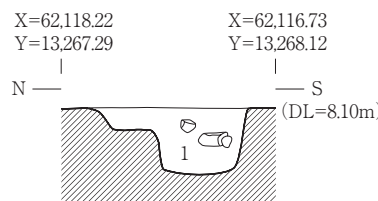
遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに黄色(25Y6/3)シルト質粘土のブロックを含む
0 1m
(S=1/60)

図2-80 SD-109



遺構埋土
1. 粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト
0 1m
(S=1/60)

図2-81 SD-111



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト(小-大礫を含む)

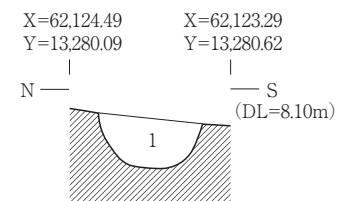


図2-82 SD-112

砂をわずかに含む。

SD-113 (図2-83)

調査区中央部北よりで検出した南北溝で、SD-112を切り、SD-116に掘り込まれ、さらに調査区外に延びる。検出幅0.25～1.67m、深さ7～26cmで、基底面は北(7.921m)から南(7.851m)に向かってやや傾斜し、主軸方向はN-7°-Wを示し、19.32mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器5点、土師器49点、須恵器18点、土師質土器5点がみられ、土師器1点(1306)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-87 1306)

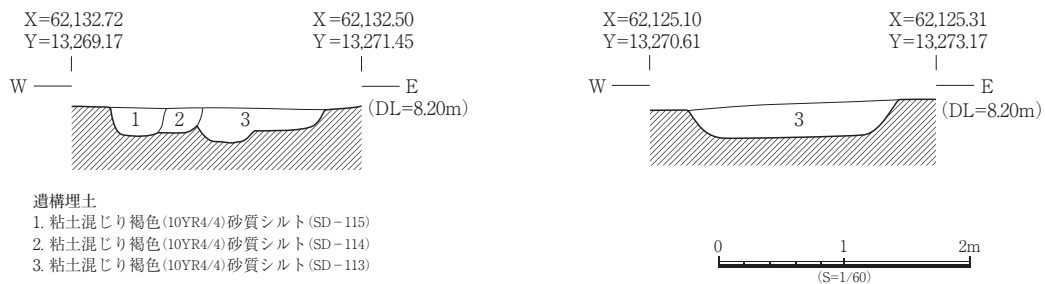
杯の底部の破片で、外底面にハの字形に開く断面逆台形の高さ0.5cmの高台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

SD-114 (図2-83)

調査区中央部北よりで検出した南北溝で、SD-113を切り、SD-115に掘り込まれていた。検出幅17～33cm、深さ14～24cmで、基底面は北(7.865m)から南(7.852m)に向かってやや傾斜し、主軸方向はN-4°-Wを示し、6.97mを検出した。断面形はU字形を呈する。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物には須恵器1点がみられたが図示できなかった。

SD-115 (図2-83)

調査区中央部北よりで検出した南北溝で、SD-113・114を切り、さらに調査区外に延びる。検出幅39～60cm、深さ15～26cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.842～7.875mを測り、主軸方向はN-3°-Eを示し、8.30mを検出した。断面形はU字形を呈する。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器2点、須恵器2点、石製品1点がみられたが、図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
 1. 粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト(SD-115)
 2. 粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト(SD-114)
 3. 粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト(SD-113)

図2-83 SD-113～115

SD-116 (図2-84)

調査区中央部で検出した細長い東西溝で、SD-112・113・117を切っていた。全長17.80m、幅45～71cm、深さ9～30cmで、基底面は西(7.767m)から東(7.573m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-74°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物には土師器3点、須恵器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

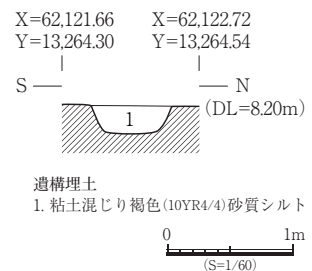


図2-84 SD-116

3. 遺構と遺物 (1) I区

SD-117 (図2-85)

調査区中央部で検出した湾曲する短い南北溝で、舟形土坑とも言い得るもので、SD-112・116に掘り込まれていた。全長約3.00m、幅41～65cm、深さ5～19cmで、基底面は南(7.880m)から北(7.773m)に向かってやや傾斜し、主軸方向はN-2°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルト単一であった。出土遺物には土師器3点、須恵器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

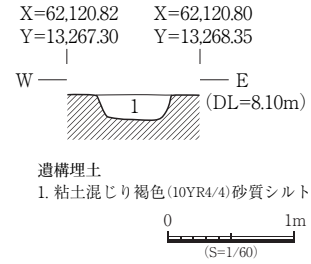


図2-85 SD-117

SD-118

調査区北部で検出した南北溝で、さらに調査区外に延びる。検出幅43～60cm、深さ5～6cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.752～7.786mを測り、主軸方向はN-8°-Eを示し、3.54mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SD-119

調査区西部で検出した細く短い南北溝で、舟形土坑とも言い得るものである。全長3.98m、幅17～26cm、深さ3～5cm、基底面はほぼ平坦で標高7.837～7.838mを測り、主軸方向はN-15°-Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物は図示した須恵器1点(1307)のみであった。

出土遺物

須恵器(図2-87 1307)

杯身底部の破片で、外底端には高さ0.8cmと高い高台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

SD-120

調査区西部で検出した東西溝で、さらに調査区外に延びるが、東側の調査区では検出されていない。検出幅0.28～1.38m、深さ3～17cmで、基底面は東(7.620m)から西(7.512m)に向かってやや傾斜し、主軸方向はN-85°-Wを示し、7.83mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点がみられ、須恵器(1308)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-87 1308)

甕胴部の破片で、外面には平行のタタキ、内面には同心円文のタタキの後にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

SD-121

調査区西部南よりで検出した舟形土坑とも言い得る細く短い南北溝で、SD-123に掘り込まれる。検出幅21～35cm、深さ2～6cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.472～7.513mを測り、N-9°-Wを示し、1.97mを検出したが、検出状況から全長2.20m前後とみられる。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物は皆無であった。

SD-122

調査区西部南よりで検出した細い南北溝で、SD-123に掘り込まれる。全長5.92m、幅31～56cm、深さ1～10cm、基底面は北(7.619m)から南(7.433m)に向かってやや傾斜し、主軸方向はN-21°-Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物は皆無であった。

SD-123(図2-86)

調査区西部南よりで検出した東西溝で、さらに調査区外に延びる。検出幅48～92cm、深さ4～30cmで、基底面は西(7.450m)から東(7.264m)に向かってやや傾斜し、主軸方向はN-89°-Eを示し、51.90mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には土師器1点、須恵器1点がみられ、須恵器(1309)が図示できた。

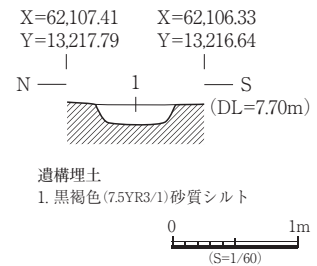


図2-86 SD-123

出土遺物

須恵器(図2-87 1309)

甕の口縁部で、外反する口縁部端部内面に1条の凹線を施す。内面から口唇部にかけて自然釉がかりハダ荒れとなる。胎土には中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

SD-124

調査区西部南よりで検出した東西溝で、SD-123を掘り込んでいた。全長5.55m、幅42～59cm、深さ4～9cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.464～7.478mを測り、N-71°-Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、図示できなかった。

SD-125

調査区南西端部で検出したL字形に屈曲する溝跡で、それぞれ調査区外に延びる。検出幅25～53cm、深さ6～12cmで、基底面は東(7.268m)から西(7.251m)、東(7.268m)から南(7.103m)へとやや傾斜し、14.53mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器2点、須恵器1点がみられたが図示できなかった。

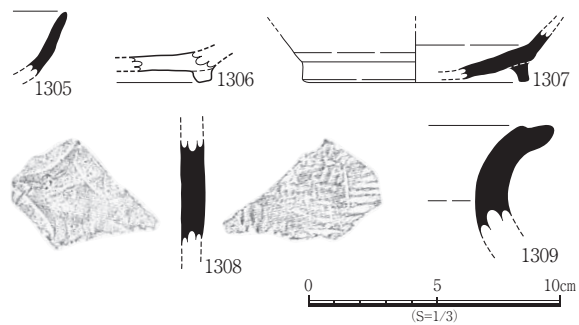


図2-87 SD-112・113・119・120・123出土遺物実測図

vピット

検出したピット総数は842個で、建物跡等には復元できなかったが、柱穴と判断されるピットも少なからずみられる。また、先述のとおり、建物群を囲むようにピットがまとまって検出されており、柵列跡や塀跡に伴う柱穴であった可能性も十分考えられる。

3. 遺構と遺物 (1) I区

P-106

調査区北部で検出したほぼ円形のピットで、南に隣接するピットを掘り込む。径26～28cmで、深さ30cmを測る。埋土は砂混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルトに地山の極粗粒中礫をわずかに含むものであった。出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点がみられ、須恵器(1310)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-88 1310)

杯蓋で、口縁部は外下方を向き、端部を下方に曲げる。胎土には白色細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

P-107

調査区北部、SD-109と切り合った形で検出した楕円形のピットである。径13～23cmで、深さ14cmを測る。埋土は砂混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルトに地山の極粗粒中礫をわずかに含むものであった。出土遺物には弥生土器3点、土師器3点、須恵器1点がみられ、須恵器(1311)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-88 1311)

鉢の口縁部とみられる細片で、外面には3条の凹線が施される。胎土には中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

P-108

調査区北部で検出した円形とみられるピットで、東側を別のピットに掘り込まれていた。径約61cmで、深さ18cmを測る。埋土は砂混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルトに地山の極粗粒中礫をわずかに含むものであった。出土遺物には弥生土器2点、土師器2点、須恵器2点、土師質土器1点がみられ、弥生土器1点(1312)と土師質土器(1313)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図2-88 1312)

皿で、口縁部は底部から短く立ち上り、端部を細く仕上げる。内面には指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

土師質土器(図2-88 1313)

杯口縁部の破片で、胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

P-109

調査区北部、SD-108とP-108を掘り込んだ形で検出した円形のピットである。径22cmで、深さ19cmを測る。埋土は砂混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルトに地山の極粗粒中礫をわずかに含むものであった。出土遺物には弥生土器1点、土師器2点がみられ、土師器1点(1314)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-88 1314)

杯蓋の口縁部の細片で、端部は下方に短く曲る。胎土には白色中粒砂をわずかに含む。

P-110

調査区北部, P-109の南, SD-108に掘り込まれた形で検出した円形のピットである。径23cmで、深さ8cmを測る。埋土は砂混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルトに地山の極粗粒中礫をわずかに含むものであった。出土遺物は図示した須恵器1点(1315)のみであった。

出土遺物

須恵器(図2-88 1315)

広口壺で、口縁部は大きく外反し、端部で水平を向く。内面にはハダ荒れがみられる。胎土には中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

P-111

調査区北部, SD-110を掘り込んだ形で検出した隅丸方形とみられるピットで、北側は調査区外にある。一辺1.00m前後で、深さ48cmを測る。埋土は砂混じりの灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルトであった。出土遺物は多く、弥生土器62点、土師器55点、須恵器11点、土師質土器1点、瓦1点、鉄滓1点が見られ、土師器2点(1316・1317)、須恵器6点(1318~1323)、土師質土器(1324)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-88 1316・1317)

1316は杯で、口縁部を内側に折り込む。外面にはヨコ方向のヘラ磨きが残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

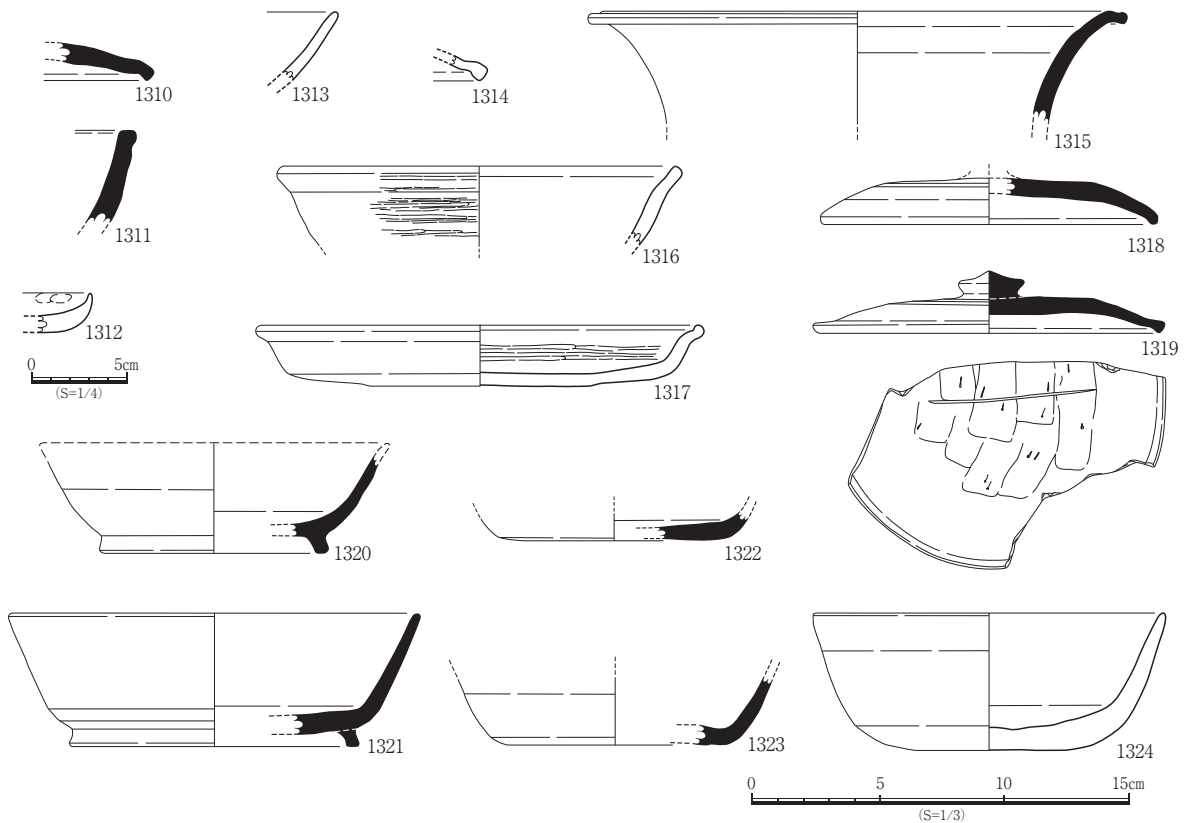


図2-88 P-106~111出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) I区

1317は皿で、口縁部を内側に折り込む。器面は摩耗するが、内面にはヘラ磨きが残し、外底面はヘラ切りの後にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

須恵器(図2-88 1318~1323)

1318・1319は杯蓋で、いずれも平らな天井部から口縁部は外下方にほぼ真直ぐ下り、端部を下方に曲げる。調整は、天井部が回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、内面には1318がナデ調整、1319がヘラナデ調整を加える。また、1319の天井部外面には径2.6cm、高さ1.1cmの擬宝珠形のつまみ、内面にはヘラ記号らしきヘラ描き沈線が残る。いずれも胎土には白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1320~1323は杯である。1320・1321は蓋杯で底部外端部にハの字形に開く高台が付き、1321の体部下端には回転ヘラ削りの痕跡が残る。いずれにも胎土には白色中粒砂を中心に細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1322・1323は高台が付かない杯で、1322は器面が摩耗し調整は不明である。胎土には白色中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。1323の底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土には白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-88 1324)

杯で、器面は摩耗が著しく調整は不明である。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。

P-112

調査区北部で検出した方形とみられるピットで、北側は調査区外にある。一辺約54cmで、深さ23cmを測る。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルトであった。出土遺物には土師器3点、須恵器2点がみられ、須恵器1点(1325)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-89 1325)

杯身で、外上方に延び、端部を丸く仕上げる。胎土には白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

P-113

調査区北部で検出した楕円形とみられるピットで、複数のピットに掘り込まれていた。径60~70cmで、深さ28cmを測る。埋土は砂混じり褐色(10YR4/4)粘土質シルトで地山の極粗粒中礫をわずかに含むものであった。出土遺物には土師器1点、須恵器1点がみられ、須恵器(1326)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-89 1326)

壺の口縁部ではないかとみられるもので、外反する口縁部の一部が残る。胎土には白色中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

P-114

調査区北部、SB-104の北東隅の柱穴に掘り込まれた形で検出した隅丸方形のピットである。一辺64cmで、深さ51cmを測る。埋土は砂混じり灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルトで地山の粗粒中礫をわずかに含むものであった。出土遺物には土師器9点、須恵器2点、鉄製品1点がみられ、土師器1点(1327)

と須恵器1点(1328)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-89 1327)

杯の口縁部の破片で、口縁部を内側に折り込み、器面には丁寧なヨコ方向のヘラ磨きが施される。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図2-89 1328)

杯蓋で、口縁部は平らな天井部から外下方に緩やかに下り、端部を下方に曲げる。天井部外面には回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整で内面にナデ調整を加える。胎土には白色粗粒砂を中心に中粒砂から細粒中礫をわずかに含む。

P-115

調査区北部、SB-104の南側柱東から1間目の柱穴に掘り込まれた形で検出した隅丸方形とみられるピットである。一辺約74cmで、深さ58cmを測る。埋土は砂混じり灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルトで地山の粗粒中礫をわずかに含むものであった。出土遺物には弥生土器1点、土師器6点、須恵器1点がみられ、須恵器(1329)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-89 1329)

杯身の口縁部とみられる破片である。胎土には白色中粒砂を中心に細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

P-116

調査区中央部北よりで検出した円形のピットである。径72cm、深さ28cmを測る。埋土は粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点、土師器4点、須恵器1点がみられ、弥生土器1点(1330)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図2-89 1330)

甕の口縁部とみられる破片である。外傾する口縁部の内面にはハケ目が残る。胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

P-117

調査区中央部、SB-108の南東隅の柱穴に掘り込まれた形で検出した方形のピットである。一辺48～58cm、深さ36cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点、須恵器2点がみられ、須恵器1点(1331)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-89 1331)

杯身の口縁部とみられる破片である。胎土には中粒砂をわずかに含む。

P-118

調査区中央部、SB-109の南妻柱列上で検出した方形のピットで、西側で別のピットを掘り込んでいた。一辺54～67cm、深さ20cmを測る。埋土は黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土であった。出土遺物

3. 遺構と遺物 (1) I区

には弥生土器2点, 土師器1点がみられ, 土師器(1332)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-89 1332)

杯の口縁部の細片で, 口縁部は内側に折り込み, 内外面にヘラ磨きの痕跡がわずかに残る。胎土には中粒砂をわずかに含む。

P-119

調査区中央部, SB-108の南側で検出した円形のピットで, 北側のピットを掘り込む。径24cm, 深さ13cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物は図示した土師器1点(1333)のみであった。

出土遺物

土師器(図2-89 1333)

杯蓋の口縁部の細片で, 端部を下方に屈曲させる。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

P-120

調査区中央部, SB-111の身舎内で検出した方形のピットである。一辺84cm, 深さ25cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点, 土師器1点, 須恵器1点, 瓦1点がみられ, 須恵器(1334)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-89 1334)

杯蓋の天井部で, 天井部は平らで, 口縁部は斜め外下方を向く。外面には回転ヘラ削り調整を施す。胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

P-121

調査区中央部, SB-111の身舎内で検出した方形のピットで, 中央に径20cmの柱痕とみられる掘り込みがある。一辺81cm, 深さ15cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器4点, 須恵器1点がみられ, 土師器1点(1335)と須恵器(1336)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-89 1335)

杯の口縁部とみられる破片で, 口縁部は内側にわずかに折り込む。器面は赤色塗彩される。胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

須恵器(図2-89 1336)

杯の底部で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土には白色細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

P-122

調査区中央部, SB-114の西隣で検出した不整形のピットである。一辺28cm, 深さ6cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物は図示した須恵器1点(1337)のみで

あった。

出土遺物

須恵器(図2-89 1337)

杯蓋の破片で、口縁部は平らな天井部から斜め外下方に下り、端部を下方にわずかに曲げる。胎土には白色中粒砂をわずかに含む。

P-123

調査区中央部, SB-112・113の身舎内で検出した方形のピットである。一辺61～78cm, 深さ21cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 須恵器1点がみられ, 須恵器(1338)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-89 1338)

小型の短頸壺とみられる破片で、口縁部は屈曲する肩部から短く直立する。胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

P-124

調査区中央部, SB-112・113の北西側で検出した楕円形のピットである。径30～45cm, 深さ14cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物は図示した須恵器1点(1339)のみであった。

出土遺物

須恵器(図2-89 1339)

杯身で、底部外面端部にはハの字形に開く高さ0.4cmの高台が付く。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。

P-125

調査区北部, 西側の調査区壁際で検出した円形のピットで、東半分は調査区外である。径30cm, 深さ30cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器2点がみられ, 内1点(1340)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-89 1340)

甕の胴部の破片で、外面には格子目状のタタキ, 内面には同心円文のタタキを施す。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

P-126

調査区北部, 西側の調査区で検出した円形のピットである。径33～35cm, 深さ27cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物は図示した二彩陶器1点(1341)のみであった。

出土遺物

二彩陶器(図2-89 1341)

壺の胴部の破片とみられるもので、外面には緑色と黄白色の鉛釉が施される。内面は露胎でロク

3. 遺構と遺物 (1) I区

口目が残る。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂をわずかに含む。

P-127

調査区北部、西側の調査区で検出したほぼ円形のピットである。径36～42cm、深さ29cmを測る。埋土は黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点がみられ、須恵器(1342)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-89 1342)

甕の胴部の破片で、外面には平行のタタキ、内面には同心円文のタタキの後にナデ調整を加える。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

P-128

調査区西部、西側の調査区で検出した円形のピットである。径19cm、深さ24cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物は図示した須恵器1点(1343)のみであった。

出土遺物

須恵器(図2-89 1343)

甕の胴部の破片で、外面には平行のタタキ、内面にはナデ調整を施す。胎土には白色中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

P-129

調査区西部、西側の調査区で検出した円形のピットである。径37cm、深さ24cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物は土師器1点、土製品1点がみられ、土製品(1344)が図示

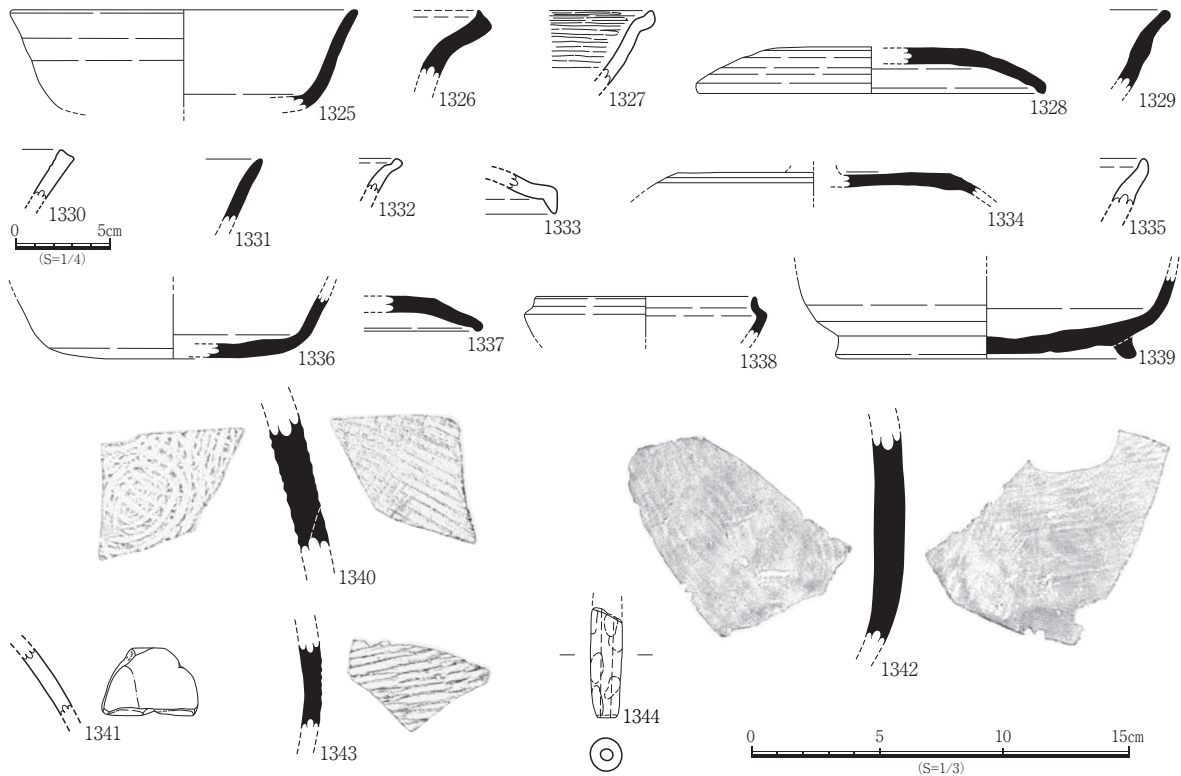


図2-89 P-112～129出土遺物実測図

できた。

出土遺物

土製品(図2-89 1344)

円筒形の土錘で、胎土には細粒砂をわずかに含む。

P-130

調査区南西部で検出した方形のピットである。一辺56～66cmで、深さ8cmを測る。検出面で炭化物の集中がみられ、材の同定と種実分析を行ったところ、遺存状態が悪く樹種については広葉樹であることは判明したものの種類の同定はできず、種実についても同定可能なものは認められなかった。埋土は暗赤褐色(5YR3/2)砂質シルトであった。土器類の出土は皆無であった。

③ 中世

主な遺構は調査区西部、中でも屋敷の中心部とみられる北西部に集中しており、掘立柱建物跡10棟、塀・柵列跡8列、土坑20基、溝跡28条などを検出した。

i 掘立柱建物跡

屋敷を構成していたとみられる建物跡10棟が復元できた。屋敷跡は溝によって区画されているものとみられ、その範囲は東西約25m、南北約20mである。また、建物には重複するものや近接するものなどがみられることから数時期の変遷が考えられる。

SB-116(図2-90)

調査区北西部で検出した桁行3間(8.00m)、梁行2間(4.40m)の総柱東西棟建物跡である。区画に関連するとみられるSD-145に切られていた。棟方向はN-78°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)

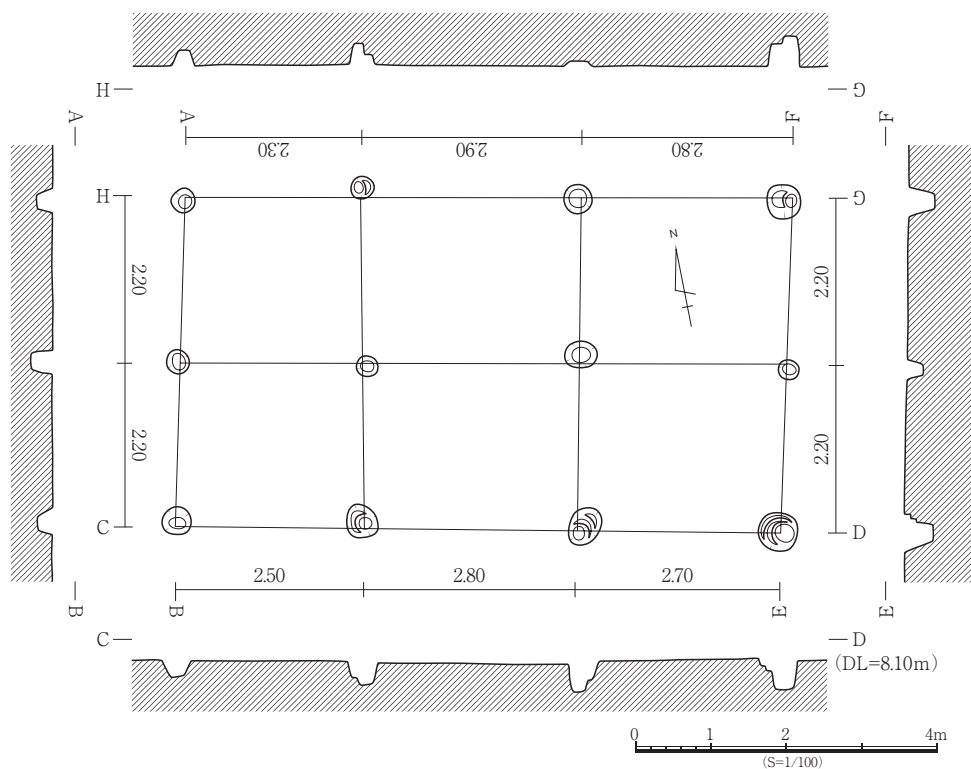


図2-90 SB-116

3. 遺構と遺物 (1) I区

が2.30～2.90mと散つきがみられる一方、梁行(南北)が2.20m等間隔である。柱穴は径28～50cmの円形で、柱径は15cm前後とみられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないし灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器16点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-117(図2-91)

調査区北西部, SB-116の東隣で検出した桁行3間(5.80～6.00m)、梁行2間(3.00～3.20m)のやや歪みのある南北棟建物跡で、北から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。南妻柱の真中の柱穴は未検出で、区画に関連するとみられるSD-141・143に切られていた。棟方向はN-8°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.70～2.30mと散つきがみられ、梁行(東西)が北妻柱で1.50m等間隔、南妻柱で1.60m等間隔と土間の柱間が広がっている。柱穴は径20～37cmの円形で、柱径は10～15cmとみられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないし灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師器2点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

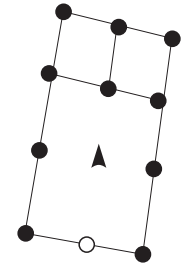


図2-91 SB-117

SB-118(図2-92)

調査区西部, SB-117の南側で検出した桁行3間(5.60m)、梁行2間(4.20～4.30m)のやや歪みのある総柱南北棟建物跡である。北妻柱の東側2個の柱穴は未検出で、区画に関連するとみられるSD-143に切られていた。棟方向はN-11°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.60～2.10m、梁行(東西)が2.00～2.20mと散つきがみられる。柱穴は径21～32cmの円形で、柱径は10～15cmとみられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器1点がみられ、西側柱南から1間目の柱穴から出土した須恵器(1345)が図示できた。

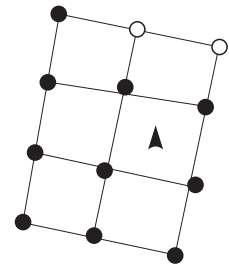


図2-92 SB-118

出土遺物

須恵器(図2-95 1345)

甕胴部の破片で、外面には平行のタタキ目、内面には同心円文のタタキを施し、内面のみナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

SB-119(図2-93)

調査区西端部, SB-120の西側で検出した桁行4間(7.30m)、梁行2間(3.70m)の東西棟建物跡で、SD-144と重複する。棟方向はN-81°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.60～2.25mで、東妻柱から1間目が2.20mと2.25mと広くなり、梁行(南北)が1.80mと1.90mである。柱穴は径18～38cmの円形で、柱径は10～15cmとみられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないし灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器22点、白磁1点、土製品3点、石製品1点がみられ、南側柱東から1間目の柱穴から出土した土師質土器2点(1346・1347)と北側柱東から1間目の柱穴から出土した白磁(1348)と石製品(1349)が図示できた。

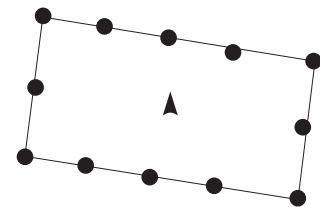


図2-93 SB-119

出土遺物

土師質土器(図2-95 1346・1347)

いずれも小皿で、1346は底部が残存しており、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり、胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1347は口縁部の破片で、外面に凹線状の凹みが巡る。胎土には細粒砂から極粗粒砂をわずかに含む。

白磁(図2-95 1348)

皿で、口縁部は端反で露胎となる。胎土には黑色粒を比較的多く含む。

石製品(図2-95 1349)

台石とみられるもので、扁平な河原石を使用する。表面は平坦で、裏面はやや凸面となっており、平坦面を台石として使用したものとみられる。

SB-120(図2-94)

調査区西部、SB-119の東隣で検出した桁行3間(4.80m)、梁行2間(3.70m)の南北棟建物跡で、南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。また、SB-118・121と重複し、北東隅と南東隅の柱穴は未検出である。棟方向はN-9°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.40~1.70mと区々で、梁行(東西)が1.80mと1.90mである。柱穴は径19~30cmの円形で、柱径は10~15cmとみられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないし灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師器3点、土師質土器12点がみられ、北西隅の柱穴から出土した土師質土器1点(1350)が図示できた。

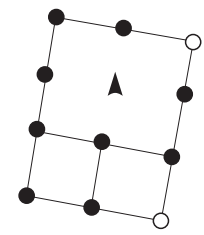
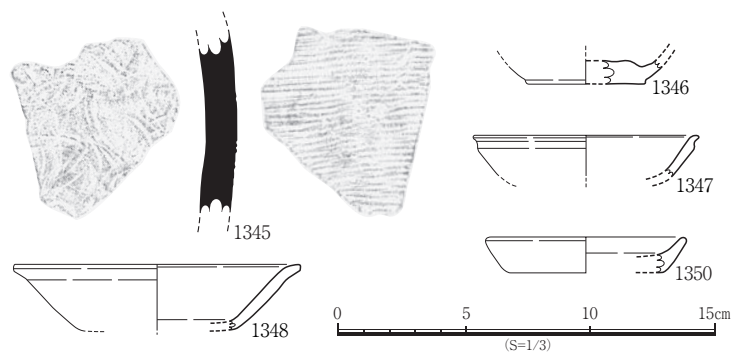


図2-94 SB-120

出土遺物

土師質土器(図2-95 1350)

小皿で、内面にはタールの付着がみられ、灯明皿として使用されていたものとみられる。胎土には細粒砂と粗粒砂を比較的多く含む。



SB-121(図2-96)

調査区西部、SB-120の南側で重複して検出した桁行3間(5.30m)、梁行2間(3.70m)の南北棟建物跡で、南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN-8°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.40~2.00mと板間が狭くなり、梁行(東西)が1.80mと1.90mである。柱穴は径22~51cmの円形で、柱径は15cm前後とみられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないし灰褐色(7.5YR5/2)

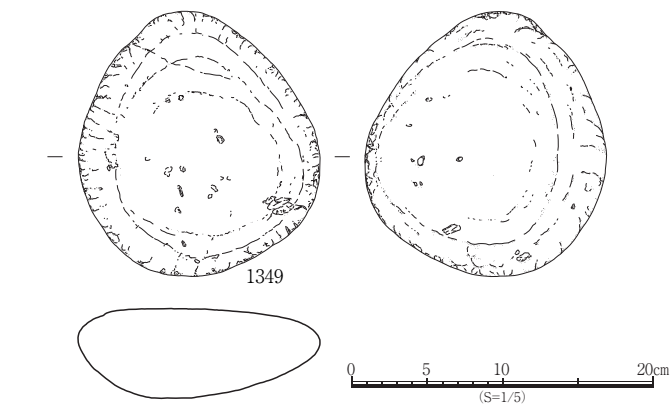


図2-95 SB-118~120出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) I区

砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器36点、青磁1点、石製品1点がみられ、北東隅の柱穴から出土した土師質土器1点(1356)、東側柱北から1間目の柱穴から出土した土師質土器1点(1353)、東側柱北から2間目の柱穴から出土した土師質土器2点(1354・1357)と石製品(1361)、西側柱北から2間目の柱穴から出土した土師質土器2点(1351・1358)と青磁(1360)そして間仕切柱の柱穴から出土した土師質土器3点(1352・1355・1359)が図示できた。

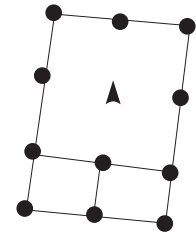


図2-96 SB-121

出土遺物

土師質土器(図2-100 1351~1359)

1351~1355は杯で、1351~1353は口縁部の細片で、1351は胎土に細粒砂から中粒砂をわずかに含み精良であるのに対し、1352と1353は細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。1352は灯明皿として使用されていたとみられるもので内面にはタールが付着する。1354と1355は底部が残存し、いずれも底部外面は回転糸切りの後にナデ調整、他は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土には、1354が細粒砂から中粒砂を比較的多く含み、1355が中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1356~1359は小皿で、1356・1357・1359は灯明皿として使用されたものとみられる。1356の内面にはタールが付着する。胎土には細粒砂から中粒砂を多く含む。1357は口縁部が残存し、1356同様タールが付着する。胎土には細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1358は比較的遺存状態が良く、器面には回転ナデ調整と内面にはナデ調整、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。1359には内外面ともにタールが付着する。胎土は精良で、細粒砂をわずかに含む。

青磁(図2-100 1360)

龍泉窯系の碗の口縁部の破片で、外面には鎬蓮弁文がみられ、胎土には黒色粒をわずかに含む。

石製品(図2-100 1361)

浮子で完存し、端部には径0.6cmの紐孔を両側から穿つ。

SB-122(図2-97)

調査区西部で検出した桁行2間(4.50~4.60m)、梁行1間(1.90m)とやや歪みのある南北棟建物跡である。棟方向はN-10°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が2.20mと2.30m、梁行(東西)が1.90mである。柱穴は径19~30cmの円形で、柱径は10~15cmとみられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないしにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

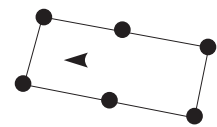


図2-97 SB-122

SB-123(図2-98)

調査区西部中央よりで検出した桁行2間(3.60m)、梁行1間(1.20m)の南北棟建物跡である。棟方向はN-8°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.80m等間隔、梁行(東西)が1.20mである。柱穴は径20~28cmの円形で、柱径は10~15cmとみられる。埋土は灰色(5YR5/1)砂質シルトないし暗灰黄色(2.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

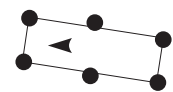


図2-98 SB-123

SB-124(図2-99)

調査区西端部、SB-119の南側で検出した桁行2間(3.50m)、梁行1間(1.40m)の南北棟建物跡で、

SD-144を掘り込んでいる。棟方向はN-8°-Eである。柱間寸法は、桁行(南北)が1.70mと1.80m, 梁行(東西)が1.40mである。柱穴は径22~37cmの円形で、柱径は10~15cmとみられる。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないし炭化物を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物は南東隅の柱穴から出土した土師質土器1点(1362)のみであった。

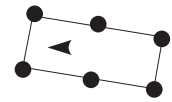


図2-99 SB-124

出土遺物

土師質土器(図2-100 1362)

杯の口縁部の細片である。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

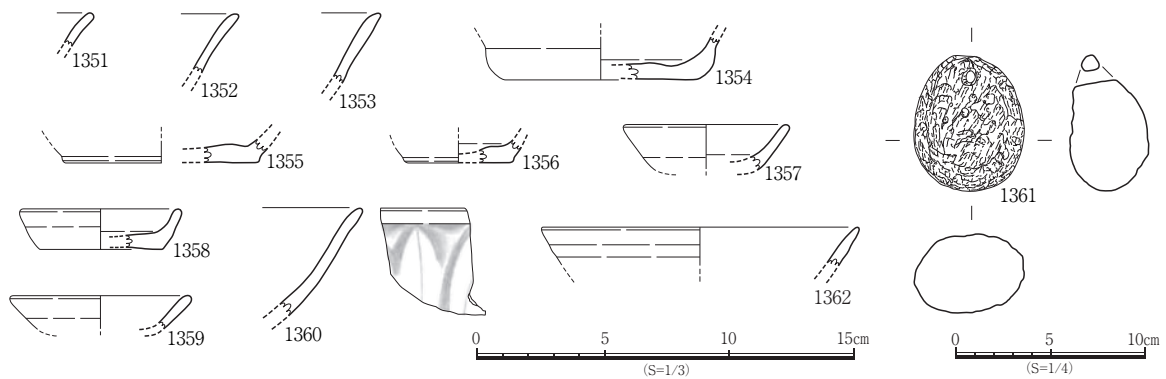


図2-100 SB-121・124出土遺物実測図

SB-125(図2-101)

調査区南西部で検出した桁行2間(3.80~3.90m), 梁行1間(1.70~1.80m)とやや歪みのある東西棟建物跡で、SD-152を掘り込んでいる。棟方向はN-80°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.80~2.00m, 梁行(南北)が1.70mと1.80mである。柱穴は径21~30cmの円形で、柱径は10~15cmとみられる。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)砂質シルトないし黒褐色(7.5YR4/3)シルト質砂であった。出土遺物には土師器1点が

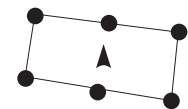


図2-101 SB-125

表2-7 中世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	桁行×梁行	規模				棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	柱間寸法		面積 (㎡)		
			桁(m)	梁(m)			
SB-116	3×2	8.00×4.40	2.30~2.90	2.20	35.20	N-78°-W	総柱
SB-117	3×2	5.80~6.00×3.00~3.20	1.70~2.30	1.50・1.60	18.29	N-8°-E	間仕切柱
SB-118	3×2	5.60×4.20~4.30	1.60~2.10	2.00~2.20	23.80	N-11°-E	総柱
SB-119	4×2	7.30×3.70	1.60~2.25	1.80・1.90	27.01	N-81°-W	
SB-120	3×2	4.80×3.70	1.40~1.70	1.80・1.90	17.76	N-9°-E	間仕切柱
SB-121	3×2	5.30×3.70	1.40~2.00	1.80・1.90	19.61	N-8°-E	間仕切柱
SB-122	2×1	4.50~4.60×1.90	2.20・2.30	1.90	8.65	N-10°-E	
SB-123	2×1	3.60×1.20	1.80	1.20	4.32	N-8°-E	
SB-124	2×1	3.50×1.40	1.70・1.80	1.40	4.90	N-8°-E	
SB-125	2×1	3.80~3.90×1.70~1.80	1.80~2.00	1.70・1.80	6.74	N-80°-W	

3. 遺構と遺物 (1) I区

みられたが、復元できなかった。

ii 堀・柵列跡

建物跡との関連が考慮される堀跡8列を復元した。また、SA-112のように屋敷の区画との関連が考えられるものもみられる。

SA-105 (図2-102)

調査区北西端部、SB-116の北側で検出した東西堀跡(N-80°-W)で、SB-116との関連が考慮される。2間分(4.70m)を検出し、柱間寸法は2.30mと2.40mである。柱穴は径30~40cmの円形で、柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

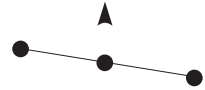


図2-102 SA-105

SA-106 (図2-103)

調査区西部北より、SB-119・120の北側で検出した東西堀跡(N-77°-W)で、両建物との関連が考慮される。3間分(8.20m)を検出し、柱間寸法は2.70mと2.80mである。柱穴は径23~45cmの円形で、柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないし、灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には西から1間目の柱穴より出土した土師質土器2点があり、内1点(1363)が図示できた。

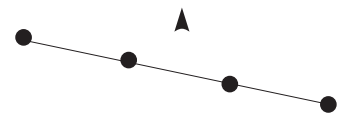


図2-103 SA-106

出土遺物

土師質土器(図2-110 1363)

杯の口縁部破片である。器面は回転ナデ調整で、ロクロ目が残る。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

SA-107 (図2-104)

調査区西部、SB-121の東側で検出した南北堀跡(N-5°-E)で、SB-121との関連が考慮される。4間分(7.40m)を検出し、柱間寸法は1.80mと1.90mである。柱穴は径22~39cmの円形で、柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

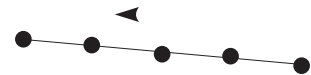


図2-104 SA-107

SA-108 (図2-105)

調査区西部、SA-107の東側で検出した南北堀跡(N-6°-E)で、SB-119・120との関連が考慮される。5間分(8.70m)を検出し、柱間寸法は1.30~2.30mと区々である。柱穴は径23~32cmの円形で、柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないしにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には南から2間目の柱穴より出土した土師質土器1点がみられたが、図示できなかった。

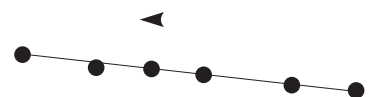


図2-105 SA-108

SA-109 (図2-106)

調査区西部、SB-121と重複した形で検出した東西堀跡(N-83°-W)で、SB-119・120との関連が考慮される。4間分(6.80m)を検出し、柱間寸法は1.40~1.90mと区々である。柱穴は径21~30cmの円形で、柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトないし灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであっ

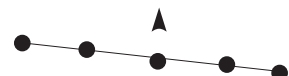


図2-106 SA-109

た。出土遺物には真中の柱穴から出土した土師器6点，土師質土器1点がみられ，土師質土器(1364)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-110 1364)

杯の底部破片で，底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は精良で，細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

SA-110(図2-107)

調査区西部，SA-109の南側で検出した東西堀跡(N-81°-W)である。5間分(8.60m)を検出し，柱間寸法は1.50~2.20mと区々である。柱穴は径20~28cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

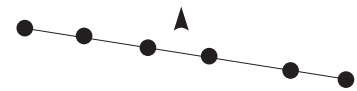


図2-107 SA-110

SA-111(図2-108)

調査区西部，SA-110の南側で検出した東西堀跡(N-83°-W)で，建物群の南の境をなす形となっている。5間分(8.60m)を検出し，柱間寸法はSA-109と同じく1.40~1.90mと区々である。柱穴は径20~51cmのほぼ円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

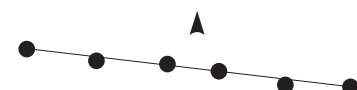


図2-108 SA-111

SA-112(図2-109)

調査区西部，SD-140の東側で検出した南北堀跡(N-5°-E)で，建物群の東の境をなす形となっている。5間分(13.40m)を検出し，柱間寸法は2.30~3.10mと区々である。柱穴は径20~23cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトであった。出土遺物は図示した瓦質土器1点(1365)のみで，南から1間目の柱穴より出土した。

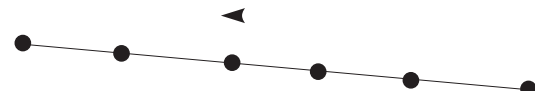


図2-109 SA-112

出土遺物

瓦質土器(図2-110 1365)

羽釜の胴部から口縁部の破片で，口縁部は胴部から内湾気味に上がり，外面に断面かまぼこ形の小さな鏝が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を多量に含む。

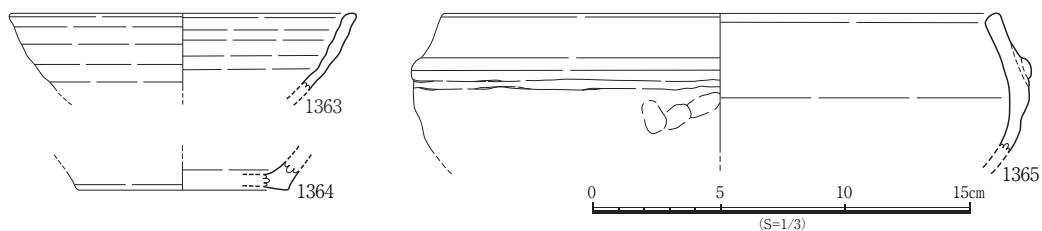


図2-110 SA-106・109・112出土遺物実測図

表2-8 古代・中世塚・柵列跡計測表

遺構番号	柱穴数(個)	規模		方向 (NはGN)	備考
		全長(m)	柱間寸法(m)		
SA-104	3	3.60	1.80	N-7°-E	古代
SA-105	3	4.70	2.30・2.40	N-80°-W	中世
SA-106	4	8.20	2.70・2.80	N-77°-W	〃
SA-107	5	7.40	1.80・1.90	N-5°-E	〃
SA-108	6	8.70	1.30~2.30	N-6°-E	〃
SA-109	5	6.80	1.40~1.90	N-83°-W	〃
SA-110	6	8.60	1.50~2.20	N-81°-W	〃
SA-111	6	8.60	1.40~1.90	N-83°-W	〃
SA-112	6	13.40	2.30~3.10	N-5°-E	〃

iii 土坑

20基を確認した。これら土坑は建物群, SB-116~122の周囲を取り囲む形で検出している。

SK-124

調査区北部で検出した楕円形とみられる土坑である。南半分は調査区外にある。長径1.27m以上、短径0.77m以上、深さ8cmを測り、長軸方向はN-16°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-125(図2-111)

調査区北西部で検出した不整楕円形の土坑で、底面よりピット3個を検出した。長径1.59m、短径1.11m、深さ19cmを測り、長軸方向はN-76°-Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

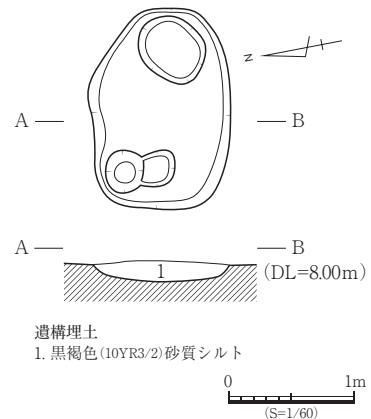


図2-111 SK-125

SK-126(図2-112)

調査区北西部, SK-125の南側で検出した不整楕円形の土坑である。北東壁に一段高い段部がある。長径1.04m、短径0.83m、深さ18cmを測り、長軸方向はN-73°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

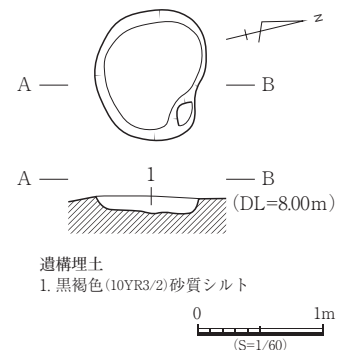


図2-112 SK-126

SK-127(図2-113)

調査区西部, SB-123の南側で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.12m、短径0.78m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-83°-Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-128

調査区西部, SK-127の南側で検出した方形の土坑で、底面からピット5個を検出した。長辺0.99m、短辺0.89m、深さ7cmを測り、長軸

方向はN-73°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-129

調査区西部, SK-128の南側で検出した不整楕円形の土坑で、底面よりピット1個を検出した。長径1.17m, 短径1.01m, 深さ8cmを測り、長軸方向はN-77°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-130 (図2-114)

調査区西部, SK-128の西側で検出した不整楕円形の土坑である。長径0.97m, 短径0.81m, 深さ8cmを測り、長軸方向はN-2°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト単一であった。出土遺物には瓦器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-131 (図2-115)

調査区北西部, SB-116に掘り込まれた形で検出した不整円形の土坑である。長径1.27m, 短径1.13m, 深さ17cmを測り、長軸方向はN-82°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には土師器3点, 土師質土器10点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-132 (図2-116)

調査区北西部, SB-116の北側で検出したほぼ円形の土坑である。長径0.90m, 短径0.87m, 深さ11cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には須恵器1点, 土師質土器28点がみられ、須恵器(1366)と土師質土器1点(1367)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-118 1366)

杯身で、底部外端部に高さ0.7cmの高台が付く。胎土には白色中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-118 1367)

小皿で、口縁部を細く仕上げる。胎土には中粒砂から細粒中礫をわずかに含む。

SK-133 (図2-117)

調査区北西部, SB-116に重複する形で検出したほぼ円形の土坑である。長径1.01m, 短径0.87m, 深さ18cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物は比較的多く土師器2点, 土師質土器23点, 青磁1点がみられ、土師質土器1点(1368)と青磁(1369)が図示できた。

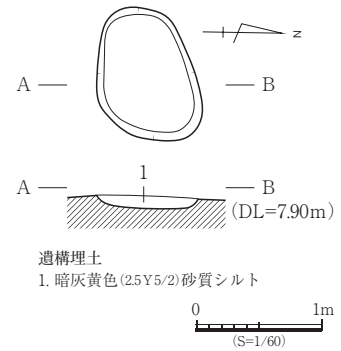


図2-113 SK-127

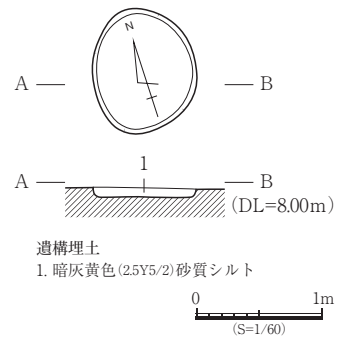


図2-114 SK-130

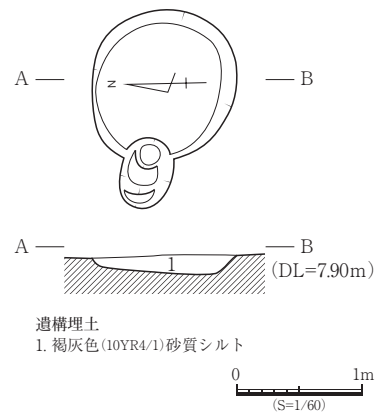


図2-115 SK-131

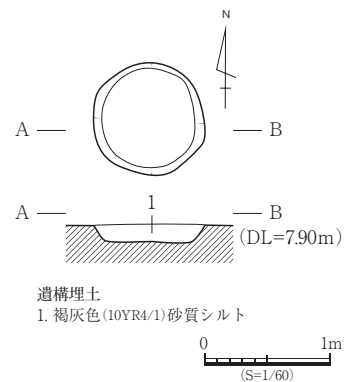


図2-116 SK-132

3. 遺構と遺物 (1) I 区

出土遺物

土師質土器(図2-118 1368)

杯で、口縁部は上外方にほぼ真直ぐ上がる。胎土は精良で、中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

青磁(図2-118 1369)

碗の胴部細片で、外面には鎬蓮弁文がみられる。胎土には黑色粒をわずかに含む。

SK-134

調査区西部, SD-144の東に隣接する形で検出した不整楕円形の土坑で、基底面に炭化物の堆積が認められた。遺存状態は良くないが、土坑墓の可能性が考慮される。長径0.88m, 短径0.72m, 深さ7cmを測り、長軸方向は北を向く。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

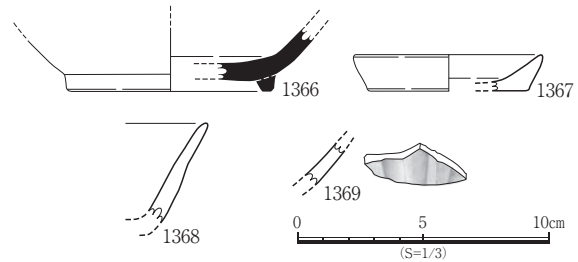


図2-118 SK-132・133出土遺物実測図

SK-135

調査区西部, SD-143を掘り込んだ形で検出した不整形の土坑で、底面からピット2個を検出した。長辺2.23m, 短辺1.15m, 深さ5cmを測り、長軸方向はN-7°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト単一であった。出土遺物には須恵器1点と瓦器1点がみられたが、図示できなかった。

SK-136(図2-119)

調査区西部, SA-111の南側で検出した隅丸方形の土坑で、基底面に炭化物の堆積が認められた。形状と考え合わせると土坑墓の可能性が高い。長辺1.09m, 短辺0.76m, 深さ30cmを測り、長軸方向は東を向く。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器1点がみられたが、図示できなかった。

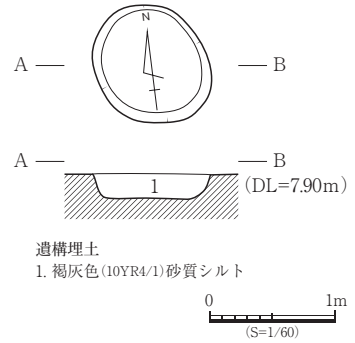


図2-117 SK-133

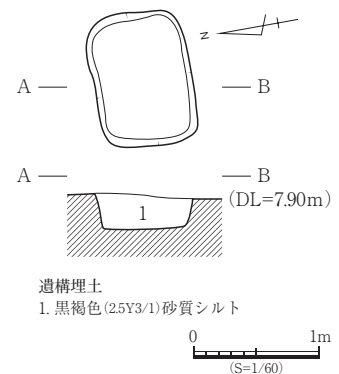


図2-119 SK-136

SK-137(図2-120)

調査区南西端部, SD-154の南側で検出した不整形の土坑で、底面よりピット1個を検出した。長辺1.05m, 短辺0.83m, 深さ22cmを測り、長軸方向はN-79°-Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は灰白色(7.5Y8/2)粘土質砂に褐灰色(10YR5/1)砂質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物は皆無であった。

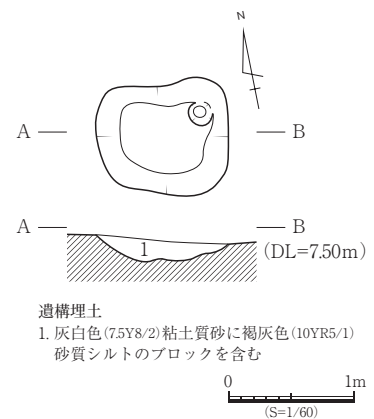


図2-120 SK-137

SK-138(図2-121)

調査区南西端部, SD-153の西隣で検出した不整楕円形の土坑で、

西壁でピット1個を掘り込み、中央部でピット1個に掘り込まれていた。長径1.62m、短径1.44m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-77°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-139

調査区南西端部、SK-137の東側で検出した不整形の土坑で、西壁・北壁・東壁でピットに掘り込まれ、底面で2個のピットを検出した。長辺1.23m、短辺1.05m、深さ8cmを測り、長軸方向はN-75°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰白色(7.5Y8/2)粘土質砂単一であった。出土遺物は皆無であった。

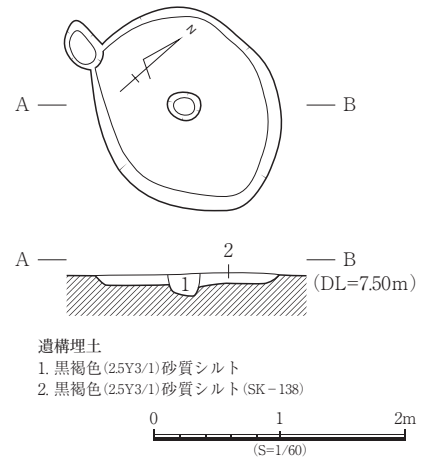


図2-121 SK-138

SK-140

調査区南西端部、SK-139に掘り込まれた形で検出した不整形の土坑で、東壁をピットに掘り込まれる。長辺1.35m、短辺1.17m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-76°-Wを示す。断面形は逆台

表2-9 中世・近世土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径 (m)	短辺・短径 (m)	深さ (cm)		
SK-124	楕円形	(1.27)	(0.77)	8	N-16°-E	中世
SK-125	不整楕円形	1.59	1.11	19	N-76°-W	〃
SK-126	〃	1.04	0.83	18	N-73°-W	〃
SK-127	〃	1.12	0.78	10	N-83°-E	〃
SK-128	方形	0.99	0.89	7	N-73°-E	〃
SK-129	不整楕円形	1.17	1.01	8	N-77°-E	〃
SK-130	〃	0.97	0.81	8	N-2°-E	〃
SK-131	不整円形	1.27	1.13	17	N-82°-W	〃
SK-132	円形	0.90	0.87	11	-	〃
SK-133	〃	1.01	0.87	18	-	〃
SK-134	不整楕円形	0.88	0.72	7	N-0°-E	〃
SK-135	不整形	2.23	1.15	5	N-7°-W	〃
SK-136	隅丸方形	1.09	0.76	30	N-90°-E	〃
SK-137	不整形	1.05	0.83	22	N-79°-W	〃
SK-138	不整楕円形	1.62	1.44	11	N-77°-W	〃
SK-139	不整形	1.23	1.05	8	N-75°-W	〃
SK-140	〃	1.35	1.17	7	N-76°-W	〃
SK-141	不整楕円形	1.01	0.97	3	N-14°-E	〃
SK-142	〃	(2.31)	(0.61)	3	N-86°-E	〃
SK-143	不整形	2.07	1.63	4	N-67°-E	〃
SK-144	方形	2.71	2.59	9	N-85°-W	近世
SK-145	楕円形	(1.54)	(0.38)	44	N-3°-E	〃

3. 遺構と遺物 (1) I区

形を呈する。埋土は灰白色(7.5Y8/2)粘土質砂単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-141

調査区南西端部, SK-140の南隣で検出した不整楕円形の土坑で, ピット3個が掘り込まれていた。長径1.01m, 短径0.97m, 深さ3cmを測り, 長軸方向はN-14°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR5/1)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-142

調査区南西端部, SD-153に掘り込まれた形で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.31m以上, 短径0.61m以上, 深さ3cmを測り, 長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR5/1)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-143

調査区南西端部, SK-142の北隣で検出した不整形の土坑である。長辺2.07m, 短辺1.63m, 深さ4cmを測り, 長軸方向はN-67°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰白色(7.5YR8/2)粘土質砂に褐灰色(10YR5/1)砂質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物は皆無であった。

iv 溝跡

28条を確認した。確認した溝の多くが方向を同じくしており, 一定の基準で掘削されたものとみられ区画に関連したものと考えられる。

SD-126 (図2-122)

調査区北東部で検出した東西溝で, SD-127を掘り込み, さらに東の調査区外に延びる。方向的にはSD-127との関連が考慮される。検出幅46~64cm, 深さ4~13cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.525~7.530mを測り, 主軸方向はN-78°-Wを示し, 22.37mを検出した。

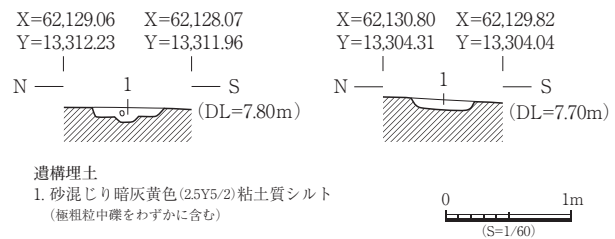


図2-122 SD-126

断面形は逆台形を呈し, 数ヶ所に一段深い掘り込みがみられる。埋土は地山の極粗粒中礫をわずかに含む砂混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点, 土師器10点, 瓦器1点, 土師質土器11点がみられ, 土師質土器1点(1370)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (図2-125 1370)

杯で, 体部は内湾気味に上がり, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

SD-127 (図2-123)

調査区北東部で検出したL字形の溝で, SD-128~130を掘り込み, SD-126に切られる。溝が西で北に屈曲し, さらに調査区外に延びる。方向的にはSD-126との関連が考慮される。検出幅0.27~1.35m, 深さ2~34cmで, 基底面は北(8.317m)から南, そして東(7.606m)に向かって傾斜し, 29.62mを検出した。断面形はほぼ逆台形を呈し, コーナー部に一

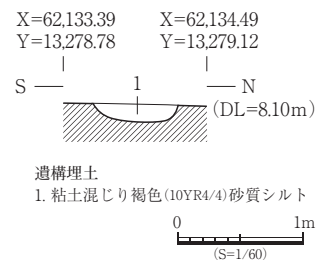


図2-123 SD-127

段深い掘り込みがみられる。埋土は砂混じりにぶい黄色(2.5Y6/4)粘土質シルトの部分と粘土混じり褐色(10YR4/4)砂質シルトの部分がみられた。出土遺物には弥生土器5点,土師器9点,須恵器20点,土師質土器23点,石製品1点がみられ,須恵器4点(1371~1374)と土師質土器2点(1375・1376)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-125 1371~1374)

1371~1373は杯蓋である。1371は口縁部の破片で,外面にはハダ荒れがみられ,胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。1372も口縁部の破片で,胎土には白色細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。1373は平らな天井部から口縁部が外下方へ下るもので,外面にはハダ荒れがみられる。胎土は精良で,白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1374は壺の蓋とみられるもので,天井部と口縁部の境には1条の凹線が巡る。天井部外面には自然釉がかかりハダ荒れとなる。胎土には白色中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

土師質土器(図2-125 1375・1376)

いずれも杯で,底部が残存し,底部の切り離しは回転糸切りによる。1376の底部外端部にはわずかに煤の付着が認められる。いずれも胎土は精良で,細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

SD-128(図2-124)

調査区北東部で検出した浅く短い溝で,SD-127に掘り込まれる。検出幅21~32cm,深さ1~7cmで,基底面は西(7.666m)から東(7.576m)に向かってやや傾斜し,主軸方向はN-80°-Wを示し,6.14mを検出した。断面形はほぼ逆台形を呈し,東側底面に1段深い掘り込みがみられる。埋土は小礫をわずかに含む砂混じりにぶい黄色(2.5Y6/4)粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

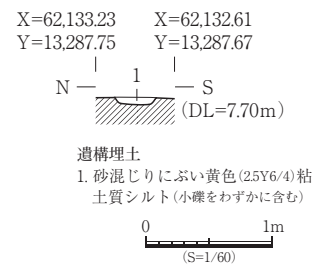


図2-124 SD-128

SD-129

調査区北東部で検出した舟形土坑状の溝で,SD-127とピットに掘り込まれる。検出幅35~47cm,深さ4~8cmで,基底面は南(7.691m)から北(7.637m)に向かってやや傾斜し,主軸方向はN-5°-Eを示し,1.80mを検出した。断面形はほぼ逆台形を呈する。埋土は小礫をわずかに含む砂混じりにぶい黄色(2.5Y6/4)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点,土師器2点,土師質土器4点がみられ,土師質土器1点(1377)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-125 1377)

ベタ高台の椀で,体部は内湾気味に上がる。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

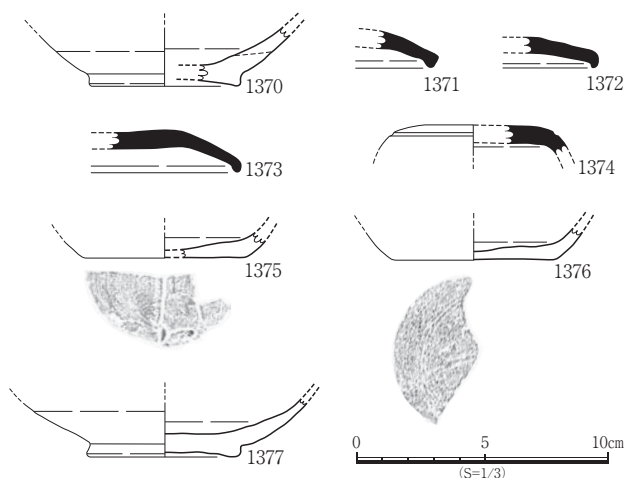


図2-125 SD-126・127・129出土遺物実測図

SD - 130

調査区北東部で検出した舟形土坑状の溝で、SD - 127 に掘り込まれる。検出幅 40 ~ 60 cm、深さ 4 ~ 13 cm で、基底面はほぼ平坦で標高 7.691 ~ 7.707 m を測り、主軸方向は N - 2° - E を示し、全長は 2.68 m である。断面形は逆台形を呈する。埋土は小礫をわずかに含む砂混じりにぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD - 131 (図2-126)

調査区中央部北側で検出したL字形の溝で、SD - 133 を掘り込み、さらに北の調査区外に延びる。溝は南北方向に延びた後、西側に屈曲する。方向的にはSD - 141 との関連が考慮される。検出幅 22 ~ 59 cm、深さ 7 ~ 20 cm で、基底面は北 (7.955 m) から南 (7.803 m) に向かって傾斜し、21.06 m を検出した。断面形はU字形を呈する。埋土は粘土混じりの褐色 (10YR4/4) 砂質シルトであった。出土遺物には土師器 9 点、須恵器 5 点がみられたが、図示できるものはなかった。

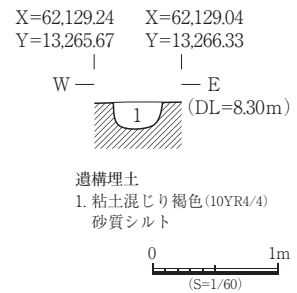


図2-126 SD - 131

SD - 132 (図2-127)

調査区中央部北側で検出した南北溝で、さらに北の調査区外に延びる。検出幅 44 ~ 64 cm、深さ 12 ~ 14 cm で、基底面は南 (7.976 m) から北 (7.906 m) に向かってやや傾斜し、主軸方向は N - 10° - E を示し、6.73 m を検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は粘土混じりの褐色 (10YR4/4) 砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

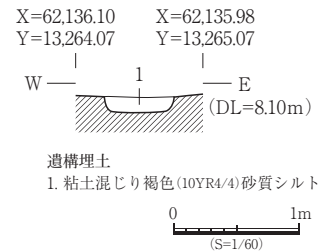


図2-127 SD - 132

SD - 133 (図2-128)

調査区中央部で検出した東西溝で、SD - 131 に掘り込まれる。検出幅 32 ~ 60 cm、深さ 9 ~ 19 cm で、基底面は西 (7.819 m) から東 (7.766 m) に向かってやや傾斜し、主軸方向はSD - 141 に近く、N - 73° - W を示し、全長は 16.65 m であった。断面形は舟底状を呈する。埋土は小礫から大礫を含む砂混じりにぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土質シルトであった。出土遺物には土師器 5 点、須恵器 7 点、土師質土器 4 点がみられ、須恵器 1 点 (1378) が図示できた。

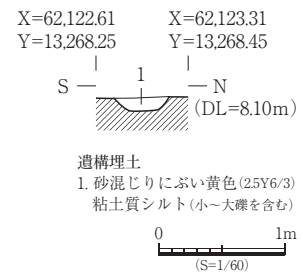


図2-128 SD - 133

出土遺物

須恵器 (図2-131 1378)

杯身の口縁部破片で、器面には回転ナデ調整が施される。胎土には白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

SD - 134 (図2-129)

調査区南東部で検出した南北溝で、さらに南の調査区外に延びる。溝は中央に箱形の掘り方、東西両側に浅い平場を有し、部分的に溝状の凹みがみられる。検出幅 0.29 ~ 2.36 m、深さ 0.07 ~ 1.03 m で、基底面は北 (7.132 m) から南 (6.289 m) に向かって傾斜し、主軸方向は N - 7° - E を示し、18.76 m を検出した。断面形は基本的に箱形を呈する。埋土は灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質粘土からシルト混じり灰

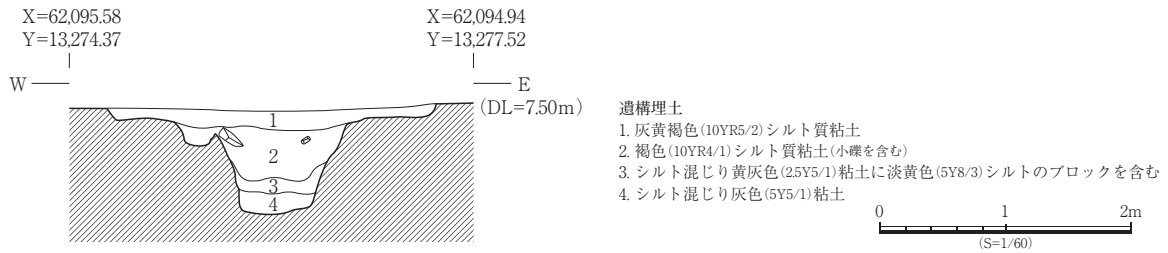


図2-129 SD-134

色(5Y5/1)粘土までの4層に分層される。出土遺物には弥生土器2点, 土師器7点, 須恵器22点, 土師質土器8点, 石製品2点がみられ, 須恵器3点(1379~1381), 土師質土器3点(1382~1384)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-131 1379~1381)

1379と1380は杯身で, いずれも底部の破片である。1379は底部外端部にかまぼこ状の小さな高台, 1380はハの字形に開く高さ0.7cmの高台が付く。胎土には, 1379が白色中粒砂をわずかに含み, 1380が白色細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

1381は台付壺の底部とみられるもので, 内面には自然釉がかかり, 体部外端部に回転ヘラ削り調整が施される。胎土には白色中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図2-131 1382~1384)

いずれもB技法の杯で, 1382と1383は形態的に酷似し, 口縁部が体部より厚くなる。胎土には, 1382が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み, 1383は細粒砂から中粒砂をわずかに含む。1384は全体が復元できるもので, 口縁部は体部に比べ厚く丸くなる。胎土は精良で, 細粒砂をわずかに含む。

SD-135(図2-130)

調査区南東部, SD-134の西側で検出した南北溝で, 全長14.25mを測る。溝は南側に1段低い掘り込みがみられ, 北側には東壁沿いに1段低い掘り込みがある。検出幅0.36~1.04m, 深さ4~32cmで, 基底面は南(7.217m)から北(7.125m)に向かってやや傾斜し, 主軸方向はN-4°-Eを示す。断面形は基本的に舟底状を呈する。埋土は極粗粒中礫をわずかに含む砂混じり灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器7点, 須恵器7点, 土師

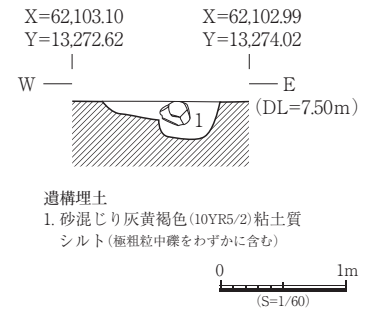


図2-130 SD-135

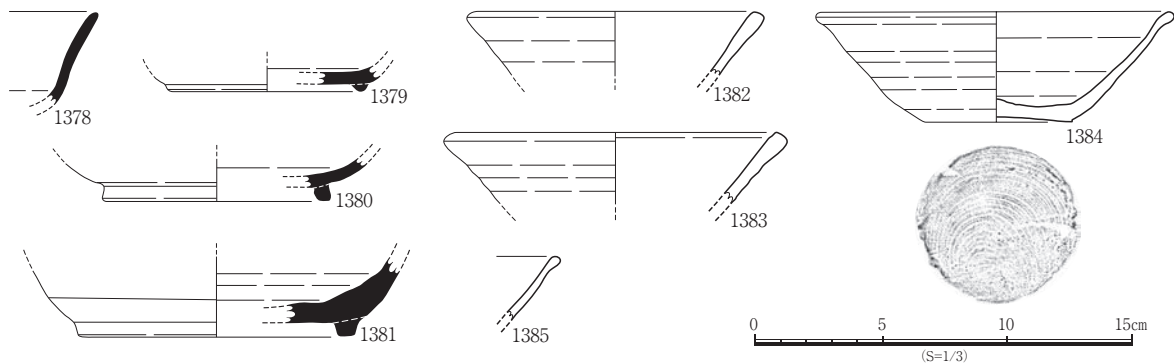


図2-131 SD-133~135出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) I区

質土器4点がみられ、土師質土器1点(1385)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-131 1385)

杯の口縁部破片で、口縁部は体部に比べ厚く、丸くなる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

SD-136(図2-132)

調査区南東部、SD-135の南側で検出した南北溝で、さらに調査区外に延びる。検出幅29~62cm、深さ5~14cmで、基底面は北(7.265m)から南(7.183m)に向かってやや傾斜し、主軸方向はSD-135とほぼ同じで、北側が東に曲り、その方向はN-20°-Eを示し、5.54mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され、上層が小礫をわずかに含む砂混じりにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト、下層が褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土であった。出土遺物は皆無であった。

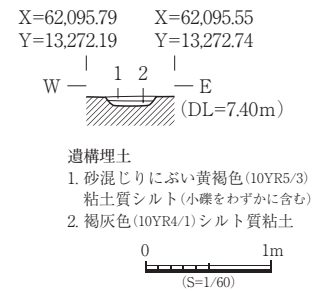


図2-132 SD-136

SD-137(図2-133)

調査区南部で検出した東西溝で、P-131に切られ、両端が調査区外に延びる。検出幅60~91cm、深さ7~26cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.196~7.236mを測り、主軸方向はN-79°-Wを示し、37.28mを検出した。断面形はU字形を呈する。埋土は砂混じり暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器21点、土師器3点、須恵器16点、土師質土器21点、瓦器2点、石製品1点がみられ、弥生土器2点(1386・1387)、土師器1点(1388)、須恵器3点(1389~1391)、石製品(1392)が図示できた。

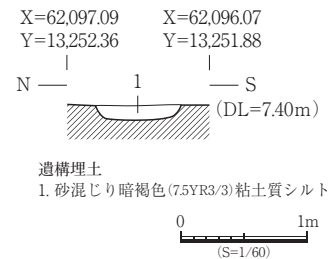


図2-133 SD-137

出土遺物

弥生土器(図2-136 1386・1387)

1386は甕の口縁部の細片で、外反気味に延びた後に大きく外反する。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多量に含む。

1387は壺の底部とみられるもので、器面にはナデ調整を施し、内面には指押えの痕がわずかに残る。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

土師器(図2-136 1388)

杯身の底部が残存し、外端部にはハの字形に開く断面逆台形の高さ0.7cmの高台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

須恵器(図2-136 1389~1391)

1389と1390は杯蓋である。1389は古墳時代のもので、天井部外面は回転ヘラ削り調整の後にナデ調整を施す。胎土には白色中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。1390は古代のもので、口縁部は平らな天井部から下外方に下り、端部を下方に小さく曲げる。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

1391は甕の胴部破片で、外面には格子目状のタタキ、内面には同心円文のタタキが明瞭に残る。胎

土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図2-136 1392)

緑色片岩製の環状石斧で、縁辺部に刃部を作り出す。孔径は1.8cmを測る。

SD-138

調査区西部で検出した浅く細い東西溝で、さらに東の調査区外に延びる。検出幅16~27cm、深さ7~9cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.690~7.704mを測り、主軸方向はN-82°-Wを示し、4.79mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SD-139

調査区西部, SD-138の北側で検出したやや湾曲した東西溝で、さらに東の調査区外に延びる。検出幅37~49cm、深さ6~11cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.729~7.745mを測り、2.43mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SD-140(図2-134)

調査区西部, SD-143に掘り込まれた形で検出した溝で、南北に分れるが、環状をなしていたとみられ、何らかの区画⁽³⁾ではなかろうか。復元すると隅丸方形の区画(一辺約3.0m)

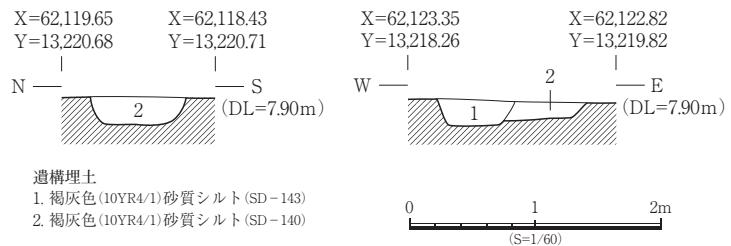


図2-134 SD-140・143

を幅約0.8mの溝で囲っていたものとみられる。検出幅60~87cm、深さ7~26cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.633~7.660mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器1点、須恵器6点、土師質土器37点、瓦器3点、瓦質土器2点がみられ、須恵器2点(1393・1394)、瓦質土器(1395・1396)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-136 1393・1394)

1393は椀の底部とみられるもので、ハの字状に大きく開く高さ約2.4cmの高台が付いていたものと考えられる。胎土には白色中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

1394は甕の破片で、外面には平行のタタキが残り、自然釉がかかりハダ荒れがみられ、内面にはナデ調整を施す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から細粒中礫をわずかに含む。

瓦質土器(図2-136 1395・1396)

いずれも羽釜で、内傾する口縁部と断面三角形の鑿が残り、胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SD-141(図2-135)

調査区中央部から西部にかけて検出した東西溝で、SD-143に掘り込まれていたが、東西の主軸方向はSD-143の方向と合致しており、SD-143は掘り返しの可能性が高い。検出幅35~66cm、深さ5~11cmで、基底面は西(7.740m)から東(7.580m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-75°-Wを示し、

3. 遺構と遺物 (1) I区

35.08mを検出した。断面形は逆台形ないし舟底状を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器2点, 須恵器3点, 土師質土器6点がみられ, 須恵器1点(1397)が図示できた。

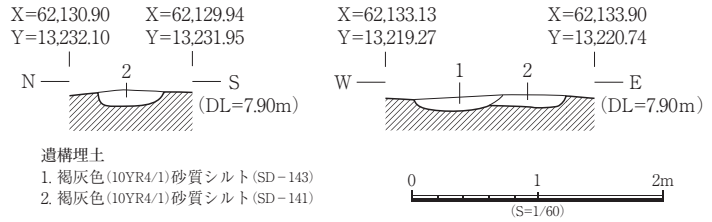


図2-135 SD-141・143

出土遺物

須恵器(図2-136 1397)

杯蓋で, 下外方に下る口縁部のごく一部が残存し, 端部は下方に小さく屈曲する。胎土には白色細粒砂をわずかに含む。

SD-142

調査区北西端部で検出した南北溝で, 南はSD-143に掘り込まれ, 北は調査区外に延びる。検出幅34~60cm, 深さ5~10cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.710~7.719mを測り, 主軸方向はN-27°-Wを示し, 5.37mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には土師器2点, 土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD-143(図2-134・135)

調査区北西部から西部にかけて検出したL字形の溝で, 東西方向に延びた後, 南に大きく屈曲する。溝はSD-140・141を掘り込み, 南端でSK-135に掘り込まれる。東西の主軸方向はSD-141の方

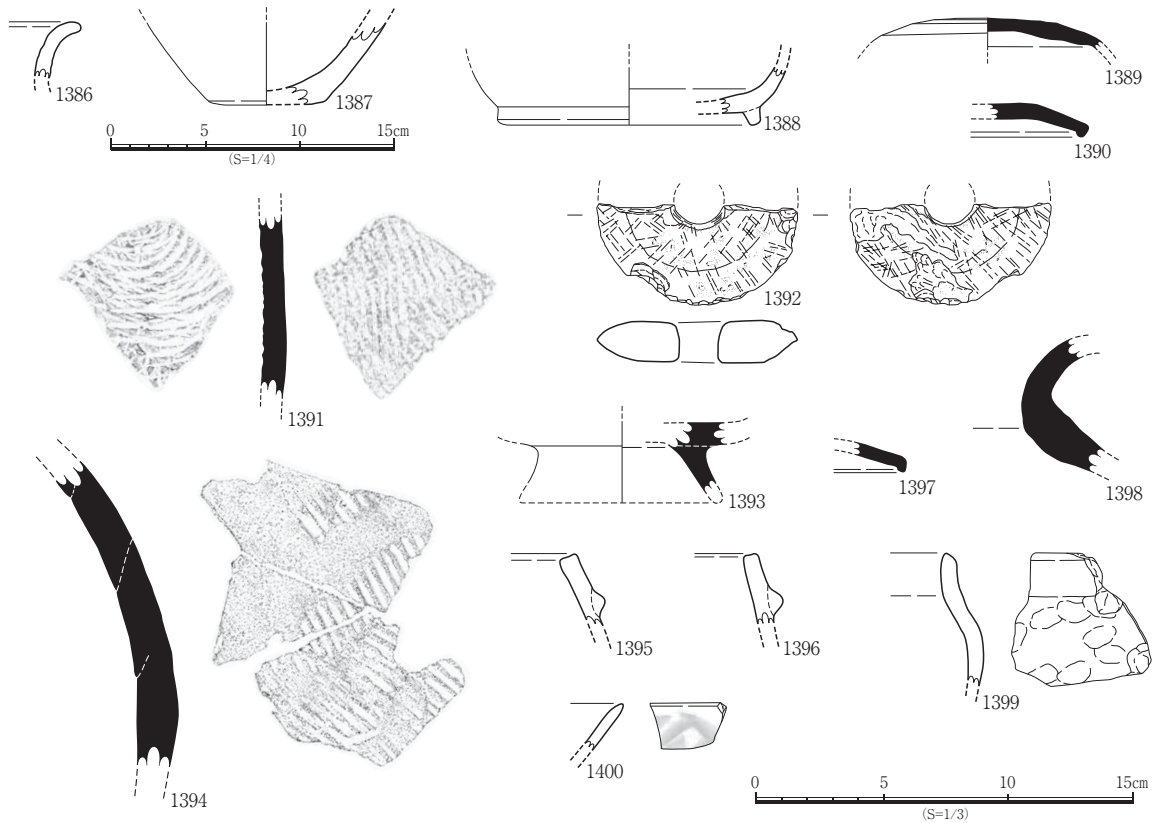


図2-136 SD-137・140・141・143出土遺物実測図

向と合致しており，SD - 141の掘り返しの可能性が高い。検出幅24～72cm，深さ3～21cmで，基底面は西(7.748m)から東(7.695m)，そして南(7.595m)に向かって傾斜し，東西の主軸方向はN-75°-W，南北の主軸方向はN-3°-Eを示し，39.13mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器2点，土師器12点，須恵器4点，土師質土器14点，瓦器1点，瓦質土器1点，青磁1点がみられ，須恵器1点(1398)，瓦質土器(1399)，青磁(1400)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-136 1398)

甕の頸部で，頸部は肩部から大きく外反し，胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

瓦質土器(図2-136 1399)

鍋で，口縁部は丸い胴部からほぼ直立し，端部は内傾する平面をなす。胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。

青磁(図2-136 1400)

碗の口縁部の細片で，外面には鎬蓮弁文が残る。胎土には黒色粒をわずかに含む。

SD - 144

調査区西端部で検出した全長21.69mの浅い南北溝で，SB - 124に掘り込まれ，SB - 119と重複する。SD - 143の南北部分とほぼ平行しており，同時期の可能性も考えられ，屋敷地の区画をなしていたものと考えられる。検出幅15～32cm，深さ2～8cmで，基底面は北(7.803m)から南(7.749m)にやや傾斜し，主軸方向は方眼北を示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SD - 145(図2-137)

調査区南西端部で検出した東西溝で，SD - 146を掘り込み，さらに西の調査区外に延びる。検出幅76～85cm，深さ2～22cmで，基底面はほぼ平坦で標高7.543～7.554mを測り，主軸方向はN-63°-Wを示し，2.06mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器3点，土師質土器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD - 146(図2-137)

調査区南西端部で検出した東西溝で，SD - 145に掘り込まれ，さらに西の調査区外に延びる。検出幅25cm，深さ2～17cmで，基底面はほぼ平坦で標高7.566～7.586mを測り，主軸方向はN-71°-Wを示し，2.99mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物は皆無であった。

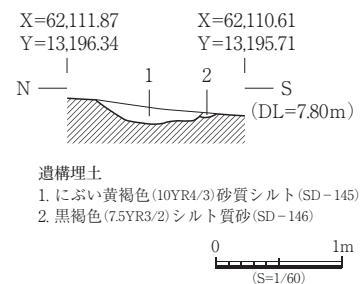


図2-137 SD - 145・146

SD - 147

調査区南西端部で検出した東西溝で，東でピットを掘り込み，さらに西の調査区外に延びる。検出幅20～30cm，深さ5～7cmで，基底面はほぼ平坦で標高7.535～7.540mを測り，主軸方向はN-77°-Wを示し，2.00mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物は皆無であった。

3. 遺構と遺物 (1) I 区

SD - 148 (図2 - 138)

調査区南西端部, SD - 147 の南側で検出した東西溝で, さらに西の調査区外に延びる。検出幅37~50cm, 深さ12~14cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.386~7.388mを測り, 主軸方向はN-78°-Wを示し, 3.16mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物は皆無であった。

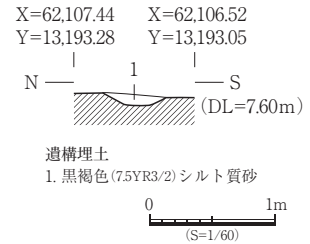


図2 - 138 SD - 148

SD - 149 (図2 - 139)

調査区南部, SD - 148 の東側で検出した全長18.54mの東西溝で, SD - 150・151を掘り込む。検出幅32~69cm, 深さ1~11cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.452~7.474mを測り, 主軸方向はN-85°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器3点, 須恵器4点, 土師質土器6点がみられ, 須恵器2点(1401・1402)が図示できた。

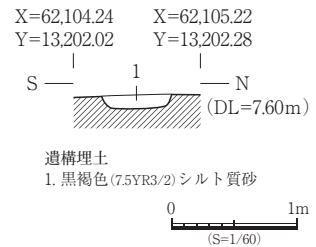


図2 - 139 SD - 149

出土遺物

須恵器(図2 - 143 1401・1402)

いずれも甕で, 1401は外反する口縁部が残存し, 端部は内傾する凹面となる。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。1402は胴部の破片で, 外面には平行のタタキ, 内面にはハケ調整の後にナデ調整を加える。

SD - 150 (図2 - 140)

調査区南西端部, SD - 148 の南側で検出した東西溝で, SD - 149に東端で掘り込まれ, さらに西の調査区外に延びる。検出幅30~46cm, 深さ2~10cmで, 基底面は東(7.466m)から西(7.351m)にやや傾斜し, 主軸方向はN-78°-Wを示し, 6.94mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが, 図示できなかった。

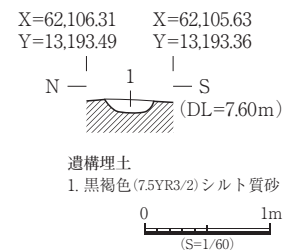


図2 - 140 SD - 150

SD - 151

調査区南部, SD - 149とSD - 152の間で検出した全長5.76mとみられる東西溝で, SD - 149・152に掘り込まれる。検出幅38cm, 深さ7~11cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.426~7.445mを測り, 主軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物には土師質土器2点, 瓦器1点がみられたが, 図示できなかった。

SD - 152 (図2 - 141)

調査区南部, SD - 149・151の南側で検出した東西溝で, SD - 151を掘り込み, 西の調査区外にさらに延びる。検出幅31~65cm, 深さ7~15cmで, 基底面はほぼ平坦で標高7.278~7.294mを測り, 主軸方向はN-80°-Wを示し, 23.42mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色

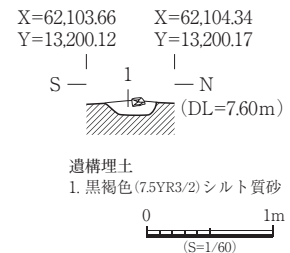


図2 - 141 SD - 152

(7.5YR3/2)シルト質砂単一であった。出土遺物には土師器1点、須恵器2点、土師質土器4点、瓦器1点がみられ、須恵器(1403・1404)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-143 1403・1404)

いずれも甕で、1403は肥厚した口縁端部が残存する。内面には小さな凸帯が巡る。胎土には白色中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。1404は胴部の破片で、器面には回転カキ目調整ではなくハケ調整を施し、外面にはタタキを加える。胎土は比較的精良で、中粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

SD-153(図2-142)

調査区南西端部で検出した全長10.08mの東西溝で、SK-142を掘り込む。検出幅26~48cm、深さ5~12cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.281~7.318mを測り、主軸方向はN-84°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルト単一であった。出土遺物には弥生土器1点、石製品1点がみられ、弥生土器(1405)が図示できた。

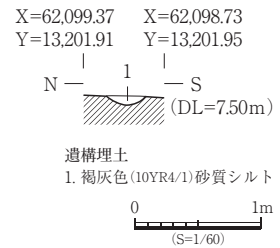


図2-142 SD-153

出土遺物

弥生土器(図2-143 1405)

壺の底部で、外面にはヘラナデ調整を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

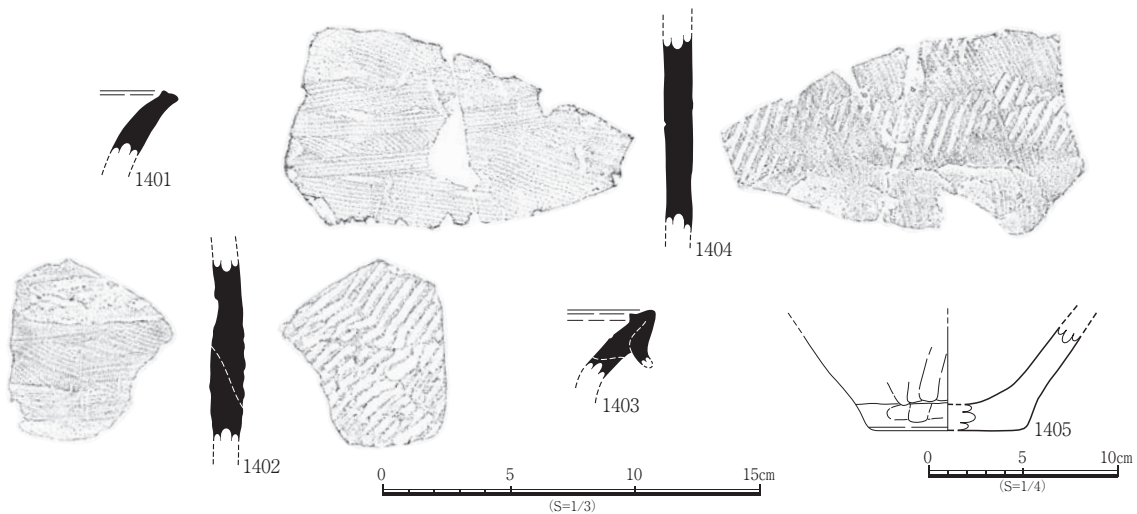


図2-143 SD-149・152・153出土遺物実測図

vピット

検出したピット総数は693個で、建物跡等には復元できなかったが、柱穴と判断されるピットも少なからずみられる。ここでは、図示できた遺物が出土したピットについて報告する。これらの大半は屋敷内で検出されたものである。

P-131

調査区南東部、SD-137を掘り込んだ形で検出したほぼ円形のピットである。径約44cmで、深さ8cmを測る。埋土はにぶい褐色(7.5YR5/3)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点がみられ、須恵器(1406)が図示できた。

3. 遺構と遺物 (1) I区

出土遺物

須恵器(図2-144 1406)

杯蓋で、径2.8cm、高さ0.7cmの扁平な擬宝珠形のつまみが残る。胎土には白色中粒砂を中心に細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

P-132

調査区中央部西より、ピットを掘り込んだ形で検出した不整楕円形のピットで、長径82cm、短径40cmで、深さ6cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には土師器2点、土製品1点がみられ、土製品(1407)が図示できた。

出土遺物

土製品(図2-144 1407)

土錘の一部が残存し、胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

P-133

調査区北部で検出したほぼ円形のピットである。径35～42cmで、深さ28cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には図示した土師質土器1点(1408)のみがみられた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1408)

杯で、ほぼ完存する。胎土は精良で、中粒砂をわずかに含む。

P-134

調査区北部、P-133の北側で検出したほぼ円形のピットである。径20～21cmで、深さ26cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には図示した土師質土器1点(1409)のみがみられた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1409)

杯で、底部の切り離しは静止糸切りによる。体部外面下端にはヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

P-135

調査区北部、P-134の北側で検出したほぼ円形のピットで、西側のピットを掘り込む。径22～30cmで、深さ20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトであった。出土遺物には図示した土師質土器1点(1410)のみがみられた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1410)

杯の口縁部の破片である。胎土には細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

P-136

調査区北西部で検出したほぼ円形のピットである。径25～27cmで、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器2点がみられ、須恵器(1411)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-144 1411)

甕の胴部破片で、外面には回転カキ目調整、内面には同心円文のタタキの後にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

P-137

調査区北西部, SB-116と重複した形で検出したほぼ円形のピットである。径24~27cmで、深さ9cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられ、内1点(1412)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1412)

杯の口縁部の破片である。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

P-138

調査区北西部, SB-119の西側で検出したほぼ円形のピットである。径26~29cmで、深さ8cmを測る。埋土は灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器10点がみられ、内1点(1413)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1413)

小皿で、底部の切り離しは回転糸切りとみられる。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

P-139

調査区北西部, SB-119の北側柱上で検出したほぼ円形のピットで、東側のピットを掘り込む。径30cmで、深さ14cmを測る。埋土は灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器5点がみられ、内1点(1414)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1414)

杯の口縁部の破片で、口縁部はやや厚みがある。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

P-140

調査区北西部, SB-119の東妻柱上で検出したほぼ円形のピットである。径32cmで、深さ16cmを測る。埋土は灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器19点がみられ、内2点(1415・1416)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1415・1416)

いずれも杯底部の破片で、底部の切り離しは、1415が回転糸切り、1416が回転ヘラ切りによる。胎土には、1415が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含み、1416が細粒砂から粗粒砂を多く含む。

P-141

調査区北西部, SB-120の西側柱と重複する形で検出した楕円形のピットである。長径68cm、短

3. 遺構と遺物 (1) I区

径63cmで、深さ11cmを測る。埋土は灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器6点がみられ、内1点(1417)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1417)

杯の底部の破片で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

P-142

調査区北西部、P-141の南側で検出したほぼ円形のピットである。径27~32cmで、深さ32cmを測る。埋土は灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられ、内1点(1418)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1418)

杯で、口縁部は体部から外傾して延び、端部を丸く仕上げる。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

P-143

調査区北西部、SB-119の南側で検出したほぼ円形のピットで、西側のピットを掘り込む。径30~33cmで、深さ27cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器8点がみられ、内1点(1419)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1419)

小皿で、口縁部を欠く。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

P-144

調査区西部、SB-124の南側で検出したほぼ円形のピットである。径26~31cmで、深さ34cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には図示した土製品2点(1420・1421)がみられた。

出土遺物

土製品(図2-144 1420・1421)

いずれも紡錘形の土錘で、胎土は精良で、1420が細粒砂から粗粒砂をわずかに含み、1421が細粒砂から中粒砂をわずかに含む。

P-145

調査区北西部、SA-107の東側で検出したほぼ円形のピットである。径26~28cmで、深さ23cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には図示した瓦質土器1点(1422)がみられた。

出土遺物

瓦質土器(図2-144 1422)

羽釜で、口縁部外面下端には断面三角形の鐙が付く。胎土には粗粒砂を中心に、細粒砂から粗粒砂

を多く含む。

P-146

調査区北西部, SD-140に掘り込まれた形で検出した円形のピットである。径21cmで、深さ31cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には図示した土師質土器1点(1423)がみられた。

出土遺物

土師質土器(図2-144 1423)

杯の底部の破片で、胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

P-147

調査区西部, SA-112の南側で検出した楕円形のピットである。長径72cm, 短径56cmで、深さ7cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトであった。出土遺物には図示した瓦質土器1点(1424)がみられた。

出土遺物

瓦質土器(図2-144 1424)

羽釜で、口縁部は内湾する胴部から内傾し、端部は外傾する平面をなす。口縁部外面下端には断面三角形の鑊が付く。胎土には細粒砂から細粒中礫を多く含む。

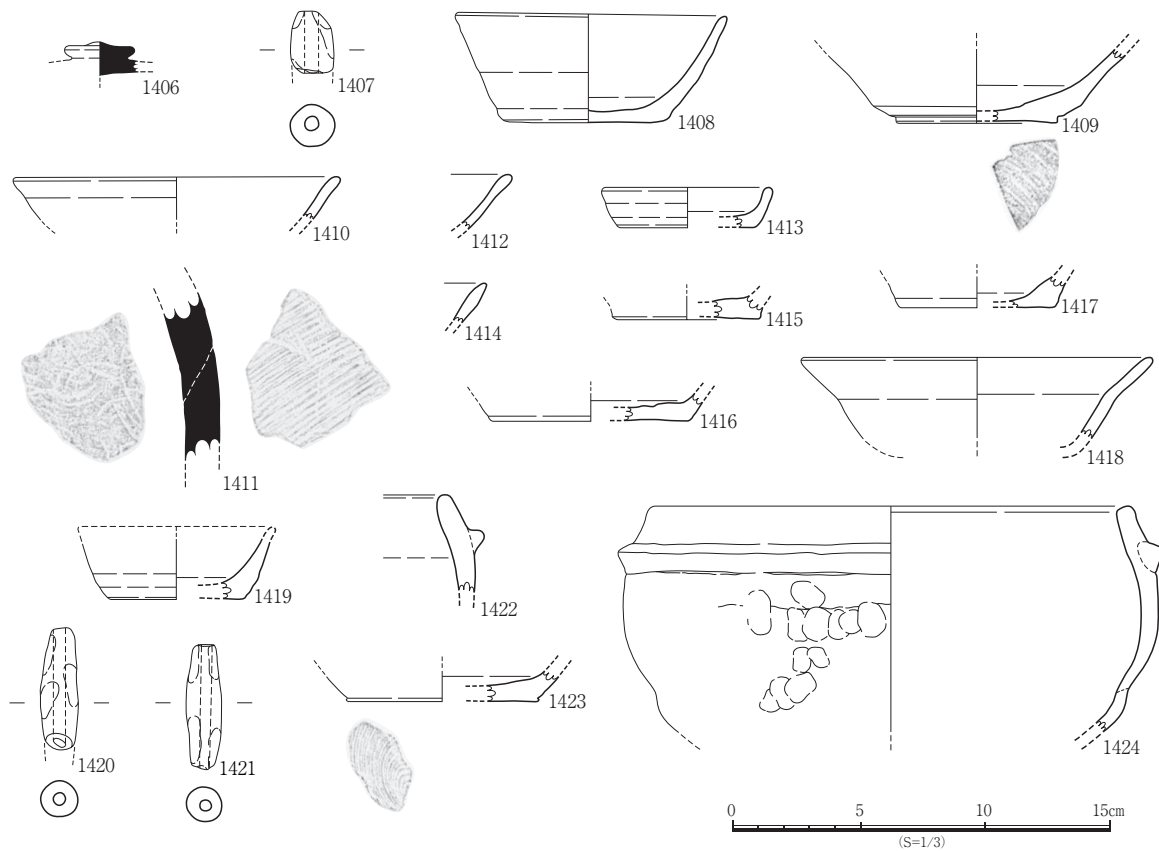


図2-144 P-131~147出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) I 区

④ 近世

2基の土坑を検出した。いずれも近世後半のものとみられる。

i 土坑

散発的で、関連は不明である。

SK - 144

調査区西部, SD - 149の北側で検出した方形の土坑である。長辺2.71m, 短辺2.59m, 深さ9cmを測り, 長軸方向はN - 85° - Wを向く。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄褐色(10YR4/3)砂質シルト単一であった。出土遺物には須恵器1点がみられたが, 図示できなかった。

SK - 145

調査区北部, 東の調査区西壁際で検出した楕円形とみられる土坑で, 西半分は調査区外にある。長径1.54m以上, 短径0.38m以上, 深さ44cmを測り, 長軸方向はN - 3° - Eを向く。断面形は逆台形を呈する。埋土は小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粘土であった。出土遺物には図示した肥前系磁器1点(1425)のみがみられた。

出土遺物

肥前系磁器(図2 - 145 1425)

紅皿で, 外面には条線が施され, 内面から口縁部外面にかけて白色釉を施釉する。胎土には黒色粒をわずかに含む。

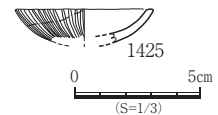


図2 - 145 SK - 145
出土遺物実測図

註

- (1) 平成15年度に実施した試掘調査の際, 最初に検出した遺構がこの竪穴住居跡であった。
- (2) 平面形は方形であるが, 佐川町二ノ部遺跡や土佐市天神遺跡から中央ピットを挟んだ2個の柱穴が支柱穴と考えられる竪穴住居跡が確認されている。
- (3) 平成20年度に報告する西野々遺跡Ⅲ区からは方形区画墓と呼称した遺構が確認されている。それには主体部がみられるものの, この区画内には検出されておらず, 類似のものか判然としない。ただし, 溝の形状・規模は類似する。

(2) Ⅱ区

本調査区で確認された遺構は、大きく弥生時代中期～後期、古墳時代後期、平安時代～鎌倉時代に分けられる。そのうち弥生時代、古墳時代の遺構については、東部で部分的な分布を確認したのみである。

Ⅱ区東半は中央部を中心に、調査区を縦断する流路状の窪地を確認した。前述したようにこの窪地は、弥生時代中期には人の手が入りながらも、縄文時代晩期以降から古代にかけて比較的静穏な状態で堆積していったことが明らかとなった。窪地への落ち込みの肩部には、弥生時代から中世までの遺構が認められた。遺構の多くは溝跡あるいは溝状土坑で、利水関連の性格を持っていた可能性も考えられる。弥生時代の溝跡は等高線または地形に沿わず、南西から北東の窪地に向かって注ぎ込んでいる。対して古墳時代以降の溝跡は、流路状の窪地とほぼ並行して配されているのが特徴である。また落ち込みの肩部にみられる遺構は、標高の低い地点から弥生時代、古墳時代、古代と検出しており、最終的には古代から中世の遺構検出面に至る。これは窪地内への土の堆積過程と関連するものと考えられる。弥生時代、古墳時代には沼地状を呈していたとみられるⅡ区は、古代には西部を中心に掘立柱建物跡、土坑、溝跡などがみられる。ただし遺構は中世に比べると少なく、総柱建物が多い。中世になると屋敷地として利用されたようで、掘立柱建物跡や堀・柵列跡が多くみられる。

① 弥生時代

土坑 28 基、溝跡 3 条、ピット 107 個を検出した。遺物の全く出土しない遺構もあったが、遺構の検出状況や埋土などから弥生時代に含めて報告を行う。

i 土坑

28 基を確認した。平面形は円形、楕円形、隅丸方形、不整形、溝状の土坑がみられる。特に溝状土坑が多く、これらの多くは東部の窪地への落ち込み部で検出している。

SK-201

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状の土坑である。長辺 1.22 m、短辺 0.23 m、深さ 4 cm を測り、断面形は皿状を呈する。長軸方向は N-40°-W を示し、流路状の落ち込みに対して直交気味である。非常に浅いことから、自然の窪みの可能性もある。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土で、地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-202

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状土坑で、古代の溝跡 (SD-209) に切られる。長辺 6.31 m、短辺 0.21~0.69 m、深さ 26 cm を測り、断面形は U 字形を呈する。長軸方向は N-63°-W を示し、流路状の窪地の方向とほぼ直交する。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土単一であった。遺物は弥生土器 75 点が出土しているが、復元図示できるものはなかった。

SK-203

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状土坑である。長辺 2.00 m、短辺 0.42 m、深さ 3 cm を測り、断面形は皿状を呈する。長軸方向は N-71°-W を示し、流路状の窪地の方向とほぼ直交する。非常に浅く、自然の窪みの可能性もある。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器が 1 点出土したのみで、細片のため図示はで

きなかった。

SK-204

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した不整形の土坑である。長辺1.30m、短辺0.34m、深さ8cmを測り、断面形は皿状を呈する。長軸方向はN-39°-Eを示す。非常に浅いことから、自然の窪みの可能性もある。極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-205 (図2-146)

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状土坑である。長辺5.85m、短辺0.22~0.30m、深さ9cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-44°-Wを示し、流路状の窪地の方向と直交気味である。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/1~3/2)粘土質シルト単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器46点と、基底面より石製品1点(2136)が出土している。

出土遺物

石製品 (図2-147 2136)

サヌカイト製の凹基式石鏃で、全長3.0cmと比較的大型である。押圧剥離による調整を行っている。

SK-206

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状土坑である。長辺2.69m以上、短辺0.14m、深さ5cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-47°-Wを示し、流路状の窪地の方向と直交気味である。SK-209を切り、SK-207と切り合う。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルト単一で、地山ブロックを多く含んでいた。遺物は弥生土器片2点が出土したが、図示できるものはなかった。

SK-207

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状土坑である。長辺4.75m、短辺0.15m、深さ5cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-47°-Wを示し、流路状の窪地の方向と直交気味である。SK-209を切り、SK-206と切り合う。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルト単一で、地山ブロックを多く含んでいた。遺物は弥生土器4点が出土したが、図示できるものはなかった。

SK-208 (図2-148)

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した楕円形の土坑である。残存長1.19m、短径0.36m、深さ7cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-53°-Wを示す。SK-209と切り合う。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト

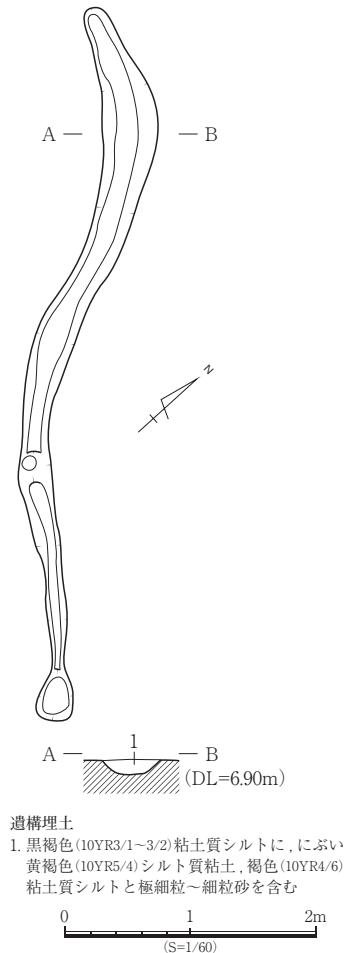


図2-146 SK-205

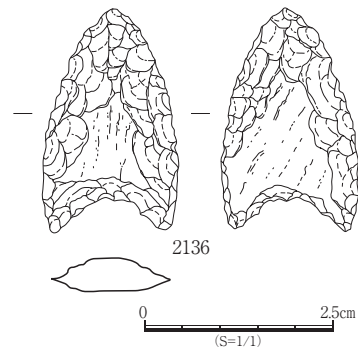


図2-147 SK-205出土遺物実測図

遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/1~3/2)粘土質シルトに、にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土、褐色(10YR4/6)粘土質シルトと極細粒~細粒砂を含む

質粘土単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器片3点が出土したが、図示できるものはなかった。

SK-209

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状土坑である。長辺4.39 m、短辺0.43 m、深さ10 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-47°-Wを示す。SK-208と切り合う。埋土は2層に分層され、上層は黒色(10YR2/1)シルト質粘土、下層は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土で、下層を中心に地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器片2点が出土したが、図示できるものはなかった。

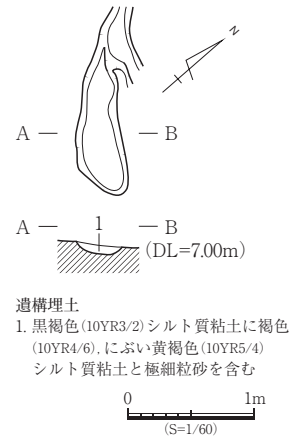


図2-148 SK-208

SK-210

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状土坑である。長辺6.02 m、短辺0.22 m、深さ8 cmを測る。断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-76°-Wを示し、流路状の窪地の方向とほぼ直交する。埋土は2層に分層され、上層は黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土、下層は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土であった。下層に地山ブロックと砂が多く入る。遺物は弥生土器片9点が出土したが、図示できるものはなかった。

SK-211

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した楕円形の土坑である。長径2.94 m、短径2.12 m、深さ17 cmを測る。断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-51°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-212

調査区東部、流路状の窪地への肩部で検出した溝状土坑である。長辺6.32 m、短辺0.94 m、深さ10 cmを測る。断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-85°-Eを示し、流路状の窪地の方向とほぼ直交する。埋土は2層に分層され、上層は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土、下層は黒褐色(10YR3/2~2/2)シルト質粘土であった。遺物は弥生土器片17点が出土したが、図示できるものはなかった。

SK-213

調査区東端部で検出した溝状土坑である。長辺6.09 m、短辺0.70 m、深さ13 cmを測る。断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-11°-Eを示し、土坑の長軸は南北方向で、流路状の窪地とほぼ並行する。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土単一であった。出土遺物は皆無であった。

SK-214

調査区東南隅で検出した隅丸方形の土坑である。弥生時代の土坑(SK-218)を切る。長辺0.74 m、短辺0.58 m、深さ9 cmを測る。断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-7°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで、地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

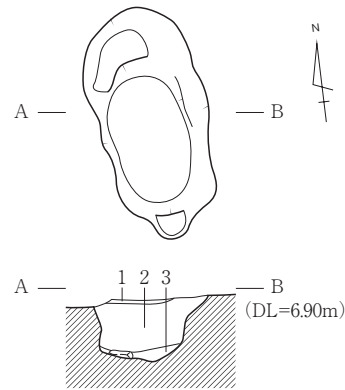
SK-215

調査区東南隅で検出した楕円形の土坑である。長径1.82 m、短径1.00 m、深さ15 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-22°-Eを示す。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色

(10YR3/2)シルト質粘土で、地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器片2点が出土したが、細片のため図示できるものはなかった。

SK-216 (図2-149)

調査区東南隅で検出した楕円形の土坑である。長径 1.68 m、短径 0.88 m、深さ 49 cmを測る。比較的残存状態の良い土坑で、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-10°-Wを示す。埋土は3層に分層され、上層から、極細粒砂から細粒砂混じりの黒色 (10YR1.7/1)シルト質粘土、黒褐色 (10YR3/2~2/2)シルト質粘土、黒褐色 (10YR3/1)シルト質粘土となっている。2層には地山ブロック、2層と3層には粗粒中礫から小型巨礫を含んでいた。この礫はすぐ背後の山から持ち込まれたものとみられるが、どのような用途のものであったのかは不明である。出土遺物は皆無である。



- 遺構埋土
1. 黒色 (10YR1.7/1)シルト質粘土に極細粒~細粒砂をわずかに含む
 2. 黒褐色 (10YR3/2)シルト質粘土に黒色 (10YR2/1)~黒褐色 (10YR2/2)シルト質粘土ブロック、黄灰色 (2.5Y4/1)シルト質砂ブロックを含み、鉄分の沈着がみられる
 3. 黒褐色 (10YR3/1)シルト質粘土に鉄分の沈着がみられる
- 0 1 2m
(S=1/60)

図2-149 SK-216

SK-217

調査区東南隅で検出した不整形の土坑である。長辺 1.22 m、短辺 0.84 m、深さ 27 cmを測る。比較的残存状態の良い土坑で、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-68°-Eを示す。埋土は3層に分層され、上層から、極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト、黒褐色 (10YR3/2) 砂、黒褐色 (2.5Y3/2)シルト質砂となっている。2層は地山ブロックを含む砂層である。出土遺物は皆無であった。

SK-218

調査区東南隅で検出した溝状土坑で、弥生時代の土坑 (SK-214) に切られる。残存長 4.59 m、短辺 1.52 m、深さ 7~14 cmを測る。残存状態は悪く、断面形はU字形または皿状を呈する。長軸方向はN-12°-Eを示す。埋土は2層に分層され、上層は黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト、下層は黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルトとなっている。下層には地山とみられる黄褐色 (10YR5/6) 砂質シルトブロックを含んでいた。遺物は弥生土器片19点が出土した。なお、擾乱による混入とみられる土師器の細片2点が出土している。出土遺物のうち、図示できるものはなかった。

SK-219

調査区東南隅で検出した不整形の土坑である。長辺 2.16 m、短辺 1.19 m、深さ 17 cmを測る。比較的残存状態の良い土坑で、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-38°-Wを示す。埋土は黒色 (10YR2/1)シルト質粘土に地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無である。

SK-220

調査区東南隅で検出した不整形の土坑である。遺構の半分は調査区外にあり、長辺4.35m、短辺2.10 m以上、深さ 16 cmを測る。断面形は皿状を呈する。長軸方向は不明である。SK-221 に切られる。埋土は黒褐色 (10YR3/2)シルト単一であった。出土遺物は皆無である。

SK - 221

調査区東南隅で検出したほぼ円形の土坑である。径1.08～1.17 m、深さ12 cmを測り、断面形はU字形を呈する。SK - 220 を切る。埋土は3層に分層され、上層から黒褐色(10YR3/2)シルト質砂、極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土、極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土となっている。2・3層に地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無である。

SK - 222

調査区中央部、流路状の落ち込みの西肩部で検出した楕円形の土坑である。古墳時代の溝跡(SD - 204・205)に切られる。長径1.62 m、短径0.34 m、深さ11 cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-87°-Eを示し、流路状の窪地と直交する。埋土は2層に分層され、上層は黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土、極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土となっている。いずれも地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無である。

SK - 223

調査区中央部、流路状の落ち込みの西肩部で検出した溝状土坑である。残存長1.75 m、短辺0.20 m、深さ6 cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-85°-Wを示し、流路状の窪地と直交する。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土で、地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無である。

SK - 224

調査区中央部、流路状の落ち込みの西肩部で検出した溝状土坑である。弥生時代の土坑(SK - 225)と切り合い、古墳時代の溝跡(SD - 204)に切られる。残存長0.71 m、短辺0.21 m、深さ4 cmを測り、断面形は非常に浅いU字形を呈する。長軸方向はN-84°-Eを示し、流路状の窪地と直交する。埋土は2層に分層され、上層から黒褐色(10YR3/2)砂質シルト、黒褐色(10YR3/1)砂質シルトとなっている。若干土色が異なるが同質であり、単一の可能性もある。出土遺物は皆無であった。

SK - 225

調査区中央部、流路状の落ち込みの西肩部で検出した溝状土坑である。弥生時代の溝跡(SD - 202)と切り合い、古墳時代の溝跡(SD - 204)に切られる。残存長3.52 m、短辺0.71 m、深さ15 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-70°-Wを示し、流路状の窪地とほぼ直交する。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土で、地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無である。

SK - 226

調査区中央部南、流路状の落ち込みの西肩部で検出した溝状土坑である。残存長2.09 m、短辺0.31 m、深さ9 cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-65°-Wを示し、流路状の窪地とほぼ直交する。埋土は2層に分層され、上層から黒褐色(10YR3/2)砂質シルト、黒褐色(10YR3/1)砂質シルトとなっている。いずれの層も地山ブロックを含んでいた。若干土色が異なるが同質であり、単一の可能性もある。出土遺物は皆無であった。

SK - 227

調査区中央部南、流路状の落ち込みの西肩部で検出した溝状土坑である。弥生時代の溝跡(SD - 202)と切り合う。残存長3.04 m、短辺0.35 m、深さ11 cmを測り、断面形は舟底形を呈する。長軸方向はN-33°-Wを示す。埋土は2層に分層され、上層は黒褐色(10YR2/2)～黒色(10YR2/1)シルト質粘土、

3. 遺構と遺物 (2) II区

下層は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土となっている。いずれも地山ブロックが混じる。出土遺物は皆無であった。

SK-228

調査区中央部南, 流路状の落ち込みの西肩部で検出した溝状土坑である。長辺1.37 m, 短辺0.22 m, 深さ6 cmを測り, 断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-80°-Wを示し, 流路状の窪地と直交する。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土に, 地山ブロックをわずかに含んでいた。出土遺物は皆無である。

表2-10 弥生時代土坑計測表

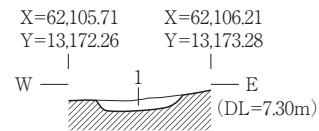
遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-201	溝状	1.22	0.23	4	N-40°-W	
SK-202	〃	6.31	0.21~0.69	26	N-63°-W	
SK-203	〃	2.00	0.42	3	N-71°-W	
SK-204	不整形	1.30	0.34	8	N-39°-E	
SK-205	溝状	5.85	0.22~0.30	9	N-44°-W	
SK-206	〃	(2.69)	0.14	5	N-47°-W	
SK-207	〃	4.75	0.15	5	N-47°-W	
SK-208	楕円形	(1.19)	0.36	7	N-53°-W	
SK-209	溝状	4.39	0.43	10	N-47°-W	
SK-210	〃	6.02	0.22	8	N-76°-W	
SK-211	楕円形	2.94	2.12	17	N-51°-E	
SK-212	溝状	6.32	0.94	10	N-85°-E	
SK-213	〃	6.09	0.70	13	N-11°-E	
SK-214	隅丸方形	0.74	0.58	9	N-7°-E	
SK-215	楕円形	1.82	1.00	15	N-22°-E	
SK-216	〃	1.68	0.88	49	N-10°-W	
SK-217	不整形	1.22	0.84	27	N-68°-E	
SK-218	溝状	(4.59)	1.52	7~14	N-12°-E	
SK-219	不整形	2.16	1.19	17	N-38°-W	
SK-220	〃	4.35	(2.10)	16	-	
SK-221	円形	1.17	1.08	12	N-0°-E	
SK-222	楕円形	1.62	0.34	11	N-87°-E	
SK-223	溝状	(1.75)	0.20	6	N-85°-W	
SK-224	〃	(0.71)	0.21	4	N-84°-E	
SK-225	〃	(3.52)	0.71	15	N-70°-W	
SK-226	〃	(2.09)	0.31	9	N-65°-W	
SK-227	〃	(3.04)	0.35	11	N-33°-W	
SK-228	〃	1.37	0.22	6	N-80°-W	

ii 溝跡

3条を確認した。そのうちしっかりと掘方のものは2条で、もう1条は溝状土坑の範疇でとらえるのが妥当かもしれない。

SD-201 (図2-150)

調査区東南部で検出した南北溝で、やや弧状に曲がる。検出長約11.92 m、幅0.69 m、深さ9 cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。基底面は北(7.167 m)から南(7.090 m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-18°-Wを示す。埋土は極細粒砂から極細粒中礫混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトで、地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器7点、石製品1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、石製品1点(2137)である。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトに暗褐色(10YR3/3)シルト質と極細粒砂～極細粒中礫を含む

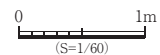


図2-150 SD-201

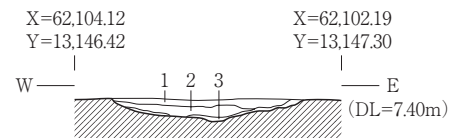
出土遺物

石製品(図2-153 2137)

砂岩を利用した叩石である。両主面中央部と四側縁に敲打痕が残る。

SD-202 (図2-151)

調査区中央部南で検出した南北溝で、弥生の土坑(SK-225・227)、弥生の溝跡(SD-203)と切り合い、古墳時代(SD-204)、中世(SD-229)の溝跡に切られていた。検出長約17.05 m、幅0.96～1.52 m、深さ9～16 cmを測る。基底面は南(7.193 m)から北(7.050 m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-26°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は3層に分層され、上層から細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト、極細粒砂から細粒砂混じりの黒色(10YR2/1)粘土質シルト、最下層は地山であるにぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトに黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトを含んでいた。遺物は弥生土器58点が出土したが、そのうち復元図示できたのは1点(2138)である。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトに細粒砂を含む
2. 黒色(10YR2/1)粘土質シルトに褐色(10YR4/4)粘土質シルトブロックと極細粒～細粒砂を含む
3. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトに黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトを含む

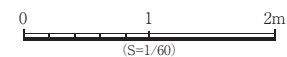


図2-151 SD-202

出土遺物

弥生土器(図2-153 2138)

甕の口縁部の破片である。外面は剥落のため調整不明、内面はヨコ方向のハケ調整の後、端部のみヨコナデ調整を行う。胎土はチャートを含む極細粒砂から極粗粒砂が混じる。

SD-203 (図2-152)

調査区中央部南で検出した南北溝で、南は調査区外に延びる。弥生の溝跡(SD-202)と切り合い、古代の溝跡(SD-212)に切られる。検出長約25.61 m、幅1.13～1.67 m、深さ41～65 cmを測る。基底面は南(6.779 m)から北(6.497 m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-28°-Eを示す。断面形はU字形または逆台形を呈する。特に溝中央部付近には、基底面から25 cmほどの高さで段状の立ち上がりが見られた。この周辺には大型大礫を敷石状に配しており、意図的に溝の中に作られたと考えられる。こ

3. 遺構と遺物 (2) II区

これらの段は、溝を利用する際の足場として利用された可能性があるが、現段階では推測の域を出ない。埋土は3層に分層され、上層から、極粗粒砂から大型大礫混じりの黒色(10YR2/1~1.7/1)粘土質シルト、細粒砂から中粒砂混じりの黒色(10YR2/1)~黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、極粗粒砂から大型大礫混じりの黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトとなっている。そのうち3層については、上記の理由で埋土とは言えない可能性がある。遺物は弥生土器97点、石製品1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、弥生土器2点(2139・2140)、石製品1点(2141)である。

出土遺物

弥生土器(図2-153 2139・2140)

2139は壺の口縁部の破片で、内外面とも剝落のため調整不明である。胎土はチャートを含む極細粒砂から極粗粒砂が混じる。

2140は甕の底部の破片である。胎土はチャート、石英を含む極細粒砂から極細粒中礫が混じる。

石製品(図2-153 2141)

砂岩を利用した叩石で、両主面中央部と側縁部に敲打痕がみられる。全体的に扁平で、主に側縁を敲打に使用している。

iii 性格不明遺構

調査区東南部で1基確認した。

SX-201

調査区東南部, SK-214の北で検出した不整形の遺構である。残存長2.80m, 短辺0.80m, 深さ21cmを測る。断面形は、やや不整形気味のU字形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルト単一である。遺物は弥生土器6点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

iv ピット

検出したピットは107個で、検出したピットの全体数からみれば非常に少ない。分布にはまとまりがなく、柱穴と判断できるものはなかった。ここでは復元図示できる遺物の出土した、ピット1個について報告する。

P-201

調査区東部, 流路状の落ち込みの肩部で検出したピットである。径26cmの円形で、深さ6cmを測る。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色

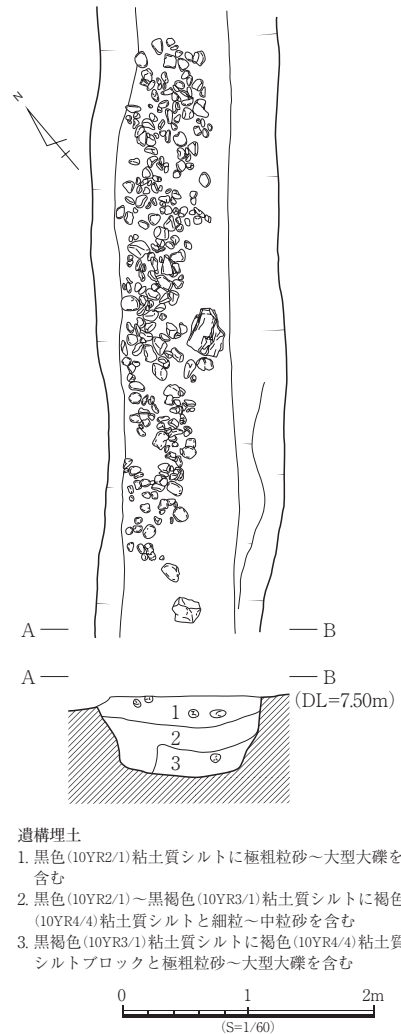


図2-152 SD-202

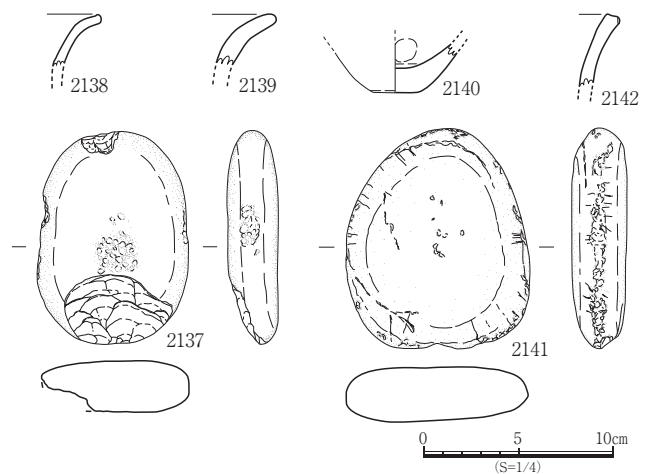


図2-153 SD-201~203, P-201 出土遺物実測図

色(10YR2/2)シルト質粘土単一であった。出土遺物は弥生土器1点(2142)であった。

出土遺物

弥生土器(図2-153 2142)

壺の口縁部の破片である。口縁部下端を小さく刻む。胎土はチャートを含む極細粒砂から細粒中礫が混じる。

② 古墳時代

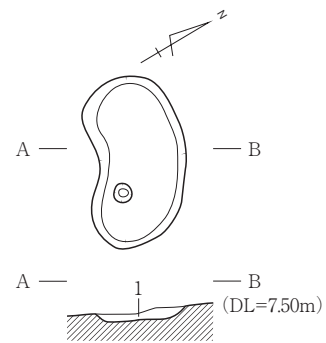
土坑1基, 溝跡4条を検出した。

i 土坑

調査区東部南で1基確認したのみである。

SK-229(図2-154)

調査区東部南で検出した楕円形の土坑である。長径1.38m, 短径0.70m, 深さ8cmを測り, 残存状態が悪いためか断面形は皿状を呈する。長軸方向はN-61°-Wを示す。埋土は極細粒砂から細粒砂を含む黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土単一で, 黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土ブロックを含む。遺物は須恵器1点(2143)が出土したにとどまる。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土に黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土ブロックと極細粒～細粒砂を含む
0 1 2m
(S=1/60)

図2-154 SK-229

出土遺物

須恵器(図2-157 2143)

杯蓋で, 約1/4が残存する。天井部外面にはヘラ記号がみられる。

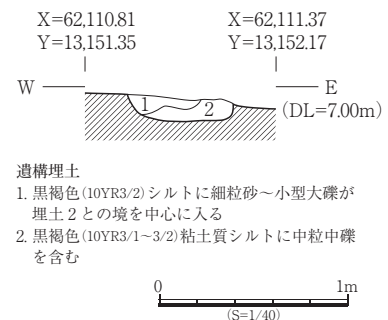
胎土は白色中粒砂を多く含む。

ii 溝跡

いずれも調査区中央部の流路状窪地への, 西肩部で検出した南北溝である。これらは流路状の窪地とほぼ並行して配されている。

SD-204(図2-155)

調査区中央部の流路状窪地の西側で検出した南北溝で, 弥生時代の土坑(SK-222・224~226)を切り, 古墳時代の溝跡(SD-205)に切られる。検出長26.95m, 幅0.56~1.07m, 深さ6~17cmを測る。基底面は北(6.942m)から南(6.829m)に向かって傾斜し, 主軸方向はN-15°-Wを示す。断面形はU字形を呈する。溝の基底面では, 掘削時の農耕具の跡とみられる窪みを多数検出した。これは溝が掘られた後, 短期間で埋まったことを示唆する。埋土は2層に分層され, 上層は細粒砂から小型大礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 下層は中粒中礫を含む黒褐色(10YR3/1~3/2)粘土質シルトとなっている。遺物は弥生土器または土師器7点, 土製品1点が出土している。出土遺物が僅少で古墳時代とするには不明瞭な部分もあるが, 遺構の検出状況や土製品の胎土などから, 古墳時代の溝跡とした。出土遺物のうち図示できたのは, 土製品1点(2144)である。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)シルトに細粒砂～小型大礫が埋土2との境を中心に入る
2. 黒褐色(10YR3/1~3/2)粘土質シルトに中粒中礫を含む
0 1m
(S=1/40)

図2-155 SD-204

出土遺物

土製品(図2-157 2144)

管状土錘で、一端を欠損している。全体的に磨滅しており調整は不明である。指頭圧痕がわずかに残る。胎土はチャートを含む極細粒砂から極細粒中礫が混じる。

SD-205

調査区中央部の流路状窪地の西側で検出した南北溝で、弥生時代の土坑(SK-222)、古墳時代の溝跡(SD-204)を切り、古墳時代・古代・中世の溝跡(SD-206・212・229)に切られる。検出長50.69m、幅0.62~1.03m、深さ8~16cmを測る。基底面は南(7.347m)と北(7.158m)に向かって傾斜し、主軸方向は溝の南では湾曲するが、概ねN-12°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は2層に分層され、上層は細粒砂から中粒砂混じりの黒色(10YR2/1)シルト質粘土、下層は黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土となっている。遺物は土師器片2点、須恵器2点、石製品1点が出土している。そのうち復元図示できたのは、須恵器(2145)と石製品(2146)各1点である。

出土遺物

須恵器(図2-157 2145)

高杯で、杯底部から脚部が残存する。脚柱部には長方形の透し窓を上下に2ヶ所配している。脚部外面には自然釉が付着している。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

石製品(図2-157 2146)

砂岩を利用した砥石である。平面は長方形で、比較的整った形をしている。両面と二側面に擦痕が残る。擦痕は長軸方向と直交するものが支配的である。また一側面には、肉眼でも観察できる光沢面がみられる。

SD-206

調査区中央部のSD-205の西で検出した南北溝で、古墳時代の溝跡(SD-205)を切る。検出長45.12m、幅0.41~0.84m、深さ6~15cmを測る。基底面は北(7.264m)と南(7.241m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-13°-Eを示す。溝は北の調査区外に延びる。断面形はU字形または逆台形を呈する。埋土は深い場所では2層に分層され、上層は黒色(10YR1.7/1)シルト質粘土、下層は黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土で、下層には地山ブロックを含んでいた。遺物は土師器片、須恵器10点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2147)である。

出土遺物

須恵器(図2-157 2147)

杯身の口縁部の破片で、立ち上がりは短く内傾する。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

SD-207(図2-156)

調査区中央部のSD-206の西で検出した南北溝で、古代の溝跡(SD-210)に切られる。検出長19.04m、幅0.73~0.85m、深さ5~8cmを測る。基底面は南(7.385m)から北(7.338m)に向かってわずかに傾斜し、主軸方向はN-21°-Eを示す。溝は北の調査区外に延びる。非常に遺

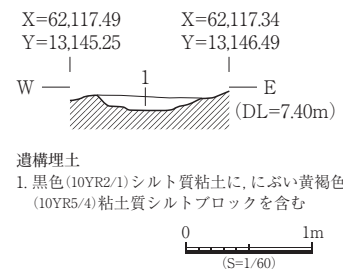


図2-156 SD-207

存状態が悪く、断面は浅い皿状を呈する。埋土は黒色(10YR2/1)シルト質粘土単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は土師器または弥生土器1点、土師器3点、須恵器の8点が出土した。そのうち復元図示できたのは、土師器1点(2148)、須恵器2点(2149・2150)である。2150の形態から、SD-207は古代の溝跡の可能性はある。

出土遺物

土師器(図2-157 2148)

甕の口縁部から胴部の破片である。弥生土器の可能性もある。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はハケ調整、内面は工具によるナデ調整である。胎土は極細粒砂から細粒中礫を含む。

須恵器(図2-157 2149・2150)

2149は杯身で、口縁の破片である。立ち上がりは短く、外湾気味に傾く。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

2150は鉢の底部で、胎土は黒色極細粒砂から粗粒砂を含む。

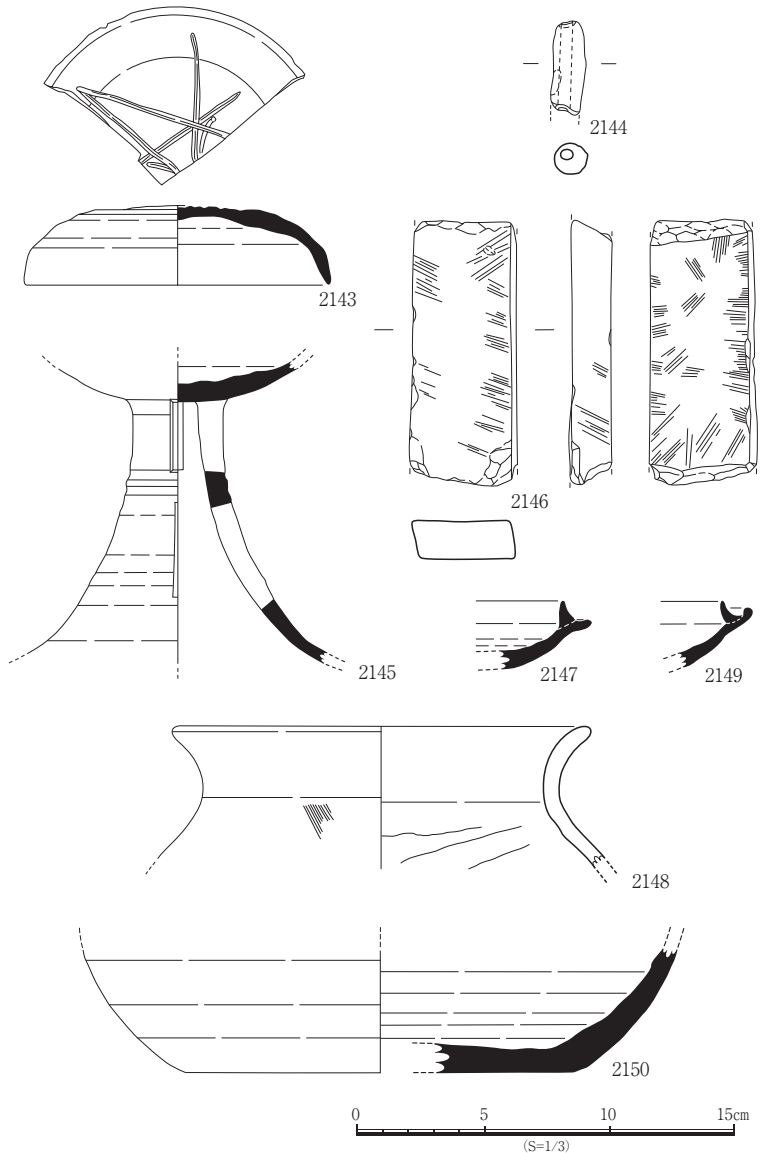


図2-157 SK-229, SD-204~207出土遺物実測図

③ 古代

方形あるいは円形の柱穴で構成された掘立柱建物跡11棟、塀・柵列跡7列、土坑21基、溝跡18条、ピット1,164個などを検出した。

i 掘立柱建物跡

方形の柱穴で構成された建物跡4棟、円形の柱穴で構成された建物跡7棟を復元できた。前者には側柱建物が多く、後者には総柱建物が多いのが特徴である。ただし、出土遺物から、古代末または中世初頭とみられるものもあり、峻別の難しいものもある。

SB-201(図2-158)

調査区中央部で検出した桁行3間(4.65~4.80m)、梁行2間(3.45~3.60m)の東西棟総柱建物跡で、中世の掘立柱建物跡(SB-215)と塀跡(SA-210)、溝跡(SD-231)に切られる。棟方向はN-75°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.35

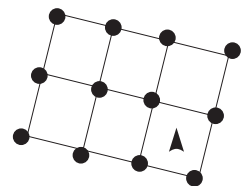


図2-158 SB-201

～1.80 m (5.5～6尺), 梁行(南北)は1.65～1.80 m (4.5～6尺)である。柱穴は楕円または円形で、径50～77 cmを測る。中央の柱穴が径50～55 cmと、比較的小さいのが特徴である。柱径は15～20 cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点、土師器14点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-202(図2-159)

調査区中央部で検出した桁行2間(4.05 m), 梁行2間(2.55 m)の東西棟総柱建物跡で、中世の堀跡(SA-209)と溝跡(SD-231)に切られる。棟方向はN-81°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.95～2.10 m (6.5～7尺), 梁行(南北)は1.15～1.50 m (4～5尺)である。柱穴は円形で、径39～70 cmを測る。中央の柱穴が径約39 cmと、比較的小さいのが特徴である。柱径は20 cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト, 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器34点, 須恵器2点がみられ, そのうち復元図示できたのは土師器1点(2151), 須恵器1点(2152)である。

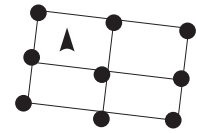


図2-159 SB-202

出土遺物

土師器(図2-169 2151)

土師器の杯で、口縁部から底部までの破片が残存する。内外面とも回転ナデ調整を施す。胎土は極細粒砂から細粒砂を少量含む。

須恵器(図2-169 2152)

須恵器の杯で、口縁部約1/4が残存する。内外面とも回転ナデ調整を施す。胎土は黒色極細粒砂から中粒砂を含む。

SB-203(図2-160)

調査区中央部で検出した桁行2間(3.90 m), 梁行2間(3.30～3.45 m)の東西棟総柱建物跡で、中世の土坑(SK-266)と溝跡(SD-232)に切られる。棟方向はN-84°-Eを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.80～2.10 m (6～7尺), 梁行(南北)は1.50～1.95 m (5～6.5尺)である。柱穴は楕円または円形で、径47～53 cmを測る。柱径は20 cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトであった。遺物には土師器6点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

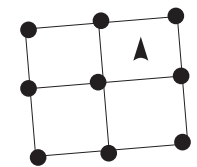


図2-160 SB-203

SB-204(図2-161)

調査区中央部で検出した桁行5～6間(10.05～10.80 m), 梁行2間(3.60～3.75 m)の東西棟側柱建物跡で、中世の溝跡(SD-239・241)に切られる。棟方向はN-78°-Wを示す。南の列は桁行が6間である。柱間寸法は桁行(東西)が1.65～2.40 m (5.5～8尺), 梁行(南北)は1.80～1.95 m (6～6.5尺)である。柱穴は径30～61 cmを測る。柱径は20 cm前後とみられる。柱穴の埋

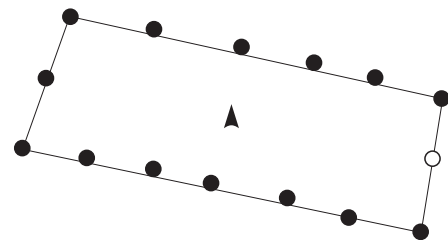


図2-161 SB-204

土は、黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器48点, 須恵器4点, 瓦器1点がみられた。瓦器は破片1点のみの出土であり、後世の混入の可能性もある。出土遺物のうち復元図示できたのは土師器2点(2153・2154), 須恵器1点(2155)である。

出土遺物

土師器(図2-169 2153・2154)

いずれも杯で、底部の破片である。胎土は、2153は極細粒砂から中粒砂を含む。2154は非常に精良で、極細粒砂をわずかに含む。

須恵器(図2-169 2155)

蓋の口縁部の破片である。胎土には黒色極細粒砂から中粒砂を含む。

SB-205(図2-162)

調査区中央部で検出した桁行3間(5.25m)、梁行2間(4.20m)の南北棟側柱建物跡で、古代の溝跡(SD-222)と中世の掘立柱建物跡(SB-216)に切られる。棟方向はN-15°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.50~1.95m(5~6.5尺)、梁行(東西)は1.80~2.40m(6~8尺)である。柱穴は崩れているものの方角を指向しているとみられ、一辺50~60cmを測る。柱穴は建物の四隅の規模が大きい。柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には土師器8点がみられ、そのうち復元図示できるものはなかった。

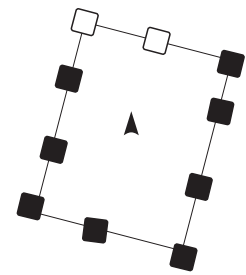


図2-162 SB-205

SB-206(図2-163)

調査区中央部で検出した桁行3間(5.10~5.40m)、梁行2間(4.05~4.20m)の南北棟側柱建物跡で、古代の溝跡(SD-222)と中世の掘立柱建物跡(SB-216)に切られる。棟方向はN-14°-Eを示す。SB-205と切り合うが、先後関係は不明である。棟方向がほぼ一致しており、建替が行われた可能性も考えられる。柱間寸法は桁行(南北)が1.35~2.25m(4.5~7.5尺)、梁行(東西)は1.80~2.40m(6~8尺)である。柱穴は崩れているものの方角を指向しているとみられ、一辺55cm前後を測る。棟持柱の柱穴は、径30~40cmと比較的規模が小さい。柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒褐色(10YR2/3~3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器4点、土師器17点、須恵器1点がみられ、そのうち復元図示できるものはなかった。

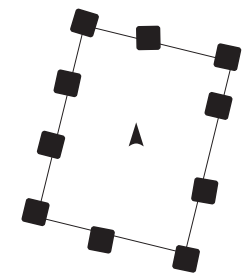


図2-163 SB-206

SB-207(図2-164)

調査区中央部で検出した桁行3間(4.65~4.95m)、梁行2間(3.60m)の南北棟側柱建物跡で、棟方向はN-13°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.50~1.80m(5~6尺)、梁行(東西)は1.65~1.95m(5.5~6.5尺)である。柱穴はやや崩れているものの方角を指向しているとみられ、一辺35~60cmを測る。柱穴は建物の四隅の規模が大きい。柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は弥生土器6点、土師器9点、土師器または土師質土器10点、須恵器2点、製塩土器2点が出土し、そのうち復元図示できたのは土師器2点(2156・2157)である。

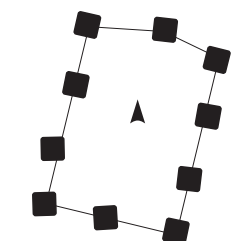


図2-164 SB-207

出土遺物

土師器(図2-169 2156・2157)

2156は皿または杯で、底部の破片である。底部内面と体部外面にはミガキ調整を施す。胎土は極細

粒砂から粗粒砂を含む。

2157は甕で、口縁部から胴部まで残存する。胴部外面にはヨコ方向のハケ調整を施す。外面および口縁部内面にはコゲが付着している。胎土はチャートを含む極細粒砂から極細粒中礫が混じる。

SB-208 (図2-165)

調査区北西端部で検出した桁行2間(3.60m)以上、梁行2間(3.30m)の東西棟側柱建物跡である。建物は調査区外に延びて、更に大きくなる可能性がある。棟方向はN-66°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.80m(6尺)等間隔、梁行(南北)は1.50~1.80m(5~6尺)である。柱穴は崩れているものの方形を指向しているとみられ、方形または長方形を呈し、長辺60~112cm、短辺50~80

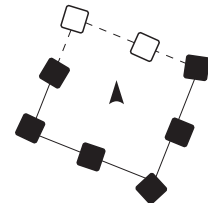


図2-165 SB-208

SB-209 (図2-166)

調査区北西部で検出した桁行2間(3.45m)、梁行2間(2.70~2.85m)の東西棟総柱建物跡で、古代の土坑(SK-247)を切り、中世の溝跡(SD-244)に切られる。棟方向はN-86°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.65~1.80m(5.5~6尺)、梁行(南北)は1.35~1.50m(4.5~5尺)である。柱穴は円形で、径43~55cmを測る。柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器または土師器3点、土師器または土師質土器3点がみられ、そのうち復元図示できるものはなかった。

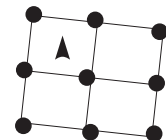


図2-166 SB-209

SB-210 (図2-167)

調査区西端部で検出した桁行3間(5.25m)、梁行2間(3.45m)の南北棟総柱建物跡で、中世の堀跡(SA-219)、溝跡(SD-244)、ピットに切られる。棟方向は方眼北を示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.65~2.10m(5.5~7尺)、梁行(東西)は1.65~1.95m(5.5~6.5尺)である。柱穴は円形で、径45~61cmを測る。柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR1.7/1)~黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトであった。出土遺物には土師器または土師質土器7点、須恵器4点がみられ、そのうち復元図示できるものはなかった。

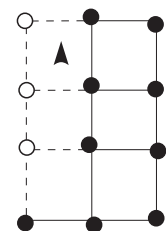


図2-167 SB-210

SB-211 (図2-168)

調査区西部で検出した桁行2間(3.30~3.45m)、梁行2間(2.55~2.85m)の東西棟総柱建物跡で、棟方向はN-83°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.50~1.80m(5~6尺)、梁行(南北)は1.20~1.50m(4~5尺)である。柱穴は円形で、径43~62cmを測る。柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒色(10YR1.7/1)~黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には土師器1点、土師器または土師質土器18点、須恵器1点の他、瓦器、瓦質土器の破片各1点がみられた。なお、瓦器および瓦質土器については後世の遺構からの混入の可能性が考えられる。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2158)である。

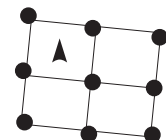


図2-168 SB-211

出土遺物

須恵器(図2-169 2158)

壺の底部の破片とみられる。胎土は極細粒砂～粗粒砂を含む。

ii 塀・柵列跡

調査区の西半を中心
に検出した。直線的に延
びて区画するものと、溝
に伴いラインに添って
いるのがみられる。

SA-201

調査区東南部で検出
した東西塀跡(N-79°-
W)である。5間分(3.30
m)を検出し、柱間寸法
は0.63~0.74mである。

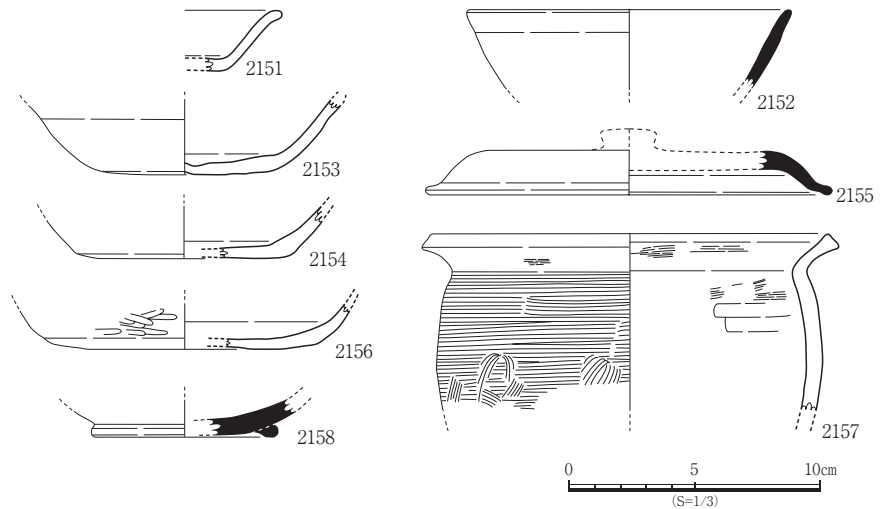


図2-169 SB-202・204・207・211出土遺物実測図

表2-11 古代掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模				棟方向 (NはGN)	備考	
	桁行×梁行	桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	柱間寸法				面積 (㎡)
			桁(尺)	梁(尺)			
SB-201	3×2	4.65~4.80×3.45~3.60 (15.5)~(16.0)×(11.5)~(12.0)	1.35~1.80 (5.5)~(6.0)	1.65~1.80 (4.5)~(6.0)	16.64	N-75°-W 総柱	
SB-202	2×2	4.05×2.55 (13.5)×(8.5)	1.95~2.10 (6.5)~(7.0)	1.15~1.50 (4.0)~(5.0)	10.36	N-81°-W 総柱	
SB-203	2×2	3.90×3.30~3.45 (13.0)×(11.0)~(11.5)	1.80~2.10 (6.0)~(7.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	13.19	N-84°-E 総柱	
SB-204	5~6×2	10.05~10.80×3.60~3.75 (33.5)~(36.0)×(12.0)~(12.5)	1.65~2.40 (5.5)~(8.0)	1.80~1.95 (6.0)~(6.5)	38.14	N-78°-W	
SB-205	3×2	5.25×4.20 (17.5)×(14.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.80~2.40 (6.0)~(8.0)	20.92	N-15°-E	
SB-206	3×2	5.10~5.40×4.05~4.20 (17.0)~(18.0)×(13.5)~(14.0)	1.35~2.25 (4.5)~(7.5)	1.80~2.40 (6.0)~(8.0)	21.97	N-14°-E	
SB-207	3×2	4.65~4.95×3.60 (15.5)~(16.5)×(12.0)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	1.65~1.95 (5.5)~(6.5)	17.66	N-13°-E	
SB-208	2以上×2	3.60×3.30 (12.0)×(11.0)	1.80 (6.0)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	(11.68)	N-66°-W	
SB-209	2×2	3.45×2.70~2.85 (11.5)×(9.0)~(9.5)	1.65~1.80 (5.5)~(6.0)	1.35~1.50 (4.5)~(5.0)	9.60	N-86°-W 総柱	
SB-210	3×2	5.25×3.45 (17.5)×(11.5)	1.65~2.10 (5.5)~(7.0)	1.65~1.95 (5.5)~(6.5)	(16.21)	N-0°-E 総柱	
SB-211	2×2	3.30~3.45×2.55~2.85 (11.0)~(11.5)×(8.5)~(9.5)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	1.20~1.50 (4.0)~(5.0)	9.12	N-83°-W 総柱	

一直線上には並ばない柱穴があり、若干湾曲していたようである。柱穴は径20～34cmのほぼ円形で、柱径は12cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、若干地山ブロックを含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SA-202

調査区中央部南、SA-203と並行して検出した東西堀跡(N-61°-E)である。弥生の溝跡(SD-203)と古代の堀跡(SA-203)を切る。5間分(3.68m)を検出し、柱間寸法は0.71～0.76mである。柱穴は径25～35cmのほぼ円形で、柱痕は確認できなかった。柱穴の埋土は、黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

SA-203

調査区中央部南、SA-202と並行して検出した東西堀跡(N-61°-E)である。古代の堀跡(SA-202)に切られる。4間分(2.96m)を検出し、柱間寸法は0.72～0.78mである。柱穴は径21～32cmのほぼ円形で、柱痕は確認できなかった。柱穴の埋土は、黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

SA-204

調査区中央部南、SD-214の北側で検出した東西堀跡(N-77°-W)で、中世の掘立柱建物跡(SB-221)に切られる。SD-214のラインに添ってあることから、溝に伴うものであったと考えられる。4間分(5.04m)を検出し、柱間寸法は1.15～1.39mである。柱穴は径26～44cmのほぼ円形とみられる。柱痕は確認できなかった。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

SA-205

調査区中央部、SD-214の北側で検出した東西堀跡(N-76°-W)である。SD-214のラインに添ってあることから、溝に伴うものであったと考えられる。また、SA-204とは同じ堀跡の一部を構成していた可能性もある。12間分(21.02m)を検出したが、本来は14間ではなかったかと考えられる。柱間寸法は1.03～2.25mである。柱穴は径30～38cmのほぼ円形とみられる。柱径は18cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器または土師質土器の細片9点で、復元図示できるものはなかった。

SA-206

調査区中央部南端で検出した東西堀跡(N-87°-E)である。SD-218の北側、溝のラインに添ってみられることから、溝跡に伴うものと考えられる。13間分(14.76m)を検出し、柱間寸法は0.92～1.42mである。柱穴は径24～40cmのほぼ円形とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

SA-207

調査区西部南端、SA-206の西側で検出した東西堀跡(N-77°-W)である。SD-218の北側、溝のラインに添ってみられることから、溝跡に伴うものと考えられる。8間分(12.81m)を検出し、柱間寸法は1.31～1.83mである。柱穴は径24～47cmの円形または楕円形とみられる。埋土は黒褐色(10YR2/3～3/2)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

iii 土坑

調査区西半を中心に、21基検出した。溝状土坑については溝跡との区別が難しいものもある。

SK-230

調査区東部南、流路状の落ち込みの東肩部で検出した溝状土坑で、古代の溝跡(SD-209)を切る。長辺6.64m、短辺0.56~0.68m、深さ7~10cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-78°-Eを示し、流路状の窪地と直交する。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SK-231

調査区東部南、流路状の落ち込みの東肩部で検出した楕円形の土坑である。古代の土坑(SK-232)を切る。長径1.46m、短径0.85m、深さ15cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-19°-Wを示す。埋土は3層に分層され、上層から極細粒砂から中粒砂混じりの黒色(10YR2/1)シルト質粘土、黒色(10YR2/1)シルト質粘土、極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトとなっている。出土遺物は皆無であった。

SK-232

調査区東部南、流路状の落ち込みの東肩部で検出した不整形の土坑で、古代の土坑(SK-231)に切られる。残存長1.10m、短辺0.65m、深さ9cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。長軸方向はN-8°-Eを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト単一であった。遺物は全く出土しておらず正確な時期は不明だが、遺構の検出状況や埋土から古代の所産とみられる。

SK-233

調査区東部南、流路状の落ち込みの東肩部で検出した不整形の土坑である。長辺1.29m、短辺0.74m、深さ7cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。長軸方向はN-3°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土で、地山ブロックを含んでいた。遺物は土師器とみられる細片2点が出土しているが、復元図示できるものはなかった。

SK-234

調査区中央部、流路状の落ち込みの西肩部で検出した溝状土坑である。長辺2.43m、短辺0.43m、深さ8cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-8°-Eを示す。埋土は黒色(10YR1.7/1)シルト質粘土単一であった。基底面には土坑を掘削した際のものともみられる農耕具の刃の痕跡がみられた。これは土坑が掘削されて、短期間に基底面に土が溜まった事を意味している。遺物は全く出土しておらず、遺構の詳しい時期は不明である。遺構の検出状況などから古代の所産とした。

SK-235

調査区中央部北、流路状の落ち込みの西肩部で検出したほぼ円形の土坑である。径0.86~0.93m、深さ17cmを測り、断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトで、多くの炭化物と、わずかに焼土を含んでいた。また上層には円礫が多く入る。遺物は土師器4点、須恵器3点が出土したが、そのうち復元図示できるものはなかった。

SK-236

調査区中央部で検出した溝状土坑である。古代の溝跡(SD-223)の続きの可能性もある。残存長2.86m、

短辺1.31 m、深さ22cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-7°-Wを示す。埋土は3層に分層され、上層から黒褐色(10YR3/2)砂混じりのシルト質粘土、黒褐色(10YR3/2~2/2)粘土、黒褐色(10YR3/1~3/2)シルト質粘土となっており、下層を中心に地山ブロックを多く含んでいた。遺物は土師器とみられる破片9点、須恵器4点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2159)であった。

出土遺物

須恵器(図2-172 2159)

杯蓋の口縁部の破片である。胎土は白色極細粒砂~細粒砂を含む。

SK-237

調査区中央部北側で検出した楕円形の土坑である。長径1.17 m、短径0.96 m、深さ19 cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-13°-Eを示す。埋土は細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。遺物は土師器20点、須恵器2点、製塩土器1点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-238

調査区中央部北側で検出した楕円形の土坑で、中世の土坑(SK-267)に切られる。長径1.82 m、短径0.91 m、深さ37cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-10°-Eを示す。埋土は細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。遺物は土師器20点、須恵器2点、製塩土器1点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-239(図2-170)

調査区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径1.57 m、短径0.71 m、深さ31 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-9°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトで、地山ブロックを含んでいた。遺物は土師器とみられる破片5点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

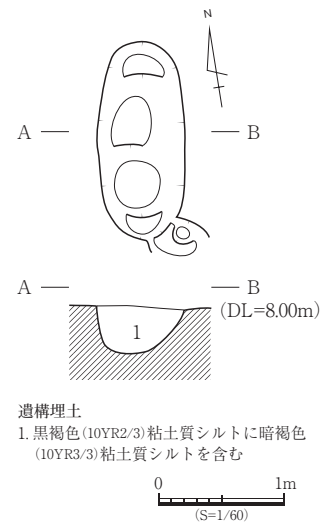


図2-170 SK-239

SK-240

調査区中央部で検出した楕円形の土坑で、中世のピットに切られる。長径0.89m、短径0.74m以上、深さ12cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-82°-Wを示す。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土の単一であった。遺物は土師器1点が出土したが、復元図示はできなかった。

SK-241

調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.00 m、短辺0.90 m、深さ13cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-19°-Eを示す。埋土は2層に分層され、上層は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土、下層は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土となっている。下層には地山ブロックを含んでいた。遺物は須恵器3点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-242

調査区中央部南で検出した溝状土坑で、中世の溝跡(SD-233~235)に切られる。残存長3.10 m、短

辺0.37 m、深さ30 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-77°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト単一である。出土遺物は皆無であるが、遺構の検出状況などから古代の所産と考えられる。

SK-243

調査区中央部南で検出した溝状土坑で、SK-242の西に所在する。中世の溝跡(SD-236・237)に切られる。残存長2.58 m、短辺0.66 m、深さ20 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-71°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。出土遺物は土師器とみられる細片8点が出土しているが、復元図示できるものはなかった。

SK-244 (図2-171)

調査区西部北で検出した不整形の土坑である。長辺1.14 m、短辺0.80 m、深さ41 cmを測り、断面形は逆台形を呈する。比較的残存状態の良い土坑である。長軸方向はN-50°-Eを示す。埋土は細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトと粗粒中礫から小型大礫(円礫)を含んでいた。遺物は土師器9点、土師器または土師質土器の破片32点、須恵器3点、製塩土器1点が出土している。そのうち復元図示できたのは土師器1点(2160)である。

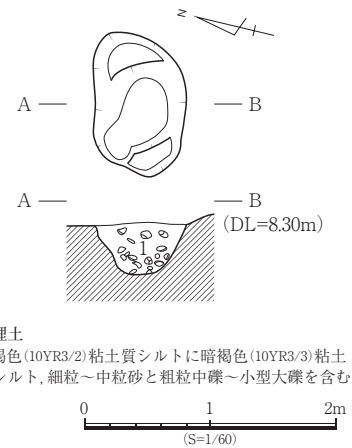


図2-171 SK-244

出土遺物

土師器(図2-172 2160)

甕の口縁部から胴部が残存する。胎土には黒雲母を含む極細粒砂から極粗粒砂が混じる。混和材から搬入品とみられる。

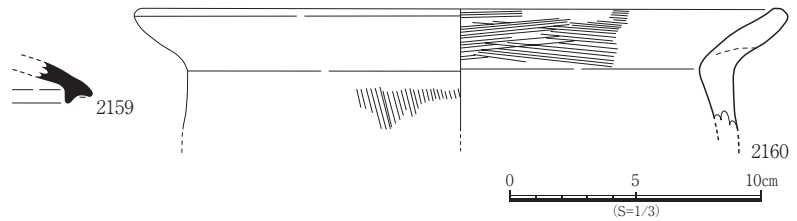


図2-172 SK-236・244 出土遺物実測図

SK-245

調査区西部北で検出した、やや崩れた楕円形の土坑である。長径1.90 m、短径1.12 m、深さ32 cmを測り、断面形は段を持つU字形を呈する。比較的残存状態の良い土坑である。長軸方向はN-13°-Eを示す。埋土は黒色(10YR1.7/1)~黒褐色(10YR2/2)シルト単一である。遺物は土師器または土師質土器6点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-246

調査区西部北で検出した楕円形の土坑である。長径2.17 m、短径0.61 m、深さ17 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-18°-Eを示す。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト単一である。遺物は土師器4点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-247

調査区西部北で検出した不整形の土坑で、古代の掘立柱建物跡(SB-209)と中世の溝跡(SD-244)に切られる。残存長2.08 m、短辺1.20 m、深さ41 cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-

3. 遺構と遺物 (2) II区

3°-Wを示す。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。遺物は土師器または土師質土器の破片1点が出土したのみで、復元図示できるものはなかった。

SK-248

調査区西部で検出した隅丸方形の土坑である。中世のピットに切られる。長辺1.46m, 短辺0.87m, 深さ12cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-12°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで, 地山ブロックとわずかに炭化物を含んでいた。遺物は, 土師器または土師質土器58点, 灰釉陶器1点が出土したが, いずれも細片のため復元図示できなかった。

SK-249

調査区西部南で検出した楕円形の土坑である。長径0.92m, 短径0.72m, 深さ10cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-83°-Eを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/3)~暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト単一で, わずかにマンガン粒を含んでいた。遺物は皆無であったが, 埋土などから古代の可能性が高い。

表2-12 古墳・古代土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-229	楕円形	1.38	0.70	8	N-61°-W	古墳
SK-230	溝状	6.64	0.56~0.68	7~10	N-78°-E	古代
SK-231	楕円形	1.46	0.85	15	N-19°-W	〃
SK-232	不整形	(1.10)	0.65	9	N-8°-E	〃
SK-233	〃	1.29	0.74	7	N-3°-E	〃
SK-234	溝状	2.43	0.43	8	N-8°-E	〃
SK-235	円形	0.93	0.86	17	N-0°-E	〃
SK-236	溝状	(2.86)	1.31	22	N-7°-W	〃
SK-237	楕円形	1.17	0.96	19	N-13°-E	〃
SK-238	〃	1.82	0.91	37	N-10°-E	〃
SK-239	〃	1.57	0.71	31	N-9°-E	〃
SK-240	〃	0.89	0.74	12	N-7°-E	〃
SK-241	隅丸方形	1.00	0.90	13	N-19°-E	〃
SK-242	溝状	(3.10)	0.37	30	N-77°-W	〃
SK-243	〃	(2.58)	0.66	20	N-71°-W	〃
SK-244	不整形	1.14	0.80	41	N-50°-E	〃
SK-245	楕円形	1.90	1.12	32	N-13°-E	〃
SK-246	〃	2.17	0.61	17	N-18°-E	〃
SK-247	不整形	(2.08)	1.20	41	N-3°-W	〃
SK-248	隅丸方形	1.46	0.87	12	N-12°-E	〃
SK-249	楕円形	0.92	0.72	10	N-83°-E	〃
SK-250	隅丸方形	(0.73)	0.63	46	N-7°-E	〃

SK - 250

調査区西部南端で検出した隅丸方形の土坑である。南は調査区外に延びるとみられる。上面は近代の攪乱を受けていた。残存長0.73 m, 短辺0.63 m, 深さ46 cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-7°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土単一である。遺物は土師器または土師質土器1点, 須恵器1点, 鉄製品1点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

iv 溝跡

古代の溝跡は, 調査区の東部と西部で主軸方向が異なる。調査区東半では, 南北に延びる流路状の窪地の地形に合わせて南北溝が主体となる。調査区西半では, 逆に窪地への排水または利水のために東西溝が多いのが特徴である。

SD - 208 (図2 - 173)

調査区東部の流路状窪地の東側で検出した南北溝で, 中世の溝跡(SD - 226)の東に位置する。検出長26.77 m, 幅0.39 m, 深さ9 ~ 13 cmを測る。基底面は南(7.587 m)と北(7.574 m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-14°-Eを示す。断面形はU字形, 地点によっては逆台形を呈する。埋土は3層に分層され, 上層から黒色(10YR1.7/1)シルト, 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト, 褐色(10YR4/6)粘土質シルトとなっている。1・2層は地山ブロックを含んでいた。若干土色が薄く, 中世の溝跡の可能性もある。遺物は土師器または土師質土器3点出土したのみで, 復元図示できるものはなかった。

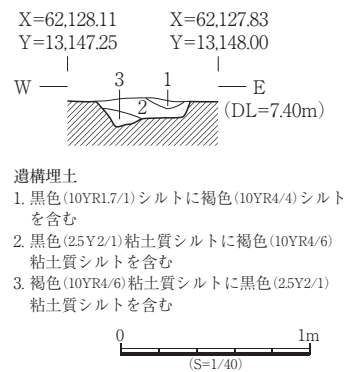


図2 - 173 SD - 208

SD - 209 (図2 - 174)

調査区東部の流路状窪地の東側で検出した南北溝で, 弥生時代の土坑(SK - 202)を切り, 古代の溝状土坑(SK - 230)に切られる。検出長15.39 m, 幅0.25 ~ 0.48 m, 深さ3 ~ 9 cmを測り, 断面形は浅いU字形を呈する。基底面は北(7.317 m)から南(7.272 m)に向かってわずかに傾斜し, 主軸方向はN-15°-Wを示す。後世の削平のためか遺存状態は非常に悪い。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)砂質シルトで, 地山ブロックを多く含んでいた。遺物は弥生土器1点, 土師器1点, 須恵器4点出土したが, 復元図示できるものはなかった。

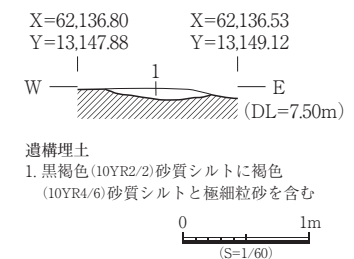


図2 - 174 SD - 209

SD - 210 (図2 - 175)

調査区中央部の流路状窪地の西側で検出した南北溝で, 古代の溝跡(SD - 207)を切り, 中世の溝跡(SD - 229)に切られる。検出長26.22 m, 幅0.64 ~ 1.12 m, 深さ5 ~ 12 cmを測り, 断面形は浅いU字形を呈する。基底面は北(7.342 m)と南(7.321 m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-20°-Eを示す。後世の削平のためか遺存状態は非常に悪く, 溝の北側では2条の溝が切り合っていた可能性もあるが, 遺構埋土の観察からは掴めなかった。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(2.5Y3/2)

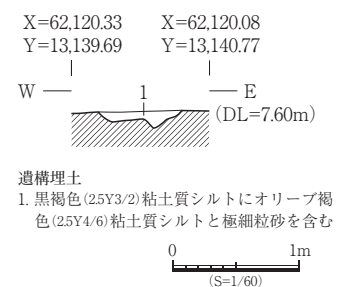


図2 - 175 SD - 210

3. 遺構と遺物 (2) II区

粘土質シルト単一である。遺物は弥生土器4点、土師器135点、須恵器51点、緑釉陶器・黒色土器各1点、土製品1点、瓦1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、土師器1点(2161)、須恵器5点(2162～2166)、緑釉陶器1点(2167)、土製品1点(2168)、瓦1点(2169)である。

出土遺物

土師器(図2-180 2161)

皿で、約1/5が残存する。底部外面は回転ヘラ切りによる。胎土は精良で、極細粒砂から粗粒砂を含む。

須恵器(図2-180 2162～2166)

2162は杯蓋で、擬宝珠様のつまみが付くとみられる。胎土は白色極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2163は鉢の口縁部の破片とみられる。外面には沈線と列点文の文様帯をめぐらす。胎土は黒色・白色極細粒砂から粗粒砂を含む。

2164・2165は壺の口縁部の破片である。いずれも広口の壺になるものとみられる。胎土は2164は白色極細粒砂から粗粒砂をわずかに含み、2165は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2166は杯の底部の破片である。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

緑釉陶器(図2-180 2167)

椀の底部の破片である。素地は軟陶で、釉は非常に薄く施される。釉調は淡緑色を呈する。胎土は極細粒砂から細粒砂を含む。

土製品(図2-180 2168)

管状土錘で、一端を欠損している。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

瓦(図2-180 2169)

平瓦の破片である。胎土は石英を含む極細粒砂から細粒中礫を含む。

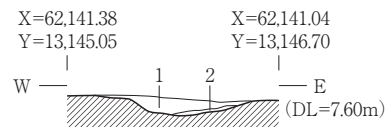
SD-211(図2-176)

調査区中央部、古代の溝跡(SD-210)の西で検出した南北溝である。検出長12.99m、幅1.15～1.38m、深さ12～14cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。基底面は北(7.425m)から南(7.331m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-18°-Eを示す。後世の削平のためか遺存状態は非常に悪い。埋土は2層で、上層は極細粒砂から細粒砂混じりの黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト、下層は地山の黄褐色(10YR6/6)粘土質シルトに黒色(2.5Y2/1)砂質シルトを含んでいた。遺物は土師器8点、土師器または土師質土器36点、須恵器26点、製塩土器10点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2170)と製塩土器2点(2171・2172)である。

出土遺物

須恵器(図2-180 2170)

杯の底部の破片で、底部には高台が付く。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。



遺構埋土

1. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトに褐色(10YR4/4)粘土質シルトと極細粒～細粒砂を含む
2. 黄褐色(10YR6/6)粘土質シルトに黒色(2.5Y2/1)砂質シルトと灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルトを含む

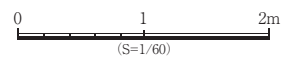


図2-176 SD-211

製塩土器(図2-180 2171・2172)

いずれも体部の細片で、外面はナデ調整、内面には布目圧痕が残る。胎土は2171は極細粒砂から粗粒中礫、2172は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

SD-212(図2-177)

調査区中央部から東部の南で検出した東西溝で、弥生の溝跡(SD-203)と古墳の溝跡(SD-205)を切る。溝の西端は調査区中央部で終わるが、同じ古代の溝跡(SD-214)と接続していた可能性もある。検出長38.08m、幅0.44~0.54m、深さ8~11cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。基底面は西(7.272m)から東(7.080m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-78°-Wを示す。後世の削平のためか遺存状態は非常に悪い。埋土は細粒砂から極粗粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト単一である。遺物は土師器5点、須恵器5点、瓦1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2173)、瓦1点(2174)である。

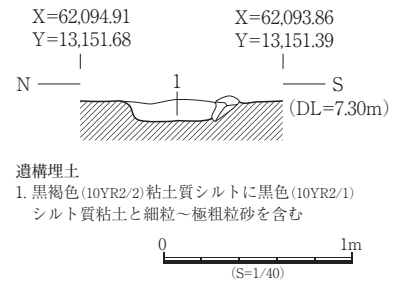


図2-177 SD-212

出土遺物

須恵器(図2-180 2173)

杯身で、口縁部の破片である。立ち上がりは弱く、外湾気味に内傾する。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

瓦(図2-180 2174)

平瓦の破片である。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

SD-213

調査区中央部、SD-205の西側で検出した南北溝である。検出長9.35m、幅0.62m、深さ10cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。基底面は南(7.295m)と北(7.291m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-5°-Eを示す。後世の削平のためか遺存状態は非常に悪い。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。若干土色が薄く、中世の溝跡の可能性もある。遺物は土師器または土師質土器6点、須恵器1点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SD-214(図2-178)

調査区中央部から西部にかけて検出した東西溝で、西部で西南に向かって屈曲し調査区外に延びる。古代の溝跡(SD-223)、中世の掘立柱建物跡(SB-221)、土坑(SK-285~287)と溝跡(SD-233~237)に切られる。また、塀跡(SA-204・205)を伴うとみられる。検出長66.55m、幅0.37~0.93m、深さ8~45cmを測り、断面形は場所によりU字形または逆台形を呈する。基底面は東(7.542m)から西(7.312m)に向かって傾斜する。主軸方向

は中央部でN-79°-W、西部でN-53°-Eを示す。埋土は2層に分層され、上層は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト、下層は極細粒砂混じりの灰黄褐色(10YR4/2)

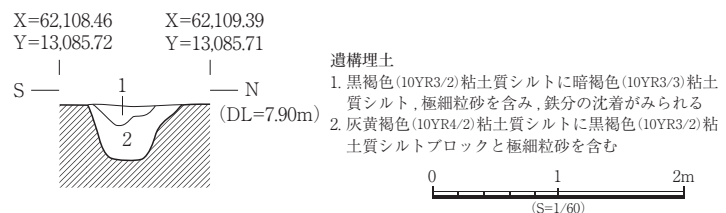


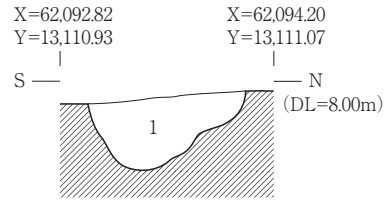
図2-178 SD-214

3. 遺構と遺物 (2) II区

粘土質シルトで、2cm以下の黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトブロックを含んでいた。上層には鉄分の沈着がみられた。遺物は弥生土器1点、土師器28点、須恵器3点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SD-215 (図2-179)

調査区中央部から西部にかけて検出した東西溝で、西端は調査区外に延びる。中世の溝跡(SD-235~237)に切られる。検出長59.76m、幅0.37~1.34m、深さ21~56cmを測り、断面形は場所によりU字形または舟底形を呈する。基底面は東(7.486m)から西(7.334m)に向かって傾斜する。主軸



遺構埋土
1. 黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトに黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトブロックを含む

図2-179 SD-215

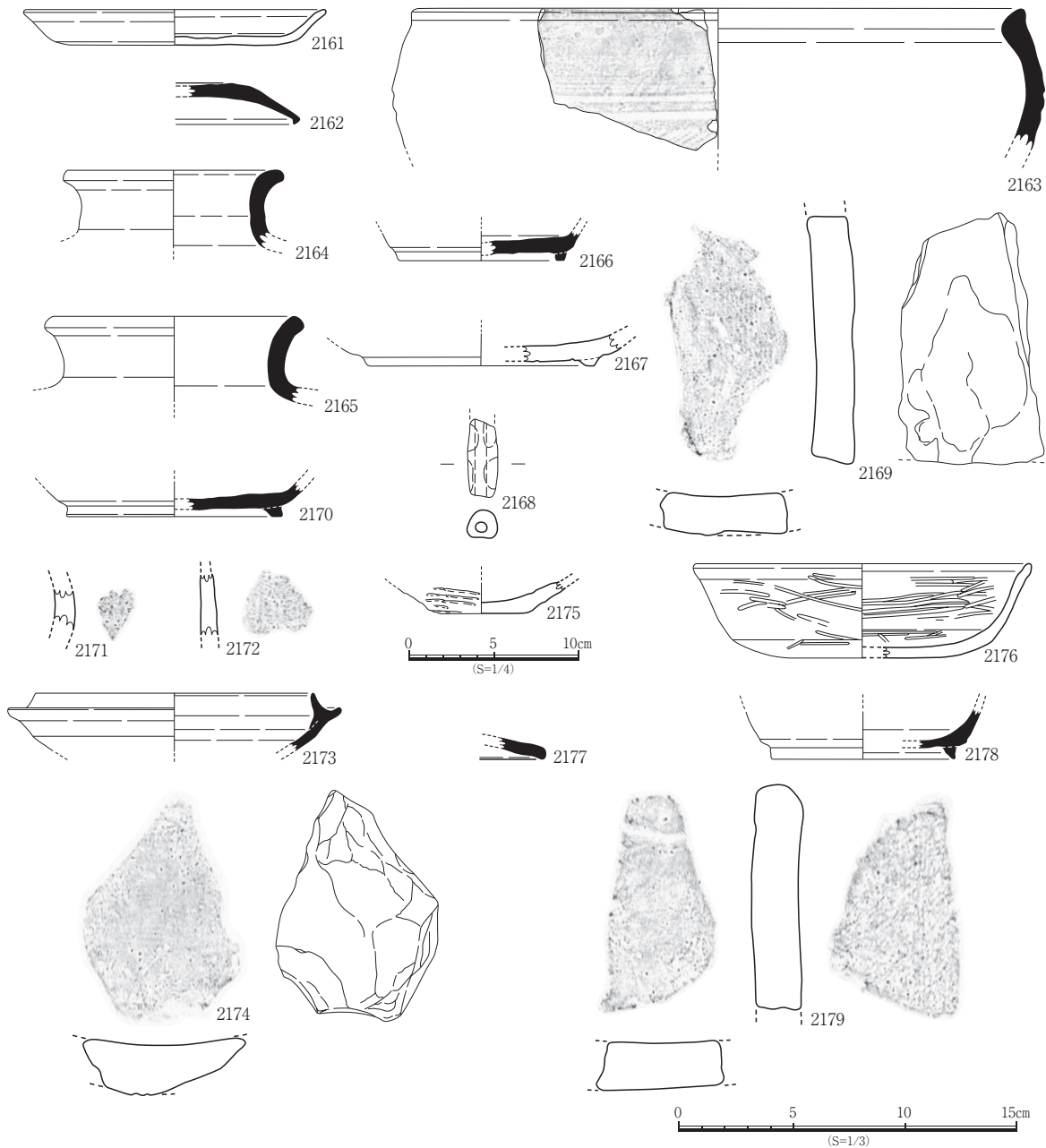


図2-180 SD-210~212・215出土遺物実測図

方向は中央部でN-79°-Wを示す。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト単一で、黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトブロックを含んでいた。遺物は弥生土器1点、土師器18点、土師器または土師質土器15点、須恵器5点、瓦1点で、そのうち復元図示できたのは弥生土器1点(2175)、土師器1点(2176)、須恵器2点(2177・2178)、瓦1点(2179)である。

出土遺物

弥生土器(図2-180 2175)

甕の底部片で、外面にはタタキ目が残る。胎土は石英、チャートを含む極細粒砂から極細粒中礫が混じる。

土師器(図2-180 2176)

杯で、約1/4残存する。底部外面の切り離しは回転ヘラ切りによる。内外面とも回転ナデ調整後にミガキ調整を施す。胎土は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

須恵器(図2-180 2177・2178)

2177は蓋の口縁部の破片である。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

2178は杯で、底部が約1/4残存する。胎土は白色極細粒砂から中粒砂を含む。

瓦(図2-180 2179)

平瓦の破片で、胎土はチャートを含む極細粒砂から極粗粒砂が混じる。

SD-216(図2-181)

調査区中央部から西部の南にかけて検出した東西溝で、溝の西端は調査区外に延びる。古代の溝跡(SD-218)を切り、古代の溝跡(SD-224)と中世の溝跡(SD-237)に切られる。また堀跡(SA-206・207)を伴うとみられる。検出長56.07m、幅0.74~1.32m、深さ14~48cmを測り、断面形は場所によりU字形または舟底形を呈する。基底面は東(7.487m)から西(7.140m)に向かって傾斜し、主軸方向は中央部でN-81°-Wを示す。埋土は3層に分層され、上層から黒色(7.5YR5/3)粘土質シルト、灰黄褐色(10YR4/2)~黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト、暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトとなっている。遺物は弥生土器1点、土師器46点、土師器または土師質土器250点、須恵器46点、製塩土器2点と、弥生時代から古代の遺物が出土した。そのうち復元図示できたのは、弥生土器1点(2180)、土師器7点(2181~2187)、須恵器10点(2188~2197)、製塩土器2点(2198・2199)である。

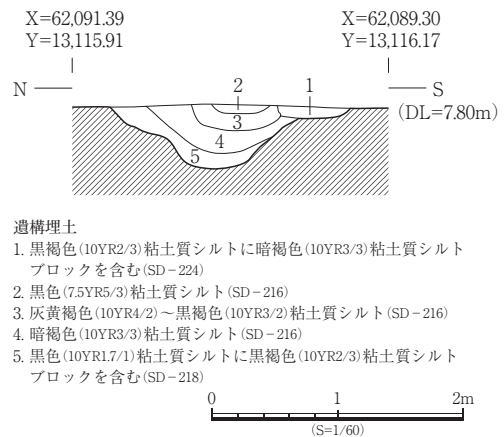


図2-181 SD-216・218・224

出土遺物

弥生土器(図2-182 2180)

甕の口縁部の破片とみられる。ただし器壁が剥落しているため不明瞭であるが、土師器の可能性もある。胎土は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

土師器(図2-182 2181~2187)

2181は甕の口縁部の破片である。胎土は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

2182は蓋で、天井部を欠損する。つまみが付くとみられる。内面は回転ナデ調整後にミガキ調整を行う。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

2184は杯で、底部の約1/3が残存する。胎土は精良で、極細粒砂から中粒砂を含む。

2183・2185～2187は皿である。2183は高台の付くもので、杯の可能性もある。胎土は精良で、極細粒砂から中粒砂を少量含む。2185は底部の破片のため、器形は不明瞭である。杯の可能性もある。胎土は精良で、極細粒砂から粗粒砂を含む。2186・2187は口縁部から底部の破片である。いずれも胎土は精良で、2186は極細粒砂から中粒砂、2187は極細粒砂から粗粒砂を含む。

須恵器(図2-182 2188～2197)

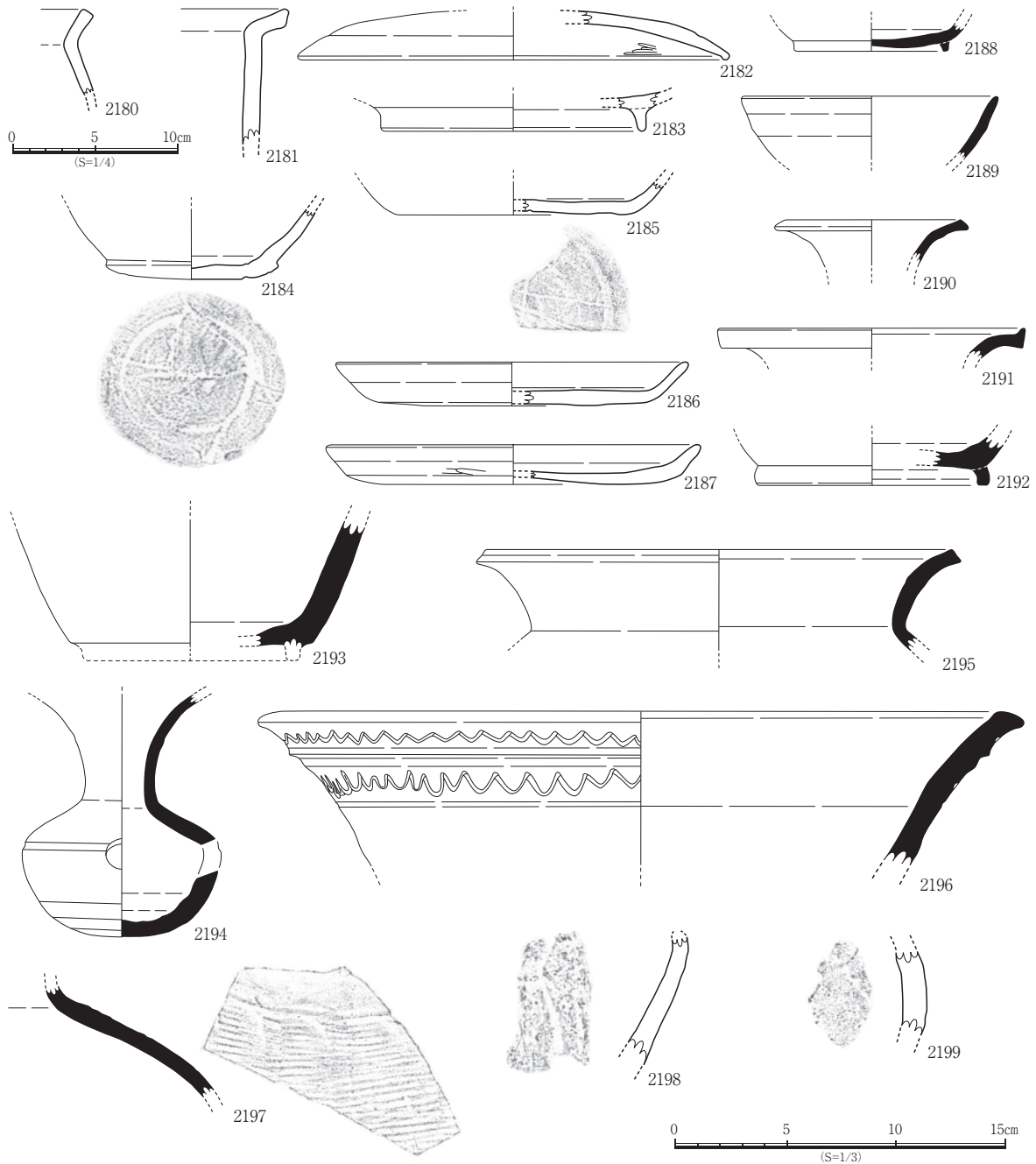


図2-182 SD-216出土遺物実測図

2188は杯で、高台が付く。胎土は黒色極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2189は口縁部の破片で、椀としたが杯蓋の可能性もある。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

2190～2193は壺で、2190・2191は長頸壺の口縁部とみられる。2190の胎土は精良で、極細粒砂をわずかに含む。2191は口縁部内面から口縁端部に釉が付着する。胎土は白色極細粒砂から極粗粒砂を含む。2192・2193は壺の底部である。胎土は、2192は精良で極細粒砂から中粒砂を少量含む。2193はチャートを含む極細粒砂から粗粒中礫が混じる。

2194は甗である。孔径は1.4cmを測る。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2195～2197は甗である。2195・2196は口縁部の破片で、2196は外面に文様帯を施す。2197は胴部の破片である。胎土は、2195は極細粒砂から粗粒砂、2196・2197は白色極細粒砂から極粗粒砂を含む。

製塩土器(図2-182 2198・2199)

いずれも体部の破片である。内面には布目圧痕が残る。胎土は、2198は極細粒砂から極細粒中礫、2199は極細粒砂から細粒中礫を含む。

SD-217

調査区中央部南で検出した南北溝で、溝の南は調査区外に延びる。古代の溝跡(SD-218)を切る。検出長9.78m、幅0.69～0.78m、深さ16～25cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は南(7.357m)と北(7.343m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-18°-Eを示す。後世の削平のためか遺存状態は悪い。埋土は2層に分層され、上層は極細粒砂から極粗粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、下層は黒褐色(10YR3/1～3/2)粘土質シルトとなっている。いずれの層にも風化礫が混じる。土師器3点、須恵器2点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SD-218(図2-181)

調査区中央部から西部の南にかけて検出した東西溝で、溝の両端は調査区外に延びる。古代の溝跡(SD-219)を切り、同じく古代の溝跡(SD-216・217)に切られる。検出長60.53m、幅0.55～2.00m、深さ17～52cmを測り、断面形は地点によりU字形または舟底形を呈する。基底面は西(7.351m)から東(7.150m)に向かって傾斜する。主軸方向は中央部でN-81°-Wを示し、SD-216と一致する。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト単一で、黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトブロックを含んでいた。遺物は弥生土器1点、土師器23点、土師器または土師質土器112点、須恵器12点、製塩土器1点、土製品1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、弥生土器1点(2200)、土師器8点(2201～2208)、須恵器5点(2209～2213)である。

出土遺物

弥生土器(図2-183 2200)

高杯の杯底部から脚部の破片である。脚柱部には、孔径5mmの円孔を穿つ。胎土は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

土師器(図2-183 2201～2208)

2201～2203は甗である。2201は胴部、2202・2203は口縁部から胴部にかけての破片である。2201・2202は胴部外面に格子状にハケ調整を施す。胎土は2201はチャートを含む極細粒砂から極粗粒砂、2202・2203は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

2204～2207は杯で、いずれも底部外面の切り離しは回転ヘラ切りによるとみられる。胎土はいずれも精良で、2204は少量の極細粒砂、2205・2206は極細粒砂から粗粒砂、2207は極細粒砂から中粒砂を含む。

2208は皿で、口縁部から底部の破片である。杯の可能性もある。外面は底部を含めてミガキ調整を施す。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

須恵器(図2-183 2209～2213)

2209～2211は皿または杯である。2211を除き、口縁部から底部まで残存する。胎土はいずれも極細粒砂から中粒砂を含む。

2212は皿で、胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2213は壺で、胴部から底部の破片である。胎土は白色極細粒砂から粗粒砂を含む。

SD-219

調査区中央部南、SD-217の西で検出した南北溝で、溝の南は調査区外に延びる。古代の溝跡(SD-218)に切られる。検出長7.59m、幅0.40m、深さ29～35cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底

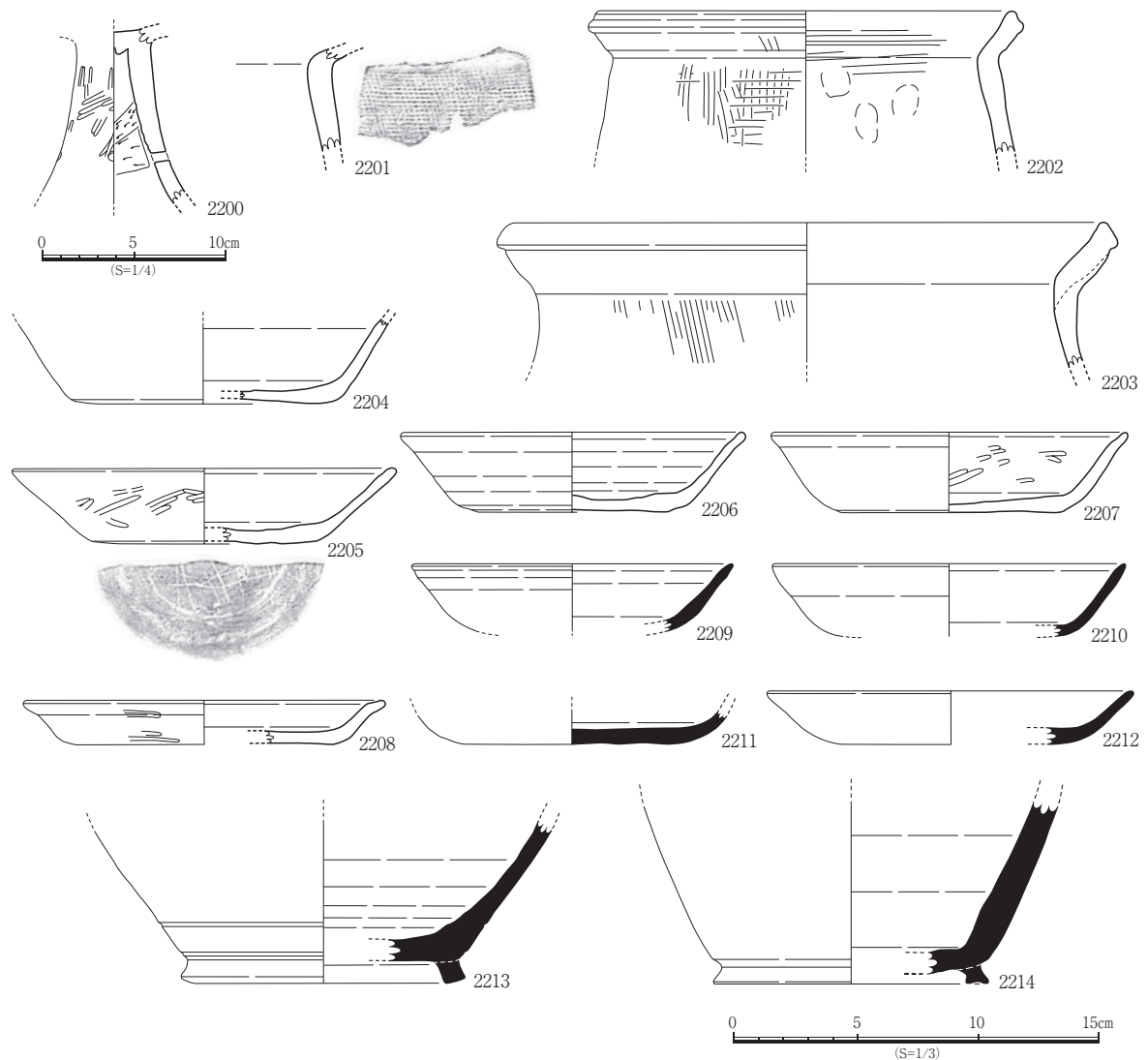


図2-183 SD-218・219出土遺物実測図

面は北(7.399 m)と南(7.378 m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-30°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2~3/1)シルトで、わずかに中粒中礫から粗粒中礫を含んでいた。遺物は土師器1点、土師器または土師質土器1点、須恵器2点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2214)である。

出土遺物

須恵器(図2-183 2214)

壺で、胴部から底部の破片である。胎土は極細粒砂から細粒中礫を含む。

SD-220(図2-184)

調査区中央部で検出した南北溝で、検出長から溝状土坑の可能性もある。古代の溝跡(SD-221)を切る。検出長6.92 m、幅0.48~0.52 m、深さ30~32 cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は南(7.604 m)から北(7.502 m)に向かって傾斜する。主軸方向はN-14°-Eを示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、鉄分の沈着がみられた。遺物は土師器1点、土師器または土師質土器72点、須恵器4点、土師質土器1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2215)である。

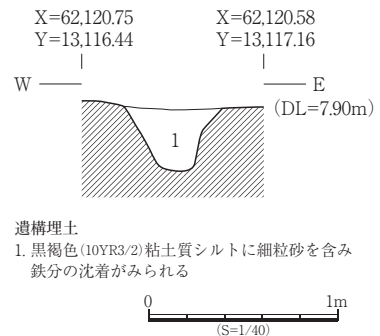


図2-184 SD-220

出土遺物

須恵器(図2-188 2215)

蓋の口縁部の破片である。擬宝珠様のつまみが付いたとみられる。胎土は白色極細粒から極粗粒砂を含む。

SD-221

調査区中央部で検出した南北溝で、検出長から溝状土坑の可能性もある。古代の溝跡(SD-220)と中世の掘立柱建物跡(SB-216)に切られる。検出長4.35 m、幅0.41 m、深さ17 cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.737 m)から南(7.622 m)に向かって傾斜する。主軸方向はN-12°-Eを示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一であった。遺物は出土しておらず、詳しい時期は不明である。

SD-222(図2-185)

調査区中央部で検出した南北溝で、検出長から溝状土坑の可能性もある。古代の溝跡(SD-220・221)の西側に並行して所在する。古代の掘立柱建物跡(SB-205・206)を切る。検出長6.51 m、幅0.30~0.51 m、深さ6~16 cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は北(7.645 m)と南(7.631 m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-16°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は土師器9点、土師器または土師質土器62点、須恵器3点、瓦1点が出土した。そのうち復元図示できたのは瓦1点(2216)である。

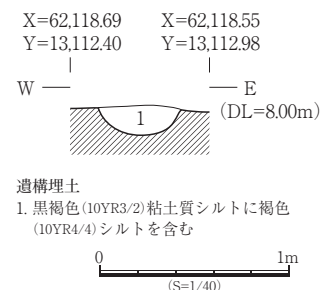


図2-185 SD-222

出土遺物

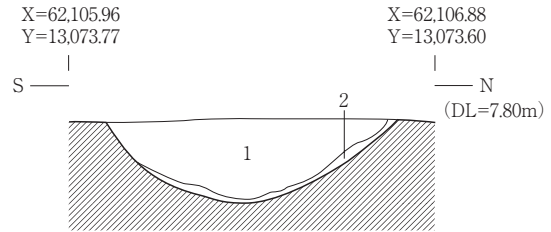
3. 遺構と遺物 (2) II区

瓦 (図2-188 2216)

平瓦の破片で、摩耗が著しい。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

SD-223 (図2-186)

調査区中央部から西部を横断する東西溝で、中世の掘立柱建物跡 (SB-217・218)、塀跡 (SA-216・217・222)、溝跡 (SD-231・235・246~248) に切れ、古代の溝跡 (SD-214) を切る。検出長 73.05 m、幅 0.48~0.78 m、深さ 19~29 cm を測り、断面形は地点によって U 字形または逆台形を呈する。基底面は東 (7.625 m) から西 (7.466 m) に向かって傾斜する。主軸方向は N-78°-E を示す。埋土は 2 層に分層され、上層は極細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト、下層は極細粒砂混じりの灰黄褐色 (10YR4/2) ~ 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトとなっている。上層には地山ブロックが混じる。遺物は弥生土器 6 点、土師器 7 点、土師器または土師質土器 84 点、須恵器 7 点、製塩土器 1 点、鉄製品 1 点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器 3 点 (2217~2219) である。



遺構埋土
 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトに、にぶい黄褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトブロックと極細粒砂を含む
 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) ~ 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトに極細粒砂を含む

0 1 2m
(S=1/60)

図2-186 SD-223

下層は極細粒砂混じりの灰黄褐色 (10YR4/2) ~ 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトとなっている。上層には地山ブロックが混じる。遺物は弥生土器 6 点、土師器 7 点、土師器または土師質土器 84 点、須恵器 7 点、製塩土器 1 点、鉄製品 1 点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器 3 点 (2217~2219) である。

出土遺物

須恵器 (図2-188 2217~2219)

2217 は杯の底部で、約 1/4 残存する。壺の可能性もある。胎土は白色・黒色極細粒砂から中粒砂を含む。

2218・2219 は壺で、2218 は平瓶の可能性もある。胎土は、2218 が極細粒砂から極粗粒砂、2219 は極細粒砂から粗粒砂を含む。

SD-224 (図2-181)

調査区中央部南で検出した東西溝で、古代の溝跡 (SD-216) を切る。検出長 10.34 m、幅 0.53~0.59 m、深さ 9~24 cm を測り、断面形は地点により U 字形または逆台形を呈する。基底面は東 (7.576 m) から西 (7.526 m) に向かってわずかに傾斜する。主軸方向は中央部で N-85°-W を示す。埋土は黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト単一で、暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルトブロックを含んでいた。遺物は土師器 3 点、土師器または土師質土器 9 点、須恵器 5 点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器 1 点 (2220) である。

出土遺物

須恵器 (図2-188 2220)

甕の口縁部の破片で、内外面は回転ナデ調整である。胎土は白色・黒色極細粒砂から粗粒砂を含む。

SD-225 (図2-187)

調査区西南部西端で検出した東西溝で、溝はⅢ区に続く。検出長 4.26 m、幅 0.20 m、深さ 4 cm を測り、断面形は浅い U 字形を呈する。基底面は東 (7.418 m) から西 (7.392 m) に向かってわずかに傾斜する。また溝掘削の際の農耕具の痕が基底面に多く残る。主軸方向は中央部で N-66°-W を示す。埋土は

黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト単一で、地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であったが、Ⅲ区で古墳時代の須恵器が出土しており、古代ではなく古墳時代の溝跡であった可能性が高い。

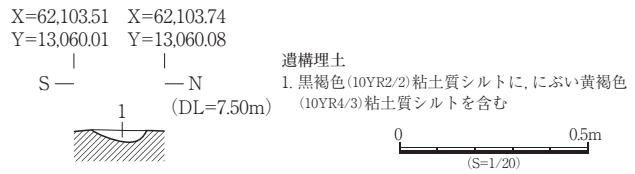


図2-187 SD-225

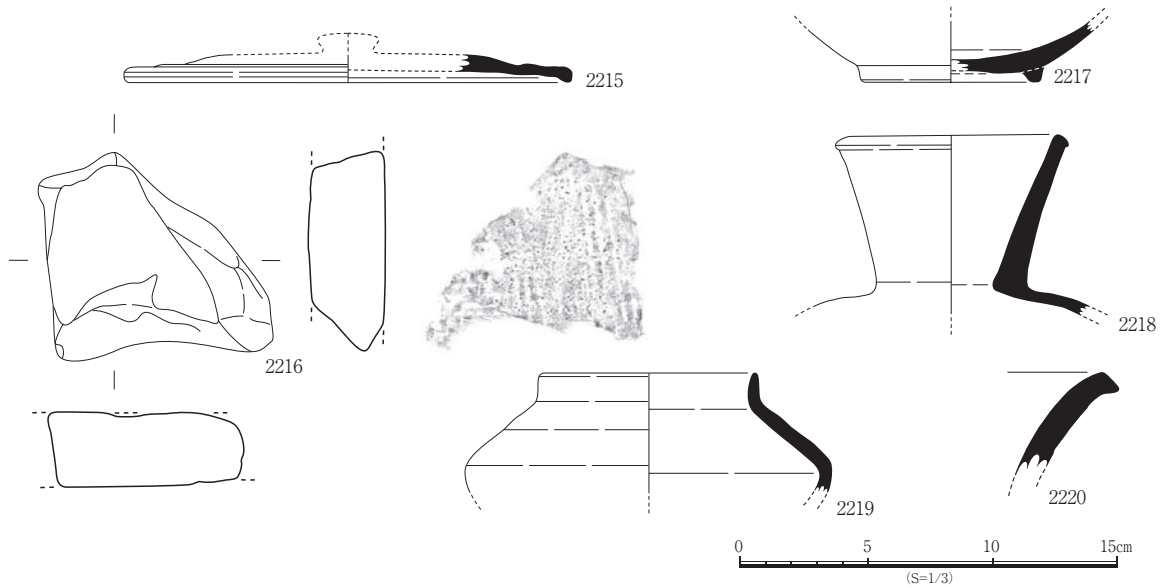


図2-188 SD-220・222～224出土遺物実測図

vピット

ピットは調査区中央部から西部にかけて多く分布する(P-202～224)。これらのピットはP-202が長径94cmと規模が大きい以外は、概ね径30～50cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトからシルト質粘土が主体となる。

出土遺物

土師器(図2-189 2221～2226)

2221は甕で、口縁部の破片である。外面には煤が付着する。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

2222～2224は杯である。2222・2224は底部の切り離しは、回転ヘラ切りによる。胎土は2222・2223は極細粒砂から極粗粒砂、2224は極細粒砂から中粒砂を含む。

2225・2226は皿で、2225は杯の可能性もある。2225は底部、2226は口縁部から底部の破片である。胎土は、2225は極細粒砂から中粒砂、2226は精良で極細粒砂がわずかに入る。(2221はP-224、2222はP-216、2223はP-215、2224はP-212、2225はP-211、2226はP-

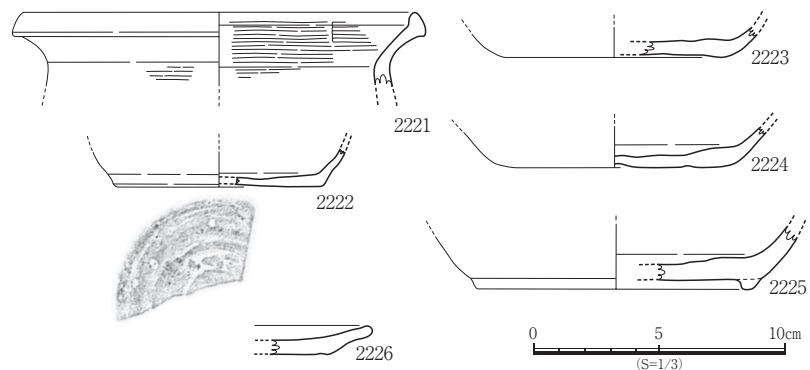


図2-189 ピット出土遺物実測図(土師器)

220から出土)

須恵器(図2-190 2227~2239)

2227は杯蓋で、口縁部の破片である。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

2228~2235は杯で、2228~2230は口縁部の破片、2231~2235は底部の破片で、2231~2234は高台が付く。胎土は2228・2235は極細粒砂から粗粒砂、2229・2230・2234は極細粒砂から中粒砂、2231・2232は極細粒砂から極粗粒砂、2233は極細粒砂から細粒砂を含む。

2236は皿で、約1/4が残存する。胎土は白色極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2237は高杯で、杯底部から脚柱部が残存する。やや生焼けで、胎土は白色極細粒砂から粗粒砂を含む。

2238・2239は壺の底部である。2238は鉢の可能性もある。胎土は2238は極細粒砂から極細粒中礫、2239は極細粒砂から極粗粒砂を含む。(2227はP-208, 2228はP-202, 2229はP-223, 2230はP-217, 2231はP-206, 2232はP-209, 2233はP-210, 2234はP-221, 2235はP-218, 2236はP-213, 2237はP-

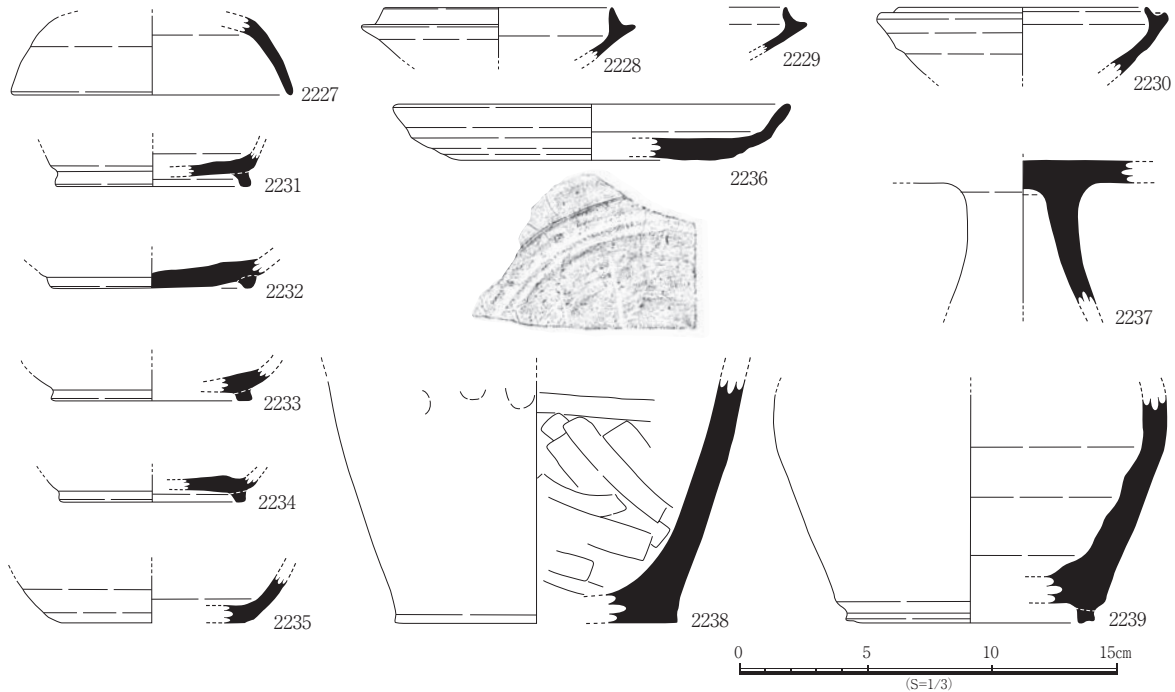


図2-190 ピット出土遺物実測図(須恵器)

- 222, 2238はP-205, 2239はP-223

から出土)

製塩土器(図2-191 2240)

口縁部の破片である。外面はナデ調整, 内面は布目圧痕が残る。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。(P-214から出土)

黒色土器(図2-191 2241)

椀の底部の破片である。内外面とも摩耗が著しく調整は不明である。胎

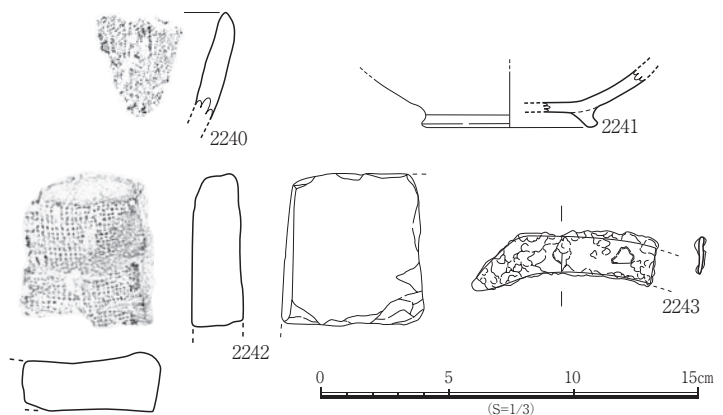


図2-191 ピット出土遺物実測図(製塩土器, 黒色土器, 瓦, 鉄製品)

土は極細粒砂から極粗粒砂を少量含む。(P-219から出土)

瓦(図2-191 2242)

平瓦の破片である。胎土は硬質で、中粒砂から細粒中礫を含む。(P-207から出土)

鉄製品(図2-191 2243)

刃部のみで、柄は欠損している。刃部はやや内湾する。(P-213から出土)

石製品(図2-192 2244・2245)

2244は砂岩を利用した叩石である。両面中央部を中心に、敲打痕および擦痕が残る。

2245は砂岩を利用した砥石で、一主面に使用の際の擦痕が残る。側面には割り取った後、成形を行った際の敲打痕が残る。(2244はP-203, 2245はP-204から出土)

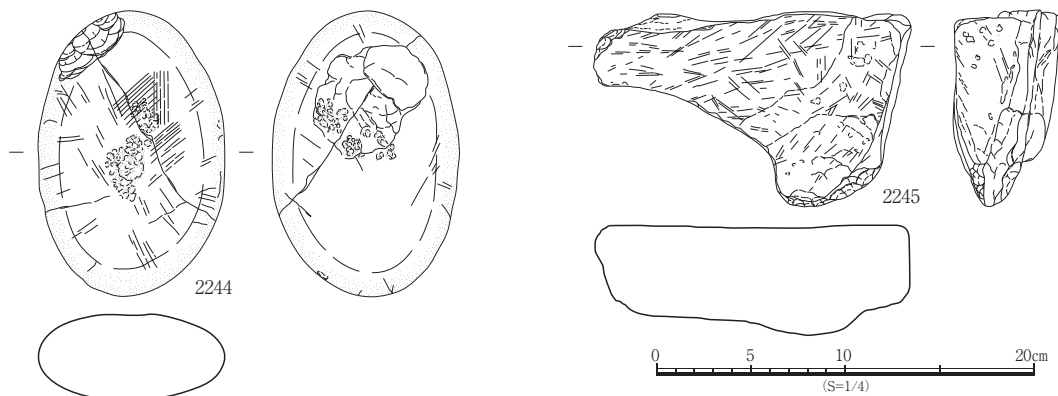


図2-192 ビット出土遺物実測図(石製品)

④ 中世

中世の遺構はⅡ区西半を中心に分布する。検出した遺構は掘立柱建物跡 21 棟, 塀・柵列跡 15 列, 土坑 32 基, 溝跡 29 条, ビット 2,655 個を検出した。

i 掘立柱建物跡

柱穴は円形で、規模は1間×1間が3棟, 1間×2間が1棟, 2間×1間が2棟, 2間×2間が6棟, 3間×1間が2棟, 3間×2間が3棟, 4間×1間が1棟, 4間×2間が1棟, 4間×4間が1棟, 5間×2間が1棟である。2間×2間の倉庫的な規模のものが最も多い。また5間×2間のSB-213, 4間×4間のSB-225は比較的大型で、母屋のような中心的施設であった可能性が考えられる。

SB-212(図2-193)

調査区中央部北端で検出した桁行3間(3.52~3.58m), 梁行2間(2.20~2.50m)の東西棟建物跡である。身舎西から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。中世の溝跡(SD-229)を切る。棟方向はN-59°-Eを示す。柱間寸法は桁行(東西)が0.86~1.46m, 梁行(南北)は1.10~1.40mである。柱穴は円形で、径24~42cmを測る。柱痕は不明である。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。

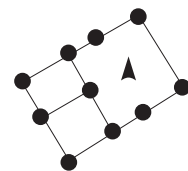


図2-193 SB-212

遺物は弥生土器3点, 土師器1点, 土師器または土師質土器63点, 須恵器1点, 瓦器1点, 土師質土器1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、土師質土器2点(2246・2247)である。

出土遺物

土師質土器(図2-214 2246・2247)

2246は杯で、円盤状高台の破片である。胎土は極細粒砂から細粒砂を含む。

2247は椀で、体部外面は回転ヘラ削りの後、ナデ調整を行ったような痕がみられる。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

SB-213 (図2-194)

調査区中央部北端で検出した桁行5間(5.63m)、梁行2間(3.48m)の南北棟建物跡である。身舎西から1間目の柱通りに間仕切柱とみられる柱が立つ。建物の北は調査区外に延びるとみられる。棟方向はN-15°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が0.85~1.51m、梁行(東西)は1.64~1.91mである。柱穴は円形で、径25~47cmを測る。柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、土師器3点、土師器または土師質土器205点、須恵器4点、瓦器1点、土師質土器3点が出土した。全体的に細片のため、復元図示できたのは須恵器1点(2248)、土師質土器9点(2249~2257)である。

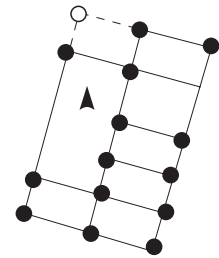


図2-194 SB-213

出土遺物

須恵器(図2-214 2248)

蓋で、口縁部の破片である。胎土は細粒砂から粗粒砂を含む。

土師質土器(図2-214 2249~2257)

2249~2254は杯である。いずれも底部の切り離しは回転糸切りによる。2249・2252~2254はロク口水挽き成形とみられる。胎土は2249~2252は極細粒砂から中粒砂、2253は極細粒砂から極粗粒砂、2254は極細粒砂から細粒砂を含む。

2255~2257は小皿で、いずれも底部は回転糸切りによる。胎土は2255・2257は極細粒砂から粗粒砂、2256は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

SB-214 (図2-195)

調査区中央部北端で検出した桁行2間(3.76m)、梁行2間(2.07m)の東西棟建物跡である。身舎東から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB-213の西に並行して所在する。建物の北は調査区外に延びるとみられる。棟方向はN-77°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.65~2.06m、梁行(南北)は0.98~1.10mである。柱穴は円形で、径25~36cmを測る。柱痕は不明である。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は弥生土器5点、土師器または土師質土器29点、須恵器1点、瓦器1点、土師質土器4点、白磁1点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

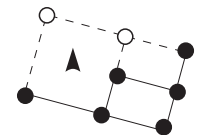


図2-195 SB-214

SB-215 (図2-196)

調査区中央部北で検出した桁行3間(4.40~4.42m)、梁行1間(1.95~2.05m)の東西棟建物跡で、古代の掘立柱建物跡(SB-201)を切り、中世の堀跡(SA-210)、溝跡(SD-231)に切られる。棟方向はN-69°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.35~1.70m、梁行(南北)は1.95~2.05mである。柱穴は円形で、径26~38cmを測る。柱痕は不明である。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

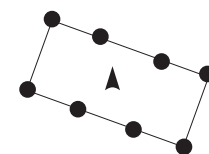


図2-196 SB-215

SB-216 (図2-197)

調査区中央部で検出した桁行2間(4.03~4.15m)、梁行2間(2.49~2.58m)の東西棟総柱建物跡で、古代の掘立柱建物跡(SB-205・206)と溝跡(SD-221・222)を切る。棟方向はN-73°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.87m~2.16m、梁行(南北)は1.07m~1.42mである。柱穴は円形で、径29~49cmを測る。柱径は20cm以下である。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器5点、土師器または土師質土器16点、須恵器1点、土師質土器3点、青磁1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、土師質土器1点(2258)、青磁1点(2259)である。

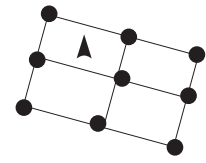


図2-197 SB-216

出土遺物

土師質土器(図2-214 2258)

杯の底部の破片である。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

青磁(図2-214 2259)

碗で、体部から底部が残存する。龍泉窯のものとみられ、外面には鎬蓮弁文を施す。胎土は精良である。

SB-217 (図2-198)

調査区中央部で検出した桁行2間(3.54~3.62m)、梁行1間(2.50~2.55m)の南北棟建物跡である。古代の溝跡(SD-223)を切り、中世の掘立柱建物跡(SB-218)と切り合う。棟方向はN-9°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.73~1.81m、梁行(東西)は2.50~2.55mである。柱穴は円形で、径25~48cmを測る。柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は弥生土器1点、土師器3点、須恵器7点、製塩土器2点、黒色土器1点、東播系須恵器1点、土師質土器15点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

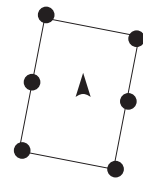


図2-198 SB-217

SB-218 (図2-199)

調査区中央部で検出した桁行3間(4.80~4.86m)、梁行2間(3.30~3.33m)の東西棟建物跡である。古代の溝跡(SD-223)を切り、中世の掘立柱建物跡(SB-217)と切り合う。棟方向はN-83°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.48~1.66m、梁行(南北)は1.56~1.74mである。柱穴は円形で、径31~60cmを測る。柱径は15cm以下とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器5点、土師器または土師質土器6点、須恵器3点、製塩土器1点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

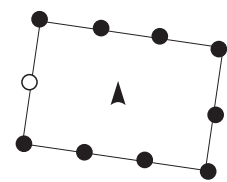


図2-199 SB-218

SB-219 (図2-200)

調査区中央部で検出した桁行2間(3.88m)、梁行1間(1.54m)以上の南北棟建物跡である。建物の東側は調査区外に延びるとみられ、東西棟建物になる可能性もある。中世の堀跡(SA-211)と切り合う。棟方向はN-3°-Wを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.83~2.05m、梁行(東西)は1.54mである。柱穴は円形で、径27~41cmを測る。柱径は15cm以下である。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘

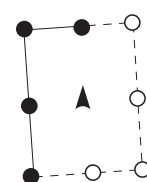


図2-200 SB-219

土質シルトであった。遺物は弥生土器1点, 土師器2点, 土師器または土師質土器15点, 須恵器2点, 製塩土器1点, 黒色土器1点, 瓦器1点, 土師質土器1点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

SB-220 (図2-201)

調査区中央部で検出した桁行4間(7.45~7.65m), 梁行1間(1.97~2.01m)の南北棟建物跡である。建物跡は細長く, 本来の屋敷の一角を復元した可能性がある。中世の堀跡(SA-211)と切り合う。棟方向はN-6°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.62~2.22m, 梁行(東西)は1.97~2.01

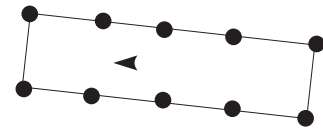


図2-201 SB-220

mである。柱穴は円形で, 径25~41cmを測る。柱径は15cm以下である。柱穴の埋土は, 黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器1点, 土師器または土師質土器10点, 土師質土器2点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

SB-221 (図2-202)

調査区中央部南で検出した桁行3間(3.87~4.02m), 梁行2間(1.88m)の南北棟建物跡である。古代の堀跡(SA-204)と溝跡(SD-214)を切る。身舎南から1間目の柱通りの柱間寸法が狭く, 庇のようなものが付いた可能性もある。棟方向はN-11°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が0.72~1.92m, 梁行(東西)は0.91~0.97mである。柱穴は円形で, 径28~39cmを測る。柱痕は不明である。柱穴の埋土は, 黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器または土師質土器4点, 須恵器1点, 土師質土器1点が出土した。そのうち復元図示できたのは土師質土器1点(2260)である。

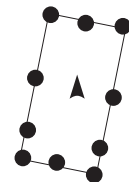


図2-202
SB-221

出土遺物

土師質土器(図2-214 2260)

杯の底部から体部の破片である。ロクロ水挽き成形で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

SB-222 (図2-203)

調査区西部北で検出した桁行1間(2.68~2.77m), 梁行2間(1.93~1.98m)の東西棟建物跡である。桁行が非常に長く, 本来はその中間に柱が立っていた可能性もあるが, 調査では検出できなかった。四隅の柱穴が大きい。棟方向はN-86°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が2.68~2.77m, 梁行(南北)は0.78~1.15mである。柱穴は円形で, 径25~45cmを測る。柱径は15cm以下とみられる。柱穴の埋土は, 黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師質土器8点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

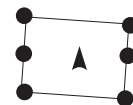


図2-203
SB-222

SB-223 (図2-204)

調査区西部で検出した桁行2間(4.22~4.36m), 梁行2間(3.27~3.32m)の東西棟建物跡である。中世の溝跡(SD-244)の南に所在する。棟方向はN-73°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が2.04~2.21m, 梁行(南北)は1.51~1.81mである。柱穴は円形で, 径22~32cmを測る。柱径は15cm以下とみられる。柱穴の埋土は, 黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器2点, 土師器また

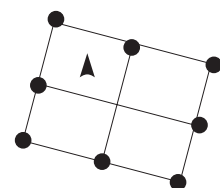


図2-204 SB-223

は土師質土器29点, 須恵器1点, 瓦器1点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

SB-224 (図2-205)

調査区中央部で検出した桁行1間(2.17~2.28m), 梁行1間(1.81~2.02m)の南北棟建物跡である。中世の塀跡(SA-215)と切り合う。棟方向はN-12°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が2.17~2.28m, 梁行(東西)は1.81~2.02mである。柱穴は円形で, 径21~34cmを測る。柱径は15cm以下とみられる。柱穴の埋土は, 黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器1点, 土師器または土師質土器30点, 土師質土器1点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

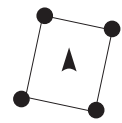


図2-205
SB-224

SB-225 (図2-206)

調査区西部で検出した桁行4間, 梁行2間の身舎に二面廂付きの桁行4間(7.92~8.04m), 梁行4間(7.68~7.70m)の南北棟建物跡である。ほぼ正方形の建物で, 身舎北から1間目と, 身舎南から1間目に間仕切柱が立つ。棟方向はN-11°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.91~2.09m, 梁行(東西)は1.27~2.44mである。柱穴は円形で, 径23~41cmを測る。柱径は15~19cm前後とみられる。柱穴の埋土は, 黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器9点, 土師器または土師質土器59点, 須恵器1点, 緑釉陶器1点, 瓦器3点, 東播系須恵器1点, 土師質土器15点, 瓦質土器1点, 青磁1点が出土した。そのうち復元図示できたのは, 緑釉陶器1点(2261), 土師器3点(2262~2264), 土師質土器2点(2265・2266)であった。

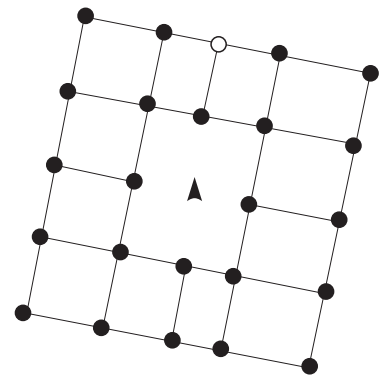


図2-206 SB-225

そのうち復元図示できたのは, 緑釉陶器1点(2261), 土師器3点(2262~2264), 土師質土器2点(2265・2266)であった。

出土遺物

緑釉陶器(図2-214 2261)

碗の体部の破片である。素地は須恵質で, 内外面とも回転ナデ調整を行う。釉は薄く, 釉調は緑色を呈する。内面にはゴマがみられる。胎土は精良である。

土師器(図2-214 2262~2264)

いずれも小皿で, 手づくねによる成形である。底部内外面はナデ調整, 口縁部外面はヨコナデ調整を施す。胎土は精良で, 2262は極細粒砂から細粒砂, 2263はわずかに中粒砂, 2264はわずかに細粒砂を含む。

土師質土器(図2-214 2265・2266)

2265は小皿の完形である。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 中粒砂をわずかに含む。

2266は杯で, 約1/3が残存する。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

SB-226 (図2-207)

調査区西部で検出した桁行1間(1.65~1.77m), 梁行1間(1.45~1.48m)の南北棟建物跡である。棟方向はN-14°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.65~1.77m, 梁行(東



図2-207
SB-226

西)は1.45～1.48 mである。柱穴は円形で、径27～35 cmを測る。柱径は15 cm以下とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は弥生土器1点、土師器4点、土師器または土師質土器7点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

SB-227 (図2-208)

調査区西部南で検出した桁行3間(6.45～6.56 m)、梁行1間(2.31～2.46 m)の南北棟建物跡である。中世の堀跡(SA-214・217)と隣接する。棟方向はN-15°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が2.14～2.27 m、梁行(東西)は2.31～2.46 mである。柱穴は円形で、径21～46 cmを測る。柱径は15 cm以下とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

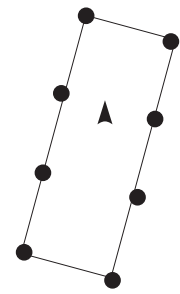


図2-208 SB-227

SB-228 (図2-209)

調査区西部で検出した桁行4間(6.62～6.68 m)、梁行2間(3.10～3.20 m)の東西棟建物跡である。中世の堀跡(SA-218)、溝跡(SD-245)と切り合う。棟方向はN-74°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.49～1.80 m、梁行(南北)は1.57～1.63 mである。柱穴は円形で、径22～39 cmを測る。柱径は15 cm以下とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は弥生土器2点、土師器または土師質土器20点、須恵器1点、土師質土器3点、瓦質土器2点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

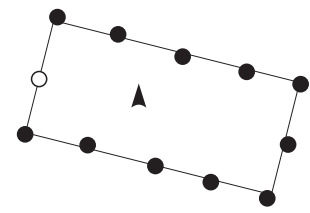


図2-209 SB-228

SB-229 (図2-210)

調査区西南部で検出した桁行2間(5.12～5.30 m)、梁行2間(4.05～4.09 m)の東西棟総柱建物跡である。中世の溝跡(SD-248)を切り、掘立柱建物跡(SB-230)、溝跡(SD-249・250)と切り合う。棟方向はN-73°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が2.47～2.68 m、梁行(南北)は1.99～2.17 mである。柱穴は円形で、径31～38 cmを測る。柱径は15 cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器1点、土師器または土師質土器26点、土師質土器10点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

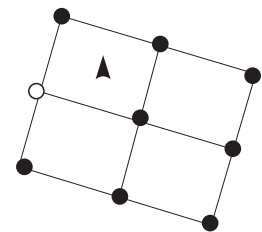


図2-210 SB-229

SB-230 (図2-211)

調査区西南部で検出した桁行2間(3.11 m)、梁行1間(1.78 m)の東西棟建物跡である。西南隅の柱穴は確認できなかった。中世の掘立柱建物跡(SB-229)、溝跡(SD-251)と切り合う。棟方向はN-76°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.54～1.61 m、梁行(南北)は1.78 mである。柱穴は円形で、径31～40 cmを測る。柱径は15 cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器または土師質土器27点、須恵器2点、土師質土器2点、瓦質土器1点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

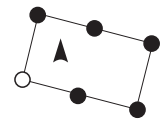


図2-211
SB-230

SB-231 (図2-212)

調査区西南部で検出した桁行2間(3.88～4.03 m)、梁行2間(2.76～2.90 m)の東西棟総柱建物跡である。身舎東の柱通り中央の柱穴は確認できなかった。中世の溝跡(SD-250・251)と切り合う。棟方向はN

-75°-Wを示す。柱間寸法は桁行(東西)が1.91~2.06m, 梁行(南北)は1.37~1.56mである。柱穴は円形で、径21~26cmを測る。柱径は15cm以下とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。遺物は土師器または土師質土器2点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

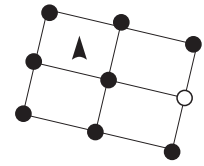


図2-212 SB-231

SB-232 (図2-213)

調査区西南部南端で検出した桁行1間(1.70~1.99m), 梁行1間(1.55~1.59m)の南北棟建物跡で、古代の溝跡(SD-223)を切る。棟方向はN-17°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.70~1.99m, 梁行(東西)は1.55~1.59mである。柱穴は円形で、径35~41cmを測る。柱径は18cm前後とみられる。柱穴の埋土は、黒色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。



図2-213 SB-232

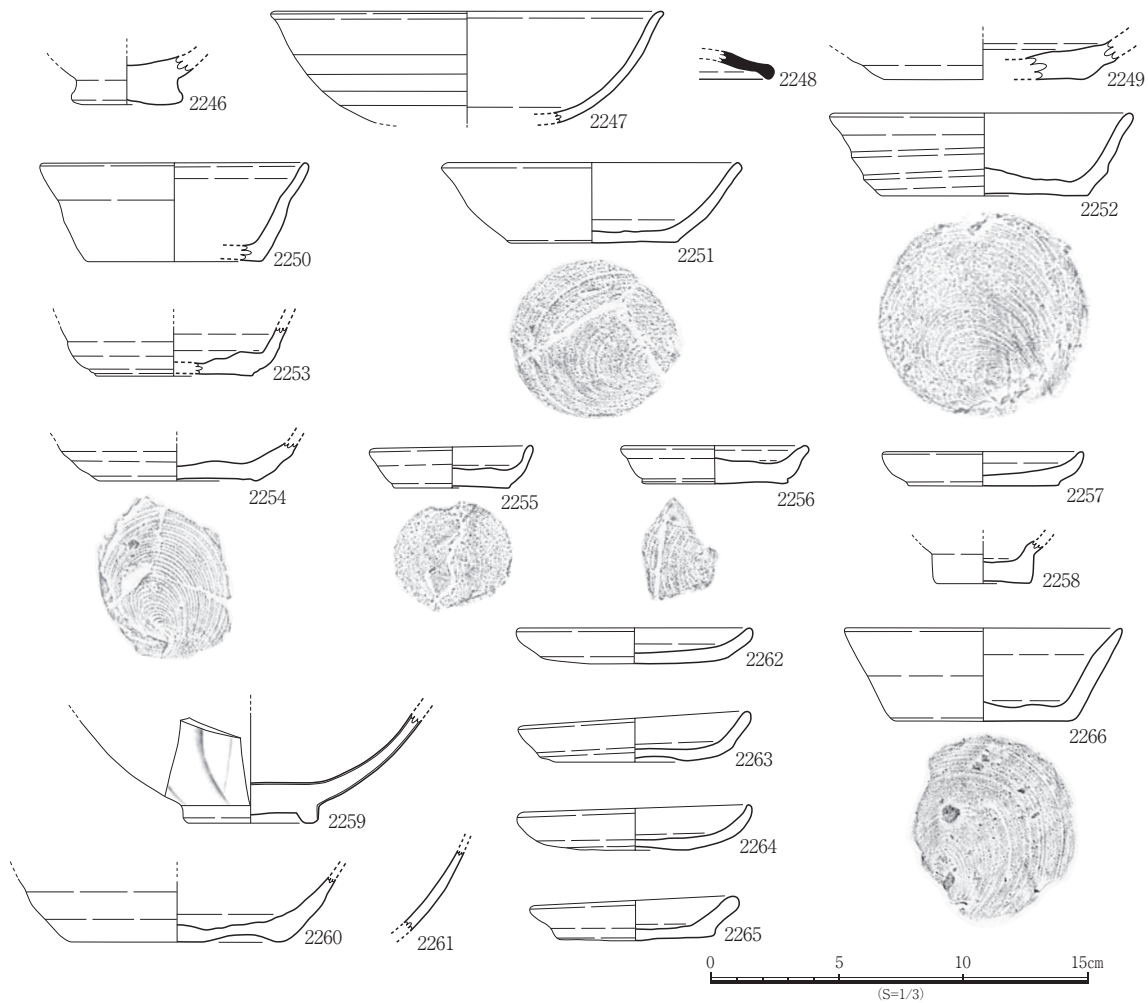


図2-214 SB-212・213・216・221・225出土遺物実測図

ii 塀・柵列跡

調査区西半で15列の塀跡を検出した。いずれも直線的に延び、南北の塀跡はN-12°-EからN-14°-E, 東西の塀跡はN-72°-WからN-79°-Wを示す。

SA-208

調査区中央部北, 中世の塀跡(SA-209)の北側で検出した東西塀跡(N-74°-W)である。5間(9.23

m)を検出し、柱間寸法は1.76～1.94mで、柱穴は径31～42cmのほぼ円形である。柱径は15cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2～2/3)粘土質シルトである。遺物は土師器1点、土師器または土師質土器23点、須恵器1点、土師質土器6点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SA-209

調査区中央部北、中世の堀跡(SA-208)の南側で検出した東西堀跡(N-79°-W)で、古代の掘立柱建物跡(SB-202)を切る。5間(9.78m)を検出し、柱間寸法は1.80～2.13mで、柱穴は径21～36cmのほぼ円形である。柱径は10cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2～2/3)粘土質シルトである。遺物は土師質土器10点が出土し、そのうち復元図示できたのは土師質土器1点(2267)である。

出土遺物

土師質土器(図2-215 2267)

杯の底部の破片である。ロクロ水挽き成形で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、極細粒砂をわずかに含む。

表2-13 中世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	桁行×梁行	規模				棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	柱間寸法		面積 (㎡)		
			桁(m)	梁(m)			
SB-212	3×2	3.52～3.58×2.20～2.50	0.86～1.46	1.10～1.40	8.37	N-59°-E	間仕切柱
SB-213	5×2	5.63×3.48	0.85～1.51	1.64～1.91	(19.93)	N-15°-E	間仕切柱
SB-214	2×2	3.76×2.07	1.65～2.06	0.98～1.10	(8.02)	N-77°-W	間仕切柱
SB-215	3×1	4.40～4.42×1.95～2.05	1.35～1.70	1.95～2.05	8.83	N-69°-W	
SB-216	2×2	4.03～4.15×2.49～2.58	1.87～2.16	1.07～1.42	10.41	N-73°-W	総柱
SB-217	2×1	3.54～3.62×2.50～2.55	1.73～1.81	2.50～2.55	8.98	N-9°-E	
SB-218	3×2	4.80～4.86×3.30～3.33	1.48～1.66	1.56～1.74	16.00	N-83°-W	
SB-219	2×1以上	3.88×1.54以上	1.83～2.05	1.54	(7.02)	N-3°-W	
SB-220	4×1	7.45～7.65×1.97～2.01	1.62～2.22	1.97～2.01	15.07	N-6°-E	
SB-221	3×2	3.87～4.02×1.88	0.72～1.92	0.91～0.97	7.43	N-11°-E	
SB-222	1×2	2.68～2.77×1.93～1.98	2.68～2.77	0.78～1.15	5.35	N-86°-W	
SB-223	2×2	4.22～4.36×3.27～3.32	2.04～2.21	1.51～1.81	14.17	N-73°-W	
SB-224	1×1	2.17～2.28×1.81～2.02	2.17～2.28	1.81～2.02	4.26	N-12°-E	
SB-225	4×4	7.92～8.04×7.68～7.70	1.91～2.09	1.27～2.44	61.47	N-11°-E	間仕切柱
SB-226	1×1	1.65～1.77×1.45～1.48	1.65～1.77	1.45～1.48	2.52	N-14°-E	
SB-227	3×1	6.45～6.56×2.31～2.46	2.14～2.27	2.31～2.46	15.57	N-15°-E	
SB-228	4×2	6.62～6.68×3.10～3.20	1.49～1.80	1.57～1.63	21.02	N-74°-W	
SB-229	2×2	5.12～5.30×4.05～4.09	2.47～2.68	1.99～2.17	21.27	N-73°-W	総柱
SB-230	2×1	3.11×1.78	1.54～1.61	1.78	5.54	N-76°-W	
SB-231	2×2	3.88～4.03×2.76～2.90	1.91～2.06	1.37～1.56	11.22	N-75°-W	総柱
SB-232	1×1	1.70～1.99×1.55～1.59	1.70～1.99	1.55～1.59	2.89	N-17°-E	

SA-210

調査区中央部で検出した東西堀跡(N-75°-W)で、古代の掘立柱建物跡(SB-201)と中世の掘立柱建物跡(SB-215)を切る。4間(5.71m)を検出し、柱間寸法は1.28～1.54mで、柱穴は径31～47cmのほぼ円形である。柱径は15cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器2点、製塩土器2点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SA-211

調査区中央部で検出した東西堀跡(N-83°-W)である。中世の掘立柱建物跡(SB-219・220)と切り合う。6間(9.36m)を検出した。柱間寸法は1.37～1.70mで、柱穴は径21～31cmのほぼ円形である。柱径は12cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器または土師質土器の細片2点が出土したが、復元図示はできるものはなかった。

SA-212

調査区中央部南で検出した東西堀跡(N-81°-W)である。中世の溝跡(SD-237)に切られる。4間(6.96m)を検出し、柱間寸法は1.51～2.03mで、柱穴は径28～40cmのほぼ円形である。柱径は10cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は弥生土器7点、土師器3点、土師器または土師質土器23点、瓦器1点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SA-213

調査区中央部、中世の堀跡(SA-212)の北で検出した東西堀跡(N-84°-W)で、古代の溝跡(SD-214)を切る。5間分(9.00m)を検出したが、本来は6間と考えられる。柱間寸法は1.28～1.68mで、柱穴は径27～47cmのほぼ円形である。柱径は14cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

SA-214

調査区中央部南、中世の溝跡(SA-213)の南側で検出した東西堀跡(N-72°-W)である。4間(7.09m)を検出した。柱間寸法は1.64～1.94mで、柱穴は径25～46cmのほぼ円形、一部隅丸方形である。柱径は15cm以下とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器1点、土師器または土師質土器3点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SA-215

調査区西部、中世の掘立柱建物跡(SB-225)の東側で検出した南北堀跡(N-12°-E)である。中世の掘立柱建物跡(SB-224)と切り合う。5間(10.20m)を検出した。柱間寸法は1.87～2.22mで、柱穴は径23～42cmのほぼ円形である。柱径は12cm以下とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器3点、土師器または土師質土器60点、須恵器1点、瓦器2点、土師質土器9点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SA-216

調査区西部南、中世の堀跡(SA-215)の南側で検出した東西堀跡(N-77°-W)である。古代の溝跡(SD-223)を切り、中世の土坑(SK-277)に切られる。6間(9.54m)を検出した。柱間寸法は1.24～2.03mで、柱穴は径27～47cmのほぼ円形である。柱径は15cm以下とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器または土師質土器の細片2点が出土したが、復元図示できるもの

はなかった。

SA-217

調査区西部南、中世の堀跡(SA-216)の南側に並行して所在する東西堀跡(N-75°-W)である。古代の溝跡(SD-223)を切る。3間(6.16m)を検出したが、本来は4間であったと考えられる。ただし東端から1間目の柱穴は調査では確認できなかった。柱間寸法は1.44~1.50mで、柱穴は径27~47cmのほぼ円形である。柱径は15cm以下とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器または土師質土器9点と土師質土器1点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SA-218

調査区西部、中世の溝跡(SD-244)の南側で検出した南北堀跡(N-14°-E)である。中世の掘立柱建物跡(SB-228)と切り合う。5間(9.02m)を検出した。柱間寸法は1.60~2.00mで、柱穴は径29~42cmのほぼ円形である。柱径は19cm以下とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器または土師質土器13点、須恵器2点、瓦器2点、土師質土器7点、瓦質土器1点が出土し、そのうち復元図示できたのは瓦器1点(2268)である。

出土遺物

瓦器(図2-215 2268)

碗の口縁部の破片である。外面には指頭圧痕が残る。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

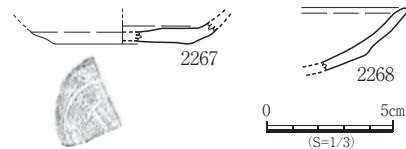


図2-215 SA-209・218出土遺物実測図

SA-219

調査区西端部で検出した南北堀跡(N-4°-E)である。古代の掘立柱建物跡(SB-210)を切る。6間(7.21m)を検出した。柱間寸法は0.95~1.37mで、柱穴は径30~40cmのほぼ円形である。柱径は不明瞭であるが15cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

SA-220

調査区南西部で検出した東西堀跡(N-74°-W)で、中世の溝跡(SD-246・254)を切り、中世の溝跡(SD-249~253)と切り合う。4間(11.70m)を検出した。柱間寸法は2.42~3.10mで、間隔が非常に広く、本来は間に柱穴があった可能性はあるが調査では検出できなかった。柱穴は径33~40cmのほぼ円形である。柱径は15cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器3点、土師器または土師質土器18点、須恵器1点、土師質土器3点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SA-221

調査区西端部で検出した南北堀跡(N-14°-E)である。中世の溝跡(SD-246)を切る。6間(9.53m)を検出した。柱間寸法は1.26~1.90mで、柱穴は径30~44cmのほぼ円形である。柱径は不明瞭であるが15cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。遺物は土師器1点、須恵器1点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SA-222

調査区南西部で検出した東西堀跡(N-73°-W)で、古代の溝跡(SD-214・223)を切る。4間(8.74m)

を検出したが、東端から1間目は柱間の間隔が長く、本来は柱穴があった可能性もある。柱間寸法は1.56～1.91mで、柱穴は径21～32cmのほぼ円形である。柱径は不明瞭であるが15cm前後とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器1点が出土したが、復元図示はできなかった。

表2-14 古代・中世堀・柵列跡計測表

遺構番号	柱穴数(個)	規模		方向 (NはGN)	備考
		全長(m)	柱間寸法(m)		
SA-201	6	3.30	0.63～0.74	N-79°-W	古代
SA-202	6	3.68	0.71～0.76	N-61°-E	〃
SA-203	5	2.96	0.72～0.78	N-61°-E	〃
SA-204	5	5.04	1.15～1.39	N-77°-W	〃
SA-205	13	21.02	1.03～2.25	N-76°-W	〃
SA-206	14	14.76	0.92～1.42	N-87°-E	〃
SA-207	9	12.81	1.31～1.83	N-77°-W	〃
SA-208	6	9.23	1.76～1.94	N-74°-W	中世
SA-209	6	9.78	1.80～2.13	N-79°-W	〃
SA-210	5	5.71	1.28～1.54	N-75°-W	〃
SA-211	7	9.36	1.37～1.70	N-83°-W	〃
SA-212	5	6.96	1.51～2.03	N-81°-W	〃
SA-213	6	9.00	1.28～1.68	N-84°-W	〃
SA-214	5	7.09	1.64～1.94	N-72°-W	〃
SA-215	6	10.20	1.87～2.22	N-12°-E	〃
SA-216	7	9.54	1.24～2.03	N-77°-W	〃
SA-217	4	6.16	1.44～1.50	N-75°-W	〃
SA-218	6	9.02	1.60～2.00	N-14°-E	〃
SA-219	7	7.21	0.95～1.37	N-4°-E	〃
SA-220	5	11.70	2.42～3.10	N-74°-W	〃
SA-221	7	9.53	1.26～1.90	N-14°-E	〃
SA-222	5	8.74	1.56～1.91	N-73°-W	〃

iii 土坑

調査区西半を中心に、32基の土坑を検出した。土坑の平面形は円形、楕円形、隅丸方形、不整形、溝状がみられ、深さは3cm前後のものから1.28mのものまで区々である。

SK-251

調査区東端部で検出した楕円形の土坑である。中世の溝跡(SD-226)に切られる。長径1.19m、短径0.90m、深さ14cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-3°-Eを示す。埋土は極細粒砂混じりの灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト単一である。出土遺物は皆無であった。

SK-252(図2-216)

調査区東部、中世の溝跡(SD-226)の西側で検出した不整形の土坑である。中世の性格不明遺構

3. 遺構と遺物 (2) II区

(SX-202)を切る。長辺3.27 m, 短辺1.60 m, 深さ28cmを測り, 断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-21°-Eを示す。埋土は2層に分層され, 上層は細粒砂混じりの暗褐色(2.5Y4/2)シルト質粘土, 下層は暗褐色(2.5Y4/2)シルト質粘土であった。下層を中心に地山である黄褐色(10YR5/6)シルト質粘土ブロックを含んでいた。遺物は土師器1点, 土師質土器66点, 青磁1点が出土した。そのうち復元図示できたのは, 土師器1点(2269), 土師質土器3点(2270~2272)である。

出土遺物

土師器(図2-226 2269)

高杯の杯底部から脚柱部の破片である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

土師質土器(図2-226 2270~2272)

いずれも杯である。2270・2271は約1/4, 2272は底部約1/2が残存する。胎土は, 2270は精良で極細粒砂から粗粒砂, 2271は中粒砂から極粗粒砂, 2272は極細粒砂から粗粒砂を含む。

SK-253(図2-217)

調査区東部, 中世の溝跡(SD-226)の西側で検出した楕円形の土坑である。長径1.41 m, 短径0.97 m, 深さ17cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-35°-Eを示す。埋土は2層に分層され, 上層は細粒砂混じりの灰黄褐色(10YR4/2~3/2)シルト質粘土, 下層は細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土となっている。遺物は土師質土器17点が出土し, そのうち復元図示できたのは土師質土器2点(2273・2274)である。

出土遺物

土師質土器(図2-226 2273・2274)

2273は杯で, 口縁部から底部にかけての破片である。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

2274は小皿で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は極細粒砂から, わずかに極細粒中礫までを含む。

SK-254

調査区東部南, 弥生の溝跡(SD-201)の南側で検出した楕円形の土坑である。長径2.39 m, 短径2.28 m, 深さ9cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し, 長軸方向はN-36°-Wを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。遺物は弥生土器1点, 土師質土器2点が出土したが,

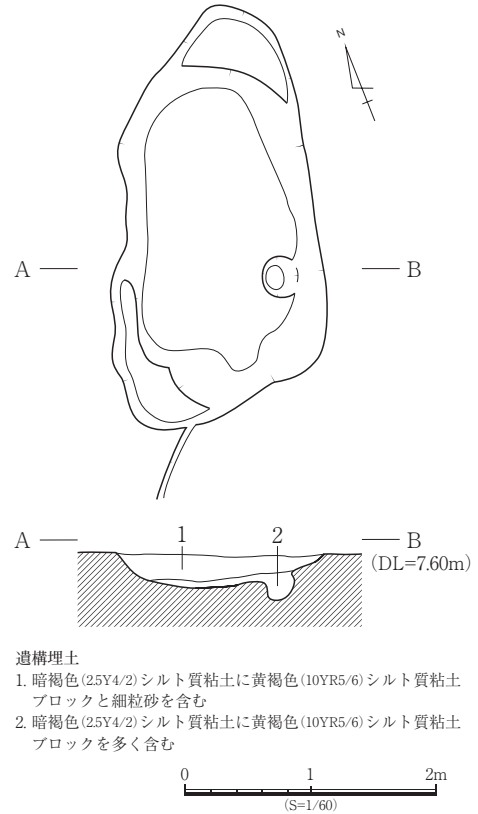


図2-216 SK-252

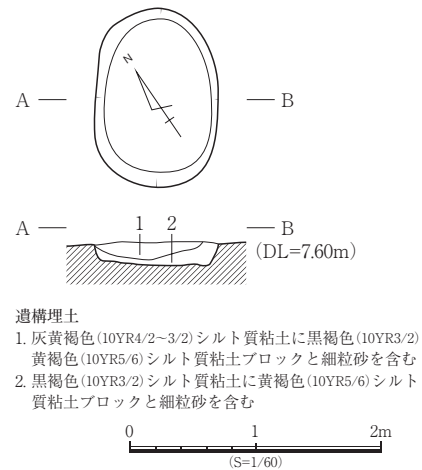


図2-217 SK-253

復元図示できるものはなかった。

SK - 255

調査区中央部南、弥生時代の溝跡 (SD - 202) の西側で検出した楕円形の土坑である。長径 1.29 m, 短径 1.00 m, 深さ 10 cm を測る。断面形は U 字形を呈し, 長軸方向は N - 31° - E を示す。埋土は 3 層に分層され, 上層から黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土, にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土, 黒色 (10YR1.7/1) シルト質粘土となっていた。遺物は土師器または土師質土器の細片が 2 点出土したが, 復元図示はできなかった。

SK - 256

調査区中央部南, 古代の溝跡 (SD - 213) の南側で検出した楕円形の土坑である。長径 2.38 m, 短径 0.89 m, 深さ 32 cm を測る。断面形は逆台形を呈し, 長軸方向は N - 46° - E を示す。埋土は黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土単一である。出土遺物は皆無であった。

SK - 257

調査区中央部北端で検出した楕円形の土坑で, 土坑の北側は調査区外に延びる。土坑の西側は中世の溝跡 (SD - 229) に切られる。長径 1.01 m 以上, 短径 0.97 m 以上, 深さ 6 cm を測り, 断面形は浅い皿状を呈する。長軸方向は N - 7° - W を示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一である。遺物は土師質土器 13 点が出土し, そのうち復元図示できたのは 1 点 (2275) である。

出土遺物

土師質土器 (図 2 - 226 2275)

小皿で, 約 1/3 が残存する。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

SK - 258

調査区中央部北で検出した隅丸方形の土坑で, 中世のピット多数に切られる。長辺 1.12 m, 短辺 0.62 m, 深さ 6 cm を測る。断面形は皿状を呈し, 長軸方向は N - 13° - E を示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土単一である。遺物は弥生土器 1 点, 土師質土器 12 点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 259

調査区中央部北で検出した楕円形の土坑で, 中世のピットと切り合う。長径 0.92 m, 短径 0.82 m, 深さ 4 cm を測る。非常に残存状態が悪く, 断面形は浅い皿状を呈する。長軸方向は N - 31° - E を示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土単一である。遺物は土師質土器 11 点, 瓦質土器 1 点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 260

調査区中央部北で検出した溝状土坑である。中世のピットと切り合う。長辺 2.39 m 以上, 短辺 0.25 m, 深さ 3 cm を測り, 断面形は皿状を呈する。長軸方向は N - 73° - W を示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一である。遺物は土師質土器 3 点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 261

調査区中央部で検出した溝状土坑で, 中世のピットと切り合う。長辺 4.24 m, 短辺 0.47 m, 深さ 10

～13cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-81°-Wを示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土単一で、わずかに炭化物を含んでいた。遺物は土師器1点、土師質土器9点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-262 (図2-218)

調査区中央部北で検出した、やや崩れた楕円形の土坑である。土坑の東はII区東半と西半の境に延びる。中世の溝跡(SD-229)を切る。長径3.45m、短径2.22m以上、深さ1.28mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-6°-Eを示す。埋土は3層に分層され、上層から暗褐色(10YR3/3)～黒褐色(10YR3/2)シルト、暗褐色(10YR3/3)～黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト、黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトとなっている。1層目には細粒中礫から大型大礫、2層目には細粒中礫から小型巨礫、3層目には極細粒砂と大型大礫が混じる。遺物は弥生土器5点、土師器24点、須恵器37点、瓦器10点、土師質土器448点、瓦質土器17点、白磁1点、青磁1点、石製品1点、鉄製品1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2276)、土師質土器3点(2277～2279)、瓦質土器1点(2280)、石製品1点(2281)である。

出土遺物

須恵器 (図2-226 2276)

杯の底部の破片である。胎土は白色極細粒砂から粗粒砂がわずかに混じる。

土師質土器 (図2-226 2277～2279)

2277は小杯で、口縁部から底部までの破片である。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は極細粒砂から粗粒砂をわずかに含む。

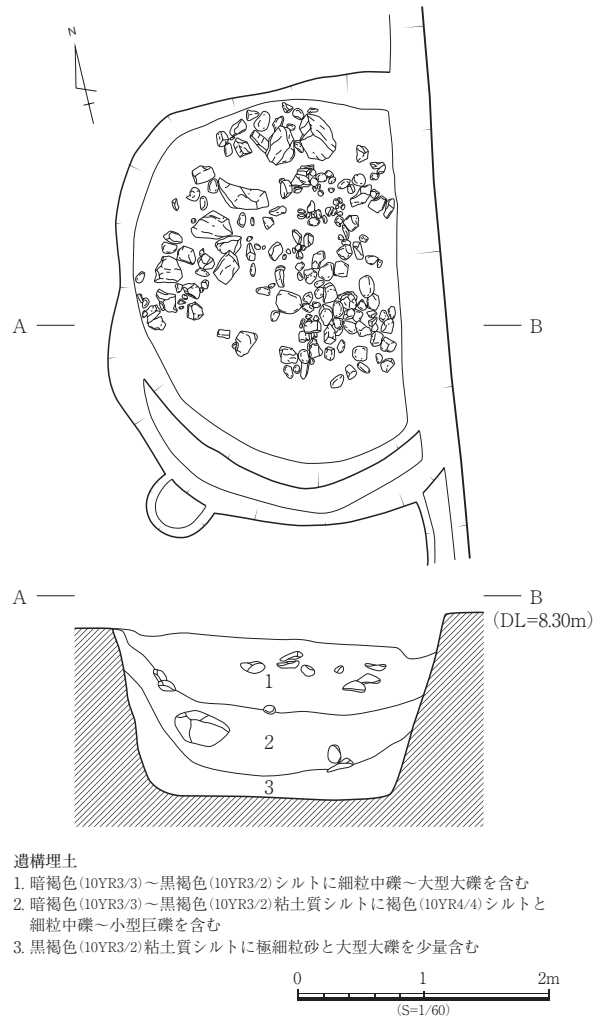
2278・2279はいずれも碗の底部片で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は2278は極細粒砂から粗粒砂、2279は精良で極細粒砂から中粒砂を含む。

瓦質土器 (図2-226 2280)

鍋の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁端部から胴部外面にかけて、コゲの付着がみられた。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

石製品 (図2-226 2281)

滑石製の石鍋の口縁部である。内外面は工具痕が顕著に残る。胴部には孔径5mmの、補修孔とみられる孔が穿たれている。



遺構埋土

1. 暗褐色(10YR3/3)～黒褐色(10YR3/2)シルトに細粒中礫～大型大礫を含む
2. 暗褐色(10YR3/3)～黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに褐色(10YR4/4)シルトと細粒中礫～小型巨礫を含む
3. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに極細粒砂と大型大礫を少量含む

図2-218 SK-262

SK-263 (図2-219)

調査区中央部北端で検出したほぼ円形の土坑である。径1.21～1.31 m、深さ17 cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面で、ピット1個を検出した。埋土は細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、基底面付近には粗粒中礫から小型大礫を含んでいた。また、鉄分の沈着がみられた。遺物は土師器9点、須恵器3点、土師質土器18点、瓦1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2282)、土師質土器1点(2283)である。

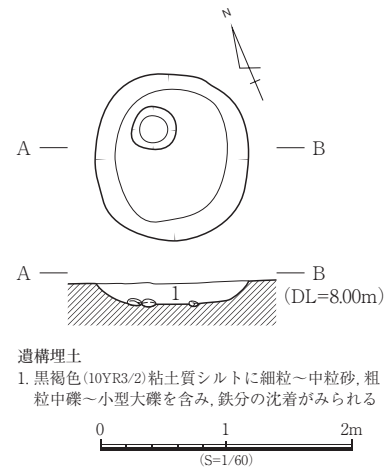


図2-219 SK-263

出土遺物

須恵器 (図2-226 2282)

鉢で、底部のみ残存する。器厚1.3 cmを測り、厚手である。胎土は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

土師質土器 (図2-226 2283)

小皿で、口縁部から底部まで残存する。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、極細粒砂から粗粒砂を含む。

SK-264 (図2-220)

調査区中央部北端で検出したほぼ円形の土坑である。径1.21～1.24 m、深さ12 cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面でピット1個を検出した。埋土は細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、地山である褐色(10YR4/4)粘土質シルトを含んでいた。出土遺物は土師質土器2点(2284・2285)で、以下復元図示を行っている。

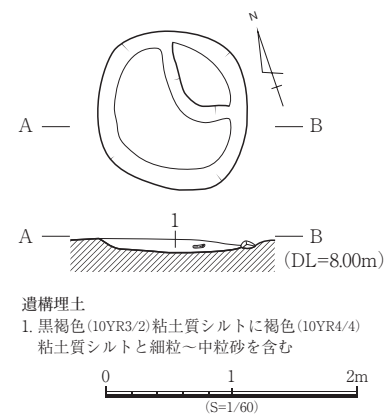


図2-220 SK-264

出土遺物

土師質土器 (図2-226 2284・2285)

いずれも椀である。比較的残存状態が良く、法量的に類似している。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は2284は極細粒砂から粗粒砂、2285は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

SK-265

調査区中央部北で検出したほぼ円形の土坑である。径1.00～1.06 m、深さ9 cmを測り、断面形は浅い逆台形を呈する。埋土は細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。出土遺物は土師器5点、土師器または土師質土器細片10点、須恵器4点、土師質土器2点が出土した。そのうち復元図示できるものはなかった。

SK-266 (図2-221)

調査区中央部北で検出した溝状土坑で、古代の掘立柱建物跡(SB-203)を切り、中世の溝跡(SD-232)に切られる。長辺4.78 m以上、短辺0.35～0.47 m、深さ10～15 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-17°-Eを示す。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト単一

で、暗褐色(10YR3/3)シルトと少量のマンガン粒を含んでいた。遺物は土師器5点、須恵器2点、土師質土器26点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK - 267

調査区中央部で検出した溝状土坑である。土坑の中央部付近は既に削平されているが、本来は一本の溝状土坑であったと考えられる。古代の土坑(SK - 238)を切る。長辺6.21 m、短辺0.17 m、深さ5 cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN - 67° - Wを示す。埋土は極細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルト単一である。出土遺物は皆無であった。

SK - 268

調査区中央部北で検出した溝状土坑である。中世の溝跡(SD - 232)を切る。長辺3.88 m、短辺0.34 m、深さ7 - 13 cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN - 77° - Wを示す。埋土は極細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト単一である。遺物は土師器2点、須恵器4点、土師質土器52点、青磁1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、土師器1点(2286)である。

出土遺物

土師器(図2 - 226 2286)

杯の底部の破片である。底部の切り離しは、回転ヘラ切りによる。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

SK - 269(図2 - 222)

調査区中央部、SK - 268の南側で検出した溝状土坑である。中世の土坑(SK - 271)に切られ、溝跡(SD - 232)を切る。長辺5.21 m、短辺0.53 m、深さ8 - 27 cmを測り、断面形はやや不整形気味のU字形を呈する。長軸方向はN - 80° - Wを示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトを含んでいた。遺物は土師器2点、須恵器2点、瓦器2点、土師質土器25点である。そのうち復元図示できるものはなかった。

SK - 270(図2 - 223)

調査区中央部北で検出した隅丸方形の土坑である。中世のピットを切る。長辺1.56 m、短辺0.93 m、深さ22 cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN - 63° - Wを示す。埋土は極粗粒中礫から大型大礫混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、鉄分の沈着がみられた。出土遺物は須恵器1点(2287)で、以下復元図示を行っている。

出土遺物

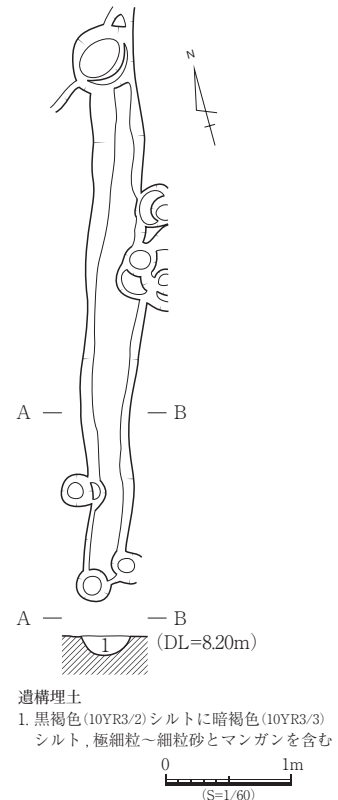


図2 - 221 SK - 266

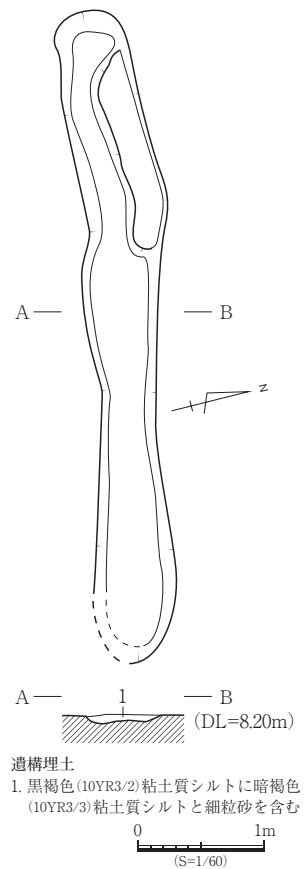


図2 - 222 SK - 269

須恵器(図2-226 2287)

蓋で、つまみのみ残存する。胎土は黒色極細粒砂から粗粒砂を含む。

SK-271(図2-224)

調査区中央部で検出した楕円形の土坑である。中世の土坑(SK-269)を切る。長径1.73m, 短径0.78m, 深さ10cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-16°-Eを示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で, 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトを含んでいた。遺物は須恵器1点, 製塩土器1点, 土師質土器65点, 石製品1点が出土した。そのうち復元図示できたのは, 土師質土器1点(2288)である。

出土遺物

土師質土器(図2-226 2288)

杯で, ほぼ完形である。ロク口水挽き成形で, 底部切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 極細粒砂を含む。

SK-272(図2-225)

調査区中央部, SK-261の南側で検出した, やや崩れた楕円形の土坑である。中世のピットと切り合う。長径1.66m, 短径0.79m, 深さ37cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-2°-Wを示す。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト単一で, 地山である暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトブロックを含んでいた。遺物は土師質土器1点が出土したが, 復元図示はできなかった。

SK-273

調査区中央部, 古代の溝跡(SD-220)の東側で検出した楕円形の土坑である。長径1.34m, 短径0.43m, 深さ5cmを測り, 断面形は浅い皿状を呈する。長軸方向はN-17°-Eを示す。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土単一で, 地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器1点, 土師器3点, 須恵器1点, 土師質土器22点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SK-274

調査区中央部, 古代の溝跡(SD-223)の北側で検出した楕円形の土坑である。長径1.35m, 短径0.56m, 深さ18cmを測り, 断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-7°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。出土遺物は皆無であった。

SK-275

調査区中央部北, 中世の溝跡(SD-239)の北側で検出した楕円形

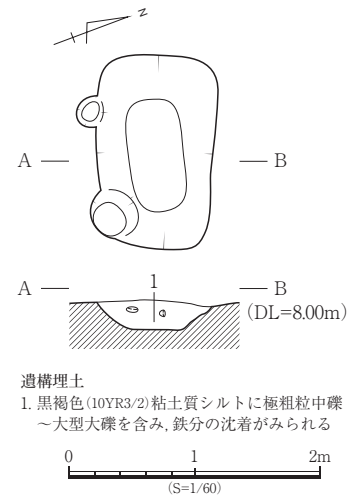


図2-223 SK-270

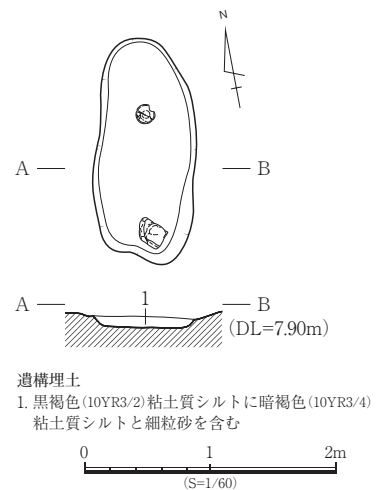


図2-224 SK-271

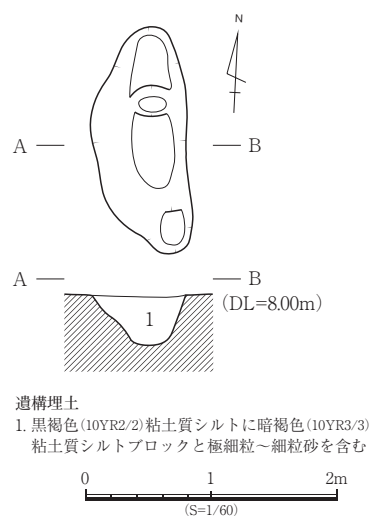


図2-225 SK-272

3. 遺構と遺物 (2) II区

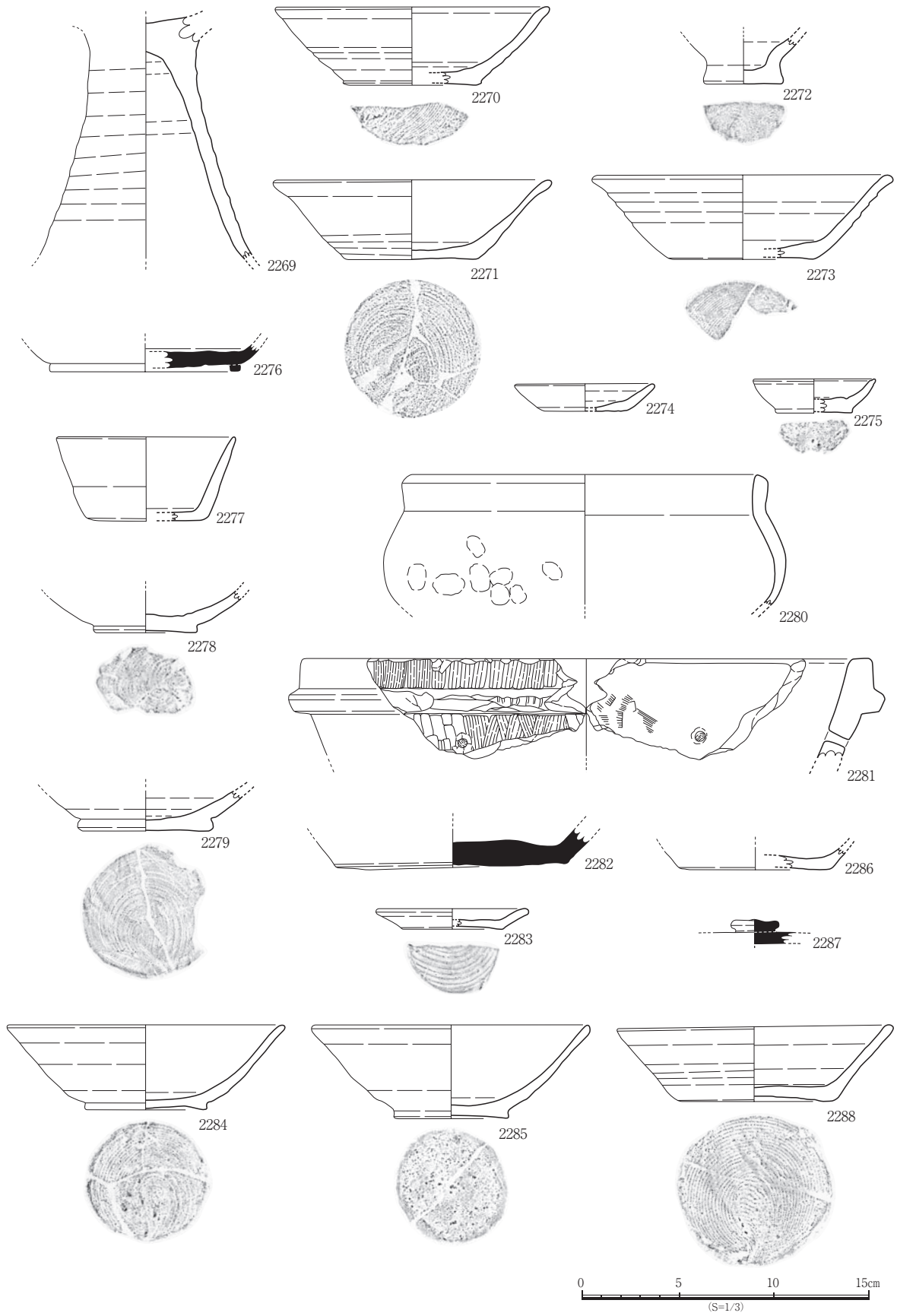


図2-226 SK-252・253・257・262~264・268・270・271出土遺物実測図

の土坑である。長径1.32 m, 短径0.54 m, 深さ26 cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-27°-Eを示す。埋土は極細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。遺物は土師質土器とみられる細片8点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SK-276

調査区中央部で検出した不整形の土坑である。長辺1.83 m, 短辺0.48 m, 深さ8 cmを測り, 断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-72°-Wを示す。埋土は極細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で, わずかに極粗粒中礫を含んでいた。出土遺物は皆無である。

SK-277

調査区西部南で検出した溝状土坑で, 中世の堀跡(SA-216)を切る。長辺3.77 m, 短辺0.41 m, 深さ15 cmを測り, 断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-77°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。出土遺物は皆無である。

SK-278

調査区西部で検出した円形の土坑で, 古代の溝跡(SD-214)を切る。径0.89 m, 深さ8 cmを測り, 断面形は浅いU字形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/3)~暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土単一で, わずかにマンガン粒を含んでいた。遺物は瓦器1点と土師質土器17点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SK-279 (図2-227)

調査区南西部で検出した楕円形の土坑で, 古代のピットを切る。長径1.71 m, 短径0.81 m, 深さ12 cmを測り, 断面形は逆台形を呈し, 長軸方向はN-15°-Eを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で, 粗粒中礫から大型大礫と, 鉄分の沈着がみられた。遺物は土師器12点, 瓦器2点, 土師質土器37点, 瓦質土器2点, 石製品3点が出土した。そのうち復元図示できたのは, 土師質土器2点(2289・2290), 瓦質土器2点(2291・2292), 石製品3点(2293~2295)である。

出土遺物

土師質土器 (図2-228 2289・2290)

いずれも杯で, 2289は約1/3残存する。2290はロク口水挽き成形である。いずれも底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で, 2289は極細粒砂から極粗粒砂, 2290は極細粒砂から粗粒砂を含む。

瓦質土器 (図2-228 2291・2292)

2291は鍋で, 口縁部から胴部約1/4が残存する。外面口縁部から胴部まで煤が付着している。胎土は極細粒砂から細粒中礫を含む。

2292は釜で, 口縁部から胴部の破片である。口縁部外面から内面にかけてはナデ調整, 胴部外面は部分的にヘラナデ調整を行う。口縁端部はハケ目が残る。胴部外面には部分的に煤が付着している。胎土は中粒砂から極粗粒砂を少量含む。

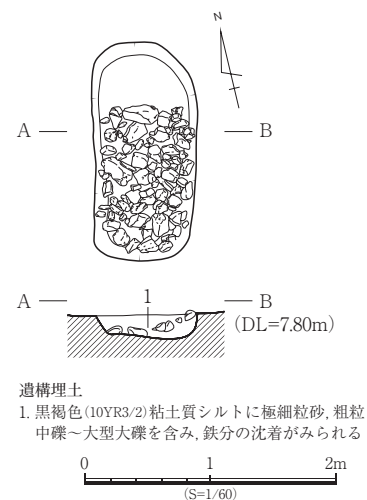


図2-227 SK-279

3. 遺構と遺物 (2) II区

石製品 (図2-228 2293~2295)

いずれも砂岩を利用した砥石で、割り取って手持ち用になっている。2294と2295は、成形を行った際の敲打痕が残る。2293と2294は全体的に赤色に変色しており、火熱を受けた可能性がある。

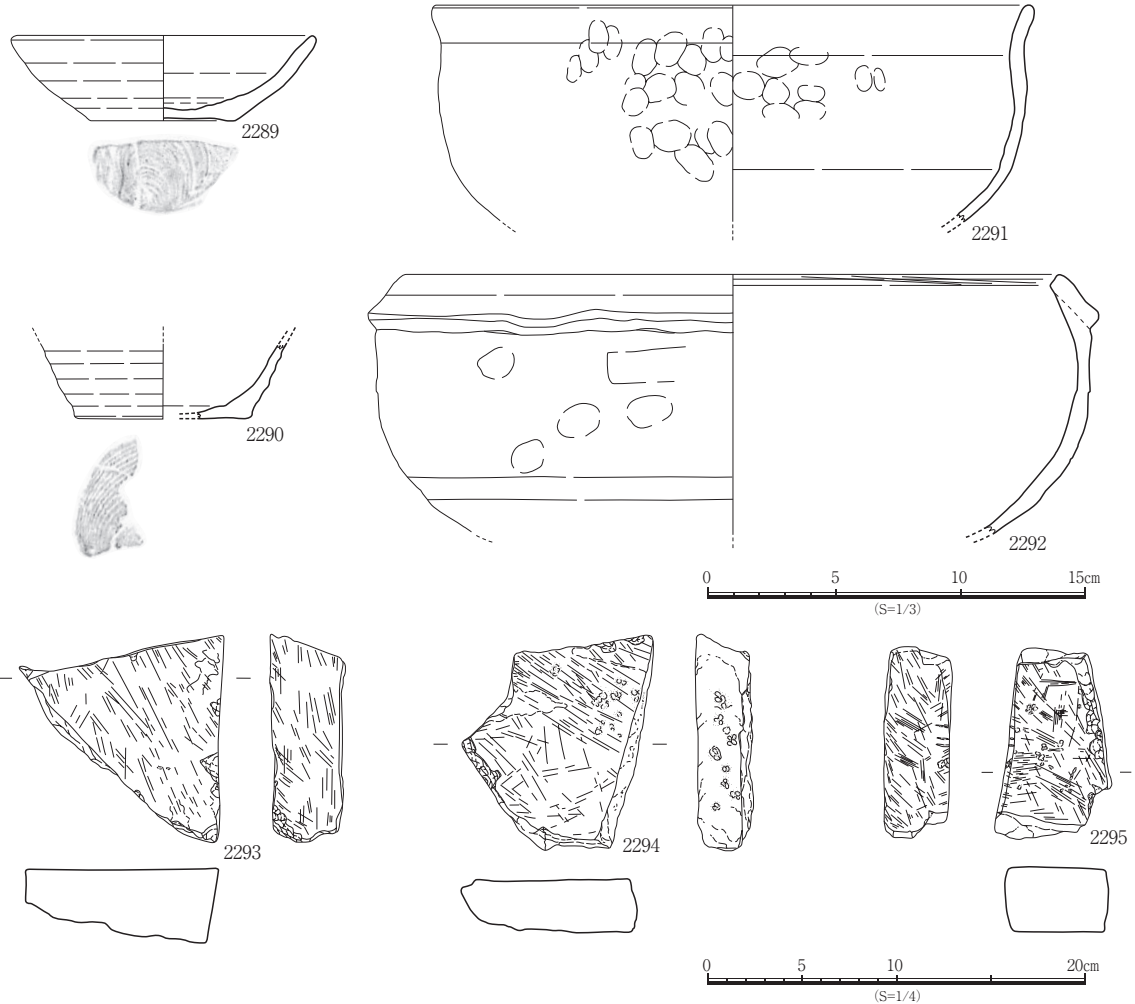


図2-228 SK-279出土遺物実測図

SK-280

調査区西端部で検出した隅丸方形の土坑で、土坑の西肩は調査区外にのびるとみられる。中世のピットと切り合う。残存長1.63 m、短辺1.41 m、深さ36 cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向は不明である。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト単一で、小型大礫から大型大礫を含んでいた。出土遺物は須恵器2点、土師質土器とみられる破片5点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-281

調査区西端部で検出した不整形の土坑で、土坑の西肩は調査区外にのびるとみられる。中世のピットと切り合う。長辺2.29 m以上、短辺1.27 m以上、深さ22 cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向は不明である。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色～暗褐色(10YR3/2～3/3)粘土質シルト単一で、マンガン粒を含んでいた。遺物は土師器1点、土師質土器4点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-282

調査区南西部で検出した隅丸方形の土坑で、中世の溝跡(SD-253)に切られる。残存長1.49m、短辺0.70m、深さ16cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-74°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、地山ブロックとわずかにマンガン粒を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

表2-15 中世土坑計測表

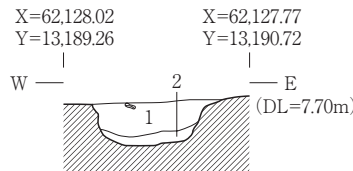
遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-251	楕円形	1.19	0.90	14	N-3°-E	
SK-252	不整形	3.27	1.60	28	N-21°-E	
SK-253	楕円形	1.41	0.97	17	N-35°-E	
SK-254	〃	2.39	2.28	9	N-36°-W	
SK-255	〃	1.29	1.00	10	N-31°-E	
SK-256	〃	2.38	0.89	32	N-46°-E	
SK-257	〃	(1.01)	(0.97)	6	N-7°-W	
SK-258	隅丸方形	1.12	0.62	6	N-13°-E	
SK-259	楕円形	0.92	0.82	4	N-31°-E	
SK-260	溝状	(2.39)	0.25	3	N-73°-W	
SK-261	〃	4.24	0.47	10~13	N-81°-W	
SK-262	楕円形	3.45	(2.22)	128	N-6°-E	
SK-263	円形	1.31	1.21	17	N-0°-E	
SK-264	〃	1.24	1.21	12	N-0°-E	
SK-265	〃	1.06	1.00	9	N-0°-E	
SK-266	溝状	(4.78)	0.35~0.47	10~15	N-17°-E	
SK-267	〃	6.21	0.17	5	N-67°-W	
SK-268	〃	3.88	0.34	7~13	N-77°-W	
SK-269	〃	5.21	0.53	8~27	N-80°-W	
SK-270	隅丸方形	1.56	0.93	22	N-63°-W	
SK-271	楕円形	1.73	0.78	10	N-16°-E	
SK-272	〃	1.66	0.79	37	N-2°-W	
SK-273	〃	1.34	0.43	5	N-17°-E	
SK-274	〃	1.35	0.56	18	N-7°-E	
SK-275	〃	1.32	0.54	26	N-27°-E	
SK-276	不整形	1.83	0.48	8	N-72°-W	
SK-277	溝状	3.77	0.41	15	N-77°-W	
SK-278	円形	0.89	-	8	N-0°-E	
SK-279	楕円形	1.71	0.81	12	N-15°-E	
SK-280	隅丸方形	(1.63)	1.41	36	-	
SK-281	不整形	(2.29)	(1.27)	22	-	
SK-282	隅丸方形	(1.49)	0.70	16	N-74°-W	

iv 溝跡

調査区の西半を中心に、溝跡 29 条を確認した。東西または南北に延びる溝の他、等高線と直交するように、北西から南東に並行して延びる溝も存在する。また、SD - 247 ~ 254 は畝状遺構の可能性もある。

SD - 226 (図2 - 229)

調査区東端部、流路状窪地の東側で検出した南北溝で、中世の土坑 (SK - 251)



遺構埋土
 1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルトに黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルトを含む
 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルトに褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト, 暗灰色 (10YR5/2) シルト質砂と黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルトブロックを含む

0 1 2m
(S=1/60)

図2 - 229 SD - 226

を切る。検出長 47.97

m, 幅0.95 ~ 1.71 m, 深さ16 ~ 47cmを測り、断面形はU字形または地点により逆台形を呈する。基底面は北 (7.498 m) から南 (7.176 m) に向かって傾斜し、主軸方向はN - 15° - Eを示す。埋土は2層に分層され、上層は灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト、下層はにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルトとなっている。下層を中心に、地山である黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルトブロックを含んでいた。遺物は土師器15点、須恵器29点、土師質土器150点、瓦質土器1点、白磁1点、瓦1点、石製品1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、土師器1点 (2296)、須恵器2点 (2297・2298)、石製品1点 (2299) である。

出土遺物

土師器 (図2 - 242 2296)

高杯で、杯底部から脚柱部が残存する。胎土はチャートを含む極細粒砂から極粗粒砂が混じる。

須恵器 (図2 - 242 2297・2298)

2297は杯蓋で、口縁部から天井部までの破片である。擬宝珠様のつまみが付くとみられる。胎土は白色極細粒砂から粗粒砂を含む。

2298は壺の底部とみられる。焼き歪みが著しい。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

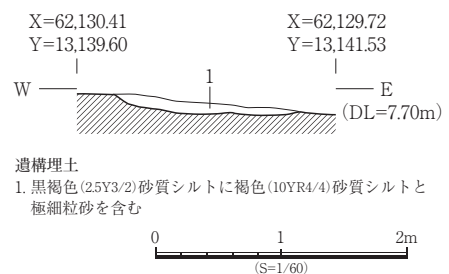
石製品 (図2 - 242 2299)

砂岩を利用した砥石で、両主面と三側面に擦痕が残る。一主面には使用によるとみられる光沢面が広範囲に分布する。火熱を受けたためか、全体的に赤色に変色している。

SD - 227 (図2 - 230)

調査区中央部、流路状窪地の西側で検出した南北溝で、古代の溝跡 (SD - 216)、中世の溝跡 (SD - 228・229) を切る。検出長48.55 m, 幅0.96 ~ 1.48 m, 深さ6 ~ 12cmを測り、断面形はU字形を呈する。

基底面は北 (7.583 m) から南 (7.405 m) に向かって傾斜し、主軸方向はN - 10° - Eを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト単一で、褐色 (10YR4/4) 砂質シルトを含んでいた。遺物は弥生土器9点、土師器15点、須恵器26点、製塩土器1点、黒色土器1点、土師質土器74点、青磁1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点 (2300)、黒色土器1点 (2301)、青磁1点 (2302) である。



遺構埋土
 1. 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルトに褐色 (10YR4/4) 砂質シルトと極細粒砂を含む

0 1 2m
(S=1/60)

図2 - 230 SD - 227

出土遺物

須恵器(図2-242 2300)

杯の底部である。胎土は白色極細粒砂から粗粒砂を含む。

黒色土器(図2-242 2301)

碗の底部の破片である。瓦器の可能性もある。胎土は極細粒砂から粗粒砂を含む。

青磁(図2-242 2302)

碗の口縁部の破片である。胎土は精良である。

SD-228

調査区中央部, 流路状窪地の西側で検出した東西溝で, 中世の溝跡(SD-227)に切られる。溝の西端は調査区外に延びるとみられる。検出長5.29m, 幅0.37m, 深さ19cmを測り, 断面形はU字形を呈する。基底面は西(7.521m)から東(7.429m)に向かって傾斜し, 主軸方向はN-70°-Eを示す。埋土は極細粒砂から極細粒中礫混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土単一である。遺物は土師質土器とみられる細片1点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SD-229(図2-231)

調査区中央部を北西から南東に向かって延びる南北溝で, 弥生時代から古代の溝跡(SD-202・205・206・210), 中世の土坑(SK-257)を切り, 中世の掘立

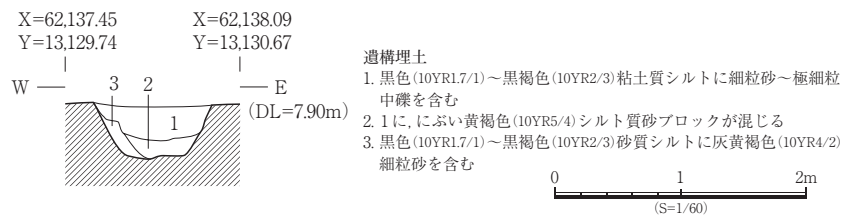


図2-231 SD-229

柱建物跡(SB-212), 土坑(SK-262), 溝跡(SD-227)に切られる。検出長41.96m, 幅0.64~0.98m, 深さ55cmを測り, 断面形はU字形または地点により逆台形を呈する。基底面は北(7.270m)から南(7.195m)に向かって傾斜し, 主軸方向はN-30°-Wを示す。埋土は3層に分層され, 1・2層は細粒砂から極細粒中礫混じりの黒色(10YR1.7/1)~黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトで, 2層にはにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質砂ブロックを含んでいた。3層は黒色(10YR1.7/1)~黒褐色(10YR2/3)砂質シルトとなっている。遺物は土師器または土師質土器細片23点, 須恵器3点, 土師質土器1点が出土した。そのうち復元図示できたのは, 須恵器1点(2303), 土師質土器1点(2304)である。

出土遺物

須恵器(図2-242 2303)

甕の胴部である。胴部内外面にはタタキ目が残る。胎土は白色極細粒砂から粗粒砂を含む。

土師質土器(図2-242 2304)

小皿の口縁部から底部の破片である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

SD-230

調査区中央部で検出した南北溝である。検出長4.54m, 幅0.37m, 深さ5cmを測り, 断面形は浅いU字形を呈する。基底面は南(7.266m)と北(7.240m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向は方眼北を示す。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂単一である。遺物は土師器1点, 須恵器2点, 土師質土器6点

が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SD - 231 (図2 - 232)

調査区中央部を北西から南東に向かって延びる南北溝で、SD - 229 とほぼ並行している。古代の掘立柱建物跡 (SB - 201・202) と溝跡 (SD - 223), 中世の掘立柱建物跡 (SB - 215) を切り、中世の堀跡 (SA - 209) と切り合う。検出長30.04m, 幅0.25~0.47m, 深さ4~7cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。基底面は北 (7.915 m) から南 (7.703 m) に向かって傾斜し、主軸方向はN - 35° - Wを示す。埋土は黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂単一で、わずかに粗粒中礫を含んでいた。出土遺物は須恵器1点, 黒色土器1点, 土師質土器とみられる細片78点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

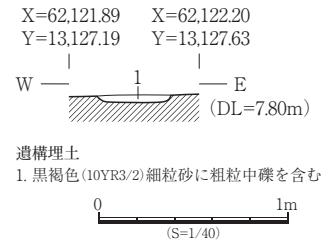


図2 - 232 SD - 231

SD - 232 (図2 - 233)

調査区中央部で検出した南北溝で、検出長からみて溝状土坑の範疇に入る可能性がある。古代の掘立柱建物跡 (SB - 203) と中世の土坑 (SK - 266) を切り、同じ中世の土坑 (SK - 268・269) に切られる。検出長7.89m, 幅0.56~0.87m, 深さ11cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は北 (7.703 m) から南 (7.684 m) に向かって傾斜し、主軸方向はN - 18° - Eを示す。埋土は2層に分層され、上層は極細粒砂から極細粒中礫混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト、下層は極細粒中礫混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトとなっている。下層にはにぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂を含んでいた。遺物は土師器5点, 須恵器4点, 黒色土器2点, 瓦器2点, 東播系須恵器1点, 土師質土器196点, 瓦質土器2点, 瓦1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、東播系須恵器1点 (2305) と瓦1点 (2306) である。

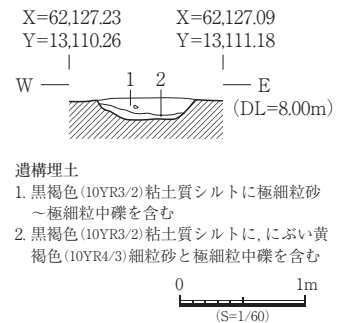


図2 - 233 SD - 232

出土遺物

東播系須恵器 (図2 - 242 2305)

鉢の口縁部の破片である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含み、わずかに中粒中礫がみられる。

瓦 (図2 - 242 2306)

平瓦の破片である。胎土は軟質で、極細粒砂から粗粒砂を含む。

SD - 233 (図2 - 234)

調査区中央部南で検出した南北溝で、古代の土坑 (SK - 242), 溝跡 (SD - 214) を切る。検出長11.14m, 幅0.25~0.51m, 深さ6~9cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は南 (7.776 m) と北 (7.763 m) ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN - 14° - Eを示す。埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一で、地山である褐色 (10YR4/4) 粘土質シルトを含んでいた。遺物は須恵器1点, 土師質土器13点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

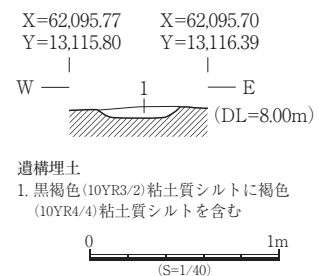


図2 - 234 SD - 233

SD - 234 (図2 - 235)

調査区中央部南で検出した南北溝で、古代の土坑 (SK - 242), 溝跡 (SD

-214)を切り、中世の溝跡(SD-235)に切られる。検出長11.47m、幅0.37m、深さ12cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は南(7.835m)から北(7.724m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-13°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。遺物は須恵器1点、製塩土器1点、土師質土器18点、青磁1点が出土し、そのうち復元図示できたのは青磁1点(2307)である。

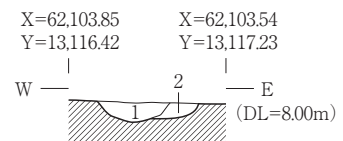
出土遺物

青磁(図2-242 2307)

皿の底部片である。底部内面はカキ目を施し施釉する。胎土は精良である。

SD-235(図2-235)

調査区中央部南で検出した南北溝で、古代の土坑(SK-242)、古代から中世の溝跡(SD-214・215・223・234)を切り、中世の溝跡(SD-238)に切られる。検出長22.64m、幅0.32~0.63m、深さ4~16cmを測り、断面形はU字形または地点により逆台形を呈する。基底面は南(7.811m)から北(7.488m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-15°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、褐色(10YR4/4)粘土質シルトを含んでいた。遺物は須恵器2点、製塩土器1点、土師質土器28点が出土したが、復元図示できるものはなかった。



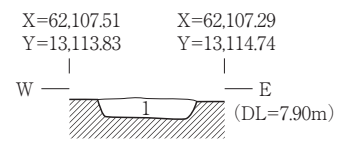
遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに褐色(10YR4/4)粘土質シルトを含む(SD-235)
2. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト(SD-234)

0 1m
(S=1/60)

図2-235 SD-234・235

SD-236(図2-236)

調査区中央部南で検出した南北溝で、古代の土坑(SK-243)、溝跡(SD-214・215)を切り、中世の溝跡(SD-238)に切られる。検出長18.69m、幅0.53~0.78m、深さ16~19cmを測り、断面形はU字形または地点により逆台形を呈する。基底面は南(7.770m)から北(7.654m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-13°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。遺物は土師器5点、須恵器4点、土師質土器103点が出土したが、復元図示できるものはなかった。



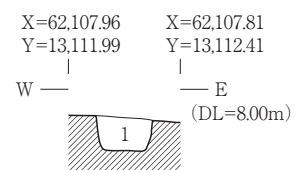
遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに褐色(10YR4/4)粘土質シルトを含む

0 1m
(S=1/60)

図2-236 SD-236

SD-237(図2-237)

調査区中央部南で検出した南北溝で、古代の土坑(SK-243)、溝跡(SD-214~216・218)、中世の堀跡(SA-212)を切り、中世の溝跡(SD-238)に切られる。検出長19.77m、幅0.29~0.72m、深さ13~22cmを測り、断面形はU字形または地点により逆台形を呈する。基底面は南(7.714m)から北(7.618m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-13°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一である。遺物は土師器11点、須恵器8点、製塩土器1点、瓦器1点、土師質土器155点、瓦質土器1点、土製品1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、須恵器1点(2308)のみである。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに褐色(10YR4/4)粘土質シルトを含む

0 1m
(S=1/40)

図2-237 SD-237

出土遺物

須恵器(図2-242 2308)

杯身の口縁部の破片である。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

SD - 238

調査区中央部南で検出した東西溝で、中世の溝跡 (SD - 235 ~ 237) を切る。検出長 13.64 m, 幅 0.13 ~ 0.18 m, 深さ 11 cm を測り, 断面形は U 字形を呈する。基底面は西 (7.861 m) と東 (7.861 m) では同じ高さであった。主軸方向は N - 76° - W を示す。埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一である。遺物は須恵器 1 点, 土師質土器 7 点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 239

調査区中央部北で検出した南北溝で, 古代の掘立柱建物跡 (SB - 204) と中世の溝跡 (SD - 240) を切る。検出長 5.11 m, 幅 0.48 ~ 0.62 m, 深さ 7 cm を測り, 断面形は浅い U 字形を呈する。基底面は北 (7.840 m) から南 (7.770 m) に向かって傾斜し, 主軸方向は N - 11° - E を示す。埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一で, 地山ブロックを含んでいた。遺物は土師器 1 点, 土師質土器 6 点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 240 (図 2 - 238)

調査区中央部北で検出した東西溝で, 中世の溝跡 (SD - 239) に切られる。検出長 8.13 m, 幅 0.59 ~ 0.69 m, 深さ 9 ~ 22 cm を測り, 断面形は U 字形を呈する。基底面は東 (7.850 m) から西 (7.764 m) に向か

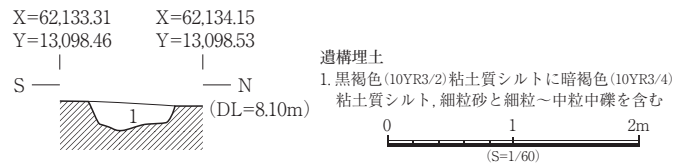


図 2 - 238 SD - 240

て傾斜し, 主軸方向は N - 80° - W を示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一で, 地山である暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルトブロックと細粒中礫から中粒中礫を含んでいた。遺物は土師器 1 点, 須恵器 2 点, 土師質土器 17 点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 241 (図 2 - 239)

調査区中央部北で検出した南北溝で, 中世の溝跡 (SD - 242) に接続する。同一の遺構の可能性もある。検出長 3.01 m, 幅 0.42 m, 深さ 9 cm を測り, 断面形は浅い U 字形を呈する。基底面は南 (7.749 m) と北 (7.740 m) ではほぼ同じ高さであった。主軸方向は N - 13° - E を示す。埋土は細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一である。遺物は弥生土器 10 点, 瓦器 1 点, 土師質土器 2 点が出土したが, 復元図示できるものはなかった。

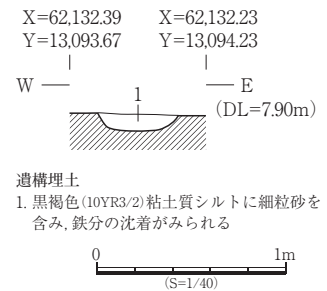


図 2 - 239 SD - 241

SD - 242 (図 2 - 240)

調査区中央部北で検出した東西溝で, 中世の溝跡 (SD - 241) に接続する。同一の遺構の可能性もある。検出長 6.64 m, 幅 0.66 m, 深さ 12 cm を測り, 断面形は U 字形を呈する。基底面は西 (7.740 m) と東 (7.680 m) に向かって傾斜し, 主軸方向は N - 76° - W を示す。埋土は極細粒砂から細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一で, 地山ブロックを含んでいた。

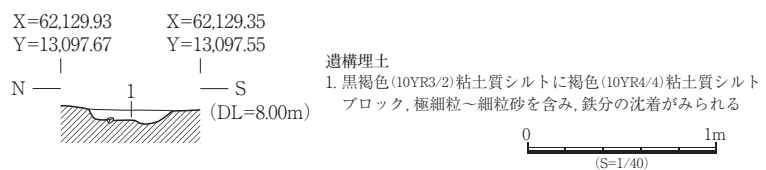
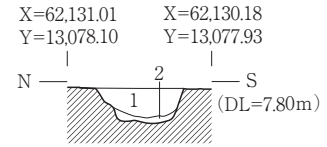


図 2 - 240 SD - 242

遺物は須恵器1点、瓦器1点、土師質土器22点、白磁1点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SD-243

調査区西部北で検出した南北溝で、中世の溝跡(SD-244)に切られる。検出長6.95m、幅0.43~0.50m、深さ18cmを測り、断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.733m)から南(7.690m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-15°-Eを示す。埋土は細粒砂から中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト単一である。遺物は弥生土器4点、土師器2点、須恵器1点、瓦器1点、土師質土器26点が出土したが、復元図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)シルトに鉄分の沈着がみられる
 2. 黒褐色(10YR3/2)シルトに、ふい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトを含む
-

図2-241 SD-244

SD-244 (図2-241)

調査区西部北で検出した東西溝で、溝の西端は調査区外に延びる。古代の掘立柱建物跡(SB-209・210)、土坑(SK-247)を切り、中世の溝跡(SD-243)を切る。検出長35.81m、幅0.53~1.33m、深さ13~29cmを測り、

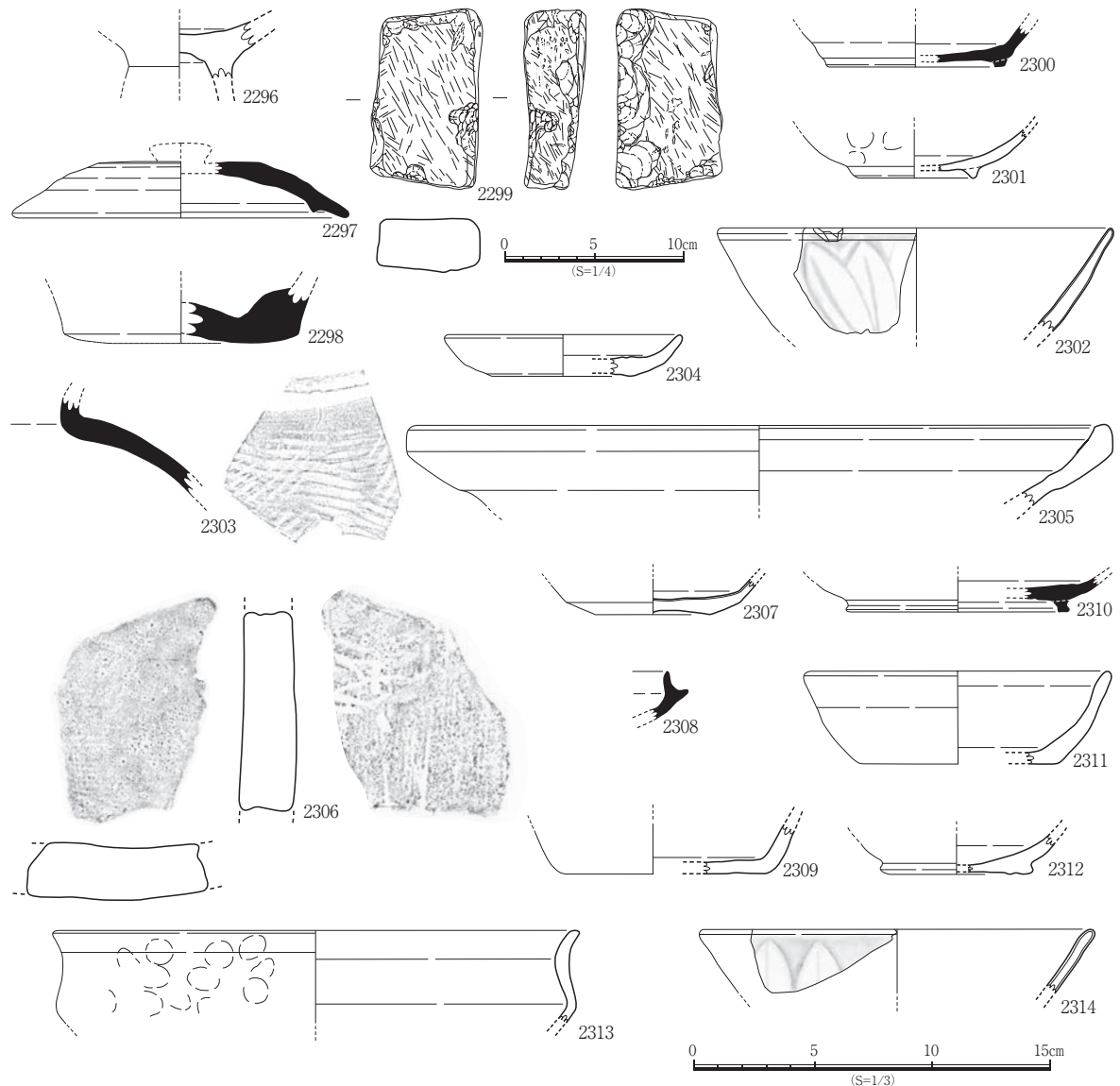


図2-242 SD-226・227・229・232・234・237・244 出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (2) II区

断面形はU字形または地点により逆台形を呈する。基底面は東(7.658 m)から西(7.392 m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-77°-Wを示す。埋土は2層に分層され、上層は黒褐色(10YR3/2)シルト、下層は黒褐色(10YR3/2)シルトに、地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器5点、土師器15点、須恵器27点、製塩土器1点、黒色土器2点、瓦器1点、土師質土器64点、瓦質土器3点、白磁2点、青磁2点、土製品1点、石製品1点が出土した。そのうち復元図示できたのは、土師器1点(2309)、須恵器1点(2310)、土師質土器2点(2311・2312)、瓦質土器1点(2313)、青磁1点(2314)である。

出土遺物

土師器(図2-242 2309)

杯の底部の破片である。胎土は極細粒砂から中粒砂を含む。

須恵器(図2-242 2310)

杯の底部の破片で、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土は白色極細粒砂から粗粒砂を含む。

土師質土器(図2-242 2311・2312)

2311は杯で、口縁部から底部の破片である。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2312は椀で、底部の破片である。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

瓦質土器(図2-242 2313)

鍋の口縁部から体部の破片である。外面には煤が付着する。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。

青磁(図2-242 2314)

碗の口縁部である。釉は厚めで、胎土は精良である。

SD-245

調査区西部で検出した南北溝で、中世の掘立柱建物跡(SB-228)と切り合う。検出長6.51 m、幅0.35~0.48 m、深さ3 cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。後世の削平のためか、非常に残存状態が悪い。基底面は北(7.760 m)と南(7.760 m)でほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-17°-Eを示す。埋土は暗褐色(10YR4/6)シルト単一である。遺物は土師質土器2点、瓦質土器1点が出土したが、復元図示はできなかった。

SD-246

調査区西南部で検出した東西溝で、溝の西端は調査区外に延びる。古代の溝跡(SD-214・223)、中世の溝跡(SD-247~254)を切り、中世の堀跡(SA-220・221)に切られる。検出長23.33 m、幅0.19~0.30 m、深さ3~9 cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。基底面は東(7.717 m)から西(7.613 m)に向かって傾斜し、主軸方向はN-67°-Wを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土単一で、地山ブロックを含んでいた。出土遺物は土師器1点、須恵器2点、土師質土器29点、青磁碗1点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SD-247(図2-243)

調査区西南部で検出した南北溝で、古代の溝跡(SD-223)を切り、中世の溝跡(SD-246)に切られる。検出長6.40 m、幅0.33~0.40 m、深さ5 cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。基底面は北(7.710 m)

と南(7.700 m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-11°-Eを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は土師質土器1点が出土したが、図示には至らなかった。

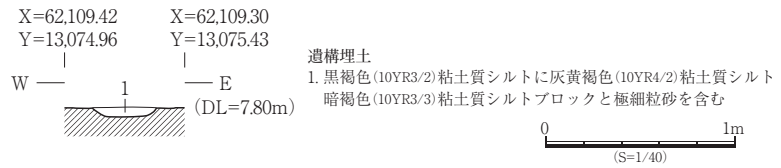


図2-243 SD-247

SD-248 (図2-244)

調査区西南部で検出した南北溝で、古代の溝跡(SD-223)を切り、中世の掘立柱建物跡(SB-229)、溝跡(SD-246)に切られる。検出長5.10 m、幅0.28 m、深さ4

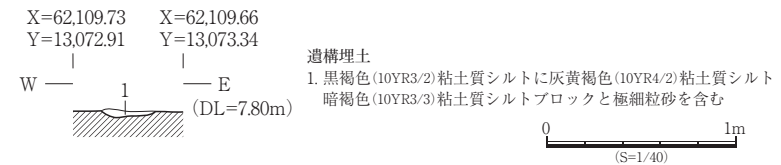


図2-244 SD-248

cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。基底面は北(7.690m)と南(7.670m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-10°-Eを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、地山ブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD-249 (図2-245)

調査区西南部で検出した南北溝で、中世の溝跡(SD-246)に切られ、掘立柱建物跡(SB-229)、塀跡(SA-220)と切り合う。検出長3.36 m、幅0.32 m、深

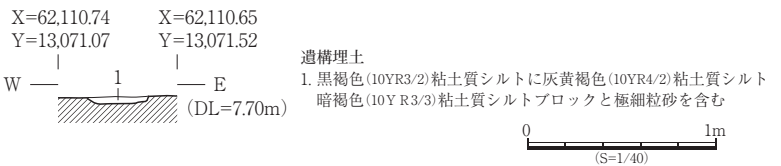


図2-245 SD-249

さ4cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。基底面は南(7.670m)と北(7.660m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-12°-Eを示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は弥生土器2点、土師質土器2点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SD-250 (図2-246)

調査区西南部で検出した南北溝で、中世の溝跡(SD-246)に切られ、掘立柱建物跡(SB-229・231)、塀跡(SA-220)と切り合う。検出長8.37 m、幅0.21~0.43 m、深さ5cmを測り、断面形は非常に浅いU字形を呈する。基底面は南(7.683 m)と北(7.680 m)ではほぼ同じ高さであった。主軸方向はN-12°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト単一で、灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトとマンガン粒を含んでいた。遺物は弥生土器2点、土師質土器2点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

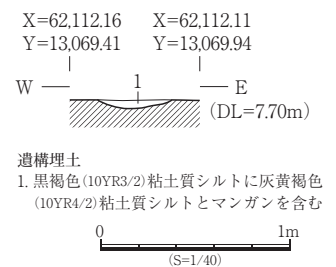


図2-246 SD-250

SD-251 (図2-247)

調査区西南部で検出した南北溝で、中世の溝跡(SD-246)に切られ、掘立柱建物跡(SB-230・231)、塀跡(SA-220)と切り合う。検出長4.81m、幅0.23~0.31m、深さ9cmを測り、断面形はU字形を呈する。

3. 遺構と遺物 (2) II区

基底面は南 (7.680 m) と北 (7.660 m) ではほぼ同じ高さであった。主軸方向は $N-14^{\circ}-E$ を示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は土師質土器 4 点が出土しているが、復元図示できるものはなかった。

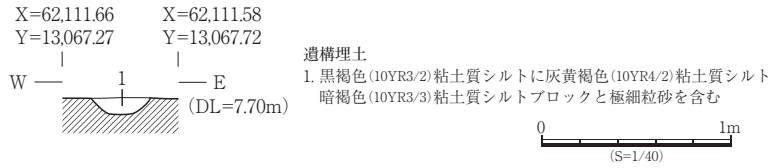


図2-247 SD-251

SD-252 (図2-248)

調査区西南部で検出した南北溝で、中世の溝跡 (SD-246) に切られ、塀跡 (SA-220) と切り合う。検出長 8.34 m、幅 0.28 ~ 0.41 m、深さ 3 ~ 8 cm を測り、断面形

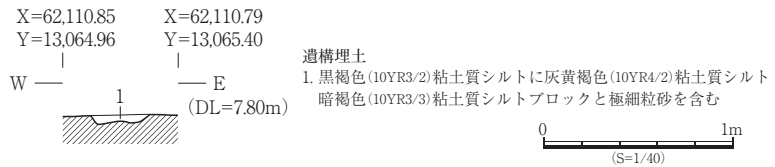


図2-248 SD-252

は浅いU字形を呈する。基底面は南 (7.686 m) から北 (7.650 m) に向かってわずかに傾斜し、主軸方向は $N-9^{\circ}-E$ を示す。埋土は極細粒砂混じりの黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一で、地山ブロックを含んでいた。遺物は土師質土器 1 点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SD-253 (図2-249)

調査区西南部で検出した南北溝で、中世の土坑 (SK-282) を切り、中世の溝跡 (SD-246) に切られる。また中世の塀跡 (SA-220) と切り合う。検出長 6.65 m、幅 0.32 ~ 0.37 m、深さ 10 ~ 33 cm を測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は南 (7.713 m) から北 (7.672 m) に向かってわずかに傾斜し、主軸方向は $N-9^{\circ}-E$ を示す。埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一で、地山であるにぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルトブロックを含んでいた。出土遺物は皆無である。

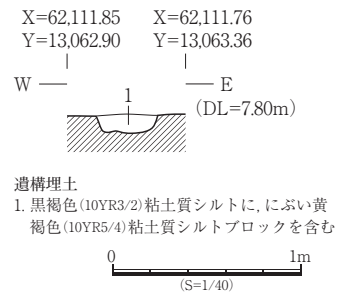


図2-249 SD-253

SD-254 (図2-250)

調査区西南部で検出した南北溝で、中世の塀跡 (SA-220)、溝跡 (SD-246) に切られる。検出長 9.26 m、幅 0.35 ~ 0.47 m、深さ 6 ~ 18 cm を測り、断面形はU字形を呈する。基底面は南 (7.599 m) と北 (7.595 m) ではほぼ同じ高さであった。主軸方向は $N-10^{\circ}-E$ を示す。埋土は黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト単一で、地山であるにぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルトブロックを含んでいた。遺物は弥生土器 3 点、土師質土器 3 点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

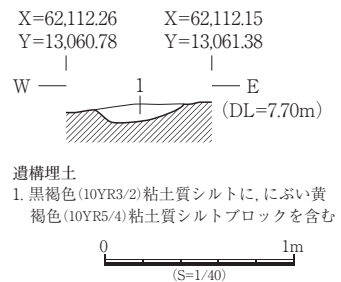


図2-250 SD-254

vi 性格不明遺構

調査区東南部で1基確認した。

SX-202

調査区東部、SK-252の南で検出した不整形の遺構である。中世の土坑 (SK-252) に切られる。長

辺3.10 m, 短辺1.72 m, 深さ4cmを測り, 断面形は皿状を呈する。長軸方向はN-6°-Eを示す。後世の削平のためか非常に浅く, 自然の窪地の可能性も考えられる。埋土は暗褐色(10YR3/3)砂質シルト単一である。出土遺物は皆無である。

viiピット

調査区西半を中心に, 2,655個を検出した。そのうち図示できる遺物が出土したピット(P-225~298)について, ここで取り上げる。これらのピットは径18~73cmを測るが, 概ね20~30cm前後である。埋土は黒褐色(10YR3/2)~暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトからシルト質粘土が主体となる。

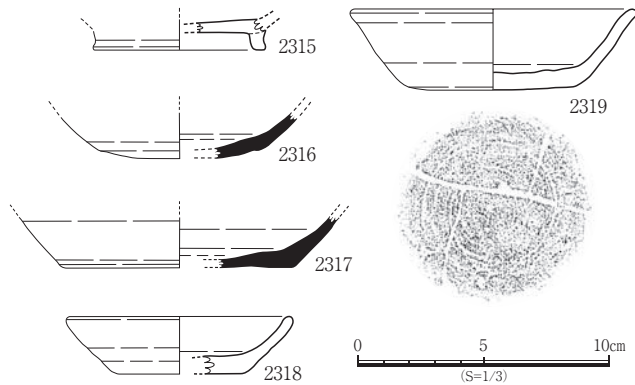


図2-251 ピット出土遺物実測図(土師器, 須恵器, 土師質土器)

出土遺物

土師器(図2-251 2315)

杯の底部の破片である。胎土は極細粒砂から細粒砂を含む。(P-253から出土)

須恵器(図2-251 2316・2317)

いずれも杯で, 底部の破片である。胎土は, 2316は極細粒砂から極粗粒砂, 2317は極細粒砂から中粒砂を含む。(2316はP-272, 2317はP-267から出土)

瓦器(図2-252 2320~2328)

いずれも椀で, 2320~2322は口縁部から体部, 2324は体部から底部, 2325~2328は底部の破片である。2323は約1/4が残存する。2320~2322は器高が4cm以上になるとみられる。2325~2328の高

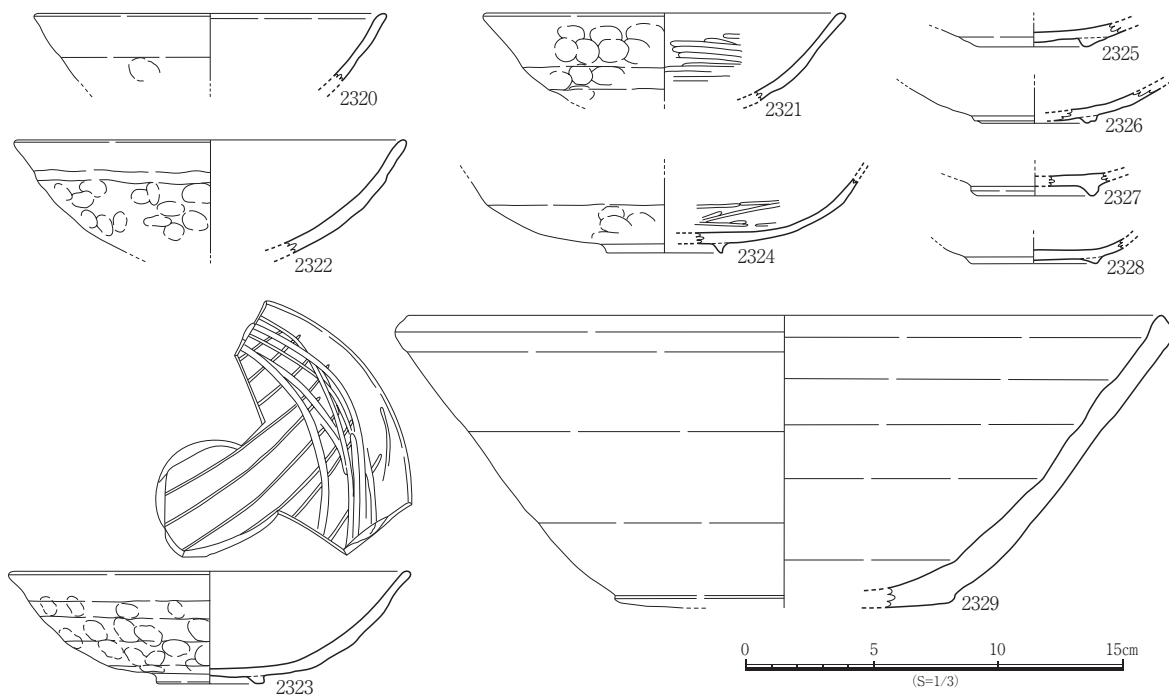


図2-252 ピット出土遺物実測図(瓦器, 東播系須恵器)

台は退化している。全体的に摩耗が著しく、内面のミガキ調整は2323と2324にしかみられなかった。いずれも底部内面に平行線状、その周りに圏線状の暗文を施す。胎土は極細粒砂から中粒砂を含むものが多い。(2320はP-277, 2321はP-272, 2322はP-282, 2323・2324はP-278, 2325はP-286, 2326はP-231, 2327はP-256, 2328はP-273から出土)

東播系須恵器(図2-252 2329)

片口鉢の口縁部から底部の破片である。注口部は残存しておらず、復元はできなかった。胎土はチャートを含む極細粒砂から極細粒中礫を含む。(P-271から出土)

土師質土器(図2-251・253~256 2318・2319・2330~2400)

2318・2319・2359は小杯である。2318と2319の底部の切り離しは、回転ヘラ切り、2359は回転糸切りによる。胎土は、2318は極細粒砂から極粗粒砂, 2319は中粒砂, 2359は極細粒砂から中粒砂を含む。

2330~2358, 2360~2363は杯である。いずれも底部の切り離しは回転糸切りによる。2330~2333は口縁部から体部の破片, 2334~2352は体部から底部の破片, 2353~2363は口縁部から底部まで残存する。小片については器形が不明瞭なため、椀が含まれている可能性もある。胎土は2330・2335・2336・2339・2342・2344・2345・2347~2356・2361・2362が比較的精良で、極細粒砂から中粒砂を含む。その他の杯は、極細粒砂から極粗粒砂を含む。

2364~2389は小皿である。2364が底部の破片の他は、口縁部から底部まで残存する。いずれも底部の切り離しは回転糸切りによるとみられる。2367~2370は非常に器壁が厚く、口縁部は直線的に立ち上がる。2373~2376は口縁部が外反する。胎土は2365~2367, 2370~2372, 2374・2375・2378,

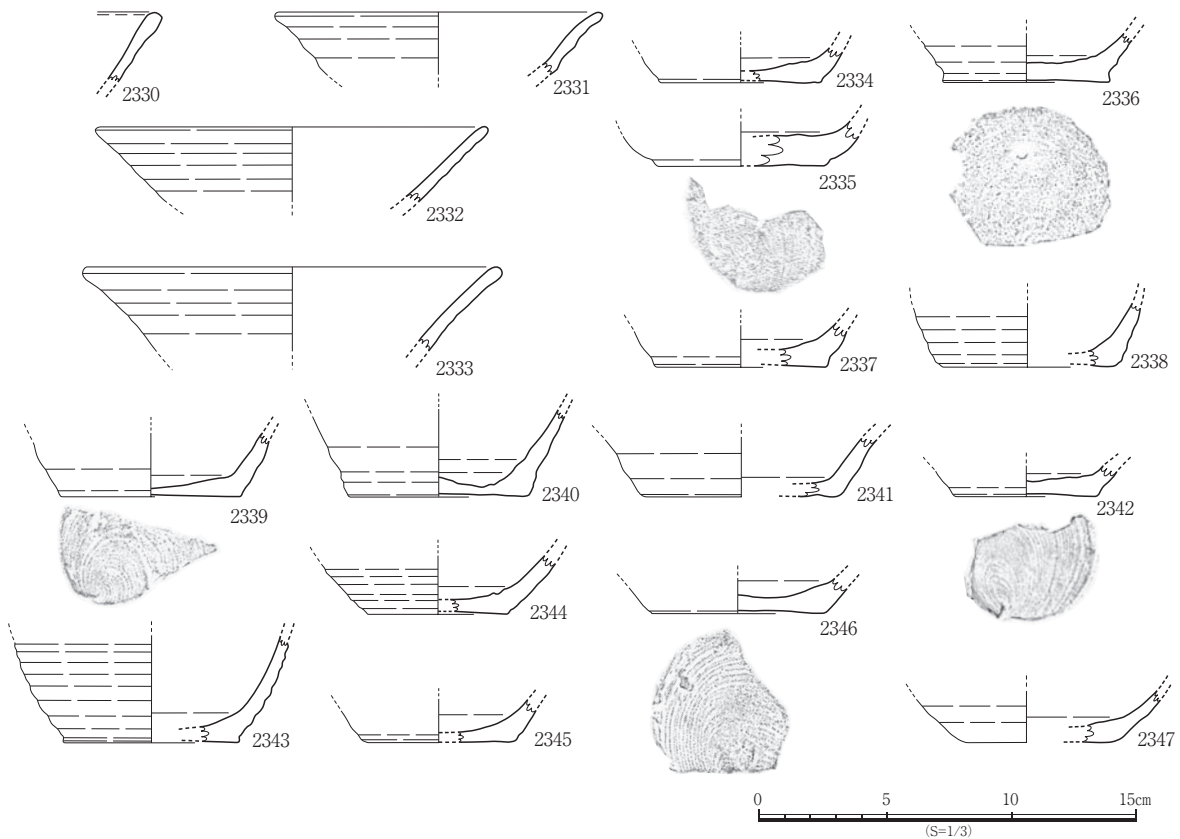


図2-253 ピット出土遺物実測図(土師質土器1)

2378～2388は精良で、極細粒砂から中粒砂をわずかに含む。その他は極細粒砂から極粗粒砂を含み、2381は細粒中礫がみられた。

2390～2400は椀である。2390～2394は口縁部の破片、2395～2399は底部の破片である。2400はほぼ完形である。胎土は、2390、2394～2397、2399は精良で、極細粒砂から中粒砂を含む。その他のものは、極細粒砂から極粗粒砂を含む。(2318はP-235、2319はP-279、2330・2372・2373・2376はP-266、2331はP-244、2332はP-260、2333はP-231、2334・2369はP-243、2335はP-252、2336はP-229、2337はP-258、2338はP-240、2339はP-234、2340・2366はP-296、2341はP-230、2342はP-236、2343はP-274、2344はP-255、2345はP-268、2346・2398はP-280、2347はP-233、2348はP-283、2349はP-276、2350はP-282、2351はP-248、2352はP-281、2353はP-269、2354はP-251、2355はP-254、2356・2357・2367・2368はP-292、2358はP-298、2359はP-297、2360はP-294、2361はP-262、2362はP-228、2363・2393はP-289、2364はP-241、2365・2390はP-225、2370はP-242、2371はP-232、2374はP-267、2375はP-290、2377はP-282、2378はP-275、2379はP-247、2380・2381はP-270、2382はP-246、2383はP-239、2384・2385はP-227、2386はP-291、2387はP-293、2388はP-

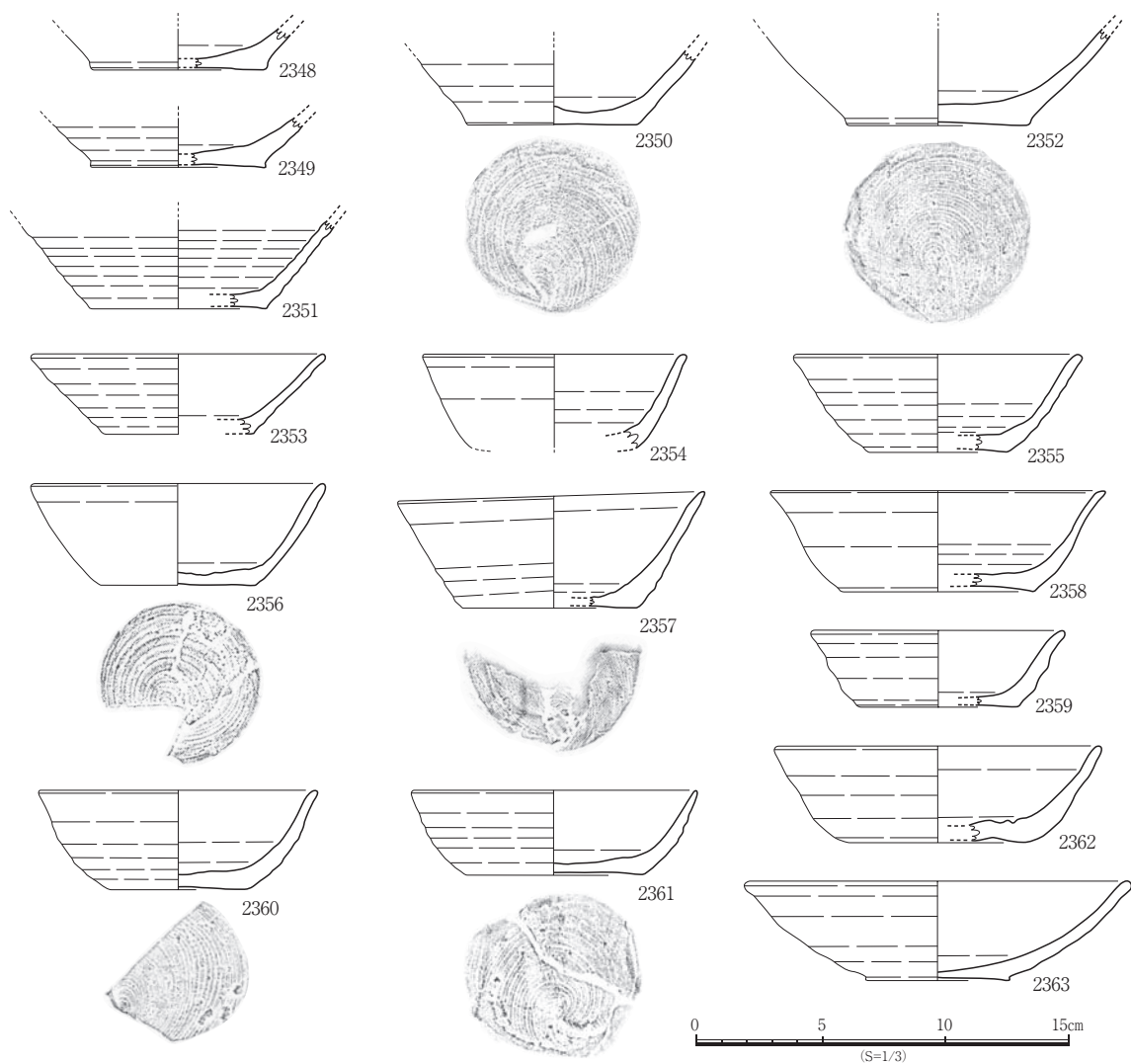


図2-254 ビット出土遺物実測図(土師質土器2)

3. 遺構と遺物 (2) II区

238, 2389はP-250, 2391はP-285, 2392はP-287, 2394はP-264, 2395はP-265, 2396はP-263, 2397はP-261, 2399はP-259, 2400はP-284から出土)

瓦質土器(図2-257 2401・2402)

2401は釜で、口縁部から胴部の破片である。外面は鏝から胴部にかけて、コゲが付着する。胎土は極細粒砂から極細粒中礫を含む。

2402は足釜で、脚の間隔から三本脚であったと考えられる。下胴部にはコゲが付着している。胎土は極細粒砂から極粗粒砂を含む。(2401はP-226, 2402はP-295から出土)

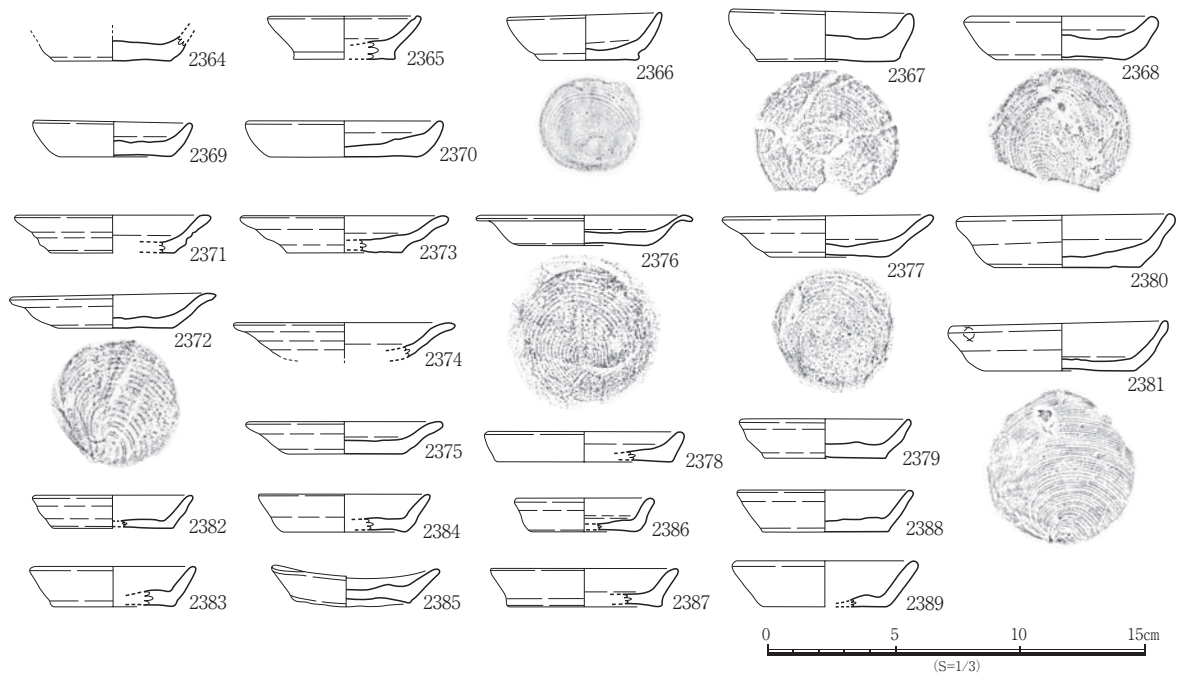


図2-255 ピット出土遺物実測図(土師質土器3)

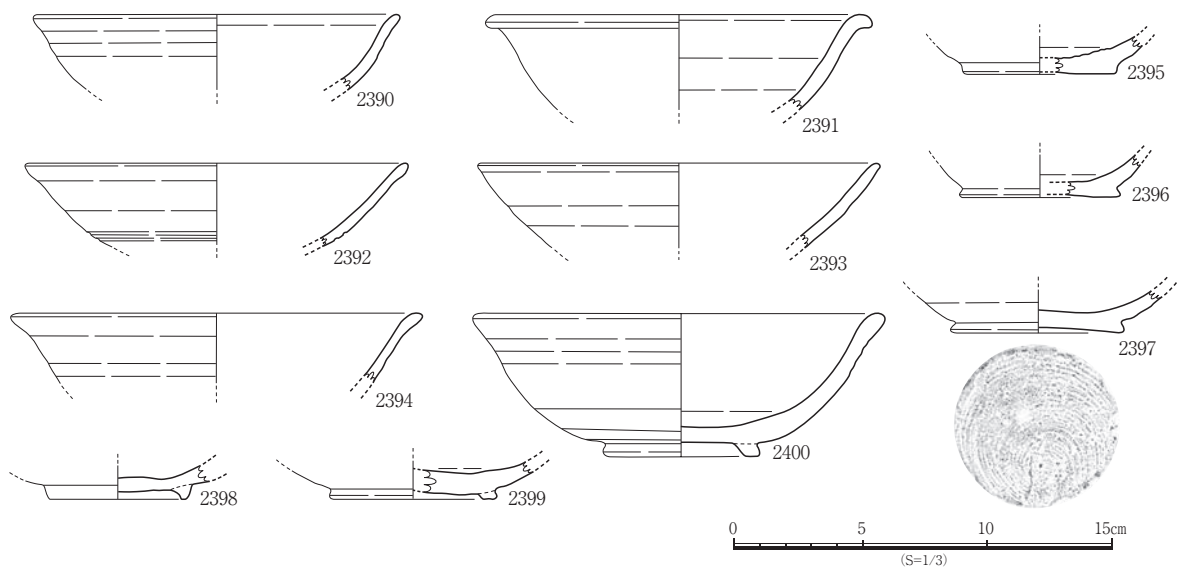


図2-256 ピット出土遺物実測図(土師質土器4)

白磁(図2-257 2403)

碗の底部片である。内面のみ施釉し、高台部は露胎である。胎土は精良である。(P-257から出土)

青磁(図2-257 2404~2406)

いずれも碗で、2404は体部の破片、2405と2406は体部から底部の破片である。外面は鎬蓮弁文を施文する。胎土はいずれも精良であるが、2406は断面に気泡状の空洞がみられる。(2404はP-249, 2405はP-245, 2406はP-288から出土)

石製品(図2-257 2407)

砂岩を利用した砥石である。両面および三側面に擦痕が残る。また両主面には敲打痕がみられ、砥石から叩石に転用されたと考えられる。一主面の約1/2には肉眼でも観察できる光沢面が広がる。全体的に赤色に変色している。(P-237から出土)

鉄製品(図2-257 2408)

刀子で、刃部先端が折損している。(P-241から出土)

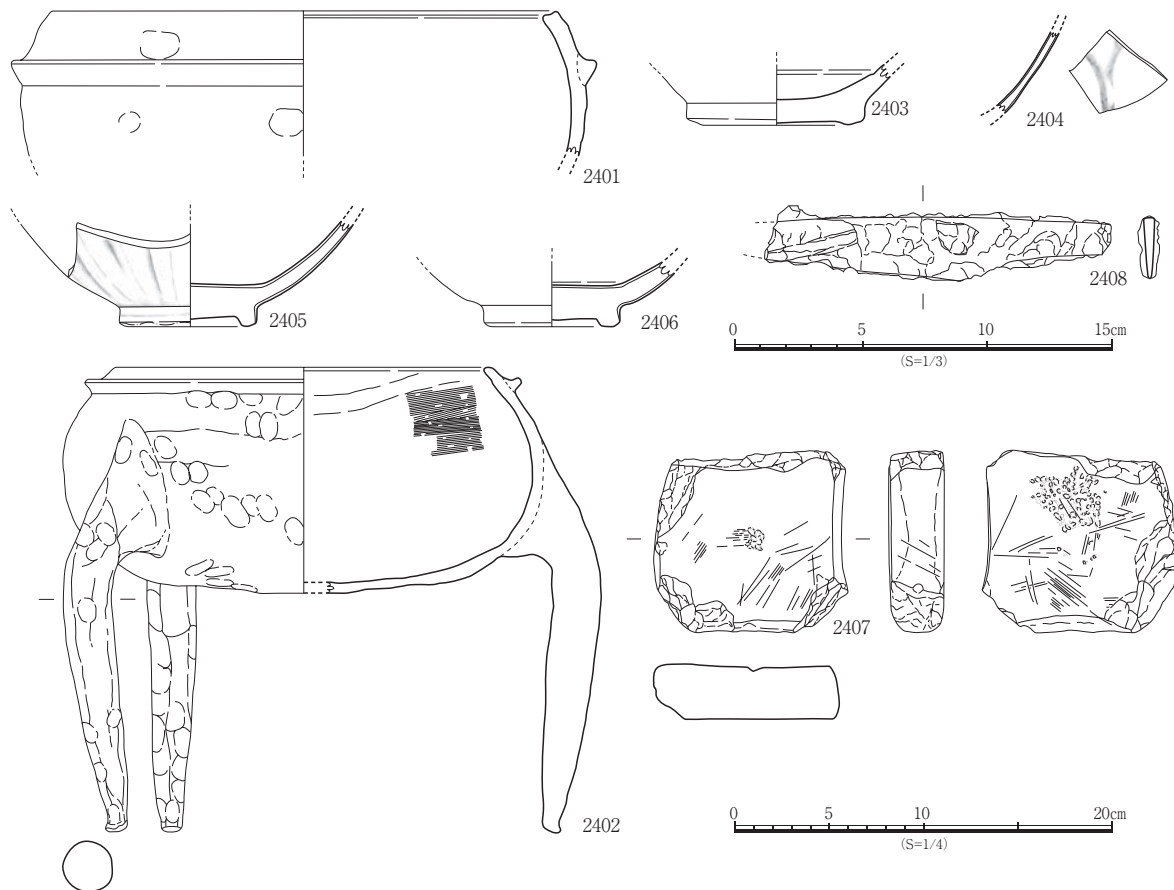


図2-257 ピット出土遺物実測図(瓦質土器, 青磁, 石製品, 鉄製品)

⑤ 近代

調査区西南部で近代の土坑6基を検出した。いずれも埋土には、家屋を壊した際の廃材などが含まれていた。また調査区南端で検出したSK-287は、地元の人々が魚溜めと呼ぶもので、一時的に川で捕まえた魚を入れる施設の跡である。

SK-283

3. 遺構と遺物 (2) II区

調査区南西部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.60 m、短辺0.94 m、深さ14cmを測り、断面形はU字形を呈する。長軸方向はN-18°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土単一で小型大礫以下の角礫を多く含んでいた。遺物は土師器または土師質土器の細片2点が出土したが、復元図示はできなかった。

SK-284

調査区南西部, SK-283の東で検出した楕円形の土坑である。長径0.89 m、短径0.53 m、深さ6cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。長軸方向はN-33°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土単一で、小型大礫以下の角礫を多く含んでいた。遺物は須恵器1点、土師質土器2点が出土したが、復元図示はできなかった。

SK-285

調査区南西部で検出した隅丸方形の土坑で、古代の溝跡(SD-214・223)を切る。長辺1.98 m、短辺1.42 m、深さ32 cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-15°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土単一で、小型大礫以下の角礫を多く含んでいた。遺物は土師質土器1点、近世陶器1点の他、近代の瓦などが出土した。復元図示できるものはなかった。

SK-286

調査区南西部南で検出した楕円形の土坑で、古代の溝跡(SD-214)を切る。長径1.67m、短径1.12m、深さ50cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-70°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土単一で、小型大礫以下の角礫を多く含んでいた。遺物は土師器3点、須恵器1点、近世陶磁器50点、鉄製品1点、近代の瓦3点が出土したが、復元図示できるものはなかった。

SK-287

調査区南西部南端で検出した隅丸方形の土坑で、土坑の南肩は調査区外に延びる。古代の溝跡(SD-214)を切る。長辺4.94 m、短辺1.18 m以上、深さ23cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-78°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土単一で、小型大礫以下の角礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。これは地元の人々が魚溜めと呼ぶ施設である。

SK-288

調査区南西部南端で検出した方形の土坑で、土坑の南肩は調査区外に延びる。長辺2.12m、短辺1.04 m以上、深さ19 cmを測り、断面形は逆台形を呈する。長軸方向はN-77°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土単一で、小型大礫以下の角礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

表2-16 近代土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-283	隅丸方形	1.60	0.94	14	N-18°-E	
SK-284	楕円形	0.89	0.53	6	N-33°-E	
SK-285	隅丸方形	1.98	1.42	32	N-15°-E	
SK-286	楕円形	1.67	1.12	50	N-70°-W	
SK-287	隅丸方形	4.94	(1.18)	23	N-78°-W	
SK-288	方形	2.12	(1.04)	19	N-77°-W	

第Ⅲ章 自然科学分析

－西野々遺跡の自然科学分析(1)－

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻 康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・伊藤良永・斉藤紀行

1. はじめに

本報告では、現地での堆積層観察、花粉・珪藻・植物珪酸体分析、種実分析、出土した木材（炭化材を含む）の樹種同定、粒度分析、不攪乱堆積物試料の軟X線写真観察、放射性炭素年代測定結果について述べる。なお、今回の発掘調査に伴う自然科学分析では、現地調査に基づく調査区内の堆積層記載が目的の一つとして設定されていた。そのため、本分析に係わる委託業務では、発掘調査の進捗に併せて、延べ10日間の現地調査を実施し、調査区内に累重する堆積層や遺構埋土の記載と試料採取に努めるようにした。

2. 試料

分析試料は、遺構内から採取された土壌や植物遺体と、トレンチ壁面から採取された堆積物である（図3-1）。トレンチ壁面からは、Ⅱ区の流路状の落ち込みから採取を行った。遺構内からは、Ⅰ区の中世の溝であるSD-129、Ⅱ区の溝（SD-203：弥生時代、SD-204：古墳時代～古代、SD-207：古代、SD-227：中世）から採取を行った。この中から、目的等を考慮して、花粉分析7点、植物珪酸体分析11点、珪藻分析5点、粒度分析3点の分析を実施した。トレンチ壁面からは、Ⅱ区で試料採取を行った。この中から、目的等を考慮して、花粉分析4点、植物珪酸体分析8点、珪藻分析4点、粒度分析8点、軟X線写真撮影観察5点の分析を実施した。年代測定については、Ⅱ区4地点の流路状の落ち込み基盤層の古土壌と埋積層最上部の腐植についても実施した。また、炭化物が集中して検出されたⅠ区のピット（P-130）の炭化物混じり土壌について、材同定と種実分析を実施した。

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法で実施する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One SigmaとTwo Sigma）を用いる。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥

3. 分析方法 (2) 珪藻分析

後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか (1998), Krammer (1992), Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b), Witkowski et al. (2000) などを参照する。

同定結果は、海水生種、海～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料は、産出率 2.0 % 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種は小杉 (1988), 淡水生種は安藤 (1990), 陸生珪藻は伊藤・堀内 (1991), 汚濁耐性は, Asai & Watanabe (1995) の環境指標種を参考とする。

(3) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重 2.2）による有機物の

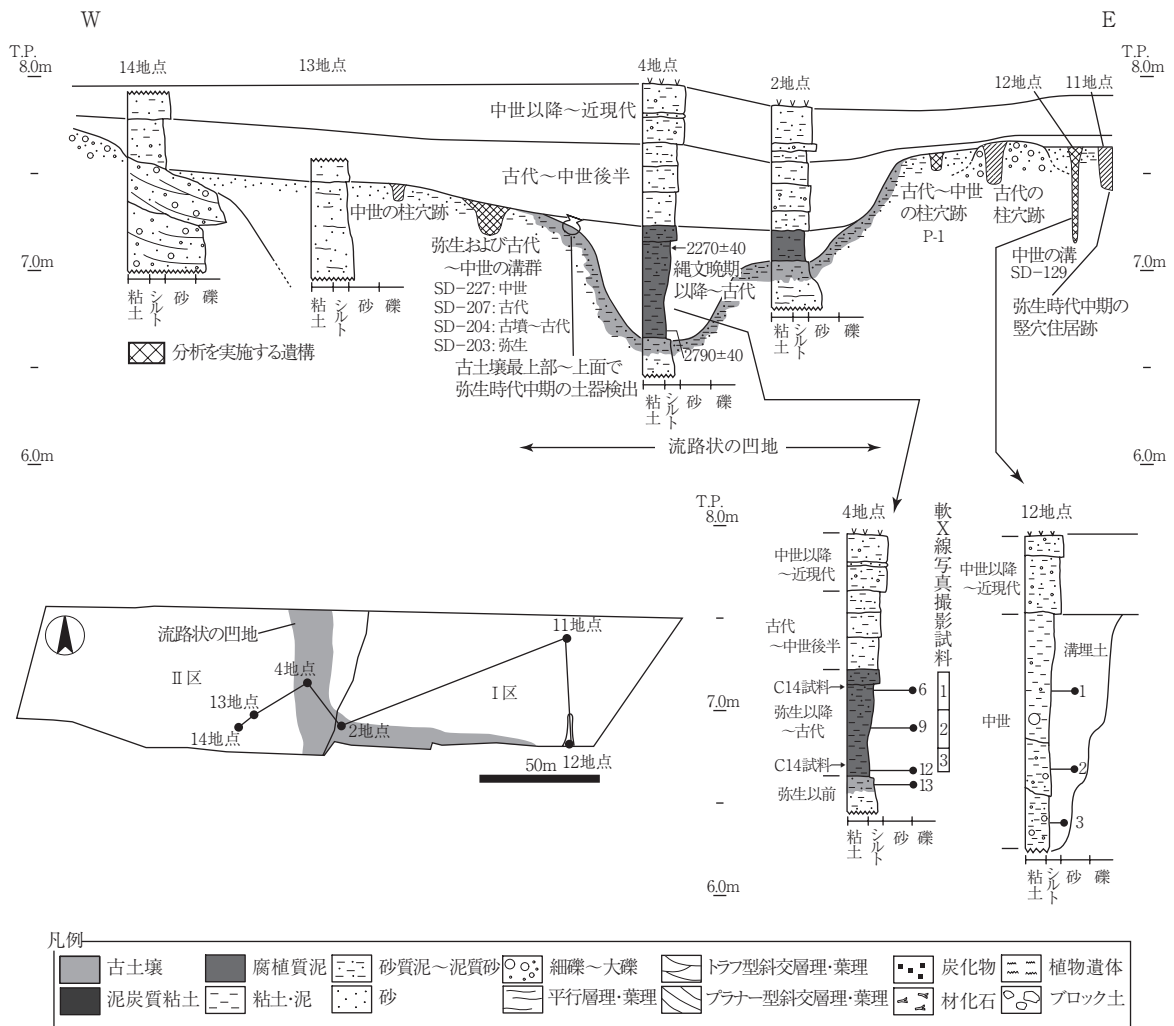


図3-1 I・II区堆積物累重状況の柱状模式断面図と分析試料採取地点

分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉は総花粉・孢子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(4) 植物珪酸体

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や燃料材について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

(5) 種実同定

土壌試料 200 cc (336.5g) を 0.5 mm 目の篩を通して水洗し、残渣をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や炭化材などを抽出する。検出された植物遺体等は、48 時間 80 °C で乾燥後の重量を求め、種類毎にビンに入れて保管する。

(6) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル(抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(7) 粒度分析

公文・立石(1998)の方法を参考に礫・砂粒子画分はふるい分け法、シルト・粘土粒子画分はピペット法で行った。また、粒径区分はWentworth(1922)に従った。以下に分析操作工程を示す。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分ける。2mmφ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方、2mmφ篩下粒子は40.00gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤(4%カルゴン)を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分(0.063mm>), 粘土画分(0.0039mm>)を10ml採取し、105°Cで24時間乾燥させた後、重

4. 結果 (1) 放射性炭素年代測定

量を測定し加積通過率(質量%)を求める。ピペット法終了後、懸濁液を63 μ m篩で水洗いする。63 μ m篩残留物を105°Cで5時間熱乾後、1.0、0.5、0.25、0.125mm ϕ 篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率(質量%)を求める。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率(質量%)から粒径加積曲線を描き、Wentworth(1922)の粒径区分毎の質量を算出する。

(8) 堆積微細構造軟X線分析

地層断面より採取したブロック状の不攪乱堆積物を厚さ1cmの板状に整形し、それをアクリル板上に設置し、周囲を幅1cmの棒状のアクリル樹脂で固定し、軟X線写真撮影を実施した。撮影したフィルムについては、肉眼とルーペによる観察およびスキャナーでコンピューター上に取り込んだ画像の補正などから、堆積・土壌構造の特徴把握を行う。試料調整および撮影については、碎屑性堆積物研究会(1983)、齊藤(1993)を参考とした。また、軟X線写真の記載については、久馬ら(1998)の「土壌薄片記載ハンドブック」のほか、堆積物について宮田ほか(1990)など、土壌について佐藤(1990a・b)、森ほか(1992)、成岡(1993)などを参考とした。

(9) 動物遺存体分析

遺跡から取り上げられた骨試料について同定を行う。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。同定および解析には、金子浩昌先生に協力をお願いし、署名原稿として結果を頂いた。

4. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表3-1に、暦年較正結果を表3-2に示す。

同位体補正を行った年代値は、II区4地点-6が2270 \pm 40 yrs BP、II区4地点-13が2790 \pm 4 yrs BPを示す。暦年較正を行った年代値(2 σ)は、calBC402-234、calBC1037-833である。暦年較正值は、10年単位で表すのが慣例だが、今後想定される較正曲線や暦年較正プログラムの改訂をふまえ、再計算ならびに比較検討を行えるよう、1年単位で表している。

(2) 珪藻分析

結果を表3-3・4、図3-2に示す。II区の4地点では、試料番号13を除く3試料(試料番号6、9、12)から産出したが、溝埋土は、いずれも珪藻化石が少なかった。なお、化石が産出した試料の完形殻の

表3-1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	試料名	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No
1	4地点 6	腐植物	-	2270 \pm 40	-29.23 \pm 1.03	2340 \pm 40	IAAA-42059
2	4地点 13	腐植物	-	2790 \pm 40	-30.91 \pm 0.92	2890 \pm 40	IAAA-42060

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表3-2 暦年較正結果

試料 番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)								相対比	Code No.		
		σ	cal AD		cal AD		cal BP		cal BP				
1	2273 ± 43	σ	cal AD	395	-	cal AD	356	cal BP	1,555	-	1,594	0.501	IAAA - 42059
			cal AD	286	-	cal AD	234	cal BP	1,664	-	1,716	0.499	
		2σ	cal AD	402	-	cal AD	345	cal BP	1,548	-	1,605	0.420	
			cal AD	322	-	cal AD	234	cal BP	1,628	-	1,716	0.580	
2	2787 ± 40	σ	cal BC	1,000	-	cal BC	899	cal BP	2,950	-	2,849	1.000	IAAA - 42060
			cal BC	1,037	-	cal BC	1,035	cal BP	2,987	-	2,985	0.001	
		2σ	cal BC	1,027	-	cal BC	833	cal BP	2,977	-	2,783	0.999	
			cal BC	1,027	-	cal BC	833	cal BP	2,977	-	2,783	0.999	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986 - 2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

表3-3 珪藻分析結果(1)

種 類	生態性			環境 指標種	II 区					II 区4地点			
	塩分	pH	流水		I 区	II 区				II 区4地点			
					SD - 129	SD - 227	SD - 207	SD - 204	SD - 203	6	9	12	13
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	2	1
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	2	-	-	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	7	-	-	-
Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	NU	-	-	-	-	-	2	-	1	-
Aulacoseira crenulata (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	51	135	31	4
Aulacoseira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	2	-	-	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	5	1	2	1
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	6	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	3	2	-	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	1	-	3	-	3	-
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	-	-	-	4	-	-	-
Eunotia arcus var. bidens Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	1	-
Eunotia bigibba Kuetzing	Ogh-hob	ac-bi	ind	RB	-	-	-	-	-	-	2	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	1	-	-
Eunotia camelus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	21	1	-
Eunotia flexuosa (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	1	-	1	-
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	1	10	4	-
Eunotia monodon var. asiatica Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	1
Eunotia pectinalis (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	-	-	-	-	3	3	3	-
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	22	2	6	-
Eunotia pectinalis var. ventralis (Ehr.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	1	1	1	-
Eunotia praeurupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	-	-	-	3	3	2	1
Eunotia praeurupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	-	-	1	1	4	3	5	2
Eunotia pyramidata var. monodon Krasske	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	3	-	-	-
Eunotia tridentula Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	4	1	-
Eunotia tschirchiana Muell.	Ogh-ind	al-il	unk		-	-	-	-	-	3	1	-	-

4. 結果 (2) 珪藻分析

表3-4 珪藻分析結果(2)

種 類	生態性			環境 指標種	I 区					II 区			
	塩分	pH	流水		SD - 129	SD - 227	SD - 207	SD - 204	SD - 203	II 区4地点			
					3	1	1	3	2	6	9	12	13
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-	1	-	6	2
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	2	-	1	-
Gomphonema augur var. gautieri V.Heurck	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	2	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Gomphonema contraturris Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	4	2	-	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	-	-	-	3	1	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	1	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	-	-	-	-	1	-	2	1
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RBS	-	-	-	-	-	1	9	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-
Navicula rhynchocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	2	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	1	-	2	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	3	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	2	-	-	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	-	-	-	-	1	-
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	3	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RBS	-	-	-	-	-	-	-	2	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	-	-	-	-	2	-	-	-
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	4	-
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	1	-	-	-
Synedra ulna (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-bi	U	-	-	-	-	-	33	7	13	4
Tabellaria fenestrata (Lyngb.)Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O,T	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	2	1
淡水生種					6	0	1	3	1	203	210	99	16
珪藻化石総数					6	0	1	3	1	203	210	101	17

環境指標種群

K: 中～下流性河川指標種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種 U: 広域適応性種 T: 好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)

R: 陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

凡例

HR : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 CR : 流水に対する適応性
Meh : 汽水生種 al-bi : 真アルカリ性種 l-bi : 真止水性種
Ogh-Meh: 淡水-汽水生種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種 ac-il : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 ac-bi : 真酸性種 r-bi : 真流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種

出現率は約50%である。産出分類群数は、合計で17属62分類群である。以下に化石が産出した試料の群集組成を述べる。

遺構試料は、I区のSD-129の試料番号3はPinnularia spp.、II区のSD-207の試料番号1は陸生珪藻のPinnularia schoenfelderi、SD-203の試料番号3とSD-204の試料番号2は沼沢湿地付着生種群のEunotia praerupta var. bidens等が産出する。なお、SD-227の試料番号1は無化石である。

II区の4地点の3試料(試料番号6, 9, 12)は、いずれも淡水域に生育する水生珪藻が優占する。その生態性(塩分濃度, 水素イオン濃度, 流水に対する適応能)の特徴は3試料ともに近似しており、貧塩不定性種(少量の塩分には耐えられる種)、真+好アルカリ性種(アルカリ性水域に最もよく生育する種)～真+好酸性種(酸性水域に最もよく生育する種)、流水不定性種(流水域にも止水域にも普通に生育する種)と真+好止水性種(止水域に最もよく生育する種)が多産する。産出種の特徴は、止水性のAulacoseira crenulataがいずれの試料においても多産し、特に試料番号9で極大となる。これに付随して、流水不定性のSynedra ulna、流水不定性で沼沢湿地付着生種群のEunotia pectinalis var. undulata、Eunotia pectinalis var. minor、Eunotia incisa等を伴う。なお、試料番号9では、Eunotia camelusが約10%産出する。陸生珪藻では、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群のEunotia praerupta var. bidens、Navicula confervacea等が低率ながら産出する。このうちEunotia praerupta var. bidensは、沼沢湿地付着生種群、Navicula confervacea後は有機汚濁の進んだ富栄養水域にも生育する好汚濁性種でもある。なお、沼沢湿地付着生種群は、水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や湿地で優勢な出現の見られる種群である(安藤, 1990)。一方珪藻化石の少なかった試料番号13は、前試料と同じような種類が散見された。

(3) 花粉分析

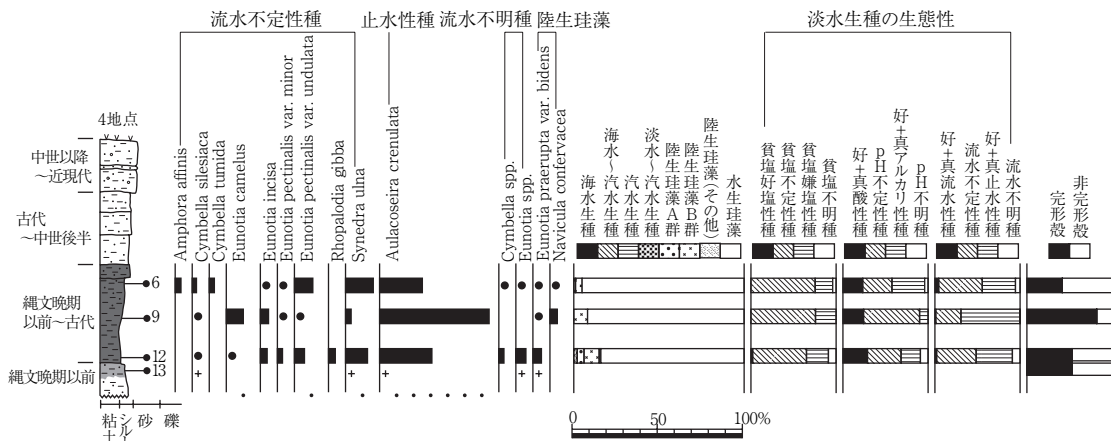
結果を表3-5~7, 図3-2・3に示す。遺構試料は、I区のSD-129の2と3で多くの化石がみられた他は、保存状態が悪くほとんど検出されない。草本花粉の割合が高く、イネ科が多いのが特徴で、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンポポ重科なども比較的多くみられる。木本花粉ではコウヤマキ属の割合が高く、ツガ属、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科なども多くみられることから、針葉樹花粉が主体である。広葉樹花粉は、アカガシ亜属、クリ属-シイノキ属などが検出される。

II区4地点では、試料番号6と9で比較的多くの花粉化石が検出されたが、試料番号12と13では花粉化石がほとんど検出されない。試料番号6と9は、草本花粉化石が大部分を占める。イネ科が多いのが特徴で、ガマ属、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンポポ重科なども比較的多くみられる。木本花粉では、ツガ属、コウヤマキ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹花粉や、アカガシ亜属、クリ属-シイノキ属などの広葉樹花粉がみられる。

表3-5 花粉分析結果(1)

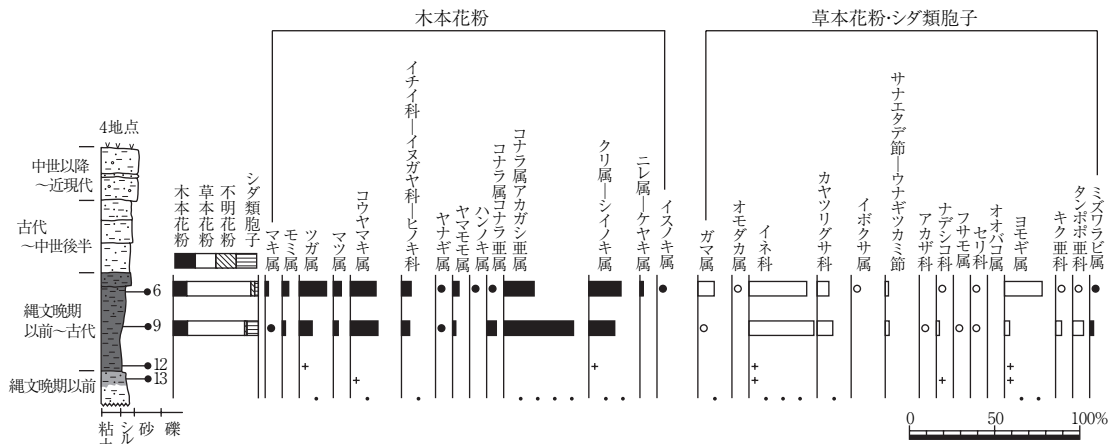
種 類	試料番号・調査区・遺構・分析地点										
	I 区			II 区				II区4地点			
	SD-129			SD-227	SD-207	SD-204	SD-203				
	1	2	3	1	1	3	2	6	9	12	13
木本花粉											
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
モミ属	1	2	3	1	-	-	-	4	2	-	-
ツガ属	1	8	18	-	-	-	-	17	8	1	-
トウヒ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

4. 結果 (3) 花粉分析



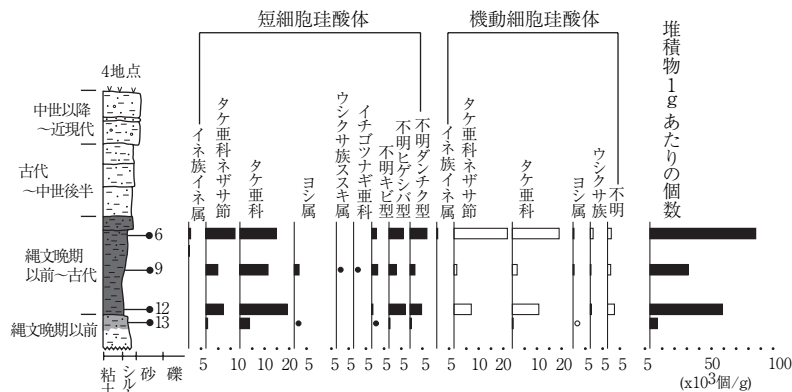
Ⅱ区4地点の主要珪藻化石群集の層位分布

海水-汽水-淡水生産産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。



Ⅱ区4地点の花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料において、検出された種類を示す。



Ⅱ区4地点の植物珪酸体含量

堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は250個/g未満の種類を示す。

図3-2 Ⅱ区4地点微化石分析結果

表3-6 花粉分析結果(2)

種類	試料番号・調査区・遺構・分析地点										
	I区			II区				II区4地点			
	SD-129			SD-227	SD-207	SD-204	SD-203				
	1	2	3	1	1	3	2	6	9	12	13
木本花粉											
マツ属複雑管束亜属	1	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属(亜属不明)	1	2	4	-	-	-	-	5	3	-	-
コウヤマキ属	20	36	54	1	-	-	-	16	17	-	1
スギ属	-	4	2	1	-	-	-	-	-	-	-
イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	3	14	7	1	-	-	-	6	5	-	-
ヤナギ属	-	-	3	-	-	-	-	1	1	-	-
ヤマモモ属	2	4	1	-	-	-	-	4	2	-	-
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
クマシデ属-アサグ属	-	1	-	-	-	-	-	3	-	-	-
ハシバミ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ハンノキ属	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	6	3	-	-	-	-	1	6	-	-
コナラ属アカガシ亜属	3	14	5	-	1	1	1	19	43	-	-
クリ属-シイノキ属	2	10	21	-	-	-	-	20	16	1	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
イスノキ属	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
シラキ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ハイノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
草本花粉											
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	61	2	-	-
オモグカ属	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
イネ科	36	194	314	4	10	-	2	215	231	4	4
カヤツリグサ科	17	55	77	-	-	-	-	44	56	-	-
イボクサ属	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-
ツユクサ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	2	-	1	-	-	-	-	3	1	-	-
ギンギン属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	1	6	-	-	-	1	12	14	-	-
タデ属	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
ソバ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	1	2	7	1	2	-	-	-	1	-	-
ナデシコ科	1	1	2	-	-	-	-	3	11	-	1
カラマツソウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
キンボウゲ科	-	2	6	-	-	-	-	2	-	-	-
アブラナ科	-	4	8	-	-	-	-	2	14	-	-
ワレモコウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	-	2	4	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-
フサモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	5	20	27	1	-	-	-	3	3	-	-
シソ科	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-
オオバコ属	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキツル属	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-
ヨモギ属	13	77	125	1	6	-	-	140	18	5	1
キク亜科	-	14	10	-	-	-	-	6	21	-	-
タンポポ亜科	5	29	52	2	4	-	1	3	39	-	-
不明花粉	14	14	25	1	-	-	-	30	18	-	-

4. 結果 (4) 植物珪酸体分析

表3-7 花粉分析結果(3)

種類	試料番号・調査区・遺構・分析地点										
	I 区			II 区				II 区4地点			
	SD-129			SD-227	SD-207	SD-204	SD-203				
	1	2	3	1	1	3	2	6	9	12	13
シダ類胞子											
ヒカゲノカズラ属	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ゼンマイ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イノモトソウ属	-	3	2	1	-	-	-	-	4	-	-
ミズワラビ属	-	1	-	-	1	2	-	3	14	-	-
他のシダ類胞子	114	165	114	38	3	-	3	26	64	9	1
合計											
木本花粉	36	110	131	5	1	1	1	106	105	2	1
草本花粉	81	406	653	9	22	0	4	499	418	9	6
不明花粉	14	14	25	1	0	0	0	30	18	0	0
シダ類胞子	115	170	116	39	4	2	3	29	83	9	1
総計(不明を除く)	232	686	900	53	27	3	8	634	606	20	8

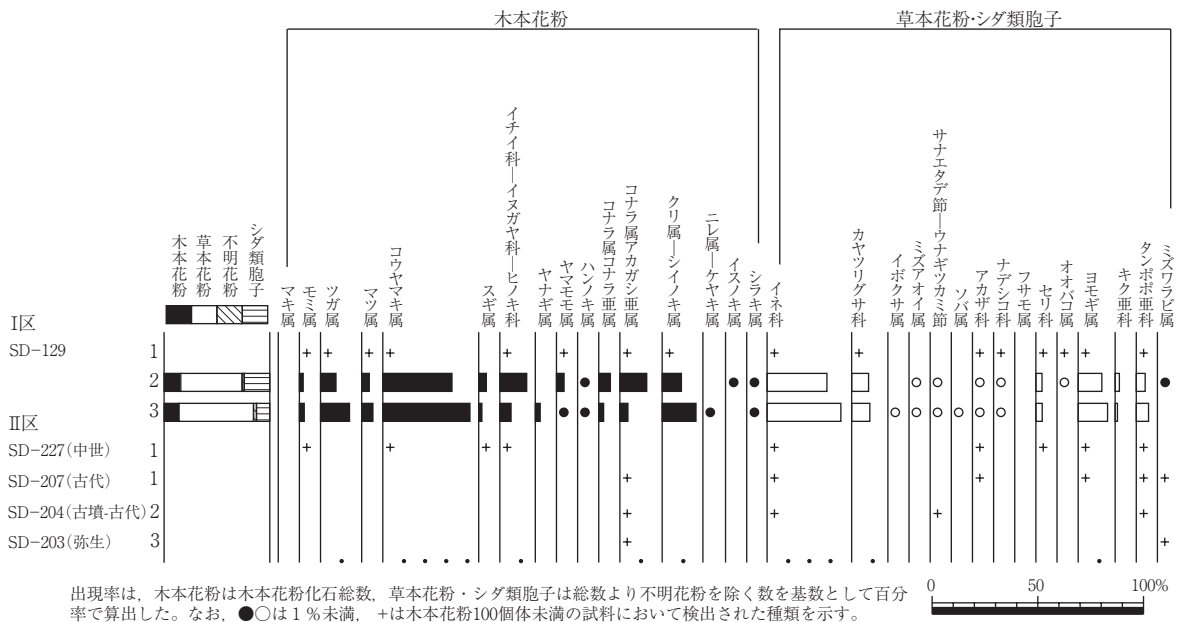


図3-3 遺構の花粉化石群集の層位分布

(4) 植物珪酸体分析

結果を表3-8, 図3-2・3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

II 区の溝埋土の植物珪酸体含量は、SD-203とSD-227で1万個/g前後、SD-204で約4.4万個/g、SD-207で約7万個/gである。いずれの試料も、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。また、SD-204の試料番号2とSD-227の試料番号1でイネ属が認められ、その含量は数百個/g程度である。

I 区のSD-129の試料番号1の植物珪酸体含量は700個/g程度と少なく、ネザサ節を含むタケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。試料番号2と3は6,000-9,000個/g程度であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

II 区4地点の植物珪酸体含量は、層位的に増加する傾向が見られる。いずれの試料も、ネザサ節を

表3-8 植物珪酸体含量

種類	試料番号・調査区・遺構・分析地点										
	I区			II区				II区4地点			
	SD-129			SD-227	SD-207	SD-204	SD-203				
	1	2	3	1	1	3	2	6	9	12	13
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	0	130	196	221	0	0	133	760	282	0	0
タケ亜科ネザサ節	126	586	1,175	405	512	721	6,795	11,782	4,789	7,014	660
タケ亜科	75	2,213	3,330	1,288	28,681	3,828	6,528	14,823	11,408	19,171	3,889
ヨシ属	0	16	0	37	0	0	133	0	1,972	0	37
ウシクサ族コブナグサ属	0	33	98	0	0	0	666	0	0	0	0
ウシクサ族ススキ属	0	98	98	0	0	111	533	0	141	0	0
イチゴツナギ亜科	25	163	784	110	0	0	266	0	141	0	0
不明キビ型	0	228	294	74	0	444	933	1,900	2,394	468	147
不明ヒゲシバ型	25	537	1,175	37	512	333	1,998	5,701	2,958	6,546	404
不明ダンチク型	75	325	294	258	768	499	1,466	6,841	1,972	4,676	477
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	0	130	147	184	0	0	533	380	0	0	0
タケ亜科ネザサ節	101	244	881	1,362	1,024	777	13,856	21,664	1,127	7,014	0
タケ亜科	252	456	196	3,533	35,595	4,493	7,861	19,003	1,972	10,755	367
ヨシ属	0	49	0	184	0	0	266	380	423	0	37
ウシクサ族	0	114	392	147	512	111	1,199	1,140	282	468	0
不明	25	342	196	736	2,049	610	1,199	1,520	1,268	2,806	0
珪化組織片											
イネ属穎珪酸体	0	65	0	37	0	0	0	0	0	0	0
合計											
イネ科葉部短細胞珪酸体	326	4,329	7,444	2,430	30,473	5,936	19,451	41,807	26,057	37,875	5,614
イネ科葉身機動細胞珪酸体	378	1,335	1,812	6,146	39,180	5,991	24,914	44,087	5,072	21,043	404
珪化組織片	0	65	0	37	0	0	0	0	0	0	0
総計	704	5,729	9,256	8,613	69,653	11,927	44,365	85,894	31,129	58,918	6,018

(個/g)

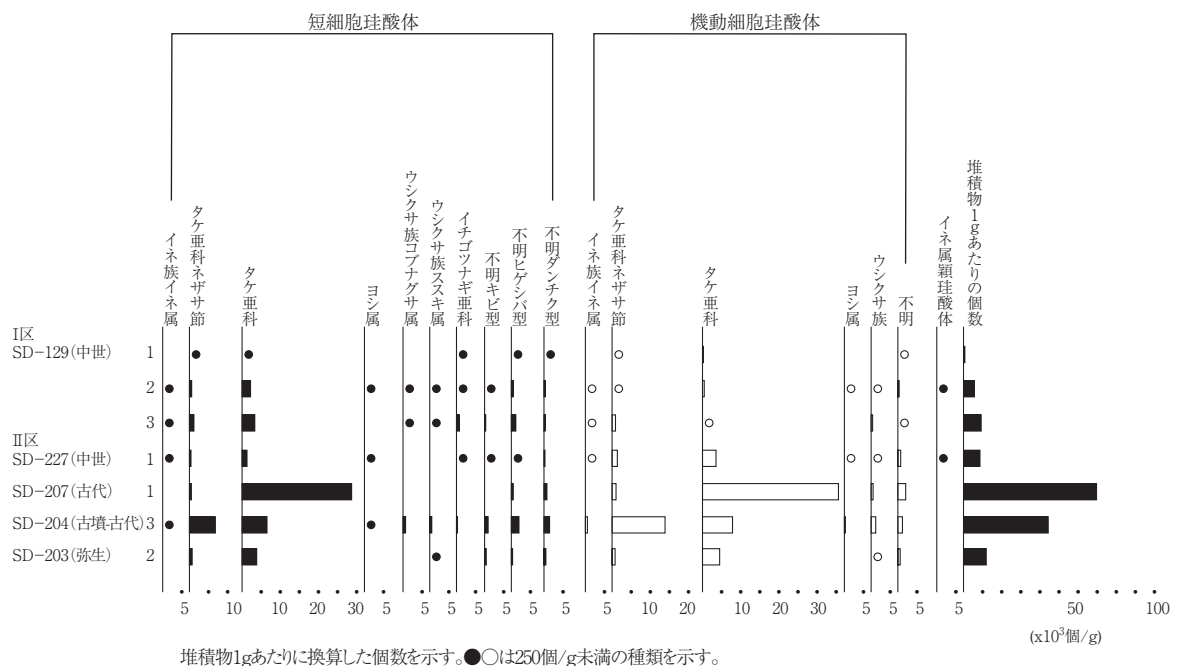


図3-4 溝埋土の植物珪酸体含量

4. 結果 (6) 樹種同定

含むタケ亜科の産出が目立つ。また試料番号9と6ではイネ属が見られ、その含量は数百個/g程度である。

(5) 種実同定

篩別後の残渣からは、0.1gに満たない炭化材の微碎片が検出されたものの、同定可能な種実は認められなかった。

(6) 樹種同定

樹種同定結果を表3-9に示す。I区P-130の炭化材は、湿った状態ではわかりにくいですが、乾かすと組織が残存しているのは一部で、微細な試料が多い。いずれも道管が認められることから広葉樹であり、10点中2点は環孔材の道管配列を有することが確認された。しかし、保存状態が悪く微細であるために種類の同定に至らなかった。タブノキ属と種類不明の環孔材について、解剖学的特徴等を記す。

① 環孔材

孔圏部は2-4列、孔圏外への移行は緩やか~やや急で、晩材部の小道管は単独または2-3個が主に放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-40細胞高。放射組織の外周には鞘状の組織が認められる。

表3-9 樹種同定結果

調査区	遺構	時代	点数	樹種
I区	P-130(炭化物集中ピット)	古代	10	広葉樹(環孔材).....2
				広葉樹.....8

表3-10 粒度分析結果

試料名	礫					砂		
	中礫				細礫	極粗粒砂	粗粒砂	中粒砂
	64~ 32mm	32~ 16mm	16~ 8mm	8~ 4mm	4~ 2mm	2.00~ 1.00mm	1.00~ 0.50mm	0.50~ 0.25mm
I区SD-129.....3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	1.8	1.1	1.4
I区11地点.....1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.6	0.4
II区4地点.....6	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.7
II区4地点.....9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
II区4地点.....12	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	0.5

試料名	砂		シルト				粘土 0.0039mm>
	細粒砂	極細粒砂	粗粒	中粒	細粒	微粒	
	0.25~ 0.125mm	0.125~ 0.063mm	0.063~ 0.031mm	0.031~ 0.016mm	0.016~ 0.008mm	0.008~ 0.0039mm	
I区SD-129.....3	2.2	4.8	13.0	13.6	12.4	10.3	38.9
I区11地点.....1	0.4	0.8	10.5	15.0	16.4	13.0	42.8
II区4地点.....6	1.7	2.3	6.3	8.0	9.9	11.1	59.5
II区4地点.....9	1.0	1.6	5.5	6.2	8.8	10.1	66.6
II区4地点.....12	0.6	0.8	8.0	12.0	10.4	10.8	56.2

注) 単位は重量%で表示。

(7) 粒度分析

粒度分析結果を表3-10, 図3-5・6に示す。また, Folk & Ward (1957) による評価を総合して結果を表3-11に示した。

(8) 軟X線写真撮影観察

撮影した画像およびその解釈については, 考察の項の図3-10に示している。軟X線写真から読みとれる内容の詳細については, 考察において述べる。

(9) 動物遺存体分析

I 区のP-103から検出された動物遺存体は, ウシ目(Artiodactyla) イノシシ科(Suidae) ブタ(*Sus scrofa* var. *domesticus*)の左第3中手骨に同定された。

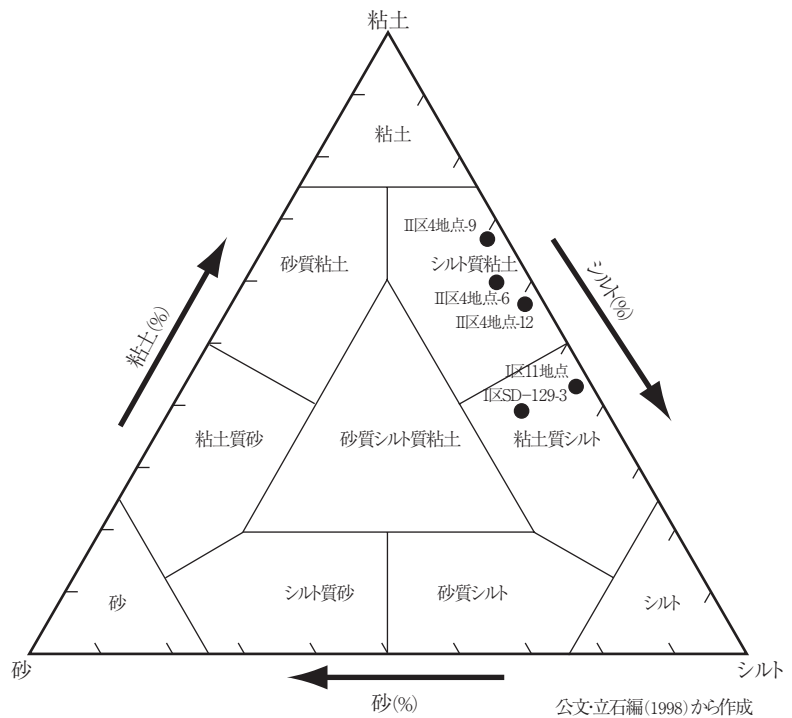


図3-5 粒度分析結果三角ダイアグラム

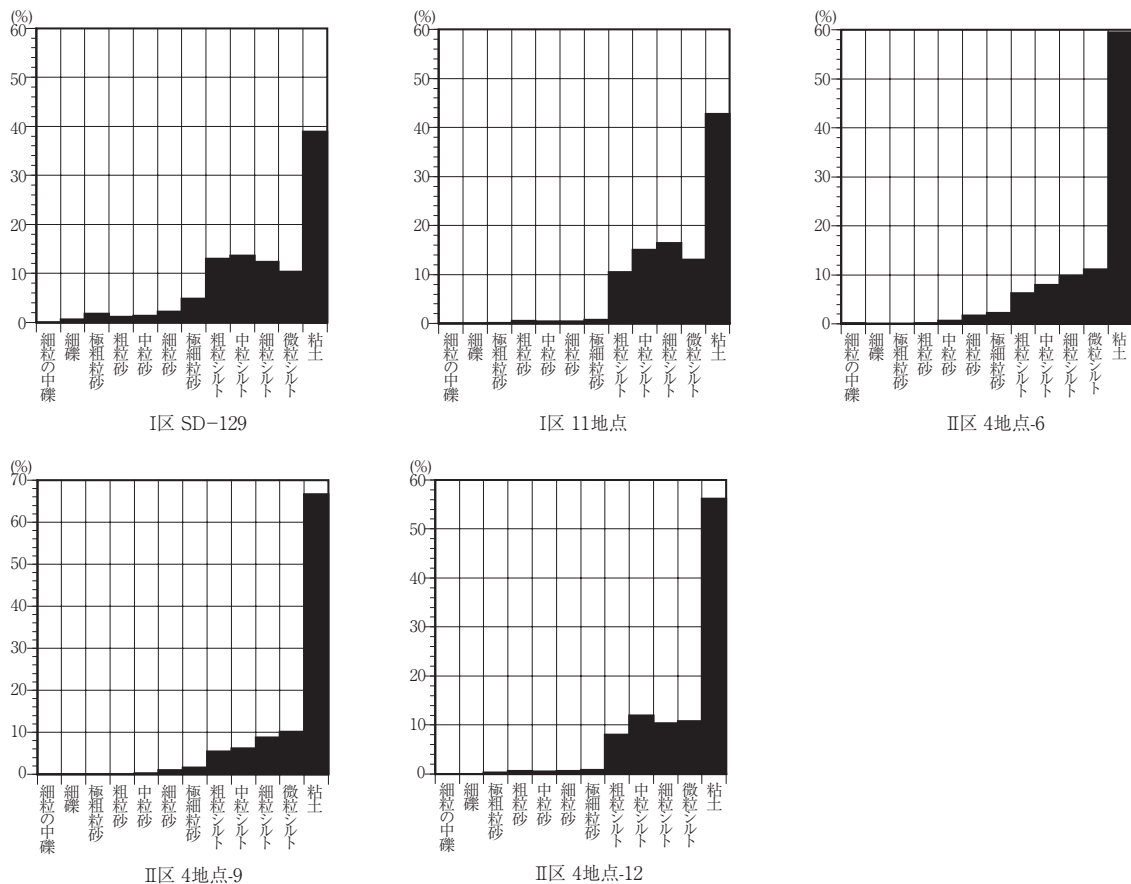


図3-6 粒度分析結果

5. 考察 (1) 珪藻分析

表3-11 粒度組成解析結果

試料名	M d (中央値)	M z (平均値)	M o (最頻値)
I 区SD - 129	7.75 φ (0.005mm)	8.03 φ (0.004mm) 粘土	7.64 φ (0.005mm)
I 区11地点.....1	7.85 φ (0.004mm)	8.32 φ (0.003mm) 粘土	7.64 φ (0.005mm)
II 区4地点.....6	8.51 φ (0.003mm)	8.87 φ (0.002mm) 粘土	7.64 φ (0.005mm)
II 区4地点.....9	8.86 φ (0.002mm)	9.15 φ (0.002mm) 粘土	7.64 φ (0.005mm)
II 区4地点.....12	8.35 φ (0.003mm)	8.79 φ (0.002mm) 粘土	7.64 φ (0.005mm)

試料名	S k (歪度)	σ (分級度)	K g (尖度)
I 区SD - 129	0.11 正の歪み	2.47 非常に悪い	1.96 非常に突出
I 区11地点.....1	0.47 著しい正	1.90 悪い	1.52 非常に突出
II 区4地点.....6	0.33 著しい正	2.19 非常に悪い	1.32 突出
II 区4地点.....9	0.30 正の歪み	2.09 非常に悪い	1.22 突出
II 区4地点.....12	0.41 著しい正	2.10 非常に悪い	1.33 突出

注) 評価はFolk & Ward (1957)による

ブタの左第3中手骨は、ほぼ完存する状態である。但し、保存状態が良好であり、現生のものが落ち込んできた可能性も示唆される。

5. 考察

(1) 珪藻分析

珪藻分析の結果、堆積環境を検討するのに有意な量の珪藻化石が産出したのは、II 区の4地点の3試料(試料番号6, 9, 12)だけである。優占種の *Aulacoseira crenulata* は、石灰分を多く含んだ貧栄養の小型の水域である池や沼等に多く認められ、湖沼のような規模の大きい水域からはめったに見られない種とされている(Krammer. & Lange-Bertalot, 1991a)。このことから、試料が採取された腐植質粘土シルト層が累重する流路状の凹地内では、流れの影響をほとんど受けない滞水域ないし湿地であったと考えられる。また、後背山地には石灰岩の地層がみられることから、石灰分を多く含む水を好む種の多産は周辺の地質を反映していると思われる。

II 区のSD - 227 (中世), SD - 207 (古代), SD - 204 (古墳時代~古代), SD - 203 (弥生時代)やI 区のSD - 129 (中世)は、珪藻化石が少なかった。このことから、これらの溝内では、珪藻化石が堆積物中に取り込まれにくい環境、もしくは化石が保存されにくい環境にあったことが推測される。わずかに検出された珪藻化石には、沼沢湿地付着生種群や陸生珪藻がみられることから、乾湿を繰り返すような条件下であった可能性も示唆される。

(2) 花粉分析

① 遺跡をとりまく古植生

弥生時代~古代と考えられているII 区4地点の分析結果をみると、木本花粉ではアカガシ亜属の割合が高く、シイノキ属も検出される。また、イスノキ属、ヤマモモ属など常緑樹林の林縁等に生育する低木類もみられる。このような分析結果から、弥生時代~古代には遺跡周辺において、シイ・カシなどいわゆる照葉樹を中心とした森林が存在していたことが推定される。その他、ツガイ

属、コウヤマキ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科等針葉樹の花粉化石が検出されるが、これらは当時の山野に生育していた温帯性の針葉樹林に由来すると思われる。

中世の溝であるSD-129をみると、アカガシ亜属やシイノキ属などの木本花粉が減少し、コウヤマキ属をはじめとする針葉樹花粉が増加する。周辺に温帯性針葉樹が増加した可能性もあるが、広葉樹に比べて針葉樹の方が風化に対する耐性が強いことから(徳永・山内, 1971など)、風化に強い針葉樹花粉が残ったとも考えられる。遺構の分析結果をみると、花粉化石を含め、珪藻化石、植物珪酸体ともに風化の痕跡がみとめられ、かつ検出数も少ないことから、針葉樹花粉の増加は、周辺植生の変化ではなく、堆積物の風化に由来していると思われる。

② 調査区周辺の古植生

調査区周辺の古植生をより強く反映すると認識される草本花粉をみると、Ⅱ区4地点、Ⅰ区中世溝のSD-129では、木本花粉に比べて多量に検出されており、特に、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の割合が高い。このような花粉分析結果からは、分析層準である弥生時代~古代に、調査区周辺で草地が少なからず広がっていた可能性が示唆される。また、中世溝埋土のSD-129では、ソバ属の花粉が検出されることから、当該期に周辺でソバ栽培が行われていたことも推測される。

(3) 植物珪酸体分析

弥生時代~中世にかけての分析結果では、いずれの試料でもネザサ節の植物珪酸体が多産する。ネザサ節は、比較的乾燥している明るく開けた場所に生育することの多い種類である。よって調査区では、弥生時代~中世に乾燥した土壤環境に明るく開けた植生景観が広がっていた可能性が示唆される。

栽培種についてしてみると、古墳時代~古代のSD-204埋土では、イネ属が検出されている。しかしながら、その含量は非常に少なく、調査区内での稲作を支持するような分析結果ではない。耕作土の可能性が高い人為的擾乱によって形成された古代~近世の層準でも、イネ属がほとんど確認されない。これらの分析結果から、今回の調査区では、弥生時代以降、安定した稲作が行われていなかった可能性が示唆される。

(4) 調査区に存在する堆積層の特徴

① 遺構検出面下に存在する堆積層

本節では、弥生時代以降の遺構検出面の基盤を構成する層準について、現地での肉眼観察による層相観察に基づき検討を行う(図3-7)。

発掘調査区の遺構検出面の基盤は、砂礫層およびシルト質砂ないし粘土質シルト層によって構成される。遺構検出面基盤層については、調査区の数ヶ所で深掘を実施したが、年代試料を得ることができなかった。遺構検出面上で検出された流路状の凹地最下部に堆積した腐植質粘土質シルトからは、 2790 ± 40 yrs BPの年代値が得られている。従って、遺構検出面を構成する堆積層は、少なくとも 2790 ± 40 yrs BPより以前に累重したことがうかがえる。

遺構検出面表層では、所々に砂礫層からなる帯状の高まりが確認される。この砂礫層の最大礫径は大礫サイズで、おもに細礫~中礫からなり、マトリクスが粗粒砂~極粗粒砂で構成される。砂礫

5. 考察 (4) 調査区に存在する堆積層の特徴

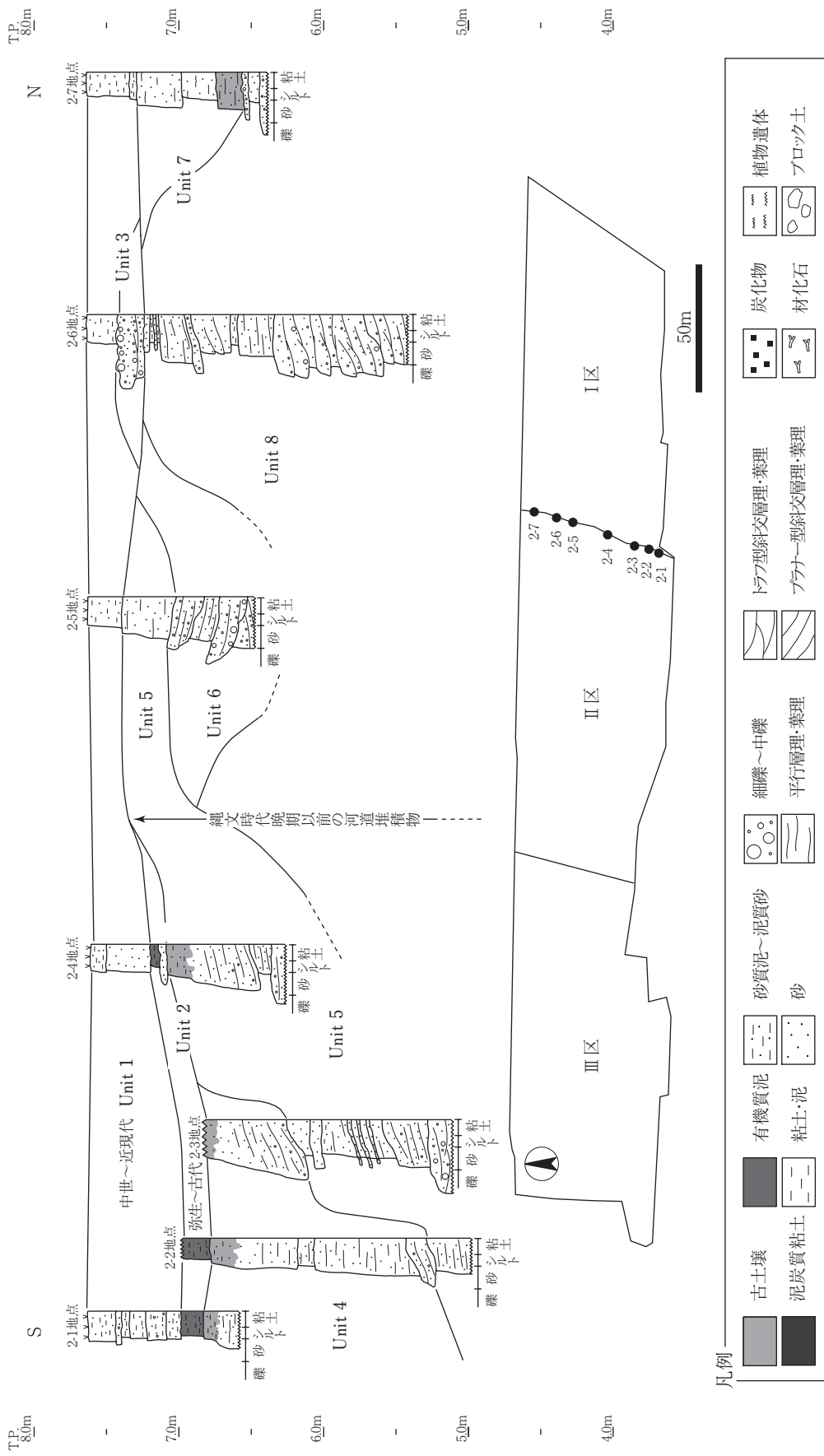


図3-7 I・II区間深掘トレンチの堆積物累重状況の柱状模式断面図

層の高まり以外の領域では、おもにシルト質砂ないし粘土質シルト層によって遺構検出面が形成される。上記のような遺構検出面を構成する堆積層の累重については、断ち割りトレンチにおいて詳細な観察と記載を行った。

断ち割りトレンチ調査により、帯状をなす砂礫層の高まりは、上の凸型の外形をなして遺構検出面下に埋没していることが判明した。これらの砂礫層では、おもにトラフ型斜交層理・葉理をなす堆積構造が観察される（堆積Unit8）。帯状をなす砂礫層の高まりの間には、トラフ型斜交層理・葉理ないし水平層理・葉理をなす砂層が存在する（堆積Unit4～6）。

上記した堆積層は、堆積構造から掃流による一方向流によって形成されたと考えられる。遺構検出面およびその下に累重する堆積層は、砂礫質の堆積物が優勢で、側方への細粒化が顕著でなく、砂泥層や泥層との同時異相関係が認められないことが特徴として見いだされる。このような堆積層累重の特徴は、網状河川の堆積システムにおいて多く認められるとされている（Miall, 1996, 増田, 1999）。湿潤地域の扇状地では、一般的に網状流路が発達することが指摘されている（Reineck and Singh, 1980, チョーレーほか, 1995）。本遺跡は、高知県（1966）の地形分類図によると沖積扇状地の末端部に位置している（図3-8・9）。扇状地河川では、一般的に河岸岸が低く、河床変動に関係する粒径集団の土砂移動が激しいので、堆積しやすい場所では、河床が周辺より高くなり、流路変更が生じる（山本, 2004）。このような流路変更では、それまで流下していた流路が形成していた地形（砂州による凹凸面）をそのまま残すことも指摘されている（山本, 2004）。

以上の検討結果をふまえると、今回の調査区で認められた遺構検出面をなす基盤層は、扇状地の堆積環境下において網状流路の河川堆積システムによって形成されたものと判断される。このうち、上に凸型を示す帯状の砂礫層は、扇状地上の流路変更によって生じた河道堆積地形であることが推察される。砂礫層の凹部を埋積する砂層は、層相から洪水流によって運搬されたと推定される。この砂層はおもに中粒砂～粗粒砂で構成されるが、緩勾配の扇状地河川では、洪水によって細粒砂～中粒砂が堆積することが知られており（山本, 1994）、粒度組成の点からも調和的な傾向と判断される。

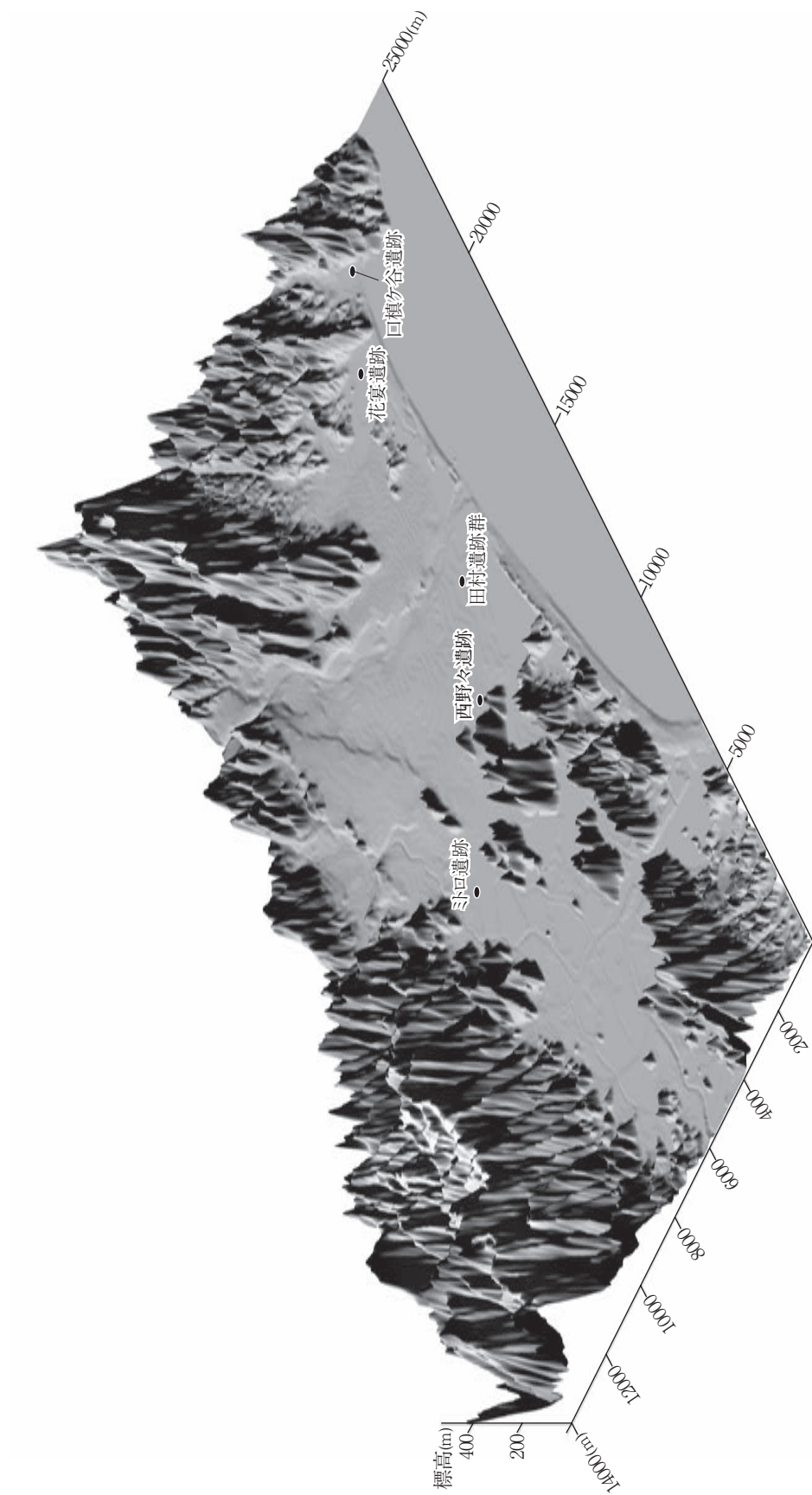
② 遺構検出面およびその上位に累重する堆積層

本節では、弥生時代以降の遺構検出面となる層準の上位に累重する堆積層および遺構埋土の特徴について、現地での肉眼観察および粒度分析、軟X線写真による層相観察に基づき検討を行う。

遺構検出面上では、弥生時代以降の遺構・遺物の他に、腐植に富む黒褐色泥層で埋積された数条の流路状の凹地も確認されている。この腐植質泥層は、粒度分析の結果、シルト質粘土に分類される堆積物によって構成されることが明らかとなった。

日本ペトロロジー学会編（1997）のポスト法による分解度判定基準によると、流路状の凹地を充填する腐植質に富むシルト質粘土層は、未分解の植物遺体の挟在がほとんど認められず、かなり強度に腐植化～ほぼ完全に分解（H7～H9）に相当する。このような分解度からは、流路状の凹地を充填する腐植質シルト質粘土層が、土壌分類上の黒泥土に分類されることが示唆される。なお黒泥土とは、水位低下などにより堆積物中の植物遺体の分解が進行して形成され、地下水水位が高く、水位が地表付近に存在するような土壌環境下で形成される（坂口, 1974, 犬伏・安西, 2001）。

5. 考察 (4) 調査区に存在する堆積層の特徴



国土地理院数値地図50mメッシュ(標高)を使用して作成

図3-8 調査地点位置図

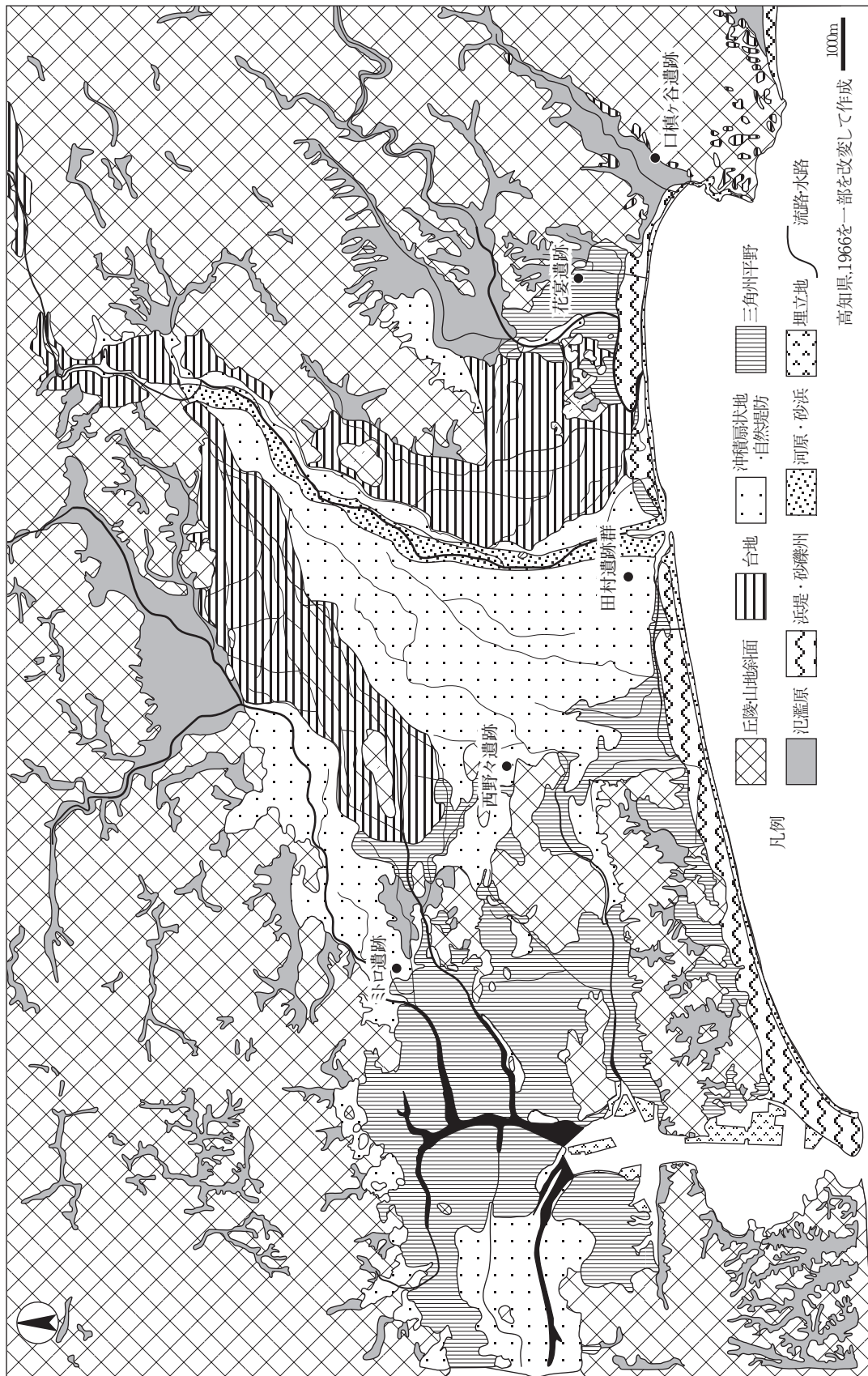


図3-9 西野々遺跡周辺の地形分類図

5. 考察 (4) 調査区に存在する堆積層の特徴

このようなⅡ区4地点で実施した流路状の凹地を埋積する腐植質シルト質粘土層では、葉理や層理の存在が認められず、壁状をなす層相を示すことが軟X線写真観察から認識される(図3-10, 4地点:B層下部)。このような層相からは、腐植質シルト質粘土層が非常に静穏な堆積環境下で形成されたことがうかがえる。また、珪藻分析結果では、落ち込み内から石灰分を多く含んだ貧栄養の小型の水域の池や沼等に多く認められる止水性種の珪藻化石が多産している。上記のような観察および珪藻分析結果をふまえると、流路状の凹地内では、周囲の地表面上に形成された土壌などの地表面物質などが穏やかに流れ込むような浅い滞水域ないし湿地といった湿性～多湿の環境下で形成されたと推定される。

4地点では、流路状の凹地内を埋積する腐植質シルト質粘土層最下部について放射性炭素年代を実施しており、その腐植から 2790 ± 40 yrs BPの年代値が得られている。また、この層準の上位では、腐植質シルト質粘土層中部付近で弥生時代中期、最上部で古代の土器が検出されている。このような年代測定および発掘調査結果から、流路状の凹地内は、縄文時代晩期頃以降から古代頃にかけて埋積されたと考えられる。

軟X線写真の観察によると流路状の凹地内では、古代頃の層準になると生痕が発達するようになることが判る(図3-10, 4地点:B層最上部)。このような層相変化は、埋積が進行し堆積速度が小さくなり、同一層準での生物擾乱が繰り返されるようになったためであると解釈される。古代の層準より上位には、古代～中世の遺物包含層をなす黒褐色～灰黄褐色をなす泥質砂層が累重している。この層準では、塊状の層相を

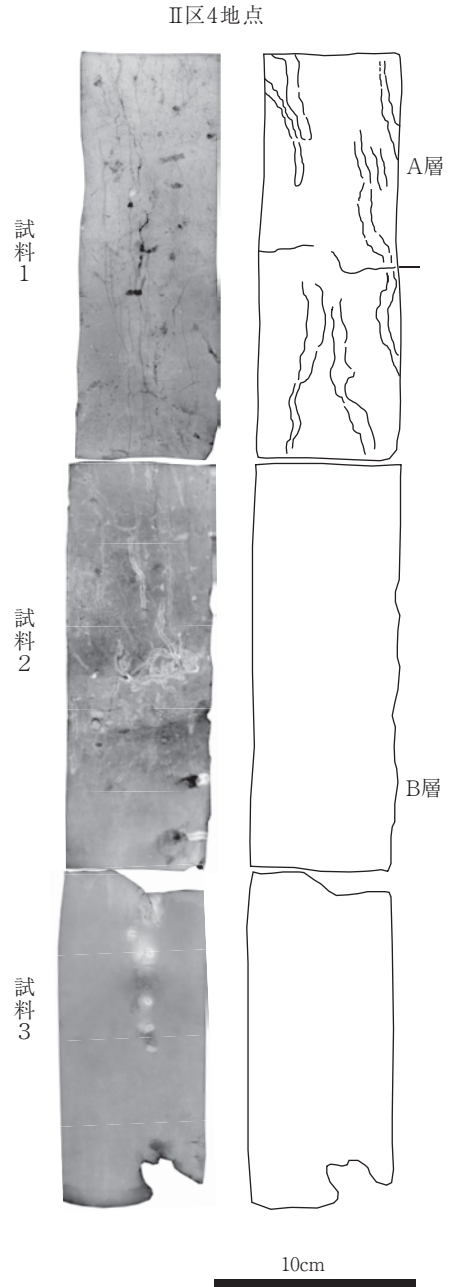


図3-10 軟X線写真とそのトレース図

引用文献

安西徹郎, 2001, 土壌分類と土壌調査. 土壌学概論, 朝倉書店, 93 - 108.
 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標种群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73 - 88.
 Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological

- Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35 – 47.
- 千木良雅弘, 1995, 風化と崩壊. 近未来社, 204p.
- チャーレー, R.J.・シャム, S.A.・サグデン, D.E., 1995, 現代地形学. 大内俊二訳, 古今書院, 692p.
- Fork, R.L. and Ward, W., 1957, Brazons river bar, a study in the significance of grain size parameters. *J.Sed.Petrol*, 27, 3 – 26.
- 原口和夫・三友清史・小林弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527 – 600.
- 犬伏和之・安西徹郎, 2001, 水田土壌. 土壌学概論, 朝倉書店, 132-149.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23 – 45.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1 – 20.
- 近藤錬三・佐瀬隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31 – 64.
- 高知県, 1966, 土地分類基本調査 高知 5万分の1 国土調査, 経済企画庁.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- 公文富士夫・立石雅昭編, 1998, 碎屑物の研究法. 地学団体研究会, 399p.
- 久馬一剛・八木久義訳監修, 1989, 土壌薄片記載ハンドブック. 博友社, 176p.
- 増田富士雄, 1999, 透水層・帯水層のトレース: ダイナミック地層学からのアプローチ. 地下水技術, 41, 1 – 15.
- Miall, A.D., 1992, Alluvial Deposits, in Walker, R.G. and James, N.P. (ed) Facies Models. Geological Association of Canada, 119 – 142.
- Miall, A.D., 1996, The Geology of fluvial deposits: Sedimentary facies, basin analysis, and petroleum Geology. Springer, 582p.
- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一, 1990, 淡水生デルタの形成過程 – 琵琶湖愛知川河口部を例として – 2. 地質構成と堆積相. 地質学雑誌, 96, 839 – 858.
- 森也寸志, 2000, 軟X線による非破壊土壌中の排水機構の解明. 土壌の物理性, No. 83, 59 – 65.
- 森也寸志・滋賀摂子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔, 1992, 土地利用による土壌間隙構造の差異 – 軟X線による観察を中心として –. 土壌の物理性, No. 66, 19 – 27.
- 中村純, 1965, 高知県低地部における晩水期以降の植生変遷, 第四紀研究, 4, 200 – 207.
- 成岡市, 1993, 土壌粗孔隙の形態とその測定法 – 土壌の不均一性と物質移動の研究前線. 日本土壌肥料科学雑誌, 64-1, 90 – 97.
- 成岡市・岩田幸良・駒村正治, 2000, 関東ローム層土における粗孔隙の透水, 通気および排水機能. 農業土木学会論文集, No. 208, 63 – 71.
- 日本ペトロロジー学会編, 1997, 土壌調査ハンドブック改訂版. 博友社, 169p.
- 成澤潔水, 1975, 木材 – その特性と巧用. パワー社, 160p.
- 小野由香編, 2002, 田村遺跡発掘調査概報 – 高知空港第2次拡張整備事業に伴う平成8～13年度田村遺跡群発

引用文献

- 掘調査概要報告－(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 36p.
- Reineck, H.E. and Singh, I.B., 1980, *Depositional Sedimentary Environments* (2nd ed.), Springer, 551p.
- 坂口豊, 1974, 泥炭地の地学－環境の変化を探る－. 東京大学出版会, 329p.
- 齊藤文紀, 1993, 軟X線写真観察法. 第四紀試料分析法2 研究対象分析法 日本第四紀学会編, 東京大学出版会, 103－108.
- 佐藤幸一, 1990a, 八郎潟干拓地重粘土水田土の粗孔隙の発達とその意義. 農業土木学会誌, 60, 25－30.
- 佐藤幸一, 1990b, 八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗孔隙の発達とその意義. 農業土木学会誌, 60, 287－292.
- Stuiver, M., and Reimer, P. J., 1993, Extended 14C database and revised CALIB radiocarbon calibration program, *Radiocarbon* 35:215－230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M., 1998. INTCAL98 Radiocarbon age calibration 24,000 - 0 cal BP. *Radiocarbon* 40:1041－1083.
- Wentworth, C.K., 1922, A scale of grade and class terms for clastic sediments. *J. Geol.*, 30, 377－392.
- 山中三男, 1978, 高知県の植生と植物相. 林野弘済会高知支部, 461p.
- 山中三男・伊藤由美子・石川真吾, 1992, 高知平野の岡豊低湿地完新世堆積物の花粉分析. *日本生態学会誌*, 42, 21－30.
- 山本晃一, 1994, 沖積河川学 堆積環境の視点から. 山海堂, 470p.
- 山本晃一, 2004, 構造沖積河川学－その構造特性と動態－. 山海堂, 690p.

第Ⅳ章 考 察

1. はじめに

今回報告する第Ⅰ調査区(Ⅰ区)と第Ⅱ調査区(Ⅱ区)は西野々遺跡の中ではほぼ中央部に位置する。他の調査区(Ⅲ～Ⅷ区)の整理作業は継続中であるが、調査は終了しており、弥生時代中期末から後期前半を中心とした集落がⅠ区からその東側のⅦ区にかけて展開し、奈良時代末から平安時代前半の官衙関連遺構がさらにその東側のⅦ区に中心的な建物を配することが判明している。また、前述の官衙関連遺構は単位規模に大小はあるもののほぼ全域にみられる。また、平安時代後半の遺構も散見される。

中世段階は各調査区から屋敷跡が確認されているものの区画は溝などで圍繞されたものではなく限定的なもので屋敷地は400～600㎡とみられることから一般百姓層(廣田 2002)のものと考えられる。一方、特殊な墓がⅢ区で確認されていることからして武士の屋敷が存在した可能性も考慮される。

以上の考古学的所見は古環境によるところが大きく、古い時代ほどその影響が看取され、中世以降では多くの部分で生活領域の拡大が窺える。すなわち、この地に人の痕跡が初めてみられる弥生時代中期末から後期前半は基盤に砂礫層が堆積した微高地ではなく住居を作りやすい砂質シルト層からシルト質粘土が基盤にある部分を選択している。古代になると掘立柱建物は概して基盤がしっかりした部分に作られていることが窺える。中世以降は、後述している流路状窪地が埋まってはいるもののそれ以外に屋敷地を選定しているようである。

以下、今回の調査区で確認された遺構を中心に時代ごとに考察してみたい。

2. 弥生時代

Ⅰ区から竪穴住居跡や掘立柱建物跡など集落の痕跡を留める遺構が確認されており、それらは東のⅦ区に展開している。現在確認している竪穴住居跡は58軒で、北への拡がりが見え、集落全体では少なくとも100軒、場合によっては150軒程度あったものと推測され、その範囲は、東西が約300m、南北が推定約250mとみられ、大規模集落を構成していた可能性も考慮される。

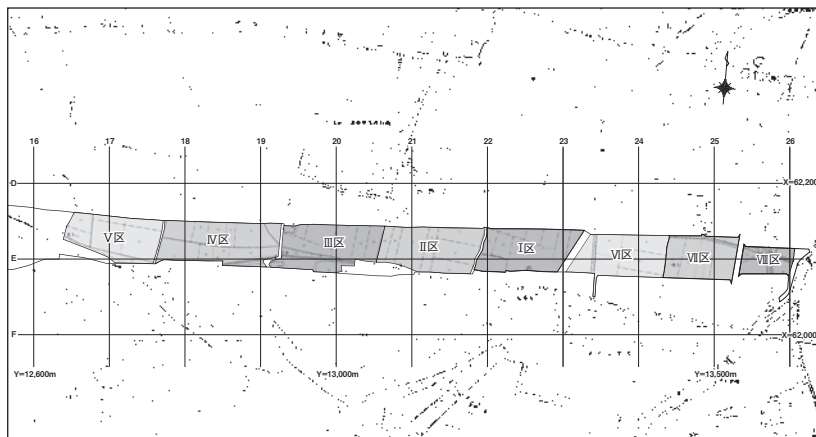


図4-1 西野々遺跡調査区全体図(S=1/10,000)

本遺跡の東方約1.5kmには当時の拠点集落である田村遺跡群があり、有機的な関係にあったことは想像に難くない。その詳細についてはⅦ区の報告に譲ることとするが、今回の発見は当時の集落展開を考える上で貴重な資料となろう。

具体的には、竪穴住居跡2

4. 古代

軒と掘立柱建物跡2棟などは中期末から後期前半のものとみられ、前述の集落の時期に該当する。一方、後期後半と考えられる竪穴住居跡も1軒確認されている。Ⅵ区でも一定確認されているものの散発的で、中期末から後期前半の集落に比べると小規模なものとなっている。

この内、SB-101は住居跡とみられ、西隣にある舟形土坑SK-101はそれに付随したものと判断され、集落の住居形態は、竪穴を中心に掘立も併設していたものと考えられる。

前述のとおり集落の中心はⅥ区にあるが、当該期の遺構は全域で確認されている。当然、その数は少なくなるものの溝跡を中心に検出されており、中でもSD-202・203と関連するのではないかとみられる溝跡がⅤ区まで延びており、その総延長は400mにも及ぶ。特に、Ⅲ区では複数の溝跡が確認されており、水田耕作との関連が考量される。いずれも両端は流路状窪地ないし低湿地部分にある。

このように今回の発掘調査では、Ⅰ区で集落の西端部、Ⅱ区で集落縁辺部での様相の一端を垣間見る資料を得ることができた。

3. 古墳時代

古墳時代の遺構の分布はⅡ区東半に限られ、土坑1基、溝跡4条を検出した。溝跡4条はⅡ区東半に堆積する流路状の窪地の西肩部に、ほぼ並行に位置している。溝跡の中には古代の遺構に切られるものもあり、流路状の窪地が埋まって行く段階で利用されたとみられる。しかし溝の性格については不明瞭である。溝跡の基底面には農耕具の痕跡が残るものもあり、溝が掘削されて比較的短期間に埋まった可能性がある。これらの遺構は出土遺物から、6～7世紀のものとみられる。全体的な遺構数としては非常に少ないが、後世の遺構から古墳時代の遺物が一定出土しており、周辺に当該期の遺構があったと考えられる。

遺跡から1km内に所在する3丘陵には、一基～数基の古墳が築造され古墳群（南国市 1979）が形成されている。それはこの地域に、古墳築造が可能な集団が存在した事を示唆している。

4. 古代

本遺跡を特徴付ける時代である。昨今の発掘調査¹⁾では官衙関連遺構や遺物が発見され、土佐における古代官衙の様相が明らかになりつつある。その中で問題となっているのが、国衙や郡衙以外の官衙関連施設である。いずれも規模やその裏付けが郡衙レベルとは言えないものの一定規模の建物群を構成しており、中には土佐国衙跡のこれまでの調査で検出されていない規模の建物が復元されている例もある。一方、その性格について言及したものはほとんどなく、単に官衙関連施設と記述しているに止まっているものが多い。

今回確認された掘立柱建物跡も、方形の掘り方の柱穴で構成された建物跡であり、単なる一般的な建物とは峻別されるものである。また、緑釉陶器や製塩土器などの出土遺物からも裏付けられる。その性格については調査段階に「郷ノ前」の地名（図1-2）の存在から郷家との関わりを考えたが、後述のとおりその地名は後世の誤りの可能性が高いことから傍証とはなり得ない。よって、考古学的な見地からのアプローチによる以外に方法はないが、現状では「郡の下部の郷には官衙を示す法的

規定はなく、官僚として任用されるのは郷長一人であることなどから、各独自の官衙は存在しないとする説が有力である。しかし、一方、平城宮下層出土の墨書土器「五十戸家」は里家（郷家）を指すこと、郡衙より下位レベルの官衙関連遺跡が多数みられることなどから、各郷にも官衙すなわち郷家（郷衙）が設けられていたとする説も示されている。後略」（山中 2003）となっている。山中氏が述べているように郷単位の独自の施設であるのか郡衙の出先機関と解すべきかは本報告で結論付けることはできないが、西野々遺跡を評価するには避けて通れない問題であろう。今後報告予定のⅢ区、Ⅶ区にはそれに示唆を与える資料があり、その際に総括したい。

さて、今回復元した掘立柱建物跡は 24 棟である。この内、方形の柱穴で構成されたと思われるものは 16 棟で布掘りの建物⁽²⁾が 1 棟あり、SD - 220 ~ 222 もその形状と間隔からみてその可能性も考えられる。円形の柱穴で構成された建物も柱径はいずれも 50 cm 以上であり、関連建物とみて差し支えないものと思われる。一方、遺物では奈良時代後半から平安時代初めにかけてのものが多くを占めるものの 7 世紀後半に遡り得るもの⁽³⁾も一定出土している。また、次回以降の報告になるが梁行 3 間の建物も確認されており、その初現についても考慮する必要があるだろう。

これら建物は、Ⅰ区では棟方向により大きく 3 グループ（N - 8 ~ 10° - E と N - 78 ~ 80° - W, N - 12 ~ 13° - E と N - 74 ~ 76° - W, N - 0 ~ 2° - E）に分けることができ、さらに同一グループにある SB - 111 ~ 113 の重複関係から 3 時期の変遷、同じく SB - 104 と SB - 105 との位置関係から 2 時期の変遷が窺える。これからすると少なくとも 6 時期の変遷を考慮しなければならない。Ⅱ区では、Ⅰ区ほど棟方向に企画性を看取できないが、2 グループ（N - 13 ~ 15° - E と N - 66 ~ 78° - W, N - 0°・84° - E と N - 81 ~ 86° - W）に分けることができ、前者では SB - 205 と SB - 206 との重複関係から 2 時期の変遷が窺える。このことから少なくとも 3 時期の変遷が考慮されるもののⅠ区の変遷の中に包括されよう。よって、今回確認した建物は少なくとも 6 時期の変遷があったものと判断され、比較的長期間存続したものと考えられる。なお、Ⅰ区付近の真北方向角は 0° 4' 41" であり、真北を基準とした建物跡はなく、地形等に左右されていた可能性が考えられる。

一方、建物規模は SB - 204 が桁行 5 ~ 6 間である以外、2 × 2 間ないし 3 × 2 間と小規模である。また、総柱建物がⅠ区で 2 棟、Ⅱ区で 6 棟あり、倉庫がⅡ区でまとまっている。

建物以外では、溝跡に一定の特徴がみられる。すなわち、直線的に掘削された溝跡（SD - 107・113 ~ 115・123・214・223）と縁辺部に沿った形で掘削された溝跡（SD - 106・112・115 ~ 119）である。前者では明確に区画溝とは言い難いものもあるが、SD - 214 などは建物の棟方向とも一致しており区画の一端をなしていたものと考えられる。一方、後者の中にはⅡ区の南の山麓部をとおり、Ⅲ区で検出されている溝跡に繋がっている可能性のある溝跡があるものと考えられ、それらは区画ではなく用排水に関連したものでなかろうか。区画について、先の溝跡以外に第Ⅱ章で記したようにⅠ区では建物群を囲むように小さな柱穴が無数に検出されている。復元できていないが、堀跡等が存在した可能性も考慮される。

以上、Ⅰ区とⅡ区の古代の遺構について掘立柱建物跡を中心にみてきたが、いずれも微高地上に立地し、流路状窪地を挟んで二つのユニットがあり、少なくとも 6 時期の変遷が考えられる。これらが西野々遺跡の中でどのような位置を占めていたか、今後報告する中で探っていきたい。

5. 中世

中世の遺構は、Ⅰ区西半を中心に掘立柱建物跡10棟、塀・柵列跡8列、土坑20基、溝跡28条、ピット693個、Ⅱ区西半を中心に掘立柱建物跡21棟、塀・柵列跡15列、土坑32基、溝跡30条、ピット2,655個を検出した。Ⅰ区では14世紀の遺構、Ⅱ区では12～14世紀の遺構を確認した。遺構の多くは切り合っており、長い期間に互って屋敷地として利用されていたことが窺える。

Ⅰ・Ⅱ区の等高線をみると、概ね北から南の山際に向かって徐々に低くなっていく。この等高線に沿うように、中世の区画溝とみられる東西溝が配されている。溝幅は約0.5～1.3m前後を測り、長軸方向はN-75～79°-Wの範疇に収まる。また区画溝の中には、ほぼ直角に屈曲するものもみられる。

掘立柱建物跡は計31棟復元した。棟方向は、Ⅰ区では南北棟がN-8～10°-E、東西棟がN-78～81°-W、Ⅱ区では南北棟がN-3～17°-E、東西棟がN-59～86°-Wの範囲に収まり、非常に規則性のある配置である。これは区画溝の長軸方向と一致しており、溝を意識した配置であることが窺える。掘立柱建物跡の中には間仕切柱を持つものがあり、そのうちの比較的規模の大きなものは母屋であったと考えられる。2間×1間または1間×1間で、面積が10㎡に満たない小規模な建物は、倉庫的な性格を持つとみられる。これらは母屋と並行に配置されており、屋敷の付属施設の可能性がある。掘立柱建物跡の軸方向はほぼ同じであるが、重複して建つものもあり、二回以上の建替が行われたと考えられる。

塀・柵列跡はⅠ・Ⅱ区合わせて23列確認した。掘立柱建物跡ないし区画溝に並行するものが多く、これらは溝とともに屋敷地を区画するものであったとみられる。またⅡ区西南部で検出した溝跡(SD-247～254)は、約1.5mの等間隔で所在する。これらは検出長3.36～9.26mと短く、浅いことから畝状遺構の可能性もある。

遺物は、土師質土器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁、鉄製品などが遺構から出土した。

Ⅰ・Ⅱ区の小字は、郷ノ前、下道、親田、明治田にあたる。16世紀に行われた長宗我部氏による地検では、「新田」「カミテンヤシキ」「ヲヤタ本谷壺町弐反トあり」の記載(高知県 1958)がみられる。「カミテンヤシキ」は下々ヤシキとあるが、「新田」「親田」は畠、散田となっている。また「郷ノ前」の地名はみられず、地検の順序から「坊の前」がそれにあたる可能性がある。今回の調査では14世紀までの遺構・遺物が中心であり、16世紀のものは確認できていない。長宗我部地検帳には遺跡の北の小字にヤシキ名が多くみられ、当該期には屋敷は北に移動し、Ⅰ・Ⅱ区は耕作地となっていたと考えられる。

6. 近世～近代

Ⅰ区で近世の土坑2基、Ⅱ区で近代の土坑6基を検出した。Ⅰ区の土坑からは肥前系磁器が出土しているが、遺構の性格は不明である。Ⅱ区で検出した土坑は近代のものとみられ、そのうちの1基は一時的に隣接する小川で捕れた魚を入れておく、魚溜めと呼ばれるものであったようである。近世以降西野々遺跡は、現在の景観と近い耕作地として利用されるようになっていくと考えられる。

7. 流路状窪地について

西野々遺跡Ⅱ区東半では、窪地状に黒色～黒褐色シルト質粘土が堆積するのを確認した。この窪地は南北方向に流路状に延びており、本来の流路とは異なるがその形状から流路状窪地として報告した。窪地内の堆積層はシルト質粘土が主体となっており、砂粒や礫の顕著な堆積はみられず、比較的静穏な状態で堆積したと考えられる。自然科学分析の結果から、窪地内は縄文時代晩期以降から古代頃にかけて埋積した事が明らかとなった。

肩部では、弥生時代から古代にかけての遺構を検出しており、当該期には窪地付近は常時ではないにしろ沼地を呈していたと考えられる。また堆積層上層では、チャートまたは砂岩の大型大礫から小型巨礫、約20個をほぼ同じ高さで検出した。これらは南接する山から、人為的に遺跡内に持ち込まれたものとみられるが、どのような意図で窪地部分に置かれたものかは不明である。

窪地の埋積が進み、現在のような平坦な地形となるのは古代以降のことである。

8. おわりに

今回の報告では、西野々遺跡の一端を垣間見ることができた。すなわち、弥生時代中期末から後期前半の集落、奈良時代後半から平安時代初めの官衙関連の建物群そして14世紀を中心とした中世の屋敷跡の存在など西野々遺跡に残存するほぼ全時代の遺構を確認することができた。しかし、それらの多くは集落の縁辺部であったり、周辺部のありようをなすもので、本質を解明するには次回以降の報告に委ねるしかなかるう。やはり、遺跡の中心部であるⅥ区とⅦ区の報告は欠かすことはできないであろうし、類例のないⅢ区の溝跡の状況など未報告部分には西野々遺跡を特徴付ける遺構が数多く残っている。それによって、西野々遺跡の評価が可能であると考えられる。よって、今回の報告は西野々遺跡の序章に過ぎない。

最後に、書き記して置かなければならないことが二つある。一つは、この一連の調査が高知平野の遺跡の生い立ちを考察する上で千載一遇のチャンスであることから当時大阪市立自然史博物館の館長であった那須孝悌氏に現場指導をお願いした。二度目の現場指導(図2-3)が図らずも最後となってしまった。また、Ⅰ区の調査を担当し本報告を執筆すべきであった曾我君がそれを果たせなかったことである。立場上私がそれを受け持ったが、本人がまとめていたならまた違ったアプローチの仕方があったかもしれない。那須先生、曾我君ともども残念でならない。ご冥福を祈る以外にない。

二つ目は報告書のフルDTP化への取り組みである。DTPは15年ほど前から行っていたが、整理作業員二人に1台の割でコンピュータを配備できたのは平成16年度からである。まさに、この一連の報告書のための取り組みであった。平成16年度を中心に短い時間で2時間、長い時は半日の講習を33回行って来た。初めてコンピュータに触れる整理作業員もあり、ゼロからの出発であったが担当した整理作業員全員が実測図の取り込みとデジタルトレースや写真の選択範囲の指定等々できるまでになり、改良を加えなければならぬところはあるにせよフルDTP化は現実のもの⁽⁴⁾となった。発注から納品までの大幅な期間短縮と経費削減には欠かすことはできないし、より高品質なものに仕上がる。今後、この資産を活かすも殺すも調査員の熱意ある取り組み次第であろう。

註

- (1) 平成 19 年度に行った土島田遺跡の調査では方形の掘り方を有する掘立柱建物跡 7 棟, 工房跡とみられる竪穴遺構 2 基が確認され, 平成 16 年度から波介川河口導流事業に伴って実施している北ノ丸遺跡や上ノ村遺跡でも官衙関連の遺物が出土している。
- (2) 山中氏の分類では I 類に当たるものと考えられる。
- (3) 杯蓋にかえりが付く所謂陶邑Ⅲ形式の須恵器で, 土佐でこのタイプがどこまで残るのか検討する必要がある。
- (4) フルDTPの試みは『比江廃寺跡Ⅲ－平成6・7年度の確認調査報告書』2007で行っている。

引用・参考文献

- 廣田佳久 2002 『中世住居の研究－遺構からみられる四国の住居の様相－』高知女子大学大学院人間生活学研究所修士論文
- 山中敏史 2003 「I－3 地方官衙」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 高知県立図書館 1958 『長宗我部地検帳 長岡郡 上』
- 南国市史編纂委員会 1979 『南国市史』南国市

遺物觀察表

凡例

1. 法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品、石製品の場合は口径が全長(cm)、器高が全幅(cm)、胴径が全厚(cm)、底径が重量(g)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。なお、カッコ付きの数値は残存値を表している。
2. 遺存状態については、遺存部が1/6に満たないものは「一部が残存」または「破片」、1/10に満たないものは「ごく一部が残存」または「細片」と表現している。

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
1001	第 I 層	弥生土器 甕	-	(2.5)	-	-	黒褐色 にぶい橙色	良	口縁部の一部が残存, 外面に粘土帯を貼付
1002	〃	〃	13.8	(2.9)	-	-	にぶい赤褐色 灰褐色	〃	口頸部の一部が残存, 口縁部ヨコナデ調整
1003	〃	〃	18.9	(2.8)	-	-	にぶい褐色 にぶい赤褐色	〃	口頸部の一部が残存, 口縁端部に凹線文, 外面には煤が付着
1004	〃	〃	-	(4.5)	-	-	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	〃	肩部の一部が残存, 外面には楕円形浮文, 粘土紐, 円形浮文に櫛状工具で円孔を穿つ。
1005	〃	土師器 甕	-	(2.3)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	口縁部のごく一部が残存, 端部は浅い内傾する凹面, 内外面ヨコナデ調整
1006	〃	〃	-	(2.4)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口縁部のごく一部が残存, 外面にはハケ目がわずかに残存
1007	〃	〃	-	(2.7)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	口縁部のごく一部が残存, 端部は凹面, 器面は摩耗
1008	〃	〃	-	(2.7)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良好	口縁部の一部が残存, 内外面ともヨコナデ調整
1009	〃	〃	-	(7.4)	-	-	にぶい橙色 明赤褐色	やや不良	甕の把手の一部とみられる。把手はヨコ方向に付いていたものとみられる。
1010	〃	杯蓋	-	(1.8)	-	-	にぶい橙色 〃	良	天井部とつまみが残存, つまみ径2.5cm, つまみ高1.2cm, 外面はヨコナデ調整, 他はナデ調整
1011	〃	杯	12.6	3.1	-	8.3	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の一部と底部約1/2が残存, 粘土紐巻き上げ成形, 底部外面はヘラ切り, 器面は摩耗
1012	〃	皿	-	(1.9)	-	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部から底部の一部が残存, 内外面はヨコ方向のヘラ磨き, 底部はヘラ切り後にヘラ磨き
1013	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.2)	-	-	黄灰色 灰黄褐色	良好	天井部とつまみが残存, 壺の蓋の可能性あり, 外面は自然釉がかかりハダ荒れ, 内面はナデ調整
1014	〃	〃	-	(1.6)	-	-	灰色 〃	〃	天井部とつまみの一部が残存, 内面にはヘラ記号らしき痕跡あり。つまみ径2.3cm, つまみ高1.0cm
1015	〃	〃	-	(1.7)	-	-	灰白色 〃	不良	つまみと天井部の一部が残存, 外面には回転ヘラ削りの痕跡がわずかに残る。器面は全般に摩耗する。
1016	〃	〃	-	(1.5)	-	-	灰白色 褐灰色	良	天井部約1/4が残存, 外面は回転ヘラ削りで自然釉がかかり, 他は回転ナデ調整で天井部内面にはナデ調整を加える。
1017	〃	〃	14.4	(1.6)	-	-	褐灰色 黄灰色	〃	天井部から口縁部の一部が残存, 外面には回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整
1018	〃	〃	-	(1.7)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 内外面とも回転ナデ調整で内面にはヘラ記号あり。
1019	〃	〃	-	(1.2)	-	-	黄灰色 〃	〃	口縁部のごく一部が残存, 内外面とも回転ナデ調整
1020	〃	〃	-	(1.1)	-	-	〃 〃	良好	口縁部の一部が残存, 内外面とも回転ナデ調整で, いずれも器面にはナデ調整を加える。
1021	〃	〃	-	(1.0)	-	-	灰色 黄灰色	良	口縁部の一部が残存, 内外面とも回転ナデ調整
1022	〃	〃	-	(1.3)	-	-	灰黄色 灰黄褐色	良好	口縁部の一部が残存, 内外面とも回転ナデ調整
1023	〃	〃	-	(2.3)	-	-	にぶい黄褐色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 内外面とも回転ナデ調整で, 内面にはナデ調整を加える。
1024	〃	杯身	-	(1.0)	-	7.2	褐灰色 灰色	良好	底部約1/4が残存, 底部外面は回転ヘラ切り後にナデ調整, 内面は回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。
1025	〃	〃	-	(1.1)	-	7.4	褐灰色 〃	〃	底部約1/4が残存, 底部外面は回転ヘラ切り後にナデ調整, 内面は回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。

第 I 調査区 遺物観察表 2

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面 / 外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1026	第 I 層	須恵器 杯身	-	(1.4)	-	7.6	褐灰色 灰色	良	底部約 1/4 が残存, 底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整, 他は回転ナデ調整, 内面にはナデ調整を加える。
1027	〃	〃 〃	-	(1.0)	-	8.2	灰黄褐色 〃	やや不良	底部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にはナデ調整を加える。
1028	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	8.2	黄灰色 灰色	良好	底部約 1/4 が残存, 内面と体部外面に自然釉, 器面は回転ナデ調整
1029	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	8.4	灰色 〃	やや不良	底部の一部が残存, 高台周囲はヨコナデ調整, 他は回転ナデ調整
1030	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	8.6	明褐灰色 〃	良	底部の一部が残存, 底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整, 他は回転ナデ調整で, 内面にはナデ調整を加える。
1031	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	10.9	黄灰色 〃	やや不良	大型の杯で, 底部から体部の約 1/5 が残存, 底部外面はナデ調整, 高台周囲はヨコナデ調整, 他は回転ナデ調整
1032	〃	〃 杯	-	(1.3)	-	5.6	褐灰色 〃	良好	底部の一部が残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 他は回転ナデ調整
1033	〃	〃 高杯	-	(5.2)	-	-	〃 〃	良	脚柱部約 1/3 が残存, 内外面とも回転ナデ調整, 外面にはハダ荒れがみられる。
1034	〃	〃 壺蓋	-	(2.3)	-	-	灰黄褐色 〃	良好	口縁部のごく一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面には自然釉がかかる。
1035	〃	〃 壺	-	(1.7)	-	-	灰色 褐灰色	良	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1036	〃	〃 〃	-	(0.7)	-	-	灰色 明褐灰色	〃	口縁部の一部とみられる。器面は回転ナデ調整, 外面いく分摩耗
1037	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	-	黄灰色 灰色	良好	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にはハダ荒れがみられる。
1038	〃	〃 〃	9.8	(3.2)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1039	〃	〃 〃	-	(5.8)	-	-	黄灰色 〃	〃	長頸壺の頸部約 1/2 が残存, 外面上位に 2 条の凹線, 器面は回転ナデ調整で, 外面はハダ荒れが著しい。
1040	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	頸部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面には比較的均一な自然釉がかかる。
1041	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	(7.2)	灰色 〃	〃	台付壺の底部約 1/2 が残存, 器面は回転ナデ調整
1042	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	8.2	褐灰色 〃	〃	台付壺の脚台部約 1/4 が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面にはハダ荒れがみられる。
1043	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	11.0	灰色 〃	〃	底部の一部が残存, 底部外面は未調整, 外面は指ナデ調整, 内面はハダ荒れが著しい。
1044	〃	〃 甕	-	(2.7)	-	-	褐灰色 灰色	〃	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1045	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の一部が残存, 口縁端部に 1 条の凹線, 器面は回転ナデ調整
1046	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	-	褐灰色 〃	良	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1047	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	-	灰白色 黄灰色	〃	頸部から肩部の一部が残存, 頸部には回転ナデ調整, 肩部外面は平行のタタキ, 内面は同心円文のタタキ
1048	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	-	黄灰色 暗灰黄色	良好	頸部から肩部の一部が残存, 頸部には回転ナデ調整, 肩部外面は平行のタタキ, 内面は同心円文のタタキ
1049	〃	〃 〃	-	(6.2)	-	-	黄灰色 灰色	良	胴部の一部が残存, 外面布目状のタタキ, 内面同心円文のタタキ
1050	〃	〃 鉢	-	(4.9)	-	10.6	黄灰色 褐灰色	良好	底部約 1/6 が残存, 底部外面は未調整, 下部外面はヘラナデとナデ調整, 内面は回転カキ目調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1051	第 I 層	須恵器 器台	-	(3.7)	-	-	黄灰色 〃	良	口縁部の一部が残存, 外面には小さな凸帯と波状文, 器面は回転ナデ調整で, 全面に自然釉がかかり, 外面はハダ荒れ
1052	〃	土師質土器 杯	-	(2.3)	-	5.8	にぶい橙色 明赤褐色	やや不良	底部から体部の一部が残存, 成形 A 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整で内面にはナデ調整を加える。
1053	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	6.4	明赤褐色 〃	〃	底部から体部の一部が残存, 成形 A 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は摩耗し不明
1054	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.5	明赤褐色 橙色	良	底部から体部の一部が残存, 成形 A 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整で, 内面にはナデ調整を加える。
1055	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	6.4	にぶい橙色 〃	不良	底部から体部の一部が残存, 成形は A 技法, 底部外面は回転糸切りとみられる。他は回転ナデ調整
1056	〃	〃 〃	-	(1.0)	-	6.7	明赤褐色 にぶい橙色	〃	底部から体部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面は摩耗が著しい。調整は不明
1057	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	6.4	褐色 にぶい褐色	やや不良	底部から体部の一部が残存, 成形は B 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整で, 内面にはロクロ目が残る。
1058	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	7.0	にぶい黄褐色 にぶい橙色	不良	底部から体部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面の摩耗が著しく調整不明
1059	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	7.0	にぶい橙色 〃	〃	底部から体部の一部が残存, 成形は B 技法, 器面は摩耗が著しく調整は不明, 内面には水挽痕が明瞭に残る。
1060	〃	〃 〃	(12.5)	(3.6)	-	7.0	明赤褐色 橙色	〃	底部から口縁部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面は摩耗が著しく調整は不明
1061	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	-	にぶい赤褐色 橙色	〃	口縁部の一部が残存, 成形は A 技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は摩耗し不明
1062	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	5.5	〃 〃	〃	底部から体部の一部が残存, 底部外面は回転糸切りとみられる。器面は摩耗が著しく調整は不明
1063	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	6.0	にぶい黄褐色 〃	やや不良	底部のみ残存, 成形は A 技法, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面はナデ調整
1064	〃	〃 椀	-	(1.1)	-	-	にぶい橙色 浅黄色	不良	底部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面は摩耗が著しく調整は不明
1065	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	5.2	にぶい橙色 にぶい黄褐色	やや不良	底部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面は摩耗が著しく調整は不明
1066	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.2	灰黄褐色 にぶい褐色	良	底部約 1/3 が残存, 成形は A 技法, 器面は回転ナデ調整で内面にはナデ調整を加える。
1067	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	9.0	にぶい褐色 〃	〃	底部から体部の一部が残存, 成形は A 技法, 調整は回転ナデ調整とみられる。
1068	〃	〃 小皿	6.6	1.0	-	5.7	橙色 〃	〃	一部が残存, 成形は B 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整
1069	〃	〃 〃	6.4	1.5	-	4.8	にぶい褐色 明赤褐色	やや不良	底部 1/3 と口縁部の一部が残存, 成形は B 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整
1070	〃	〃 〃	6.8	2.0	-	4.3	にぶい橙色 橙色	〃	底部 2/3 と口縁部の一部が残存, 成形は A 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整
1071	〃	東播系須恵器 片口鉢	-	(2.7)	-	-	灰色 〃	良	口縁部の一部が残存, 調整は回転ナデ調整で, 外面には重ね焼の痕跡が残る。
1072	〃	瓦質土器 鍋	-	(1.9)	-	-	〃 〃	やや不良	口縁部の一部が残存, 器面は摩耗し調整は不明
1073	〃	〃 羽釜	-	(2.2)	-	-	灰色 褐灰色	〃	口縁部の一部が残存, 口縁部下端に小さな鏝が付く。器面は摩耗し調整は不明
1074	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	-	褐灰色 黄灰色	良	鏝周辺の一部が残存, 内面はヨコナデ調整とハケ調整, 外面は摩耗し調整は不明
1075	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	-	黄灰色 黒灰色	〃	鏝の一部が残存, 器面は摩耗し調整は不明, 外面には煤が付着

第 I 調査区 遺物観察表 4

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1076	第 I 層	瓦質土器 羽釜	-	(2.3)	-	-	褐灰色 〃	やや不良	口縁部の一部が残存, 口縁部下端には断面三角形の鐳が付く。器面は摩耗しており調整不明, 鐳下半に煤が付着
1077	〃	〃 〃	16.0	(4.9)	19.1	-	褐灰色 暗灰色	良	口縁部から上胴部の一部が残存, 口縁部下端に断面台形状の鐳が付く。器面は摩耗しており調整不明
1078	〃	備前焼 甕	-	(4.2)	-	16.1	灰褐色 〃	良好	底部の一部が残存, 底部外面は未調整, 外面は回転ヘラ削り調整, 内面はナデ調整
1079	〃	〃 播鉢	-	(4.8)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の一部が残存, 内面には回転ナデ調整の後に 9 本単位の条線を全面に施す。外面はヘラ削り
1080	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	-	褐灰色 にぶい赤褐色	〃	口縁部の一部が残存, 内面には 7~8 本単位の条線, 他はナデ調整, 関西産の可能性もあり。
1081	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	-	褐灰色 灰赤色	〃	底部の一部が残存, 内面には 6~7 本単位の条線, 他はナデ調整
1082	〃	〃 〃	-	(5.8)	-	11.6	灰褐色 にぶい赤褐色	〃	底部の一部が残存, 内面には 6 本単位の条線, 外面は指ナデ調整, 底部外面は未調整
1083	〃	白磁 碗	-	(1.9)	-	-	灰白色 〃	〃	玉縁口縁の一部が残存
1084	〃	〃 〃	-	(5.5)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から体部の一部が残存, 体部外面には回転ヘラ削り調整, 全面に灰白色釉を施釉
1085	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.8	灰色 〃	〃	底部約 1/2 が残存, 高台は削り出し高台, 外面は回転ヘラ削り調整, 見込は蛇の目状に釉ハギ
1086	〃	青磁 香炉	-	(1.1)	-	-	オリーブ灰色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 全面に施釉, 貫入あり。
1087	〃	唐津焼 蓋	10.3	(2.5)	-	-	暗赤灰色 黄灰色	〃	口縁部から天井部の一部が残存, 外面には刷毛目, 内面には鉄釉を施釉
1088	〃	〃 碗	-	(2.6)	-	3.4	灰オリーブ色 明灰黄色	〃	底部から体部の約 1/3 が残存, 体部外面は回転ヘラ削り調整, 口縁部から見込に施釉, 胎土目痕が 2 ヲ所残る。
1089	〃	肥前系磁器 紅皿	4.8	1.3	-	1.8	灰白色 〃	〃	約 1/3 が残存, 底部は削り出し高台, 外面には条線, 口縁部から見込に施釉
1090	〃	〃 碗	-	(2.5)	-	3.0	明オリーブ灰色 灰白色	〃	底部から体部の約 1/2 が残存, 底部は削り出し高台, 外面下端には 3 条の界線, 畳付は釉ハギ
1091	〃	〃 〃	6.5	3.3	-	2.5	明オリーブ灰色 〃	〃	口縁部から体部の一部と底部が残存, 底部は削り出し高台, 口縁部外面に笹葉文, 畳付は釉ハギ
1092	〃	瀬戸・美濃系 碗	-	(1.8)	-	5.2	灰オリーブ色 〃	〃	底部のみ残存, 底部は削り出し高台, 見込に五弁花のコンニャク判, 畳付は釉ハギ
1093	〃	京焼系陶器 碗	-	(4.3)	-	4.8	灰オリーブ色 灰黄色	〃	底部から体部の約 1/3 が残存, 底部は削り出し高台, 畳付は釉ハギ, 貫入あり。
1094	〃	近世陶器 皿	14.0	2.7	-	8.8	にぶい黄色 〃	〃	約 1/6 が残存, 底部は削り出し高台, 底部から体部外面は露胎, 口縁部から見込に施釉, 貫入あり。
1095	〃	〃 碗	-	(1.6)	-	4.8	灰黄色 〃	〃	底部約 1/5 が残存, 底部は削り出し高台で露胎, 体部外面から見込に施釉, 見込は蛇の目状に釉ハギ
1096	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	-	〃 〃	〃	体部の一部が残存, 外面は凹線状の文様
1097	〃	近世以降磁器 菊花皿	-	(1.3)	-	4.3	灰白色 〃	〃	口縁部以外約 1/3 が残存, 型作り, 底部は削り出し高台, 畳付は釉ハギ
1098	〃	〃 〃	7.5	1.6	-	4.1	オリーブ灰色 〃	〃	約 2/3 が残存, 型作り, 底部は削り出し高台, 見込に草花文, 畳付は釉ハギ
1099	〃	〃 碗	7.8	(3.3)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 全面に施釉
1100	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	3.0	灰オリーブ色 黄灰色	〃	底部と体部の一部が残存, 底部は削り出し高台, 体部外面は回転ヘラ削り, 体部外面から見込に灰釉を施釉

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
1101	第 I 層	近世磁器 碗	-	(3.1)	-	4.6	明緑灰色 緑灰色	良好	底部から体部の一部が残存, 底部は削り出し高台, 全面に青磁釉を施釉, 畳付は釉ハギ
1102	〃	〃	-	(2.6)	-	4.1	明緑灰色 明オリブ灰色	〃	底部から体部下半が残存, 底部は削り出し高台, 体部外面から見込に青磁釉を施釉, 見込は蛇の目状に釉ハギ
1103	〃	土製品 土錘	(4.8)	2.0	1.8	14.7	にぶい黄橙色 〃	良	円筒形で約3/4が残存, 孔径0.6cm, 表面にハケ状の圧痕が残る。
1104	〃	石製品 叩石	(11.0)	(7.2)	(4.9)	532.5	-	-	約1/2が残存, 石材は粗粒砂岩, 片面にわずかな敲打痕が残る。
1105	〃	〃 砥石	(8.3)	(5.4)	2.8	209.4	-	-	約1/2が残存, 石材は細粒砂岩, 4面に使用痕が残る。
1106	第 III 層	弥生土器 壺	-	(2.7)	-	6.4	黒褐色 灰黄褐色	良好	底部約1/4が残存, 底部外面にハケ目状の圧痕, 外面はタタキの後にハケ調整, 内面は指ナデ
1107	〃	須恵器 杯蓋	10.0	3.4	-	-	灰色 〃	〃	約2/3が残存, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整, 内面にナデ調整を加える。
1108	〃	〃	-	(1.8)	-	-	褐色 〃	やや不良	口縁部と天井部の一部が残存, 天井部外面には回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整, かえりは作り出し
1109	〃	〃	-	(1.0)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色	〃	口縁部のごく一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にはナデ調整を加える。
1110	〃	〃 杯身	-	(2.1)	-	-	黄灰色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 内面にハケ目の痕跡あり。
1111	〃	〃	-	(1.3)	-	-	〃	良好	底部の一部が残存, 底部外面には高さ0.5cmの高台が付く。器面は回転ナデ調整
1112	〃	〃	-	(1.5)	-	7.5	灰白色 〃	不良	底部の一部が残存, 底部外端部にハの字状に開く高さ0.6cmの高台, 器面は摩耗しており調整は不明
1113	〃	〃	-	(1.3)	-	10.0	黄灰色 灰黄褐色	やや不良	底部約1/3が残存, 底部外端部にハの字状に開く高さ0.5cmの高台, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整を加える。
1114	〃	〃 碗	-	(3.0)	-	5.1	褐灰色 黄灰色	良好	底部の一部が残存, 外面は回転ヘラ削りの後にナデ調整, 内面は回転ナデ調整
1115	〃	〃 高杯	-	(2.3)	-	-	にぶい黄橙色 灰白色	やや不良	基部が残存, 器面は回転ナデ調整, 杯部を中心に摩耗
1116	〃	〃	-	(5.0)	-	-	赤灰色 灰色	良好	脚柱部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1117	〃	〃 壺	9.0	(2.0)	-	-	褐灰色 〃	〃	長頸壺の口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1118	〃	〃 甕	-	(5.9)	-	-	黄灰色 〃	〃	頸部から肩部の一部が残存, 頸部は回転ナデ調整, 肩部外面は回転カキ目調整, 内面はナデ調整
1119	〃	〃	-	(4.5)	-	-	〃	〃	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, ハダ荒れがみられる。
1120	〃	〃	-	(4.7)	-	-	黄灰色 褐灰色	〃	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で外面中位に1条の凹線
1121	〃	〃	18.6	(6.8)	-	-	黄灰色 灰色	やや不良	口頸部から肩部の一部が残存, 口頸部は回転ナデ調整, 肩部はナデ調整, 口縁部にはハダ荒れがみられる。
1122	〃	〃 鉢	-	(2.6)	-	-	黄灰色 〃	〃	体部の一部が残存, 外面には断面三角形の凸帯, 器面は摩耗し調整不明
1123	〃	〃	-	(3.5)	-	-	褐灰色 黄灰色	〃	口縁部の一部が残存, 肥厚した口縁部下端に3条の沈線, 器面は回転ナデ調整
1124	〃	〃 器台	-	(5.8)	-	-	灰黄褐色 褐灰色	良好	口縁部の一部が残存, 外面に2条の凹線, 器面は回転ナデ調整, 内面には自然釉がかかる。
1125	〃	土師質土器 杯	-	(2.2)	-	4.3	にぶい褐色 にぶい橙色	不良	体部の一部が残存, 成形はB技法, 内面にはロクロ目が明瞭に残る。他は摩耗し, 調整不明

第 I 調査区 遺物観察表 6

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1126	第Ⅲ層	土師質土器 杯	-	(1.8)	-	6.7	にぶい黄橙色 〃	不良	底部から体部の約1/4が残存、底部外面は回転糸切りとみられる。他は摩耗し、調整不明
1127	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	7.0	〃 〃	〃	底部から体部の破片、成形はA技法、器面は摩耗が著しく調整は不明
1128	〃	〃 小皿	6.7	1.7	-	4.4	にぶい橙色 橙色	良好	底部1/2と体部から口縁部の約1/6が残存、成形はA技法、底部外面は回転糸切り、他は回転ナデ調整
1129	〃	〃 羽釜	-	(3.0)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存、口縁部下端に断面三角形の鐳が付く。口縁部ヨコナデ調整、鐳下半以下に煤が付着
1130	〃	東播系須恵器 片口鉢	-	(3.4)	-	-	灰色 褐灰色	〃	口縁部の一部が残存、器面は回転ナデ調整、内面にはナデ調整を加える。
1131	〃	〃 〃	-	(4.8)	-	10.2	黄灰色 〃	〃	底部から体部の一部が残存、外底面には平行線状の圧痕、他はナデ調整で、内面は器壁の剝離が目立つ。
1132	〃	瓦質土器 羽釜	-	(2.8)	-	-	〃 〃	良	鐳周囲の一部が残存、鐳が断面三角形を呈し、下半以下に煤が付着、残部はヨコナデ調整
1133	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	-	黄灰色 灰色	やや不良	口縁部の一部が残存、口縁部下端には断面三角形の鐳が付く。器面は摩耗が著しい。
1134	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の一部が残存、口縁部下端には断面台形状の鐳が付く。口縁部はヨコナデ調整
1135	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の一部が残存、口縁部下端には断面三角形の鐳が付く。口縁部はヨコナデ調整
1136	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	-	灰色 褐灰色	〃	口縁部の一部が残存、口縁部下端が小さな鐳となる。器面は摩耗し、調整は不明
1137	〃	備前焼 播鉢	-	(4.3)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良好	口縁部の一部が残存、器面はヨコナデ調整で、内面には6本単位の条線を施す。
1138	〃	石製品 石鍋	-	(3.9)	-	-	黄灰色 黒褐色	-	底部の一部が残存、内面はヨコ方向、外面はタテ方向の鑿痕跡、外面には煤が一部に付着
1139	ST-101	弥生土器 壺	-	(2.0)	-	-	にぶい褐色 黄灰色	良	肩部の一部が残存、外面には櫛描直線文の上に楕円形浮文、他はナデ調整
1140	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	-	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	肩部の破片、外面には2条の突帯、下にハケ調整、内面はナデ調整
1141	〃	〃 甕	9.6	(1.5)	-	-	橙色 〃	やや不良	口縁部の一部が残存、外面に粘土紐を貼付、器面は摩耗しており、調整は不明
1142	〃	〃 〃	10.6	(2.9)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良	口縁部約1/5が残存、口縁部はヨコナデ調整で貼付口縁、外面はタテ方向のハケ調整で煤が付着
1143	〃	〃 〃	12.5	(9.7)	12.7	-	にぶい赤褐色 にぶい褐色	〃	口頸部から上胴部の約1/4が残存、口縁部はヨコナデ調整で貼付口縁、頸部にハケ調整、胴部内面にはしまり目が残る。
1144	〃	〃 〃	14.1	(1.5)	-	-	にぶい褐色 灰褐色	〃	口縁部の一部が残存、貼付口縁となり、ヨコナデ調整で上端にヘラ状工具による刻目
1145	〃	〃 〃	15.2	(2.3)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存、貼付口縁となり、ヨコナデ調整で上端にヘラ状工具による刻目、内面にはハケ調整
1146	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	-	灰褐色 黒褐色	〃	口縁部の一部が残存、貼付口縁となり、ヨコナデ調整で上端にヘラ状工具による刻目、外面口縁下にヨコ方向のハケ調整
1147	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	〃	口縁部の一部が残存、外面に2条の断面三角形の突帯を貼付し、上の突帯にはヘラ状工具による刻目
1148	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	-	灰褐色 にぶい褐色	〃	口縁部の一部が残存、貼付口縁となり、棒状工具による刻目、口縁下にはタテ方向のハケ調整
1149	〃	〃 〃	18.0	(3.7)	-	-	灰褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存、端部に不均等な刻目、口縁下には小さな突帯、器面はヨコナデ調整
1150	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	-	橙色 〃	不良	口縁部の一部が残存、粘土を折り返して肥厚、内面はヨコナデ調整、外面は摩耗し、調整は不明

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
1151	ST-101	弥生土器 甕	15.0	(4.9)	-	-	褐色 〃	良	口縁部から肩部の約1/6が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 外面はタテ方向の粗いハケ調整, 内面は摩耗
1152	〃	〃 〃	-	(5.0)	-	-	にぶい橙色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 器面は摩耗し, 調整は不明
1153	〃	〃 〃	16.2	(2.2)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口頸部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 拡張した端部には2条の擬凹線文
1154	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	-	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	口縁部のごく一部が残存, 器面はヨコナデ調整で, 外面に4本単位の櫛描波状文が残る。
1155	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.9	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面はナデ調整
1156	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	7.6	黄灰色 褐灰色	〃	底部約1/4が残存, 底部外面はナデ調整, 外面はヘラナデ, 内面は指ナデ
1157	〃	〃 〃	-	(7.6)	-	7.8	黒褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/2が残存, 外面はナデ調整, 内面は指ナデ
1158	〃	〃 〃	-	(5.5)	-	8.4	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	底部の一部が残存, 外面はナデ調整, 内面は指ナデ
1159	〃	〃 鉢	-	(3.7)	-	6.2	灰褐色 褐灰色	〃	底部の一部と体部の約1/4が残存, 底部外面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 内面は指ナデ
1160	〃	〃 ミニチュア	5.2	(1.9)	-	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部約1/4が残存, 器面はヨコナデ調整
1161	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	7.8	にぶい褐色 〃	〃	裾部の一部が残存, 内面はヘラナデ, 他はナデ調整
1162	〃	石製品 扁平片刃石斧	5.5	3.8	1.1	42.8	-	-	基部に欠損がみられるもののほぼ完存, 全面を研磨し, 片側に刃部を作る。石材は粘板岩
1163	〃	〃 叩石	8.3	7.2	2.5	203.3	-	-	打ち欠ぎ痕跡あり, 両面に弱い敲打痕が残存, 石材は細粒砂岩
1164	〃	〃 〃	8.0	3.5	2.5	93.7	-	-	ほぼ完存, 両端部に敲打痕, 石材は中粒砂岩
1165	〃	〃 台石	9.6	7.0	6.3	779.0	-	-	完存, 5面に弱い敲打痕跡と磨滅痕, 石材は中粒砂岩
1166	〃	〃 投弾	3.4	2.7	2.0	25.3	-	-	完存, 表面に剝離がみられる。石材は中粒砂岩
1167	〃	〃 〃	3.7	3.1	2.1	34.9	-	-	完存, 石材は細粒砂岩
1168	〃	〃 〃	4.0	3.4	2.6	51.7	-	-	完存, 石材は中粒砂岩
1169	〃	〃 〃	4.0	3.7	2.4	46.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩
1170	〃	〃 〃	4.1	2.9	2.6	40.7	-	-	完存, 石材は中粒砂岩
1171	〃	〃 〃	4.1	2.8	2.1	33.4	-	-	完存, 石材は中粒砂岩
1172	〃	〃 〃	4.2	2.9	1.5	21.4	-	-	完存, 石材は中粒砂岩
1173	〃	〃 〃	4.3	3.7	1.8	39.6	-	-	完存, 石材は中粒砂岩
1174	〃	〃 〃	4.4	3.1	1.9	37.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩
1175	〃	〃 〃	5.3	3.3	2.2	51.5	-	-	完存, 石材は中粒砂岩

第 I 調査区 遺物観察表 8

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1176	ST - 102	石製品 砥石	20.0	11.1	6.3	1814.8	-	-	完存, 3面に使用痕, 石材は中粒砂岩
1177	SB - 101	弥生土器 壺	23.4	(1.5)	-	-	にぶい褐色 明赤褐色	良	口縁部の一部が残存, ヨコナデ調整の後に内面はヨコ方向のハケ調整, 外面は指押えの後にハケ調整
1178	SK - 101	〃 〃	15.8	(3.8)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から頸部の一部が残存, 口縁部は貼付口縁, 器面はヨコナデ調整の後に細かなハケ調整
1179	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	-	にぶい褐色 灰黄褐色	〃	肩部のごく一部が残存, 外面に櫛描直線文と楕円形浮文, 内面はナデ調整
1180	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	7.3	黄灰色 灰褐色	〃	底部約 1/2 が残存, 内外面ともナデ調整で, 外面はその多くが剝離する。
1181	〃	〃 甕	-	(1.3)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の細片, ヨコナデ調整の後に端部に刻目
1182	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	3.8	灰黄褐色 にぶい赤褐色	〃	底部約 2/3 が残存, 底部外面はナデ調整, 外面はヘラナデ, 内面は指ナデ
1183	SK - 102	〃 壺	-	(2.6)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存, ヨコナデ調整の後に端部に 5 条の凹線文, 内面にヘラ描き斜格子目文
1184	〃	〃 〃	12.6	(2.0)	-	-	にぶい橙色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 貼付口縁で, 端部にヘラ状工具による刻目, 内面にはわずかにハケ目が残る。
1185	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良	口縁部の一部が残存, ヨコナデ調整の後に端部にヘラ状工具による刻目, 内面にハケ調整, 外面には煤が付着
1186	〃	〃 〃	-	(9.2)	-	6.8	黒褐色 灰黄褐色	〃	底部約 1/5 が残存, 底部外面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 内面はヘラ削りの後にナデ調整
1187	〃	〃 甕	14.0	(5.2)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から肩部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整の後に端部に擬凹線文
1188	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	-	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の一部が残存, 器面はヨコナデ調整
1189	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	口縁部の一部が残存, 内面はヨコナデ調整, 外面は剝離と摩耗がみられる。
1190	〃	〃 高杯	-	(7.5)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	脚台部約 1/2 が残存, 外面基部にヘラナデ, 他はナデ調整, 内面にははしほり目が残る。
1191	SK - 103	〃 壺	12.0	(3.0)	-	-	浅黄色 にぶい黄褐色	〃	口縁部の一部が残存, 器面はヨコナデ調整で, 外面に小さな突帯, 端部にヘラ状工具による刻目
1192	〃	〃 〃	-	(7.2)	-	-	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	頸部約 1/3 が残存, 外面はヨコナデ調整の後に下端にヘラ状工具による刺突文, 内面には部分的にヘラナデ痕が残る。
1193	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	上胴部のごく一部が残存, 器面は剝離するも外面に楕円形浮文が残る。
1194	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	-	にぶい黄色 にぶい橙色	不良	上胴部の一部が残存, 器面は剝離するも外面に小さな突帯を挟んで櫛描波状文が残る。
1195	〃	〃 〃	-	(10.0)	-	12.2	にぶい褐色 にぶい橙色	良	底部約 1/2 が残存, 外面に下から上へのヘラナデ, 他はナデ調整
1196	〃	〃 甕	-	(3.7)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 貼付口縁となり, 内面はヨコナデ調整, 外面はナデ調整で煤がわずかに付着
1197	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	5.1	黒褐色 にぶい赤褐色	〃	底部の一部が残存, 底部外面はハケ調整の後にナデ調整, 他はナデ調整
1198	SK - 104	〃 〃	-	(2.8)	-	-	にぶい黄褐色 灰褐色	〃	口縁部のごく一部が残存, 器面はヨコナデ調整で外面には煤が付着
1199	P - 101	石製品 磨石	8.7	8.3	2.5	280.4	-	-	完存, 扁平な河原石の両面にわずかに敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩
1200	P - 102	〃 剥片	(5.2)	(8.0)	(0.8)	26.1	-	-	比較的大きなサヌカイトの剥片で, 2 ヲ所に自然面が残る。

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1201	P-104	弥生土器 甕	-	(2.3)	-	-	浅黄橙色 〃	良	口縁部の一部が残存, 内面にはヨコナデ調整の痕が残る。
1202	P-105	〃 壺	16.0	(4.7)	-	-	にぶい赤褐色 にぶい褐色	やや不良	口頸部約1/3が残存, 器面は摩耗しており調整は不明
1203	〃	〃 甕	-	(4.0)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の一部が残存, 内面にヨコナデ調整とナデ調整の痕が残る。
1204	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	7.0	黒褐色 にぶい黄橙色	良	底部約1/5が残存, 外面はナデ調整, 内面は指ナデ
1205	〃	〃 〃	-	(17.9)	25.4	11.6	灰褐色 にぶい褐色	〃	底部と胴部約1/3が残存, 内面下半にヘラナデ, 上半にナデ調整, 煤が内面上半と外面に付着, 外面の大半は剝離
1206	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	5.9	黒褐色 褐灰色	〃	底部のみ残存, 外底面はヘラ削りとナデ調整, 他はナデ調整
1207	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	8.5	黒褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/3が残存, 内面はナデ調整, 外面は剝離
1208	〃	〃 高杯	-	(4.4)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	脚台部の一部が残存, 外面はナデ調整, 内面にはしまり目が残る。
1209	SP-101	〃 壺	21.6	(3.6)	-	-	にぶい橙色 〃	良好	口縁部の一部が残存, 器面はヨコナデ調整で端部はハケ調整の後に刺突文と1条の沈線, 外面はハケ調整
1210	〃	〃 〃	16.6	(14.0)	-	-	にぶい赤褐色 にぶい褐色	〃	口縁部約1/3と胴部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はハケ調整, 胴部外面はタタキの後ヘラ磨き。
1211	〃	〃 甕	-	(3.5)	-	-	にぶい褐色 褐色	やや不良	口縁部の一部が残存, 器面は摩耗が著しく調整は不明
1212	〃	〃 〃	13.4	(4.2)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	良好	口縁部から肩部の一部が残存, 口縁部内面から外面はハケ調整, 肩部内面には指頭圧痕
1213	〃	〃 〃	15.4	(3.4)	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	良	口頸部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はハケ調整で外面には煤が付着
1214	〃	〃 〃	17.7	(5.7)	18.6	-	灰黄褐色 〃	良好	口縁部から胴部の一部が残存, 口縁部はハケ調整, 胴部外面はタタキの後にハケ調整, 内面はヘラ削り
1215	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部のごく一部が残存, ヨコナデ調整の後にハケ調整
1216	〃	〃 〃	16.2	(4.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から胴部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整の後にハケ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面には煤が部分的に付着
1217	〃	〃 〃	15.0	(9.4)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良好	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 口縁部はハケ調整の後にヨコナデ調整, 胴部外面はタタキ, 内面は指頭圧痕とナデ調整
1218	〃	〃 〃	22.4	(8.5)	23.2	-	灰黄褐色 灰褐色	〃	口縁部から胴部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整で端部に擬凹線文, 胴部外面はヘラナデとナデ調整
1219	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	5.8	黄灰色 灰褐色	〃	底部約1/6が残存, 外面は細かなハケ調整, 内面は指ナデ
1220	〃	〃 〃	-	(4.9)	-	6.0	にぶい橙色 にぶい褐色	良	底部約1/2が残存, 外底面はナデ調整, 外面はハケ調整, 内面はヘラナデとナデ調整
1221	〃	〃 〃	-	(9.3)	-	7.7	黒褐色 灰黄褐色	良好	底部から下胴部の約1/4が残存, 外底面はナデ調整, 外面はナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整
1222	〃	〃 〃	-	(6.9)	-	9.5	灰黄褐色 にぶい赤褐色	〃	底部から下胴部の約1/4が残存, 外底面はナデ調整, 外面は指ナデの後にハケ調整, 内面は指ナデとナデ調整
1223	〃	〃 〃	-	(10.4)	-	6.2	黒褐色 褐灰色	〃	底部から下胴部の約1/3が残存, 外底面はナデ調整, 外面はハケ調整, 内面は指ナデとナデ調整で部分的にハケ目が残る。
1224	〃	〃 鉢	14.9	(5.4)	-	-	灰褐色 黒褐色	〃	口縁部から体部の約1/5が残存, 外面はタテ方向のヘラ磨きと2列にツメ痕, 内面は指ナデとナデ調整
1225	〃	〃 高杯	-	(1.6)	-	-	にぶい橙色 〃	良	裾部のごく一部が残存, 内外面ともハケ調整で端部にヨコナデ調整

第 I 調査区 遺物観察表 10

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1226	SP - 101	弥生土器 ミニチュア	-	(2.5)	-	1.9	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	良好	底部の一部が残存, 外底面と外面はハケ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 甕のミニチュアとみられる。
1227	〃	〃	-	(2.2)	-	4.9	にぶい赤褐色 〃	〃	底部の一部が残存, 外底面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 甕のミニチュアとみられる。
1228	〃	〃	-	(3.7)	-	5.3	暗灰色 褐色	〃	底部約1/6が残存, 外底面はナデ調整, 外面はハケ調整とナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 甕のミニチュアとみられる。
1229	〃	石製品 磨石	16.8	12.3	5.2	1678.1	-	-	完存, 扁平で部分的に敲打痕もみられるが, 全体に滑らか, 石材は粗粒砂岩
1230	SB - 103	弥生土器 甕	15.3	(4.1)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部から肩部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 肩部外面はハケ調整
1231	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.8)	-	-	褐灰色 黄灰色	良好	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1232	〃	〃	-	(1.3)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	不良	口縁部のごく一部が残存, 器面は摩耗しており調整は不明
1233	〃	〃	-	(1.2)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部のごく一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1234	〃	〃 杯身	-	(3.2)	-	-	褐灰色 黄灰色	〃	口縁部と体部のごく一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1235	SB - 104	土師器 皿	-	(1.7)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良	口縁部のごく一部が残存, 成形は左手手法, 内外面ともヨコ方向のヘラ磨き
1236	〃	〃 高杯	-	(2.1)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	杯部口縁部のごく一部が残存, 成形は左手手法, 内面はヨコ方向のヘラ磨き, 外面は摩耗しており, 調整は不明
1237	〃	〃 杯蓋	-	-	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	宝珠形のつまみが残存, つまみ径2.3cm, つまみ高1.8cm, 器面はヨコナデ調整
1238	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.3)	-	-	灰白色 〃	不良	口縁部のごく一部が残存, 器面はヨコナデ調整
1239	〃	〃	24.8	(2.6)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面は研磨されており, 硯に転用されたものとみられる。転用硯
1240	〃	〃	22.2	(1.5)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	不良	約1/5が残存, 天井に外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整
1241	〃	〃 長頸壺	5.2	(2.8)	-	-	灰黄褐色 黄灰色	良好	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 口唇部から外面にかけて自然釉がかかる。
1242	〃	〃 甕	-	(10.9)	-	-	黄灰色 灰黄褐色	〃	胴部の一部が残存, 外面は平行のタタキの後に回転カキ目調整, 内面はナデ調整とヨコナデ調整
1243	〃	土師質土器 杯	10.9	(2.8)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部と体部の一部が残存, 口唇部から内面は回転ナデ調整, 外面は調整不明であるが棒状の圧痕が残る。
1244	SB - 105	土師器 杯蓋	-	(1.3)	-	-	〃 〃	〃	口縁部のごく一部が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整
1245	〃	須恵器 甕	-	(4.9)	-	-	褐灰色 〃	良好	胴部のごく一部が残存, 外面はタタキの後に回転カキ目調整, 内面は同心円文のタタキ
1246	〃	〃	-	(6.3)	-	-	褐灰色 黄灰色	〃	胴部のごく一部が残存, 外面は平行のタタキの後にナデ調整, 内面は同心円文のタタキの後にナデ調整
1247	〃	土師質土器 皿	13.2	(2.0)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の一部が残存, 成形はA技法で, 器面は回転ナデ調整
1248	SB - 106	土師器 杯蓋	-	(1.4)	-	-	灰褐色 にぶい橙色	〃	口縁部のごく一部が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整
1249	〃	〃	12.8	(1.8)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から天井部の一部が残存, 成形は左手手法, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整
1250	〃	〃 皿	(14.1)	(2.2)	-	10.0	にぶい褐色 〃	〃	一部が残存, 成形は左手手法, 内面は斜め方向, 外面はヨコ方向のヘラ磨き

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1251	SB-106	土師器 杯	14.2	(3.6)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部と体部の一部が残存, 成形は左手手法, ほぼ全面にヨコ方向のヘラ磨き
1252	〃	〃 甕	21.4	(5.2)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整の後にハケ調整, 胴部外面はハケ調整, 内面はハケ調整とナデ調整
1253	〃	須恵器 杯蓋	13.9	(1.4)	-	-	灰白色 〃	不良	口縁部と天井部の一部が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1254	SB-107	土師器 杯蓋	-	(1.7)	-	-	明赤褐色 〃	良	天井部つまみ周囲が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗しており, 調整は不明, つまみ径3.0cm, つまみ高1.1cm
1255	〃	〃 皿	-	(1.0)	-	9.7	にぶい黄橙色 橙色	良好	底部の一部が残存, 成形は左手手法, ほぼ全面にヘラ磨き
1256	〃	〃 杯	-	(2.8)	-	-	明赤褐色 橙色	〃	口縁部と体部の一部が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整の後にヨコ方向の磨きを部分的に施す。
1257	〃	須恵器 杯蓋	14.2	(1.3)	-	-	灰黄褐色 灰色	良	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1258	〃	〃 〃	13.0	(1.9)	-	-	褐灰色 黄灰色	良好	口縁部と天井部の一部が残存, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整を加える。
1259	〃	〃 杯身	12.7	4.3	-	8.3	黄灰色 〃	やや不良	約1/2が残存, 底部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。
1260	〃	〃 〃	10.6	5.1	-	6.6	灰黄褐色 〃	良好	底部約1/2と口縁部の一部が残存, 底部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。
1261	〃	〃 高杯	-	(3.1)	-	-	褐灰色 黄灰色	〃	杯底部の大半が残存, 外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整
1262	〃	〃 〃	24.4	(2.6)	-	-	灰白色 〃	不良	杯部約1/4が残存, 底部外面は回転ヘラ削り, 他は摩耗しており, 調整は不明
1263	〃	〃 〃	-	(8.1)	-	(9.4)	灰黄色 〃	〃	脚台部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整とみられるが, 摩耗しており不明瞭
1264	〃	〃 〃	-	(5.9)	-	11.5	〃 〃	〃	脚台部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整とみられるが, 摩耗しており不明瞭
1265	〃	土師質土器 高杯	-	(5.7)	-	12.7	褐灰色 灰褐色	やや不良	脚台部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面はやや摩耗するが, 回転ナデ調整とみられる。
1266	SB-108	土師器 盤	-	(3.8)	-	9.2	にぶい黄橙色 〃	不良	脚台部約1/4が残存, 器面は摩耗しており調整不明
1267	〃	須恵器 壺	-	(3.5)	16.4	-	褐灰色 黄灰色	良好	肩部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面には自然釉がかかり, ハダ荒れがみられる。
1268	SB-109	土師器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	にぶい黄橙色 黄橙色	良	口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 全面にヘラ磨き
1269	〃	〃 〃	18.2	2.2	-	-	明赤褐色 にぶい褐色	不良	約1/5が残存, 成形は左手手法, ヘラ磨き痕跡が一部に残る。つまみ径2.7cm, つまみ高1.6cm
1270	〃	〃 杯身	14.7	(2.4)	-	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部約1/3が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1271	〃	〃 〃	14.4	(3.8)	-	-	明赤褐色 にぶい褐色	良	口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 外面は全面にヨコ方向のヘラ磨き, 内面は摩耗しており, 調整は不明
1272	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	-	橙色 にぶい褐色	やや不良	口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 外面にはヨコ方向のヘラ磨き, 内面は摩耗しており調整は不明
1273	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	良	口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 全面にヨコ方向のヘラ磨き
1274	〃	〃 〃	-	(4.2)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや不良	口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 全面にヨコ方向のヘラ磨き
1275	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	11.7	橙色 にぶい褐色	良	底部から体部の約1/5が残存, 底部外面はヘラ削り, 高台周囲はヨコナデ調整, 他はヨコ方向のヘラ磨き

第 I 調査区 遺物観察表 12

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1276	SB - 109	土師器 皿	14.6	2.3	-	10.0	にぶい赤褐色 〃	良	底部約 1/4 と口縁部の一部が残存, 底部外面はヘラ切りの後にヘラ磨き, 他もヨコナデ調整の後にヘラ磨き
1277	〃	〃 〃	16.5	2.3	-	10.8	橙色 〃	〃	底部約 1/3 と口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 底部外面はヘラ切りの後にヘラ磨き, 他もほぼ全面にヘラ磨き
1278	〃	〃 〃	16.4	2.3	-	12.5	明赤褐色 〃	やや不良	底部の大半と口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗するが部分的にヘラ磨きの痕が残る。
1279	〃	〃 〃	17.1	(2.1)	-	-	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗するが部分的にヘラ磨きの痕が残る。
1280	〃	〃 〃	17.5	2.4	-	12.0	にぶい橙色 〃	不良	底部と口縁部の一部残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1281	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	橙色 灰黄褐色	〃	口縁部と天井部の一部が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1282	〃	土師質土器 杯	12.6	(2.4)	-	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 成形は A 技法とみられる。器面は摩耗しており, 調整は不明
1283	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	7.0	にぶい褐色 〃	やや不良	底部約 1/2 が残存, 成形は A 技法, 底部外面は回転ヘラ切りの後ヘラ磨き, 他は摩耗しており, 調整は不明
1284	〃	〃 椀	-	(1.3)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	不良	底部約 1/6 が残存, 成形は A 技法とみられる。器面は摩耗しており, 調整は不明
1285	SB - 111	土師器 杯蓋	-	(1.3)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口縁部のごく一部が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整
1286	〃	〃 杯	13.7	(3.4)	-	-	〃 〃	良	口縁部と体部の約 1/6 が残存, 成形は左手手法, 口唇部はヨコナデ調整, 他はほぼ全面にヨコ方向のヘラ磨き
1287	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部のごく一部が残存, 成形は左手手法, 口唇部はヨコナデ調整, 他はヨコ方向のヘラ磨き
1288	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.2)	-	-	にぶい黄褐色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1289	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	-	褐灰色 黄灰色	良好	口縁部と天井部の一部が残存, 天井部外面は回転ヘラ削りの後にナデ調整, 口縁部は回転ナデ調整
1290	〃	〃 〃	11.1	(1.1)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の約 1/5 と天井部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整を加える。
1291	〃	〃 〃	11.2	(1.4)	-	-	黄灰色 灰黄褐色	〃	口縁部と天井部の一部が残存, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整を加える。
1292	〃	〃 杯身	-	(2.3)	-	10.9	灰黄色 〃	不良	底部と体部の約 1/5 が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1293	〃	〃 皿	14.5	1.9	-	10.8	灰黄褐色 灰褐色	良	約 1/5 が残存, 底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整, 他は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。火襷あり。
1294	〃	〃 甕	21.4	(5.0)	-	-	褐灰色 〃	良好	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1295	〃	〃 〃	-	(7.1)	-	-	〃 〃	不良	胴部の一部が残存, 外面は平行のタタキ, 内面は同心円文のタタキ
1296	〃	〃 〃	-	(8.7)	-	-	黄灰色 にぶい褐色	良	胴部の一部が残存, 外面は平行のタタキ, 内面はナデ調整
1297	〃	〃 〃	-	(12.6)	-	-	褐灰色 灰黄褐色	〃	胴部の一部が残存, 外面は格子目状のタタキ, 内面は同心円文のタタキ
1298	〃	〃 〃	-	(21.4)	-	-	灰色 〃	良好	胴部の一部が残存, 外面は格子目のタタキ, 内面は同心円文のタタキ
1299	〃	土師質土器 杯	-	(3.0)	-	-	にぶい黄褐色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1300	SB - 114	石製品 砥石	24.8	16.0	5.2	930.2	-	-	大半が残存, 側面を含め 2 面を使用し, 裏面には敲打痕が残る。石材は細粒砂岩

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1301	SA - 104	土師質土器 杯	-	(1.7)	-	9.2	橙色 〃	不良	底部約 1/4 が残存, 成形は A 技法, 底部外面は回転ヘラ 切り, 他は回転ナデ調整
1302	SK - 115	須恵器 杯蓋	13.7	1.3	-	-	灰色 〃	良	口縁部の大半が欠損, 器面は回転ナデ調整, 内面にナデ 調整, 天井部外面はハダ荒れ。
1303	〃	瓦 平瓦	(9.5)	-	2.7	-	浅黄橙色 〃	不良	平瓦の一部が残存, 表面は摩耗するが, 凹面には布目が わずかに残る。
1304	SK - 123	須恵器 甕	-	(4.7)	-	-	灰色 〃	良好	胴部の一部が残存, 外面は回転カキ目調整, 内面は同心 円文のタタキ
1305	SD - 112	〃 杯	-	(2.6)	-	-	黄灰色 〃	良	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1306	SD - 113	土師器 杯	-	(1.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	底部の一部が残存, 底部外面はナデ調整, 高台の周囲は ヨコナデ調整, 内面もヨコナデ調整
1307	SD - 119	須恵器 杯	-	(2.1)	-	8.6	褐灰色 灰色	良好	底部の一部が残存, 高台の周囲はヨコナデ調整, 他は回 転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。
1308	SD - 120	〃 甕	-	(4.2)	-	-	黄灰色 灰黄褐色	良	胴部の一部が残存, 外面は平行のタタキ, 内面は同心円 文のタタキ
1309	SD - 123	〃 〃	-	(4.5)	-	-	灰黄褐色 黄灰色	良好	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 口唇部から 内面にかけて自然釉がかかり, ハダ荒れとなる。
1310	P - 106	〃 杯蓋	-	(1.5)	-	-	灰色 黄灰色	不良	口縁部と天井部の一部が残存, 天井部外面は回転ヘラ削 り, 他は回転ナデ調整
1311	P - 107	〃 鉢	-	(3.7)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 外面に 3 条の凹線, 他は摩耗して おり, 調整は不明
1312	P - 108	弥生土器 皿	-	2.1	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部と底部の一部が残存, 器面は指押えとナデ調整
1313	〃	土師質土器 杯	-	(2.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面は摩耗してお り, 調整は不明
1314	P - 109	土師器 杯蓋	-	(1.0)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部のごく一部が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコ ナデ調整
1315	P - 110	須恵器 広口壺	21.1	(4.5)	-	-	灰白色 褐灰色	良好	口頸部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 内面にはハ ダ荒れがみられる。
1316	P - 111	土師器 杯	15.6	(3.2)	-	-	明赤褐色 橙色	不良	口縁部のごく一部が残存, 成形は左手手法, 外面はヨコ 方向のヘラ磨き, 内面は摩耗しており, 調整は不明
1317	〃	〃 皿	17.4	2.4	-	7.8	橙色 〃	やや不良	底部約 1/2 と口縁部の一部が残存, 底部外面はヘラ切り の後にナデ調整, 内面にはヘラ磨きの痕が残る。
1318	〃	須恵器 杯蓋	13.0	(1.9)	-	-	褐灰色 黄灰色	良	約 1/4 が残存, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナ デ調整で, 天井部内面にナデ調整を加える。
1319	〃	〃 〃	13.5	2.5	-	-	黄灰色 〃	〃	約 1/3 が残存, 天井部外面はヘラ削りの後に回転ナデ調 整, 内面はヘラナデの後にナデ調整
1320	〃	〃 杯身	(13.4)	(4.4)	-	8.6	にぶい黄橙色 灰白色	不良	一部が残存, 高台の周囲はヨコナデ調整, 他は回転ナデ 調整とみられるが, 摩耗しており不明瞭
1321	〃	〃 〃	16.1	5.3	-	11.3	黄灰色 灰色	良	約 1/4 が残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 体部下端は回転ヘ ラ削り, 他は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。
1322	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	9.2	灰黄色 暗灰黄色	不良	底部約 1/4 が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1323	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	8.5	にぶい黄橙色 灰白色	〃	底部と体部の一部が残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 他 は回転ナデ調整とみられるが, 摩耗しており不明瞭
1324	〃	土師質土器 杯	13.8	5.5	-	6.0	にぶい橙色 〃	〃	底部約 1/4 と口縁部から体部の約 1/5 が残存, 成形は A 技法, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1325	P - 112	須恵器 杯身	13.6	(3.9)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部から体部の約 1/6 が残存, 器面は回転ナデ調整

第 I 調査区 遺物観察表 14

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1326	P - 113	須恵器 壺	-	(2.7)	-	-	灰色 〃	良	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1327	P - 114	土師器 杯	-	(3.0)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 器面は丁寧なヨコ方向のヘラ磨き
1328	〃	須恵器 杯蓋	13.8	(1.8)	-	-	灰黄褐色 〃	やや不良	約 1/3 が残存, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整を加える。
1329	P - 115	〃 杯身	-	(3.3)	-	-	灰白色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1330	P - 116	弥生土器 甕	-	(2.6)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の一部が残存, 口唇部から外面はヨコナデ調整, 内面はハケ調整
1331	P - 117	須恵器 杯身	-	(2.5)	-	-	灰黄色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1332	P - 118	土師器 杯	-	(1.3)	-	-	明赤褐色 〃	良	口縁部のごく一部が残存, 器面はヨコナデ調整で, 一部ヘラ磨きの痕跡が残る。
1333	P - 119	〃 杯蓋	-	(1.6)	-	-	〃 〃	不良	口縁部のごく一部が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1334	P - 120	須恵器 杯蓋	-	(0.9)	-	-	灰黄褐色 黄灰色	良好	天井部の一部が残存, 外面は回転ヘラ削りの後にナデ調整, 内面は回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。
1335	P - 121	土師器 杯	-	(1.9)	-	-	明赤褐色 〃	良	口縁部のごく一部が残存, 器面は赤色塗彩
1336	〃	須恵器 杯	-	(2.6)	-	9.0	黄灰色 灰色	やや不良	底部から体部の約 1/2 が残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 他は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。
1337	P - 122	〃 杯蓋	-	(1.4)	-	-	褐灰色 〃	良	口縁部と天井部の一部が残存, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整
1338	P - 123	〃 短頸壺	8.6	(1.6)	-	-	〃 〃	良好	口縁部から肩部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 肩部にハダ荒れがみられる。
1339	P - 124	〃 杯身	-	(3.3)	-	11.7	にぶい黄褐色 〃	不良	底部から体部が残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 高台の周囲はヨコナデ調整, 体部外面下端には回転ヘラ削り, 他は不明
1340	P - 125	〃 甕	-	(5.6)	-	-	灰色 〃	良好	胴部のごく一部が残存, 外面は格子目状のタタキ, 内面は同心円文のタタキ
1341	P - 126	二彩陶器 壺	-	(2.7)	-	-	にぶい黄褐色 灰オリーブ色	やや不良	胴部の一部が残存, 外面に緑色と黄白色の鉛釉を施釉, 内面は露胎でロクロ目が残る。
1342	P - 127	須恵器 甕	-	(8.4)	-	-	灰色 黄灰色	良好	胴部の一部が残存, 外面は平行のタタキ, 内面は同心円文のタタキの後にナデ調整を加える。
1343	P - 128	〃 〃	-	(3.4)	-	-	黄灰色 褐灰色	〃	胴部の一部が残存, 外面は平行のタタキ, 内面はナデ調整
1344	P - 129	土製品 土錘	(4.4)	1.3	1.3	5.0	にぶい褐色 〃	良	円筒形で, 一部欠損, 表面は摩耗, 孔径 0.5cm
1345	SB - 118	須恵器 甕	-	(7.3)	-	-	灰色 黄灰色	良好	胴部の一部が残存, 外面は平行のタタキ, 内面は同心円文のタタキの後にナデ調整を加える。
1346	SB - 119	土師質土器 小皿	-	(1.0)	-	4.7	にぶい橙色 〃	良	底部約 1/3 が残存, 成形は A 技法, 底部外面は回転ヘラ切り, 他は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。
1347	〃	〃 〃	8.8	(1.6)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 成形は A 技法, 外面端部に 1 条の凹線, 器面は回転ナデ調整
1348	〃	白磁 皿	11.3	(2.6)	-	-	褐灰色 〃	良好	口縁部と体部の一部が残存, 口縁部は端反て無釉
1349	〃	石製品 台石	17.5	16.0	5.9	204.1	-	-	完存, 扁平な河原石で台石か磨石として使用したものとみられる。石材は中粒砂岩
1350	SB - 120	土師質土器 小皿	7.8	1.4	-	6.1	橙色 〃	良	口縁部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面は回転ナデ調整, 内面にはタールが付着, 灯明皿

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1351	SB - 121	土師質土器 杯	-	(1.3)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口縁部のごく一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
1352	〃	〃	-	(2.4)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内面にタールが付着
1353	〃	〃	-	(3.8)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
1354	〃	〃	-	(1.7)	-	7.3	明赤褐色 橙色	やや不良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。
1355	〃	〃	-	(0.9)	-	7.6	にぶい橙色 〃	良	底部の一部が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切りの後にナデ調整
1356	〃	〃 小皿	-	(0.9)	-	4.1	〃 〃	〃	底部の一部が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切りの後にナデ調整, 他は回転ナデ調整, 内面にタールが付着
1357	〃	〃	6.4	(1.8)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内面にタールが付着
1358	〃	〃	6.3	1.6	-	4.8	にぶい橙色 〃	〃	約1/2が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。
1359	〃	〃	7.0	(1.3)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内外面ともタールが付着
1360	〃	青磁 碗	-	(4.3)	-	-	オリーブ灰色 〃	良好	口縁部の一部が残存, 外面には鎬蓮弁文
1361	〃	石製品 浮子	7.2	5.8	4.2	42.6	-	-	完存, 端部に径0.6cmの紐孔を設ける。材質は軽石
1362	SB - 124	土師質土器 杯	12.5	(1.5)	-	-	にぶい橙色 橙色	良好	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
1363	SA - 106	〃 杯	13.6	(3.1)	-	-	明赤褐色 〃	良	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整でロクロ目が残る。
1364	SA - 109	〃	-	(1.1)	-	8.3	にぶい橙色 〃	〃	底部の一部が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整
1365	SA - 112	瓦質土器 羽釜	21.8	(5.5)	24.4	-	黄灰色 灰色	〃	口縁部から胴部の一部が残存, 口縁部下端にかまぼこ形の鐙が付く, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整
1366	SK - 132	須恵器 杯身	-	(2.5)	-	8.0	黄灰色 〃	やや不良	底部から体部の一部が残存, 体部は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。他は摩耗しており, 調整は不明
1367	〃	土師質土器 小皿	7.4	1.5	-	6.2	にぶい橙色 〃	不良	約1/3が残存, 成形はB技法, 底部外面は回転糸切り, 他は摩耗しており, 調整は不明
1368	SK - 133	〃 杯	-	(4.0)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1369	〃	青磁 碗	-	(1.7)	-	-	灰オリーブ色 〃	良好	体部のごく一部が残存, 外面には鎬蓮弁文
1370	SD - 126	土師質土器 杯	-	(2.4)	-	5.7	橙色 にぶい褐色	良	底部から体部の一部が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整
1371	SD - 127	須恵器 杯蓋	-	(2.0)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 外面にはハダ荒れがみられる。
1372	〃	〃	-	(1.2)	-	-	〃 〃	〃	口縁部のごく一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1373	〃	〃	-	(1.7)	-	-	灰色 黄灰色	良好	口縁部から体部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で内面にナデ調整を加える。外面はハダ荒れ
1374	〃	〃 壺蓋	-	(1.2)	-	-	褐灰色 黄灰色	〃	天井部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 外面は自然釉がかかり, ハダ荒れがみられる。
1375	〃	土師質土器 杯	-	(1.0)	-	6.3	にぶい橙色 にぶい黄褐色	良	底部約1/2が残存, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。

第 I 調査区 遺物観察表 16

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
1376	SD - 127	土師質土器 杯	-	(1.3)	-	6.3	にぶい赤褐色 〃	良	底部約 1/2 が残存, 成形は A 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整で内底面にナデ調整
1377	SD - 129	〃 碗	-	(2.3)	-	5.8	にぶい橙色 〃	〃	底部から体部の一部が残存, 成形は A 技法, 底部がベタ高台, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1378	SD - 133	須恵器 杯身	-	(3.7)	-	-	褐灰色 〃	良好	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1379	SD - 134	〃 〃	-	(1.0)	-	7.6	灰白色 〃	不良	底部の一部が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1380	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	8.8	黄灰色 〃	良好	底部と体部の約 1/4 が残存, 高台の周囲はヨコナデ調整, 他は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。
1381	〃	〃 台付壺	-	(3.2)	-	(10.5)	褐灰色 〃	〃	底部約 1/2 が残存, 器面は回転ナデ調整, 内底面に自然釉がかかる。
1382	〃	土師質土器 杯	11.0	(2.6)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部の一部が残存, 成形は B 技法, 器面は回転ナデ調整
1383	〃	〃 〃	12.8	(2.9)	-	-	灰褐色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 成形は B 技法, 器面は摩耗しており, 調整は不明瞭
1384	〃	〃 〃	13.8	4.4	-	5.9	にぶい黄橙色 〃	〃	約 1/3 が残存, 成形は B 技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。
1385	SD - 135	〃 〃	-	(2.6)	-	-	灰黄色 〃	良好	口縁部の一部が残存, 成形は A 技法, 器面は回転ナデ調整
1386	SD - 137	弥生土器 甕	-	(3.0)	-	-	灰赤色 にぶい橙色	良	口縁部のごく一部が残存, 器面はヨコナデ調整
1387	〃	〃 壺	-	(4.4)	-	6.2	褐色 にぶい褐色	〃	底部の一部が残存, 器面はナデ調整, 内面に指頭圧痕がわずかに残る。
1388	〃	土師器 杯身	-	(2.3)	-	9.8	灰褐色 にぶい黄橙色	不良	底部と体部の一部が残存, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1389	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.3)	-	-	褐灰色 灰白色	良	天井部約 1/3 が残存, 外面は回転ヘラ削りの後にナデ調整, 内面は回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。
1390	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部と体部の一部が残存, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整
1391	〃	〃 甕	-	(7.4)	-	-	〃 〃	〃	胴部の一部が残存, 外面は格子目状のタタキ, 内面は同心円文のタタキ
1392	〃	石製品 環状石斧	(4.0)	8.0	1.7	79.3	-	-	約 1/2 が残存, 周囲に幅 1.4 cm の刃部を作り出す。表面は風化し, 部分的に剝離する。
1393	SD - 140	須恵器 碗	-	(3.3)	-	(7.8)	灰白色 褐灰色	不良	底部約 1/4 が残存, 器面には一部に回転ナデ調整の痕跡もみられるが, 摩耗しており不明瞭
1394	〃	〃 甕	-	(12.1)	-	-	褐灰色 黄灰色	良好	胴部の一部が残存, 外面は平行のタタキで自然釉がかかりハダ荒れがみられる。内面はナデ調整
1395	〃	瓦質土器 羽釜	-	(2.8)	-	-	褐灰色 灰色	不良	口縁部の一部が残存, 口縁部下端に断面三角形の鏝が付く。器面は摩耗しており, 調整は不明
1396	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の一部が残存, 口縁部下端に断面三角形の鏝が付く。器面は摩耗しており, 調整は不明
1397	SD - 141	須恵器 杯蓋	-	(1.2)	-	-	にぶい黄橙色 灰色	〃	口縁部のごく一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1398	SD - 143	〃 甕	-	(5.3)	-	-	褐灰色 黄灰色	良好	頸部のごく一部が残存, 器面は回転ナデ調整とナデ調整
1399	〃	瓦質土器 鍋	-	(5.3)	-	-	黄灰色 褐灰色	不良	口縁部から胴部の一部が残存, 胴部外面には指頭圧痕が残るものの器面は摩耗しており, 調整は不明
1400	〃	青磁 碗	-	(1.8)	-	-	灰色 オリーブ灰色	良好	口縁部のごく一部が残存, 外面には蓮蓬弁文, 貫入あり。

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
1401	SD - 149	須恵器 甕	-	(2.6)	-	-	黄灰色 灰黄色	やや不良	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整
1402	〃	〃	-	(7.3)	-	-	黄灰色 褐灰色	良好	胴部のごく一部が残存, 外面は平行のタタキ, 内面はハケ調整の後にナデ調整
1403	SD - 152	〃	-	(2.7)	-	-	灰色 〃	良	口縁部のごく一部が残存, 器面は回転ナデ調整で外面にはハダ荒れがみられる。
1404	〃	〃	-	(8.0)	-	-	褐灰色 〃	良好	胴部のごく一部が残存, 外面はハケ調整の後にタタキ, 内面はハケ調整
1405	SD - 153	弥生土器 壺	-	(5.5)	-	8.2	暗灰色 にぶい黄橙色	良	底部約2/3が残存, 外底面はナデ調整, 外面はヘラナデ, 内面はナデ調整
1406	P - 131	須恵器 杯蓋	-	(1.4)	-	-	灰色 〃	良好	つまみのみ残存, 外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, つまみ径2.8cm, つまみ高0.7cm
1407	P - 132	土製品 土錘	(2.5)	1.8	1.7	6.6	にぶい橙色 〃	不良	円筒形で一部が残存, 表面はナデ調整, 孔径0.6cm
1408	P - 133	土師質土器 杯	10.6	4.4	-	6.2	橙色 〃	やや不良	ほぼ完存, 成形はA技法, 底部外面は回転ヘラ切り, 他は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。
1409	P - 134	〃	-	(2.9)	-	6.3	にぶい黄褐色 灰黄褐色	良好	底部から体部の一部が残存, 成形はA技法, 底部外面は静止糸切り, 体部下端はヘラ削り。
1410	P - 135	〃	12.7	(1.7)	-	-	にぶい橙色 明赤褐色	良	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
1411	P - 136	須恵器 甕	-	(6.8)	-	-	灰色 〃	良好	胴部のごく一部が残存, 外面は回転カキ目調整, 内面は同心円文のタタキをナデ消す。
1412	P - 137	土師質土器 杯	-	(2.2)	-	-	にぶい褐色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗しており, 調整は不明
1413	P - 138	〃 小皿	6.5	1.6	-	5.3	にぶい褐色 明赤褐色	良	口縁部と底部のごく一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
1414	P - 139	〃 杯	-	(1.6)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部のごく一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
1415	P - 140	〃	-	(0.9)	-	5.6	〃 〃	〃	底部の一部が残存, 底部外面は回転糸切り, 器面は摩耗しており, 調整は不明瞭
1416	〃	〃	-	(1.1)	-	7.7	にぶい赤褐色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転ヘラ切り, 器面は回転ナデ調整
1417	P - 141	〃	-	(1.2)	-	6.2	にぶい橙色 〃	やや不良	底部のごく一部が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切り, 器面は摩耗しており, 調整は不明瞭
1418	P - 142	〃	13.7	(3.2)	-	-	にぶい褐色 〃	不良	口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗しており, 調整は不明瞭
1419	P - 143	〃 小皿	(7.7)	(2.9)	-	5.0	にぶい赤褐色 にぶい橙色	〃	底部から体部の一部が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整
1420	P - 144	土製品 土錘	(4.9)	1.5	1.4	8.1	にぶい赤褐色 〃	良	紡錘形で端部が欠損, 表面は指押えの後にナデ調整, 孔径0.5cm
1421	〃	〃	5.0	1.4	1.4	6.8	灰赤色 〃	〃	紡錘形で完存, 表面はナデ調整, 孔径0.4cm
1422	P - 145	瓦質土器 羽釜	-	(3.9)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部から胴部一部が残存, 口縁端部に断面三角形の鏝が付く。器面は摩耗しており, 調整は不明
1423	P - 146	土師質土器 杯	-	(1.2)	-	7.4	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	底部の一部が残存, 成形はA技法, 底部外面は回転糸切り, 他は回転ナデ調整
1424	P - 147	瓦質土器 羽釜	18.8	(9.0)	21.2	-	黄灰色 黒褐色	〃	口縁部から胴部の一部が残存, 口縁端部には断面三角形の鏝が付く。口縁部はヨコナデ調整, 他は不明, 外面に煤が付着
1425	SK - 145	肥前系磁器 紅皿	5.4	(1.3)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部から体部の約1/4が残存, 外面に条線, 体部外面は露胎

第Ⅱ調査区 遺物観察表1

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2001	第Ⅱ層	製塩土器 -	-	(7.8)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部から体部の破片, 内面には指押え, 布目圧痕があり, 外面は剥落気味
2002	〃	土師質土器 杯	-	(1.5)	-	5.1	浅黄橙色 にぶい橙色	〃	底部の破片, ロクロ水挽成形, 底部外面は回転糸切り, 器面は摩耗している。
2003	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.2	浅黄橙色 〃	〃	底部から体部残存, 粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部外面は回転糸切り, 器面は摩耗している。
2004	〃	瓦質土器 鍋	19.0	(8.6)	19.6	-	灰白色 浅黄色	やや不良	口縁部から胴部一部残存, 内外面とも剥落が著しく, 外面に指押えが多く残る。外面にはコゲ付着
2005	〃	〃 釜	18.6	(7.4)	21.7	-	灰色 〃	〃	口縁部から胴部一部残存, 内外面とも剥落が著しく, 外面に指押えが多く残る。
2006	第Ⅲ層	土師器 杯	-	(1.4)	-	6.5	灰白色 〃	〃	底部の破片, 内外面とも摩耗が著しく調整不明
2007	〃	〃 甕	-	(4.6)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	破片, 口縁部は外面ヨコナデ調整, 内面ヨコ方向のハケ調整, 胴部は外面ハケ調整, 内面ヨコナデ調整
2008	〃	〃 羽釜	-	5.4	-	-	褐灰色 灰黄褐色	良	破片, 口縁部内外面は回転ナデ調整, 胴部外面はハケ・ナデ調整, 内面はナデ調整
2009	〃	須恵器 杯蓋	19.6	(2.4)	-	-	灰白色 〃	やや不良	口縁部の一部が残存, 内外面とも回転ナデ調整か? 内面は摩耗が著しい。軟質で焼き歪みあり。
2010	〃	〃 杯身	-	(2.0)	-	-	灰色 〃	良	細片, 内外面は回転ナデ調整
2011	〃	〃 杯	14.6	3.2	-	10.4	灰白色 〃	不良	細片, 内外面は回転ナデ調整か? 全体的に摩耗が著しい。
2012	〃	〃 〃	11.6	4.6	-	8.4	〃 〃	やや不良	約1/4残存, 内外面とも摩耗が著しく, 調整不明
2013	〃	〃 椀	-	(1.8)	-	5.8	〃 〃	〃	底部約1/2残存, 回転ナデ調整か? 底部外面は回転糸切り, 器面は摩耗している。
2014	〃	〃 壺	-	(2.5)	-	10.2	灰白色 灰色	〃	底部の破片, 外面は回転ナデ調整, 内面はその後ナデ調整か?
2015	〃	〃 甕	-	(3.9)	-	-	灰白色 〃	良	破片, 口縁部は回転ナデ調整, 胴部外面はタタキ成形, 内面はタタキ成形後にナデ調整
2016	〃	〃 壺	-	(8.7)	-	10.0	明紫灰色 灰色	〃	底部から胴部の破片, 内外面とも回転ナデ調整, 外面肩部, 内面底部に自然釉付着
2017	〃	〃 鉢	-	(10.1)	-	-	灰白色 黄灰色	〃	破片, 内外面は回転ナデ調整
2018	〃	緑釉陶器 椀	-	(1.5)	-	-	オリーブ灰色 灰白色	〃	細片, 両面は回転ナデ調整, 素地は須恵質, 両面に薄く施釉, 釉調は若草色
2019	〃	〃 椀又は皿	-	(1.1)	-	-	オリーブ灰色 〃	やや不良	細片, 両面は回転ナデ調整か? 素地は軟陶, 両面の釉調は淡緑色
2020	〃	〃 椀	-	(1.3)	-	7.4	淡緑色 〃	良	底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 底部内面はミガキ調整, 素地は軟陶, 釉調は淡緑色
2021	〃	灰釉陶器 皿	-	(2.2)	-	6.4	灰オリーブ色 灰白色	〃	底部約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整, 内面のみ施釉
2022	〃	製塩土器 -	-	(2.6)	-	-	橙色 〃	〃	細片, 内面に布目圧痕, 外面はナデ調整か?
2023	〃	〃 -	-	(3.8)	-	-	灰色 橙色	〃	細片, 内面に布目圧痕, 外面は指押え, ナデ調整
2024	〃	〃 -	-	(6.5)	-	-	灰色 にぶい橙色	不良	体部の破片, 内面にわずかに布目圧痕, 外面は摩耗のため調整不明
2025	〃	土師質土器 杯	-	(3.3)	-	4.9	橙色 〃	やや不良	高台部のみ残存, 外面は回転糸切り, 全体的に磨減が著しく調整不明

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2026	第Ⅲ層	土師質土器 杯	-	(1.3)	-	6.4	浅黄橙色 〃	良好	底部の破片, ロクロ水挽き成形, 全体的に摩耗が著しく調整不明
2027	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	7.5	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 全体的に摩耗が著しい。
2028	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	7.5	にぶい橙色 橙色	良	底部から体部約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2029	〃	青磁 碗	-	(2.1)	-	6.2	灰オリーブ色 〃	〃	底部約1/4残存, 釉には貫入あり。
2030	〃	〃 皿	-	(0.9)	-	4.8	〃 〃	〃	約1/3残存, 見込みには櫛描文, ヘラによる片彫り, 底部外面は釉ハギか?
2031	〃	瓦 平瓦	(8.7)	-	2.6	-	灰白色 〃	不良	破片, 凹面に布目痕, 凸面に格子文状の圧痕, 両面とも摩耗が著しい。
2032	〃	〃 〃	(5.4)	-	2.2	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	破片, 凸面に縄目あり, 両面とも摩耗が著しい。
2033	〃	石製品 砥石	12.4	11.4	2.4	473.4	-	-	砂岩を利用, 手持ち用である。一面に擦痕あり, 全体的に赤色化
2034	〃	〃 柱状片刃石斧	(6.8)	3.9	(1.5)	75.1	-	-	片岩製, 刃部約1/2のみ残存, 側面は粗い研磨, 前後後面は丁寧に研磨を施す。刃縁は一部潰れている。
2035	第Ⅲ～ Ⅳ層	土師器 皿	10.0	1.0	-	7.6	橙色 〃	やや不良	約1/4残存, 全体的に磨減が著しく調整不明
2036	〃	須恵器 椀	-	(1.9)	-	5.8	灰白色 にぶい黄橙色	不良	底部約1/2残存, 底部外面は回転糸切り, 全体的に摩耗が著しく調整不明
2037	〃	〃 高杯	-	(2.2)	-	-	灰白色 〃	良	杯から脚部の一部のみ残存, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2038	〃	〃 長頸壺	-	(9.2)	-	-	灰色 〃	〃	頸部のみ残存, 外面は回転ナデ調整, 内面は頸部上面は回転ナデ調整, 以下はナデ調整
2039	〃	〃 壺	6.6	(1.1)	8.6	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 内外面とも回転ナデ調整
2040	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	5.6	〃 〃	〃	底部約1/2残存, 内外面とも回転ナデ調整, 底部外面は回転ナデ調整の後ナデ調整か?
2041	〃	〃 〃	7.2	8.1	10.2	6.5	〃 〃	やや不良	約1/3残存, 内外面とも回転ナデ調整, 底部外面は摩耗が著しく調整不明
2042	〃	〃 甕	20.3	(4.8)	-	-	〃 〃	良	口縁部の破片, 口縁部内外面は回転ナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はタタキ目が残る。
2043	〃	〃 〃	23.4	(6.6)	-	-	浅黄橙色 〃	不良	口縁部の破片, 口縁部は摩耗のため調整不明, 胴部内面はナデ調整, 外面はタタキ目が残る。口縁部外面に煤付着
2044	〃	土師器 羽釜	24.2	(4.3)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良	口縁部の破片, 内面および口縁部から鈎の上面まではヨコナデ調整, 以下は指押えの後にナデ調整か?
2045	〃	緑釉陶器 椀又は皿	-	(1.1)	-	-	オリーブ灰色 〃	〃	細片, 両面とも回転ナデ調整, 素地は須恵質, 釉調は濃緑色
2046	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	-	〃 〃	〃	細片, 両面とも回転ナデ調整, 素地は須恵質, 釉調は濃緑色
2047	〃	土師質土器 杯	-	(2.2)	-	8.2	にぶい橙色 にぶい黄橙色	やや不良	底部の破片, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面は回転ナデ調整
2048	〃	〃 椀	14.7	4.8	-	6.8	橙色 〃	〃	口縁部約1/2が欠損, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2049	〃	瓦質土器 羽釜	24.0	(4.2)	27.0	-	褐灰色 灰黄褐色	良	口縁部の破片, 全体的に摩耗が著しく調整不明, 胴部外面はヨコナデ調整か?
2050	〃	常滑焼 甕	-	(9.0)	-	-	赤灰色 〃	〃	口縁部の破片, 外面および口縁部内面は回転ナデ調整, 内面胴部はナデ調整

第II調査区 遺物観察表3

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2051	第Ⅲ～ Ⅳ層	白磁 碗	-	(2.2)	-	7.0	灰白色 〃	良	底部のみ残存, 見込みと体部外面に施釉
2052	〃	青磁 碗	15.5	(4.1)	-	-	灰オリーブ色 〃	良好	口縁部の破片, 釉は約0.2mmの厚さに施釉, 全面に貫入あり。
2053	〃	瓦 平瓦	(6.1)	-	1.8	-	淡黄色 〃	やや不良	破片, 凹面に布目痕, 凸面は摩耗のため不明
2054	第Ⅳ層	土師器 椀	-	(2.4)	-	4.5	橙色 〃	〃	底部の破片, 内外面とも摩耗が著しく調整不明
2055	〃	〃 皿	-	(2.6)	-	11.4	〃 〃	〃	底部約1/4残存, 内外面とも摩耗が著しく調整不明, 内面に布状圧痕か?
2056	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	灰黄色 灰白色	〃	つまみのみ残存, つまみ径2.7cm, 生焼けて内外面とも摩耗が著しく調整不明
2057	〃	〃 杯身	-	(1.3)	-	-	灰白色 〃	良	約1/3残存, 内外面は回転ナデ調整, 底部内面はその後ナデ調整
2058	〃	〃 壺	9.3	(6.1)	16.8	-	灰色 〃	〃	口縁から胴部の破片, 内外面とも回転ナデ調整
2059	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	-	〃 〃	〃	肩部の破片, 外面は回転ナデ調整, 内面は回転ナデおよびナデ調整, 外面に自然釉がわずかに付着する。
2060	〃	東播系須恵器 片口鉢	24.0	(5.5)	-	-	灰白色 灰色	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整, ハダ荒れが著しい。
2061	〃	土師質土器 杯	-	(2.8)	-	6.8	にぶい橙色 灰褐色	〃	底部約1/2残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2062	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	8.0	浅黄橙色 〃	〃	底部の破片, ロクロ水挽き成形か? 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2063	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	7.2	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/3残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整, 外面および断面に煤付着
2064	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	5.0	浅黄橙色 〃	〃	底部のみ残存, 外面は回転糸切り, 外面は粗い回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2065	〃	〃 小杯	9.5	2.6	-	5.2	〃 〃	〃	約2/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整, 底部中央に穿孔あり, 外面は全体的に煤付着
2066	〃	〃 小皿	6.1	1.4	-	4.8	橙色 〃	〃	約1/2残存, 底部外面は回転糸切り, 内面は回転ナデ調整, 外面は摩耗のため調整不明
2067	〃	〃 〃	7.2	1.2	-	3.8	〃 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 口縁部は回転ナデ調整, 底部内面はナデ調整
2068	〃	〃 〃	7.8	1.7	-	4.7	浅黄橙色 〃	〃	約2/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整, 底部内面は一部ナデ調整
2069	〃	〃 椀	-	(3.4)	-	7.5	にぶい黄橙色 〃	〃	約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2070	〃	〃 〃	14.0	4.6	-	6.2	〃 〃	〃	約1/3残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2071	〃	〃 〃	15.2	5.0	-	5.7	にぶい橙色 〃	〃	約1/2残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は摩耗が著しいが回転ナデ調整か?
2072	〃	〃 〃	15.0	(5.2)	-	-	浅黄橙色 〃	〃	約1/2残存, ロクロ水挽き成形か? 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2073	〃	〃 〃	15.4	(5.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	ほぼ完形, ロクロ水挽き成形, 内外面とも摩耗が著しく調整不明, 口縁部外面は回転ナデ調整か?
2074	〃	〃 〃	15.6	5.5	-	6.6	〃 〃	〃	約1/3残存, 内外面は摩耗が著しいが回転ナデ調整か?
2075	〃	〃 〃	15.2	5.5	-	6.0	橙色 〃	〃	約1/2残存, ロクロ水挽き成形か? 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2076	第IV層	土師質土器 椀	16.0	5.8	-	6.6	にぶい黄橙色 〃	良	約1/5残存, ロクロ水挽き成形, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明, 内面に煤付着
2077	〃	土師器 鍋	33.4	(6.0)	29.2	-	橙色 にぶい橙色	〃	口縁部の破片, 口縁部内外面はヨコナデ調整, 胴部外面はハケの後ナデ調整, 内面はナデ調整, 外面に煤付着
2078	〃	〃 〃	35.0	(8.7)	31.0	-	褐色 〃	〃	口縁部の破片, 外面はハケ・ナデ調整, 内面はヨコナデ調整, 内外面とも指押えが多く残る。
2079	〃	瓦器 椀	15.6	(4.6)	-	-	黄灰色 〃	〃	約1/4残存, 内外面はナデ調整, 外面には指押えが多く残る。和泉型
2080	〃	白磁 皿	-	(0.9)	-	6.4	灰白色 〃	〃	底部の破片, 底部外面には目跡状のものあり。
2081	第V・ VI層	弥生土器 壺	-	(4.0)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	〃	破片, 内外面はハケ調整, その後口縁端部はヨコナデ調整を施す。ハケは14条で一単位か?
2082	〃	〃 甕	12.1	(3.9)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部から胴部の破片, 胴部外面はハケ調整, その他は摩耗が著しく調整不明
2083	〃	土師器 高杯	-	(5.4)	-	-	淡黄色 浅黄色	やや不良	杯から脚部の破片, 外面はハケ調整, その他の部位は摩耗が著しく調整不明
2084	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.6)	-	-	灰白色 〃	不良	つまみのみ残存, つまみ径3.5cm, 全体的に摩耗が著しく調整不明
2085	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	-	灰色 〃	良	破片, 内外面は回転ナデ調整
2086	〃	〃 〃	12.2	(4.2)	-	-	灰褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2087	〃	〃 杯身	11.4	3.7	-	-	灰色 〃	〃	ほぼ完形, 口縁部は回転ナデ調整, 底部外面はヘラ起こし, 底部内面はナデ調整
2088	〃	〃 杯	-	(1.5)	-	-	灰赤色 青灰色	〃	破片, 内外面とも回転ナデ調整の後一部ナデ調整
2089	〃	〃 杯又は壺	-	(3.5)	-	8.4	灰赤色 〃	〃	底部の破片, 底部外面は回転ヘラ切りの後輪高台を貼付, 内外面は回転ナデ調整
2090	〃	〃 皿	16.2	1.3	-	13.8	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から底部の破片, 全体的に摩耗が著しく調整不明
2091	〃	〃 高杯	-	(4.5)	-	-	灰色 〃	〃	杯部から脚部の破片, 内外面は回転ナデ調整, 杯部内面は回転ナデ調整の後ナデ調整か?
2092	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	8.1	灰色 灰黄褐色	〃	脚部の破片, 内外面は回転ナデ調整, 杯部内面と脚部外面に自然袖付着
2093	〃	〃 平瓶	-	(9.7)	-	-	明青灰色 灰白色	〃	口縁部から胴部の破片, 回転ナデ調整, 胴部外面には自然袖付着
2094	〃	〃 壺	-	(1.8)	-	6.6	灰白色 〃	やや不良	底部のみ残存, 口縁部へと立ち上がる部分は内外面とも回転ナデ調整, 底部内面はその後ナデ調整, 外面はナデ調整
2095	〃	〃 〃	5.8	(3.9)	-	-	青灰色 灰色	良	口縁部のみ残存, 内外面は回転ナデ調整
2096	〃	〃 甕	-	(5.8)	9.1	3.6	黄灰色 〃	やや不良	胴部から底部の破片, 底部外面はヘラ削りか? 内外面とも回転ナデ調整
2097	〃	〃 甕	-	(3.6)	-	-	灰褐色 〃	良	破片, 内外面とも回転ナデ調整
2098	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	-	褐灰色 灰色	〃	破片, 内外面とも回転ナデ調整, 口縁部外面はカキ目調整, 口縁部内面に自然袖付着
2099	〃	〃 〃	19.4	(4.2)	-	-	灰色 〃	やや不良	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2100	〃	〃 〃	22.0	(44.9)	46.1	-	〃 〃	良	約1/2残存, 口縁部内外面は回転ナデ調整, 胴部外面はタタキ目が残る。胴部内面はタタキ成形後上胴部にナデ調整

第Ⅱ調査区 遺物観察表5

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2101	第V・VI層	緑釉陶器 椀	-	(1.6)	-	5.4	緑色 〃	不良	底部の破片、素地は軟質で摩耗が著しく調整不明、釉調は濃緑色
2102	〃	白磁 碗	16.0	(2.8)	-	-	灰白色 〃	良	口縁部の破片、釉葉は0.5～1mmと厚めに施釉、内面には貫入あり。
2103	〃	〃 〃	16.0	(2.9)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片、体部外面は一部施釉のない部分がみられる。
2104	〃	石製品 砥石	11.6	8.6	2.8	418.8	-	-	砂岩を利用、一主面と両側面に擦痕あり、全体的に赤色・黒色化している。
2105	第X層	弥生土器 壺	-	(1.9)	-	-	橙色 〃	良	破片、器面の剥落が著しく調整不明、口縁端部に施文あり。
2106	〃	〃 〃	-	(4.6)	-	-	褐灰色 灰白色	〃	破片、内外面とも剥落が著しく調整不明、外面はハケ調整か？外面には沈線1条と列点文をめぐらす。
2107	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	5.8	にぶい黄橙色 浅黄橙色	〃	底部のみ残存、内外面とも剥落が著しく調整不明、内外面に指押えが残る。
2108	〃	〃 〃	-	(9.3)	-	5.2	灰色 橙色	〃	胴部から底部の破片、外面は剥落のため調整不明、内面はナデ調整か？内面には粘土接合痕と指押えが残る。
2109	〃	〃 〃	-	(6.9)	-	8.8	にぶい赤褐色 にぶい橙色	〃	胴部から底部の破片、外面は剥落のため調整不明、内面には指ナデ、指押えが残る。
2110	〃	〃 甕	-	(8.9)	-	6.3	灰黄褐色 灰褐色	〃	胴部から底部の破片、外面はハケ調整の後一部ナデ調整、指押えが残る。内面はケズリ・ナデ調整
2111	〃	〃 〃	18.0	(5.0)	-	-	浅黄橙色 〃	〃	口縁部の破片、口縁部内面と胴部外面はハケ調整、その他は摩耗が著しく調整不明
2112	〃	〃 〃	20.0	(3.4)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部の破片、外面は摩耗のため調整不明、内面はハケ・ナデ調整か？口縁端部に凹線文2条がめぐる。
2113	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	-	にぶい褐色 橙色	〃	細片、口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部内外面はナデ調整
2114	〃	〃 高杯	-	(6.1)	-	-	浅黄色 〃	〃	脚部の破片、外面はハケ調整、内面はナデ調整、内面にはしぼり痕あり。
2115	〃	〃 〃	-	(9.5)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	杯底部から脚部が残存、杯部内面はナデ調整、脚部内外面はタテ方向のハケ調整、透しは4カ所か？
2116	〃	〃 ミニチュア	-	(2.1)	-	2.4	にぶい黄色 橙色	〃	底部のみ残存、内外面とも摩耗が著しく調整不明、外面に指押えがわずかに残る。
2117	〃	石製品 叩石	10.9	7.7	4.4	515.6	-	-	砂岩を利用、両主面と側縁に敲打痕が残る。
2118	〃	〃 〃	8.8	8.9	2.5	304.1	-	-	砂岩を利用、一主面のみ使用、中央部に敲打痕が集中する。
2119	その他の 包含層	土師器 高杯	-	(2.6)	-	-	黄橙色 橙色	やや不良	杯底部から脚部が残存、内外面とも摩耗が著しく調整不明
2120	〃	〃 甌	-	(5.5)	-	-	明赤褐色 橙色	良	把手のみ残存、把手部は指押え・ナデ調整、内面はケズリあり。
2121	〃	須恵器 杯身	12.1	(3.5)	-	-	青灰色 〃	〃	底部を欠損、内外面は回転ナデ調整、底部外面にはヘラ記号か？
2122	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	7.4	灰白色 〃	やや不良	底部約1/4残存、底部外面は回転糸切り、内外面は回転ナデ調整後内面はミガキ調整か？
2123	〃	〃 壺	5.0	(4.6)	-	-	灰色 〃	良	口縁部約1/2残存、内外面とも回転ナデ調整
2124	〃	緑釉陶器 椀又は蓋	-	(2.1)	-	-	オリーブ灰色 〃	〃	底部の破片、内外面とも回転ナデ調整、素地は須恵質、釉調は濃緑色
2125	〃	〃 椀	-	(1.3)	-	-	緑色 〃	やや不良	細片、非常に軟質で調整不明、膜状に残る。

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2126	その他の 包含層	瓦器 小皿	8.6	1.5	-	3.0	灰色 〃	良	約1/2残存、口縁部はヨコナデ調整、底部外面には指頭 圧痕が残る。摩耗のため部分的に生地が露出
2127	〃	土師質土器 杯	11.6	4.2	-	3.4	橙色 〃	やや不良	約1/5残存、内外面とも摩耗が著しく調整不明
2128	〃	〃 〃	15.2	4.8	-	7.2	〃 〃	良	約1/3残存、底部外面は回転糸切り、内外面は回転ナデ 調整、底部内面はナデ調整か？
2129	〃	〃 小皿	8.0	1.3	-	4.4	灰白色 〃	〃	ほぼ完形、外面は回転ナデ調整、内面は器面の摩耗が著 しく調整不明
2130	〃	土師器 羽釜	-	(6.0)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	破片、口縁部外面から鏝はヨコナデ調整、胴部はハケ調 整、内面はナデ調整
2131	〃	白磁 碗	-	(1.8)	-	7.6	灰白色 〃	〃	底部のみ残存、内面のみ薄く施釉
2132	〃	〃 皿	12.0	(2.1)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片、非常に薄く施釉
2133	〃	瓦 平瓦	6.5	-	3.1	-	灰褐色 〃	不良	破片、凹面に布目痕、凸面にタタキ目または縄目痕が残 る。煤付着
2134	〃	石製品 砥石	12.4	12.0	3.2	639.7	-	-	砂岩を利用、両主面と二側縁を叩石・砥石として使用、 両主面の敲打痕は比較的鋭利で全体的に赤色化
2135	〃	〃 〃	12.2	9.8	1.9	402.0	-	-	砂岩を利用、一主面に擦痕が残る。側面には割り取った 際の敲打痕が残る。
2136	SK-205	〃 石鏃	3.0	1.8	0.5	2.2	-	-	サヌカイト製、凹基式、側縁を押圧剥離
2137	SD-201	〃 叩石	11.0	8.0	2.7	346.0	-	-	砂岩を利用、両主面中央部と四側縁に敲打痕が残る。
2138	SD-202	弥生土器 甕	-	(2.8)	-	-	橙色 〃	良	破片、外面は剥落のため調整不明、内面は口縁部ハケ調 整、端部はヨコナデ調整
2139	SD-203	〃 壺	-	(2.7)	-	-	〃 〃	やや不良	破片、内外面とも剥落のため調整不明
2140	〃	〃 甕	-	(2.6)	-	2.4	暗灰色 灰黄色	良	底部の破片、外面は剥落のため調整不明、内面は指押え・ ナデ調整
2141	〃	石製品 叩石	11.7	9.7	2.9	518.3	-	-	砂岩を利用、主に側縁を敲打に使用、一主面の中央部は わずかに敲打痕が残る。
2142	P-201	弥生土器 壺	-	(3.8)	-	-	にぶい橙色 〃	良	破片、内外面とも剥落のため調整不明、口縁部下端に小 さな刻みあり。
2143	SK-229	須恵器 杯蓋	12.0	3.2	-	-	青灰色 〃	良好	約1/4残存、口縁部内外面は回転ナデ調整、天井部内面 はナデ調整、天井部外面にはヘラ記号あり。
2144	SD-204	土製品 管状土錘	(3.8)	1.3	1.2	5.1	にぶい橙色 〃	良	約2/3残存、一端は折損、器面は全体的に摩耗しており 調整不明、指押えが残る。孔径は0.5cmを測る。
2145	SD-205	須恵器 高杯	-	(12.0)	-	-	褐灰色 灰黄褐色	〃	杯底部から脚部が残存、内外面は回転ナデ調整、脚部 には長方形の透しを上下に二ヵ所穿つとみられる。
2146	〃	石製品 砥石	(10.5)	4.3	1.6	145.9	-	-	砂岩製、両主面と二側面を使用、擦痕は長軸方向と直交 するものが顕著、一主面には光沢面がみられる。
2147	SD-206	須恵器 杯身	-	(2.7)	-	-	褐灰色 〃	良	破片、内外面とも回転ナデ調整
2148	SD-207	土師器 甕	16.2	(5.7)	-	-	橙色 〃	やや不良	口縁部から胴部の破片、口縁部内外面はヨコナデ調整、 胴部外面はハケ調整、胴部内面には工具痕が残る。
2149	〃	須恵器 杯身	-	(2.6)	-	-	灰色 〃	良	破片、内外面とも回転ナデ調整
2150	〃	〃 鉢	-	(4.9)	-	15.4	褐灰色 灰色	〃	底部から胴部の破片、内面および胴部外面は回転ナデ調 整、底部外面はナデ調整

第II調査区 遺物観察表7

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2151	SB-202	土師器 杯	-	2.5	-	-	にぶい橙色 〃	良	破片, 内外面とも回転ナデ調整
2152	〃	須恵器 杯	12.8	(3.2)	-	-	黄灰色 〃	〃	口縁部約1/4残存, 内外面とも回転ナデ調整
2153	SB-204	土師器 杯	-	(3.0)	-	6.8	灰色 橙色	〃	体部から底部の破片, 内外面とも回転ナデ調整か? 焼き歪みが著しい。
2154	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	8.4	にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや不良	底部の破片, 底部外面は回転ヘラ切りか? 内面は体部回転ナデ調整, 底部はナデまたはミガキ調整
2155	〃	須恵器 蓋	16.0	(1.8)	-	-	灰色 〃	良	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整, 口縁端部に弱い返しが付く。
2156	SB-207	土師器 皿又は杯	-	(1.8)	-	10.4	橙色 〃	〃	底部の破片, 体部は外面ミガキ調整, 内面は回転ナデ調整, 底部は外面ナデ調整, 内面はナデ・ミガキ調整
2157	〃	〃 甕	15.8	(7.1)	15.3	-	明赤褐色 橙色	〃	口縁部から胴部の破片, 口縁部はハケ・ナデ調整, 胴部は外面ヨコ方向のハケ調整, 内面はナデ調整
2158	SB-211	須恵器 壺	-	(1.6)	-	6.4	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/4残存, 外面は回転ナデ調整, 内面はナデ調整か?
2159	SK-236	〃 杯蓋	-	(1.6)	-	-	灰色 〃	〃	破片, 内外面は回転ナデ調整
2160	SK-244	土師器 甕	25.4	(4.9)	-	-	にぶい赤褐色 灰褐色	〃	口縁部から胴部の破片, 口縁部外面はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 胴部外面はハケ調整, 内面はナデ調整
2161	SD-210	〃 皿	13.2	1.6	-	10.4	橙色 〃	〃	約1/5残存, 底部は回転ヘラ切り, 外面は口縁部が回転ナデ調整, 底部はナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2162	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.8)	-	-	褐灰色 黄灰色	〃	破片, 内外面は回転ナデ調整, 天井部付近は焼き歪みあり。
2163	〃	〃 鉢	26.8	(6.3)	29.0	-	褐灰色 黄灰色	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整, 外面に自然釉付着
2164	〃	〃 壺	9.4	(3.5)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整, 内面はその後ナデ調整を行うか?
2165	〃	〃 〃	10.8	(3.8)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部から胴部の破片, 口縁部内外面は回転ナデ調整, 胴部外面はナデ調整か? 内面にはタタキ目が残る。
2166	〃	〃 杯	-	(1.4)	-	7.4	灰色 褐灰色	〃	底部の破片, 内外面とも回転ナデ調整
2167	〃	緑釉陶器 椀	-	(1.4)	-	10.0	淡緑色 〃	やや不良	底部の破片, 器面の調整は不明, 素地は軟質, 釉調は淡緑色で高台底まで施釉
2168	〃	土製品 管状土錘	(3.5)	1.4	1.3	4.8	にぶい橙色 〃	良	約2/3残存, 一端を欠損, 器面は摩耗のため調整不明, 指押えが残る。孔径は0.5cmを測る。
2169	〃	瓦 平瓦	(11.2)	-	1.8	-	黄褐色 浅黄色	不良	破片, 両面とも摩耗が著しく調整不明
2170	SD-211	須恵器 杯	-	(1.5)	-	9.6	褐灰色 〃	良	底部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2171	〃	製塩土器 -	-	(1.7)	-	-	橙色 〃	〃	細片, 外面はナデ調整, 内面は布目圧痕あり。
2172	〃	〃 -	-	(2.6)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	細片, 外面はナデ調整, 指押えが残る。内面には布目圧痕あり。
2173	SD-212	須恵器 杯身	12.4	(2.5)	-	-	灰白色 黄灰色	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2174	〃	瓦 平瓦	(10.4)	-	2.2	-	灰白色 にぶい黄橙色	やや不良	破片, 凹面には布目痕, 凸面には縄叩き痕?が残る。
2175	SD-215	弥生土器 甕	-	(1.9)	-	5.0	浅黄橙色 〃	良	底部約1/4残存, 外面はナデ調整で一部タタキ目が残る。内面はナデ調整で指押えがわずかに残る。

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2176	SD - 215	土師器 杯	14.8	4.2	-	8.0	橙色 〃	良	約1/4残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面とも回転ナデ調整の後ミガキ調整
2177	〃	須恵器 蓋	-	(1.0)	-	-	浅黄色 灰黄色	やや不良	破片, 内外面は回転ナデ調整
2178	〃	〃 杯	-	(2.1)	-	8.6	灰白色 〃	良	底部約1/4残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面は回転ナデ調整, 底部内面は一部ナデ調整
2179	〃	瓦 平瓦	(10.3)	-	2.2	-	〃 〃	やや不良	破片, 両面とも摩耗が著しい。凹面は布目痕, 凸面は縄叩き痕か?
2180	SD - 216	弥生土器 甕	-	(5.0)	-	-	橙色 明赤褐色	良	口縁部の破片, 内外面とも剥落が著しく調整不明
2181	〃	土師器 甕	-	(6.2)	-	-	橙色 〃	やや不良	口縁部の破片, 内外面とも剥落が著しく調整不明
2182	〃	〃 蓋	19.2	(2.2)	-	-	にぶい褐色 にぶい黄橙色	良	口縁部の破片, 外面は摩耗が著しく調整不明, 内面は回転ナデ調整後にミガキ調整
2183	〃	〃 皿	-	(1.8)	-	11.6	橙色 〃	〃	底部の破片, 外面高台部は回転ナデ調整, 内面はナデ・ミガキ調整
2184	〃	〃 杯	-	(3.2)	-	7.8	にぶい橙色 〃	〃	約1/3残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面は回転ナデ調整
2185	〃	〃 皿	-	(1.5)	-	10.4	橙色 にぶい黄橙色	〃	底部の破片, 外面は摩耗のため調整不明, 内部内面は回転ナデ調整, 底部内面はナデ調整と一部ミガキ調整
2186	〃	〃 〃	15.8	2.0	-	12.0	橙色 〃	〃	破片, 外面は摩耗のため調整不明, 内面底部はナデ調整, ミガキ調整もありか?
2187	〃	〃 〃	16.7	1.8	-	12.0	〃 〃	〃	約1/4残存, 口縁部外面は回転ナデ調整の後ミガキ調整, 底部内外面はナデ調整
2188	〃	須恵器 杯	-	(1.3)	-	7.0	灰色 〃	〃	底部の破片, 外面は回転ナデ調整およびナデ調整, 内面は回転ナデ調整
2189	〃	〃 椀	11.5	(2.8)	-	-	灰黄色 〃	やや不良	口縁部の破片, 内外面とも回転ナデ調整
2190	〃	〃 壺	8.0	(1.9)	-	-	灰色 〃	良	口縁部約1/3残存, 内外面回転ナデ調整
2191	〃	〃 〃	13.7	(1.4)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 内外面とも回転ナデ調整, 内面および口縁端部には自然釉が付着
2192	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	10.6	にぶい黄橙色 灰色	やや不良	底部の破片, 外面体部および内面は回転ナデ調整, 底部外面は摩耗のため調整不明
2193	〃	〃 〃	-	(5.8)	-	-	明青灰色 青灰色	良	底部から胴部の破片, 内外面とも回転ナデ調整
2194	〃	〃 甗	-	(11.0)	9.0	4.0	灰色 〃	〃	約2/3が残存, 上胴部に1条の凹線, 底部外面には回転ヘラ削り調整, 他は回転ナデ調整
2195	〃	〃 甕	21.0	(4.6)	-	-	灰黄色 〃	不良	口縁部約2/3残存, 内外面とも摩耗のため調整不明
2196	〃	〃 〃	32.2	(7.0)	-	-	灰白色 灰色	良	口縁部の破片, 内外面とも回転ナデ調整, 外面にはヘラ描きの波状文と凹線をめぐらす。
2197	〃	〃 〃	-	(4.9)	-	-	灰色 〃	〃	破片, 外面上胴部は回転ナデまたはナデ調整, 以下はタタキが残る。内面上胴部はナデ調整, 以下はタタキ成形後ナデ調整
2198	〃	製塩土器 -	-	(6.1)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	〃	破片, 外面は剥落・摩耗のため調整不明, 内面は布目圧痕が残る。
2199	〃	〃 -	-	(2.6)	-	-	橙色 灰黄色	〃	破片, 外面は摩耗のため調整不明, 内面は布目圧痕が残る。
2200	SD - 218	弥生土器 高杯	-	(9.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	脚部約1/2残存, 杯部内面はミガキ調整, 脚部外面はナデ調整の後ミガキ調整, 内面はケズリの後ナデ調整

第Ⅱ調査区 遺物観察表9

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2201	SD - 218	土師器 甕	-	(4.2)	-	-	橙色 〃	良	胴部の破片, 外面は口縁部ヨコナデ調整, 胴部は格子状 にハケ調整, 内面は口縁部ヨコ方向のハケ調整
2202	〃	〃 〃	16.9	(5.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から胴部の破片, 口縁部内面はハケ・ナデ調整, 胴部は格子状にハケ調整, その他はヨコナデ調整
2203	〃	〃 〃	24.2	(5.9)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の破片, 口縁部内外面はヨコナデ調整, 胴部外面 はハケ調整の後ナデ調整, 内面はナデ調整
2204	〃	〃 杯	-	(3.3)	-	10.8	橙色 〃	〃	底部約1/4残存, 外面は摩耗のため調整不明, 内面はミ ガキ調整か?
2205	〃	〃 〃	15.6	3.1	-	9.2	〃 〃	〃	約1/2残存, 底部外面は回転ヘラ切りの後ナデまたはミガ キ調整, 底部内面は回転ナデ・ミガキ調整
2206	〃	〃 〃	13.9	3.3	-	7.9	〃 〃	やや不良	約1/2残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面とも摩耗 のため調整不明
2207	〃	〃 〃	13.8	3.9	-	9.3	にぶい橙色 橙色	良	約1/5残存, 外面は器面の摩耗が著しく調整不明, 内面 は回転ナデ調整後ミガキ調整
2208	〃	〃 皿	14.6	1.8	-	10.8	橙色 〃	やや不良	口縁部から底部の破片, 外面はミガキ調整, 内面は摩耗 が著しく調整不明
2209	〃	須恵器 杯	13.0	(2.8)	-	-	灰オリーブ色 〃	良	口縁部の破片, 外面は口縁部回転ナデ調整, 底部はヘラ 削りか? 内面は回転ナデ調整
2210	〃	〃 〃	14.4	(3.0)	-	-	灰白色 〃	不良	口縁部約1/4残存, 内外面とも摩耗のため調整不明
2211	〃	〃 皿又は杯	-	(1.4)	-	8.6	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	底部の破片, 外面は摩耗のため調整不明, 内面は回転ナ デ調整の後底部のみナデ調整
2212	〃	〃 皿	14.8	2.2	-	9.9	灰色 灰黄色	やや不良	破片, 内外面とも回転ナデ調整
2213	〃	〃 壺	-	(6.7)	-	10.7	灰色 〃	良	底部約1/3残存, 内外面は回転ナデ調整, 高台部付近に 自然釉が付着
2214	SD - 219	〃 〃	-	(7.5)	-	11.3	灰白色 〃	〃	底部約1/4残存, 内外面は回転ナデ調整, 胴部外面およ び底部内面に自然釉がわずかに付着
2215	SD - 220	〃 蓋	17.4	(1.1)	-	-	にぶい橙色 褐灰色	〃	口縁部の破片, 端部は内外面とも回転ナデ調整, 天井部 内外面はナデ調整か?
2216	SD - 222	瓦 平瓦	(8.3)	-	3.0	-	橙色 〃	不良	細片, 両面とも摩耗が著しく凹面は調整不明, 凸面は叩 き痕が残る。
2217	SD - 223	須恵器 杯	-	(2.4)	-	7.0	灰色 〃	良	底部約1/4残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 体部外面は 回転ナデ調整, 内面はナデ調整
2218	〃	〃 壺	8.3	(7.2)	-	-	黄灰色 〃	やや不良	口縁部のみ残存, 内外面とも口縁部は回転ナデ調整, 胴 部はナデ調整か? 全体的に摩耗が著しい。
2219	〃	〃 〃	8.4	(4.8)	14.6	-	灰色 暗灰黄色	良	口縁部から胴部の破片, 外面は自然釉が付着し調整不 明, 内面は回転ナデ調整
2220	SD - 224	〃 甕	-	(4.0)	-	-	灰色 〃	〃	破片, 内外面とも回転ナデ調整
2221	P - 224	土師器 甕	15.6	(3.6)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	破片, 外面は口縁部ヨコナデ調整, 胴部ヨコ方向のハケ 調整, 内面は口縁部ヨコ方向のハケ調整, 外面に煤付着
2222	P - 216	〃 杯	-	(1.4)	-	7.8	浅黄橙色 橙色	〃	底部の破片, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面は回転ナ デ調整
2223	P - 215	〃 〃	-	(1.2)	-	9.0	にぶい褐色 〃	〃	底部約1/4残存, 底部内面は回転ナデの後ミガキ調整 か? 全体的に摩耗が著しく調整不明
2224	P - 212	〃 〃	-	(1.7)	-	9.8	橙色 〃	やや不良	底部の破片, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面は回転ナ デ調整, 全体的に摩耗が著しい。
2225	P - 211	〃 皿又は杯	-	(2.5)	-	11.0	〃 〃	良	底部の破片, 内面および体部外面は回転ナデ調整の後ミ ガキ調整, 底部外面は摩耗のため調整不明

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2226	P-220	土師器 皿	-	1.1	-	-	橙色 〃	良	口縁部から底部の破片, 内外面は回転ナデ調整か? その 後底部内面はナデ調整とみられる。
2227	P-208	須恵器 杯蓋	11.2	(3.1)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2228	P-202	〃 杯身	12.0	(2.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2229	P-223	〃 〃	-	(1.9)	-	-	灰白色 〃	〃	破片, 内外面は回転ナデ調整
2230	P-217	〃 〃	9.4	(1.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2231	P-206	〃 杯	-	(1.4)	-	9.0	〃 〃	〃	底部の破片, 外面は回転ナデ調整, 内面はナデ調整
2232	P-209	〃 〃	-	(1.2)	-	8.1	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/4残存, 内外面は回転ナデ調整およびナデ調整
2233	P-210	〃 〃	-	(1.2)	-	8.0	灰色 〃	不良	底部約1/4残存, 内外面は回転ナデ調整
2234	P-221	〃 〃	-	(1.1)	-	7.2	〃 〃	良	底部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2235	P-218	〃 〃	-	(1.9)	-	7.2	灰白色 灰色	〃	底部の破片, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面は回転ナ デ調整
2236	P-213	〃 皿	15.4	2.3	-	10.0	灰白色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整, そ の他は内外面とも回転ナデ調整
2237	P-222	〃 高杯	-	(5.3)	-	-	〃 〃	やや不良	杯部から脚部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2238	P-205	〃 壺又は鉢	-	(9.7)	-	11.2	灰色 〃	良	底部約1/4残存, 底部外面はナデ調整, 胴部外面は回転 ナデ調整, 内面は工具によるナデ調整と工具痕が残る。
2239	P-223	〃 壺	-	(9.1)	-	9.0	灰白色 灰色	〃	底部約1/4残存, 底部は内外面ともナデ調整, 胴部内外 面は回転ナデ調整
2240	P-214	製塩土器 -	-	(4.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	破片, 外面はナデ調整か? 内面は布目圧痕が口縁端部ま で残る。
2241	P-219	黒色土器 椀	-	(2.2)	-	6.4	暗灰色 黒褐色	〃	底部約1/4残存, 両黒, 全体的に摩耗が著しい。高台部は 回転ナデ調整, 内面はミガキ調整か?
2242	P-207	瓦 平瓦	(5.1)	-	2.3	-	橙色 〃	〃	破片, 凹面は布目圧痕あり, 凸面はナデ調整か?
2243	P-213	鉄製品 不明	(7.3)	1.9	-	-	-	-	刃部残存長7.3cm, 刃部幅1.5cmで, 刃部のみ残存, 刃縁は 若干鈍く, 内湾する。
2244	P-203	石製品 叩石	15.2	9.9	4.5	968.7	-	-	砂岩を利用, 両主面の中央部に敲打痕, 一面には深い擦 痕が残る。
2245	P-204	〃 砥石	10.4	16.8	5.7	997.3	-	-	砂岩を利用, 一面のみ擦痕が残る。側面は割り取りおよ び成形の際の敲打痕が残る。
2246	SB-212	土師質土器 杯	-	(2.0)	-	4.2	灰白色 〃	良	高台部のみ残存, 外面は体部回転ナデ調整, 底部はナデ 調整か? 内面は摩耗のため調整不明
2247	〃	〃 椀	15.3	(4.5)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から体部の破片, 外面は口縁部回転ナデ調整, 体 部はヘラ削りの後ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2248	SB-213	須恵器 蓋	-	(1.1)	-	-	暗紫灰色 〃	〃	破片, 内外面は回転ナデ調整
2249	〃	土師質土器 杯	-	(1.6)	-	8.0	にぶい橙色 橙色	〃	底部の破片, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 体部外面は回転ナデ調整
2250	〃	〃 〃	9.4	4.0	-	7.0	橙色 〃	〃	口縁部から底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 内外面は 回転ナデ調整

第II調査区 遺物観察表11

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2251	SB - 213	土師質土器 杯	11.5	3.2	-	6.6	にぶい黄橙色 〃	良	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面とも摩耗のため調整不明
2252	〃	〃 〃	11.8	3.3	-	8.1	浅黄橙色 〃	〃	完形, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整か? 焼き歪みが著しい。
2253	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	6.2	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整か?
2254	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	6.4	にぶい黄橙色 浅黄橙色	〃	底部の破片, ロクロ水挽き成形か? 底部外面は回転糸切り, 内面は回転ナデ調整およびナデ調整
2255	〃	〃 小皿	6.3	1.7	-	4.6	にぶい橙色 〃	〃	ほぼ完形, 底部外面は回転糸切り, 外面および底部内面は摩耗のため調整不明, 口縁部内面は回転ナデ調整
2256	〃	〃 〃	7.2	1.5	-	5.6	橙色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 口縁部内外面は回転ナデ調整, 底部内面は摩耗のため調整不明
2257	〃	〃 〃	7.8	1.4	-	6.0	にぶい黄褐色 〃	〃	約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面とも摩耗が著しく調整不明
2258	SB - 216	〃 杯	-	(1.7)	-	3.8	浅黄橙色 〃	やや不良	高台部のみ残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面とも摩耗が著しく調整不明
2259	〃	青磁 碗	-	(4.4)	-	5.4	オリーブ灰色 〃	良	体部から底部の破片, 竊蓮弁文
2260	SB - 221	土師質土器 杯	-	(2.5)	-	8.0	浅黄橙色 〃	〃	底部約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2261	SB - 225	緑釉陶器 碗	-	(3.2)	-	-	緑色 〃	〃	破片, 内外面は回転ナデ調整, 素地は須恵質, 釉調は緑色を呈し, 内面にはゴマがみられる。
2262	〃	土師器 小皿	8.2	1.4	-	7.4	橙色 〃	〃	約1/2残存, 手づくね, 口縁部はヨコナデ調整, 底部はナデ調整で指頭圧痕が多く残る。
2263	〃	〃 〃	8.9	2.0	-	6.3	〃 〃	〃	約4/5残存, 手づくね, 口縁部はヨコナデ調整, 底部はナデ調整で指頭圧痕が残る。
2264	〃	〃 〃	9.0	1.8	-	4.4	〃 〃	〃	完形, 手づくね, 口縁部はヨコナデ調整, 底部はナデ調整で指頭圧痕が残る。
2265	〃	土師質土器 小皿	7.9	1.8	-	6.1	浅黄褐色 〃	〃	完形, 底部外面は回転糸切り, 口縁部は回転ナデ調整, 底部内面はナデ調整, 器壁は厚め
2266	〃	〃 杯	10.8	3.7	-	7.2	橙色 〃	〃	約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2267	SA - 209	〃 〃	-	(0.9)	-	5.4	〃 〃	〃	底部約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2268	SA - 218	瓦器 碗	-	(2.5)	-	-	暗灰色 〃	〃	破片, 内外面とも摩耗が著しく調整不明, 外面に指頭圧痕が残る。
2269	SK - 252	土師器 高杯	-	(12.7)	-	-	赤褐色 にぶい橙色	〃	脚部の破片, ロクロ成形, ナデ調整
2270	〃	土師質土器 杯	14.1	4.1	-	6.6	橙色 にぶい橙色	〃	約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面はその後ナデ調整か?
2271	〃	〃 〃	14.5	4.2	-	7.0	橙色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 口縁部は回転ナデ調整, 底部内面はナデ調整, 外面は磨滅が著しい。
2272	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	4.2	にぶい橙色 浅黄褐色	〃	底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 外面は摩耗のため調整不明, 内面は回転ナデ調整
2273	SK - 253	〃 〃	15.2	4.5	-	7.4	浅黄褐色 〃	〃	口縁部から底部の破片, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面とも回転ナデ調整か?
2274	〃	〃 小皿	7.4	1.5	-	4.0	〃 〃	〃	口縁部から底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 内外面とも回転ナデ調整
2275	SK - 257	〃 〃	6.4	1.8	-	4.0	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	約1/3残存, 外面は摩耗のため調整不明, 内面はナデ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2276	SK - 262	須恵器 杯	-	(15)	-	9.9	灰色 〃	良	底部約1/4残存, 底部外面はヘラによる切り離し, 内外面は回転ナデ調整
2277	〃	土師質土器 小杯	9.4	4.4	-	6.2	橙色 〃	やや不良	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整とみられるが, 底部内面は摩耗のため調整不明
2278	〃	〃 碗	-	(2.2)	-	5.4	〃 〃	良	底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 体部外面は摩耗のため調整不明, 内面は回転ナデ調整
2279	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.6	浅黄色 灰黄褐色	〃	底部の破片, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2280	〃	瓦質土器 鍋	18.2	(6.8)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部約1/4残存, 口縁部外面および内面はヨコナデ調整, 胴部外面はナデ調整で指頭圧痕が多く残る。
2281	〃	石製品 石鍋	29.6	(5.2)	-	-	銀桃色 〃	-	口縁部の破片, 外面はタテ方向に鑿の痕, 内面は鑿の痕および研磨の際の傷が残る。補修孔あり。
2282	SK - 263	須恵器 鉢	-	(2.2)	-	12.2	浅黄橙色 〃	〃	底部約1/2残存, 底部外面はナデ調整, 底部内面および胴部外面は回転ナデ調整, 底部外面には粉状圧痕あり。
2283	〃	土師質土器 小皿	7.6	1.1	-	5.2	にぶい橙色 〃	〃	約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2284	SK - 264	〃 碗	14.4	4.5	-	6.3	浅黄褐色 灰白色	〃	ほぼ完形, ロクロ水挽き成形か? 底部は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整, その後内面はナデまたはミガキ調整
2285	〃	〃 〃	14.6	4.9	-	6.0	にぶい黄褐色 〃	〃	約2/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整, 全体的に摩耗が著しい。
2286	SK - 268	土師器 杯	-	(1.4)	-	8.0	橙色 〃	やや不良	底部約1/4残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面とも摩耗が著しく調整不明
2287	SK - 270	須恵器 蓋	-	(1.3)	-	-	灰白色 〃	良	つまみ部分が残存, つまみ径2.6cm, 天井部外面は回転ナデ調整, 内面はナデ調整, つまみはナデ調整か?
2288	SK - 271	土師質土器 杯	14.2	4.0	-	8.3	浅黄褐色 〃	〃	ほぼ完形, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2289	SK - 279	〃 〃	12.2	3.4	-	5.8	橙色 〃	〃	約1/3残存, 底部外面は回転糸切りの後部分的にナデ調整か? 内外面は回転ナデ調整
2290	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	7.0	にぶい橙色 橙色	〃	体部から底部の破片, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整
2291	〃	瓦質土器 鍋	23.6	(8.6)	23.3	-	灰色 〃	〃	口縁部約1/4残存, 口縁部外面から胴部内面はヨコナデ調整, 胴部外面は指頭圧痕多く残る。外面に煤付着
2292	〃	〃 釜	26.0	(10.4)	28.2	-	浅黄色 褐灰色	やや不良	口縁部から胴部の破片, 外面はヨコナデ, 一部ヘラナデ調整, 内面はナデ調整か? 胴部に指頭圧痕が残る。
2293	〃	石製品 砥石	11.1	10.4	3.7	441.1	-	-	砂岩を利用, 両主面と一側縁に擦痕がみられる。全体的に赤色化しており火熱を受けた可能性がある。
2294	〃	〃 〃	11.5	9.5	3.2	404.7	-	-	砂岩を利用, 一主面のみ擦痕とわずかに敲打痕が残る。側面の敲打痕は成形の際のものか? 全体的に赤色化
2295	〃	〃 〃	10.1	6.2	3.5	347.4	-	-	砂岩を利用, 一主面には敲打痕と擦痕, 一側面には擦痕あり。左側面との角に1mm幅の溝が3条ある。
2296	SD - 226	土師器 高杯	-	(2.4)	-	-	橙色 〃	良	杯部から脚部の破片, 内外面とも摩耗のため調整不明
2297	〃	須恵器 杯蓋	14.0	(2.4)	-	-	灰白色 〃	〃	約1/5残存, 内外面とも回転ナデ調整, その後天井部は部分的にナデ調整
2298	〃	〃 壺	-	(2.3)	-	9.8	赤灰色 〃	〃	底部の破片, 内外面は回転ナデ調整, 底部外面はナデ調整
2299	〃	石製品 砥石	10.3	6.2	3.0	325.0	-	-	砂岩を利用, 両主面と三側面に擦痕あり。一主面には広範囲に光沢面あり。全体的に赤色化
2300	SD - 227	須恵器 杯	-	(1.8)	-	7.5	灰色 〃	良	底部の破片, 内外面は回転ナデ調整

第Ⅱ調査区 遺物観察表13

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2301	SD - 227	黒色土器 碗	-	(2.1)	-	4.7	暗灰黄色 にぶい黄褐色	良	底部の破片, 内面は黒色, 全体的に摩耗のため調整不明, 外面には指頭圧痕あり。
2302	〃	青磁 碗	16.4	(4.4)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の破片, 鎬蓮弁文, 釉は約0.5mmと厚く貫入あり。
2303	SD - 229	須恵器 甕	-	(3.8)	-	-	灰色 〃	〃	胴部の破片, 外面は回転ナデ調整, 内面はタタキ成形後 ナデ調整
2304	〃	土師質土器 小皿	9.8	1.7	-	6.0	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部から底部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2305	SD - 232	東播系須恵器 鉢	29.2	(3.4)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整, 口縁部外面に自然 釉付着
2306	〃	瓦 平瓦	(10.1)	-	2.3	-	浅黄橙色 にぶい黄褐色	不良	破片, 凹面に布目痕, 凸面に縄叩き痕?あり。
2307	SD - 234	青磁 皿	-	(1.5)	-	4.8	オリーブ灰色 灰色	良	底部約1/4残存, 内面に施釉, 素地は外面にヘラ削り あり。
2308	SD - 237	須恵器 杯身	-	(1.9)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2309	SD - 244	土師器 杯	-	(2.1)	-	9.4	浅黄色 〃	〃	底部の破片, 底部外面はヘラ切り, 内外面は回転ナデ 調整
2310	〃	須恵器 杯	-	(1.5)	-	9.2	灰色 〃	〃	底部の破片, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面は回転ナ デ調整
2311	〃	土師質土器 杯	12.6	3.9	-	8.0	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 外面は 回転ナデ調整, 内面は回転ナデ調整またはナデ調整
2312	〃	〃 碗	-	(1.7)	-	6.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナ デ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2313	〃	瓦質土器 鍋	21.8	(3.9)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 口縁部外面および内面はヨコナデ調整, 胴部外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。外面に煤付着
2314	〃	青磁 碗	16.6	(2.7)	-	-	明緑灰色 〃	〃	口縁部の破片, 鎬蓮弁文, 釉は厚め
2315	P - 253	土師器 杯	-	(1.2)	-	6.3	浅黄橙色 〃	〃	底部約1/4残存, 内外面とも摩耗のため調整不明
2316	P - 272	須恵器 杯	-	(1.8)	-	6.2	灰色 暗灰色	〃	体部から底部の破片, 体部は内外面とも回転ナデ調整, 底部はナデ調整
2317	P - 267	〃 〃	-	(2.0)	-	9.0	灰色 〃	〃	底部の破片, 体部外面および内面は回転ナデ調整, 底部 外面はナデ調整
2318	P - 235	土師質土器 小杯	7.6	2.3	-	5.2	橙色 〃	〃	口縁部から底部の破片, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外 面は回転ナデ調整
2319	P - 279	〃 〃	11.0	3.2	-	6.6	〃 〃	〃	約1/3残存, 底部外面は回転ヘラ切り, 内外面は回転ナ デ調整
2320	P - 277	瓦器 碗	13.8	(2.7)	-	-	黒色 〃	やや不良	口縁部の破片, 口縁部付近はヨコナデ調整, 以下は摩 耗が著しく調整不明, 外面に指頭圧痕が残る。
2321	P - 272	〃 〃	14.2	(3.9)	-	-	灰色 〃	良	口縁部から体部の破片, 外面はナデ調整で指頭圧痕が多 く残る。内面はナデ・ミガキ調整
2322	P - 282	〃 〃	14.8	(4.4)	-	-	黄灰色 灰黄色	やや不良	口縁部から体部の破片, 内外面とも摩耗が著しく調整不 明, 外面には指頭圧痕が多く残る。
2323	P - 278	〃 〃	15.7	4.5	-	4.1	灰色 〃	良	約1/4残存, 内外面ナデ調整で, 口縁部外面はヨコナデ 調整, 外面に指頭圧痕残る。内面は暗文施す。
2324	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	4.2	黒色 〃	〃	体部から底部の破片, 外面はナデ調整で指頭圧痕残る。 内面はナデ調整の後圏線および格子状の暗文を施す。
2325	P - 286	〃 〃	-	(0.9)	-	4.2	灰黄色 〃	やや不良	底部約1/2残存, 内外面とも摩耗が著しく調整不明

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
2326	P-231	瓦器 椀	-	(14)	-	4.8	灰白色 暗灰色	良	底部約1/3残存,外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は摩耗のため調整不明
2327	P-256	〃 〃	-	(0.9)	-	5.0	褐灰色 〃	やや不良	底部約1/4残存,内外面とも摩耗が著しく調整不明
2328	P-273	〃 〃	-	(1.0)	-	5.0	黄灰色 〃	不良	底部約1/3残存,内外面とも摩耗が著しく調整不明
2329	P-271	東播系須恵器 鉢	30.0	11.7	-	13.5	灰白色 〃	良	口縁部から底部の破片,内外面は回転ナデ調整,外面はその後タテ方向にナデ調整を行う。
2330	P-266	土師質土器 杯又は椀	-	(2.8)	-	-	浅黄橙色 〃	〃	破片,ロクロ水挽き成形か?内外面は回転ナデ調整
2331	P-244	〃 杯	10.9	(2.5)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の破片,ロクロ水挽き成形,内外面は回転ナデ調整
2332	P-260	〃 杯又は椀	15.4	(3.0)	-	-	浅黄橙色 〃	〃	口縁部約1/4残存,全体的に摩耗気味だが内外面は回転ナデ調整とみられる。
2333	P-231	〃 〃	16.4	(3.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の破片,ロクロ水挽き成形か?内外面は回転ナデ調整
2334	P-243	〃 杯	-	(1.4)	-	6.4	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部約1/4残存,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整
2335	P-252	〃 〃	-	(1.8)	-	6.6	浅黄橙色 黄橙色	〃	底部約1/3残存,底部外面は回転糸切り,外面は摩耗のため調整不明,内面は回転ナデ調整
2336	P-229	〃 〃	-	(2.0)	-	6.6	浅黄橙色 〃	〃	底部約1/2残存,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整
2337	P-258	〃 〃	-	(1.7)	-	6.8	橙色 〃	〃	底部約1/4残存,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整
2338	P-240	〃 〃	-	(2.6)	-	7.0	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/4残存,ロクロ水挽き成形,底部内面は回転ナデ調整,体部内面はナデ調整か?
2339	P-234	〃 〃	-	(2.2)	-	7.2	橙色 〃	〃	底部約1/4残存,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整
2340	P-296	〃 〃	-	(3.5)	-	7.2	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/4残存,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整,底部は部分的にナデ調整
2341	P-230	〃 〃	-	(2.3)	-	7.6	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/4残存,底部外面は回転糸切り,内外面とも摩耗が著しく調整不明
2342	P-236	〃 〃	-	(1.2)	-	5.6	にぶい黄橙色 褐灰色	〃	底部約1/2残存,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整
2343	P-274	〃 〃	-	(4.3)	-	6.9	にぶい黄橙色 〃	〃	体部から底部の破片,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整
2344	P-255	〃 〃	-	(2.3)	-	5.6	灰白色 〃	〃	底部約1/4残存,ロクロ水挽き成形,底部外面は回転糸切り,外面は摩耗のため調整不明,内面は回転ナデ調整
2345	P-268	〃 〃	-	(1.7)	-	6.0	橙色 〃	〃	底部約1/4残存,内外面とも摩耗が著しく調整不明
2346	P-280	〃 〃	-	(1.4)	-	7.0	黒色 黒褐色	〃	底部約1/4残存,底部外面は回転糸切り,体部外面は回転ナデ調整,内面は鉄分が器面に付着しており調整不明
2347	P-233	〃 〃	-	(2.1)	-	7.0	浅黄橙色 〃	〃	底部の破片,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整
2348	P-283	〃 〃	-	(1.6)	-	7.2	にぶい黄橙色 〃	〃	底部の破片,底部外面は回転糸切り,外面は回転ナデ調整,内面は摩耗のため調整不明
2349	P-276	〃 〃	-	(2.0)	-	7.0	橙色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/3残存,底部外面は回転糸切り,内外面は回転ナデ調整,内面はその後ナデ調整を行う。
2350	P-282	〃 〃	-	(3.0)	-	6.8	浅黄橙色 〃	〃	底部約1/3残存,底部外面は回転糸切り,外面は摩耗のため調整不明,内面は回転ナデ調整と一部ナデ調整

第II調査区 遺物観察表15

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2351	P-248	土師質土器 杯	-	(3.6)	-	7.2	灰黄褐色 〃	良	体部から底部の破片, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 外面は摩耗のため調整不明, 内面は回転ナデ調整
2352	P-281	〃 〃	-	(3.9)	-	7.2	浅黄橙色 〃	やや不良	約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面はナデ調整, 内外面とも器壁は摩耗気味
2353	P-269	〃 〃	15.4	4.3	-	7.8	橙色 〃	良	口縁部から底部の破片, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切りか? 内外面は回転ナデ調整
2354	P-251	〃 〃	10.6	(4.8)	-	-	浅黄橙色 〃	〃	口縁部から底部の破片, ロクロ水挽き成形, 内外面は回転ナデ調整
2355	P-254	〃 〃	11.3	3.9	-	5.6	橙色 〃	〃	約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2356	P-292	〃 〃	11.7	4.1	-	6.3	浅黄色 灰黄色	〃	約1/3残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2357	〃	〃 〃	12.2	4.7	-	7.0	橙色 〃	〃	約2/3残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2358	P-298	〃 〃	13.4	4.1	-	7.8	〃 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2359	P-297	〃 小杯	10.0	3.1	-	6.4	灰黄褐色 橙色	〃	約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2360	P-294	〃 杯	11.1	4.0	-	5.6	褐灰色 浅黄橙色	〃	約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面とも回転ナデ調整か?
2361	P-262	〃 〃	11.4	3.4	-	7.2	浅黄橙色 橙色	〃	約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 底部内面は摩耗のため調整不明, 他は内外面とも回転ナデ調整
2362	P-228	〃 〃	12.8	3.9	-	7.0	にぶい黄橙色 〃	〃	約1/4残存, ロクロ水挽き成形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2363	P-289	〃 〃	15.2	4.0	-	5.8	浅黄橙色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2364	P-241	〃 小皿又は杯	-	(1.0)	-	4.6	橙色 〃	〃	底部約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内面はナデ調整か? 外面は摩耗が著しく調整不明
2365	P-225	〃 小皿	6.0	1.7	-	4.0	にぶい橙色 灰色	〃	口縁部から底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2366	P-296	〃 〃	6.1	1.9	-	4.0	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	ほぼ完形, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は回転ナデ調整後一部ナデ調整
2367	P-292	〃 〃	7.0	2.1	-	5.4	橙色 〃	〃	約2/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2368	〃	〃 〃	7.4	1.7	-	5.2	浅黄橙色 〃	〃	約2/3残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整, 底部内面はその後ナデ調整か?
2369	P-243	〃 〃	6.2	1.5	-	4.5	にぶい橙色 橙色	〃	約2/3残存, 外面は摩耗が著しく調整不明, 内面は回転ナデ調整
2370	P-242	〃 〃	7.6	1.4	-	6.0	浅黄橙色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は摩耗のため調整不明
2371	P-232	〃 〃	7.6	1.5	-	5.0	〃 〃	〃	口縁部から底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2372	P-266	〃 〃	7.8	1.4	-	4.9	浅黄橙色 橙色	〃	ほぼ完形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整, その後底部内面はナデ調整
2373	〃	〃 〃	8.0	1.5	-	4.6	浅黄橙色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 底部内面はナデ調整, 口縁部内外面は回転ナデ調整
2374	P-267	〃 〃	8.6	(1.4)	-	-	〃 〃	〃	口縁部約1/4残存, 内外面とも摩耗のため調整不明
2375	P-290	〃 〃	7.6	1.3	-	4.6	淡赤橙色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2376	P-266	土師質土器 小皿	7.8	1.2	-	5.2	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良	約2/3残存, 底部外面は回転糸切り, 底部内面はナデ調整, 口縁部内外面は回転ナデ調整
2377	P-282	〃 〃	8.1	1.7	-	4.5	浅黄橙色 〃	〃	完形, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2378	P-275	〃 〃	7.6	1.2	-	7.0	橙色 〃	やや不良	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2379	P-247	〃 〃	6.6	1.6	-	4.8	浅黄橙色 〃	良	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 底部内面はナデ調整, 口縁部内外面は回転ナデ調整
2380	P-270	〃 〃	8.5	2.3	-	6.1	にぶい橙色 〃	〃	完形。底部外面は回転糸切り後ナデ調整, 底部内面および口縁部は回転ナデ調整, その後底部内面はナデ調整
2381	〃	〃 〃	8.4	2.0	-	5.8	橙色 〃	〃	完形, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2382	P-246	〃 〃	6.2	1.3	-	4.8	浅黄橙色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面とも摩耗が著しく調整不明
2383	P-239	〃 〃	6.4	1.6	-	4.8	橙色 浅黄橙色	〃	口縁部から底部の破片, 底部は摩耗のため調整不明, 口縁部内外面は回転ナデ調整
2384	P-227	〃 〃	6.7	1.5	-	5.0	浅黄橙色 〃	〃	約1/2残存, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2385	〃	〃 〃	7.0	1.7	-	4.9	灰白色 にぶい黄橙色	〃	完形, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2386	P-291	〃 〃	5.2	1.3	-	4.4	橙色 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2387	P-293	〃 〃	7.2	1.5	-	6.0	〃 〃	〃	約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は鉄分状のものが多く付着しており調整不明
2388	P-238	〃 〃	6.8	1.7	-	5.1	浅黄橙色 〃	〃	約1/2残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2389	P-250	〃 〃	6.1	1.6	-	5.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部から底部の破片, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2390	P-225	〃 椀	14.2	(3.0)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2391	P-285	〃 〃	14.4	(3.8)	-	-	橙色 〃	やや不良	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2392	P-287	〃 〃	15.0	(3.4)	-	-	浅黄橙色 〃	良	口縁部の破片, 口縁端部から外面は回転ナデ調整, 内面はナデ調整で一部ミガキ調整か?
2393	P-289	〃 〃	15.8	(3.2)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2394	P-264	〃 〃	16.0	(2.8)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 内外面は回転ナデ調整
2395	P-265	〃 〃	-	(1.5)	-	5.8	にぶい褐色 浅黄橙色	〃	底部約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 内外面は回転ナデ調整
2396	P-263	〃 杯又は椀	-	(1.7)	-	6.4	浅黄橙色 〃	〃	底部約1/4残存, 底部外面はナデ調整か?その他は内外面とも回転ナデ調整
2397	P-261	〃 椀	-	(1.7)	-	6.9	橙色 にぶい赤橙色	やや不良	約1/3残存, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2398	P-280	〃 〃	-	(1.3)	-	5.5	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良	底部のみ残存, 内外面ともナデ調整, 全体的に摩耗気味
2399	P-259	〃 〃	-	(1.5)	-	6.4	灰褐色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/4残存, 底部外面は回転糸切り, 外面は回転ナデ調整, 内面は摩耗のため調整不明
2400	P-284	〃 〃	15.8	5.7	-	5.9	にぶい黄橙色 〃	〃	ほぼ完形, 底部外面は回転糸切り, 口縁部外面および内面は回転ナデ調整, 体部外面はヘラ削りの後ナデ調整

第Ⅱ調査区 遺物観察表17

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
2401	P - 226	瓦質土器 釜	20.0	(5.8)	22.4	-	暗灰色 灰色	やや不良	口縁部から胴部の破片, 口縁部外面はヨコナデ調整, 指頭圧痕が残る。外面に煤付着
2402	P - 295	〃 足釜	20.0	24.7	25.6	-	黄灰色 灰黄色	〃	約1/3残存, 外面はヨコナデ・ナデ調整で指頭圧痕残る。内面はハケ・ナデ調整, 足はヘラ削り・ナデ調整か?
2403	P - 257	白磁 碗	-	(2.4)	-	5.7	灰白色 〃	良	底部の破片, 内面のみ施釉
2404	P - 249	青磁 碗	-	(3.2)	-	-	暗オリーブ色 〃	〃	破片, 蓮弁文
2405	P - 245	〃 〃	-	(4.1)	-	4.9	オリーブ灰色 〃	〃	約1/3残存, 鎬蓮弁文, 釉は0.3~1mmと厚く見込みには貫入あり
2406	P - 288	〃 〃	-	(2.6)	-	4.8	〃 〃	〃	底部約1/2残存, 蓮弁文, 釉は厚めで貫入あり。
2407	P - 237	石製品 砥石	9.7	10.3	3.0	512.2	-	-	砂岩を利用, 両主面と三側面に擦痕があり, 両主面には敲打痕, 一主面に光沢面, 全体的に赤色化
2408	P - 241	鉄製品 刀子	(13.8)	2.5	-	-	-	-	刃部残存長7.7cm, 刃部幅2.5cmで先端部欠損する。

図版





西野々遺跡周辺航空写真(「国土画像情報(カラー空中写真)国土交通省」)



西野々遺跡周辺航空写真(米軍撮影写真)



調査前全景(東上空より)



調査前全景(西上空より)

図版 4



調査前全景 (南上空より)



調査前全景 (北上空より)

第 I 調査区 (I 区)



主な撮影機材

1. 現場作業

Mamiya 645 PRO

Mamiya-SEKOR ZOOM 55～110mm F4.5

Mamiya-SEKOR MACRO 80mm F4.5

Mamiya RZ67 PRO II

Mamiya-SEKOR 50mm F4.5

2. 整理作業

NikonD2H

Ai AF Micro Nikkor 60mm F2.8D

AF-S VR Micro Nikkor ED 105mm F2.8G

AF-S VR Zoom Nikkor ED 24～120mm F3.5～5.6G

TOYO WEIGHT STAND81

COMET CX-124T

COMET CX-25 III H×2(ウェーハー・バンク付)

3. 画像処理と補正

現場写真はフィルムのスキャニングおよびKodak Pro Photo CD及びPhoto CDのデータを取り込み画像調整・補正して使用している。遺物写真は上記デジタルカメラで撮影したRAWデータをPhotoshopで現像した上で、画像調整・補正して使用している。扉とI区関係はすべてデジタルデータでの入稿である。



I区-E遺構検出状態(西より)



I区-W遺構検出状態(東より)

図版 6



I 区 - E 遺構完掘状態 (西より)



I 区 - W 遺構完掘状態 (東より)



I 区 - E 遺構完掘状態 (西上空より)



I 区 - E 遺構完掘状態 (北上空より)

図版 8



I 区 - W 遺構完掘状態 (東上空より)



I 区 - W 遺構完掘状態 (北上空より)



I 区東部東壁セクション(西より)



I 区西部西壁セクション(東より)

図版 10



ST - 101 (東より)



ST - 101 (南より)

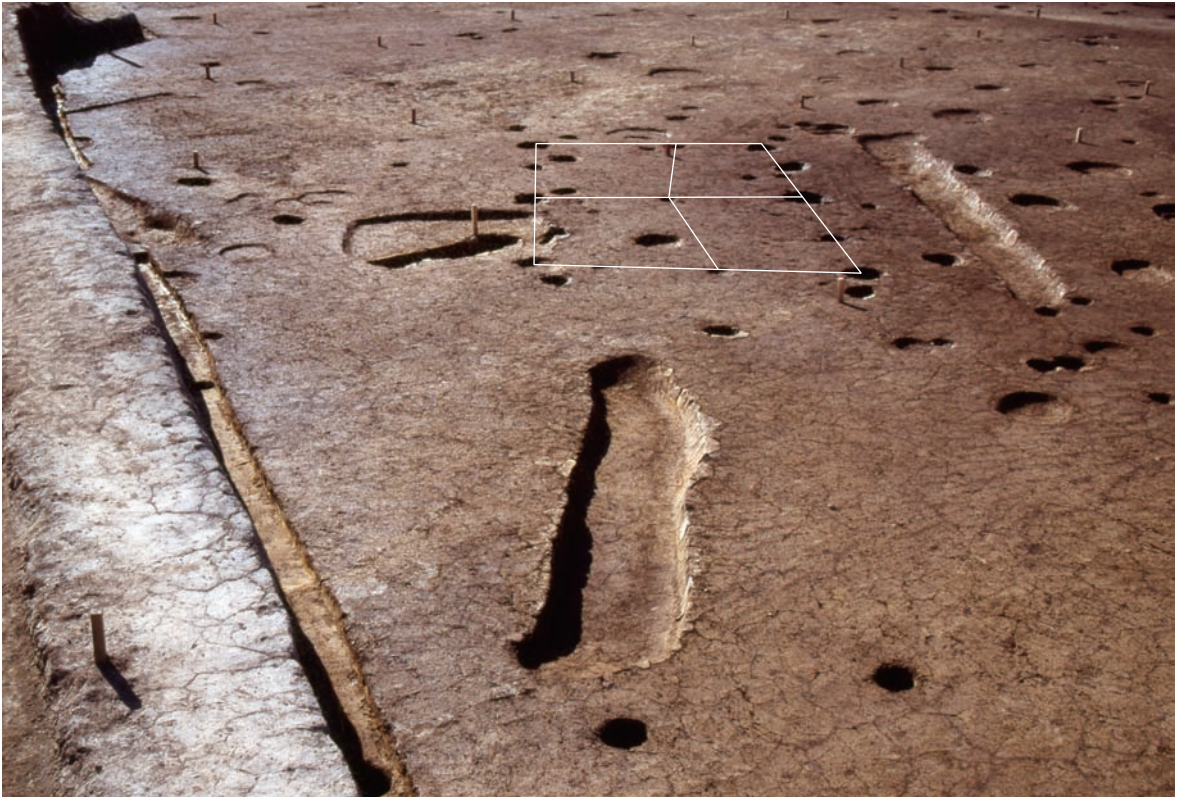


ST - 102 (南東より)



ST - 103 (東より)

図版 12



SB - 101 (北より)



SB - 102 (北より)



SK - 102 (南より)



SK - 104 (東より)



SB - 103 (北西より)



SB - 104 (北西より)



SB - 107, SD - 116 (西より)



SB - 107 (西より)



SB - 108 (北より)



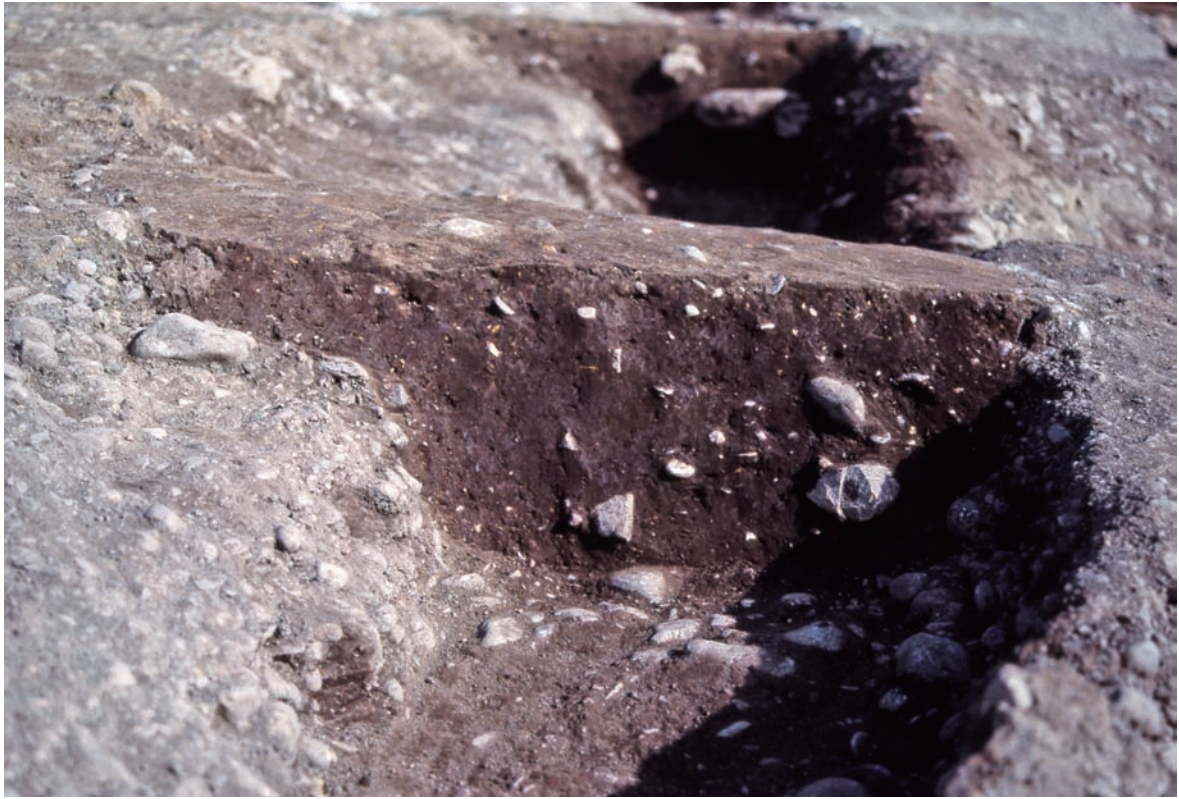
SB - 111 (北より)



SB - 115 (北より)



SD - 106 (南より)



SD - 112 (南西より)



SK - 119 (南より)



SB - 119 (北より)



SB - 121 (北東より)



SD - 134・135 (北より)



SD - 140 (北より)



第Ⅲ層 須恵器杯蓋 (1107) 出土状態



ST - 102 石製品砥石 (1176) 出土状態



P - 105 弥生土器甕 (1205) 出土状態



P - 105 弥生土器 (1206~1208) 出土状態



SP - 101 弥生土器甕 (1217) 出土状態



SB - 104 須恵器杯蓋 (1240) 出土状態



SB - 107 土師器 (1254), 須恵器 (1259) 出土状態



SB - 107 須恵器高杯 (1263) 出土状態



SB - 109 土師器杯蓋 (1269) 出土狀態



SB - 111 須惠器皿 (1293) 出土狀態



SB - 114 石製品砥石 (1300) 出土狀態



P - 111 須惠器杯蓋 (1319) 出土狀態



SB - 121 青磁碗 (1360) 出土狀態



SB - 121 石製品浮子 (1361) 出土狀態



P - 132 土師質土器杯 (1408) 出土狀態



P - 146 瓦質土器羽釜 (1424) 出土狀態



弥生土器(甕)



土師器(甕)



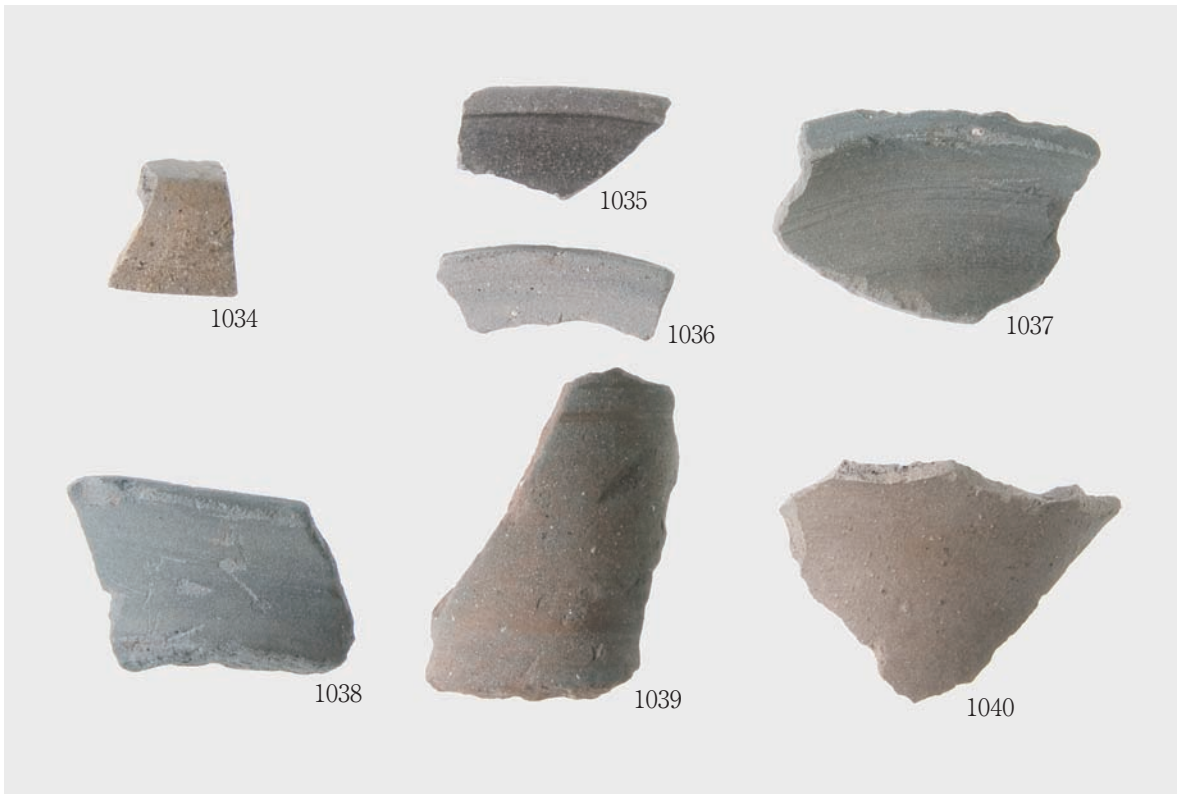
須恵器 (杯蓋)



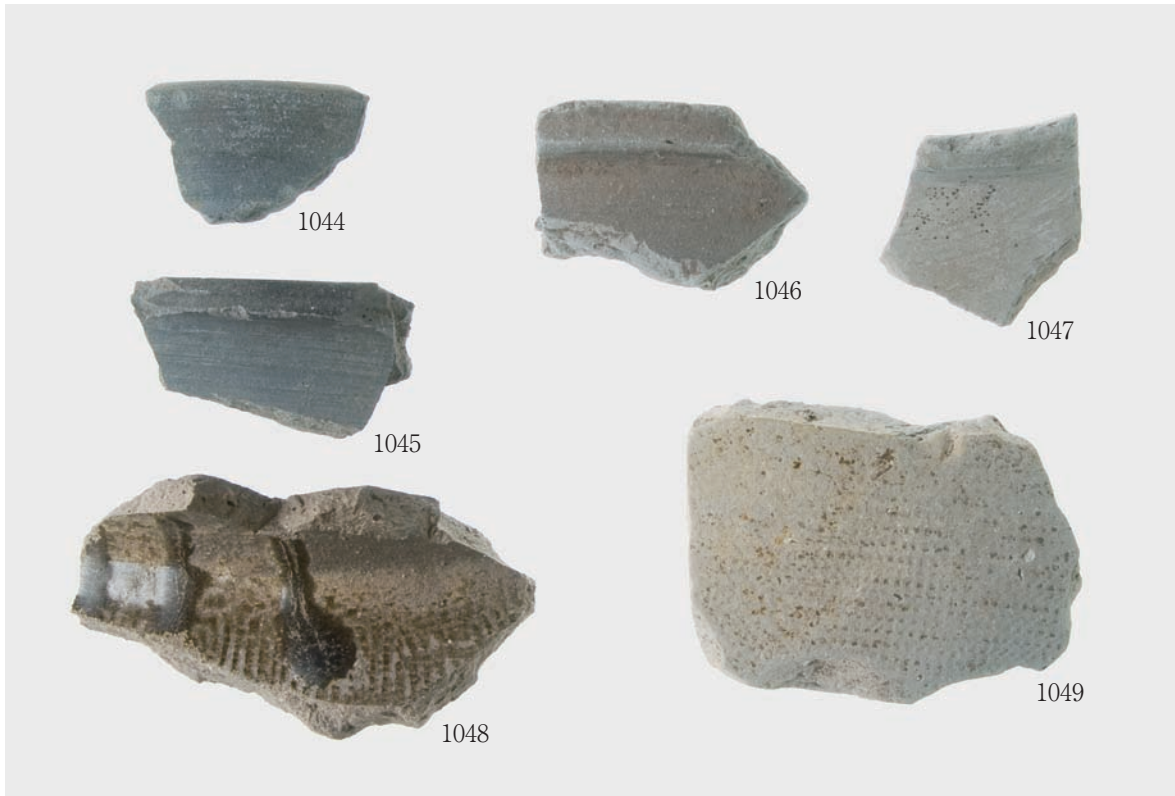
須恵器 (杯身)



須恵器 (杯身・杯・高杯)



須恵器 (壺蓋・壺)



須恵器(甕)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯・碗)



東播系須恵器(片口鉢), 瓦質土器(鍋・羽釜)

図版 28



備前焼(甕・播鉢)



唐津焼(蓋・碗), 肥前系磁器(紅皿・碗), 瀬戸・美濃系(碗), 京焼系陶器(碗)



近世陶器(皿・碗), 近世以降磁器(菊花皿・碗)



須恵器(杯蓋・杯身)

図版 30



須恵器(甕・鉢・器台)



土師質土器(杯・小皿・羽釜)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(甕)

图版 32



石製品(投弾)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(壺・甕・高杯)



須恵器(杯身), 土師質土器(杯・小皿), 瓦質土器(羽釜)

図版 34



須恵器(杯蓋・壺蓋), 土師質土器(杯)



弥生土器(甕), 土師器(杯身), 須恵器(杯蓋・杯身), 土師質土器(杯)



須恵器 (杯蓋・椀・甕), 瓦質土器 (鍋・羽釜), 青磁 (碗)



須恵器 (杯蓋), 土師質土器 (杯・小皿)



須惠器(杯蓋), 石製品(扁平片刃石斧・台石・砥石・浮子)



土師器(杯蓋・皿), 須恵器(杯蓋・鉢・器台), 肥前系磁器(碗), 近世磁器(碗), 土製品(土錘), 石製品(叩石・砥石)

图版 38

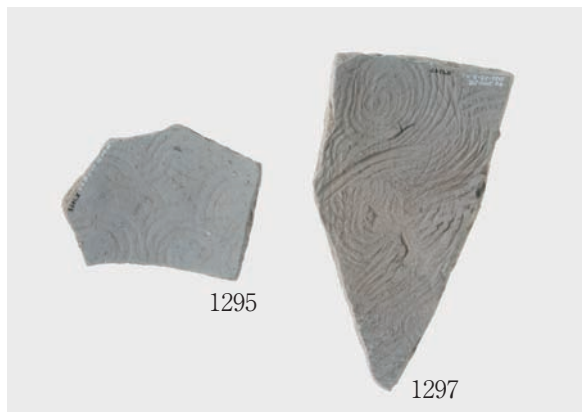


弥生土器(壺・甕), 東播系須恵器(片口鉢), 瓦質土器(羽釜), 石製品(叩石・磨石・剥片)



弥生土器(甕・ミニチュア土器)

图版 40

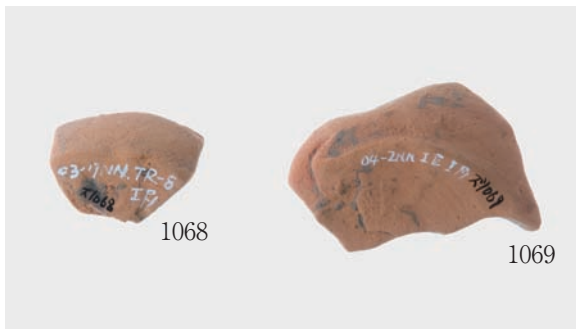


土師器(杯蓋·皿·杯), 須恵器(杯蓋·杯身·高杯·甕), 土師質土器(高杯), 石製品(磨石)



弥生土器(壺), 須恵器(甕), 二彩陶器(壺), 土師質土器(杯), 瓦質土器(羽釜), 土製品(土錘), 石製品(砥石)

图版 42

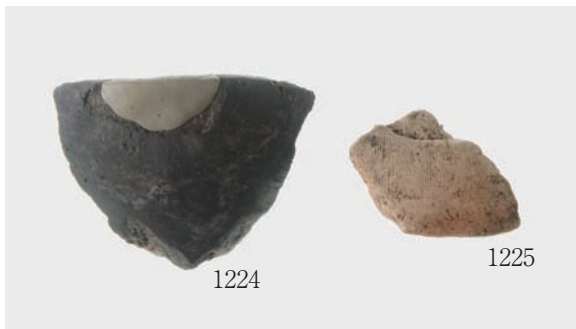


土師器(杯), 須恵器(杯身), 土師質土器(杯・小皿・碗), 白磁(碗), 青磁(香炉), 唐津焼(碗), 肥前系磁器(碗)



弥生土器(壺・鉢・ミニチュア土器), 須恵器(杯蓋), 備前焼(播鉢), 瀬戸・美濃系(碗), 近世陶器(皿), 近世磁器(碗), 近世以降磁器(菊花皿・碗), 石製品(石鍋)

図版 44



弥生土器(壺・甕・鉢・高杯・ミニチュア土器), 土師器(杯蓋), 須恵器(杯蓋)



土師器 (杯蓋・杯身・皿・盤), 須恵器 (杯蓋・杯身・皿・高杯・壺)

図版 46



須恵器(杯蓋・杯身), 土師質土器(杯・小皿・碗), 白磁(皿), 青磁(碗), 肥前系磁器(紅皿), 石製品(環状石斧)

第Ⅱ調査区（Ⅱ区）





Ⅱ区-E遺構検出状態(西より)



Ⅱ区-E遺構完掘状態(西より)



Ⅱ区 - W 遺構検出状態(東より)



Ⅱ区 - W 遺構完掘状態(東より)



Ⅱ区-E遺構完掘状態(北上空より)



Ⅱ区-W遺構完掘状態(真上より)



Ⅱ区-E中央バンク西壁セクション(西より)



Ⅱ区-W中央バンク東壁セクション(東より)



SB - 201 (東より)



SK - 271 (東より)



SK - 279 (西より)



SD - 203 (北より)



SD - 204 (北東より)



SD - 215 (南東より)

図版 54



SD - 223 (東より)



SD - 226 (南より)



SB - 213 (東より)



SB - 225 (東より)



SB - 225 (西より)



SK - 205 (東より)



SK - 262 (北より)



SK - 271 (西より)



SD - 216 (北より)



SD - 232 (東より)



P-227 (北より)



P-245 (東より)



P-257 (東より)



P-266 (西より)



P-270 (北より)



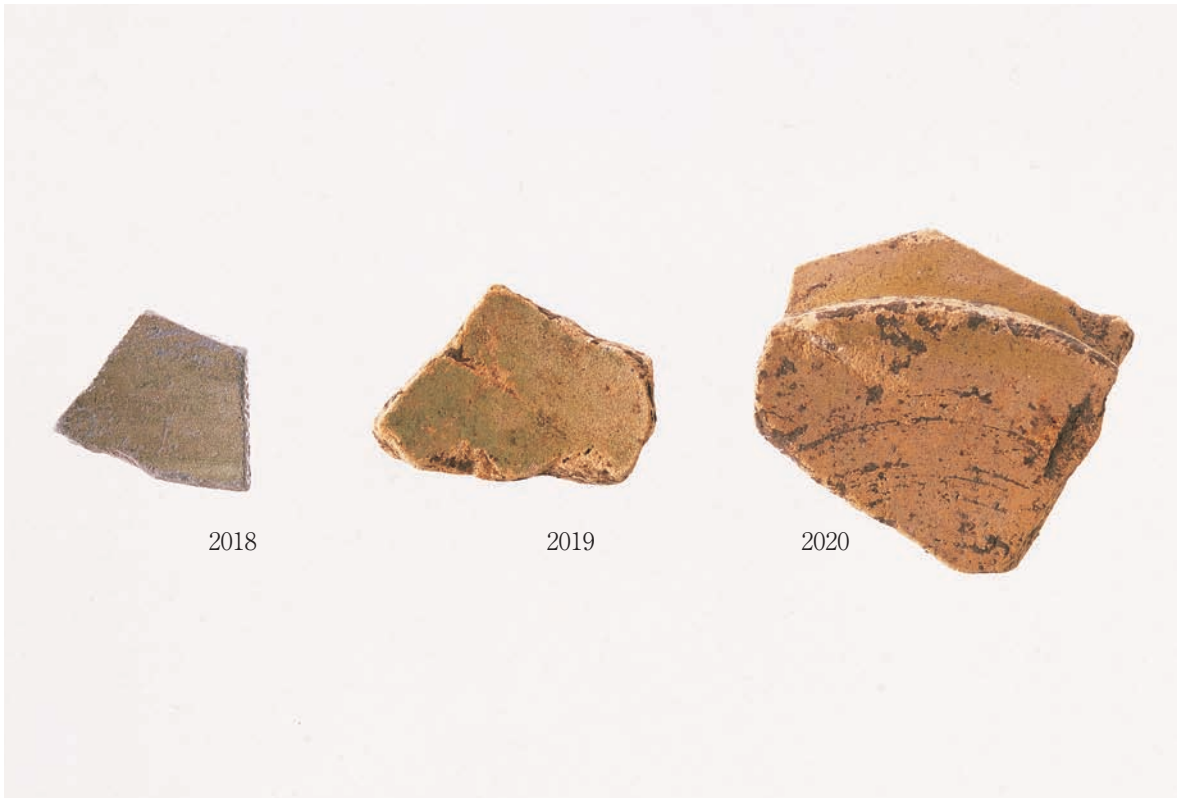
P-282 (東より)



P-292 (西より)



P-295 (東より)



绿釉陶器(碗)



绿釉陶器(碗)



2100

須恵器(甕)



2115

弥生土器(高杯)



2143

須恵器 (杯蓋)



2281

石製品 (石鍋)



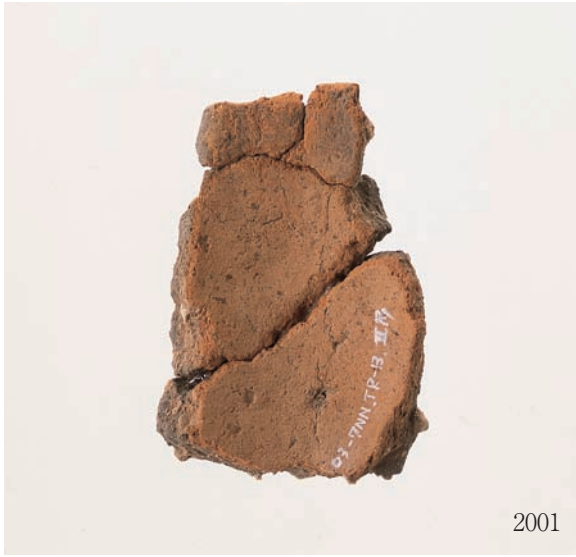
2402

瓦質土器(足釜)



2408

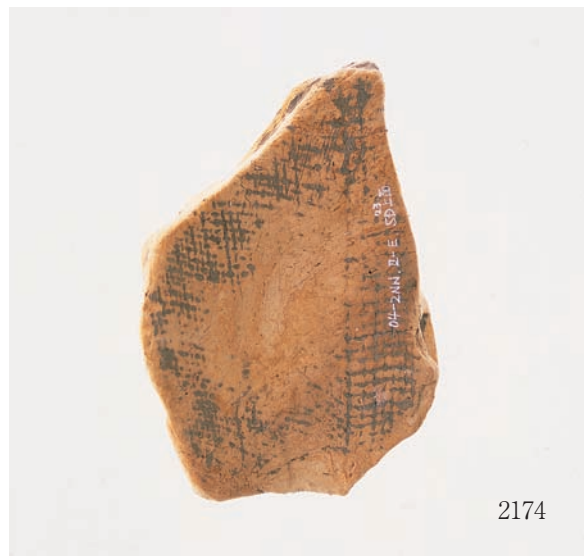
鉄製品(刀子)



須恵器(壺), 製塩土器, 瓦(平瓦), 石製品(柱状片刃石斧・砥石)



土師質土器(小杯), 石製品(石鏃・砥石・叩石)



須恵器(高杯・甕), 瓦(平瓦), 石製品(砥石)



須惠器(壺), 瓦(平瓦), 石製品(砥石)



須恵器(平瓶), 緑釉陶器(椀), 製塩土器, 白磁(碗), 青磁(碗・皿)

图版 66



灰釉陶器(皿), 土師質土器(杯·小皿·碗), 白磁(碗·皿), 青磁(碗), 瓦(平瓦)



弥生土器(ミニチュア土器), 須恵器(杯身), 土師質土器(椀), 白磁(碗・皿), 瓦(平瓦), 土製品(管状土錘)



土師器(杯·皿), 須惠器(高杯·壺·甕), 黑色土器(碗), 瓦(平瓦)



土師器(小皿), 緑釉陶器(碗), 土師質土器(杯・小皿), 青磁(碗), 瓦(平瓦), 鉄製品

图版 70



土師質土器(杯·小皿·碗), 瓦質土器(鍋·釜), 瓦(平瓦)



2307



2319



2323



2324



2357



2366



2367



2368



2369



2372

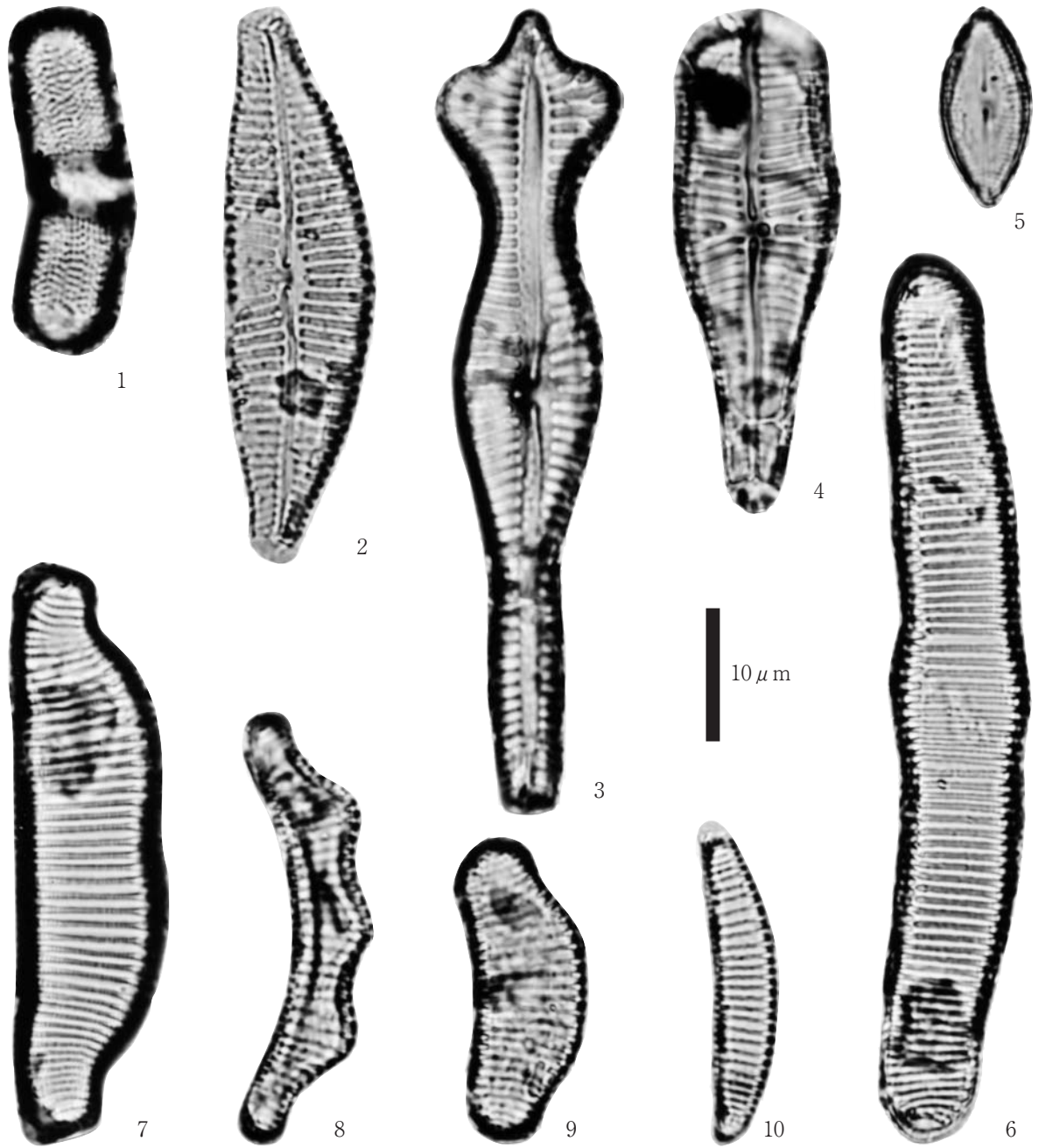
瓦器(碗), 土師質土器(杯・小杯・小皿), 青磁(皿)

图版 72



土師質土器(小皿・椀), 白磁(碗), 青磁(碗)

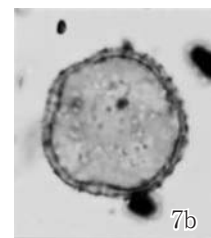
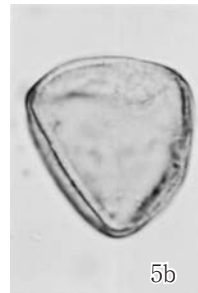
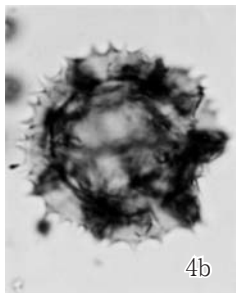
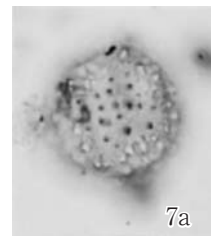
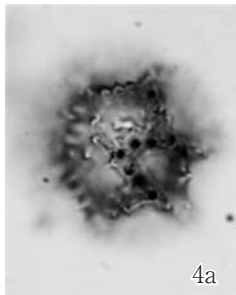
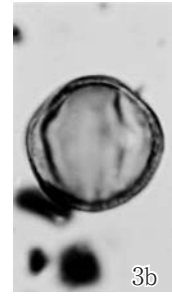
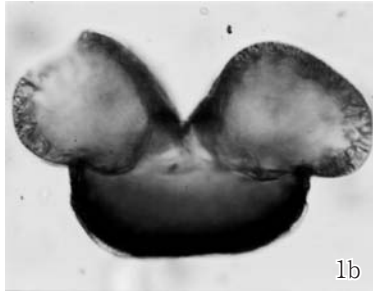
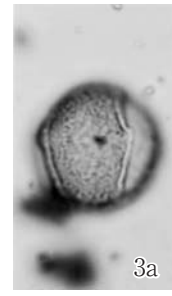
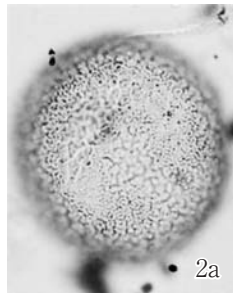
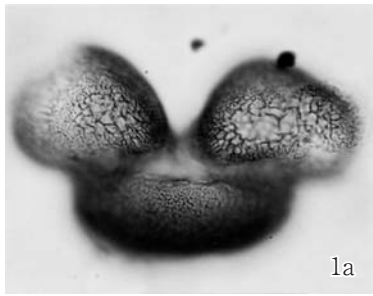
自然科学分析



1. *Aulacoseira crenulata* (Ehr.) Krammer (II区4地点:6)
2. *Cymbella turgidula* Grunow (II区4地点:9)
3. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (II区4地点:6)
4. *Gomphonema truncatum* Ehrenberg (II区4地点:6)
5. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (II区4地点:9)
6. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs) Rabenhorst (II区4地点:6)
7. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow (II区4地点:6)
8. *Eunotia camelus* Ehrenburg (II区4地点:9)
9. *Eunotia praerupta* Ehrenberg (II区4地点:9)
10. *Eunotia incisa* W.Smith ex Gregory (II区4地点:9)

珪藻化石

図版 74

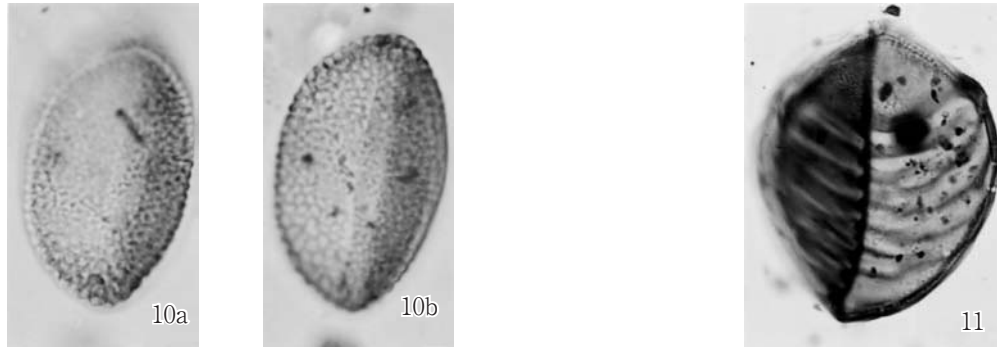
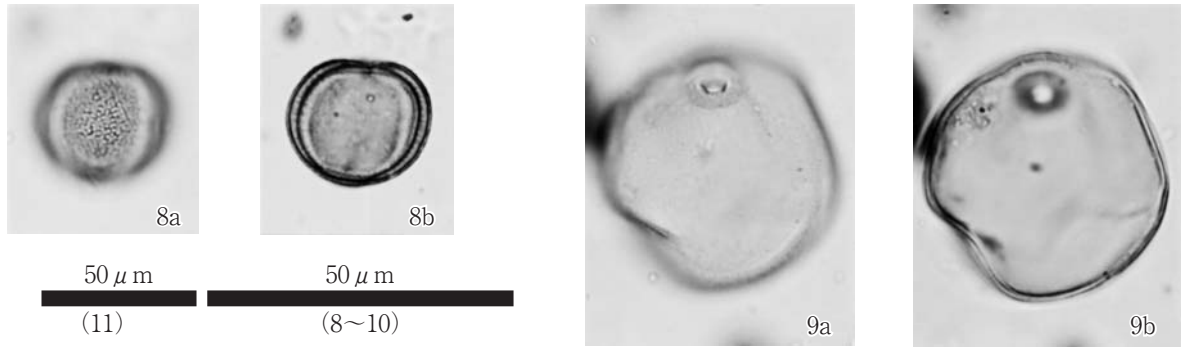


50 μm (1,2) 50 μm (3~7)

- 1. モミ属 (I区中世溝:3)
- 2. ツガ属 (I区中世溝:3)
- 3. アカガシ亜属 (II区4地点:6)
- 4. タンポポ亜科 (I区中世溝:3)

- 5. カヤツリグサ科 (I区中世溝:3)
- 6. ガマ属 (II区4地点:6)
- 7. オモダカ属 (II区4地点:6)

花粉化石1

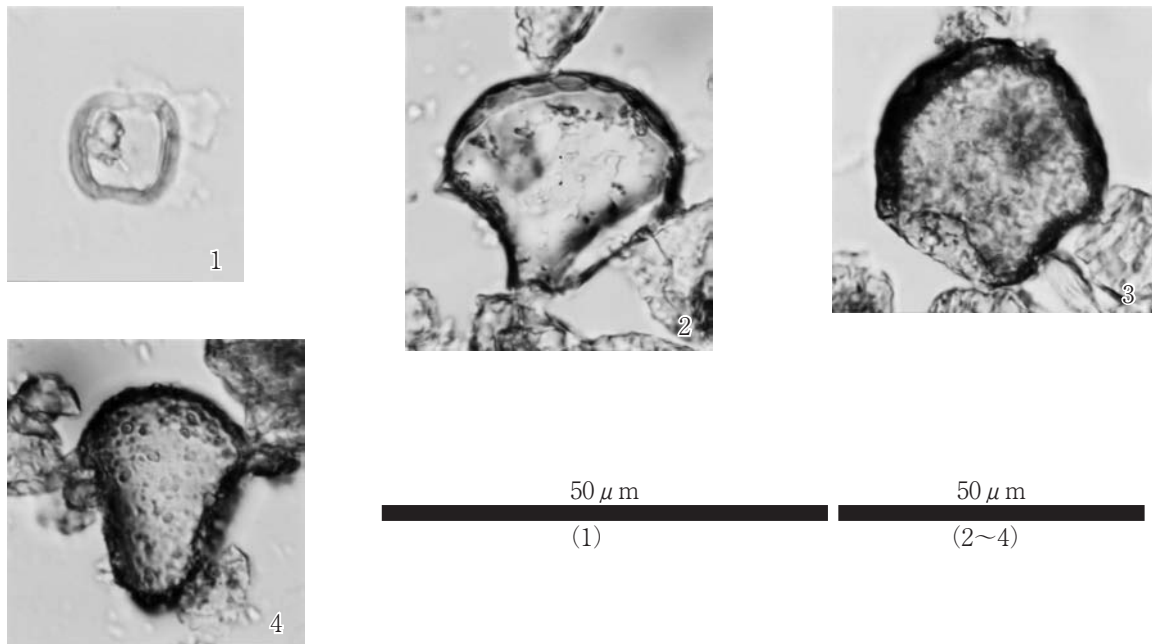


8. ヨモギ属 (I区中世溝; 3)

9. イネ科 (I区中世溝; 3)

10. ソバ属 (I区中世溝; 3)

11. ミズワラビ属 (II区4地点; 6)



1. ヨシ属短細胞珪酸体 (II区4地点; 9)

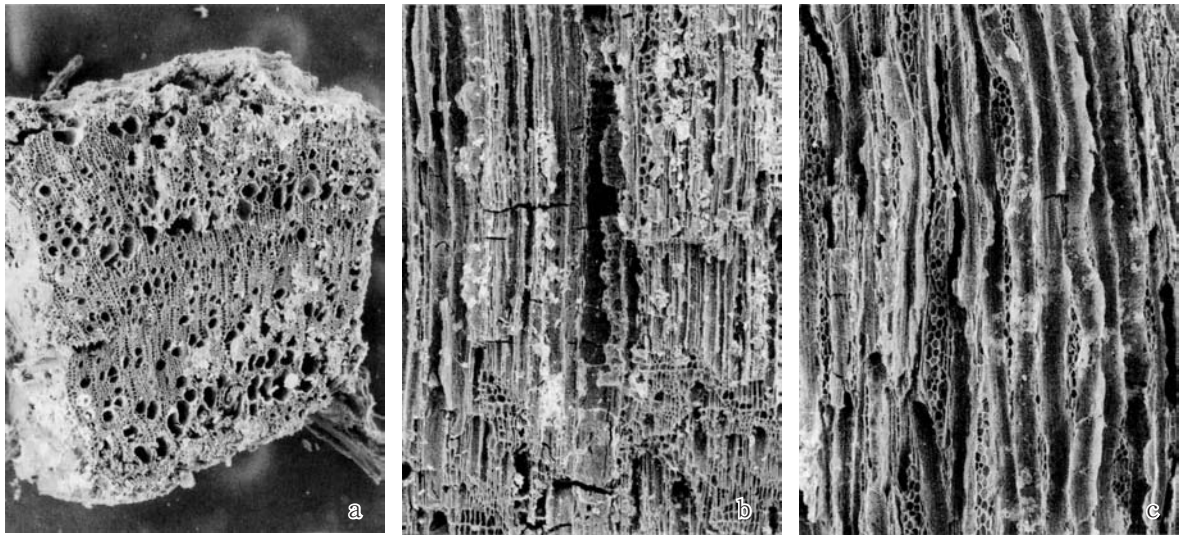
2. イネ属機動細胞珪酸体 (II区SD - 227; 1)

3. ヨシ属機動細胞珪酸体 (II区SD - 227; 1)

4. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (II区SD - 227; 1)

花粉化石2, 植物珪酸体

图版 76



200 μ m: a
200 μ m: b, c

環孔材 (I 区: P1) a: 木口, b: 柁目, c: 板目

炭化材

報告書抄録

ふりがな	にしこのいせきいち							
書名	西野々遺跡 I							
副書名	高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第102集							
編著者名	廣田佳久, 小野由香, パリノ・サーヴェイ							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉 1437-1							
発行年月日	2008年3月14日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
にしこのいせき 西野々遺跡	〒783-0003 高知県南国市 おおそねあざにしこの 大埴字西野々	39204	040283	33° 33' 36"	133° 38' 32"	2004.5.17 ～ 2005.2.28	13,896 m ²	一般国道 55号線自 動車専用道 路建設工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
西野々遺跡	集落跡 官衙関連遺跡	弥生時代 古代 中世	竪穴住居跡 3軒 掘立柱建物跡 57棟 塀・柵列跡 34列 土坑 133基 溝跡 107条 ピット 5,869個	弥生土器 土師器 須恵器 緑釉陶器 土師質土器 瓦器 瓦質土器 青磁 近世陶磁器 土製品 石製品	弥生時代中期末 から後期前半の集 落跡, 奈良時代末 から平安時代前半 の官衙関連建物群 と緑釉陶器等の出 土, 中世の屋敷跡 などを確認する。			
要約	<p>西野々遺跡は高知平野の扇状地末端部に位置する弥生時代から近世に至る複合遺跡で, 平成16～19年度に発掘調査を実施した。これらの報告書については西野々遺跡 I～Ⅲとして刊行予定で, 今回報告する西野々遺跡 I は平成16年度に調査を行った第 I 調査区 (I 区) と第 II 調査区 (II 区) である。この両調査区は西野々遺跡の中でほぼ中央部に位置する。</p> <p>この両調査区からは, 弥生時代中期末から後期前半を中心とした集落跡, 奈良時代後期から平安時代前半の官衙関連遺構, 中世の屋敷跡が確認されている。弥生時代の集落は I 区から VI 区を中心に展開している。これら住居跡は基盤に砂礫層が堆積した微高地ではなく掘削しやすい砂質シルト層からシルト質粘土が基盤にある部分で検出されている。</p> <p>古代の官衙関連遺構は方形の掘り方の柱穴を有する掘立柱建物跡で構成されており, 基盤に砂礫層がある概して基盤がしっかりした部分に建てられている。今回確認した建物跡はほとんどが小規模なものであるが, VII 区からは一辺が1.0m以上の柱穴で構成された桁行5間, 梁行3間の建物跡が検出され, これが官衙関連遺構の中心部とみられる。</p> <p>中世段階は各調査区から屋敷跡が確認されているものの区画は溝などで囲繞されたものではなく限定的なもので屋敷地は400～600 m²とみられることから一般百姓層のものと考えられる。一方, 特殊な墓が III 区で確認されていることからして武士の屋敷が存在した可能性も考慮される。</p>							

本書作成データ

ハード : PowerMacG5/2.0dualcore, PowerBookG4/1.5GB,, iMac1.25

システム : MacOS X (10.4.11)

ソフト : JeditX, Excel2004, Adobe Photoshop®9.0.2, Adobe Illustrator®11.0.1, Adobe Indesign®3.0.1

フォント : モリサワOTFPro5, Times Italic, Century Old Style Std

プリンタ : XeroxDocuPrint C3530, EPSON LP - 8800C (原稿・図面・写真校正)

データ : 図版47～72以外はすべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第102集

西野々遺跡 I

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書 I

(東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 I)

2008年3月14日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉 1437 - 1

Tel. 088-864-0671

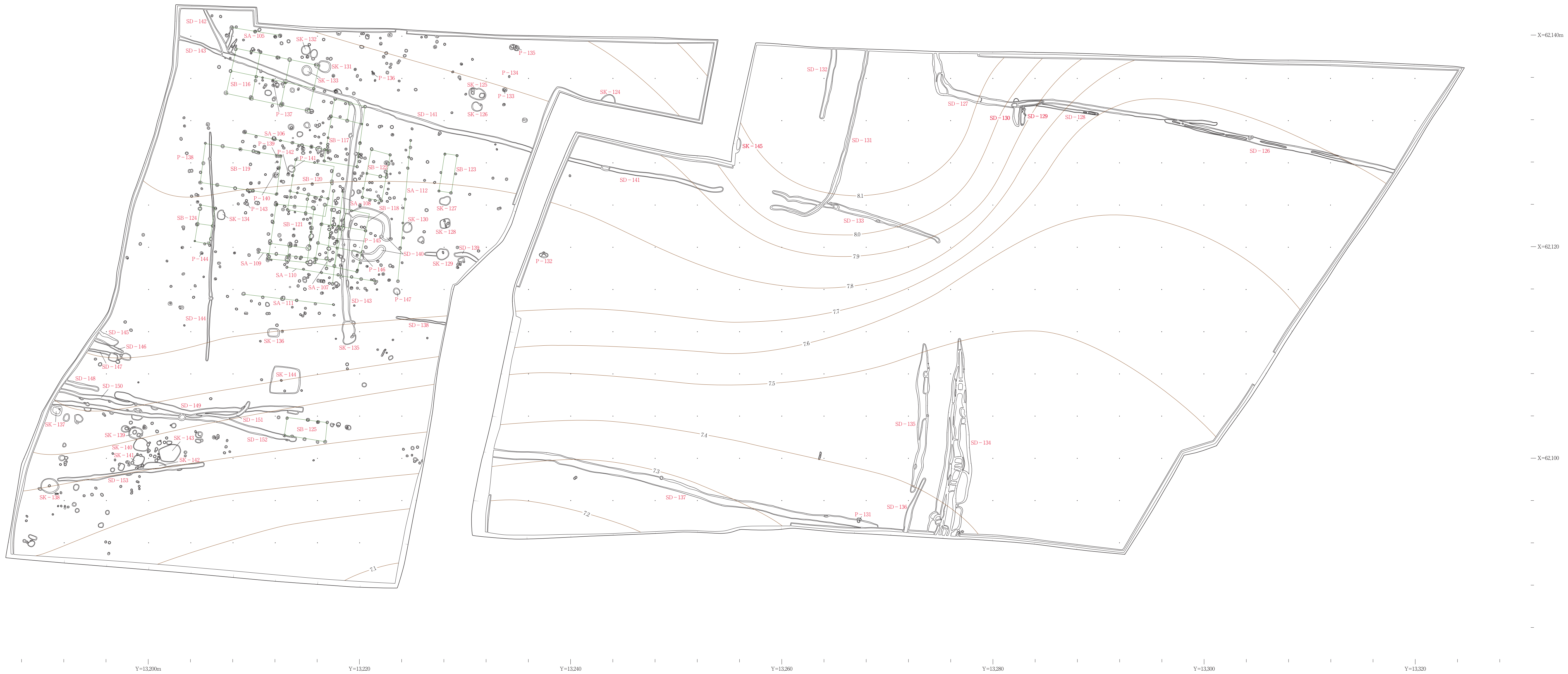
印刷 共和印刷株式会社



付図1 西野々遺跡第I調査区(I区)弥生遺構平面図(S=1/200)



付図2 西野々遺跡第I調査区(I区)古代遺構平面図(S=1/200)



付図3 西野々遺跡第1調査区(1区)中近世遺構平面図(S=1/200)



付図4 西野々遺跡第I調査区(I区)遺構平面図(S=1/200)



付図5 西野遺跡第Ⅱ調査区(Ⅱ区)弥生遺構平面図(S=1/200)



付図6 西野々遺跡第II調査区(II区)古墳古代遺構平面図(S=1/200)



付図7 西野々遺跡第Ⅱ調査区(Ⅱ区)中近世遺構平面図(S=1/200)



付図8 西野々遺跡第II調査区(II区)遺構平面図(S=1/200)